LA REKONSTRUO

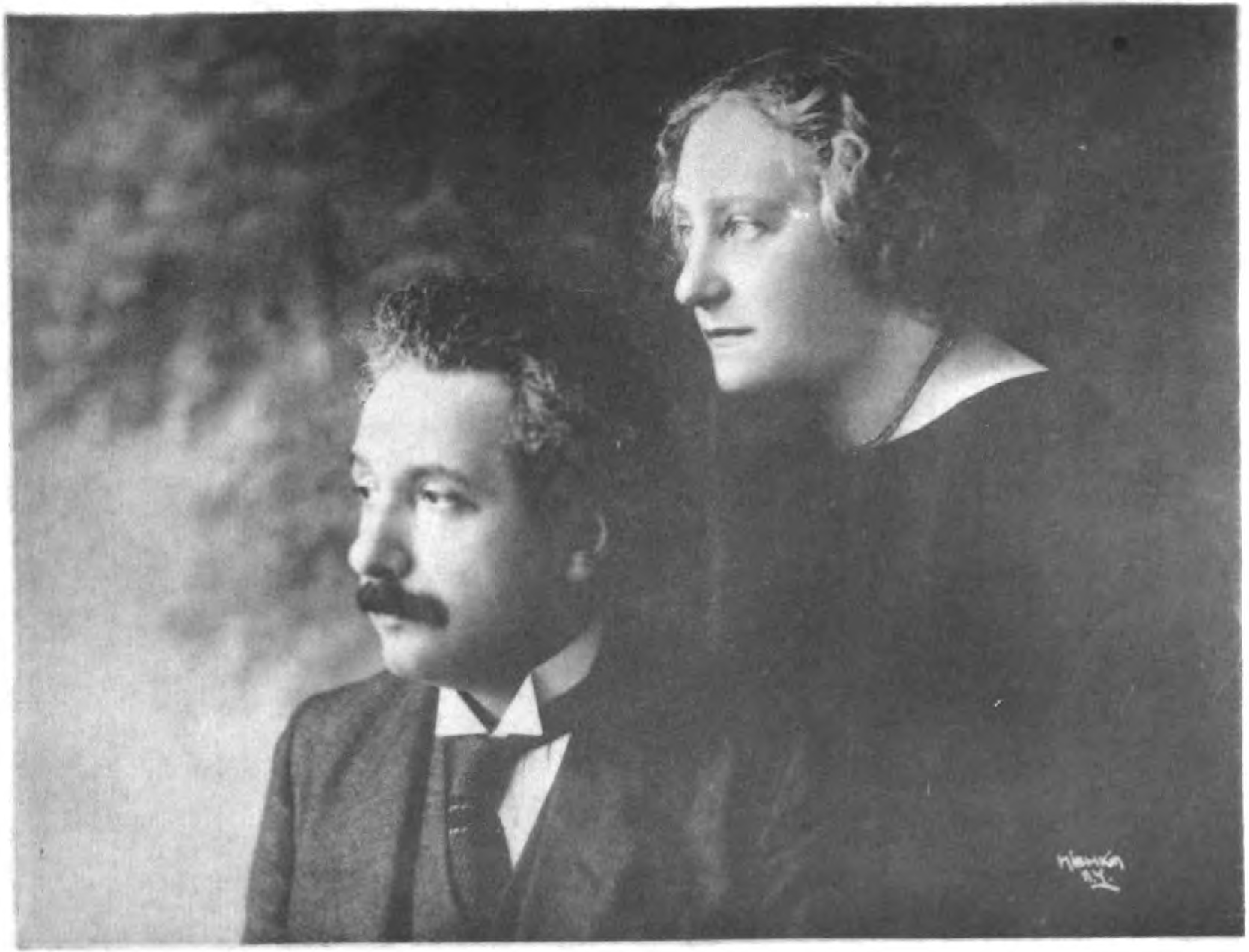
改造



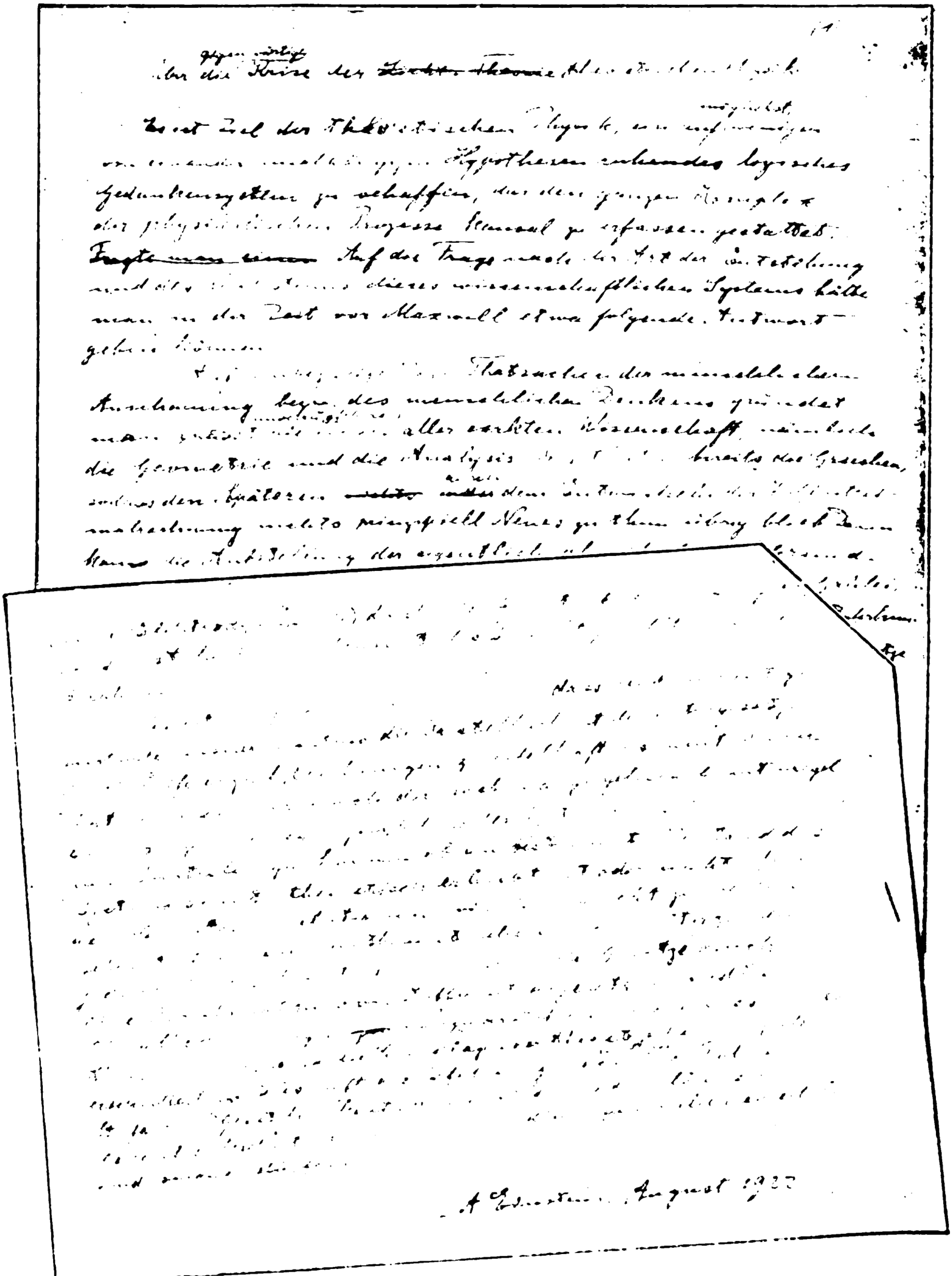
アインスタイン號

十二月號





最近のアインスタイン氏夫妻


Über die gegenwärtige Krise der theoretischen Physik.

Das Ziel der theoretischen Physik ist, ein aus einem möglichst geringen Minimum [illegible] Hypothesen entwickeltes logisches Gedankensystem zu schaffen, das den ganzen Komplex der physikalischen Prozesse kausal zu erfassen gestattet. Auf die Frage nach der Art der Entstehung und [illegible] dieses wissenschaftlichen Systems hätte man in der Zeit vor Maxwell etwa folgende Antwort geben können.

Auf [illegible] Tatsachen der menschlichen Anschauung bezw. des menschlichen Denkens gründet man [illegible] aller exakten Wissenschaft, nämlich die Geometrie und die Analysis [illegible] bereits die Griechen, [illegible] den Späteren [illegible] Infinitesimalrechnung [illegible] Neues zu tun übrig blieb [illegible]

[illegible]

A. Einstein August 1922

アイスタイン教授原稿

モウパッサン原作・廣津和郎譯

全譯 美貌の友（ベラミイ）

多年の禁止本漸く發賣

忽ちにして十八版

歴代の内閣で此位問題にされた小說はない。その飜譯は幾度か企てられても許されなかつた。本譯の如きも二年前發行旬日にした發賣を禁止された。それ以來今日あるを我々は如何に待つたか。だが、代、進轉と共に、おお、終にその時は來たのだ。此名篇の全譯を許可された當局の深い理解と寛容な處置とに感謝す。

● 茲に描かれてゐるものは世界の魔都佛蘭西巴里の歌樂と淫蕩と罪惡と、爛熟した文明のあらゆる魔醉させるやうな香氣、惱ましき程、強烈な色彩、現世と肉とに誘ふあやしき音響の交錯の中を稀有の美貌と大膽と狡智とを持つた一青年が、大手を揮つて濶歩する。彼は色道の天才だ。讀者は彼の行手に現れるあらゆる女性が、彼の一瞥に一堪りもなく魅了し去られるのを見るだらう。貴婦人、令孃、賣女、成熟したる年增も花のやうな處女も總てがこの「美貌の友」と渾名されたる青年の周圍で、悲喜嬌態の踊を踊る。果しなく繰擴げられて行く戀愛と歡樂との繪卷物は心の弱い讀者には刺戟が餘りに強過ぎるかも知れない。世界の小說にその範を垂れたモウパッサンが不朽の印象描寫は、此作に於いてその頂點に達してゐる。佛蘭西文學の光輝——實に世界的神品を我讀書界に提供し得る時機の到來した事は、出版者の深く喜びとするところである。

人氣實に此くの如し

本譯が曩に發賣を禁止された時を機會として、終にその原書も輸入禁止となつた。併し輸入禁止以前に、その英譯が我日本だけで既に數萬賣りつくされてゐるさうである。如何なる種類の書物でもそのやうな賣行を示した物は他にはない。以て此小說が如何に人氣があり、如何に興味深いかゞ想像されよう。

四六版特製
定價二円六十錢
送料十七錢
ポイント活字五三〇頁

東京麹町區飯田町一の二
天佑社
振替東京一〇一二八番

理學博士 石原純編著

(第七版)

相對性理論の諸斷面

(第壹輯)
定價八十錢
送料書留十一錢

相對性理論の奥ぶかい內容を解り易く說明することは至難の事がらです。たくさんの世に行はれてゐる書物のなかには或は誤りて說き或はその眞髓に觸れないものもないではありません私は現時の諸大家の書いたものゝなかから、適當なる言葉を抽き出して之を隨處に綴り、一の相對性理論に對するいろ〳〵な解き方を照させて、その諸斷面を讀者のまへに擴げて見やうと思ひます。之れ等が最も信據すべきものであるばかりでなく又之を詳細に味ふときはそれぞれの諸家の面目特質をもその言葉に聞くことが出來る點に於て興味多いことであります。(著者)

(第五版)

空間及時間概念

(相對性理論の諸斷面 第貳輯)
定價九十錢
送料書留十一錢

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

沙羅の花

忽五版

龍之介
傑作選集

芥川龍之介作

定價貳圓八拾錢

◇送料十九錢◇

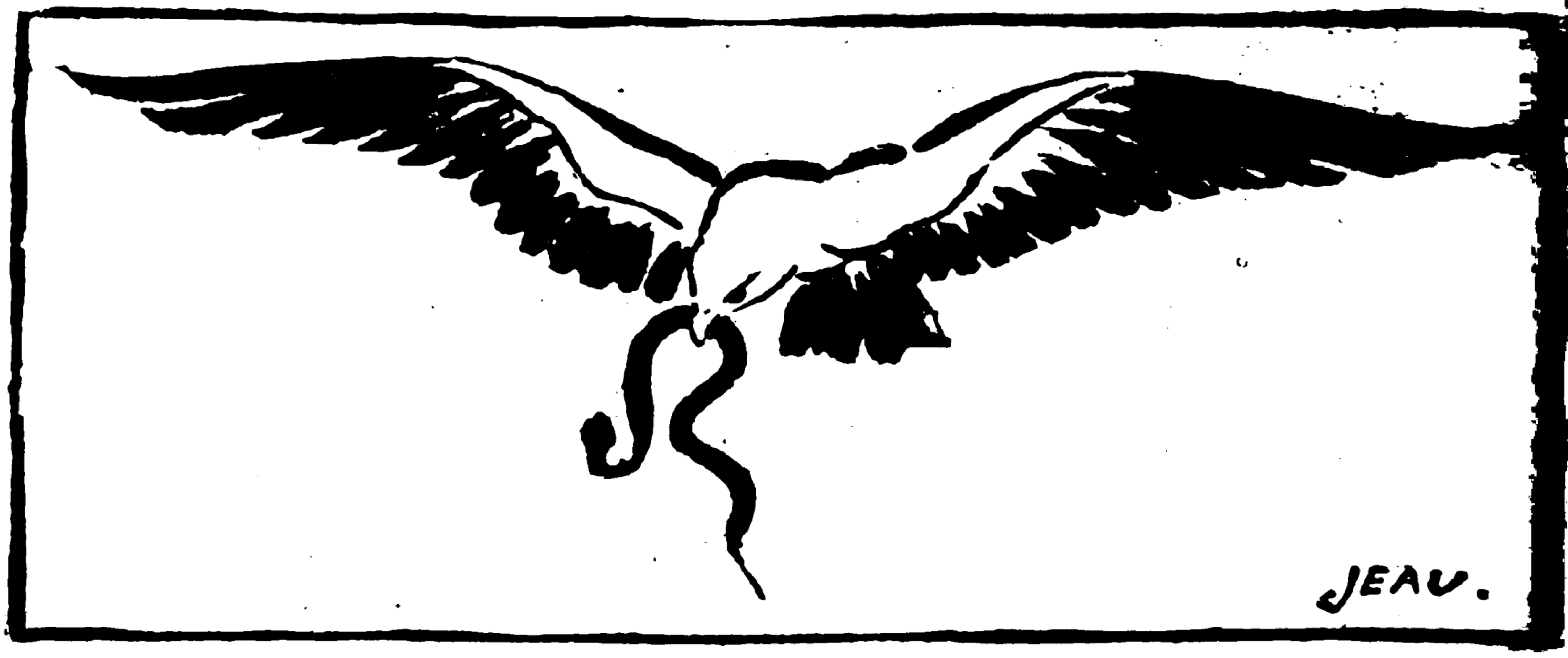
◇四六版美裝◇

現文壇に於ける一異彩として、靈妙豊かなる世界に常にその獨自の藝術境を開きつゝあるは芥川龍之介氏である。沙羅の花に收められたる二十餘種の短篇は、氏がこれまでにものせるもの丶中より粹なるものを拔き取つたものである。氏の絕えざる藝術的精進の力と、年毎に加はる作品の精鋭さとは、實に他に其の儔を見る能はざる目ざましさである。眞の藝術を味ひ藝術の深奥を究めんとするものは須らく、本書を繙くに如くものはない。

東京芝區
愛宕下町

改造社

振替東京
八四〇二



═《改造十二月號》═

今後、空間夫れ自ら及び時間夫れ自らは全く陰影のなかに隠れ失はれて、獨りその兩者の或る結合のみが獨自性を保つと謂はねばなるまい。

――ミンコフスキー――

歡迎辭

我が改造社の招聘によりて今まさに我が邦に到着せられる

アルベルト・アインスタイン教授並に令夫人

に對して、こゝに我々の心からなる且つ最も溫かき歡迎の挨拶を述べることは、我々の名譽ある義務であります。

アインスタイン教授が現時の世界最大の科學研究者の一人に屬することは周知の事實です。彼の天才的な相對性理論によりて、實に人間の思想は宇宙を超えて新らしい階級を攀ぢ登りました。この驚くべき物理學理論をその創始者自身から口づからに聞くことの出來るのは、我々の大きなよろこびでなくて何でありませう。

この機會に於て聊か我々の抱負を語ることをお許し下さい。我が改造社は、現時並に將來に於て世界の文化に貢獻するであらう處のあらゆる可能な努力をなすつもりです。また我々は常に種々の方法によりて、人間の業蹟の本質的價値を一般者に理解せしめることを企畫してゐます。アインスタイン教授を招聘することも、またこの企畫の一つに外ならないのです。

我が尊敬する教授並に令夫人を心から歡迎しつゝ、我々は今よろこんでこの目的に向つて絕えず進みませう。

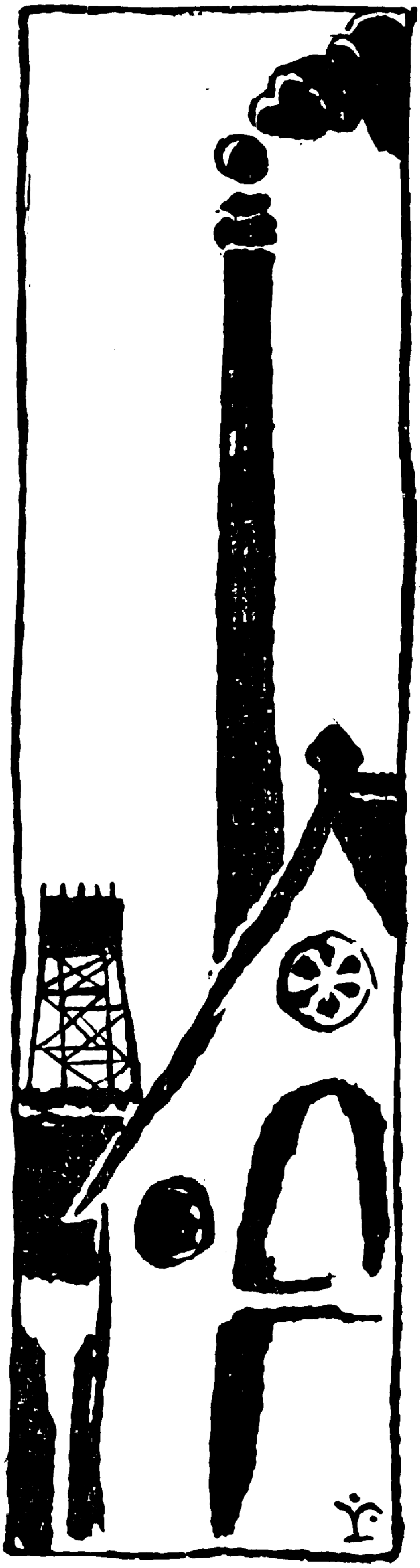
ADRESSE.

Es ist uns die ehrenvolle Pflicht, dem hochverehrten Herrn Professor Albert Einstein und seiner gnädigen Frau Gemahlin, die durch Einladung von Kaizosha eben in unserem Land ankommen werden, hier unsere herzlichste und wärmste Begrüssung auszusprechen.

Bekanntlich zu einem der grössten wissenschaftlichen Forschern der gegenwärtigen Welt gehört Herr Professor Einstein. Mit seiner genialen Relativitätstheorie hat ja das menschliche Denken über den Kosmos eine neue Stufe erklommen, Es wird uns eine grosse Freude machen, diese wunderbare physikalische Theorie von ihrer Urheber selbst mündlich kennen zu lernen.

Bei dies r Gelegenheit erlauben wir uns zu erklären, dass wir, Kaizosha, sowohl gegenwärtig wie in der Zukunft alle mögliche Bemühungen machen wollen, die zur Kulturbildung der Welt etwas beizutragen seien, und dass wir stes in verschiedener Weise beabsichtigen, den wesentlichen Welt der menschlichen Tätigkeit dem allgemeinen Laien verständlich zu machen. Herrn Protessor Einstein einzuladen ist auch nichts anders als eine unserer Beabsichtigungen.

Unsere verehrte Gäste herzlich bewillkommend wollen wir nun erfreulich für den erklärten Zweck immer weiter gehen.



理論物理學の現時の危機について

アルベルト、アインスタイン

理論物理學の目的は、出來得る限り僅かな、お互に無關係な假說に基づいてゐる理論的な思想體系をつくり、物理現象の全體を因果的に解せられるやうにすることです。この科學體系の成立並びに成長の方法に關する問題に對して、マックスウエル以前の時代には、ほゞ次の答を與へることが出來たでせう。

人間の直觀、並に人間の思想の疑ふべからざる事實の上に、先づすべての精密科學の動かし得ない基礎、即ち幾何學及び解析數學を根據づけます。これを旣に希臘人は行ひました。そして爾後の人には微分學の發展の外、何等原理的に新ら

しいものをなす余地が殘されてゐませんでした。之に次いで本來の物理學的基礎法則即ち力學の原則がガリレイ、ニウトン及びその時代の人々によりて立てられました。十九世紀の終の頃までは物理學者は、力學のその基礎法則がすべての理論物理學の根柢でなければならないこと、即ちどんな物理學的理論も最後に於て力學の上に根據をおかれると云ふことを信じてゐました。

斯やうにして物理學の基礎は終極的に立てられたやうに見え、且つ理論物理學者の仕事は、理論の特殊化並に微分化によりて之を探究せられた現象の常に增大する全部に適合させることに存するやうに思はれました。物理學の基礎を變更しなければならない樣な可能性は考へられたこともなかつたのです。ところがファラデー及びマックスウエルの研究によりて、力學の基礎が電磁現象に對しては成立しないことが漸次明らかになりました。この轉移は多くの階段に於てあらはれました。最初にこの二人の開拓者は、電磁現象が直接の遠隔作用力の理論によりて說明せられないことを認知したのでした。ニウトンによれば、質點の加速度を起すことの出來るすべての力は、他の質點の個々のものが之に及ぼす瞬時的作用に歸せられるのでした。マックスウエル及びファラデーはこの直接な遠隔作用の理論に電磁場の理論を對立せしめました。この理論に從へば、電氣力のすべての傳播は瞬時的の遠隔作用によるのではなくて、却つて空間若くはエーテルの傳播し得る一つの狀態、即ち電磁場に基づくのです。ニウトンの理論によれば運動し得る質點が唯一のエネルギー保持者として想像せられてゐますが、こゝでは之と共に、連續的の空間函數によりてあらはされ、且つエネルギーを賦與せられた場が物理學的實在としてあらはれます。能く知られてゐる通りに、ヘルツは電氣力の傳播に關する彼の實驗によりて、この見解を一般に承認せしめました。

場の理論の革命的性質は始めにはまだ徹底的に認められませんでした。マックスウエル自身もやはり尙ほ、電氣力學的

現象がエーテルの運動過程と解せらるべきものであることを信じ、實際に場の方程式に侵入するために、力學を用ひた程でした。併しながら漸次に、電磁方程式を力學方程式に歸着せしめることの不可能であることが明らかになつて來ました。この事情のもとにありて尙ほ物理學の基礎を單一にしやうとする努力は、遂に力學方程式を逆に電磁方程式に歸着せしめやうとする試みをなすやうに强要しました。ジエー・ジエー・タムソンが電氣を帶びた物體の電磁的惰性なるものの存在を知るやうになつてから、又エム・アブラハムが電子の惰性を純粹に電磁的のものとして解し得ることを示してから、この努力は益々近くに引き寄せられました。惰性を電磁現象に歸着せしめることによりて物理學の基礎の完全な革變が、少くとも原理的に起されました。最後の實在としての質點の代りに、電磁場が理論物理學の基礎的構成要素としてあらはれました。純粹の電磁的基礎に於ける物質の理論的構成が或る程度まで成功したことは知られてゐます。特に私たちは今日、凝集力が純粹に電氣的性質のものであることを知つてゐます、

ファラデー・マックスウェルの場の理論の成果はまだそれだけで盡きてはゐません。マックスウェルの電磁方程式のローレンツ轉換に對する共變性を知つたことは特殊相對性理論に導き、又從つて惰性とエネルギーとの相等の知識に導きました。惰性的並に重力的質量の同一性を考慮した上で、この場の理論を萬有引力に擴張した結果は一般相對性理論に達しました。一般相對性理論と共に、ニウトンの理論の一つの據り處であり、私たちが從來各の自然科學の基礎に必然に屬すると信じてゐたところのユークリッド幾何學が沈み去りました。この幾何學は以前には固體に關する原始的實驗から成立し、物理學者からは、一樣な性質をもち、又外部作用を受けない固體の配置に對し精確に適合する法則として默許せられてゐましたが、併し今は非常に大切な、間接に實驗に基づいてゐる思考によりて一つのより一般的な、既にガウス及びリーマンによりて立てられた原理で置き換へられなければなりませんでした。一般相對性理論と共に、ファラデー及びマックス

ウエルによりて基礎づけられた理論物理學の發展期は終りを告げなければならないやうに見えます。

最近二十年間に知られた處によれば、ファラデー・マックスウエルの場の理論で特性づけられた物理學の基礎は、之に基づいた力學と同樣に經驗に反するものとせられました。寧ろ科學の進步はその根柢の一つの變化を要求することが期待せられてゐます。この變化は私たちが「場の理論」と云ふ名のもとに包括したものよりも、もつと深く立入つたものです。けれども私たちは論理的に明瞭な根柢からは尙ほ遥か隔たつてゐますから、私たちはこゝに、從前の基礎がどれ程不充分のものであるか、又より効果ある、併し只手探りするやうな試み、即ち「量子論」の名によりて包括せられてゐるものによりて、如何に物理的現象の大切な集群が適確になつたかを示すだけで滿足しなければなりますまい。

量子論の根源は熱輻射の理論にありました。之れに對しては力學と電磁場の理論との結合は經驗と一致し難い、且つそれ自身沒理性的でさへあるやうな法則を與へます。熱輻射の根本問題と云ふのは次のやうなものです。熱力學の敎へる處によれば、一つの溫度Tなる不透明體で圍まれた洞空の內部に存在する輻射は、洞空の壁をつくる物體の性質に全く無關係に組織せられます。ρが單色的輻射密度であるならば、即ち$\rho d\nu$が洞空內に於てνと$\nu+d\nu$との間にある振動數をもつ輻射の單位體積每のエネルギーであるならば、ρはν及びTの全く定まつた函數であります。この函數は純粹の熱力學的考察によりては決定せられません。これを導くには寧ろ輻射の發生及び吸收の過程の本質を見なければなりません。

舊力學はマックスウエルの電氣力學と結合して、ρに對して

$$\rho = \alpha\nu^2 T \quad\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots (1)$$

の形の式を與へます。これは洞空輻射の全密度 $\int_{\nu=0}^{\nu=\infty} \rho d\nu$ に對して無限に大きな値を與へる點に於て旣に適當なものであり得ません。プランクは從來すべての經驗と能く一致するところの經驗式として

$$\rho=\frac{8\pi h\nu^3}{c^3}\cdot\frac{1}{e^{\frac{h\nu}{kT}}-1}\quad\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\quad(2)$$

を見出しました。こゝにhは原子の絶對の大さと關係する常數であり、又hは從前物理學に於て知られなかつた自然常數を意味するので、恐らくは量子論の基本常數としてあらはし得るものです。プランクは一九〇〇年にこの式の一つの理論を與へましたが、それは從來の物理學と一致し得ない一つの假說を內在的に含んでゐるので、私たちは之に後からこの最近二十年間の實驗的並に理論的研究に基づいて意味を與へることが出來るだけです。自然に於てはいつも振動數νをもつて正弦的に振動する現象が存在するのですけれども、そのエネルギーはいつもεの整數倍です。正弦的に振動する現象のエネルギーの中間値は自然にはあらはれません。

この假說のお蔭で、熱輻射のプランクの式(2)ばかりでなく、亦結晶固體の比熱の法則をも導くことが出來ました。けれども之れ等の導き方はみんなそれ自身に矛盾を含んでゐます。何故ならばそれにはこの新らしい假說と共に常に之とは一致し得ない舊力學の基礎を用ひてゐるからです。

マックスウエルの電氣力學並にニウトンの力學が物理學に於てもつてゐた大きな効果を認め、又現在それを缺くことの出來ない場合に際して、量子論の根本假說を出來るだけ多く疑つて見ることは、寧ろ私たちの義務であります。けれども一方に舊力學の根柢と相容れないことが明らかであるところの量子論を直接に確めるやうな現象が存在してゐます。

一つの輻射源から發せられた輻射のエネルギー密度は、マックスウエルの理論によれば距離の二乘に逆比例して減じます。或る場處で吸收過程に對し單位時間每に用ひ得られるエネルギーはそれ故に距離の增すに從ひ限りなく減じなければなりますまい。ところが例へば一つの分子の化學的分解又は一つの原子からの電子の解放には一定のエネルギーを要しま

すから、輻射が光源から充分擴がつて弱められたときには、それは最早や斯やうな化學的過程を起すことは出來ない筈です。然るに之に反して、經驗は、輻射の化學的並に光電氣的作用性はその密度には全く關しないことを示します。物質を透過する輻射の化學的全作用は、只それの全エネルギーのみに關してそのエネルギーの空間的密度には全く關しません。尚ほまたワールブルヒの實驗から、化學的の單一過程毎に吸收せられたエネルギーは、輻射の空間的エネルギーに無關係に、常に $h\nu$ に等しいことが判りました。この結果は亦光電氣的效果並にレンチエン線による陰極線の發生に關する實驗からも出ます。

今日私たちは、このエネルギーが實際に輻射から起因し、又これが多分漸次に集められるものではないことを知つてゐます。光の吸收は分ち得ない要素的過程に於て成り立ち、その各に際してエネルギー $h\nu$ が完全に變化せられます。かやうな要素的過程の詳細については私たちは何も知りません。若し輻射に關して只そのエネルギー的の性質のみが知られてゐたとしたならば、私たちは是非ともニウトンの光の發射論のやうな風に、輻射の一種の分子論を立てなければならないでせう。併しながら廻折並に干渉現象を斯やうな基礎の上に說明するためには、打ち勝ち難い困難に衝き當ります。尚ほまた輻射の場の理論は、固體內に於てその熱內容をつくつてゐる彈性波の理論よりもより高き度に於て誤つてはゐないと云ふことが、多分確かです。何故ならばこの兩理論は同じ程度に量子論と衝突し、經驗の結果の適當な解釋に達するためには同じ方法で量子論と結合せられなければならないからです。

原子の構成に關する私たちの知識の驚くべき發展は、主として大きな働き手のラザーフォード及びボールのお蔭によりてなされましたが、それは量子則の非常な大切な一般化に導きました。今私たちはそれを考へて見ませう。ラザーフォード・ボールの理論の以前に既に、一つのスペクトル線の吸收若くは發射は原子若くは分子が一つの特殊な狀態から他の狀態に

移動することに相當しなければならないと云ふ假定が申し出されてゐました。要素體の狀態は確かに正弦的振動として解せらるべきものではありませんでしたから、量子論を一般性質の力學體系に擴張すると云ふ問題が起りました。それをボール、ゾムマーフエルド、エプスタイン及びシユワルツシルドの研究が段々に成功させました。之れらの研究者から求められた結果は分光學の範圍に於けるそれの精確な證據によりて確實な成果に高められてゐます。

一つの力學的體系が時間の經過に於て輪環的變化をうけるやうな多くの座標q_νによりて記され且つ各の自由度νに對してq_νに屬する運動量$p_\nu\left(=\frac{\partial L(q,\dot{q})}{\partial \dot{q}_\nu}\right)$が特別に一つの座標$q_\nu$の函數としてあらはされ得るならば、各の$q_\nu$に對して一つの輪環に就いて擴げた積分

$$\int p_\nu dq_\nu$$

はプランクの常數hの整數倍です。このことによりて、量子論に從つて「許容せられた」狀態が謂はゆる「準週期的」力學體系に對して定義せられます。この一般の規則は（例へばスタルク効果に就てのエプスタインの理論のやうな）かやうな微妙な、形式の多い特殊の場合に於て確められ、それの一般の正當さは亦本當に確實的にせられました。

一般の理論的の立場から見て次のことは特に驚くべきものです。一方では、既に注意せる如く、力學は一般には成り立たないやうに見えます。何故なれば、之に基づいてゐた統計力學は經驗と矛盾する結果（例へば固體の比熱）に導くからです。ところが他方では力學的法則は上の規則の適用範圍內に於て驚くべき程に自らを保證します。自然に於ては只準週期的な要素過程のみが、若くはより一般に只、自由度と同數の積分を閉ぢられた形で有するやうな力學體系のみが存在する筈であつたのでせうか。斯やうな思考は運動學的氣體論を考慮すれば背理的に見えます。舊力學（並に電氣力學）の適用性がどれ程量子則によりて制限せられるかと云ふ疑問は、今日尙ほ十五年前と同樣に深い暗さのなかに覆はれてゐるの

です。

私たちの知識の今日の狀態では自然法則が微分方程式によりて云ひ表はされ得ることは疑はしく見えると云ふことが屢屢注意されました。實際に於て私たちは今述べた量子則に從へば、體系の一定の狀態が量子論的に許容されるかどうかを判斷し能ふためには、體系の全運動輪環を見なければなりません。量子關係を實際に正當とするためには新らしい數學的の言葉が必要であるやうに思はれます。ともかくも、今日私たちがなすやうに、法則を微分法則と積分條件との結合によりて云ひ表はすのは、おもしろくないやうです。重ねて理論物理學の基礎は搖り動かされてゐます。そして經驗は法則のより高い階級の云ひ表はしの方へ呼びかけてゐます。いつ私たちに贖ひの思想が贈與せられるでありませうか。それを體驗し且つ凝視し得るものは僥倖です。（一九二二年八月）

理論物理學者としてのアインスタインの地位

石原純

序

アインスタイン、それはいま私たちのなかに普ねくくちにせられてゐる名であり、そしてそれに何事か驚異すべきことがらが連想せられてゐるところの名です。その偉大なる名をになうてゐるその人をいま當にまのあたりに私たちは自分の生れ且つ住んでゐる郷國に迎へやうとしてゐます。彼の人間として成し遂げた仕事が果してどんなものであるか、これを正しく知りこれを正しく解する人々のみが、ほんとうに彼を迎へ、そして彼が私たちに啓示してくれた知識を感謝しながら、彼のまへに接することが出來るのです。彼は私たちの國に於てさう云ふ人たちに親しく話かけるのをどんなによろこぶことでありませう。そしてまた私たちは彼を理解することによりておのづからな深い尊敬のこゝろもちを彼に於て感得せずにはゐられないでありませう。

私はいまこゝに自分のさゝやかな言葉によりて、なるべく多くの人たちに、彼のこれまでになした科學上の仕事のほんとうの意味を告げたいと思ひます。これが彼を迎ふるに當りて私の彼に對してなし得べき最上の敬愛に外ならないと信ずるからです。

一

私は先づ理論物理學のどんなものであるかを一般の人たちに諒解して頂かなくてはならないと思ひます。

私たちはひろく自然科學を形成するに當りて、自然に於てあらはれる現象、特に私たちの謂はゆる概念的自然の中に、因果の法則の成り立つことを假定します。これは一定の原因に對して必然的に一定の結果が歸屬すると云ふ關係の可能性を肯定し之と同時にそれに反する場合の可能性を絶對に否定するものであります。この因果の關係に從ふ自然現象は私たちの經驗として、空間及び時間のいろいろな個々の部分にあらはれますけれども、それが何時何處に起らうとも、私たちの空間及び時間に

與ふる一切の差別値には關することなく、常に一定不變のものとして見えると云ふことを意味するのです。そしてこの一定不變の因果關係を種々の現象について具體的に云ひあらはしたものを自然法則と名づけます。

それですからすべての自然法則の內容は現象の原因としての概念と、結果としての概念との相互關係から成り立つてゐなければなりません。自然科學なるものは、種々の自然現象を觀察して、之等の概念を抽象し且つその間に存在する關係を見出すことをその最初の目的とするものであります。現象が複雜であつて之を充分に分析することが出來ないうちは、それから抽象された概念間の關係は只性質的にのみ云ひあらはされるに過ぎませんけれども、之に反して充分の分析と單純化とが可能であるやうな場合には、それが精確に數量的になり、從つて自然法則は常に數學的函數關係として表はされるやうになります。私たちは現在の自然科學諸部門に於てにはかに之を實現することは出來ませんけれども、その究極に於てこれに到達すべきことを理想とするのが至當でありませう。

かやうに見ますと、因果の法則は即ち概念間の函數關係の成立の可能性を云ひあらはしたものに外ならないのです。そして之が時と場處とに關することなく成り立つためには、この函數關係のなかに外面的に空間及び時間變數そのものが入り込んでゐることは出來ません。しかもそれが現象の空間及び時間的變化を內在的に云ひあらはしてゐなければなりませんから、この函數關係は空間及び時間に對しては、ぜひとも微分若くは積分方程式として與へられなければならないのです。こゝに空間及び時間變數がすべての他の數量的諸概念と異つた役目を自然法則のなかにもつ理由が存在するのです。

ところで物理學は自然現象のうち私たちの最も自由に支配し得る物質間の諸現象をその研究對象とするものであつて、從つてこの場合には種々の制限せられた環境のもとに特種の簡單な變化のみが現はれるやうに、現象を分析して之を實驗することが出來ますから、そこには常に數量的測定が行はれ、その結果として得られる經驗的法則はいつも或る一定の函數關係に於て云ひあらはされるのです。この意味に於て物理學は自然科學の諸部門のうちで最も精確なものでなければなりません。

併し私はこゝで尙ほ大切な事がらを附け加へる必要を感じます。單に經驗的に數量的函數關係を求めることは、既に今日に在りては種々の考察的並に機械的手段の進步の結果、必ずしも純粹の物理學の範圍に於てばかりでなく、自然科學の他の諸部門に於ても之を行つてゐるのです。けれども私たちは自然科學

の成果を單にかやうな意味での因果の法則を經驗的に求めることだけに止めて、之に滿足することは出來ません。私たちは更に認識論的の要求を之に加へて、自然科學を整齊なる一體系に持ち來さうとすることに於て、自然解釋の向上を期待してゐるのです。これがためには私たちは先づ自然法則として得らるべき函數關係を出來るだけ簡單にするやうに、適當な概念を抽象しなければなりません。且つすべての自然現象の法則を導き出し得る最も簡單な一體系を構成するやうに努めなければなりません。私たちはかやうなものに於て私たちの概念的自然の眞且つ美なる究極的性質を認識しやうとするのです。これが自然科學の最終の目的であつて、種々の經驗的法則から之に向つて進む道程を私たちは科學の理論と名づけます。自然科學はこの理論を完成することによりて、始めて深い自然の意味に觸れることが出來るのであります。それですから、この理論の價値はそれが認識論的要求に最も適合するかどうかによりて決定せられなければなりません。最も基礎的と見なされる自然法則が屢々私たちの直觀に遠い概念の認識を必要とするに到る事情はこゝに依存することが判るでありませう。

理論物理學は物理學的認識の理論を取り扱ふものです。今日に於ては既に私たちはそこに自然法則を整頓して之が一體系をつくることに近づきつゝあります。斯やうにして出來あがつた自然法則の體系を私たちは世界形像と名づけてゐます。世界形像は即ち概念的自然そのものゝ姿であると云うてもよいのですが、私たちの現在の世界形像は必ずしも究極的のものと一致するとは斷ぜられませんし、また私たちは寧ろそれの究極への永久的の漸近を理想とすべきでありますから、さう云ふ謙遜の心から之を形像と云ふ名であらはしておくのが至當と思はれるのです。ともかくも現在私たちは一定の數學的形式によりて云ひあらはされた物理學的世界形像をもつてゐると云ふ點に於て、理論物理學は自然科學諸部門のうちで最高の發達的階段にあるものと云はなければなりません。自然の深い意味に接するために私たちが少くとも現時に於てこの理論物理學に據らなければならないのはこれが爲めであると思ひます。

二

理論物理學がどんなものであるかを述べた後に、私はこれが發展して現時に至るまでの梗概をこゝに摘記する必要があると思ひます。

物理學はもとその一部は實際的應用の要求に基いて生れ、また他の一部は感覺に映ずる自然現象若くは特に珍奇な自然現象の説明から發展して來ました。力を利得するための機械を取り

扱ふことから力學が起り、聽覺、視覺、溫覺からそれぞれ音響學、光學、熱學が生れ、摩擦された琥珀が物體を引きつける現象から電氣學が、又或る鐵鑛が他の鐵片を吸ふ現象から磁氣學が始まりました。之等はめいめい獨立に研究されて、各の範圍のなかでたくさんの經驗的法則が立てられてゆきましたが、物理學理論の異常な發展はそれらを永く離ればなれには殘しておかなかつたのです。

物理學理論の最初の著しい發展はガリレイの惰性の法則を擴張して、すべての運動現象を完全に決定し得る運動法則を立てた

アイザーク・ニウトン（一六四二―一七二七）

の力學理論です。これのお蔭で當時まで別々に取り扱はれてゐた靜止體の力學と、運動體の力學とは全く同一原理のもとに融合せられるやうになりました。この力學理論は次で流體にも應用せられ、又彈性體にも適用せられるに及んで、音響學は一つの彈性振動を論ずるものとして、全く力學のなかに包合せられてしまひました。更に力學と熱學との第一橋梁はマイヤーによりて見出された力學的エネルギーとの數量的關係に於て架せられました。ところが同樣の橋梁がジュールによりて熱エネルギーと電氣エネルギーとの間に再び設けられるに至つて、之等の關係は遂に廣く物理學全般を横さまに連絡せしめたエネルギー原理の確立に導きました。私たちは物理學に於けるこの第一次統一的事業への貢獻者として

ヘルマン・フオン・ヘルムホルツ（一八二一―一八九四）

の名を擧げなければなりません。

エネルギー原理は、何も費すことなしに絶えず要用の仕事をなし得るやうな永久機關の不可能を云ひあらはすものです。併し私たちはそればかりでなく、機械的の仕事を熱に變じ、再び逆に之を仕事に戻し得るやうな第二種永久機關も亦不可能であることを知るやうになりました。この不可能を云ひあらはす原理はエネルギー原理と對立して極めて重要な意味をもつものであつて、之は

ルードルフ・クラウジウス（一八二二―一八八八）

によりて完全に、熱力學第二法則として立てられました。私たちはつまり之によりて全物理的現象のなかに二種の大差別あることを明らかにしたのです。即ち純粹の力學的若くは電氣學的現象が可逆的にあらはれ得るに對して、すべての熱現象は非可逆的であると云ふことです。

ところがこゝに間もなく物理學の一大難關があらはれました。それは熱エネルギーが物質分子の運動エネルギーとして說明せ

らるゝやうになつた事です。この理論は分子相互の作用のあらはれることの少ない氣體の場合に簡單になるために、著しく發展せられ、謂はゆる運動學的氣體論として、能く氣體の種々の性質を説明することが出來るやうになりました。然るにこの結果を能く考へて見ますと、分子の個々の運動はすべて力學理論に從ふものであつて、それ故全く可逆的のものであるに拘らず、それらの運動エネルギーの總和である處の熱エネルギーに關しては熱力學第二法則に從ふ非可逆的の過程のみが成り立たなければなりません。果して然うならばこの非可逆性はどこから因由して來るのでありませうか。この疑問は恐らく物理學が遭遇した第一の難關でなければなりませんでした。複雜な確度論を應用することによりて、私たちにこの難關をひらいてくれたものは實に

ルードウィッヒ・ボルツマン(一八四四—一九〇六)

でありました。彼の解釋によれば熱現象の非可逆性は分子集合の狀態が常に確度小なるものよりその大なる場合に移る傾向をもつことによりて起るのです。

力學と熱力學とがかやうに密接な關係を保つて發達して來た間に、光學や電氣學は、單にエネルギー原理に從ふと云ふことの外、久しく獨立に取り扱はれてゐました。尤もさう云ひましても之等を原理的に連關させやうと云ふ試みは始終行はれて來たのです。先づアンペールによりて磁氣は廻轉電流として説明せられ、磁氣學は爾來電氣學のなかに包容せられるやうになりました。又ウェーベルによりて電流を電氣粒子の運動として解するやうに試みられましたが、電流の作用を説明するために、電氣粒子間にはたらく力に對して特種の假定を必要とせられ、しかもこの假定の内容は必然のものではなくて、種々の人々によりて種々の假定が提出せらるゝに至りました。一方で光を波動として解するフイゲンスの説は種々の光現象の發見と共に漸次確かめられてゆきましたが、之を音響のやうに完全に力學的に説明するには、光波の媒質として想像せられたエーテルに種々の不思議な力學的性質を假定しなければならなくなりましたまことに物理學に取り入れられた多くの事實のうちでエーテルの諸性質ほど私たちの理解に苦しむ者は恐らくなかつたでありませう。しかも私たちはエーテルを他に感觸する手段を少しも持ち得ないので、これを試めす方法が存在しないためにのみエーテルのこの不思議さは、私たちの物理學理論にゆるされなければならないものであつたのでした。エーテルはかやうにしてその苦しい喘ぎを續けつゝ、ともかくも光の力學的理論を支へてゐました。ところがそれの支持しなくてはならない重荷が圖

らずも電磁氣學の理論の重大な一轉向に伴つてあらはれ出たのでした。それは即ちファラデーによりて電氣及び磁氣現象がやはりエーテル中の或る偏極狀態として說明された事でありました。こゝに於て電氣及び磁氣の力學的理論が再びエーテルを媒としてつくられなくてはならないやうに思はれました。若し之が困難なしに出來あがつたとしましたなら、私たちはそこに全物理現象に對する力學的世界形像を完成することが出來たのであつたでせう。けれども事がらはそう容易く運ばなかつたのです。實にエーテルに關する問題は物理學が遭遇した第二の大きな難關でありました。

ファラデーの理論を數學的に完全にし、且つ之に極めて重要な補足(變位電流)を施し、そのお蔭でとう〳〵光を全く電磁氣波の一種として結論し得たのは

ジエームス・クラーク・マックスウェル(一八三一—一八七九)

であります。そして之が實驗的にも證明せられるに及んで、光學はもはや電氣力學の一部に過ぎなくなりました。併しそれと共にエーテルは益々物理學の重要な對象として確立されたのです。物理學を分つて暫く物質及びエーテルに關する二部門とせられるやうになつたのもこの事情によるのです。けれどもエーテルを力學的に解しやうとするあらゆる試みは、遂にその充分の成功を果し得なかつたのでした。丁度この時期に際してあらはれた新らしい事實が、私たちの世界形像を全く新たな基礎のうへに立てなほさうとする動機を與へました。それは物質の共通素成分としての電子の發見と、その性質に關する理論の著しい發展とです。電子論に對する最大の貢獻者として私は恐らく

ヘンドリーク・アントーン・ローレンツ(一八五三—)

を擧げなければなりますまい。彼は物質を電子の集合體として見なすことにより、その光學的並に電磁氣學的性質を能く說明することに成功しました。併し私達の見遁がしてならない事は電子の力學的質量は純粹に電磁氣學的に起因し得ることを示したアブラハムの理論並にカウフマンの之に對する實驗です。力學的世界形像の確立にゆき悩んだ私たちはこゝに新たな救拯に出逢つたと云つてもいいのでせう。すべての物質の性質を悉く電子の電磁氣學的性質によりて解しやうとする望みを私たちの目前に輝かすことが出來たからです。

併しながらエーテルの難關は依然としてこゝにも殘つてゐました。今エーテルの力學的性質の假定が放棄せられ、それの電磁氣學的性質だけで光及び電磁氣の現象が說き得られるやうに

なつたとは云へ、エーテルなるものゝ存在を空間に想像する上は之に對する物體の運動が實驗的に決定せられなければならなかつたからです。しかも地球上に於けるすべての光學的並に電磁氣學的實驗は地球運動の影響を少しも示すことがなかつたのです。こゝに於てエーテルの存在は一つの謎としてあらはれたと共に、電氣力學の理論を、この事實に合致させるやうに變更しなければなりませんでした。この難關は容易にうち破ることが出來ないやうに見えましたが、幸にしてローレンツによりて正しい電氣力學の理論が立てられ、次いで

アルベルト・アインスタイン（一八七九―）

によりて絶對靜止のエーテルの否定と共に謂はゆる相對性原理が電氣力學に導き入れられ、漸くにして之が解決の道を見出すことが出來ました。この相對性原理が物理學全般に對してどんなに深い意味をもつたか、又それが種々の法則に對してどんな影響を與へたか、又萬有引力の法則をそこに取り入れることによりてそれ自身どんな發展をなしたかに就いて、私はなほ次節に於て簡單に述べて見たいと思ひます。

私は理論物理學の發展を叙して、併しこゝに話を終ることは出來ません。物理學はいままさに二つの難關を超えて更に大いなる第三の難關のまへに立たせられてゐるのです。私たちは光波の範圍を延長して熱輻射波を論ずるに當りて、一般にあらゆる波長を包容せる輻射體系が一定溫度の物體と熱平衡にあることを知り、輻射の熱力學なるものがキルヒホッフ ボルツマン、ウィーン等によりて研究せられました。ところがこの輻射の熱力學に於ては通常の物質の熱力學と相異なる特種の事情があらはれたのでした。物質に於てはその分子運動の各自由度に屬する平均エネルギーが熱平衡の場合に相等しくなければならないと云ふ謂はゆるエネルギー等分配の法則が成り立つに反し、輻射に於ては之がもはや適用せられないのです。この事實は遂に

マックス・プランク（一八五八―）

をして量子の發見に導いたのです。輻射エネルギーはその量を連續的に變化することが出來ないで、却つて量子的に即ち不連續的にのみあらはれるものであることが判りました。しかもこの輻射現象の不連續性は物質原子の構造に關する或る原理的の性質に起因することが、極めて多くの事實によりて證明せられるに及んで、量子論は最近の物理學の最も重大な問題と見なされるやうになりました。すべての現象の連續性を假定せる從來の力學や電氣力學はこの量子的法則と相容れるために何等かの制限を必要とするに至つたからです。私たちの世界形像は相對性理論によりてまさに完成に近からんと思はれたのに對して、

この量子論によりて再びその前途を見究めることが困難にせられました。この新らしい難關がいつどのやうにして超えられるか、今私たちは之に答へることが出來ません。けれどもそれが可能になるであらう日は、やがて理論物理學の世界形像が更に一大發展を重ねるときであると思はれます。

私がこの節に擧げた碩學の名は理論物理學の全體系の發展に對して、少くとも最も直接に且つ最も多くを貢獻した人々であることを信じます。私たちのアインスタインがそのうちのどんな役目を演じてゐるかを讀者は恐らく之から伺ひ得られるでありませう。

三

私はアインスタインの仕事が理論物理學の上にどんな意味をもつてゐるかを、こゝにもう少し立ち入りて説明して見ませう。

相對性原理はそれが等速運動に關する限りに於てもと力學に於て成り立つて居り、之を疑ふものはなかつたのでしたが、電氣力學に於てはその基礎法則がエーテルに對してつくられた爲めに、空間に對する相對性原理はもはやその適用性を失つて見えました。つまりエーテルに對して一樣に運動せる觀測者に在りては、電磁現象のなかにその運動の影響を認めなくてはならなかつたのです。しかも前節に述べたごとく之が實驗的事實によりて否定せられるに及んで、ローレンツは電氣力學の相對性を確立せんがために、物體の短縮や局所時なる概念を導き入れなければなりませんでした。かやうにして電氣力學の相對性原理は、その實質上からはローレンツによりて贖はれたと云つてもよいのです。けれどもそれを贖ふために、犠牲として拂はれた長さの短縮や局所時の假定は、そのまゝでは認識論的に多くの價値を期することの出來ないものであつて、只經驗的事實を滿足する暫時的の手段に過ぎませんでした。アインスタインが深く空間及び時間の數量的概念の本質に立ち入りて、その觀測者の運動狀態に依存すべき相對性を明らかにし、依りて光速度不變の事實と結びつけてローレンツの假定せる處を之から結論し得たことは、認識論的價値に於てどれ程、より高いものであるかが容易に判るでありませう。私は科學理論が認識論的要求によりて成立すべきことを最初に明らかにしました。アインスタインのこの理論が物理學の世界形像に於て價値多いものとして高められる所以はこゝにあるのです。

相對性原理が電氣力學に於て救はれた結果は、圖らずも空間及び時間概念の變更を來した爲めに、力學の法則を從前のまゝに殘しておいてはそこに相對性原理が成り立たないやうになり

ました。そしてこの結果は私たちをして當然力學方程式の變更に導いたのです。この事がらは私たちが力學的世界形像を放棄して電氣力學的世界形像に移ると云ふことと相待つて頗る意味ふかいものであると思はれます。電子がその純粹の電磁氣的惰性質量をもつて運動する場合に、それは電氣力學の方程式に從はなければなりません、力學の法則が電氣力學の相對性原理に合致するやうに變更されると云ふことは、即ちすべての物體の力學が電子の力學と同一に歸せられると云ふことに外ならないからです。そして之は亦物體を電子の集合體と見なせる電子論に對して極めて自然の歸結でなければなりますまい。

　かやうな力學と電氣力學との融合は、最も適切にミンコフスキーの導いた「世界」に於てあらはされます。この世界なるものは三次元的空間と一次元的時間との綜合體たる四次元の體系であつて、アインスタインの示した空間及び時間の相對性は完全にこの世界の幾何學的相對性によりて云ひ表はされます。ミンコフスキーの世界は即ち私たちの物理學的世界形像の舞台であり、この相對的舞台のなかにあらゆる物理法則は不變の形像として表はれるのです。かやうにしてアインスタインの理論は更に確實な認識論的根據を與へられたと云ふことが出來ます。

力學と電氣力學とが既に相對性原理のもとに從へられた結果として、すべての物理學的法則は之に相當する變更をうけることによりて、悉くこのなかに統一せられ得るやうに見えました。何故なれば他の熱力學や音響學や光學の之に對する關係は既に前節に述べたやうにして論究せられてゐたからです。併しこれまでは只ニウトンの經驗的法則以外にその性質の多く論ぜられなかつた萬有引力に關しては、そのまゝ相對性原理に適するやうに變更を加へたものが、果して事實と合致するかどうかに就いて大に疑がありました。少くとも從來のニウトンの法則で説明し得なかつた水星近日點の移動の如きは、亦この變更せられた關係によりても同樣に説明せられずに殘りました。多くの人たちがそれに對して之れ以外の手がかりを得ずに過ごした間に、アインスタインは獨り彼れ自身の立てた等速運動の相對性を更により一般な任意の運動の相對性にまで推し擴げやうと試みました。そして之によりて彼は全く異つた立場から萬有引力論へ入つて行つたのでした。この結果として出來あがつたのが即ち今日一般相對性理論として私たちに知られてゐるものなのです。

　一とくちに云へば、一般相對性理論はミンコフスキーの世界をユークリッド幾何學の成立する者としてでなく、之を一般にリーマン幾何學に從ふ四次元體と見なし、幾何學的相對性を最

も廣い意味でゆるすことによりて、こゝに物理學的形像を完全につくり上げやうとしたのです。そこには任意の運動の相對性と共に、力の相對性が導き入れられてゐます。正確に云へば力ばかりでなく、すべての他の物理學的量、たとへばエネルギーも運動量も、又電氣及び磁氣の場の强さも、悉く世界に於ける幾何學的共變性を有し、座標系の轉換と伴つてその大さを變へるものとして解せられるのです。只この共變性の特種の場合として不變性があらはれます。この不變性をもつ量は座標系、即ち觀測者の立場の任意の轉換によりてその大さを變化しません。かやうな物理的量として私たちは靜質量密度、電氣量、作用量などを見出します。之等の不變量のみの間に不變的に成り立つ關係が自然法則のうちの最も基礎的のものとして見なされ得るのです。最小作用の原理は即ちこの性質を有するものであつて、最も簡單な形式をもつてゐますが、運動の法則やエネルギー原理は却つて之から導き出される共變的關係に外なりません。

相對性理論が一つの物理學理論として從來未だ嘗てなかつた基礎的の且つ一般的の意味をもつてゐると思はれるのは實に之等の點にあるのです。それはすべての物理法則のあらはさるべき形式を世界に於ける幾何學的共變方程式であるとして決定してしまひました。またそれは世界の幾何學的性質が物質の分布によりて定められることを示し、昔日の物質及びエーテルの物理學の二部門を、唯一の世界の物理學によりて置き換へてしまひました。これらの極めて廣大な理論的結果の一つとして、また世界を構成する空間及び時間概念は、世界形像としてその内容を塡充する物理學的法則に依存しなければならないことを要求し、認識論のうへに異常なる影響を及ぼしたことは驚くに足りる處であります。

前節に於て述べたやうに私たちは現在尙ほ物質原子に於ける量子的現象について充分の理論的根據を見出すことが出來ないでゐます。量子論がどのやうにして相對性理論と融合すべきかはまさに解かれなければならない問題です。またその外に物質原子を構成する陽電氣核並に陰電子は何故にお互に異つた質量をもつてあらはれるかと云ふこと、また非可逆的現象に關する統計學的考察はどの程度まで全物理學のなかに深く入つてくるであらうかと云ふこと、之等のいろいろの問題は、勿論やはり相對性理論と相俟つて研究せられてゆかなくてはならないのでせう。私たちの世界形像を統一的に導くためにそれらは必要のことにちがひないからです。

四

アインスタインの手をくだした仕事は單に相對性理論の建設

ばかりではありませんでした。彼は寧ろ最初には熱力學第二法則に關するボルツマンの考察に多くの興味をもつてゐたのです熱力學第二法則は熱現象の非可逆性を云ひあらはしてゐますけれども、若しそれがボルツマンの解釋のやうに物體の分子集合の確度小なる狀態より、確度大なる狀態へ導かれる傾向を意味してゐるものに過ぎないならば、それは必ずしも絶對の法則ではなくて、實際の場合の何れか或る特種の狀況にありては、却つて之に反する傾向を有することも可能でなければなりません液體のなかに浮游する物體は溫度平衡の際にはその抵抗によりて靜止の狀態に近づくと云ふことがこの熱力學の法則の示す處でありますけれども、浮游物體が極めて小さな粒である場合には絶えず運動を續けることが、謂はゆるブラウン運動として知られてゐます。アインスタインはこの現象を研究して、浮游粒子の不斷の運動は液體分子が之に衝突することの不平均から由來するものとして計算し、依りて實驗の數量的結果を導きました。此は熱力學の統計學的理論を證明すると同時に、分子運動の實在を示す點に於て甚だ大切な研究であるに違ひありません。

アインスタインはこの統計學的考察から、次いで量子論の研究に入りました。彼は量子的要素が物質原子の機巧にのみ存するのでなくして、却つて空間に於ける輻射そのもの丶性質にも存するのであらうと想像し、量子の問題をこの意味で解かうと努めました。彼の假定した光量子說は即ちその一端であつて、これによりて能く簡單に光電氣効果や其他の類似の現象に於ける量子的關係を說明することが出來ました。けれども光量子の假說はそのまゝの形では光の波動的性質と相容れるのに困難を感ずることは避けられないのであつて、一方に量子論は原子機巧に立ち入ることによりて寧ろ多くの收穫を得るに至りました併しながらこの量子法則と物質との深い關係を考慮しますと、相對性理論に於ける世界四次元體の空間が尙ほ何等かの形に於て量子的性質を含むものでありはしないかと云ふことや、今日まで立てられた絶對の法則のすべてが尙ほかやうな世界に於ける統計學的平均を意味するに過ぎないのではなからうかと云ふ疑問がそこに殘されてゐるのを想像することが出來ます。アインスタインは近時に於てもこの量子論への研究に深く入らうとしてゐるのです。私たちはその將來せらるべき成果を括目して待たずにはゐられません。

私は理論物理學の過去の發展を叙してその偉大な世界形像の統一への途を示し、併せてその將來の歸趨への想像にも及ぼしました。この間に私の特に記した數人の碩學の名は、若し私が

之等の發展をもつと細叙しやうとしたなら、之に附加すべきより多くのものをもつであらうことは勿論と思ひますけれども、そしてそれらは多少の批判的見地の相違からは異なつたものを選ばなければならないかも知れませんけれども、併し私たちのアインスタインその人は、理論物理學者の第一列のなかに逸せらるべきものでないことは確かであると云つてもよいでせう。アインスタインはその物理學的研究に於て、始終理論物理學の最高の問題を目がけて進みました。私はこの事がらが彼の本來の氣質的傾向によるとは云へ、そこに既に彼の偉大を見ることが出來ると思ひます。私たちすべては今彼の前に立つて彼の仕事に對する純眞なる尊敬を捧げなければならないと思ひます。

　アインスタイン、その人を私たちは一人の最も眞摯なる且つ最も熱心なる眞理の探究者としてそして之に對する最も輝かしい桂冠者として私たちのまへに仰がなければならないことを述べました。彼はまたたしかに藝術を愛好するひとりの人間ですそれ故に彼は彼自らの郷國とは全く異つた藝術系統をもつてゐる東洋の未知の世界へ尠からぬ興味を抱いて來るのにちがひありません。併し彼の科學者としての本領は畢竟寡默の靜かな研究心にあるのであります。彼が數年前マックス・プランクの六十歲の祝賀の學會席上に於て述べた言葉は左の數節をもつて始められてゐることに見ても、彼のみづから望む處は能く推量せられるでありませう。

「科學の殿堂、それは一つの複雜な建築であります。そのなかを逍遙する人たちも亦彼等を此殿堂に導いた靈の力も極めて多樣です。多くの人は彼の卓れた精神力の喜ばしい感情に於て科學に携はつてゐます。彼には科學は適切な競技であつて、それは力づよい體驗と名譽心の滿足とをもち來します。又多くのものは只功利的の目的のためにのみ、その腦髓の犧牲を拂はうとしてゐるのを、この殿堂のなかに見出すことが出來ます。いま神の天使のひとりが來て、この二つの範疇に屬するすべての人間をこの殿堂から追放するとしたなら、恐らくはそれが空虛にされてしまふでもありませうのに、併しながらそれでも尙ほ現在及び過去の人間の幾らかはこの殿堂のなかに奧ぶかく殘されます。私たちのプランクはほんとうに之に屬する一人です。そしてこの爲めに私たちは彼を愛するのです。」

「私たちはいま心の輕い人たちを追放しましたが、私はそのなかに科學の殿堂を大部分、否むしろ殆ど全部建てたたくさんの價値ある人々のあることをよく知つてゐます。多くの人たちに取りては亦私達の天使の審判はかなり苦味過ぎるでもありませ

う。けれども私には次の一事は確かです。即ち、若しも今追放された種類の人たちのみが存在したとしたならば、この殿堂は決して出來あがりはしなかつたのでせう。丁度纏繞植物ばかりから出來てゐる森林が決して成長することが出來ないやうに。こんな人たちには本來人間の從事するどんな仕事場でもそれで足りるのです。彼等が工業家や官吏や商人や科學者の何れになるかは只外部の事情にのみよるのです。」

「けれども再び私たちの瞥見を天使のまへに恩恵を見出した人たちに向けて見ませう。それは多くは並み外れた寡默なさみしい人たちであつて、お互にそれだけの共通な處があるにも拘らず、追放された人たちがお互に似通つてゐる程には似てゐません。彼等は何を殿堂に導き入れたでせうか。この答は容易には與へられないばかりでなく、又たしかに一樣にはゆきますまい。先づ私はショーペンハウエルと共に、斯う信じます。藝術と科學とに導く最も強い動機の一つは、傷ましい粗野、慰めなき荒寥の古き日の生活から遁れ、永遠に移りゆく自己の欲望の束縛からのがれやうとする心であると。それは個性的存在を超越して客觀的な觀望及び理解の世界に纎細な絃樂を鳴らすのです。この動機は恰も都人を彼の喧噪な見通しのきかない周圍からしづかな山地へおのづから惹いてゆく憧憬にも較べられます。そこには廣い眺望が靜かな清らかな空氣を透して展けて居り、永遠に對して創造せられて見える靜穩な線を纏はせてゐます。しかしこの消極的の動機に尚ほ或る積極的のものが加はります。人間は彼のなかにどんな適當の方法で一つの單純化した見とほしのつく世界形像をつくらうとし、そして體驗の世界に打ち勝ち、或る程度までこれを其の世界形像によりて置き換へやうと努めます。これを畫家も詩人も思索的な哲學者も、又自然研究者もめいめい自分の方法でするのです。この形像に並にこれを形成することに、彼は彼の感情生活の重心をおき、依りて渦まいてゐる個性的體驗のあまりに狹い範圍では遂に見出し得ないやうな安靜と確實さとを求めやうとします。」

最も眞摯な學究者としての彼の之等の言葉に、私たちの多く味ふべき内容が余りに多く湛へられてゐるではありませんか。

偉大なる理論物理學者としてのアインスタインを私たちのくにに迎へることの出來るよろこびを、私はもう一度最後に繰り返したく思ひます。

* * *

「思考する人たちの最もうつくしい幸は、探究せられるものを探究したことであり、そして探究し得られないものをしづかに尊敬することです。」（ゲーテ）

新物理學の世界

園正造

アインスタインは物理現象につき深く思想を廻らし之に獨創的の解答を與へて物理學の基礎に革命を齎らした、其理論は新に興るべく斯學の萌芽であつて大成は寧ろ他日に俟つべきである。其來朝を機として時間空間及物質の統一されて成る物理學の世界につき其説明を加へて二三の感想を述る。

一、

從來物理學では靜止する物體（剛體）の二點は常に一定の長さを保ち靜止する時計の兩針は一定の長さの時間を與へ、何れも場所と時刻には無關係であると假定し、之を計量の基本としてユークリッド幾何學の定理を其儘用ゐて物體の大さを計り、物體相互の位置を表し又其運動をも記すなど物理現象は總てユークリッドの空間の中に起るものと見做した。要するに舊來の物理學には固有の空間がなくユークリッド幾何學の空間を其儘借用して居たのである。

アインスタン特殊相對性原理についても全く同樣であるが、此が舊來の力學と異るのは、眞空に於て光は常に一定の速サを以て八方に傳播し光原の運動の狀態には無關係であると假定する點にある。時間と空間とは獨立でなく相關的のものであり、物體の大さ、長さ又は時計の與へる時間も觀測者の夫等に對して靜止すると運動するとに依て其計數に差違を生ずると云はれるのは此公理の論理的結果である。時間と長さは觀測者（坐標系）の運動に依て其計數に異同を生ずると云ふも、各觀測者は夫れ夫れユークリッドの空間に在つて物體を測り現象を觀るのであつて、決して新に空間を規定するのではない。唯互に他に對して等速線運動をする觀測者が同じ物を計つた時に同一の計數を得るやうに長さの單位を規定することが出來ず、時間についても亦同樣に不可能であると云ふに過ぎぬ。此等の觀測者（坐標系）に不變であつて計量の基本となるべき要素は、時間は時間空間は空間と別々には到底求められず、時間と空間とを統一し

た所謂時空間で甫めて求められるのである。是に於て量的の時空兩者は其獨立性を失ふが此四次元の時空間も矢張りユークリッド或は疑似ユークリッドの空間である。

電氣力學は其理論に於て絶對靜止のエーテルを假想するものであるが夫れに對する地球の運動の光學的影響を檢證せむとする實驗が積極的の効果を齎らさなかつたことから、アインスタインは絶對靜止の空間を假定せない力學が成立つ總ての坐標系について電氣力學や光學の法則も適合すべきものであると推測し此れに基いて電氣力學を組立てるに當つて光の速度不變の公理を置き、又此結果としてロレンツの唱へた絶對靜止のエーテルを全然無用と斷じた。ア氏相對性原理の根底に横はる光速度不變の公理につき異議を挾む學者もあるが直ちに之に左袒は出來ない。

理論の上から見ると、眞空に於ける光の傳播速度が一定であると假定すれば絶對靜止のエーテルを否認する方が都合よく、從て絶對靜止の空間は考へられず互に他に對して運動する觀測者（坐標系）は同等の權利を以て各自を靜止と主張することが出來る。故に物理學の法則は互に運動する總ての觀測者（坐標系）に適合すべき形で表はさねばならぬ、是に於て相對性原理は當然起るべきである。

坐標系（觀測者）相互の運動を等速度の場合に限つたのが特殊相對性原理であつて、此制限を除いて總ての坐標系について適合すべき方程式にて物理學の法則を表はさうとするのが一般相對性原理である。此主張を更に一歩進むれば法則のみならず物理學上有意義のものは總て此インヴァリアントの特性を有し、然らざるものは何等の意義を持たぬと言ひ得るのである。

此原理の上に建てられたアインスタインの新物理學は數學の空間を假定し其内に物質があり現象が起るとした舊來の信念を根本的に打破して物質或は現象があり夫れに依て物理學の空間が規定され、數學の空間とは別物であることを明にして時空の觀念を一變した。即ち物理學はガリレオ以來數百年の借家生活を脱して玆に始めて堂々たる邸宅に移つたのである。此れに意を得てヒルベルトは物理現象は如何に生起するかを大觀し之に關する假定を設けて公理的に物理學の基本方程式を立てた、兩氏の理論を併せ考ふれば時間空間及物質が如何に統一されて物理世界とも云ふべきものを表象するかを覗ひ得るのみならず此後理論家の取るべき進路をも暗示するやうである。

二、線要素

空間の點の位置を表はすには通常直角坐標系を用ゐるが坐標

系は之に限らず、一般に空間の一點と三數の組合せ例へば $(x_1\ x_2\ x_3)$ とを對應させればよいのであつて此場合にも $(x_1\ x_2\ x_3)$ を其點の坐標と稱する。空間に於て曲線の長さを計り曲面の面積を求むるなど計量の可能なるためには、同一のものを計つた時に總ての坐標系について同じ計數を得るやうに單位が規定されねばならぬ、即ち總ての坐標系について不變の要素を必要とする。是に於て計量的幾何學では非常に接近する二點は一定の長さを定め、坐標系の取り方には無關係であると假定する。而して接近せる二點 $P\ (x_1\ x_2\ x_3)$, $Q\ (x_1+dx_1,\ x_2+dx_2,\ x_3+dx_3)$ の定むる長さ ds は

$$(1)\qquad ds^2=\sum_{i,j=1}^{3} g_{ij}dx_i dx_j$$

で與へられる、玆に g_{ij} は $x_1\ x_2\ x_3$ の函數であつて $g_{ij}=g_{ji}$ である。此式は他の定義或は公理から導かれることもあるが、逆に最初から右の式で線要素 ds を定義し此れを計量の根本要素として空間に於ける幾何學的性質を論ずることも出來る。何れの場合に於ても係數 g_{ij} の具合に依て線要素を與へる式の係數が總て常數となるやうに坐標系を變換し得る時と之れが不可能の場合とある。前者はユークリッド或は疑似ユークリッドの空間で後者は非ユークリッドである。此判別は g_{ij} 及其坐標についての誘導函數から成立つリーマンクリストッフェルのテンソルと稱するものが零となるかならないかに因て決するのである。

數學では空間を三次元に限らず其意義を擴張して n 次元のものをも取扱ふが線要素について同じことが云へる。

三、時空間

最初Pの位置にあつたM點が少し動いてQに來たとき、甲直角坐標系についてPQの坐標を夫れ夫れ $(x,\ y,\ z)$、$(x+dx,\ y+dy,\ z+dz)$ とすればM點の動いた距離は $\sqrt{dx^2+dy^2+dz^2}$ であつて、乙直角坐標系について $P\ (x',\ y',\ z')$ $Q\ (x'+dx',\ y'+dy',\ z'+dz')$ とすれば $\sqrt{dx'^2+dy'^2+dz'^2}$ である。從來の物理學では乙が甲に對して靜止の時も動いて居るときも兩坐標で計つた距離の計數が同一即ち

$$dx^2+dy^2+dz^2=dx'^2+dy'^2+dz'^2$$

となるやうに長さの單位を定めることが出來ると考へたが、光の速度不變の公理を認めると此が不可能となる、即ち同一の物體を計つた時に互に運動する總ての觀測者（坐標系）に對して同一の計數を與へる單位が得られない。併し時間も考慮してM點がPの位置よりQに到るに要した時間を甲坐標系（觀測者）で計つて dt、乙では dt' とし乙が甲に對して等速直線運動をし

て居る場合には速さの如何に拘はらず常に

$$dx^2+dy^2+dz^2-c^2dt^2$$

$$=dx'^2+dy'^2+dz'^2-c^2dt'^2 \quad （c は光の傳播速度）$$

となる樣に長さと時間の單位を規定することが出來る。此の樣に時空の單位を定むれば、特殊相對性原理は

(2) $$ds^2=dx^2+dy^2+dz^2-c^2dt^2$$

を形の上にも値の上にも不變ならしめる總ての直角坐標系について適合する形式に物理學の法則を表はさうとするものであると云へる。

他の方面から云へば坐標系（觀測者）が互に運動する場合には空間 (x, y, z) と時間 (t) は獨立では計量的に取扱へないが、兩者を統一すると計量の基本たる線要素(2)を有する四次元の空間 (x, y, z, t) が想定される、之れ所謂ミンコウスキの時空間である。

此時空間は線要素(2)にて規定されるものであるが坐標系を一般に取れば其線要素は

(3) $$ds^2=\sum_{i,j=1}^{4} g_{ij}dx_i dx_j \quad (g_{ij}=g_{ji})$$

となる、茲に g_{ij} は坐標 (x_1, x_2, x_3, x_4) の函數である。之を要するにミンコウスキの時空間は四次の計量的空間であつて坐標系を適當に取れば其線要素が(2)の形で表はされ、而して其坐標系について特殊相對性原理が適用されるのである。

時空間は勿論假想的であつて、我々の經驗は常に時間と空間とを別物としてするものであるが、此れを理由として時空間は相對性原理の取扱ひを便利にする單な手段に過ぎず恰も複素數の取扱ひに平面を利用する樣なものであると云へば夫れ迄であるが一點から射出する二直線が平面を定むと考へれば二直線が統一されて新たに幾何學的要素を作る如く、時空間も時間と空間が統一されて出來た物理的に有意義の觀念であるとも見られる。

四、時空間（續き）

物質の存在する空間では重力が支配して、物體は等速直線運動をせずに一般に曲線運動をする此物體に働く重力を空間の構成に無關係の外力と見るか或は之に必要な因子と考へるか。特殊相對性原理に從へば外力の作用を受けない物體は等速直線運動をする故重力は外力とせねばならぬ、從て重力場に於ける問題を解くには重力の强弱方向などに關する法則を必要とする、然るに之については唯遠隔作用の立場にあるニュトンの引力說があるのみで、近接作用の見地からは直ちに之を採用するのは

面白くない。のみならず一般相對性原理に於て、例へば物が體一坐標系（觀測者）について總て等加速度の運動をする場合には、觀測者が靜止して物體が等加速度の運動をする即ち重力が働くと見られるが又物體が靜止して觀測者が等加速度の運動をする從つて其空間には重力が作用せないとも考へられ何れも甲乙がない、故に重力を空間の構成に必要な因子と見る方が適當である。

偖而上述の如く或坐標系について特殊原理が適用される場合には其坐標系について重力が作用せず、夫れに應ずる時空間の線要素は前節(2)で與へられるが、此坐標系に對して加速度の運動をする他の坐標系に變換すれば重力が働くこととなり、夫れに應ずる時空間の線要素は前節(3)の形を取る。是に於てアインスインは坐標系（觀測者）の運動による重力でなく、物質の存在による場合にも矢張り時間空間を統一した計量的時空間があると考へて其線要素として前節の(3)式を採用した特別の場合には坐標系の變換に依て線要素を(2)の形に直すことが出來て重力の支配せない空間となるが、物質の存在するときは此れが不可能である。係數 g_{ij} は重力ポテンシャルと稱し空間に於ける各點各時の重力場を記す量であると同時に、線要素がインヴァリアントの結果として、時空間の計量的性質をも與へるものである即ち重力ポテンシャルは空間の物理學並に幾何學的性質を規定する。

時空間は時間空間の統一であつて其線要素(3)に於ては時間空間の兩坐標が無差別であるが、我々の直觀或は經驗と一致さすには之を時間と空間に分離せねばならぬ。時間軸(x_4)を空間坐標(x_1 x_2 x_3)に對して適當に取れば線要素は

$$ds^2 = d\sigma^2 - f^2 dx_4^2, \quad d\sigma^2 = \sum_{i,j=1}^{3} \gamma_{ij}\, dx_i\, dx_j$$

の形となる、而して $d\sigma$ は坐標差 dx_1 dx_2 dx_3 の二點の長さを與へ、f は光の傳播速度を表はす。又係數が坐標の函數なる關係上物體の大さ、時針の進行及光の速度は場所と時刻に從つて變動する、是に於て場所と時刻に無關係に長さ及時間の單位は規定されるものでなく、之を可能とする從來の假定は成立たない。

五、現象の生起

重力ポテンシャルは如何なる法則の下に重力場を作るか或は一般に如何にして物理現象は生起するか。此れをヒルベルトは公理的の方法で取扱ひアインスタイン及ミイの兩者を含むと信ずべき物理學の基本方程式を立てた。

公理は二つであつて之を平易に云へば、時空間の各點には重力ポテンシヤル $g_{ij}(i,j=1,2,3,4)$ 電氣力學的ポテンシヤル φ_i $(i=1,2,3,4)$ 及其坐標についての誘導函數から定まる量があり、此量は坐標系の取り方(觀測者の運動)には全く無關係に一定の値を取る(此量を Weltfunktion といふ)。物理現象は此量に依て定まるものであつて、時空間の全體に亘る此量の總和の變動(Var-iation)が零となる樣に起るのである。此公理から基本方程式を立て又エネルギの法則を導いた。後者についてはクラインは稍疑問を抱くが兎に角此理論は物理現象の本質を考察するに蓋し緊要である。

六、總括

空間の重力場を記るし現象を定め且計量の基本となつて物理學の世界を作るものは重力ポテンシヤルである、而して此者は重力場以外のものを總て物質と見れば、物質に依て規定されるものであつて、決して豫め數學から與へられるのでない。玆に時間空間及物質が統一されて時空間を作り物理的性質は勿論其幾何學的性質をも規定するのである、此意味で物理學は數學と別れて獨特の空間を持つに到つたと云へる。

重力ポテンシヤは物質の狀態で定まるものであるが、之には實驗を要し實驗には尺度と幾何學とを必要とする。所で豫め剛體も幾何學も假定せない新物理學では、重力ポテンシヤルと實在か、或はエネルギテンソルと實在か、何れにしても直接間接に g_{ij} と實在との關係を與へる假定或は法則がないときは必竟循環論になつて重力ポテンシヤルは求められない、實在との關係を絕てば新物理學は結局幾何學に終る。

アインスタインの理論に於て重力ポテンシヤルと實在との關係を與へるものに重力方程式があるが之れとても例へば同教授が水星公轉軌道の回轉の說明に當つて取扱つた場合は二三の假定の下に重力方程式を解いて重力ポテンシヤルを求め得るが、一般に何れだけの限界條件があれば重力ポテンシヤルが一意的に定まるかは容易に論じらるべきでない。是に於て更に進んで**新物理學を構成する要素と實在との關係を種々の方面から考察するの要がある。**

相對原理側面觀

吉村冬彥

一

世間では勿論、專門の學生の間でも又どうかすると理學者の間ですら『相對性原理は理解しにくいものだ』といふ事に相場が極つて居るやうである。理解しにくいと聞いてその爲に却つて興味を刺戟される人も固より澤山あるだらうし、又謙遜乃至は聞きおぢして敢て近寄らない人もあるだらうし、自分の仕事に忙がしくて實際暇のない人もあるだらうし、又徹底的專門主義の門戸に閉ぢ籠つて純潔を保つ人もあるだらうし、世はさまざまである。アインシュタイン自身も『自分の一般原理を理解し得る人は世界に一ダースとは居ないだらう』といふやうな意味の事を公言したと傳へられて居る。そして此言葉も亦人さまざまに色々に解釋されもてはやされて居る。

併し此の「理解」といふ文字の意味がはつきりしない以上は「理解しにくい」といふ言詞の意味も極めて漠然としたものである。とりやうによつては、どうにでも取られる。

尤も科學上の理論に限らず理解といふ事はいつでも容易な事でない。例へば吾々の子供が吾々に向つて云ふ事でも、それから其子供の本當の心持を酌取る程度迄理解するのは必しも容易な事ではない。此れを充分に理解する爲には、其子供をしてさういふ言詞を云はしむるやうになつた必然な沿革や環境や與件を知悉しなければならない。それを知らなければ畢竟無理解沒分曉の親爺たる事を免れ難いかも知れない。ましてや內部生活の疎隔した他人は猶更の事である。

科學上の、一見簡單明瞭なやうに見える命題でも矢張本當の理解は存外困難である。例へばニュートンの運動の方則といふものがある 此れは中學校の教科書にでも載せられて居て、年のゆかない中學生は兎も角も既に此れを「理解」する事を要求されて居る。高等學校では更に詳しく繰返して第二段の「理解」を授けられる。大學に入つて物理學を專攻する人は更に深き第三段第四段の「理解」に進むべき手筈になつて居る マツハの「力學」

一卷でも讀破して多少自分の批評的な眼を働かせて見て始ていくらか「理解」らしい理解が芽を吹いて來る。併しよく〳〵考へて見るとそれでは未だ〳〵十分だらうとは思はれない。

科學上の知識の眞價を知るには科學だけを知つたのでは不充分である事は勿論である。外國へ出て見なければ祖國の事が分らないやうに、あらゆる非科學殊に形而上學のやうなものと對照し、又認識論といふやうな鏡に照らして批評的に見た上でなければ科學は本當には「理解」される筈がない。併しさういふ一般的な問題は別として、茲で例にとつたニユートンの方則の場合に就て物理學の範圍内だけで考へて見ても、結局ニユートン自身が彼れ自身の方則を理解して居なかつたといふパラドツクスに逢着する。何となれば彼の方則が如何なるものかを了解する事は、相對理論といふものゝ出現によつて始めて可能になつたからである。かういふ意味で云へば、ニユートン以來彼の方則を理解し得たと自信して居た人は悉く「理解して居なかつた」人であつて、却つて此の方則に不滿を感じ理解の困難に惱んで居た極めて少數の人達が、實は比較的よく理解して居る方の側に屬して居たのかも知れない。アインシユタインに至つて始めて此の難點が明にされたとすれば、彼は少くもニユートン方則を理解する事に於て第一人者であると云はなければならない。此れと同じ論法で押して行くと結局アインシユタイン自身も未だ徹底的には相對原理を理解し得ないのかもしれないといふ事になる。

かういふ風に考へて來ると私には冒頭に揭げたアインシユタインの言詞が何となく一種諷刺的な意味のニユアンスを帶びて耳に響く。

想ふに一般相對原理の長所と同時に又いくらかの短所があるとすれば、一番痛切にそれを感じて居るのはアインシユタイン自身ではあるまいか。恐らく聰明な彼の眼には、なほ飽き足らない點、補充を要する點がいくらもありはしないかといふ事は淺學な後輩の吾々にも想像されない事はない。

自己批評の鋭い此人自身に不滿足と感ぜらるゝ點があると假定する。そして其等の點迄も何等の批評なしに一般多數に承認され讃美される事があると假定した時に、それに悉く滿足して少しもくすぐつたさを感じない程に冷靜を欠いた人とはどうしても私には思はれない。

それ故に私は彼の言葉から一種の諷刺的な意味のニユアンスを感じる。私にはそれが自負の言葉だとはどうしても思はれなくて、却つてくすぐつたさに惱む餘りの愚痴のやうにも聞きなされる。此れは余りの曲解かも知れない。併しさういふ解釋も

可能ではある。

二

科學上の學説、殊に一人の生きてゐるアダムとイヴの後裔たる學者の仕事としての學説に、絶對的「完全」といふ事が嚴密な意味で望まれ得る事であるかどうか。此れも殆んど問題にならない程明白に不可能な事である。唯學者自身の自己批評能力の程度に應じて、自ら認めて完全と「思ふ」事は勿論可能で、そして尋常一般に行はれて居る事である。さう思ひ得る幸運な學者は、其仕事が自分で見て「完全」になるのを待つて安心して此を發表する事が出來る。併し嚴密な意味の「完全」が不可能事である事を痛切にリアライズし得た不幸なる學者は相對的完全以上の完全を期圖する事の不可能で無意義な事を知つて居ると同時に、自分の仕事の「完全の程度」に對して稍判然たる自覺を有つ事が可能である。私の見る處でニュートンやアインシュタインは明に此の後の部類に屬する學者である。

私は、ボルツマンやドルーデの自殺の源因が何であるかを知らない。併し彼等の死を想ふ度に眞摯な學者の煩悶といふ事を考へない事はない。併し此れは唯私の妄想に過ぎないであらう。

學説を學ぶものにとつてもそれの完全の程度を批判し不完全な點を認識するは、其學説を理解する爲に正に踐むべき必要條件の一つである。

併し玆に誤解してならない事で、そして動もすれば誤解され易い事がある。即ちさういふ「不完全」があるといふ事は、凡ての人間の構成した學説に共通な殆んど本質的な事であつて、しかも其れがある爲に直ちに其學説が全滅するといふやうな簡單なものとは限らないし、寧ろさういふ點を認める事が其學説の補塡に對する階段と見做すべき場合の多い事である。さういふ場合に、若干の缺點を指摘して殘る大部分の長所迄も埋り去らんとするが如き態度を取る人もない事はない。アインシュタインの場合にもさういふ人がないとは限らないやうである。しかしそれは所謂「揚足取り」の態度であつて、眞面目な學者の態度とは受取られない。

「完全」でない事を以て學説の創設者を責めるのは、完全でない事をもつて人間に生れた事を人間に責めるに等しい。

人間を理解し人間を向上させる爲には、盲目的に歎美してはならないし、沒分曉に非難してもならないと同様に、一つの學説を理解する爲には、其短所を認める事が必要であると同時に、短所の爲に折角の長所を見逃してはならない。此れは余りに自明的な事であるに拘らず、最も冷靜なるべき科學者自身す

ら往往にして忘れ勝ちな事である。

少くも相對原理は假令如何なる不備の點が今後發見され、又假令如何なる實驗的事實が此の說に不利なやうに見えても、それが爲に根本的に否定され得べき性質のものではないと私は信じて居る。

三

相對原理の比較的に深い理解を得る爲には其數學的系統を理解する事は恐らく必要である。しかし其れは必要であるが、それだけではまだ「必要且つ十分な條件」にならない事も明白である。數學だけは理解しても、少くもアインシュタインの把握して居る如く此の原理を「握む」事は必しも可能でない。

又一方に於て、數學の複雜な式の開展を充分に理解しないでしかも、アインシュタインが此の理論を構成する際に步んで來た思考上の道程を、可也に誤らずに通覽する事も必しも不可能ではないのである。不可能でないのみならず或程度迄の或意味での理解は却つて極めて容易な事かも知れない。少くもアインシュタイン以前の力學や電氣學に於ける基礎的概念の發展沿革の骨子を歷史的に追跡し玩味した後に先づ特別相對理論に耳を傾けるならば、其人の頭が甚しく先入中毒に罹つて居ない限り、此原理の根本假定の余儀なさ或は寧ろ無理なさをさへ感じない譯には行くまいと思ふ。或人はコロンバスの卵子を想起するだらう。卵子を直立させてるには殼を破らなければならない。アインシュタインはそこで余儀なく絕對空間とエーテルの殼を碎いた迄である。

殼を碎いて新に立てた根本假定から出發して、それから推論される結果迄の論理的道行は數學者に信賴すればそれでよい。そして結果として出現した整然たる系統の美しさを多少でも認め味はう事が出來て、さうして客觀的實在の一つの相を此處に認める事が出來たとすれば、其人は少くとも非專門家として既に此原理を或度迄「理解」したものと云つても決して不倫ではない。

特別論の一般を知つた後にそれが等速運動のみに關するといふ點に一種の物足りなさ或は不安を感じる人は、既に立派に一般論の門戶に導かれるべき資格を備へて居る。そして其處に再び第二のコロンバスの卵子に逢着するだらう。

本論に入つてからの稍複雜を免かれない道筋でも專門家以外には味はれないやうなものばかりであるとは思はれない。もしどうしても分らないものであつたら、アインシュタイン自身が其通俗講義を書くやうな事は恐らくなかつたに相違ない。私はどんな六かしい理論でもそれが「物理學」に關したものである

限り、素人にどうしても何等の說明をもする事も出來ない程に六かしいものがあるとは信じられない。もしあつたらそれは少くも物理でないと云つたやうな心持がする。

少くも吾々素人がベートーフェンの曲を味ふと類した程度に、相對原理を味ふ事は誰れにも不可能ではなく、又さういふ程度に味ふ事がそれ程惡い事でもないと思ふ。

四

此原理を物理學上の一原理として見た時の「妙趣」或は「價値」が主として何處にあるか。それが數式にあるか、考への運び方にあるか。此れも殆んど問題にならない程明であるやうに私は思ふ。數式は彼の考を進める爲に使はれた必要な道具であつた。その道具を彼は遠慮なく昔の數學者や友人の處から借りて來た。此れは正に人の知る通である。其の道具の使い方が何處迄成効して居るかは恐らく未決の問題ではあるまいか。それを決定するのは專門家の仕事である、そしてそれは必しも第二のアインシュタインを要しない仕事である。併し一人のアインシュタインを必要とした仕事の中核眞髓は、此の道具を必要とするやうな羽目に陷るやうな思考の道筋に捜りあてた事、それからどうしても此道具を必要とするといふ事を觀破した事である。此れだけの效績はどう考へても否む事は出來ないと思ふ。假令彼の理論の運命が今後どうあらうとも、此れだけは確かな事である。そこに彼の頭腦の偉大さを認めぬ譯には行くまいと思ふ。

ナポレオンが運命の夕に南大西洋の孤島に淋しく終つてもその偉大さに變りはなかつた。併し私にはアインシュタインのやうな仕事にそのやうな末路が可能であらうとはどうしても想像されない。科學上の仕事は砂上の家のやうな征服者の榮華の夢とは比較が出來ない。

併し又考へて見ると一般相對理論の實驗的證左といふ事は嚴密に云へば至難な事業である。假令遊星運動の說明に關する從來の困難が可也迄除却され、日蝕觀測の結果が可也迄彼の說に有利であつても、それは此理論の確實性を增しこそすれ、嚴密な意味で其絕對唯一性を決定するに十分なものであるとは遽には信じられない。スペクトル線の變位の如きは猶更決定的證左としての價値にいくらかの疑問があるやうに見える。

私は科學の進步に究極があり、學說に絕對唯一のものが有限な將來に設定されやうとは信じ得ないものゝ一人である。それで無終無限の道程をたどり行く旅人として見た時にプトレミーもコペルニクスもガリレーもニュートンも今のアインシュタインも結局は唯同じ旅人の異なる時の姿として目に映る。此の果

てなく見える旅路が偶然にも吾々の現代に終結して、これでいよいよ彼岸に到達したのだと信じ得るだけの根據を見出すのは私には困難である。

　それで私は現在あるがまゝの相對理論が何處迄保存されるかといふ事は一つの疑問になり得ると思ふ。併し此れに反して、どうしても疑問にならない唯一の確實な事實は、アインシュタインの相對原理といふものが現はれ、研究され、少くも大部分の現代の學界に明白な存在を認められたといふ事實である。此れだけの事實は如何なる疑深い人でも認めない譯にはいかないだらうと思ふ。

　此れは併し大きな事實ではあるまいか。科學の學說として此れ以上を望む事が果して可能であるかどうか、少くも從來の歷史は明にさういふ期待を否定して居る。

　かういふ譯で私はアインシュタインの出現が少しもニュートンの仕事の偉大さを傷けないと同樣に、アインシュタインの後に來るべきXやYの爲に彼の仕事の立派さが損はれるべきものでないと思つて居る。

　もしかういふ學說が一朝にして覆へされ、又其爲に創設者の偉らさが一時に消滅するやうな事が可能だと思ふ人があれば、其れは恐らく科學といふものの本質に對する根本的の誤解から生じた誤であらう。

　如何なる場合にもアインシュタインの相對原理は、波打際に子供の築いた砂の城廓の樣な物ではない。狹く科學と限らず一般文化史上に一際目立つて見える堅固な石造の一里塚である。

五

　相對原理に對する反對論といふものが往々に見受けられる。併し私の知り得た限りの範圍では、此原理の存在を危くする程に有力なものはないやうに思はれる。

　反對論者の反對の主なる「動機」は、段々詮じつめると結局此原理の基礎的な假定や概念が、余り甚しく吾人の常識に背くといふ一事に歸着するやうに見える。

　科學と常識との交渉は、此れは科學の問題ではなくて寧ろ認識論上の問題である。從つて科學上の問題に比べて六かしさの程度が一段上にある。

　併し少しも歷史的に見た時に從來の物理的科學では所謂常識なるものは、論理的系統の整合の爲めには、惜氣なくとは云はれない迄も、少くも止むを得ず犧牲として棄却され或は改造されて來た。

　太陽が動かないで地球が走しつて居るといふ事、地球が球形で對蹠點の住民が逆さにぶら下つて居るといふ事、かういふ事

が如何に當時の常識に反して居たかは想像するに難くない。

非ユークリッド幾何學の出發點が如何に常識的におかしく思はれても、此を否定すべき論理は見付からない。かういふ場合に吾々のとるべき道は二つある。即ち常識を捨てるか、論理を捨てるかである。數學者は何の躊躇もなく常識を投出して論理を取る。物理學者は假令厭々ながらでも此の例にならはなければならない。

物理學の對象は客觀的實在である。さういふもの丶存在は勿論假定であらうが、それを出發點として成立した物理學の學說は畢竟比較的少數の假定から論理的演繹によつて「觀測され得る事象」を「說明」する系統である。此目的が達せられ得る程度によつて學說の相對的價値が定まる、此目的が可也立派に達せられて、しかも根本假定が非常識だといふ場合に、常識を棄てるか學說を捨てるかゞ問題である。現在ある處の物理學は後者を撰んで進んで來た一つの系統である。

私は常識に重きを置く別種の系統の成立不可能を確實に證明するだけの根據を有たない。併し若しそれが成立したと假定したらどうだらう。其れは少くも今日の所謂物理學とは全然別種のものである。さうして其れが成立したとしても、それが現在の物理學の存在を否定する事にはなり得ないと思ふ。そして最後に二者の優劣を批判するものがあれば、それは科學以外の世界に求めなければならない。

六

自然の森羅萬象が唯四個の坐標の幾何學に煎じつめられるといふ事は餘りに堪へ難い淋しさであると歎じる詩人があるかも知れない。併し此れは明に誤解である。相對理論が何處迄徹底しても、やつぱり花は笑ひ、鳥は唱ふ事を止めない。もし此人と同じやうに考へるならば、唯一人の全能の神が宇宙を支配して居るといふ考も如何に淋しく荒凉なものであらう。

今の處私は、凡ての人間が科學系統の眞美を理解して、其處に人生究極の歸趣を認めなければならないのだと信ずる程に徹底した科學者になり得ない不幸な懷疑者である。それで時には人並に花を見て喜び月に對しては歌ふ。併しさうして居る間にどうかすると突然な不安を感じる。それは花や月其他一切の具象世界の餘りに取り止め處のない頼りなさである。何處をつかまへるやうもない泡沫の海に溺れんとする時に私の手に觸れるものが理學の論理的系統である。絕對的安住の世界が得られない迄も、せめて相對的の確かさを科學の世界に求めたい。

かういふ意味で私は、同じやうな不安と要求をもつて居る多くの人に、理學の系統の中でも殊にアインシュタインの理論の如き優れたもの丶研究をすゝめたい。多くの人は一見乾燥なやうに見える抽象的系統の中に花鳥風月の美しさとは、少し種類のちがつた、もう少し齒ごたへのある美しさを、捕捉しない迄も少くも瞥見する事が出來るだらうと思ふ。

エーテルの問題

東京高工教授　竹内時男

エーテルは物理學者が嘗て描き出し而して後には其の爲に惱まされた悪夢の偶像である。

物理學者は何が故に可秤物體の概念に對して異物體たるエーテルを假定するに到つたのであらうか。其に就いて少しく回顧して見やうと思ふ。

ニウトンは引力は物體に依つて起される遠隔力なりとした。引力は何等中間の媒介を要しないで傳達するものと思考したのである。

普通の頭腦には遠隔力なるものは思ひ及ばぬものである。運動や力が傳達するには、必ず衝突や壓力や張力や乃至波動の交渉を要するとする。ニウトンの理論が彼の時代に於いて激しい反對を受けたのも無理は無い。彼の理論は經驗に依つて得られた力の原則と矛盾するとせられた。實に人間の認識は自然力の概念の斯かる二元論に對して頑強なる反抗を懐かんとするのである。斯かる時一元論を救はうと云ふのである。我々に接觸力として現れる力をも、非常に僅少なる距離に於いてのみ見得られる處の遠隔力と考ふ可きか。是はニウトンを奉じたる一般後學の先づ採らんとした路であつた。或は又ニウトンの遠隔力は單に外觀的で其の實容間を充す媒質の彈性的歪みに依つて傳達せられるのではなからうかとも考へられる。是即ちエーテル假説であるが、此は何等の著しい役をば引力説に對して爲さなかつたのである。然し此の假説は物理學者に對してはアインシュタインの所謂「潜在的役割（ラテンテ・ロルレ）」を演じて居たのである。

一方光の傳達に就いては如何であつたらうか。其の昔ピタゴラスは光の微粒子説を唱へ、中世に到つてはニウトン迄も此の説を奉じた。彼は光の直進の現象を以て此の説を裏書するものとした。ニウトンと同時代にフックは之を痛撃し、ハイゲンス亦光の波動説を唱へたが、遂に一世紀の間一顧もせられなかつた。十九世紀初半に於いて始めてヤングやフレネルに依つて、光の性質に可秤物體中の彈性波との間に存する深い類似が見出

され、エーテル假説は此處に新しい地盤を得た譯である。光はエーテル中の彈性的横波と考へられた。即ちエーテルは半剛體的なるものと考へられたのである。

波動論は約そ一世紀の間疑はれる處が無かつた。而して同時に其の主要要請たるエーテルの物理學的性質は探索の中心と成つた。其の種々の性質の中我々に對して最も重要なるものは、エーテルで、其の中を通る物體の運動に無關係に、常に靜止すると云ふ事である。以下其に就いて述べて見やう。

ブラッドレーは光行差を發見した。此は微粒子説を以てしても説明は出來るが、波動論に依つて説明するには、エーテルは其の中を通る地球の運動に依つて全く影響せられる處が無いとしなければならぬのである。(勿論ストークスはエーテルは地球と共に動くとし、速度ポテンシアルを用ひて光行差を説明んせとしたが、ローレンツの指摘した如く、困難な點に導かれるのである。)

運動せる物體内部のエーテルに就いては如何であらう。實驗の結果はエーテル自身は、全く靜止的であると云ふ事に導かれた。フレネルが提言した第一の意見は一八一八年アラゴに宛てた書簡中に見られるが、其には物體内部のエーテルは、物體の全速度の或分數だけを受けるとある。其の分數は其の物體の屈

折率に依るものである。彼は、エアリーが水を充した望遠鏡では空氣の入つた望遠鏡と同一の光行差を見出した事を、之に依つて説明する事が出來た。後のフイゾーの流水中の光の速度の實驗も良く此の説を確證するやうである。然しローレンツが充分に理論的に研究した處では運動物體中の光の速度の增加は、エーテルが水流に依て隨伴せられる證據にはならぬのである。其は次の理由からである。

マックスウエルは電磁現象はエーテルを其の舞臺とし、光は電磁波に過ぎない事を唱へた。光はエーテルの彈性波ではないのである。此は後にヘルツに依つて實驗的に證明せられた。マックスウエルの論じた處は靜止エーテル中の現象のみであつたが、ヘルツはマックスウエルの議論を擴張して、物體内部のエーテルは物體に依つて全く隨伴せられるとし、運動物體中に於ける電氣力學を造らんと試みた。然し此はフイゾーの現象と矛盾したのである。又ヘルツの假定は、廻轉蓄電器の周圍に磁場が生ずると云ふアイヘンワルドの實驗を説明する事が出來ぬのである。ローレンツは此處に事實と一致する運動物體の一般論を建設するに到たつのである。

ローレンツ論はマックスウエル論に附加するに電子の概念を以てしたので、マックスウエルの四つの代りに、五つの基礎

方程式を有する。彼の理論は時に電子論とも呼ばれるローレンツは物體の電氣的及び光學的現象を其が含む處の電子の作用に依つて說明する事に成功したのである。而してローレンツは、フレネルの考へた如くエーテルが一部物體に依つて隨伴せられるとする事は出來ないと唱へた。エーテルは全く靜止しなければならぬと。流水中で光の速度が變るのは運動物體中の電子が光波の進行に影響を及ぼすからであるとした。ローレンツは實にエーテルを運動の絕對基準として居たのである。彼はニウトンやガリレイの考へた如く空間は虛無ではなく、絕對不動のエーテルが充されて居ると考へた。然し乍らニウトンやガリレイの舊い時間の概念を用ひ、時空の絕對的獨立を假定して居たのである。此の議論の破綻は其處から起る。

マックスウエルに對してはエーテルは尙純粹力學的性質が賦與せられた。處の場であつた(勿論普通の物體よりは非常に複雜した種類のものではあるが)然し乍らマックスウエルも其の弟子も、マックスウエルの電磁法則を與へる處の滿足な力學的模型を考案する事は出來なかつた。力學的に意味づける事は矛盾に陷り易いのであつた。そして電磁場の强さをば、力學的基礎概念の外に在つて、力學的說明の不可能な基礎概念とするに到つた。次第に自然の純力學觀は蔭を秘めたのである。そして再び二元論が現れて來た。

ローレンツに到つてはエーテルは唯だ一つの力學的性質を除いては他は完全に失はれてしまつた。此の意味に於いてエーテルは抹殺せられたのである。唯だ一つの力學的性質とは其が運動の絕對規準と成る事である。

相對性理論は此の最後の力學的性質、不動性、をも奪ひ去つたのである。エーテルの概念は此處に全く一變したのである。

靜止エーテル說が正しいならば、ニウトンの原則に反して相對運動に在る座標系は相稱的ではなく成る。エーテルに固定せる座標系はエーテルに關して運動して居る他の凡ゆる座標系の中でユニークな位置を占める事に成る。第一の座標系に靜止せる物體は絕對靜止に在りと稱せられ、第二の座標系に在るものは絕對運動を持つと謂はれ得るのである。

マイケルソン――モーレーの實驗は地球とエーテルとの相對運動を決定せん爲に工夫せられた。靜止エーテル說が正しければ、彼の兩臂の方向に於ける光の速さは異なり、從つて裝置を九十度廻轉すれば干涉縞の變位を起す可きである。然し違つた季節に實驗を行つても同じく何等の變位をも見出さなかつたのである。此處に靜止エーテル說は不定なる假說を附加する以外には救はれなく成つたのである。

アインシュタインはニウトンやガリレイの眞空の概念を再び活かして來た。運動の相對性を高唱した。エーテルは運動の絶對規準たる事を失つたのである。是相對性理論の第一假定である。但し光の週期的性質は保留し、光の速さは光源の速度に依らぬと云ふ彼の舊い原理も保留せんとするのである。

凡そ科學の如何なる分科に於いても理論的發展を評價するに二大方法が存する。其の一つは直接の實驗に依つて理論の横はる處の基礎的要請を試驗する事である。此の要請にして事實と合ふならば、全理論的體系は、若し其の中に誤れる論理や不定若しくは不正なる假定さへ無ければ、價値のあるものである。理論を試驗する第二の方法は命題や定理の連鎖を發展し、其等の内的一致と其等の客觀的價値とに對して結果を吟味する事である。理論より導かれる結論が其自身に於いて矛盾せず、又互ひに相容れ、而も其等が外的世界の事實と符合するならば、其の理論が成功した事を知るに足るのである。實に相對性理論の要請の眞實性を示す處の幾多の實驗的證明がある。又相對性理論の齎す結論の體系は内的一致に在り、且つ其の豫言は實驗の可能なる處に於いては凡べて適中して居るのである。

相對性理論の第二假定は、第一假定と光の速さに關する舊原理とを結合して得るもので、眞空中に於ける光の速さは光源と觀測者との相對運動の如何に關らず同一となる事を要請するのである。此の結合は歴史的見地よりすれば幾分矛盾に見え、從つて第二假定は非常に矛盾した内容を示す事に成る。時空の性質に關する著しい新結論は主として此の假定に基づくのである。

光の速度が光源の速度に附加すると假定し、且つ運動の相對性の原理に基づいて、相對性の發散説と云ふものがある。此の説は時空の概念に於いて何等の變化をも求めない簡單な議論である。此の説に依れば、マイケルソン――モーレーの實驗の負効果は容易に説明せられる事は明かである　即ち此の場合光源に對して光は凡ゆる方向に一定の速さで進むからである。然し乍らコムストツクやドウジツターに依つて、發散説の基礎的假定に矛盾する或天文學的實證がある事を指摘せられた。其は彼の二重星の出す光の速さが其の運動に依つて變らない事と云ふである。

發散説は發散瞬時の光の速さに就いて議論は一致するが、鏡に依つて反射した後に於ける光の速さに關して種々違つた假定を設けて居る。(一)反射鏡の刺戟せられた部分が新しい波の源に成り、之に關して一定の速さにて反射するものとし、(二)光源の鏡像に關して一定の速さにて反射するものとし、(三)常に光源に關して一定の速さにて進むとするものとがあ

るが、其等の假定に反する證據が擧つて居るのみならず、一般にどの發散說も二重星の觀測に依つて否定せられ居るのである。

特殊相對性理論の時空論はマックスウエル―ローレンツ論を模型として用ひて居る。然し乍ら彼の論は此の論を遙かに超越して居るのである。相對性理論に依ればマックスウエル―ローレンツの法則が一系に於いて行はれれば之に對して等速並行相對運動をして居る他の系にも同一の形式にて行はれるのである。依つて此の兩系は物理學的には全く等値であり、從つて亦前者に對してのみエーテルが靜止せりとする理由が無く成る。勿論エーテルが一に對して靜止し、他に對して動くとして兩系の物理學的等値を語る事は論理的には不正ではあるまいか、アインシュタインの語を借りると「假定し難い」のである。エーテルは存在せぬとして宜しい。電磁場は媒質の狀態ではなく、一つの獨立的不可還元的實在である。

アインシュタインは一九二〇年五月五日、ライデン大學で講演した時、「更に考慮する時はエーテルの存在を假定する事も出來る。但しローレンツが之に與へた如き、最後の力學的性質は脫離せねばならぬ。」と申した。然し此の解釋は一般相對性理論の事實に依つて妥當とは成るが、要するに一つの見方であつて又特殊相對性理論に對しては微溫的である。寧ろ我々は俗人に對しては舊い意味のエーテルはもう陰を秘めたと叫ばねばならぬと思ふ。

我々は絕對空間に對する加速度の代りに世界の全質量に對する平均の加速度を考へる事を必要とする。マッハは遠隔物質の相對加速度に對する慣性抵抗を傳へるものとして是迄とは違つた意味のエーテルを考へた。此のエーテルは慣性的物質の狀態を制限するのみでなく、又其に依つて制限せられるやうなものである。アインシュタインの一般相對性理論では一つの時空點に於いては其の計量的性質は其の外に在る物質に依つて異なるのである。即ち眞空は物理學的には均等等方ではないと云ふ認識は空間は物理學的には眞空でないと云ふ考に導く。アインシュタインはエーテルを此の内容として置く方が考へ易いと云つただけである。然し此のエーテルは是迄考へた如き光の媒質たるエーテルでは全然ないのである。(十一・十・卅一)

「アインスタイン相對性原理の否定」の誤謬

池邊常刀

(十月二十一日の日本数學物理學會例會に於ける愛知博士の報告に依れば土井氏は愛知博士に指摘せられて自己の理論の中に少からざる矛盾と未だ闡明せられざる疑義がある事を承認され、其の理論を撤回される事になつたさうである。氏の爲めに喜びに耐へない次第でありますさうして私は其の翌二十二日神田駿河臺下中央佛敎會館に於ける土井氏の反相對性原理の講演の廣告を私が貰つた事は恐くば何かの間違であつた事と信じます。既に土井氏が其の所論の誤謬を認めて自説を引込められた以上今更此の文を公にする事は若し之れが土井氏一人を對象するならば全然不要になつた譯でありますが、私は九月下旬日々紙上に發表された土井氏の石原先生宛の公開狀に於けると全く同じ動機と意義を以て改造社の希望に任せて之を公表する事に致しました。此の點特記して土井氏が私の意を諒とせられん事を偏に希ふ次第であります。)

一

土井氏が其の所信を一つの專門雜誌なり又は單行本なり或は其の他の方法で專門學者丈けに發表されて議論を上下せらるゝ間は私共は別に何もいふ必要は認めないのでありますが、氏が一般人士を對象として新聞に雜誌に其の「相對性原理の否定」を宣傳流布せられアインスタインの相對性原理を信ずるものは學者的良心を缺ぐ曲學阿世の末輩のお祭騷ぎに過ぎぬと批せ難られるに至つては相對性原理信奉者の末席を穢す私として、且つは夫れに就ての貧弱ながら一つの單行書の著者として一言一般讀者に對し私共が然る所以のものでない事を發表すべき義務を感じます。

土井氏自身の電子論及電磁波の傳播速度の二論文には少からず疑問の點がある事は愛知博士が朝日新聞に發表された所のもので畧ぼ盡されて居るでせう、またそれを委しく論ずる事は專門雜誌ならぬ本誌に於ては許されて居りません。でありますか

ら私は本誌に於て許されて居る範圍内に於て、土井氏が陥つたと同じやうな誤謬の陥穽から一般讀者が免れるだらう事に役立つ點に就て少し許り述べさして頂き度いと存じます。

土井氏は其の自ら發見されたといふ電子論を基礎として觀測系に對して一つの波(光)源が媒質と共に靜止して居る場合、觀測系に對して波源は靜止するが媒質が等速運動をなす場合、及び觀測系に對して媒質は靜止するが波源は等速運動をする場合等に於ける波（電磁波及光波）の傳播速度を計算して「電磁波の速度は眞空中に於ては波源對しては常に一定の速度 c を有するが觀測者に對しては一般に c でなくして觀測者と波源の關係速度 v と波源に對する波の速度 c との代數和である」といふ結論に到達された、さうして此の結論より見れば「アインスタインの相對性原理の根據である「光速度恒數」即ち如何なる觀測者に對しても光波の速度は常に一定の恒數 c であるといふ「假定は斷然誤りである眞理の爲めに否定されなくてはならぬ」と云はれます。今假りに土井氏の新に說き出された電磁光論が論理的に完全であり且つ其の結論が悉く實驗の結果と一致すると致しましても、同樣に論理的に完全であり又其の結論が實驗の結果と同樣に一致するアインスタインの相對性理論を否定する何等の權威も有たないのでありまして、高々土井氏の新說が相對性理論の一對比として認められる丈であります。私が茲に事新しく申す迄もなく一つの物理學的理論が否定される爲めには其の理論が矛盾を含むか或は矛盾は無くとも實驗の結果と一致しないかゞ明かにせられなければなりません。而してアインスタインの相對性理論は何等の矛盾も有たぬのみならず、殆ど全ての實驗の結果と一致する以上私共の知れる限りではどんな優秀な理論が他に見出されやうとも只夫れ丈けでは相對性理論は否定せられるものでありません。

二

土井氏は其の著書の中で「光速度恒數」なる假定が『一人間の氣儘に案出したものであつて嚴かな大自然の實在現象に悖て居る』(土井氏著書二二〇頁) 事を繰返して述べられて居る、而して、氏自らの主張する所は『說でも假定でもない、唯押しも押されもしない確かな實測の電磁氣現象を土臺として、否むことの出來ない數理に導かれて展開し、最も合理的の論理を辿つた：：必然的結論である』(同書二〇三頁)のださうであります、して見ると氏の理論には何等の假定も含まれて居ないものと思つて居られるのかも知れません。然しそれは明かに土井氏の誤解である例へば氏の理論の出發點であり又マックスウエルが彼

の著電氣及磁氣學の中で筆を極めて賞揚して曰つてゐる「科學界で最も華々しい功業の一つである」(土井氏著書一四頁)云々といはれるアムペアーの法則に就て見ますとマックスウエルの電氣及磁氣學第二卷一七三頁(三版)に於てアムペヤーの實驗から其の法則を導き出す理論の一階段に到達し「此のQの値は何等かの假定(アッサムション)なしには實際の電流が閉電路を形成する場合には實驗から丈けでは決定する事が出來ません。若し私共がアムペアーと共に次の樣な假定を置けば‥‥」といつて「二つの微分電流の間の力は其の二つの微分電流を結ぶ直線に沿つて働く」といふ假定を設けて居ります。然し乍らグラッスマンは「同一直線に沿つて流るゝ電流の微分元素の間には力が働かぬ」といふ假定を提唱して居ます。マックスウエル自身は「若し私共が欲するならば二つの微分電流の間の力は其の二つの微分電流間の角の余弦に比例すると假定してもよいでせう」或は又「二つの微分電流の間の引力及び夫れと直角に働く力は其の二つの微分電流を結ぶ直線と各々の微分電流との成す角にのみ依つて決定せられると假定する事も出來るでせう」と書いてある事を土井氏は御氣付にならなかつたのでせうか、勿論夫等三つの假定が皆アムペアーの實驗の結果と同樣に一致するのでありますが、その中でアムペヤー自身の假定が一番都合がよいと云ふ事をマックスウエルは書き添へる事を忘れはしませんでした。要するにアムペヤーの法則でも何等かの假定なくしては夫れを「否むことの出來ない數理」に依つて導き出す事は出來ないのであります。否夫れ許りではありません土井氏が人爲的だと言つて理論の内に取入れる事を厭はれる假定が土井氏が遵奉せられるニユートン力學にも頻々として出て來るではありませんか。例へば慣性質量と引力質量の等しい事、時間及空間がお互に且つ他の何物に依つても作用を受けない事尚ほニユートンの三つの運動の法則そのものが假說(公準又は原理)でなくて何でありませう。電磁氣學に於てもクーロムの法則、ガウスの法則ビオサーバルの法則等枚擧に遑あらずといふ程であります。ですが私共は一つの理論の體系に假定がある事を以て其の理論體系の鼎の輕重を測るものではありません、否寧ろ反對に吾々の有する數學乃至は物理學の全體系が一群の獨立した假設(即ち說明せぬ命題と定義せられて居らぬ言葉とからのみ論理的に組立られるのである事を知つて居ります。言ひ換へれば數學及び物理學には是非共それ等假設と言葉とが必要缺く可からざるものである事を認めるのであります。

でありますからアインスタインの相對性理論が「光速度恒數」なる假定の上に築き上げられて居る事それ自身は何等相對性理

論を否定する理由にはならないものであります、同様に土井氏の理論が「說でも假設でもない」事は少しも其の理論の確實さを增す理由とはならないのであります。唯爰に二つの物理學の體系があつて其の何れもが同樣に實驗の結果と一致し且つ論理的に缺陷が無い場合に其の二つの物理學の優劣を決するものは各々の系の基礎である假設の各の群の何れかゞより簡單な命題に依つて置き換へられ得るか否かといふ事丈であります。即ち甲系の物理學の基礎である假設の群から論理的に導き出した結論が乙系の物理學の基礎である假設の一群のある一つ若くはより多くと等しく、且つ乙系の一つ若くは多くの結論が甲系の假設に導かれないときにのみ我々は甲系の物理學を乙系の夫れより優れる（或はより眞實性に富む）と云ひ得るのであります。

故に土井氏の理論がたとへ氏が信じて居られたやうに夫れ程完全なものであつて其處に論じられて居る全ての實驗に完き理論を與へ得られたとしても夫れはアインスタインの相對性理論が否定される事に對して何等の權威も有たないのであります、だつて相對性理論に依れば夫れ丈けの實驗丈けでなく、土井氏の理論に於て一指も觸れられて居ないのみならず其の理論にては到底解決せられべくもない種々の實驗にも立派な解釋を齎らすからであります。だが土井氏の理論が其の論する範圍丈けで相對性理論の一つの對比と見做す可く餘りに矛盾と疑義に富んで居るのは土井氏の爲めに悲しむ所であります、一例を擧げれば土井氏はブツヘラーの實驗から電子に對する所の値が一般に認められた値 1.76×10^7 を導き出す爲めには何等理論的背景を有たぬ k といふ係數を必要としたでせう、また此の實驗に對しては m_l と m_t との比を一としながら、ゾムマーフエルドのスペクトラムの構造理論に際しては此の比を二としなければならなかつたでせう。又トールマンの實驗と二重星のスペクトラムの說明に際しては近接作用（フイゲンスの波面構成の原理）と遠隔作用（副射線の質量を無視して）なる互に相容れないセオリーを用ひて居られます。其の外愛知博士の指摘せられた種々の問題を擧げる事が出來ます。

三

然し或は土井氏の理論に無いところの「光速度恒數」なる假設が一つ丈け餘計にアインスタインの相對性理論に含まれて居るのではないかと思ふ人があるかも知れません、成る程此の假定は土井氏の理論に無くて光の速度は他のもの即ち絕對時間と絕對空間なる二つの任意な假定から決定せられるのであります、でありますから結局アインスタインは此の絕對時間と絕對

空間なる假定の代りに「光速度恒數」の假定を置いた丈けであります、尙ほ絕對時空の假定を一つの他のもの依りに置き換へた事に依り從來何の關聯も存しなかつた質量保存の定律勢力保存の定律等がが唯一つの法則に融合せられた事は決して私共の見逃す事の出來ないものであります。是等時間空間の問題に關してはアインスタイン自身及び他の諸大家の意見が石原先生に依り「相對性原理の諸斷面第貳輯（改造社）に集められて居りますから私が茲で再說する事は蛇足に過ぎぬ事として止めます。

猶ほ舊物理學の拘束から解放せられない人々が「光速度恒數」なる假定を受け容れ得られないならば私は其の人々の爲めに昨年八月のフイロソフイカル・マガジンに發表された「ローレンツ變換式」と題するパースの論文の梗概を述べませう。

パースは其の論文の出發點として次の假說を設けて居ります

（一）時間及空間は全く等質（アイソトロピック）であり、且つ座標の變換式は各座標に關して一次式である。

（二）二人の觀測者の測るお互の關係速度の大さは全等である。

是等二つの假定は舊物理學で充分に承認せられて居る事であります、パースは是等の假定を基礎として次の事柄に導かれて其の論を進めます、それは甲、乙、丙三つの互に併移運動をする觀測系があつたとき各々の座標（時間座標も含む）が甲のものから乙のものに變換され、更に夫れ等が丙の座標に變換されたものは、甲の座標を直接丙の座標に變換せられたものと全く等しい。と云ふことであります、之れも亦誰でも呑み得ないものであります。

今茲にＡＢＣ三人の觀測者があるとします、さうしてＡが測つたＢの速度をuとすれば假說（二）に依つて$-u$はＢの測つたＡの速度でありまたvをＢが測つたＣの速度とすれば$-v$はＣが測つたＢの速度であります。又Ｃの速度をＡが測つてＵであるとすればＣが測つたＡの速度は-Ｕであります、が此のＵは明かにuとvの函數でなくてはなりません、故に此のＵを（$f(u,v)$）とすれば-Ｕは $-f(u,v)$ で現はされます。そこで今各觀測者は其のx軸の方向を逆にしたとすればＣに對するＢの速度がvとなりＢに對するＡの速度がuとなり、最後にＣに對するＡの速度は $f(v,u)$ となります、之れを再び元のx軸に逆戻りして表せば $-f(v,u)$ となります、是等の事が何等の矛盾なしに言へる爲めには

$$f(u,v)=f(v,u)$$

なる關係が成立しなければなりません、換言すればuとvとは互に入れ代へ得るといふ事になります。愈々本問題に入りまして、Ａ、Ｂ、Ｃ三人の觀測者の用ふる座標 x、t、x'、t'、x''、t''

等の間の關係式を決定しませう、私共は最も一般な場合として次の式を豫想します、即ち

$$x'=\alpha(u)x+\beta(u)t,$$
$$t'=\gamma(u)x+\delta(u)t,$$

式中の $\alpha(u)$、$\beta(u)$、$\gamma(u)$、$\delta(u)$ は皆な u の函數であると云ふ丈けで如何なる形かは是れから決定されなければなりません空間が等質であるからして此の式に於て x、x'、u に負號を附しても t と t' が元の儘であれば此の二式は何等の變化も受けない筈であります、此の事から α と δ とは u の偶數羃のみを含み β と γ とは u の奇數羃のみを含む函數でなくてはならぬ事が分ります。又 u はAが測つたBの速度でありますから、x' が零のとき即ちB自身の座標 x は ut でなければなりません故に

$$\beta(u)=-u\alpha(u)$$

なる關係が第一式から得られます、從つて前の變換式は次の樣に書き改められます、

$$\begin{cases} x'=\alpha(u)(x-ut) \\ t'=\gamma(u)x+\delta(u)t. \end{cases}$$

同樣にBからC又AからCへの變換式は次の通りであらねばなりません。

$$\begin{cases} x''=\alpha(v)(x'-vt') \\ t''=\gamma(v)x'+\delta(v)t', \end{cases}$$

$$\begin{cases} x''=\alpha(U)(x-Ut) \\ t''=\gamma(U)x+\delta(U)t, \end{cases}$$

是等の關係が成立する爲めには

$$\alpha(U)=\alpha(v)\alpha(u)-v\alpha(v)\gamma(u) \qquad (1)$$
$$U\alpha(U)=u\alpha(u)\alpha(v)+v\alpha(v)\delta(u) \qquad (2)$$
$$\gamma(U)=\alpha(u)\gamma(v)+\gamma(u)\delta(v) \qquad (3)$$
$$\delta(U)=-u\alpha(u)\gamma(v)+\delta(u)\delta(v) \qquad (4)$$

なる關係が u、v の全ての値に對して滿足せらるべきであります。若し v が $-u$ に等しければBに對してAとCは全く等しい速度で等しい方向に進んで居りますからAとCとは全く一體として動いて居ます、即ちU或は $f(v-u)$ は零でなくてはなりません、此の關係を(2)式に適用すれば $\alpha(u)$ と $\delta(u)$ とは等しいものである事が分ります。そうすれば(1)及(4)から

$$u\alpha(v)\gamma(u)=u\alpha(u)\gamma(v)$$

即ち

$$\frac{u\alpha(u)}{\gamma(u)}=\frac{v\alpha(v)}{\gamma(v)}=\cdots\cdots\cdots\cdots=-c^2$$

なる關係が導かれます。此處に於て $\alpha(u)$ $\gamma(u)$ に就て種々の假定を置く事が出來ますが其の內で物理的に有意義なる結論が導き出される爲めに役立つものは $\alpha(u)$ は零でなく同時に $\gamma(u)$ も

は零若しくは零でない二つの場合であります。若し $\gamma(u)$ を零であるとすれば(1)....(4)の式は

$$\begin{cases} \alpha(U)=\alpha(u)\alpha(v) \\ U\alpha(U)=\alpha(u)\alpha(v)(u+v) \end{cases} \qquad (A)$$

に等しくなります、此の式に於て又 v を $-u$ に等しとすれば U は零となり、且つ $\alpha(-u)$ は $\alpha(u)$ に等しいのですから

$$\alpha(0)=\{\alpha(u)\}^2$$

である可きです、且つ此の式の左邊は常數でありますから右邊も亦 u の値如何に關せぬ筈です、故に u を零と置けば

$$\alpha(0)=\{\alpha(0)\}^2$$

即ち $\alpha(u)$ は1であつて u に無關係な常數となります、是等を綜合して

$$\begin{cases} x'=x-ut \\ t'=t \end{cases}$$

なるガリレイ變換式に到達します。此の變換式は舊物理學で承認されて居るものに外なりません。

若し $\gamma(u)$ が零でなければCは有限な値を取り(A)の代りに

$$\begin{cases} \alpha(U)=\alpha(u)\alpha(v)\left(1+\dfrac{uv}{c^2}\right) \\ U\alpha(U)=\alpha(u)\alpha(v)(u+v) \end{cases} \qquad (B)$$

なる關係を得ます前の如く v を $-u$ と等しと置きて

$$\alpha(0)=\{\alpha(u)\}^2\left(1-\frac{u^2}{c^2}\right)$$

$$\alpha(0)=1$$

$$\alpha(u)=\frac{1}{\sqrt{1-\dfrac{u^2}{c^2}}}$$

$$\gamma(u)=-\frac{u}{c^2}\frac{1}{\sqrt{1-\dfrac{u^2}{c^2}}}$$

等の關係が得られます。

是等を綜合すれば(G)の代りとして

$$\begin{cases} x'=\dfrac{1}{\sqrt{1-\dfrac{u^2}{c^2}}}(x-ut) \\ t'=\dfrac{1}{\sqrt{1-\dfrac{u^2}{c^2}}}\left(t-\dfrac{u}{c^2}x\right) \end{cases} \qquad (L)$$

なる關係式を得ます。是れは即ちローレンツ變換式其のものです。

吾々は $\gamma(u)$ が常に零であるか否かに依つて二た通りの變換式(G)と(L)とを得ました、若し其の何れを取つても同様に實驗の結果と一致する理論が得られるならば私共は其の何れを取

るべきか何れを捨てるべきかを決定する能力を與へられて居ない事になります。然し事實は問題が單に小速度のみを取扱ふ範圍に於て二つの理論は同樣の確實さを持ちますが速度が c に比し甚だ小ならざる場合には吾々は(G)を捨てゝ(L)を取らねばならぬ事を知つて居ります。さうして云ふ迄もなく全觀測者に共通の恒數 c が實驗に於ては光の速度と等しいのであります。

私は「光速度恒數」に就て餘りに暇をつぶし過した樣に思ひますから此の問題は是丈けにして次の事に筆を向けませう。

四

土井氏著書の第五編と第六編は主として相對性理論の背理と稱するものを指摘して同原理が否定せられなくてはならぬ事を力說して居られる。私が云ふ迄もなく一つの理論の體系が背理であるか否やは其の理論に矛盾があるか否やでのみ決定されるのであります、そしてそれが矛盾であるか否やは其の理論體系の構成に與る假說(若くは一つの理論でも宜しい)を尺度としてのみ決定せられなければなりません。是れ丈けの用意の下に土井氏の否定論を調べて見ませう。

先づ第一編の第一節には「光速度恒數」なる假定が因果律に背くことを力說してありますが、之れはガリレイ變換式を基調とする物理學體系に於てはそれが因果律に反するものに違ひありませんが、ローレンツ變換式を基調とする物理學の體系に於ては決して因果律に反するものでありません、要するに之の事はパースの理論に於て $\nu(\infty)$ を零と土井氏が假定するのにアインスタインは $\nu(\infty)$ を零ならずとしたのだからアインスタインの理論が否定されなくてはならぬといふ事に歸着します、その理論は土井氏が全然誤りであることは餘りに明白であります。

第貳節に於ては相對性原理は空間距離の實在性を破滅すると云つて批難されて居りますが之れも土井氏が相對性理論に充分通じて居られないか或は何か爲めにする所があつて曲言せられるのであるかと思ひます。元々相對性理論はミンコウスキーの四次元時空世界の觀念を取り入れて其の本來の壯嚴さが完成されたのである事はまさか土井氏も御存じない筈ではありますまい。從つて時間及空間夫れ自身は實在とは認めて居りません、(實在といふ言葉は誤解を招きますが土井氏が此の言葉を使用されて居るから私も其の儘使用して置きます。尚ほ委しくは拙著「特殊一般相對性原理」第參章を見て頂き度いと思ひます。)「時間及空間夫れ自身は一つの陰影に過ぎぬ」とはミンコウスキーの有名な言葉として人口に膾炙して居ります。即ち相對性理論に於ては時間と空間の融合された一つの四次元時空世界を

只一つの實在であると認むるのであります。私共が始めから實在と認めて居ないものが觀測者の運動狀態に依つて變つたとて何の不思議もないのです。寧ろ逆に觀測者の運動狀態に依つて變化するから實在だとは認めないのであります。

第三節に於ては「數」が運動によりて變るから相對性原理は否定せられなければならぬと言つて一つの物指の兩端に挾まれる光波の數が互に運動する觀測者に依つて異る事を指摘されます。若し其の波の數が例へば一つの籠にある林檎の數といふ如き性質のものならばそれは問題になりますが、此の場合には物指の長さと光波の波長の比を現す數であつて林檎の數とは全く趣を異にして波長と物指の問題に於ては當然時間も其の考への内に這入つて來ます。從つて實在を四次元時空世界の間隔(インターバル)として考ふるとき何等の矛盾をも認めないのであります。

第四乃至第五節の所論も空間若しくば時間夫れ自らを實在とする觀念から見てこそ不思議であるので、此不思議が取りも直さず實在は四次元時空世界である事を確認せしむるに役立のであります若。し土非氏が擧げられた一個の放射能物質から放射されるβ粒子が動かないで物指の各點にくつ付いて居るとしたら正に物指に對し靜止する觀測者も又は物指に對し運動する觀測者も共に物指の上のβ粒子の數として同じ値を得たでせう。

第六節の「時計の矛盾(クロックパラドックス)」は特殊相對性理論丈けでは充分に說明が着け得られないやうに思ひます。然しそれは一般相對性理論に依つて明確な解釋が着け得られるでせう。「時計の矛盾」と云ふのは一つの時計を一つの閉路に沿うて動かしたとき、今動いたと認める時計は之れと全く等しく且つ靜止する時計より遲れて居る可き事が豫期せられる。然るに運動の相對性により先に運動せりと認めた方の時計を靜止せりと認め先きに靜止せりと認めた方の時計を動くと考へる事も出來る筈である。さうすれば時計が始めの位置から動き出して閉路を一巡して始めの位置に戻つて其處で二つの時計が互に靜止の狀態を保つとすれば、今度は先きに遲れた方の時計が却つて進んで居ると豫期される。然るに事實は只一つ甲の時計が遲れて居るか或は乙の時計が遲れて居るかである故に相對性理論は矛盾を含むといふのであります。

成る程その通りでありますが爰に考へなくてはならぬ事は此の結論を得るに當つて一つの時計が一つの閉路に沿つて一同線するとき、其の空間(三次元の)の長さの原素 $d\sigma$ を其の閉路に沿つて積分されたものは零である事即ち

$$\int_C d\sigma = 0$$

である事を假定してあることとであります。然し此の積分が零であるならば私共は何に依つて此の時計が其の閉路を一巡したかを知るに苦しみます。若し事實此の時計が一つの閉路に沿つて動いたとすれば――例へば地球上に靜止する時計が地球と共に太陽を一周する場合太陽に靜止する觀測者から此の時計を見るとして――此の積分は決して零ではあり得ません。何となれば此の積分が零である爲めにはコーシーの定理に依つて此閉路は其の內に特異點（即ち太陽）を含んで居てはならないからであります。若し此の特異點が其の閉路に含まれて居らぬとしたならば何が此の時計を動かしたかを訊ねて見なければなりません。さうして若し夫れが糸の先きに結ばれた石塊が糸を廻す事に依つて一回轉せしめられたやうな場合には糸の張力が此の積分を零としないやうに働くでありませう。勿論アインスタイの宇宙論に依れば或は時計は何等の太陽なしに一閉路（空間的大圓弧）に沿つて動き得るでせう、然し此の場合には此の閉路の曲率を決定する世界物質がエッセンシャルシンギュラリチーとして現れるでせう。若しド、ジッターの宇宙論に依れば動く時計は靜止するものから $\frac{1}{2}\pi R$（Rは此の宇宙の曲率半徑）以上に遠かる事が出來ません、全ての變化は $\frac{1}{2}\pi R$ なる距離に於て中止してしまふからであります、其の點では全ての變化が起り得ません、運動も化學的變化も、時計の進みさへ其處では無くなります。其處は時の流れが無い場所であります、不老不死の國であります。其處では呼吸さへしません、然も命を失ふ事さへ出來ません。若し又石原先生の宇宙論に從へば副射線がアインスタインの世界物質の代りに現れるでありませう。

要するに土井氏は一つの假定から導き出した結論を以て他の假定から得た結論を批判して後者は前者に悖るから背理であると云はれて居るに過ぎません。一羽の鳥を見て私が此の鳥が雌ならばといふ假定から、其の鳥が卵を生むだらうと結論したとき土井氏は其の鳥が雄ならばといふ假定から卵を生まないだろうと結論し、扨て卵を生まない筈の鳥が卵を生むといふのは背理だといふ論法を以て私の說を斥けられるものと何等の差異もありません。其の批難が何等の權威を有たぬ事は明々白々であります。只其の二說の孰れが眞であるか、鳥が卵を生むか否かは唯時が解決して與れるでせう。私は此のことを記憶して下さる事を讀書にお願致して置いて爰で話頭を轉じませう。

私が更めて云ふまでもなく今迄論じた事は（「時計の迷理」に關する一段を除き）所謂特殊相對性理論の範圍を出でなかつたのでありました、夫れは土井氏の所論が一般相對性原理に少し

も及んで居なかつたからであります。アインスタインは一九〇五年其の今日で謂ふ特殊相對性原理を發表した後更に一九一一から一九一六年の間に於て其一般相對原理を完成されました。特殊相對性原理に於ては二つの觀測系が、等速運動を成す場合にのみ適用せられる理論でありますが。運動の相對性即ち絶對運動の無意義は當然此の特殊的な等速運動なる條件を取り去つて任意なる關係運動をなす觀測系にまで擴張せられなければならなかつたのであります、而してアインスタインは此の千古の大事業を完成したのであります、從つて一般相對性原理が完成された以前の特殊相對性原理は後の一般相對性原理に當然包容されてしまつたのであります。さうして特殊相對性原理は物質に依る自然引力場の存しない場所――即ち全ての物質から無限に遠つた場所――に於てのみ適用せられ可き様になされました、故に光の速度もその様な場所に於てこそ全ての觀測者に對して一定の恒數であるが自然引力場に於ては眞の速度は恒數でなくなります、即ち屈折をする事になります、此の理論に關する實驗が一九一九年五月二十九日の皆既蝕に際して行はれ、其の結果は相對性原理が正しい事を確められたのであります。尙ほ此の實驗は本年九月二十一日の皆既蝕を利用して瓜哇の南方クリスマス島、西濠洲の西北海岸ヲーラル、クインスランド東北岸及び南濠洲の東北隅等で繰返された筈であります。

今一つ相對性原理の有力な實驗的證明は水星の近日點の移動に關するものであります、其の外スペクトラム線のズレもグレーベ等に依り證明せられたと傳へられて居ります。尙ほ私共が相對性原理を信ずる大きな原因の一つは其の認識的價値であります。斯様にして今日の一般相對性理論は殆ど全世界の學界に承認されて居るのであります、土井氏の如く「無批判にお祭騒ぎ」をせられては居るのでは斷じてありません。

即ち私共が先に見ました鳥は斯様な美事な卵を數多く生んで居つたのであります。故に是れが雌であろうといふ假定は決して「人間の氣儘勝手な假定」でなかつた事が分明したでありませうさうして土井氏が甚だ尊重せらるゝ「相對性原理の美、自然科學の美――深刻な自然の暗示をその儘飜譯した美――が」（土井著書序文）燦然として其の本來の美しさを輝かせだした事は土井氏と共に私共の大なる喜びとする所であります。（了）

相對原理を中心として學界の推移

九州帝國理科大學教授　桑木彧雄

凡そ物理學上に新學説の唱出せられたとき、之を歴史的に考察すれば、自然に其學説の現出に至つた經路も見出され、又其内容も、物理學に於ては、新學説の現出と共に、舊學説が全く其影を潜めると云ふ様の事もなく、舊學説は依然殆ど其儘に新學説の中に殘り、唯だ新しき衣に包まれてゐる、或は之を家屋の建築に比すれば、舊屋が向きをかへ、見通しをかへられたと云ふにたとふべく、それらが悉く打壞されて其形も止めないと云ふ類ではない。かやうに内容も新知新面のものばかりでなく其組立も殆ど必然的なので、遂には新學説に於て何が唱出者の創造であるかを疑はしめ、同じだけの材料を見知れば誰にでも同じだけの仕事ができさうにも考へられる。それでモスコウスキーのアインスタイン對話錄に、アインスタイン氏が自分にはガウスよりもドストイエフスキーの方が感興を引くと云つたのに對し、モスコウスキーは、兩者の對比を無理とし、ドストイエフスキーなくば「カラマゾフ」はないであらう、併しガウスがなくとも誰かゞガウス坐標を發見するであらうと云つてゐる然しながらア氏自身は之を否定して、理學の發達が天才の創造に待つことを述べてゐるが、鍵が與へられ文字が與へられても作曲者、作詩者の創造を待つ様に、物理學的數學的理論を思惟の所産とするときさう考へることが自然である。又歴史的發達には偶然の件なふことも考へなければならない。アインスタイン氏の相對原理の内容は後にも述べるやうに皆必らずしも新しいものであるとしない。然しながらそのコンポーザーとして大なる天才を要したことは學界の雰圍氣が常にア氏の新理論の建設に便宜であつたと云へないことを以ても知り得るのである。

アインスタイン氏が特殊相對原理の第一の論文を出した一九〇五年の頃は相對論よりは絶對論が漸次勢を得つゝあつたのである。ウイリウイーンが一九〇〇年にローレンツのドクトル二

十五年祝賀論文集に寄せた「力學の電磁論的基礎づけの可能に就て」といふ論文は理論物理學の主潮に一轉機を與へた。其の新主潮に乘つて、一九〇三年にアブラハムが發表した「電子の力學」といふ論文は當時直に學界に大なる反響を起したが、それは絶對論を主張してゐたのである。その僅に二年後に出たアインスタイン氏の相對論が當時に疑惧の念を以て迎へられたことは怪むに足らないのである。

前述ウイーンの論文の最も主要なる點は、從來いかなる物理學上の理論もその説明に指を染めなかつた物質の惰性といふことに一新見解を與へたことにある。マクスウエルが、渦動原子説も惰性を説明し得ず、ボスコヴイチの力心説も惰性の説明に不十分であることを喞つたことは人の知る所である。ヰーンは力學的惰性を電磁的惰性に代へ、其の計算は新しいものでなかつたにせよ、物質の性惰量即ち質量が速度と共に變化することを新しい視角から述べたのである。アブラハムは同様の見解の下に更に敷衍してかやうの質量に縱の質量と横の質量との別あることを説いた。是等のヰーンやアブラハムの論文の基礎となつてゐるのはローレンツの電子論である。電子論そのものは特殊相對原理にも背き、反作用律にも矛盾するものであつたが、ローレンツは所謂ローレンツ收縮を假定して特殊相對原理を成立せしめた。收縮の原因は之を電子の彈性とした。電子なる結合體を造る力の性質は問はなかつたのである。

云ふ迄もなく、物理學上に甲の學説と乙の學説と並立する場合には、兩者に於ける論理、認識論的根據、實驗的證明の相違が兩者の間の優劣を定める。論理は數學に依り、實驗結果は數量を以て表現せられるが、その論理の出發點には必ず若干の假定がある。「われは假定を置かず」といふ套句は徹底的であり得ない。唯できるだけ少數の假定が置かれ、特別 ad hoc な假定が多く置かれてゐないと云ふことに理論の優越さが認められる。ローレンツ收縮はこゝに所謂 ad hoc な假定であらうと云ふことがアブラハムの主張であつた。ヰーンも凡ての力、分子力を電磁力の一元に歸しやうと云ふのでマイケルソン、モーレーの實驗に何等かそれらによる説明を期待したのであつたが、アブラハムは電子を自然構成の單位であるとし、思考の單位に更に形容の變化を考ふるは不自然であるとし、電子は收縮の不可能な剛體であるとした。從てマイケルソン、モーレーの實驗の精確度を疑ひ、若しくは又ローレンツのなす樣な電子の收縮に依らない他の説明の途があるであらうとし、結局マイケル、モーレーの實驗を顧みない絶對論を主張したのである。

かやうの學界の雰圍氣の中に在つてマイケルソン、モーレー

の實驗を最終決定的のものとし、即ち特殊相對原理を成立せしめるためにアインスタイン氏は一見奇異なる時間空間の相對性を唱出したのである。計算の結果はローレンツ收縮と同様のものを與へた。アブラハムの剛體電子説とかやうな收縮可能な電子の説との間に決定を與へるべく、以前から此方面に研究のあつたカウフマンの實驗が一九〇六年に行はれたがその結果はアブラハムの絶對論に有利であつたのである。この頃にアインスタイン氏の相對論のためにひとり勇敢に戰つてゐたのはプランクであつた。この相對論を力學や熱力學に應用した論文を書いたり又カウフマンの實驗結果を改算して絶對論が有利といふ結果が決定的でないことを示したりしたが、一九〇七年には未だゾンマーフエルドが、相對論は四十歳以上の人の信條、絶對論は若き人の信條と云つた言に多くの共鳴があつたのである。併しローレンツ、プランク、アブラハム乃至ゾンマーフエルドにも此分類は當嵌つたが、アインスタイン氏はアブラハムよりも更に若年といふ例外もあつたのである。

プランクはアインスタイン氏の時間空間の相對論はコペルニクスの革命をも兒戲に等しとする認識論上の大革命であると推稱した。ミンコウスキーはこれらのプランクの熱心に動かされたいといはれてゐるが、アブラハム、カウフマン等と同じくグツテインゲンに在つたが、相對論に於てアインスタイン氏の繼承者となり、ローレンツ變換を相對定理 Theorem アインスタイン氏の假定を相對公備 Postulate と呼び自ら相對原則 Prinzip を提唱して一切の物理學を之を以て蔽ひ、所謂物理學は四次元幾何學の一章であるとした。その一九〇八年の「是より後時間と空間との別は影に沈み、唯それらの融合があるばかりである」云々の有名なケルン講演は私も親しく聞いたが、その會でカウフマンの實驗を否定したブツヘレルの實驗の報告もあり其後の討論の際にミンコウスキーは剛體電子はツエツペリンの硬式氣球に比すべく、收縮電子はパルセフアルの軟式氣球に比すべく電子も硬式よりは軟式が適すると云つた。同じ會でパルセフアルの軟式氣球の講演があつたのを洒落たのである。

アインスタイン氏の相對論からはエネルギーに惰性のあることを容易に導出し得た。同樣な結果は輻射論からも得られたが相對論からは一層直接結果として導き得られた。一時エネルギー論原子論の間に爭のあつた其一部を無意義のものとなさしめたのである。かやうにして相對論の種々の積極的結果は一九〇八年九年以後初めて學界の定説と見なさるるに至つた。其頃アブラハムは其電氣學の著を改版した序に自分等が電子の力學を基礎として物理學の系統を組織しやうとする原子論的傾向に對し相對論は現象論的であると云ひながら、とにかく相對論を共著の中に加へたが、時間の相對性といふは、其實は光速と時間

との乘積の相對性であるので、アインスタインは光速を絕對恒數としたから時間を可變としたが、寧ろ光速を可變とし時間を絕對としなければならぬと云つてゐた。

然しながらアインスタイン氏が特殊相對原理の範圍を越えて不等速運動に入り、加速度と重力との相對性を云ひ、即ち惰性量と重量との相等を云ふに至つたとき、光はエネルギーであり惰性があり從て重量があり卽ち光の速度は重力の場の一函數であることとなつた。一九一一年以後このアインスタイン氏の論文を最初として重力論がアブラハム、ミー其他の人々によりて論ぜられたが、アブラハムはこのア氏の光速變化の說を以て「數年間物理學界を毒してゐた相對論も塵に歸した」と云つてゐたのである。ア氏は之を辯じて重力のない場所に於て光速不變であると云ひ、アブラハムはさやうな場所は實在せぬと云ひミーは光速の不變を保存した。併し光速を不變とすればかの日蝕觀測に期待せられる光線の屈曲を得ないのである。

アインスタイン氏の一九一一年の重力論、其中に含んでゐる所謂相等假說は力の相對性の原理を示すものであるが、アブラハムの批評も其一部分を示す樣に、等加速運動以外の場に於ける應用をいかにするかを惑はしめる。そこでア氏は更に一九一三年以後一般相對原理に於て等加速以外、廻轉其他、任意の加速運慟に於ける相對性を成立せしめたのである。其結果は前述の光線の屈曲にも一九一一年の論文に在る値の二倍のものを與へることゝなり、恰も後の訂正の方が實證せられたのである。

特殊相對原理が定說となつた以後それが等速運動に限られてゐるにより之を擴張し又廻轉運動にも之を當嵌めやうと云ふ企はかなり試みられてゐた。併し此場合に多くの人の思考の上に解き難い一の謎があつた。運動の相對性といふことを認識論的に極めて一般的に考へるか、或は等速運動に限りそれを考へるからである。特殊相對原理はとにかく後者から出發したのである。プランクが時間空間の相對論を擁護したのも特に其故からであつた。一九〇九年から一九一〇年頃プランクとマッハとの間に物理學上認識の問題に關する論爭があつたが、マッハは凡て運動の認識は相對的であると云ひ、「自分は運動が相對的であるとすることに直進運動と廻轉運動とを別たない。物體が恒星天に相對的に廻轉すれば遠心力が現はれる。物體が或他の物體に相對的に廻轉しても恒星天に對し廻轉しなければ遠心力は現れない。前者を絕對廻轉と名けても差支はない。唯だそれは恒星天に對する相對運動だと云ふことを忘れてはいけない。若しニュートンの水桶を固定して、恒星天をそれに對して廻轉せしめ、このとき遠心力が現はれないといふことを證明することができるであらうか。その實驗はできない、併し本來さう考へることが無意味である。これら二つの場合は經驗的に互に區別することができないからである。故に自分は二つの場合を同じことゝ考へ、ニュートンがそれらを區別したことを間違ひだとする」

と云つてゐるのである。然るにプランクはかやうな認識論的傾向を懷疑的傾向として喜ばないので、マツハの徹底的相對論に對しては全然反對して相對論を等速運動にのみ限り、絕對廻轉に就ては其の可認識を主張したのであつた。

マツハと同樣に徹底的相對論を取つてゐたのはポアンカレである。その數學的でない論文の中で早くから同時刻の相對性、空間の相對性を論じ、幾何學の公理を單に規約であるとし、又廻轉は畢竟相對的に止まることに就て明快に說いてゐたが、旣に一九〇六年の初に Rendiconti に出した「電子の力學に就て」の論文の中にローレンツ變換が一の群をなすことを云ひ、時間空間の四次元論に殆どミンコフスキーの論文の主要部分を先縱してゐる外、トレミー、コペルニクスの系統の同價値、相對原則が重力電磁力論を包括することを豫測する樣の言も見出されるのである。

此時代にはこれらのマツハとポアンカレとを除いては、廻轉の相對性に關してはプランクの如き熱心なる反對者を見るばかりであつたのである。アインスタイン氏がその一般相對原理の唱出にマツハに負ふてゐることを繰返し述べてゐるのも當然である。然しながら本誌の三月號（「雜記」三）にはラウエの記載のまゝに、マツハ自身がアインスタイン氏の相對理論を原子論と同樣に一のドグマであると見てゐたことを記したが、マツハはそれの價値に就て科學の歷史中一の一意味の深い Anreiz」より以上のものであるかを疑つたのである。マツハの此言は特殊相對原理に向けられたもので、一般相對原理に於てはその徹底的なることに於て遂に意味を深めたものであるが、理論としてそこに heuristic な部分のあることも免れ得ない。

アインスタイン氏も其一九一六年の論文の中に「此論は一般相對原理を最小數の公理を以て、できるだけ簡單な論理の一系として現はすといふよりは、自分が進んだ道の心理的に自然であることを讀者に感知せしめ、根本の假定が經驗上できるだけ確かなものであるやう、この理論を發展するのが主な目的である」と記してゐる。理論の展開には「自然の法則の表述は時間空間坐標の任意の變換に關して不變である」といふ樣の抽象的原則又は惰性と重力との相等の假說のみを以てしては不十分であり、種々の限界をへるので、或はパンルヴェの樣にその數式の置き方の一意的なるを疑ふに至る。一般相對原理に與ふる自然の法則を以て「絕對」のものとするは、特殊相對原理に光速を「絕對」とする樣に理論の或到達の範圍に相對したものでなければならないのである。ワイルの樣に坐標の變換のみならず尺度の任意の變化を加ふるとするも同樣に思はれる。

現時の認識論者の中、簡單でないといふ事からア氏の理論を肯定しない人々もある。然しながら同じだけの內容を有してエピサイクロイドよりも圓が簡單である樣に、非ユークリッドよりも簡單な幾何學で全部を一層論理的に被ふることができなけ

れば其言は空しいと云はなければならず、ラウエがレナルドを評したやうに、ニウトンの理論に對するゲーテの否定と同一轍に歸する。

ボアンカレは嘗て一九〇四年にセント、ルイで「理論物理學の現時の危機」と題して電子論の發生以後、在來の根本原則、質量保存・エネルギーの保存及變衰、相對性、反作用これらの諸原則を搖かさうとしてゐることを述べ、之を理論物理學第二の危機と云つた。凡ての物理現象を物質微分子間の中心力に歸し結局、ニユートンの引力を基とする天體力の模倣に歸せしめやとしてゐた時代から、この中心力の概念に滿足せぬやうになつたのが第一の危機で、その以後この如き宇宙の構造の究極に入らず普遍なる原則を求めやうとし、物理法則と云ふは連續せる時の經過の間の恒常なる關係を表はすもの、即ち一の微分方程式であるとし、かやうにして、求めた普遍の原則が即ちエネルギー其他前述の原則であつた。ボアンカレは、是等の諸原則が「現時の危機」で何れも破壞したならば氣體運動論の樣な方法原子の觀念と大數の法則に依るものが將來に有望であることを述べてゐる。即ちこの意味に於て量子論は時代の兒として生れたのである。アインスタイン氏の相對原理は上掲の諸原則を夫々或は合併し或は改造した外、從來のエーテル概念を一變した彈性エーテルの說よりヘルツの隨動說に至るまで或は遠隔作用近接作用の論なども皆一樣に力學を自然觀の根底としてゐた。其由來はガリレイ又は更に遡りてデモクリトスに至ることを得るであらう。然しながら此篇の最初に述べたやうに此世紀の初から電磁論を自然觀の根底とするやうになつた。或はプランクの云ふ樣に、それらを普遍力學の名で被ふこともできるであらう。然るに、一般相對原理には、從來の凡ての說と異なり、絕對の空間もなく、絕對の時間もなく、物質を離れて空間がなく物質の在る空間はホマロイダルでない。空間がホマロイダルでないことは、アインスタイン氏には、デカルトがプレヌムの渦動と考へてゐたそれであり、ニユートンが萬有引力として見出したそれである、ル、サージが分子飛躍の結果とし、ローレンツが電氣の引力は斥力よりも大なりとし汎電磁的說明を試みてゐたそれである。一般相對原理は何等重力を說明せず、唯それを fictitious のものとした人は云ふ。或は逆に從來フイクテイシアスとした遠心力などを重力同樣のリヤルのものとしたとても云ひ得られる。併し物理學は四次元幾何學の一章であるといふミンコウスキーの言を經驗學と形式學との混同であると云つたナトルプの批評よりは、今まリイマンの物理的空間論等を引いて　物理學は四次元の非ユークリツド幾何學の一章であるとするとき、寧ろ何が形式學であり經驗學であるかゞ問題である。古き問題であつて常に新しく論ぜられる。相對原理が物理學をかやうの問題に導いたこと　是亦現時の一危機と云へないであらうか。（一一、一〇、二七、福岡）

相對原理の實驗方法

理化學研究所　小野忠五郎

私はかつて千九百二十一年の五月恰度アメリカシカゴ大學滯在中アルベルト、アインスタイン博士の其溫和なる學者然たる姿に接しましたが今又改造社の招きで同博士を、我が日本へ迎へて我學界乃至は一般智識普及の爲其所論の深遠なる所を親しく聞かんとする事は我國家全般の頗る幸福とする所でなくてはなりません。私共は心から此大學者を歡迎する準備がなくてはなりますまい。

幸ひ今では同博士の相對性原理に對して一人の反對者もない我國であり而も長岡半太郎博士をはじめ其の他一般學者連が熱心なる喜びを以てそれ〴〵準備中の噂もありますから博士も必ずや滿足の中に我國への旅行を深く印象されることだと信じます。

アインスタインの相對性原理がアメリカで一般に八ケ間敷言ひ出されたのは、私の渡米後約一ケ年を經過した頃の事でありまして其頃此原理に對する智識慾は一般に擴がり亙りまして Time and Space の言葉は可なりポピュラーになつて、居りました。勿論全世界の物理學者に到つては其論理の贊否に就いていろ〳〵研究されたことであります。

私が、過去四ケ年師事いたしましたシカゴ大學のライアソン物理學教室のマイケルソン教授はアインスタインの相對性原理に對して熱心な贊成者の一人でありますむしろアインスタイン博士の相對性原理の一部分を說明せんが爲にはかつて千八百八十一年及千八百八十七年にマイケルソン及モーレーによつて實驗された結果が必ず引用されなくてはならないのは既に相對性原理を研究する人々の認めらるゝ所であります。

マイケルソン教授についてはすでに皆樣御存知の事と思ひますが教授はアメリカでは唯一人のノーベル賞を得た物理學者であります一見取つきにくいテイピカルのユダヤ人の樣に見へますけれど實に溫和な人格者紳士であります年齒すでに七十有五歲でありますけれど今尚其專門の光學の研究振りは實に壯者を

しのぐ位であります運動のシーズンがはじまりますとテニス等ずい分さえたる腕を表はします私等はいつもラブゲームで負けであります其精力の絶大驚くものがあるのです。アインスタイン博士の相對性原理が發表されますと間もなくマイケルソン教授は改めて其實驗證明を確然と提出せんものと直ちに其準備に取かゝりました其頃私はライアンソン物理學教室にあつて同大學

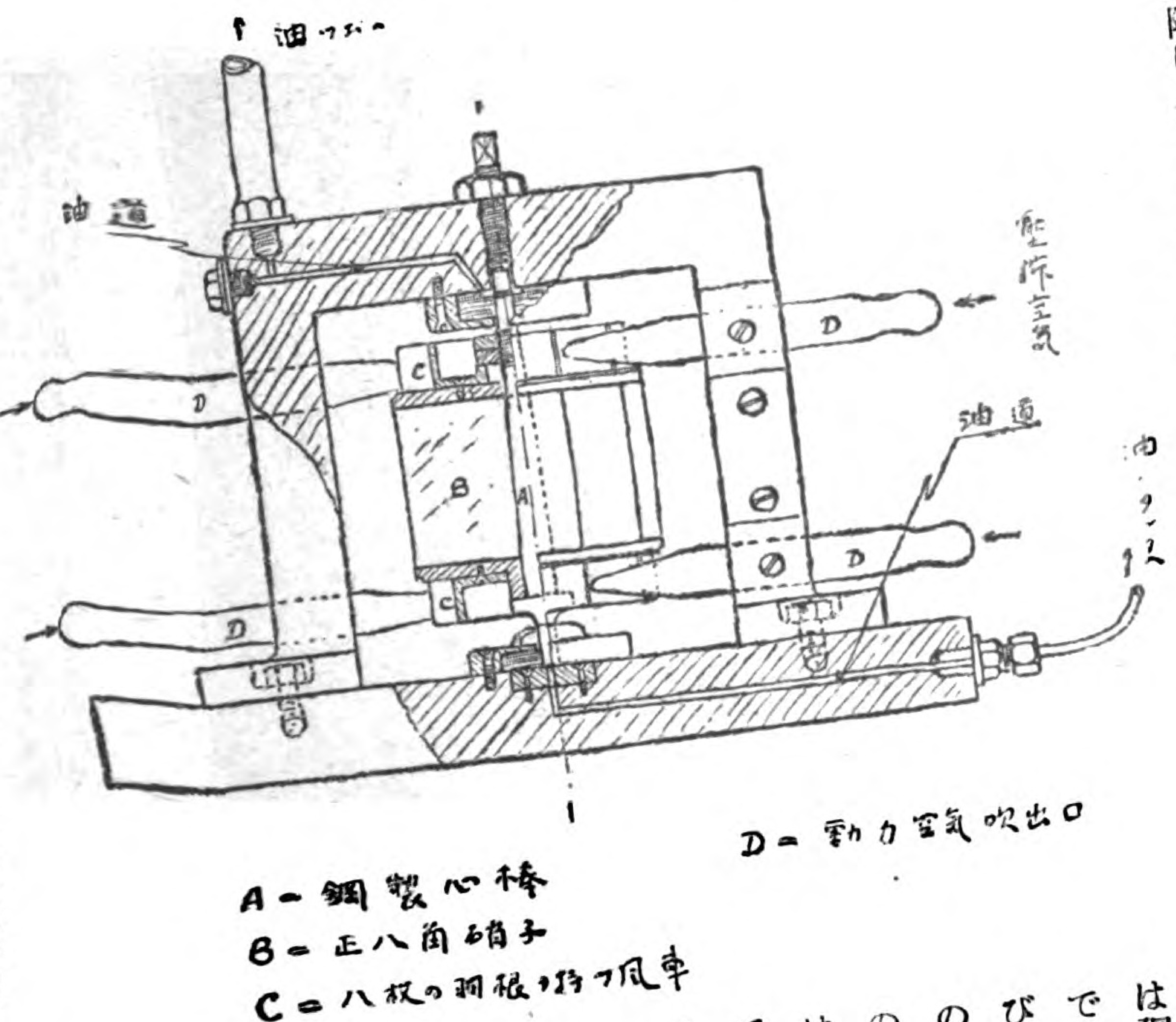


シカゴ大學博士室に於ける
マイケルソン教授

内に於て新らしく研究に使用する新案器械装置の設計及製作を實習しかたはらマイケルソン教授の助手として同教授が多大の金を掛て研究して居つたグレーティングを目盛る爲に用ゆるスクリュー（螺子）の切削研磨を研究して居りましたがマイケルソン教授は上記の相對性原理證明に關係した機械装置の製作を全部私に委任されました。不幸其證明の爲の實驗はシカゴ大學を離れてカリフオルニア洲のパサデナにあるマウントウイルソンの氣象臺で行はれましたので親しく目撃するを得ませんでしたけれど教授が實驗の一部を終へて其年の秋シカゴ大學内マンテルホールにて一般に其經過の報告をされた時にはシカゴ大學は勿論關係者一般に其學者ある事を今更の様に喜こんだのであります。

私は今左にマイケルソン教授の依頼によつて製作した上記の器械について大畧申上げたいと思ひます。挿入いたしました圖は唯側面圖のみで極めて不完全のもので了解し難い點もあると思ひますが要するに八角のプリズムBを八枚の羽根を有する風車の取附けられたる精密なる圓板にて心棒（心棒の仕上げには極力の注意を要す）A

に取附け上下よく調制したる軸承にて支へDなる四本の吹きつけ口より一定不變の壓力及量ある空氣を送りそして或時間中ユニフォームに廻轉を續けると云ふのが大體のプリンシプルであります。此のインストリユメントの製作の上一番困難の事は廻轉數が非常に大である事で一秒間三百乃至五百を要する事であります。輕くて小型のものなれば遠心力によつて心棒が飛び切れる等と云ふ懸念もないけれども何分直徑三吋の厚さ二吋の八角プリズムを心棒に取附けて而も一秒間四百の廻轉をさすのですから其車に極めて小量のアンバランスドがあつても心棒は飛び切れプリズムは飛散するおそれがあつたのであります其爲十分注意に注意を加へて理想的に車の（プリズムを勿論取附けた儘）、バランスをよくしました。



而し萬一飛散した時の危險を思つて、器械全部を鐵板製の箱の中に入れ其箱の廻りには二ケ所廻轉を取しらべる爲の穴をあけました。つまり一つの穴より光源を入れ車の一點よりその光又は像が反射して他の一つの穴より出ます其出た像を音叉の一端のミラルと一致さして廻轉をしらべたのであります。

廻轉數が常に同一を保つ爲には一定不變の壓力と量との空氣が必要なので風の吹き附け口より出る迄に空氣は特種の安全瓣の裝置によつてよく調節されたのであります。

尚注油は普通の方法では無論駄目な爲これも特別の方法を用ひ車全體はスラストに熱を持つ事を考へて下部より油の壓力によ

つて浮かした事等珍らしい試みです。

斯くして準備も整つたので空氣を送つて廻轉いたしましたが所要の廻轉數の一定を得る爲には吹きつけ口の改良安全瓣の新工夫等いろ〳〵困難もありました。幸に心棒もプリズムも飛ばず目的の廻轉數を得ました。軸承は、新らしい試みによつたものですから、斯く多大なる廻轉數にも少しも燒けず又少しもゆるくなる等と云ふ事がなかつた事はむしろ不思議に思ふ位であります。

目的通りの廻轉にて此機械が實驗の好成績を得た時のマイケルソンのよろこびは、私のよろこびよりも數等增して居りました。教授は間もなく其夏（summer uater）此機械を大切に特別の箱の中に丁寧に荷造してスートケースの樣さげ手をつけ自ら自動車なりステーション迄運んで少しも他人の手を借らないで實驗地のパサデイナのマウントウイルソン氣象臺へ持ち運んだ事によつても其よろこび滿足の程が察せられます。

マイケルソン教授は上記の器械の外にインターフエルメターも、かつて私が教授の希望で造つたものをも持つて行きました。

斯くして此器械は前後三ケ月余を費して出來あがりました。其後引き續きグレーティング(grating)を目盛る機械のネジについて研究を續けスクリユー一本の製作のみに、約二ケ月の日數を要し更に研磨及インターフエロメターのテス等を了して完全なスクリユーを得る迄には六ケ月を要します。グレーテイグは物理學の研究用其他に重要な使命を果すものでスペキユラムメタル（Speculum Metal）（銅と錫との合金にて硝子の如く硬くもろし）の表面を光學的に平面又は圓孤を有する凹面となし其面上に極めて鋭いダイアモンドの刃物にて一時間二萬本迄の間隔のユニフオームの線を引いたものでこれに光をあてると分光して反射する性質を有するものであります。これの大きさは線の引いてある部分の長さを以て表はしますが長くなればなる丈製作上困難となります。要するにグレーテイングの製作上には機械的に調制し得ぬ幾多の困難があります、斯く私共は常に學者の研究の爲其缺くべからさる器械及裝置を提出する役目となつて居りますが此技術の優劣によつて研究上良不良の結果をもたらす事は言をまたない事であります、物理科學者と手に手を取つて常に新研究の方面に進む私共は幸福であります。

双明星と見たるプランクとアインシタイン

愛知敬一

一

伯林大學の實驗物理學は、とても英國劍橋の向ふをはれない。夫れにも關はらず、理論物理學では世界に議論の花を咲かす中心が伯林たるの觀あるは、實にプランクの量子說と、アインシタインの相對原律とあるためである。此點からプランクとアインシタインとを双明星と觀て差支あるまい。

勿論プランクとアインシタインとは年から云つても廿餘も違ふ、經歷も性格もまるで正反對である。只研究に於ては兩々相扶けて離れ難い關係がある事は、恰も連星が互に引き合ひつゝ廻轉して居るのと似て居る。此點から云へば双星と云ふよりも連星と云ふ方がふさわしいかも知れない。

併し伯林の學派の主將はプランクである。慧星とも云ふべきアインシタインの出現を眞先に見つけたのもプランクなら、此慧星が獨逸から逃げ出して瑞西、果ては墺太利とさまよひて居るのを捕へて伯林に引き戻して相手の連星とした腕前もプランクなのである。プランク無くば今日のアインシタインありしか疑はしい。又アインシタインなくばプランクの量子說が今日の如き隆盛を見得たかも疑はしい。確かにプランクありてのアインシタイン。アインシタインありてのプランクで相離して考へる事は出來ない。

古い所で云つたらゲーテ、シルレルとでも比較してよいか。否なプランク、アインシタイン相知るの深きはゲーテ、シルレルの夫れ以上と思はれる。

併し取りあへずゲーテに相當するのはプランクで、學者の家に生れ、はやく秀才の名は高く、類稀れな早い出世をした所は、ゲーテが富裕な家に生れて早くワイマール公の知遇を得たのと何ぞ其の似たる。アインシタインがあれだけの才力がありながら不遇の位置に立ち居る事も、亦其の精力の絕群で突擊的で、やゝともするとプランクをも拉して行くの觀ある、亦何ぞシルレルに似たる。

理論物理學に於ては哲學の如くに其人の人格の影響は受けない。併しアインシタインにはアインシタインの遣り口があり、プランクにはプランクの流儀がある。先づプランクの傳と研究との大概を述べて、アインシタインが相對原律を出した一九〇五年に及び、夫れから筆を戻してアインシタインの傳を述べ、一九〇五年以後に至りては兩々相例べて研究を述べて行かう。

二

マックス、プランクは千八百五十八年四月二十三日獨逸のキール市で生れた。父はキール大學の法律學の教授であつたが、プランクの伯父さんもゲッチンゲン大學の教授で獨逸民法を作つた有名な人であつて、不幸にも盲目になりた。此兩プランクの祖父さんもゲッチンゲン大學の神學の教授であつた。

プランクが九才の時、父がミュンヘン大學へ轉任したので、同地で教育を受け早く秀才の名は高く、廿一才にしてドクトルとなり、夫より同大學の講師になつた。

廿七才でキール大學の助教授に招かれた（普通助教授になるのはどうしても三十五、六になるが）其中伯林大學の理論物理學の教授のキルヒホフが死んだので、結局其後任に招かれる事になつたのが三十二歳の時で、初めは助教授であつたが、間も無く正教授になり、引き續いて今日に及び、伯林否獨逸の理論物理學の泰斗として、恰もオリュムポス神の如くに鎮座して居る。

伯林大學には理論物理學の教授一人、實驗物理學の教授一人で、プランクの赴任した時の實驗物理學の教授は有名なヘルムホルツであつたが其後數回代りて只今はルーベンスと云ふ人である。

聞く所によれば初め物理學を專攻せんか、音樂者にならうかと考へたとの事で、今日から見れば物理學を撰まれた事が何の位學界の幸であつたか測られない位である。然し今日でも音樂は好きで、殊にピアノが上手で、私邸に宴會の時等はよく彈かれる。私も度々聞いたことがある。また伯林大學にはヘルムホルツの作つた理想的なピアノで非常に複雜したのがある、之れも上手に彈かれるとの話である。

今一つの趣味は旅行で夏になると山登りをする、學校の休みには何時も旅行する。之れも健康を考へつゝ勉强さるゝので用意周到たることの一例である。

三

プランクはスラリとして丈けは高い、顔も稍長く、色は白い、人品もよい。只頭の眞中がもとからまん圓に禿げて黒板に式でも書く時には殊に目立つ。

大學の講義は大抵九時から十時で、九時に教場に來て帽子をとり外套を脫ぎて、ノート無しで講義する。明晰である。ゴタゴタしたことはやらない、氣が利いて居る。此講義の二三のものは既に本になつて居る。講義が濟むと外套を着て帽子を被るが速いか出て行つて汽車に乘て家に歸つてしまう。

講聽生は二百人以上もあつた(十年前)演習と云ふのが一週一回一時間であつて宿題であるが、此答案を見て秀才には直ぐに目星をつけて置くらしい。

家は伯林の郊外のグルネワルドにある。小奇麗で書齋には一方に書棚がありて雜誌等一杯で、餘つたのはちやんと積んである。大學へ來る時は黑い服黑い帽子と云ふ出で立ちで何となく坊さんの樣であるが、自宅ではしやれた洋服を着て居る。學者ではあるが常識にも富み政治家風の腕前もある。前カイゼルの御氣に入りのやうであつた。

四

プランクの研究は今日迄四十餘年の永きにわたり、且つ初めから終りまで一貫した問題をやつて居るものではなく、有望の問題と見ると之れに乘り換へると云ふ遣り口なので幾つかの時割に分ちて考へる方が都合よい。

勢力學研究の時代(一八七九年—一八九三年)

ドクトルの論文が熱力學の第二則であつて此後十四年間した論文は數に於て廿有餘であるが、殆んど全部熱力學に關るもので、其内エントロピーの增加に關する四つの論文が重なるものである。熱力學の講義(一八九七年第一版で版を重ね新版には最近の研究迄附け加えてある)

此の外一八八七年ゲッチンゲン大學でエネルギー不滅則に關する懸賞論文を募集した時、當選したのを後に本にしたのと、ラーデンブルグ化學字典の熱化學の章を別冊にしたものとがある。

熱力學の樣なキチンと公理的に行はれるものが、プランクの趣味に適するので又純料な熱力學だけで何處迄論じて行けるか、何處で新しき假定と入れなければならないか。と云ふやうに考へて行く。從ひてカルノーのサイクルと云ふ樣なものよりは熱力學ポテンシアルでやるのを好む。

併し熱力學のみに明るいと思ふと間違ひで物理學の各科はもとより、實驗の結果に至る迄委しきものである。唯無暗に手を下さないで最有効と思ふ方だけ選んで之れに集中すると云ふ賢いやり方なのである。

熱力學の流儀だと物質の構造に立ち入りて原子、分子と云ふやうなことは考へない。夫故オストワルドのエネルギー流と近

い様に見えるけれども、プランクの目には熱力學の流儀の缺點も明かに判つて居るので一八九五年リユーベツクで開かれた自然科學會ではオストワルドの說に反對した。實際後になると原子分子よりも今一歩進んだ量子說をさへ出すに至つたのである。

五

輻射研究の時代（一八九六年—一九〇一年）附（一九〇二年—一九〇五年）

電磁氣學が段々と發達して來た。電磁波の波長の短かいのが熱や光であり、又光や電磁波を總稱して輻射とも云ふ。それで或る物體の溫度を高めて行くと、輻射を出すが此輻射も波長で分けて行つたらどの波長のがどの位の强さになつておるか。又或る物體と云ふ代りに代表的な黑體を取つた場合にはどうか。之れが黑體の輻射の問題と云はるゝもので此の頃諸學者の研究の的となつて來た。一八九六年ヴイン（現今ミユンヘン大學實驗物理學教授としてレントゲンの後任者）は電磁氣學と熱力學とを結んで先づ輻射の一般の法則を出し（此法則で後にノーベル賞を得た）又之れに或る假定を加へて黑體の輻射の法則を出した。之れを見るやプランクは此方面の研究の前途有望なことを見拔きつたので之れから五年間と云ふものは左にも右にも顧る所なく一心に研究して廿餘の論文を出し、其終りのが有名なプランクの黑體の輻射の式で、之れを出すにつきて初めて量子說を加へたのである。

プランクは先づ振動子なるものを考へる。之れが振動すると輻射を出し、適當な輻射があたると其のエネルギーを吸ひて振動を初めるもので、つまり物體の輻射に對する代表物で然も最も簡單なものである。此振動子が球面の形をなせる輻射の中心にある場合を手初めにして、任意の輻射の場合に及び、輻射を吸收又は射出する狀態を考へ次ぎにエントロピー最大の條件から黑體輻射の式を出すと云ふ順序で進んで行つた。

プランクの初めの考へでは之れでヴインの黑體の輻射の式を正々堂々と出せるものと思うたらしい。所が獨逸國立研究所の諸學者の實驗が進むに從ひて、上記のヴインの黑體の輻射の式は一般には合はない。輻射の波長の小なる場合か、溫度の高い場合にのみ實驗に合ふので、波長の長い場合等にはレーレー男の出した式がよく合ふと云ふことになつた。

そこでプランクは輻射のエントロピーの式を少し一般にして定數を二つ入れて黑體の輻射の式を出した。之れがプランクの黑體輻射の式と云はるゝもので、波長を短かいとすればヴインの式となり、長いとすればレーレーの式になり八方美人式のも

ので、從ひて實驗とは合ふものである。之れは一九〇〇年十月十九日の獨逸物理學會で大體を發表し、共十二月十四日の會で上記の黑體輻射の式を出すのに量子說を入れた方法を發表した此日が量子說の誕生日として物理學會史に殘る可き日である。量子說をば上の振動子の一秒間の振動數をνとすると其輻射を吸收又は射出するのはエネルギーの値が丁度$h\nu$（Hは一定の數として）なる時だけだと云ふのである。普通に考へればHは零でよさそうであるが、そうすると黑體輻射の式はレーレーのになりて實驗に合はない。何故斯かる假定を入れなければならぬかと云はれたならプランク自身も返事に窮したであらう。實驗に合はせるには斯くせなければならぬと云ふの外に理由はなかつたから。斯樣に量子說を出して使ひては見たもの〻量子說なる赤兒の前途は有望のものではない。追ひて研究の進むに從ひて次第に消え去る可き運命を持ちて居つたのである。

　プランクは一九〇六年に熱輻射論（新版は非常に改正してある）と云ふ本を出した之れは別として一九〇〇年後一九一一年に至る迄十年間と云ふものは全く量子說に手を觸れなかつたので他の學者の態度を傍觀して居つた。之れはプランクとしては最も賢いやり方であつたかも知れない。併し此儘であつたなら再びプランクは量子說に手を着けなくて量子說なる新生兒は育たなかつたかも知れない。量子說に新しき生命を與へたのは實にアインスタインで比熱の研究に之れを使うたのが動機になつて諸學者の手を着くる樣になり、量子說の今日の隆盛を見るに至つたのである。

　一九〇二年以後プランクは輻射を論じた方法を光學にはめて白い光の樣子や、ドルーデの光の分散論を輻射や物質の構造の方から完成したり、金屬の光學を研究したりして居つた。

　其中一九〇五年にアインシタインの相對原律が出たので、之れを動機のプランクは相對原律の研究に向ふたのである。

　成る程プランクは新機軸を出す點に於てアインシタイン等に及ばないかも知れない。一代の正宗として才力溥しと云はれても仕方ないかも知れない。併し此少ない才力を使ひて巧にやつて行く所は確かに偉い。天才的でないかも知れないが人巧的の極に達せるものと云ひて宜からう。何う云ふ問題が發達すべきか。どう云ふ人が見込があるか決して見誤らない。

六

　アルベルト、アインシタインの生れたのは一八七九年（明治十二年）三月十四日で獨逸ウルムと云ふ市である。ウルムはスツトガルトより、東、ミユンヘンに寄つた方にある人口五、六

萬の小都會で、シルレルの生れたマールバハよりあまり遠くはない。それよりアインシタインの生地として似つかはしく思はれるのは、ウルムに名高い御寺があつて大きさに於てはケルンの御寺に次ぐと云はれて居るが其塔は高さ百六十一米で獨逸第一である。それに此塔はアインシタインの生れた後に落成したのである。

併しアインシタインは此市で大きくなつたのではない。小兒の時兩親に連れられてミュンヘンの郊外に移つた。御父さんと云ふ人は幾分放漫な樂天家であつたらしい。

アインシタインは小兒の時口をきき出すのが遲かつたり、文字の記憶がよくなかつた。それにはにかみやで鋭敏な兒だとか天才だとか云ふ様には思はれなかつた。

猶太人なので家では猶太人教で、小學校では基督舊教で小學校では猶太人が少なかつたので幾分負けない獨立した氣分も出て來た。其中ルイド ボルト中學校へは入つたが 其軍隊式の規則づくめの教育は好まなかつたらしい。然し古文學は好んだ。

算術の問題を解くことは小さい時から上手で叔父さんのヤゴブが代數とは怠惰者の學問で「或る數が判らなければ之れを先づXと呼んで恰も判つて居るものゝ如くに考へられた問題の關係を式に書き、夫れからあとでXをきめる」と云ふて話した。これだけで代數を覺つた。幾何も自分で學んだ。十五才の時には解析幾何學、微積分學の初歩を覺えて大學には入る位の數學は出來て居つたと云ふ教師の話である。

十五才の時一家が伊太利のミラン市へ移つた。半年位の間は學校へも通はず景色のよいリビエラ邊を遊んで歩いたし、又伊太利のうらゝかな空や自由な氣風が大分御氣に召したと云ふことだ。

之れも永くはなく又瑞西に移つた。アインシタインはツーリツヒ市の工藝大學(普通の大學と並びて建ちて居り設備等は大學よりも反つてよい)には入らうと思うたが、現代語學や、博物學の知識が不足なので、アーラウの中學に一寸はいつた。瑞西の自由な氣分に滿ちて居つて此中學は大變氣に入つた。

此頃動ける物體内を光の傳はる様子を考へた事がありて、之れが後日の相對原律の發端だと云ふ話である。人が此事をアインシタインに尋ねても強いて否定しないと云ふことである。ついでに述べると、ヘルムホルツも十六歳位の時エネルギー不滅則を直覺し、後にこれをまとめて論文を書いた。

七

教師になるつもりで工藝大學の師範科とでも云ふべきに入學して、十七才より二十一歳まで學んだ。此工藝大學の教授にミ

ンコウスキーと云ふ猶太人で有名の數學者が居つた。後にアインシタインの相對原律から時間空間を括めて四元のものとする論を建てた人であるが、面白いことには、此のミンコウスキーが生徒であつたアインシタインの能力を少しも認めなかつたことである。又アインシタインの相對原律の論文もあまり重く見て居らなかつた。ミンコウスキーは電子說の大家ローレンツの續きを自分がして居る樣に考へて居つた。ミンコウスキーは其後ゲッチンゲン大學の教授となり一九〇八年末に死んだ。

再びアインシタインの話に戻るが此頃アインシタインは家の暮しも樂でないので非常に節儉をして居つた。又卒業してから物理か數學の教師の助手にならうと盡力したが採用する人がなくて何處でも斷はられた。之れは宗教が猶太教だと云ふことも一つの原因であり又國籍が瑞西でないと云ふことも、一つの原因であるが、龍も水を得ざれば登天出來ないものでアインシタインも內緣に生徒を教へて僅許りの禮を貰つて居つた。

廿二歲の時に滿五年間瑞西に住んだのでツーリッヒの市民權を得、友人のグロッスマンの御世話で其翌年から特許局の技手になりて特許出願の調をして僅かの月給を貰ふことになつた。後に一般相對原律をアインシタインが研究する時此グロッスマンが數學の部分の相談相手になる人である。

八

此處で一寸アインシタイン君に御尋ねし度い。シルレルは病氣と僞りて陰鬱な病室には入り、暗い燈火のもとに天來の詩想は湧くが如く「群盜」の稿は成れりと云ふがアインシタイン君も特許局の簿書叢裏にありて其思想は液體中のガンブーヂの小粒を追ひて左に右にと活動し、斯くしてブラウン運動の狀態を明にされしか。

シルレルは高い柏の木の根本に躊躇して自らカール、モーアを氣取り、友人の群に圍まれつゝ口に泡を飛ばして得意の句を朗讀せりと云ふが、アインシタイン君も晴れたる日にツーリッヒ湖上白鷗飛ぶ邊にヤットを浮べ右に音樂堂を望み左に大學の講堂を見つゝ、相對運動を瞑想されしか。

シルレルは軍隊の制服を脫ぎて平服となり、我家に悲しむ母や妹を思ひつゝ夜逃亡し、之れより三年の間轗軻落魄を極めたと云ふが、之れは蓋しアインシタイン君に於て比較すべきものは無からうと思う。若し强いて比すべきものを求むれば、シルレルには友人のシュトライヒエルあり、アインシタイン君には理論物理學の研究を共にせる令夫人（後に離別せし）ありとも云ふべきか。

九

アインシタインが理論物理學の研究を發表したのは一九〇五年が初めで此時廿六歳、一番初めの論文は光のエネルギーが波面一様に散りて居らないで塊まりになつておると云ふ論文で、次のは液體内の小粒子の運動の論文（即ちブラウンの運動と云はるゝ）であり、第三番目のが相對原律ので（今日で云へば特殊相對原律の論文）之れに關連したエネルギーと質量の論文が第四番目で、尚ドクトルになつた論文の「分子の大きさの新しき決定法」と云ふのがあるが、之れは翌年になつて發表せられた。此等の研究を發表しても未だ世間では中々アインシタインなるものを認めなかつた。併し只一人相對原律の論文を讀みて感服してわざ〳〵手紙をよこして賞讃し且つ熱誠を込めて研究を奨勵した人がある、誰であるか、當時獨逸の理論物理學泰斗でオリュムポス神の如く鎭座しましますと述べたプランクである。之れがアインシタインの貰つた最初の賞讃であり同時に最大のものであつたに相違ない。實際之れで自信を得て研究を進めたであらう。

プランクは伯林で講義をして居つたからアインシタインは聽いたことはあるまい。従ひて門弟ではない。アインシタインはプランクに面會したことも未だなかつたと思ふ。細心なプランクのことであるから論文を見て、書いた人はどんな人かと調べたかも知れない。併し特許局の技手と云ふことを知つたに過ぎなかつたらう。又ツューリッヒ工藝大學の教授に聞き合せたにしろ、ミンコウスキーあたりなら、あまりよい返事はしなかつたに違ひない。

夫故プランクの感心したのは全々論文の内容にありと云ふてよい。其論文と云へば僅か十ページばかりで六ケ敷い式があるわけでもなければ精巧老練とも思はれない、若々しい筆で書いてあるのだ。

アインシタインの全集が日本文で出ると云ふから大變喜ばしい。此論文も皆さんの目に觸れる日も遠くあるまい。

されぱと云ふてプランクは無暗に人を賞める人かと云ふとそうではない。最も冷淡な人と云ふてよい。只有望の人にのみ注意するのである。

プランクはアインシタインの論文を賞めたゞけではない。翌年には其續きの研究を發表した。物理學の泰斗がドクトルになつた許りの人の發表した跡をやると云ふのも妙に思はれるが、事實然りである。實際此後數年間はプランクとアインシタインと研究問題を取り換えたと云ふ有様で、プランクの云ひ出した量子説の研究を續けて居るのがアインシタインで、アインシタインの相對原律のあとをやつて居るのがプランクであつた。

實は此頃相對原律を信用して居つたのはプランクと其門弟のみと云ふてよいので、之れを賞讃して研究して與れる人があつた事がどの位アインシタインの後の研究をなす後援になつたか判らない。

一九一〇年頃私は伯林に居つたプランクの話を度々聞いた事がある。プランクは極力相對原律を賞讃して居つた。アインシタインの外、プランクの賞めて居つたのはラウエで以前プランクの助手をして居つた人である。然るに此後三年もするとラウエはX線の廻析の大發見をやつた。成る程プランクは人を知るの明ありと思うた。

一〇

ゲーテ、シルレルの交遊の深き翰林千載稀に見る所だと云ふが、成る程交遊成りし後は、互に尊崇したるに違ひない。然し交遊の成る迄の經路は中々永い。

一七七八年九月七日にゲーテはシタイン夫人とルドルシュタットに來てレンゲフエルド家に訪ふた。シルレルと終日席を同じうして談じた。シルレルはゲーテにつきて總ての點に於て感心したと云ふが、ゲーテは伊太利に旅行して新生に入りシルレルの樣な狂飈時代の奔放な趣味を好まなかつた。さればと云ふて進んで、シルレルを高き趣味に導かんともしなかつた。シルレルは此時既に「群盜」「ヅイエスコ」「たくみと戀」「ドン、ユアン」や「希臘の神々」を出して居て大家であつた。

其後シルレルがイエナ大學の助教授になるにつき、ゲーテが盡力はした。然しゲーテはモーリッツ等の群小には懇切に世話したが、シルレルをば毫も顧みず、終にシルレルをして恩を賣りて人を羈束し、自ら免れんとするものと、ゲーテを評するに至つたではないか。

シルレルが結婚してからもゲーテはイエナに行つた、シルレルを訪ねた。併し理解しなかつた。

其内シルレルは古代詩人を研究して醇化した。又一方でゲーテの舊友は多く乖きて來らず、ヘルデルも惡口を云ふたし、ワイマル公さへゲーテを利己主義の人だと評するに至つた。此の寂寞の時、然も場所はと云へば、イーナの博物學會で互に理解したのは、あまりに奇觀と見ゆる。

これは一七九四年七月十四日で、其學會で偶然時を同じくして出で〻語り、シルレルの家に至りしも話盡きず、室に入り、ゲーテは植物變態の理を解き圖を畫き、シルレルは「之れ經驗に非ずして觀念なり」と云ふたとの事だ、之れが端緒で友情を深くしたと云ふのである。

初めて面會してより是に至る迄六年の星霜は空しく過ぎて中

心全く相識らざるものゝ如くであつた。之れよりシルレルの死に至る迄十年。若しシルレルがワイマーに移りて日夕ゲーテと往復してより算すれば只に六年なり、何ぞ相識るの遲くして、相別るゝの速きやの歎がある。

一一

アインシタインが一九〇五年に初めて論文を出した所迄述べたが、中々世間では認めて吳れない。やつとベルンの大學の講師となり、三十歲でツユーリツヒの大學助教授となり、二年して俸給の關係上墺太利のプラーグの大學の正教授として行き、其翌年にはリユーリツヒ工藝大學へ正教授として戾つた。此時推薦したのは大數學者のポアンカレとラヂウム發見者のキユーリー夫人とであつて　ポアンカレは此頃になりてやつとアインシタインの硏究の偉大なことが判つたのである。

「今にアインシタイン君の事業の値のあることは段々と判つて來る。早く氏を採用した大學には此の人と關係がついた事を名譽とするに至るであらう」と云ふてリユーリツヒ大學へ推薦した。

併し二年たつかたゝずに一九一四年春にはアインシユタインは伯林へ行つてしまつた。これはプランクが盡力して化學者フアントホツフ（和蘭人）が伯林に來て學士院員であつたのを後任とし、又カイゼル　ウイルヘルム硏究所の物理部長兼伯林大學名譽教授と云ふのに地位を作つて吳れたが爲めでもあらうが、實はプランクの個人の引力による所が多いのは勿論である。此關係は「北の都府の强き磁力に引かれて一度スプレー河を渡りしまゝ、再び歸らず」と或人は書いて居る。之れで伯林には二明星は連星となつた。

其翌年にアインシタインは一般相對原律を大成して伯林で發表して學士院の記事に出した。

一二

一九〇五年から一九一〇年に至るプランクとアインシタインとが硏究問題を交換した時代のことを述べて行かう。

アインシタインの一九〇五年に發表した相對原律は今日の言葉で云へば「特殊の」であつて、互に等速運動をして居る統系の電磁氣現象の論である。此論文の大發見である事を第一に認めたのはプランクである事前に述べた通りである。

プランクは此原律に述べてある事は簡單な樣に見ゆるが、實は非常に一般なもので只に電磁氣現象のみならず、他の物理現象にも亦成り立つ可しと見て取つた。それで翌年には之れを力學にはめた論文を發表し又一方ではカウフマンの實驗（e/m の値の）が相對原律に撞着するかを注意し居りて、實驗の結論の批評にさへも手を下した。

いよいよ有望と見るや、プランクは一九〇七年から八年にかけて「運動せる統系の力學」と云ふ大論文を發表し、相對原律を力學から熱力學にさへもはめ、一方では最小作用律を持ち

出して物理現象を支配する最高の原則とした。此の方針で相對原律を彈性體や流體にはめたのがヘルグロッツ、ラウエで一九〇九年頃には既に特殊の相對原律は殆んど完成した觀があつた。それでアインシタイン自身は已に「特殊」でなく「一般のをやり出した」。實に面白いのはアインシタインの特殊相對原律と云ふか、アインシタイン自身でやつたのは初めの論文だけ（只十ページの）が重なので、之れからあとのことは總てプランクと其門弟とがやつたのである。

アインシタインのやり口は量に於て勝るのではなく、質に於て勝ると云ふので、誰れも氣のつかない樣な天來と云ふ可き考を大膽に入るゝ處にある。之れは時として誤つて居るかも知れない。プランクの樣な批評眼にも鋭い人の鑑定をへて確定する。併し此先きの細かい所は少しも手を下さない。

プランクは之れとは正反對である。上に述べた「運動せる統系の力學」の論文にしても、先づ門弟のモーゼンガイルに或る特別の場合を研究させる。其結果によりて研究の方針を定め、それから自分で手を下す。最も突撃し易い所を斥候に調べさせて力を勞せずして弱點を一氣に進撃すると云ふ風である。

斯樣にプランクの方で相對原律を研究して呉れて居る間に、アインシタインの方では量子説を研究した。アインシタインが一九〇五年に發表した光の論文が光のエネルギーは魂になつて集合して居ると云ふ説であつて、光化學の法則等を之れから出した。一九〇七年にはプランクのやつた振動子が有するエネルギーの溫度によりて變る工合を、其儘普通の固體の持つ熱エネルギーにはめて固體の比熱の式を出した。

之れから固體の比熱（殊に低溫度の場合）の研究が盛になり終に理論ではデハイの式になり、實驗ではネルンストと其門弟の研究となつた。それで何れも量子説の非常に有力なるものなることを確めた。

三

一九一一年には量子説につき學者達がブルッセルで會して議論した年であるが、又此年からプランクは量子説の研究に戻りアインシタインは相對原律の研究に戻つた年で、特に記憶するに足る年である。

プランクはエネルギーの量子よりも作用（エネルギーに時間を乘じたるもの）の量子に重きを置き初めたるも此年なり。振動子がエネルギーを吸收する場合には絶えず連續して吸收し、射出する時にのみエネルギーが一定の値（$h\nu$又は其倍數）に達したる時にのみなすと云ふ説を出したるも此年である。

續いて一九一三年にはボールが原子の構造に量子説を入れてスペクトラムの説明を巧になしたるを動機とし、量子説はスペクトラムの境界にも入り、プランクは振動子よりも實在的で數多の自由度を有する物體に對する量子説の論を發表し續いて振動子の代りに廻轉子を用ひて吸收スペクトラムの説明をなし斯

くして量子說は物理學の殆ど全部に其勢力を擴ぐるに至つた。

尙プランクは一九一〇年にコロンビア大學でなしたる理論物理學の講義(英譯あり)、祝式等に際し物理學の大勢等を論じたる稍通俗の講演を集めたる集あり。發表せる論文は通算して百二三十を超える。

一四

アインシタインが初めての論文を出してから今日迄十七年、此間の研究は種類から云へば初めから一貫して居るので、プランクの曲折があるのと非常な相違である。

(一)ブラウン運動は一九〇五年以後に訂正した個所もあり。進行運動から廻轉運動に擴張した個所もあるが大體二、三年で完了し佛國のペランの實驗で確まつた。

(二)光のエネルギーの様子に關する研究は、一九〇五年以後にも續くが、アインシタインの重な研究は量子說の方であつて一九〇七年に發表したプランクの振動子の式を比熱に使ふたものや、一九一〇年にホツフと共同で發表した運動せる振動子の場合の輻射の論や、一九一二年に發表した分子の壞散に確からしさの計算を用ひて黑體の輻射の式並に量子說を導びいた有名な論文、それから其の翌年スターンと共同で發表した絕對溫度零度の時のエネルギーの論文等がある。

(三)相對原律に關した論文は全く出さなかつた理由ではないが、大したのは出さない。放射能年報の一九〇八年に委細を述べた五十ページの論文がある位で、此方面はプランクと其門弟のやつて呉れるのを傍觀して居つた。

特殊の相對律が大體完成するや再び此方面に向いて來て一九一一年に「光の傳播に對する重力の影響」と云ふ大論文を出した。ページ數は十ページに過ぎないが、後になつて發表する一般相對原律の種子は全く之れに含まれて居る。即ち「一様な重力場での自然現象は、重力なき場所に於て上の重力場の生ずべき加速度を以て反對の方向に動ける統系に於ける自然現象と同じ。』と云ふ相當原律より出立して、重力場で時計の進みの變る事や、光線の曲がる事迄も出した。

特殊の相對原律は互に等速運動をなせる統系に於てのみ成り立つものなるが互に不等速度(即ち加速度を有して)運動をなせる統系の場合に、之れを擴張するのはアブラハムやノードストロームも時を同じうして論じ初めた。それでアインシタインとアブラハム等の間にも議論もあつた。併しアインシタインの說の群を拔けることは云ふ迄もなし。不等速度運動をなせる統系に於ける相對原律は數式を要すること多き故友人なる數學者グロスマンの扶を得一九一三年には両人にて四十ページ位の小冊子「相對原律と重力說」を出版した。翌年に招かれて伯林へ行くと直ちに學士院の記事へ「一般相對原律の形式上の基礎」と云ふ五十餘ページの大論文を發表した。

尙翌年に一般相對原律五十餘ページを一括して物理年報にも

發表した（別册にもなり居るもの）。此頃に和蘭の電子說の大家ローレンツや、獨逸の大數學者ヒルベルト、クライン等も諸方面より研究し出した。アインシタインは尙進みて、宇宙間から、重力波、エネルギーの原則と進んだ。何れも伯林學士院記事に發表した。

（四）アインシタインの研究は此外のもなきにあらずで、分離せる瓦斯體内の音の傳播とか、光の分散とか云ふのも出して居る。又ハースと共同に發表せる分子内の電流が磁氣なりと云ふ小說と、其實驗等もある。

一五

アインシタインの講義は、私は聽いたことはない。面會したのは昨年三月二十二日で丁度伯林へ行つた折に、突然自宅へ訪問した。

客室には古風の望遠鏡あり、古い本あり、經天儀と云ふ可きものあり、隣室には猶太敎の御祭の道具らしいものも見えた。一寸占星術學者の室とでも云ふ樣な風であつた。

出て來たアインシタイン君は其前日學會で見た妙な人だと思ふた人であつた。黑い薄いズボンをはき、毛糸のジヤケツを着て居つた。隣の書齋に行きて机の傍で一時間餘り話をした。書棚には新しい雜誌位で餘り本は多くない。話は非常によく判る人で、樣子は學者と云ふよりは美術家とでも云ひそうな風であつた。併しバイオリンを少し彈く位で、文學などの趣味はあまりないのかと思う。

獨逸風のかた苦しい學者だと思うて居つたが、豫想に反して常識に富める人で實に驚いた。改造社の人等の訪問されたのも此の同じ室であつたかどうか。

それから次ぎに訪問した時には令夫人に面會した。從弟でエリゼと云ふ名で伯林に來てから結婚したので一寸京都式とでも云ふべき人形の樣な方であつた。

一六

プランク、アインシタインをゲーテ、シルレルに比して來たが、之れを獨逸人に見せたらプランクのゲーテは或は當らん、アインシタインをシルレルに比するは當を得ずとなさん、又之れを我國人に評せしめばアインシタインはシルレルに比して勝るとも劣ることなし、プランクはゲーテに比するは當を得ずとなさん。

然し事實に於てはプランク、アインシタインの交情はゲーテシルレル以上と云ふも不可なし。

只此比較にして當を得ぬものありとせばゲーテは八十餘才を越へてフアウストを完成したるもシルレルは不幸短命なりしこと是れを以て當らさるの點となさん。プランク已に年六十を越へて益々壯にアインシタインは齡四十五に至らず。前途多望にて恐らくは相對律と量子論とを打つて一丸となすの時あるべし

幾何學の物理學征服

理學博士　西内定吉

「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬となる」と云ふ彼の人口に膾炙せる古歌は何を語るのであるか。之れを、憂き世の變遷の果敢なさを詠じたるものと見るのは昔の見方で、吾々科學を研究するものは文學的に考へるよりも寧ろ之を理學的に解すると意味深長である。即空間の或る場所に時々刻々起る事件の變化の極り無きを述べたものである。凡そ事件を言ひ表はすときは之れに伴ふ時間空間を明にせねばならぬ。中學時代に英語の先生が口の酸くなる程云ふた event には when, where と云ふことを常に念頭を放してはならぬ。Newton 氏は時間と空間とは非常に異なるもので、恰も月と鼈との様に考へ、之れを決して同資格のものとは考へなかつたのである。其空間もユークリツド幾何の三次の元空間であつた。此のユークリツド幾何は、當時の數學者の經驗より抽象した幾つかの公理と云ふ材料で建造した宮殿であつて、皆之れを賞賛して唯一人として疑ふ者はなかつたが、十七世紀頃になつてから、ぽつぽつと其の中の平行線公理、即一平面上に於て一點より一直線に唯一本の平行線を引くことを得と云ふ公理を他の公理を使つて證明しようと試みるものが出來た。元より之は出來る筈のもではない。之に氣付いたのは露國の Lobachevski（ロバチエウスキー氏）匈牙利の Bolyai（ボルヤイ氏）であつて、Lobachevski 氏は、終に Riemann 氏の平行線公理をやめて、之を換ふるに、一點より一直線に恒に只二つの平行線を引くことが出來ると云ふ公理を以てし、Riemann リーマン氏は又一つも平行線が引けぬと云ふ公理を以てした、其結果二種の毛色の異つた幾何が生れて來た。之を夫々 Lobachevski 氏の幾何、Riemann 氏の幾何と云ひ、此等の兩幾何に Gauss ガウス氏は非ユークリツド幾何と云ふ名を與へたのである。此の非ユークリツド幾何に於ては、一寸奇妙不思議なことがある。即三角形の三つの内角の和は Lobachevski 氏の幾何では二直角より小であるが、Riemann 氏の幾何では二直角より大きい、且 Riemann 氏の

幾何では直線の全長も平面の全面積も共に有限である。又三點を過ぎる圓周は四つあり、空間に在る二直線に同時に垂直なる直線は二本ある、球以外に二つの廻轉軸を持て居る Clifford クリフオド氏の面と云ふ曲面があり、平面には表裏がないと云ふ樣なことである。所で總て科學は經驗と實驗とより綜合した公理より演繹して定理を得るのである、然るに此の經驗、實驗なるものの範圍は實に大海の一滴に過ぎないのである。從て一體何れの幾何が吾人の實驗と經驗との空間に最も近いかと云ふに Poincaré ポアンカレ氏は之れは抑も問題を履き違へて居る、實用上には何れが便利であるかと云ふに過ぎないと云ふて居る Einstein, アインスタイン、Weyle ウアイル氏等が出てからは、成程物質が全くない空間は之れを Euclid 氏の空間と考ふるが便利であるかも知れないが、物質の存在する近傍即其引力の勢力範圍に於ては寧ろ Euclid 氏の空間でなく、非ユークリツド空間と考ふる方が便利である樣である。

一體事物を旨くやつてのけるには、其の根本の考へが善くないとだめである。即元の仕掛が肝要である。幾何に於てはこれ迄に知られて居る數の學を利用すると都合が善い、之れは佛國の大哲學者 Descarte (デカルト)氏が創設した坐標の御蔭である。氏の坐標とは例へば三次空間に於ては一點から三つの互に垂直である平面に引いた垂線の長さによつて點の位置を定めるのである、例へば京都で或人が居る所の位置を云ふときに寺町通四條上る二軒目の三階などと云ふ樣なものである、一般に坐標とは位置を云ひ表はす方便である、又地球上の點は東經何度何分北緯何度何分と云へば解る樣なものである。坐標は代數を幾何に橋渡しするもので 之れにより幾何は代數を利用し、代數も亦幾何により其の光を增したのである。Descartes 氏流の幾何より Euclid 氏流の綜合幾何の方が初學者にこそ便利であるが、深く幾何を研究するには之れは適當でない、其所で Descartes 氏の解析幾何がはやる樣になつたのである。Gauss 氏は Descartes 氏の直線坐標で滿足せず更に進んで曲面上の點の曲線坐標と云ふものを按出した、又 Gauss 氏は曲面上に在る曲線の微分を考へ其れより曲面の種々なる性質を論じたものであるが、Riemann 氏は逆に空間に在る曲線の微分より、出發して幾何學を創設した、此の曲線の微分より、出發する幾何學は餘り日本では數學を學んだ人にでも知られて居らぬ。

Coolidge クーリッヂ氏曰く非ユークリッド幾何學を研究するに三種の方法あり、第一は綜合的、第二は射影的、第三は微分的なりと。其の何れを採るが一層なるかは答ふることが出來ぬ、何となれば其の甲法に最善なるものと雖も乙法で最善と

はいかない、即互に長短相半ばして居るからである。尤も第一法は長たらしきも、歴史的にして之れに依れば初等的知識にて充分會得することが出來る。第二法は非常に美麗なるも射影幾何の素養を要す、第三法は直接法で且近路の方法であるけれども最初より坐標によつて點を定義せねばならぬ坐標が定まれば既に戰は半ばに終つて居るのであるから面白くない、然れど Russell ラツセル氏の言の如く近代の傾向は抽象的に空間を考へ之れを Multiple Series に配列することを得る事物の集合と見做すが故に斯かることは問題外である。故に是等三法の中何れを採るかは要するに個人個人の審美的嗜好に因るのである處が此の最後の方法は Einstein 氏に出でて益々便利と云ふことになつて來た。

話しが變るが、Newton 氏は質點の運動は時間に對する位置の變化と考へた。恰も米國あたりの成金が人の月給に據て其の人の人格から能力まで有らゆるものを判斷すると同樣である即時間は質點の位置を定め、金錢財產は人の位置を定むと云ふ樣な譯である。Newton 氏は斯の如き思想よりして、宿借蝦が螺の貝殼に宿る如くユークリツド空間と云ふ借家に宿り、自己製造の微積分と云ふ利器を、宮本武藏に正宗の寶刀を持たした樣に、自由自在に使つて物理學と云ふ城の樣な立派なものを築きあげたのである。其後 Lagrange ラグランジユ氏によつて益々增築されて熊本城も及ばぬ程の立派なものとなつた。其の爲力學も Euclid 氏の幾何が何千年間も人智を支配して居つた樣に何百年間も其の壽命を保ち得たのである。所でエーテルと云ふ絕對靜止のものの存在を確むる爲になしたる Michelson 氏の實驗は豫期に反したる結果を齎した。其所で其の說明に窮したが、窮すれば策ありで終に Einstein 氏は彼の有名なる二つの假定、即運動は相互のものであつて、且力學の法則なるものは定速度にて動く觀察者より見るも恒に同じ形に書き表さるべきものであつて、又眞空中に於ては光の速度は定速度にて動く觀察者に對しては恒に一定の値を有すると云ふ假定より出發して之を說明したのである。物窮すれば必ず轉ずとやら、斯くして出來た Einstein 氏の相對原理に追窮されては、一面より見れば流體又他の方面より見れば固體の如き一種奇妙不可思議なるエーテルも堪つたものではない、「幽靈の正體見たり枯尼花」で何うやら其の姿が無い樣である。此所に注意せねばならぬのは力學の自然法則と云ふものは、定速度の觀測者から見て同じ形に陳述さるべきものならざるべからざることである、斯くて始めて力學の自然法則と云ふ名が付けらるるのである。

Einstein 氏の相對原理は Minkowski ミンコウスキー氏に

よつて非常に美麗なる對稱の形に變形された。氏は時間空間を旨く、ひつ括つて高飛車に出て、時間と空間とが合して物理的世界の事件を定むるもので、時間のみでも空間のみでも不充分である。只蔭の様なものであると、然るに氏の考へによれば時間と云ふものは、虚の長さに匹敵するものであるが、實の事實に對して虚を考ふることは一寸可笑しい様に思はるるけれども

The real is but the shadow of ideal, the idea is but the shadow of real. と云ふ Moore 氏の格言を思出すと別にこんな事は怪むに足らぬ。氏の出發點は時間空間を斯の如くして一括し、總ての物理的現象は此の時と空間點との世界に於けるものであると考へた。此の考へによると、應學の波が活動寫眞の film と同じであると感心し、Lafrael の繪畫を稱讃しても、是等の時間が一定なるときの空間に於ける色彩のある圖形の平面上に於ける射影に過ぎない、故に未來派の畫の様に時間を入れた繪でないと、如何にしても承知が出來ない、即時間空間の色彩圖形の平面上に於る射影圖でなくては到底新物理學を學んだ人には頭へ這入る氣遣はない、今迄は未來派の畫が解らぬ人が多いにしても、將來は吾人が土佐派の繪の遠方に至る程開いて居るものを見て不思議に思ふと同じ様に今日の繪畫を可笑しく思ふであらう Le Roux ルルー氏の如きは時間空間を一括して四次元空間と考へたのは Minkowski 氏でなく、ソハ佛國學士會員 Hadamard アダマル氏其の人であると云ふことを最近着の雜誌に於て氏の論文中に書いて居るけれども、Hadamard 氏は Minkowski 氏の如く四次元空間の線分元素やベクトルの如きものを考へたのではない。Minkowski 氏の考に基くと運動せる質點の研究は、之れを時空間點の世界より見れば、結局一つの定まつた宇宙曲線の性質の研究である、それで此の宇宙線の彎曲の度合とか曲率とかと云ふ幾何學的性質を、丁度茶人が道具をひねくり廻して見る様に幾何學的に之れをひねくり廻して見ると宇宙線は質點運動の全歴史を語るものとなる。從て總ての質點の宇宙線を引くときは總ての時刻に於ける全世界の歴史を語ることになる。例へば既に知られて居る彼の有名なる立體微分幾何學の Serret-Frenet セレーフレネ氏の曲率に關する公式の一部分は質點の運動方程式並にエネルギー方程式である。又四次元ユークリッド空間に於て　原點の廻りの四次元空間の廻轉運動に對して變化しない關係の探索が即力學及電氣力學の仕事である。即 Lorenz ロレンツ氏の變更に依て不變である時空間の世界に於ける關係式は之れ四次元の廻轉運動の不變式であるのである。

然るに四次元空間幾何學的に質點の物理學を研究せよと云ふ

たところで、果して四次元空間の幾何學に左樣に進歩して居るものであるか如何か、と質問を發する人もあらう。幾何學發達の順序の歴史を見るに、二次元、三次元と云ふ樣な工合に進んで行き遂に直線を元素とする四次元の Plücker プリュッカー氏の幾何が出來た。當時は佛國の Legendre ルジャンドル氏等が數學界では幅を利かして居た時代であつたから、Legendre 氏は Plücker 氏は一體物理の先生ではないか、數學の事が如何して解るものかと相手にしなかつたと云ふ話である。又 Lie 氏は奇拔なる巧妙なる方法で直線と球との間に關係を付け、球を元素として四次元幾何を創設したのである。其他又三次元空間の定理の只單に一般化によつても四次元空間は隨分研究されて居る。四次元空間に浸された三次元空間では面白いことがある如何に堅固なる牢屋でも景淸の樣に之を破らずに拔け出ずることは容易であり、實に猿飛佐助の忍術も空想ではない。球は之れを破ることなしに裏へ返すことが出來、結節も之れを解くことが出來る。又結晶形は四次元空間の正多面體の射影となつて居り、正多面體は三次元空間には五つあるが四次元空間には六つあると云ふ樣なことは皆知られて居る。玆に注意すべきは只單に三次元空間と四次元空間中に浸たつてをる四次元空間とは違つたものであることである。此の關係は三次元空間の中にある二次元空間即平面と單に二次元空間とに大なる差違あると同樣である。例へば三次元空間中の平面上に一つの圓があるとしよう。其の圓の中にある點を一度外側に持ち行き更に之れを圓外に運べば圓周を突き拔くことなしに圓内より圓外に運びが出來る。然るに只一つの平面のみが全體であつたなら斯の如きことは到底不可能の事である。所で Einstein 氏は特種相對性原理を發表してから約十年の後自然の法則は觀測者が如何なる速度を以て動くとも之には無關係である形に表はすことの出來るものである、と云ふ特種相對性原理を一般化したものと相當公理即ち引力の勢力範圍は之れを坐標の變更に依て生ずる力の勢力範圍と何等の區別なしと云ふ假定を加味して既に佛國の微分幾何學の大家であつて數年前に沒した Darboux（ダルブー）氏の action（作力）の微分を四次元空間の線の微分で表はしてあつたのを利用し又伊國の Ricci（リッキー）氏及 Levi Civita（レビイチビタ）氏によつて創設せられた、（absolute differential Calculus）絕對微分法の武器を用ひて開闢以來未だ見たことのない仕方で此の面倒な數學を使ひこなしたのである、其の手際は實に偉大なるものである。Einstein 氏が出づる迄は自然の法則を方程式で表はし之れより演繹的に種々其の數學的變形である關係式を求めたものである。ところが氏は引力に關

する法則が自然の法則である以上は斯うなくてはならぬと云ふところから Newton 氏の引力に關する方程式を訂正して Eintein 方程式を導入したのである。其れでも之れが實驗の結果と相違すると何の役にも立たず改惡であるが、1919年の五月の廿九日Eddington氏一行が爲した觀測で其の理論と實測の結果が符合することが確められた、凡そ科學の研究方針は最初經驗と實驗とよりして綜合して假設を設け之より演繹して種々の結果を推論し之れを check する爲めに再び實驗を重ね、其の正しきを認めると進擊を續けるのである戰が敗れたら尾を卷て退去し更に大擧するの策略を弄するのである、Galvani（ガルバニ）氏の經驗と Faraday（ファラデー）氏の實驗とは終に Maxwell 氏電氣論となり Lorenz 氏の電子論となり Herz（ヘルツ）氏の電波存在の確立となり終に Marconi(マルコニー)氏の無線電信を生んだのである、けれども何時でも成功のみとはいかん Newton 氏の樣な大家でも其の光の放射說は Foucaux（フーコー）氏の實驗によつて直ちに果敢ない最後を遂げたのである、有名なる物理學者の態度は斯の如きものである、要するに物理學者は假定說に據り見込を付けて、只之れを check する爲めに實驗をするのである、此 check すると云ふことは繪畫でもさうである頭腦の中で描かんとするものを着想し之を畫面に表はすとき其の一部分一部分を check する爲めに實物を觀察し之れを寫生せぬと決して名畫は出來ぬものであると云ふ寫生のみをやつて大根や裸體の泥土人形の樣なものを畫いて居ても決して Venus や angel の樣なものは出來るものでないさうな、類似の實驗のみをやつて居ても恒に得物が得られさうにもない、何時も柳の下に鮒がゐるものではない。類似のみで實驗をやる位なら定說は何の役にも立たぬ、只哲學的物好きの理性を滿足さす一種の玩具に過ぎないのである成程 Röntgen 氏のX光線發見の如き偶然の得物も有るであらうなれども、之れは丁度狩獵者が野原の細道を行くとき鷹に蹴落された鴨を拾ふと同樣で全く偶然の出來事である。獵師は犬に追出さした鶉や兎を擊てば可いのである。

要するに Newton は數學を奴隸の如く計算に使用した物理は數學の善い御得位先であつた、が Einstein は氏の達觀した出發點よりして四次元の幾何學に使はれて物理を研究したのである、之れに依つて主僕が其の位置を轉倒した、今日では Lie（リー）氏の變更群論と云ふ一種の數學を利用して Klein（ライン）氏は幾何學を分類して幾何學も其の特性を失ひ數學解析と云ふ會社の支店となつてしまつた、即ち射影幾何は射影群又普通の幾何は合同群と云ふ或る種の變更を施しても變らない關

係式の議論探求に外ならぬと云ふことになつた、此の達觀した見方で幾何學を研究する順序と方針とがきまり、盲人が杖を探がす樣なやり方をせずに濟むことゝなつた、そうなると其の御蔭は大であるが却つて幾何學は一方から考へるとつまらないものとなつてしまつた、とも云ふことが出來よう、因て Klein(クライン)氏をして今日流行の物理學者が喧しくいふ特種相對性原理と云ふものはつまり Minkowski 氏が宇宙と名づける四次元の集合物の四次元の一種の射影群に對する不變式の議論に外ならぬのであると叫ばしむる樣になつた、實に然りで、力學及電氣力學は Lorenz 變更を施しても變らない時、空點と云ふ四次元點の坐標の間に存在する關係式の探求のことである之れが引力を除く外自然の法則を見出すことになる Killing(キリング)氏の研究によれば四次元の變更を施しても變らない獨立の量の數は限りあり只四つであつて他にありとせば此れは此等の函數即ち此等のみが株主になつて居る會社の樣なものに過ぎない、と、只物理學では如何なる不變量を出發量とすれば便利であるか又手取り早いかと云ふのが理論物理學者の仕事であらう、次に引力の法則に關しては四次元空間自身の數學的變形に對する不變の關係式探求であると云ふことになつて Gauss や Bonnet や Cosserat が曲面の數學的變形を論じた樣に之れに模範として四次元空間が寒天で造つてあるものを採り曲げ其の不變の性質を論ずると云ふ樣なことになる所で一體此の數學的變形と云ふものは如何なるものであるかと云ふと例へば曲面の變形とは之れを延び縮みがなく又破ぶつたりすることも無く只其の形ちを變へることである、そうすると此の曲面上の任意の二點を結び最短の曲線は此の面の變形の後に於ても矢張り其の最短性を失はない、曲線となるのである、即ち測地曲線は數學的變形に因て矢張り測地曲線となるものである、又 Gauss 氏は曲面上の點に於ける其の全曲率と云ふものを考へた、之れは曲面上の一點を過ぎる法線を含む平面での切口の種々なる曲線中曲率の最大なるものと最小なるものとを掛け合せたるものである Gauss 氏は曲面數學的變形に對しては應ずる點に於ける、全曲率は相等しい、と云ふことを發見して佛國では最高の數學賞金である Prix Bordin(ボルダン賞金)を得たのである、Riemann氏は Gauss 氏の全曲率を一般化して Riemann 曲率と云ふものを考へたのである扨四次元空間の變形に對しては測地曲線は矢張り測地曲線となると云ふことから彼の有名なる Least action の原理や Lagrange の運動方程式が立處に出て來る斯くの如くにして一般の質點物理學に於ける自然の法則を探がす爲には四次元の變形に因て變化しない關係式を

求むるにありと云ふことをCayley や Lie や Bretrami の如き數學者が地下で聞いたら定めし滿足の意を表はし以て瞑するであらう。

是迄物理の法則を佃煮にするための砂糖や醬油と同樣、即ち法則間の Cementing Substance として極めて割の悪い株の下の力持ちをして居つた數學も Einstein の御蔭で四次元幾何と云ふ一種の海圖否な物理と云ふ世界の航空圖となり物理的世界の現象を說明するの一種の model となつた、即ち四次元幾何の物理的世界を寫した魔法鏡である、一體此の物理の假定說は之れを說明する Model である以上は種々樣々のものがあらうなれども其中で善きものは可成解りやすきものが望ましいにしても亦可成概括的のものでなくてはならぬ、昔しの錦繪名所圖は大體に於ては素人には善く解かるけれども到底今日の測量圖に比べらるゝものではない、新式物理學の影像である四次元非ユークリツト空間の了解は困難であるけれども概括的で妙味が深い。

海圖もなく只羅針盤と地球の球狀とを想像し大西洋を西へ西へと航海した Columbus は實に偉いのである、善き海圖と、クロノメーターとを有する今日の航海者は幸福である、此の四次元航空圖を作つた Einstein, Minkowski, Darboux は Columbus Magellan, Captain Cook に例ふべきもので今日の物理學は今日の航海者に例ふべきものである、其中特に偉大なる Einstein の功績は實に偉大なもので獨國の彼の有名なる Lalenz は之を思想上の歷史の一大紀念碑であると云ひ、英國 J.J. Tomson とは Einstein 其人を第二の Newton と云ふて稱讚して居るが吾々數學者は氏を超 Newton と云ひたいのである。氏は物理學を幾何學化した大恩人である、からである Darwin 一度出でゝ其の進化論は天文學其他に大なる影響を與へたが Einstein 氏の相對性原理が將來他の科學に及ぼす力も實に大であらうと思ふ、Einstein 氏の一般相對性原理の妙味は微分幾何や非ユークリツト幾何や理論物理を食ひ飽いた人でなくては解かるものでない物理を知て居つても幾何學を知らなければ此の理論は到抵了解することは出來ぬ恰も伊語や獨乙語を知らずに Dante (ダンテ) や Schiller (シルレル) を解せんとすると同樣である何事でもそを手取り早くは了解出來ぬものである、佛國の語に曰く Paris nai pas été fait en un jour. (パリは一朝一夕に出來たのではない) と。

數學上に於けるアインスタインの地位

小倉金之助

一

我邦にアインスタイン教授を迎へる時に當り、同教授の功業を眞面目に理解し置くことは、同教授に對して最も深い敬意を表する所以であつて、無意味な賞讚の辭に勝ることと信ずる。併しながらアインスタインの全面目を傳へることは、微力な私の企つべきことでは無い。それで此小篇に於ては、たゞ數學上の立脚地から、特に彼の使用した數學を中心として出來得る丈け公平に彼の地位を觀察するに止めようと思ふ。

人屢々アインスタインを以てニユートンに比較するものがある、時にはニユートン以上とするものがある。併しながら昔ニユートンがその力學及び重力の法則を確立した時代には、未だ微積分學が無かつたのである。彼は先づ微積分學の建設から取りかゝらねばならなかつた。微積分學の建設それ自身が千載不朽の價値があるに加へて、彼は今日の意味での理論物理學を初めて樹立したのである。數學上から見てニユートン自身の微積分が如何に粗雜なるにせよ、物理學上から見て其學說が如何に改造せらるべきものなるにせよ、彼は永劫に其偉大を失ふことは無い。彼こそ人類に最も美はしい數學を敎へ、物理學の方法を敎へたのである。數學の存在する限り物理學の存在する限り吾々は永遠にニユートンを以て最大なるものゝ一に數へざるを得ない。

アインスタインの場合に於ては、事情がニユートンの場合と甚だ異るものがある。アインスタインが一般相對性原理を完成する場合には、絕對微分學と稱する數學を使用したのである。

彼は數學者ロスグマンの助を借りて、この絶對微分學こそ彼の相對性原理建設の上に最も有力な武器である、否、本質的に必要な計算法であることを見出し、之を應用して彼の驚嘆すべき重力の法則に到達したのであつた。若しこの數學が無かつたならば、彼は相對性原理の建設に、ドンナにか多くの時と苦心とを要したことであつたらうか。アインスタインが絶對微分學の眞價を認めたことは、これ實に彼の功であると同時に、また彼の幸運であつた。

斯様にニュートンとアインスタインとは異る環境の下に置かれて居る。この偉大なる二人を比較して輕々しく云々するが如きは、大に謹しまねばならぬことと思ふ。

人また曰くアインスタインの用ひた數學は非常に高尚難解なものである。モット平易な數學で説明が出來ないのだらうかと私は彼の用ひた絶對微分學を以て、非常に難解なものとは考へることが出來ない。物理學や天文學に用ひたポアンカレの數學等に比べれば、決して六ケ敷いものとは言ひ得まい。またアインスタインの精神を貫徹させる爲めには、絶對微分學ほど都合のよい數學が無かつた。また恐らくは將來も、これ以上都合のよい數學が、容易に見出されないだらうと思はれる。

私はこれから少し許り其理由を説明して見たい。

二

先づ絶對微分學は如何にして發達したか。其の歴史から始めよう。

絶對微分學は伊太利の數學者リッチの發見に係る、この名稱は千八百八十六年初めて彼の一論文中に顯はれたのである。彼れは其れより前後約二十年の間、この思想に基いた多くの論文と單行書「曲面論」とを著した。彼の思想に共鳴した數學者に同じ伊太利のレヴイチヴイタがある。彼等は千九百年に共著として「絶對微分學の方法と其應用」なる論文を公にし、之に由て此理論の系統的叙述を與へたのであつた。

この論文は七十餘頁に亘り六章より成る。第一章に於ては絶對微分學の計算法を一般的に説明し、第二章に於ては幾何學上の例によつて此方法を説明して居る。これより以下の各章はそれぞれ解析學、幾何學、力學及び物理學上の應用に關するものである。

吾々は此論文に於て、直接間接に相對性原理に必要な殆んど總ての計算法を見出すことが出來る。それのみならず相對性原理に關係ない方面に於ても、數學及び物理學上興味深い數多の結果が包含されて居る。

併しながら此論文は其の內容の豐富なるに比べて、餘り簡潔に書かれた爲めに、甚だ難解なものとなつた。其の爲めか或は他にも理由があつた爲めか、兎に角彼等の研究は餘り學者の注意を引かずに葬られ去らんとしたのであつた。斯くの如く、美はしい發見が、其當時の學界に於て何等の注意をも引かずに終ることは、數學史上決して珍らしい現象ではない。これを思ふの時、吾々は今更ながら批評の困難を痛切に感ぜざるを得ないのである。

さて絕對微分學に含まれた考への中で、最も根本的なものが三つある。第一は多次元のリーマン幾何學であり、第二は微分不變式論であり、第三はテンソル解析である。

私はリツチ及びレヴイチヴイタの仕事を正當に理解する爲めに、これ等の三分科の歷史に遡つて考へて見たいと思ふ。

三

遠い希臘の昔に於て、三次元のユークリツド幾何學は既に組織された。多次元のユークリツド幾何學は、假令十九世紀の中葉に其の完成を見たとは言へ、其の概念は可なり以前からあつた。一方に於てロバチエフスキーとボリアイとは、既に、一種の非ユークリツド幾何學を作り上げて居た。また他方に於てはモンヂユ、ラーメ、ヂユパン、ガウス以來の微分幾何學が、ボンネー、ベルトラミー等の手腕によつて勃興の氣運に向つて居た。是に於てリーマンの天才は此等二つの觀念を一團として、彼の名を負へる多次元幾何學を組織したのであつた。

併しながらリーマンの論文は暗示的で極めて理解し難いものであつた。爾來幾多の數學者が其の註釋的論文を草したことや又其の暗示に基いて一機軸を開いたことも、決して偶然ではなからうと思ふ。

此等の諸研究の中で最も名あるものは、クリストツフエル、リプシツ、シユーア、リツチ等の仕事である。其の中でも近來特に高名となつたのは、クリストツフエルの研究である。併しながら此研究は寧ろ微分不變式論に屬すべきものであるから、私はこれから其方面のことを顧みよう。

微分不變式論の範圍は廣い。併し其の最も中心的であり最も一般的なものは、恐くは諸威の偉大なる數學者リーの理論であらう。彼の理論は微分方程式に幾何學に解析力學に、到る處大なる足跡を殘して居る。併しながら吾々が今相對性理論に要する所のものは、斯くの如き大規模のものではなく、二次微分式の不變式論に止まる。

熱の傳導はラーメに微分パラメーターを教へ、曲面の研究はガウスをして曲率の觀念を導かしめて居た。思へば千八百六十九年は二次微分形式論上何んたる幸運の年であつたらう。此年に伊太利のベルトラミーと獨逸のクリストツフェルとは、此理論に關する根本的研究を成し遂げたのであつた。

クリストツフェルは此有名な研究の後、その仕事をリプシツに委ねて、他の方面の研究に走つた。ベルトラミーは其研究を微分幾何學の上に應用し、其結果ダールブー、ビアンキー等の微分幾何學として現代に傳はつたのである。

最後に私はテンソル解析に就て一言したいと思ふ。

テンソル解析は所謂ヴェクトル解析の擴張である。ヴェクトル解析の本質的理論はグラスマンによつて完成されたと言ふべきであらう。グラスマン自身は其理論を幾何學や物理學に應用することを怠らなかつた。ヴェクトル解析が今日の物理學に於て如何に重要な地位を占めるかに就ては、言を須たぬことと思ふ。

四

こゝまで考へて來て、私は再びリツチ及びレヴイチヴイタの仕事に立ち還つて見たい。

絶對微分學とは坐標の選び方に無關係な微分學の意味であるリツチは永い間微分二次形式論の研究に從事して、クリストツフェルの影響を蒙つて居た。また彼の先輩にはベルトラミーが居つた。それで私は思ふ、彼は其論文に於て根本思想をクリストツフェルに負ふと謙遜して居るけれども、彼がヴェクトル解析の擴張たるテンソル解析を以て絶對微分學の基底とした所は、確かに獨創の見と言はざるを得ない。之に續いてリーマン幾何學と二次微分形式の不變式論を導入した所は、絶對微分學の本質上、極めて自然な成行きと見倣すべきである。

要するに絶對微分學の價値ある所以は、これ等三つの觀念を統一融合して、其の本來の目的を貫徹した所に存する。

今や吾々は飜つてアインスタインの立脚地を吟味すべき時機に到達したのである。

アインスタインの特殊相對性原理が公にされた後、ミンコウスキーは物理學的世界なるものを考へた。それは時間及び空間を坐標とせる四次元の準ユークリツド空間である。アインスタインが特殊相對性原理から一般相對性原理に躍進するに當つて、四次元のリーマン空間を考へたことは、數學的に見れば、必

すしも不自然なことではなく、寧ろ極めて自然の順序であつたとも言へよう。

次に一般相對性原理の主張から見れば、四變數の二次微分形式の不變式論が、物理學上の原則として根本的に必要であることは言を待たない。

第三に特殊相對性原理に於てミンコウスキー、ゾムマーフエルド等は、四次元(準)ユークリツド空間のヴエクトル解析を使用した。この有力なヴエクトル解析をリーマン空間に擴張する最も自然的な方法は、所謂テンソル解析の建設であらう。

斯樣に考へて見れば、アインスタインが數學的に苦心を凝らした所は、既にリツチの苦心した所であつた。アインスタインが絕對微分學を使用して一般相對性原理を研究したことは決して不思議なことではない。

私はアインスタインが通つて來た徑路も、彼が用ひた數學も決して不自然なものではなく、數學上から見れば、寧ろ極めて自然的なものであつたと結論せざるを得ないのである。

五

斯樣な見方をすればとて、これは決してアインスタインの眞價を傷つけるものでは無い。否、寧ろ彼がその理論を樹立する爲めに、最も適切な數學を見出し、一切の困難を排して其の理論の完成を示した所に、應用數學者としての彼の大手腕があると思ふ。

アインスタインが數學上から見て最も偉大な點は、彼が一種の自然幾何學、即ち重力の場の幾何學を作り上げた所にある。彼は數學者の從來考へ來たつた空間の觀念以外に、新なる空間の觀念を導入した、こゝに革命家としての彼の面目がある。

思ふに「幾何學とは何ぞや」この根本問題に對する回答は、人々によつて異るものがある。私は他の機會に於て此問題に觸れたことがある。(「物理學と幾何學との交渉」、日本中等教育數學會雜誌第四卷百三十一頁參照)。今玆に其議論を反復しようとは思はない。たゞ簡短に私の信ずる所を述べしめるならば、自然から生れた素朴な自然幾何學が、經驗を超越した純粹の公理的な幾何學に移り變つた。アインスタインは重力の場の幾何學を作り上げて、公理幾何學から洗練された自然幾何學まで吾々を喚び戻した。こゝに數學者への意味深い教訓があると思ふ。

併し私はアインスタインの幾何學のみが必ずしも一の唯幾何學では無いと信ずるものである。

アインスタインの幾何學は時間と空間とを融合し、物理學と幾何學とを合體する。其の結構の雄大なる點に於て、蓋し空前の壯觀である。他日若しアインスタインの重力説が倒れることがあると假定しても、彼の幾何學は一種の公理幾何學として永遠に其の生命を失ふことがあるまい。

六

數學に與つたアインスタインの影響は大きかつた。

微分幾何學はダールブーの大作によつて一先づ完成の狀態に達した。現代の幾何學者に殘された所は比較的小問題に留まつた。人は溌剌たる清新の意氣を失つた。これ實に微分幾何學の危機であつた。

一般相對性原理起るに及んで此危機は救はれた。絶對微分學も再び目醒めた。レヴイチヴイタ、ワイル、エツヂントン等の論文は、數多の新研究を喚び起し、新しい意味での幾何學が勃興した。或者は純正數學の立場から、或者は應用數學の立場から、テンソル解析を、リーマン幾何學を、重力の場の幾何學を電磁氣の場の幾何學を吟味した。此種の問題の範圍は廣い、有望なる處女地は吾等の前に横はつて居る。

アインスタインの發見は數學の他の分科にも大なる刺激を與へた。私は茲にたゞ其一例として、積分不變式論を擧げようと思ふ。

積分不變式論はポアンカレによつて生れ、クーニツグ、グールサー、カルタン、ドンデア等の手によつて培れた一分科である。ドンデアは既に千九百十三年頃から、この數學を使用して相對性原理の研究に從事して居つたが、今や彼の研究はブール特にカルタンの深奥なる研究と相待つて、相對性原理の上に貢獻する所大なるものがある。

併しながらアインスタインの學説は、未だ確定せられたもの完璧の域に達したものではない。私は茲に數學上の立場から相對性原理に反對の意見を有する有力な數學者として、パンルヴエー、ルルー、ツアレムバ等の名を擧げたい。此等の人々は、相對性原理の中に根本的な矛盾が含まれて居ると主張して居る併し假令これ等の疑問が尚殘されて居るとしても、吾々は直に之を以て相對性原理を葬り去るべきでは無からうと思ふ。

七

之を要するに數學上から見て、アインスタインの偉大なる所以は

絕對微分學を巧妙に應用したこと、

重力の場の幾何學を作り上げたこと、

それによつて公理幾何學以外に自然幾何學の存在を敎へたこと、

微分幾何學其他の數學の勃興を促したこと、

この四つの點にあらう。

應用數學者としての彼は、確かに第一流を以て目すべきであり、又彼に直接純正數學上の研究なしとするも、幾何學の根柢に革命を與へた點に於て、數學史上稀有の天才であることに對しては、恐らくは何人も異議あるまいと思ふ。獨逸第一流の數學雜誌マテマチツシエアンナレンが、其幹部の一人にアインスタインを加へたことも、決して無意味なことではあるまい。

吾々は餘りに永く型に囚はれて來た。數學者は數學の型に物理學者は物理學の型に、塡め込められて來た。この型を破つた所にアインスタインの天才がある。之を數學の勝利と呼ぶも物理學の勝利と呼ぶも、又之を自然法則の幾何學化と言ふも幾何學の自然化と言ふも、言葉は吾々の關する所ではない、アインスタインは吾々にモツト眼を開くべきことを敎へて呉れたのである

併しながら數學の歷史は古い。一のアインスタインを讚へんが爲めに、數學の傳統を無視すべきではない。吾々はアインスタイン敎授に對して滿腔の感謝と尊敬とを捧げると同時に、古來幾多の偉人が殘せる步みの跡を、靜かに回顧したいと思ふ。

(一九二二、一一、一)

感じたまゝ

理學博士　玉城嘉十郎

雜誌「改造」から書くことを賴まれて居るのでしたが、自分の或る用事の爲めに、殆んどヒツキリなしに、多方人との交渉の爲めに、時間がとられて落ち付いて、記念すべき此の號に書く程の餘裕も、考る程の余裕もありませぬでした。今も落ち付いて書く余裕のあるのでもありませぬ。「改造」から再々の御賴みと、山本社長のわざわざの御依賴なので、御斷りしかねて、少しの間を筆を走らせます。隨て纏まつたことの書けよう筈がありませぬ　頭に出て來るそのまゝそのまゝをわけもなく書きつけるに止まります。

相對性原理と云ふ事が、一種の流行物の樣になつてしまつたかの感があります、此の數語に冠した書物ならば、見て居る間に版は重ねると云ふ樣な有樣であります。その內容がどうであらうが、分り易いであらうが、そうでなからうが、そんなことは問題でない樣です。中には精讀して研究して居る人もありませうが、多くは書物を買つて來る。數頁も讀んで見る、分らない、又他の書物を買つて來る、同じく分らない。そうして結局、相對性原理とは分らないものだと云ふことの感念に到達したと云ふことになつてしまふ樣です。

相對性原理の講演も、屢催されます。矢張り書物に對すると同じ事の樣です。講演の方は、多くは短時間で、其の大要を話すと云ふことになりますから　書物よりも尙ほ始末に悪い樣です。聞いて見て只分つたのは、「これから相對性原理に就て御話します」と云ふ前置きと、「これが相對性原理も大要であります」と云ふ終りの挨拶とだけだつたと云ふ樣な話もある程です。

元來、相對性理論は隨分六ケしい數學を使用して出來上つて居るものです。ですから充分に分らす爲めには、やはりその數學も分らなければ駄目のことです。併し數學と云つても、矢張り人間が、頭腦で作り上げた、一種の機械に過ぎないのです。恰も棉花から棉糸を造る紡績機械や、絹糸から絹布を造る織物機械の樣なものです。機械學の知識のないものや、紡績機械の樣

造の細部について説明を聞くのに充分の時間は有して居ないものは、棉花が機械の助けを借りて棉糸になると云ふことは聞いて滿足して置かなければ仕方がありますまい。私共は普通にその樣に聞いて或は其の機械の運轉し居るところを見せて貰つて滿足して分つたもの丶樣に思つて居るのです。

相對性原理は分りにくいものに相違ありませぬ。其の原因には、數學が使はれて居ると云ふことや、從來の時や空間に對する根本の考へ方が違つて來ると云ふことなどがあるのには相違ないのですが、一般の人には物理學者や數學者の使ふ術語が分らないと云ふことも可なりあると思ひます。ですから一般の人達も、術語を知つてかゝると云ふことも必要なことです。ですがそれと同時に一般の人達の誤解を防ぐ爲めには學者の方も自分達が使用する術語を一定して、誤解を生じ易い語を使はぬ樣にした方がよいと思ひます。

書名にでも、相對性原理と書いたのは、相對性理論と書いたのや、相對原理と書いたのなどがある樣です。私も、どの語を使ふのが本統かと聞かれたこともある位です。書名としてどの語を採用されるかは全く著者の考へにあることなのですが、語の意義だけはどこかでも明かにして置き度いと思ひます。例へば原理とか原律とか云ふのは英語の Principle と云ふことで、理論と云ふのは theory に相當するのである。隨て相對性理論と云ふのは相對性原理を、其基礎として出來て居る理論全體を云ふのだと云ふことが分る樣にして置きたいものです。

相對性の性と云ふ字が隨分妙に解釋されて居る樣です。性質の性が意味することは、相對性理論の何物かを知つた者には明かなことなのですが、只其名のみを聞いて、其ものを知らない人には往々にして、此頃やかましうなつてをる性の問題の性、即セックス。性と誤解される樣です。或る方が、經濟界の人々に頼まれて、相對性理論の講演をされることになつた時、其の演題を見て理學者がアイタイショウの理論を話すなどとは怪しからぬことだと憤慨した人があつたと云ふ話も聞きました。此れに類したこともかなり聞きました。憤慨したり、誤解したりするのはする方が惡いに相違ないのですが、此の字が誤解を招くことも相違のないことです。誤解する方が惡いとして、濟ましてしまへばそれまでですが、其んなことの虞はなくする爲めには取り去つてしまつた方がよいかも知れませぬ。私は物理學に使用される術語が、其もの丶意義を充分に明かにして、誤解もされない樣に統一されることを希望するものです。

運動は絶對的で無くて、相對的であると云はれて居る時の相對と云ふ意味と、時や長さが相對的のもであると云はれる時の

相對と云ふ意味との、一寸見には少し違がつて解釋される樣です。

煎じ詰めると同じ意味なのですけれども、時や長さの相對的のものであると云ふことが、本統に分らなくても　運動の相對的であると云ふことは、從來の常識で容易に分ることであると云ふ差が明かにあります。從來の常識で分つた積りの、運動は相對的であると云ふ、その相對の意味が本統に分つたのでないが爲めに違つた方向に飛んで行つて使はれて居る樣にも見受けられます。或る中等校の先生が、相對性原理の講演を聞いて歸つて間もなく、修身の時間に、人事界にも相對性原理が成立つたものだと論ぜられたと云ふことを聞きましたが、それ等はさう云ふ處に原因して居るのではありますまいか。時や長さは其を觀測する人の狀況如何に依て違つて測られるものなのです。從來は、觀測者の狀況如何に拘らず、時や長さが同じ樣に測られるものだと信じられて居たのです。相對性理論に依て始めて私共が使つて居る時や長さが、そんなものでなくて、觀測者の狀況に依つて變つて來るものだと云ふことが、明かにされたのです。そう云ふ樣な時や長さの性質が相對性だと云はれて居るのです。時と長さとを結合させた、所謂[Interval]と稱せられて居るものは、觀測者が靜止して居ようが　運動して居ようが其の値が變つて測られるものではないのです。此の意味に於てインタヴアルは絶對性を有して居ると云はれるのです。インターヴアル其自身を直接測り知ることの出來ない私共は、其の異つた切口であるところの時と長さとを、別々に測つて見るしか仕方がないのです。さう云ふ樣に測り知らうとした時に、それが觀測者の如何によつて變つて來ることになるのです。

文藝界に親鸞が流行になつて居る樣です。石丸氏の創作「人間親鸞」に就て、石川氏と石丸氏との間に論戰がありました。それに就て曉烏敏氏が中外日報に書いて居られるのを拜見した大變面白いと思ひました。一寸その數節を拜借します。

A　親鸞は果して石丸さんの書いたやうな方でしたでせうか。

B　石丸さんの書いた親鸞はあの通りです。倉田百三さんの「出家とその弟子」にある親鸞も倉田さんの親鸞です。尊由さんがあれは眞の親鸞でないといふのもおかしい。尊由の親鸞といつた方がよからう。高楠さんが眞宗の親鸞と　出家とその弟子」の親鸞とちがうといふて居られるのもをかしい。これも自分の親鸞とちがうといふた方がよかつたらうと思ふ。

A　ちや親鸞が何人もあることになりますね。

B　そうです。いくらでもあるのです。そうしてどちらがほん

とうといふ事はないのです。背がほんとうです。本願寺の教權にあはぬからほんとうの親鸞でないといふのもおかしいですね。

A　あなたの親鸞はどうですか。

B　私の親鸞は、だれの書いたのでもない私一流の親鸞であります。私が「親鸞聖人論」に書いたのがそれです。自分のが本統であるといふのがいゝが他人のがうそだといふのは潛越ないひ分だと思ひます。

A　それぢや親鸞の正體がわからないのですね。

B　いゝえその正體が人々によつていろ／＼に見えるのですよ　そしてどれもこれもわけがあるのですよ。

今こゝに一つの函があつたとしましょう　親鸞を函に譬へて見るのは失禮かも知れませぬが、函は只一つしかありませぬ。函そのものが函なんです。それを人が見て、それを云ひ表はさうとしたときにその人々に、よつてその人々己性の違ゐなり、狀況の違ゐなどが入て來ます。例ば甲は此の函は正立方體であると見ましようが、他の乙は、甲に對して動いて居るものならば、そうして其の速さが極めて大なるものならば、決して正立方體だとは云ひますまい。甲が此の函は赤い色だと云つても、こはそれよりも靑がかつた赤色だと云ひましよう。此の場合に甲も乙も正しいのですがどちらもほんとうのことを云つて居るのです。長さだとか、色だとか、函に附屬して居る性質の、相對性を有するもののみに就て云つて居る間は、それを見る人の狀況如何によつていくらでも違つて出て來る筈なのです。だからと云つて函がいくつもあるのだとは云へまいと思ます。特殊相對性論に於て、光速度の不變性が、一般の人には可なり分り難いものゝ樣です。學者にも可なりに問題にされたものなのですから分り難いのも無理ならぬことだと思ひます。Michelson-Morley の有名な、あの實驗が、此の不變性な其の必然の結果として導いて來た樣は、あの實驗でそれが決定的になつた樣に思ふ人もある樣です。あの實驗を說明するだけならば Fitz Gerald や Lorenz のやつた樣に短縮說に到達してもよいわけなのです。相對性理論から出て來る長さの短縮と、フイツツゼラルドやローレンツの假說からの短縮とは全く同一のものと見てしまつたマイケルソン實驗に於ての光の速さが、其の路の往返に於て異つて居るのに不思議がる人も多い樣です。光の速度よりも大きな速度で傳播して行くものはない、若しあるならば、それは原因結果の關係のないものだと云ふことも普通には一寸了解され難い事の一つですこう云うことの話の序に、二つの違つた傳播方法によると、結果の方が原因よりも前に到達することがある。

それは例ば、物を打撃した場合に、音が出て光が出る。其の時に打撃と云ふ現象は知るに、其の原因たることの方よりも結果たることの方よりも結果たる光の出たことが、前に遠方の人に到達すると云つた人があります。面白い話だとは思ひますが、その點に錯誤があるかは少し注意すれば直きに分ることです。

Faraday は電氣力線の觀念を創めて導入して、電磁氣現象を巧みに說明し、新しい種々の事實をそれによつて發見して行きました。Maxwell は數學に用ゐて、ファラデーの考を發展せしめて行きました。そうした電磁氣現象が空間に傳はつて行くのは、光が空間を傳はるのと同じ樣に、同じ速さで傳はつて行くのであると云ふことやその樣に傳はつて行く電磁氣の波が、凡ての點に於て光の波と同樣である、光波が電磁波の一種に過ぎぬものであると云ふ光の電磁波說は理論の上から稱へ出したのでした。が其後1887年に Hertz に依てマックスウェルの豫言が實驗的に證明せられた。英國では、此の實驗の結果が、自分達の電磁氣に關する觀念を確に裏書きしたものとして、多大の喜を以て迎へられたのでした。翌年 J. J. Thomson が電磁氣學の講義の際にヘルツの實驗をして見た時、學生は多大の興味と熱心さとを現はして、Cavendish Lavoratory の到るところで電波に關する實驗が行はれたと云ふことです。マックスウェの電磁波說に餘り注意して居なかつた大陸では、ヘルツの實驗で、始めて驚いて電磁氣學に對する觀念に改革を及ぼさねばならなかつたのでした。

Einstein の相對性原理が之に類した有樣を呈しました。誰もがそう知つて居る樣に、相對性原理が始めて稱へられたのは1905年でした之に注意を拂うものは餘り多くはありませぬでした。英國あたりでは、殊に Newton を生んだ英國に於ては極めて少數の人を除いては、輕蔑の眼を以て見て居た樣でした1919年に英國の天文學者の Eddington や Crommelin などが日蝕の觀測を行つて、其結果太陽の附近を通つて來る星の光が、太陽の爲めに曲げられる度がアインスタインの豫言した通りになると云ふことを發表したが爲めに、今まで相對性原理に對して少しも注意して居なかつた人々の眼を覺まさせたのでした。そうして俄かに世の中が騷ぎ出しました。恰かも これまでの科學の基礎が根底から覆へされたかの樣に。

英國で稱へられたマックスウェルの電磁波說が、獨乙で實驗的に證明せられ獨乙で稱へられた、アインスタインの相對性理論が英國人の手に依て事實的に證明せられたことに、非常な興味を覺えさせます。我が國で創說された學理が外國で實驗的に證明せられたり、外國で稱へられた新しい學說の證明が邦人の手によつてなされたりもつと進んで、新說も其の證明も共に邦人の手によつて爲される時の近からなことを祈つて此の筆を擱きます。

法學博士 福田德三著（忽七版）

ボルシェヴヰズム研究

◇定價貳圓九拾錢◇
◇送料十九錢◇
◇四六版布製◇

レニンの國家理論の研究に於て、マルキシズム、ボルシェヴヰズムの評論家として我が福田氏が嶄然頭角を抜き、そしてその評論が、彼一流の江戸兒氣質を漲らせてヒタ押しに押し行く所は全く天下の偉觀である、加之、彼レニンの國家の成立、本質、國家の消滅ー過程の所論を矢継早に攻め立てて、彼レニンは眞正なるマルキシズムを奉ずる者にあらずと一蹴する所は讀書子の随喜する所だらう、レニンの國家理論、ボルシェヴヰズム、マルキシズムの内容を知り、且つその嚴正なる批判を聞かんと欲する者は此世界的名著たる本書によるの外はない。唯だ當局の検閲嚴にして〇〇〇の箇所多きは著者と讀者に對して聊か遺憾を覺ゆる者である。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

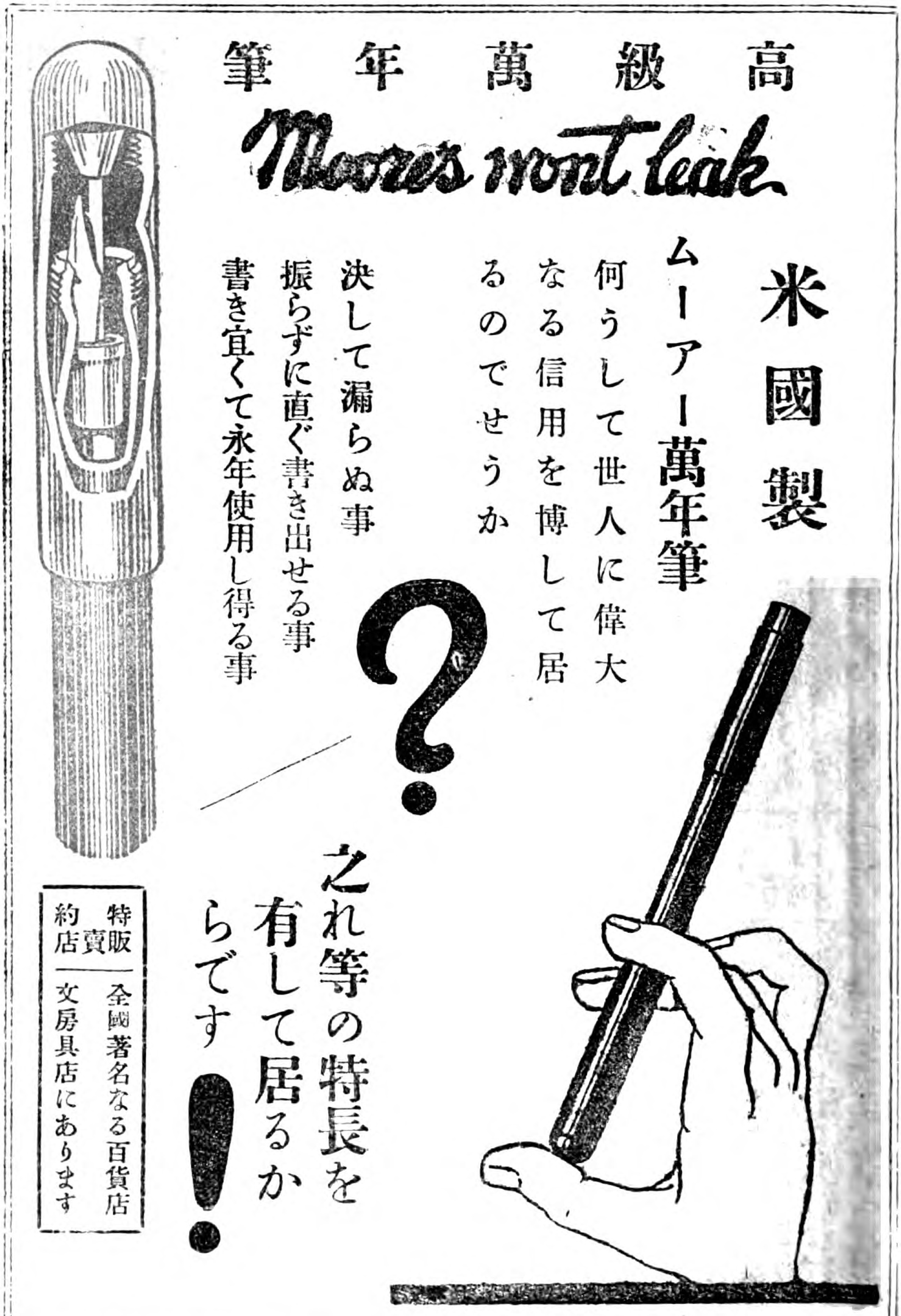
獸人

ゾラ原作
三上於菟吉譯

戀妻の十年前の情人をさへ生かして置けぬ嫉妬狂。美女を見れば脂切つた白い肌にわが歯を立てゝムズりと嚙み裂かずにはゐられぬ傷害狂。異性の汚物を拭いたハンケチや汚れた手袋を寶物のやうに崇める愛物狂。盗み侵されはしまいかと強迫觀念に夜の目も合はされぬ隱匿狂。戀の叶はぬ恨から列車を衝突させて自殺する怖しいはたち娘。妻の財産を横領しようとして蓄積毒殺を敢えてする老人。女といふ女を一目でたらしてしまう凄い色魔などが活躍して、全篇血なまぐさい殺人やねば土のやうな情慾の匂ひで充ちた恐怖すべき大作。しかもそれを裏づけて大ゾラの深甚な人道觀念はまるで潮のやうに凄じく漲るのである。この作者の世に餘る長篇の中で一ばん人間的な魅力を持つたのは何と言つてもこの「獸人だ」。

定價貳圓五拾錢
送料拾九錢
四六版上製

發行所
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社



高級萬年筆
Moore's won't leak
米國製
ムーアー萬年筆
何うして世人に偉大なる信用を博して居るのでせうか
決して漏らぬ事
振らずに直ぐ書き出せる事
書き宜くて永年使用し得る事
？
之れ等の特長を有して居るからです
！
特約販賣店
全國著名なる百貨店文房具店にあります

エッチ・ヂー・ウエルズ

世界に比類なき聲望と、雄大の機構を有し、常に天下を獨往するの慨あるウエルズ氏の文壇に於ける地位は我等の呶々するまでもない、氏は一昨夏アインスタイン氏の相對原

文學博士

廚川白村著

世道人心を益し新文化の建設の爲

光波に關するアインスタイン效果に就き

東京帝國大學理科教授　長岡半太郎

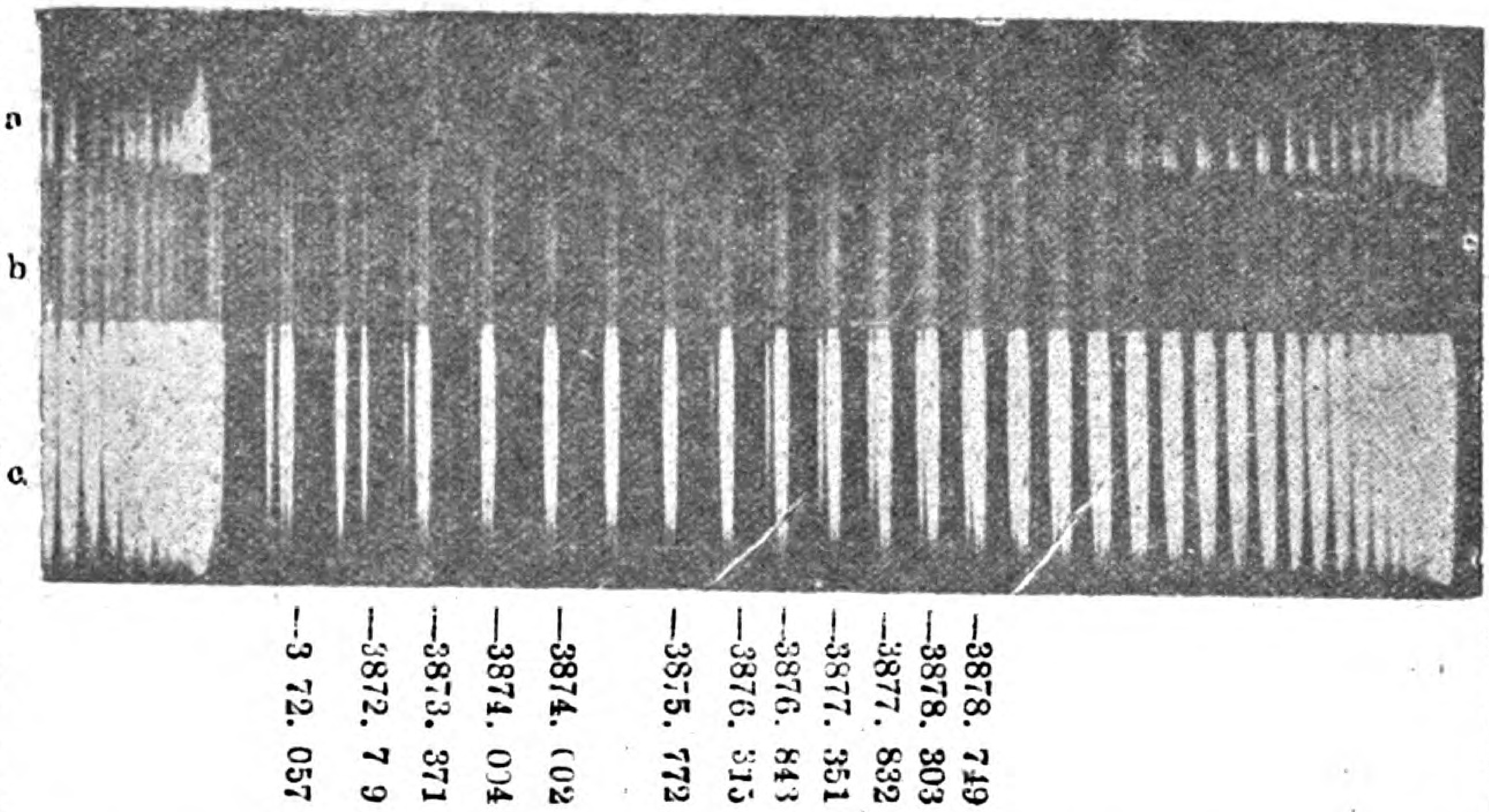
特殊相對原理では、靜止系から動系の時間を測れば、いつも時計が遲く動くやうに見へる、又一般相對原理では太陽の如き質量の大なる物體上では、地球の如き小なるものより時計が遲く動くと云ふ結果になつてゐる。時に關する議論は實驗的確證を得るに頗る困難である、其故此議論に對する批評は區々あつて、容易に議論が結著しさうに見へぬ、若し特殊相對論から演繹して其事實であるか否を知らふと思へば、恒星の運動に依るが簡便なる方法であるかの如く察せられる、即ち星の運動に依て其發する光波の長短があつて、視線の方向に觀測者から遠ざかるときは波長が伸び、近づくときは縮まることは、從來ドツプラー效果として知られたことであるが、今一つ相對原理よりして現れた事柄は、觀測者の視線に直角なる方向に運動して居ても、ドツプラー效果に均き效果のあることである、若し從來天文學者が恒星の視線上に遠ざかり或は近よる狀況を測つたものを縦效果と名くれば、相對原理の摘發した他の效果は横效果と名くれば至當である。此效果はマイケルソン、モーレーの試驗に對しガリレオ、ニウトン力學から豫期せられたものと同一程度の小なるものであるから、此有無を研究した天文學者があることを聞かない、然し觀測が精微になつたならば必ず此種類の論文が發表せらるゝことは疑を容れぬ。

次に一般相對原理の見地より光波の長さを論ずれば、其萬有引力の影響を受けて幾何の差を生ずるかの問題となる、特殊相對論では萬有引力を生ずる物質は議論する點の付近には皆無であつて、全く引力線の通過せざるものと假定してある、一般相對論では引力線ある空間に就ても論じ得る、それ故若し引力の影響があるとすれば、どんなに光波が變るであらふかと云ふ問題になる。アインスタインの理論によれば、質量の大なる、即ち普通に申せば引力の大なる物體上に在ては、時間が伸びてゐ

る、其れ故光の振動は遅くなつてゐる、即ち波長が長くなるのであるから、同じ元素から出るスペクトル線であつても、太陽と地球上との觀測を比較すると、前者に於るものが後者に於けるものよりも長いから、スペクトル線は太陽に於ては地球上に於るよりも赤い方に移つて見へる、それで其差を推算すると振動數の違ひは其數の百萬分の二、一二となる、即ちスペクトルの青い部分に屬する波長五千オングストローム（一オングストロームは一糎の壹億分一）の所で僅に〇、〇一一オングストロームの差を生ずる、そして此數は最前述べた縱のドップラー效果に直して見ると、丁度光線が視線に壹秒に付六百三十四米の速度を以て觀測者から遠ざかつてゐる爲めに生ずる效果に相當する、其故此問題を解決するには是非百億分一糎以下の波長の差を測らねばならない、專門家にあらざる人が考へても、此測定は容易でないことが解る、是が時間の違ひに關する議論の實驗證明が今日に至り不滿足な理由の一つである。

實驗場で光波長の差を壹千分一オングストローム迄測定することは設備さへあれば、左程困難なことではない、然し注意すべき點は、光源の受くる氣壓が如何であるか、又之に働く電氣力磁力は幾何ではあるかの測定を同時になして補正を加ふることが必要である、其理由は、氣壓が違ふと波長も違ふ、其違ひは各線に固有であるから、其測定を最初種々の氣壓に就て爲して置かなければならない、或る線では氣壓が增せば波長が長くなる、或る線では短くなる、又氣壓に比例して增す線計りに限られてゐないから、此複雜な關係を實驗的調べる必要がある、次に電氣力や磁力が光源に働くと、線が幾本にも分れて——波長も從て變ずるものである、此狀況は各線で異つてゐるから、豫め電氣力と磁力とが働いた場合を前に精く調べて置き、其上で實驗的の比較は可能になるのである、更に太陽の表面から來る光線に就て調査をする場合に、直に實測家が困却するのは、太陽面の氣壓は幾何であるか、又電氣力と磁力が如何程働いてゐるかの問題である、其れのみならず其檢査しつゝある光は太陽の何の部分から來るかも調べなければならない、太陽の赤道の兩側から來る光線は、廻轉運動の爲め反對の縱ドップラー效果を生じてゐる、中心から來るものも相對原理から論ずれば横の效果を生ずべきであるけれども、其實は速度の遲き爲に度外視して構はない、近頃氣壓に關してはペローの間接を測つたものがある、即ち地球上で觀測した鐵の諸線に關する氣壓の影響から推算して、約三十糎水銀柱の壓に均しかるべしと結論した、併し是れは單に疎畧な推考に過ぎないと見てよろしい、斯くすれば遂にアインスタインが光波の長短に就て論じた結果

を說明すべき材料は得難きものかと申せば、



左様な結論が早計に過るを覺るのである。

スペクトル分析で澤山の實驗を經た結果、いはゆるシヤン、バンド線と唱ふるものが、氣壓、電氣力、磁力等に由て殆ど變らないことが解つた、此線は太陽の光線にも明瞭と認め得るもので、比較するには屈强なる線である。其上此線群は幾つもあつて、其一つは上圖に示すやうなものである。是はキングがシヤン、バンド線の異た光源から出るものを、比較したのであつて、中間の線の少く黒く表れてゐるのは電氣爐から出た光線を分析したのである、上部と下部に白く寫つてゐるのは電弧から出た光である、是等を比較して見ると、幾らか線の判明なる程度に違ひがあることが解る、下に記してあるのがオングストローム單位で測つた波長であつて、左端の二本に就て說明すれば、波長の差が〇、七七三であるから、壹千分の一オングストロームは僅に此二本の線の間の約八百分の一に當る、若し此バンド線の比較を爲してアインスタイン效果を示さんとすれば、壹千分一オングストローム位迄は判然測らなければならぬ、寫眞に示してあるスペクトルは三十呎焦點距離の凹格子を使用して寫したもので、余程擴大してある、其故實際アインスタイン效果は、斯様な寫眞を顯微鏡で檢査して始めて明瞭なるものである。

太陽面から來る光線に就て此シヤン、バンド線を觀測して見ると、實驗場における反對に黒い吸收線として表はれる、是はコントラストが違ふので、目測には不便であるが、精微なる光度計で器械的に測れば、左程迄困難を感ぜぬ、然し一つの困難に勝てば第二の困難は次に來るのである。

實驗場では容易にシヤン、バンド線のみに限り發光せしむることが可能である、是等の線は必しもシヤンに歸すべきもので

なく、窒素が生ずるものと解釋することが至當であることは、ルンゲが既に明にしたことであるから、名は實際を示さぬものである。太陽の光源は人間が自由に左右し得るものでないから困る、太陽面にある鐵やカルシウム其他多數の元素から錯雜して發するスペクトル線が混亂して表はれるから、假りにシャン、バンド線を研究して見ると、太陽のスペクトルには實驗場で得たものと著しく異つたものが顯れてゐる、換言すれば、圖に示すシャン、バンド線の間に他元素に屬する線が數多介在して判別に困る程である、其上是等の線が互に相重つて、一本や二本やらはつきりせぬものが深山表はるれば、線の波長を測るに一層厄介な配置を得ることになる、是が實際であつて、圖に示してある線で、只一本即ち 3871.371 が役に立つのみで、殘餘の線は他元素のスペクトル線に侵されて效果を決するに用ふることが不可能である、然し若し圖に示せば、遠く左の方に跨るバンド線の集團が幾つもあるから、是等の諸線に就て約九本他線の影響を蒙らないものがある、此等の線に就て、地球上で得た光波と日光に顯はるゝものとを諸所で比較して見ること、ドップラー效果に表はるゝ速度に直して、印度のコダイカナルのエヴァーシエッドと、ロイズ(Evershed and Royds)は六七〇米ボツダムのシユワルツシルド(Schwarzschild)は六三〇米ボンのグレーベとバヘム(Grebe und Bachem)は五六〇米に相當する結果に到達した、然るに設備の最も完全なるマウント、ウヰルソン天文臺でセント、ジョン(St. John)の得た結果は、是等と大なる差違を示して三二〇米となつた。前の三ケ所即ちコゴイカナル、ボツダム、ボン等に於ける結果の平均は六二〇米となつて、豫測の六三四米に殆ど一致するけれども、最も信用を措くべき値は、其半に當るから、實測家の間に其齟齬を來したる理由に就き種々の臆説を爲してゐる、今日に至りまだ判然しないのであるが、光波は發光作用の異ひにより多少變調を來すことは圖に示すが如くで、太陽表面の六千度もある高熱の處で出たものと、實驗室で出たものとが、幾分か逕庭あるであらふ。其のみならず一方は輝線で觀測し、他方では吸收線を測るのであるから、其間にも異ひは起り得るのである、殊に線の構造が單純で、氣壓の關係などが豫定したやうに皆無であるかは問題である。此位の試驗は本邦の貧弱な設備でもできないではないから、目下理化學研究所で予の指導の下に福田光治君が實驗に取り懸て居るが、其内何か結果を得るであらふ。

アインスタインの理論上演繹した光波の異ひに關する議論は、地球に近いところでは日光によつて其實證を求めるのであるけれども、遠く恒星に就て證明を得ることも可能である、天文學者は既に恒星運動を精密に調べてアインスタイン效果に歸結すべき光線の異ひあることを認めた、フロインドリッヒやコールの研究は確に太陽に於るよりも大なる效果を示すことを多數の星に就て實證し得た、しかも恒星中の大なるものは太陽より遙に大なる質量を有つてゐるから 是等の研究が十分に進行したならば、一般相對原理の一部に屬する、此至難なる問題が滿足に解決するのは余り年月を要せぬことゝ思ふ。



黒く究まる光

（アインスタイン讃稱詩）

石原　純

一

形容のない風と炎、
捉み得られない宇宙エーテル、
幻覺、錯感、
感情の誘惑、
それらが充ちわたつてゐる狭い地上にも、
あらゆる現生を超脱して
まつすぐに彼岸に達すべき
科學の流れが育つて來ました。

私たち人間に惠まれた普遍的論理、

最後の眞への理想、
そのもとに養はれた私たちの科學は、
たくさんの起伏の難路をめぐりたどりて
むらがる荊棘のなかを岐け裂きて
今まさにその險惡な一頂點を
悠やかに流れ超えることが出來たのでした。

アインスタイン
彼によりて私たちの人間の思想が
どんなに險しい階段を攀ぢ登り得たことでせう。
私たちのアインスタイン、
彼によりて、ひろびろとした宇宙が
私たちの展望の可能な領域に
どれほどおほく持ち來されたことでせう。

現實のうへにとほく高まれる彼の理論、

それは何といふ宏壯な姿でせう。
彼の說く空間と時間と、
それはなんと云ふ幽玄さを
語つてゐるではありますまいか。
私たち人間は
現實にその空間のなかに呼吸し、
その時間のなかに
生命の經過を意識してゐる筈ですのに。

直觀はさまざまに變態して、
あるひは夢想を喚びおこし、
あるひは幻影をかたちづくらうとも、
それはつゐに人間の感覺と感情とから
まるで放されてゆくわけにはゆきません。
これに對して私たちの科學は
より超越的な認識の世界をゆるします。

私たちはアインスタインと共に
空間と時間との
そのふたつが交錯する「世界」へ赴きませう。
それは終端のない、しかも有限な
高次元の世界をかたちづくつてゐます。

私たちの現生、
私たちの存在、
それは一瞬の、また一點の、
世界のなかの點に過ぎないでもありませう。
しかも私たちの認識は
とほく且つながく
この世界の極に及ぼしさしめることも出來るのです

彼の論著を展げるとき、
私は到るところにたくさんの數式を見出します。

ローマ字やギリシャ字や
ドイツ字の、大きな、そして小さな變態のいろいろの記號のくみ合はせが、
なんと云ふ意味ぶかさを
私たちに啓示してゐることでせう。

現世の錯雜な
人間の交渉に疲れたとき、
もしくは凡庸の周圍の煩瑣から
暫らくの安息を欲するとき、
私は寧ろかやうな式に眼を觸れてゆくことに
ひとつのこよない快さを感じます。
あの遍かな別様の世界に導かれて
すつきりとしたこゝろが私に蘇ります。
あたかも人間の純眞の藝術が
私たちに限りない慰樂を與へるのと同じやうに。

現實からの一つの抽象、

實際、科學の現時の發達の程度において
それは單なる抽象に過ぎないでありませう。
けれども、それはまた確かに
全宇宙をつらぬいてゐる
ひとつの純粹の理路なのです。
私はこれに接するごとに
ちやうど、或る理想への憧憬に、
ひたむきにふみあゆまうとする
處女の純眞さを思ひます。
しかもそれは一時の思惑の所産ではありません。
論理の律則が
嚴として私たちに存する範圍において
それにしつかりと膠着する
そしてそれにぴつたりと適合する
私たちの明るい心像でなくてはならないのです。

そこには永劫にかゞやく
ひとすぢの光明が
この處女の純眞さを
いつまでも守り保つでせう。
そして私たち人間の
けだかい理想の究極にまで
この心像をみちびくにちがひありません。

眞。
私たちはそれをかう名づけます。
私たちの感觸するあらゆる物のあらはれが、
私たちの須臾のこゝろに
たちまちにしてその姿を變へ、
倏忽にして消ゆるあひだに、
たゞ一つ滅びないものはこの眞です。
永劫、不變、そして絕對、
私たちが念じもとめ、

その最後の歸依のねがひをかくるものは
これを措いて恐らくは外にありますまい。

轉變極まりないこの人間の世に
錆び易い私たちの情緒は
やゝもすれば救ひ難い懷疑にみたされます。
黄いろい汚土や、あをい炎や、
また朱赤の厭むべき風が
強い刺戟を準備して、
私たちの感覺を撥してゆきます。
私たちはその始終のふかいなやみに、
また堪へがたいくるしみに出遭ひ、
それらにうち克たうと努めながら、
それでも人間の感情のよわさは
屢々私たちのこゝろを慘ましく傷つけます。

黒く究まる光、
それは同時に白光です。
眞、
私はその拯ひを喚びかけませう。
私たちの移り易いこゝろを
永遠に安住させるものは
その滅びない一すぢの光ばかりです。

二

一切の混濁をぬぐひ淨めて
私はあのアインスタインと共に
すつきりとすがすがしく透きとほつた
たゞひとり、論理の律則がゆるされてゐる
そして整齊完美の内容が
たくさんの聯係で描かれてゐる
あの空間と時との

ふたつが交錯せる「世界」に
私のこゝろを委ねませう。

何といふ瞭らかさ
なんといふ美くしさが
そこに私を待つことでせう。

相對的空間と、
相對的時間と、

さうしてその交錯せる世界のなかに、
ちやうどエジプトのモザイクのやうに
塡充された自然の法則。
その形は、あるときは
たかい金字塔のやうに聳えます。
また、あるときは
あの不可思議な牝獅像やうに
その半身をあらはします。

私はそのまへにじつと心を潜め、
自然が秘藏してゐる
限りない深奥の世界から、
私たちの心像として
そこに映じ得る限りの照明を
探りもとめることが出來るでせう。
私の腦髓に透徹するほんたうのよろこび、
ほんたうのうれしさに充ちた雰圍氣が、
そのとき私を包みます。
あたかも私の皮膚のまぢかに、
まことの愛人のあたゝかい息を
ゆたかに體感する瞬時のやうに、

私は絶對の、そして不變の「世界」のなかに
かやうにして生きることがゆるされます。
空間と時間と、

たとへそれは、私たちの直観から判斷して、
どんなに相對的に異つてゐやうとも、
この兩者の融合は
私たちすべてをそのなかに抱擁して、
その儘滅びずに殘るでせう。

あゝ、永劫なる「世界」、私はそれを讃へませう。
そしてかやうな現實を
私たちに示してくれた
アインスタンその人に感謝しませう。

愛する私の友らよ。
私たちお互ひの住んでゐる現實が
果してどんなに見えるかを、
この「世界」の立場において
こゝろみに想像してごらんなさい。

あはれな空間、
そこにはもろもろの歪みがあらはれ、
すべてのものの縮まりが
私たちの眼をあやしませるでせう。
私たちのかりそめな時間、
そのなかに私たちの生は、
もはや定まつた壽命をも
數へられはしないでせう。

若し假りに私たちが光と一緒に
大空をはしると想像しましたなら、
私たちの住んでゐたこのまろい大地も、
また、あの太陽球も、
空に燦めくあらゆる星も、
みんな厚みをもたない

扁い面に過ぎなくなるでもありませう。
そして私たちみづからは
どんな時の經過をも
意識せずにゐるでせう。
すべてが扁平です。
すべてが瞬時です。

凡俗はいちがいに
自分の狹い直觀のなかに閉ぢこもりて、
それを妄斷と斥けるかも知れません。
あはれな人たちよ。
あなたがたは心を謙遜にして、
はるかな天上の聲に
その耳をかたむけなくてはなりません。
愛する人たちよ。
あなたがたのまへは默示された

あのみごとな多くの數式、
それがすべての謎を
すつかりと解いてくれるでせう。
それらの記號が含んでゐる
ほんとの意味を悟り得たとき、
そのとき始めてあなたがたは
私たちのアインスタインに從つて
それを正しく背なふことが出來るでせう。

アインスタイン、
私は彼を限りなく愛します。
こゝろから彼をふかく尊敬します。
彼は私たちの安住の世界を
あのはるかな彼岸のちかくへまで
おし擴めてくれた
私たちの恩人でなければなりませんもの。
アインスタイン、[illegible]

アインスタイン、
いま彼の名はたからかに讃へませう。

黒く究まる光、
それは同時にびやく光です。
眞、あゝその一すぢの光明は
私たちの「世界」に普ねく充ちみちてゐます。

だれが徒らに阻まうとも、
だれが姑息に堰き止めやうとも、
その究まれる光は
永劫の彼岸につゞいてゐます。
かやうにして私たちの眞は
つゐに滅びるとなしに
しづかにとほく赫やくでせう。
私たちの虔ましい心像に
私たちのうつくしい、
うつくしい理念への世界に。

アインスタイン小傳

遠藤美壽

獨逸で最も高い建築物のあるウルムの町の或る餘り裕かでない家に丁度今から四十三年前の三月十四日に一人の男の子が生れました。其子の六歳の時彼の父は臥床にゐる彼を遊ばせやうと思つて磁石を見せました。何時も南と北を指してくる〱と廻る鐵の針は子供の好奇心を滿たすに充分でした。彼は大きくなつても其磁石のことを考へました。此磁石は後に彼の研究が進み行くべき電磁氣現象をあらはに語る神のお告でありました。

彼の父は陽氣な樂天的な氣質でかういふ人にあり勝ちな幾らか的もなく其の日を送るといつた風の人でした。間もなく彼等はミユンヘンに移つて野に近い牧歌的な場所に建てられた質素な家に住むことになりました。そこでは目も遙かなる大自然の純な喜びが溢るゝ計り彼の幼な心に流れ込みました。春の小川のさゝやきは彼に神の曲を聽かせます。秋の野山の彩色はミネルヴの織りなせる布さながらに彼の前に擴げられます。或時は夕月が山の端を出づるまで牧羊と遊び暮らしました。また或時は朝霧深い森影に小鳥とたわむれ明かしました。かくして偉大なる天才アルベルト アインスタインの幼時は靜かに自然の懐に孚まれたのです。

彼の兩親はユダヤ人でしたので彼はユダヤ教とカソリツクの教會で信仰に關する說話をきゝました。彼は生來沈鬱な質で通常の子供の持つ粗暴な元氣さをちつとも有ちませんでした。そして絕えず夢見る人の如うな眸をして、出來るだけ强烈な刺戟から顏をそむけやうとする傾向をもつて居ました――恰かも何處からとなく聞える神の聲を聞いて居るかのやうに。

彼は感が鈍く又頑なでありました。それ故問に答へる言葉の口を出すことの遲さから判斷しては彼が異常な天才の保有者であることを誰が知り得たでせう。それのみならず幼き時の口のきゝ初めが餘り遲かつたので彼の兩親が少なからず心配した位です。彼は少ない友達から「律守な君人」といふあだなを付けられました。それは彼は幼ながら眞理と正義とに對して病的と

いふ程熱烈な愛をもつて居たからです。此強き氣質が今日彼の偉大なる研究を遂げしめた所以であることは申すまでもありません。

彼の音樂に對する嗜好の仄もまた早く現はれました。或時彼は神を頌る小さい歌を作りました。それを兩親にさへも秘して敬虔の隱れの中でひそやかに獨り歌ふのを常としました。かくて音樂と自然と神の三つの情操は渾然と融合して一つの道德的な統一を生みました。此宗教的な要素はその後次第に擴がつて宇宙の圓滿なる姿に對する科學上の眞美的な憧憬となつたのです彼は聖書を讀む時その中の信條にちつとも疑をはさんだり批判的に追及したりしませんでした。誠にガリレオが云ふたやうに「聖書は決して科學的の記錄ではありません」たゞ單なる道德的教義であります、此限界を超えて推理的に科學的眞實を求めたとてそこに何が得らるゝでありませう、聖書の尊さはそれ自らに於て道德的範疇を與へ得るところにあるのです。

彼は小學校へ通ひました。ユダヤ人の子供は少數なので何時も仲間はづれにされ、その上少なからず苦められました。此の壓迫は彼の內氣さを益々深からしめ又優しい控目の氣質を封じ込めて孤獨な強情な個性たらしめた一因です、兎も角小學校の卒業成績は中位でした。かれは溫厚篤實な良生徒でしたがちつとも特別な才能をあらはしませんでした。寧ろ語學に對する記憶力が少しく不確であるらしく思はれた位でした。けれども是れは彼が十歳まで居つた小學校のたゞ義務的な日日の嚴格な教育が何んなに此天才の芽の萠え出やうとするのを阻んだかを示すだけであります、それから彼はミュンヘンの中學校にうつりました。此學校の氣風も天才を育てるにはあまり雜駁でした。そして彼は自身の精力を用ふることとなしにたゞ形式的に吸收を餘儀なくされる色々の學課に對する勉強によりては自らの教養上に大した效果も得られませんでした。我々は今日アインスタインが自由に開放され且つ生徒に制限を加ふること少なき人道的理想學校を近き將來に計畫して居ると聞て居ります。獅子がその子を試すに先づ谷へ放つがごとき自由開放の教育は或は天才にのみ許さるべきものであるかも知れませんが彼をしてかやうな考を起さしめたのは現代の束縛された活氣なき教育に對する反感と見られぬこともありますまい「けれども其處でゲーテの『ヘルマンとドロテア』のあの夢幻的な魔法を讀んだ時には此詩の活躍せる場面と彼の空想的性質とがしつくりと融け合つて眞實のモデルのように思はれました、彼の論文にはいつも詩を書いて居る樣な柔らかい感に充たされてゐるところがありますがそれにはかような古典的感化が與かつて力あるのでせう。その

上それは此天才に對する乾燥した形式的教育の砂漠中のせめてもの沃地(オアシス)であつたのです。

彼の重要な經驗を述べるために一二年溯らねばなりません。それは彼が初めて初等數學を學んだときに起つたのですが學課の通常の課程であらはれたのではなく一種神秘的な攝理によつて彼の天才の蕾に開きの衝動(インパルス)を與へ、彼を問題の怜悧な解法に導きては喜びに震ひしめつゝ愈々彼の蕾を美しく色づけ大きく育て行つたのでありました。アルベルトは算術や方程式の取扱をまだ習得しない以前に於ても問題の解答には勝れて居りました。彼は何時も自ら發明する廻り遠き考察をしました。そして夫れが決勝點に導かれる時云ひ知れぬ幸福の潮に浸るのでした。

彼の伯父さんはヤコブ・アインスタインと云ふ名でミユンヘンに住んで居る機械師でありました。或日彼はこの伯父さんに一つの問題を尋ねました。彼が他人から聞いて來た「代數」と云ふ言葉を伯父さんが説明して呉れるだらうと思つたのです。ヤコブ伯父さんは答へました。「代數は無性の計算だ。もしおまいが或量が解らなかつたらそれをX(エツクス)と置きなさいそしてそれを知つて居るやうに取扱つてその關係を書き下すとそれからXを決定することが出來るのだ。』彼アルベルトには是れだけで全く充分でありました。その子供は代數の問題の集めてある本を貰つて此遺漏なくもない寧ろ方便的な指圖に從つて獨りですべてを解きました。又ある時ヤコブ伯父さんは彼に證明を與へずにピタゴラスの定理を述べて聞かせました、彼の甥はそこに藏された關係を理解しそれが或る理由に基ひしなければならぬと感じました、そこで彼は全く獨りでこれに必要なことを準備し初めました、けれども此度はXを決定する「無性の計算」程簡單でありませんでした、こゝには幾何學的論證に對する巧妙さを發展せしむべき問題が伏在して居ります、その子は三週間彼の思考の全力を擧げて此定理を解く仕事に沒頭しました、彼は遂に三角形相似性に考へつきました、即ち直角三角形の頂點から斜邊に垂線を下すときに生ずる二つの直角三角形と元の三角形の相似なことです、そこで面積の比がその邊の長さの二乘に比例することを考へて彼が熱烈に望んだ證明に導かれました、是は古くからよく知られた定理に過ぎませんが、かくて彼は發見の最初の喜びを體驗したのです。

彼がベルンスタインの博く一般にわたつた通俗科學の書物を讀んだときには又新らしい世界が開かれるのを感じました、此著書は今日幾らか時代後れのものでアインスタインの子供時代の穿鑿でさへも其中に錆と腐壞のしるしを認め得ました、しかし此本の中には處々に入れられた物理學天文學及び化學に關す

る不思議さを含むたくさんの物語が書かれてあります、子供のアインスタインにとりてはそれが彼の智識に飢えた心に贈られた自然の眞實の數でありました。

ビッヒネルの「力と物質」といふ著書によつて彼に又新らしい境地が開拓されました、彼の幼稚さでは未だその內容の平凡さを辨別する力はありませんでしたが其內に示される事實の關係にひたすらに驚きの心の目を瞠はつたのでした。

加ふるに彼の注意は次に初等幾何學の書物に向けられました、そしてその中に含まれた練習問題を恐れずに僅かの間に殆んど全部解いて仕舞ました、彼の喜びは更に解析幾何學及び微積分學に突き進んだときに起りました、勿論是等は皆學校の課程とは全く離れたものでした。

それですから彼の同級生が合同の定理とか循環小數とかをやつて居つた間に彼は自由に微分學の大海に出航して居つたのです、彼の研究は隱れては居ずやがて其數學の先生によつて許價される時が來まして此十五才の少年の學識がはや大學の研究に充分な程に熟達しておることを宣言されました。

けれども此時彼の運命に不圖も一轉化が與へられねばなりませんでした、それは一八九四年に彼の兩親がイタリーにその居を移したことです、彼はミュンヘンを去ることを少しも悲しいと思はず寧ろその強制的な學校を去つてミランに行くことに大なる樂みを持ちました――恰も滿ち切つた生命の水門が開かれて今まで閉ぢ込められて居た喜びの泉がにわかに迸り出でる樣に。

南國の太陽と風景、素朴なるイタリヤの風俗自由にあらはれる街路や市場の藝術これらは皆壓迫された昔の生活に於て彼の夢想にのみ止りたる繪を現實に展開したものに外ならなかつたのです、彼が見るもの聞くものは總て活き〳〵した自然と人類の美的調和であり、その中に浸りたる彼の精神はすべての束縛よりのがれて心行く計り自由な天地に彷徨するのでありました、彼の研究は自ら文學に向けられ又屢々旅行をしました。彼はパビヤを立つて獨り遠くゼノアまでアルプスを越えました、崇嚴なアルプス連峯の姿はどんな靈感を此若き天才に與へたでありませう。

又途すがら下層の民と接しては深い同情の念をそゞろに催しました、しかし此喜びの生活はこの短かい六ケ月間の挿話を殘しただけで終りアインスタインは又數學と物理學をチューリッヒの高等工業學校で研究するために端西に行きました。

けれども彼の初めの入學に對する努力は失敗に終りました、それは入學の條件が主として敍述的科學及び彼がまた熟達しな

かつた語學を要求したからであります、そこで彼は一たんアアラウに歸つて更に彼の智識を增進せしめるためにカントンの學校に入りました、此學校の組織は實に卓絕したものであつて前の中學校のやうな軍隊式壓迫教育の氣風は微塵もありませんでした、かくて彼は直ちに不足な學識を習得しチユーリツヒの入門が許されました。

彼自らは恐らく彼自身の數學的準備がすでに科學界を帥い得る將軍の指揮刀たるに充分であることに氣が付かなかつたでせうが驚くべきことはアアラウに於ける生徒時代に於てすらその當時の科學研究の先鋒の問題に目を著けて居たことであります勿論まだ彼は發見者ではありませんでしたが十六才の少年のときに探究したことが後の彼の發見の王國に擴げられたのです。最初から彼の心を強く捕へたのは運動體の光學もつと詳しく其當時の言葉を藉りて云へばエーテルに對して運動する物體からの光の發射に關するものでありました、是は後に我々の宇宙現象の見方に深刻な改革を齎した宏大なる思想の最初の閃きです其頃彼は一學校長になりたいと考へてチユーリツヒの學校の教員養成部に入り十六から三十一まで研究しました、彼はまだ充分に人生を經驗せぬことを知り又人生の騷亂の渦中に生存の戰をすることを出來るだけ避けたいと考へ來ました、まなこに人と人とが互に陷し入れ合ふ爭鬪、暴行不眞實な野心の縺れ合ふ醜前に展開した現實の社會相にはほと〳〵嫌厭の情を禁ずるを得ませんでした、それ故その當時のものとして彼の理想はまことに遠慮勝ちなものでありました、色々な方面から彼は物理か數學の助手として望みを囑されて居たのですがかれがユダヤ人であつてまだ國籍をもたぬといふ單なる理由は此偉大なる天才を至る所で拒み、その上中學校に教へるといふ望みすら充されなかつたのです尤も彼の交際が廣くなくつて知名の人を知らなかつたことも確かに一因でした。實際少くとも其當時に於ては才能ある人と雖も此手發なしには進むべき機會を見出すことが困難だつたのです、かくて何等の保護も持たなかつた若い研究者は自ら日々の生活の必要に迫られて來ました、彼の兩親も切りつめた情況にあつたので彼は何時までもその物質的援助を受ける譯には行きませんでした、それで我々は少し經つて彼がシヤフハウゼンとベルンとに於て私教師としての細かな手當を受けて居るのを見ました。けれども彼は自ら獨立を保持し得たことに安慰を見出しなほ彼の自由に對する本能は彼自らに内在する本質的要素を發見するやうに導きました、かくてチユーリツヒの學生時代に著手した理論物理學の研究に沒頭しキルヒホツフ、ヘルツ、ヘルムホルツ、ボルツマン及びドルーデ等の著書

を讀み耽かました。彼は一九〇三年かれと研究方面を共にした南スラブの一女學生と結婚しましたが不幸にして數年の後に別れ、その後彼はその人の美徳がかれの智識に相應しき從妹エルス・アインスタインとベルリンに於て結婚し家庭的幸福の理想を見出しました。

瑞西に五年間住んだ後彼はチューリッヒの市民權を得ました之は彼を物質的に向上せしめる機會を與へ彼の大學の友達マッケル・グロッスマンは彼を助けて瑞西の特許局技手たらしめました。

丁度その局長も亦彼の友人でした。アインスタインは茲に一九〇二年から一九〇五年まで特許に關する應用の試驗に從事しました。この位置は彼に、工業的方面を自由に研究する機會を與へると同時に彼の理論的考究に充分なる餘裕を與へました。

かくて一九〇五年は愈々彼の天才の蕾が香り高く開き初めた時であります。先づ彼は物理學年報に「光の發生及び變化に對する實座の一見解について」―「物體の慣性はそれのエネルギー含有量に關するや」―「ブラウン運動の法則」―次に最も重要なる論文「運動物體の電氣力學について」之は特種相對性理論の革命的思想を含んで居るのですが是等の研究結果を引續いて發表しました。之等の論文のくわしくは石原純先生著「アインスタインと相對性理論にあります。なほ一言かれのドクトルの論文は「分子の大きさの新決定」といふのであることを注意しませう。すべて彼の論文は理論物理學の眞髓に觸れてそこにより深き考察並に擴張を與へるものでありました、

有名な理論物理の大家マックス、プランクは彼に友情の籠つた手紙を送つて「運動物體の電氣力學」の論文を賞讃しましたこの手紙以後かれは續々として彼の崇拜者を得ました。

大學に於ける助教(ドツエント)の位置を得るといふことが彼の志望でしたが初めベルン大學ではそれを拒みました、しかし彼は結局ベルン大學に任命されることになりましたが今度はチューリッヒが彼を歡迎しました、そして一九〇九年チューリッヒ大學理論物理學の助教授となり彼のまわりに多數の聽講者が集ました、けれどもこの境遇に於ては彼が特許局技手をしておつた時代の如き靜かな落付いた充分研究し得る餘裕が少かつたのでした、次いで一九一一年かれはプラーグ大學の正教授に任ぜられそこではより餘りある境遇に置かれました、一九一二年の秋またチューリッヒに歸つて高等工業の教授に招かれましたが彼の名聲が漸く高まつて來たので彼の學問上の友人なるプランク其他の人々が双手を舉げて彼を招きましたその結果遂に一九一四年の始に獨逸のベルリン大學に有名なファントホッフの遺した講座の

後繼者として任命されベルリン郊外のカイゼル・ウイルヘルム研究所の敎室內で專ら研究に從事することになつたのです。彼の一般相對性理論は一九〇七年に生れました、この特殊から一般へ移ることは誠に偉大なる飛躍であり且つ最も困難を極めたものでした。そして遂に一九一一年光が重力場に於て屈曲することを豫言しました、是が一九一九年の日蝕觀測の際確められたその數値さへも完全にアインスタインの說に一致したことは誠に驚くべきとであつて此ために彼の理論は俄に世間の注目を惹いたのです。チエヂエトムソンは之を海王星發見以來の大豫言であると賞揚しました。なほ有名なアンリ・ボアンカレーがアインスタインがチユーリツヒの敎授となつたときにそれを推奬した祝の手紙を讀みませう、「アインスタイン氏は私が是迄出會つた內で最も創作的思考を有する一人です、あの若さにも係らず彼は既に現代有名なる學者等の間に非常に尊敬すべき位置を占めて居ります、特に彼に對して我々の驚くことは彼が自らを新しい概念に整齊し且つそれからあらゆる可能なる演繹を引き出すことの容易さです、彼は古曲的の原理に少しも束縛されることなしに物理の問題に對立したときには恰も蜘蛛がその巢を作るごときあらゆる思考し得る可能さが彼に見えるのです、そして彼の心の中で何時かは實際に經驗したことを說明される所の新しい現象の豫期に變形されるのです、……未來は更に〳〵アインスタインの眞義の解明に與へられるのでせう。そして彼を止め得る大學は此若き大家との結合から充分に名聲を荷うことになるでありませう」

終りに彼の音樂に對する才能は十二才の時よりの詩想と相待つて非常にすぐれて居りことにバイオリンストとしてブラハムのソナタ或はベエトウベン物或はバツハのチヤコンヌ等を試みる技は又神に入つたものであるといふことを付け加へたいと思ひます。

(此アインスタイン小傳は殆どアレキサンダーモスコスキーの著書に據つたことを注意して置きます)

アインシタイン會見記

室伏高信

私は、去年伯林にゐた間に、アインシタインとは三度會ふことの機會をもちました。電話で話したことも一度ありました。手紙を貰らつたこともありました。しかし、何れの場合も、主としては事務的な用向きのために會見したのでした。それに、私には彼の相對性理論は、充分に理解ができてゐません。私たちのやうな仕事にあるものは、こうした科學の根本原理については、何よりも先きに充分な理解を必要とすべきだとは思ひながらも、豫備知識の缺乏は私をして容易にアインシタイン説に近づけてくれないのです。私が相對性理論について、今まで讀んだ僅かばかりのものゝうちでは、チエ・エ・トムスン教授の「科學梗概」が一番に素人向きだと思はれるのですが、この程度のものでは、今は誰れでも知らぬものはないといつてもいゝ位ひでしよう。私はアインシタインに會ふ前に、せめて彼の相對性理論の大體は心得て置きたいと思つて、知識の急造を始めたのでした。彼自身が一般讀者のために書いた解説書、數學のアメラート拔きで書いたと、アインシタイン自身のいふてゐる解説書(A. Einsten, Über die spezielle und die allgemeine Relativitätstheorie)は、無論誰れにも分り易く書いてゐるだけに、誰れにもある程度までは分らないことはないのですが、そして私もまたこの書物からぼんやりながら彼の相對性理論の輪廓だけは窺ふことが出來ました。特にこの書物の最後の部分をなしてゐる、彼の宇宙論(Betrachtung über die Welt als Ganze)の部分には非常な興味を感ずることができました。しかし要するに彼の理論そのものは、何故に空間が歪むのかといふやうな物理學的な問題を離れても、エアンスト・カツシラーや英國のホルデーン等の論んじてゐるやうな認識論的の立場からしても、たゞぼんやりした理解しかもつことができなかつたのです。私がアインシタインに會つてから、もう一年になります。この一年間においても、私の知識には何の進歩もありません。今日も尚ほぼんやりした輪廓のうちに アインシタインの偉

大さを想望してゐるに過ぎないのです。正確にいへば、アインシタインが果して偉大なのかどうかといふことも私には分らないのです。偉大なものかも知れぬ、でないのかも知れぬ。私自身にはそれを信仰することも、證明することも、無論できないのです。しかし、彼の學説が今日までの科學の生み出した最高の知識の究局に立つておることも疑ひはないし、また彼の偉大さは世界のあらゆる國のこの方面の専門家によつて認められており、また彼の偉大さを認めないものは、最早や奇を好む人の説だとしか思はれてゐないのであるから、私達のような素人は、この世界の専門家の説にたゞ聽從するよりほかにしかたがないのです。

私が倫敦にゐた時にアインシタインも倫敦にきました。彼はアメリカに招かれて講演した歸途に倫敦に立寄つたのです。彼はホルデーンの客となつて數日をこゝに費しました。倫敦の諸新聞はアインシタインについての記事で數日間の賑やかさをつゞけまして、彼の講演がキングス・カレッヂで催された時は、五千の聽衆が、この獨逸産猶太人の風貌を見るために大講堂に集まつたのでした。そして他の五千人は入場ができなくて空しく引返したのです。この講演の初めに、アインシタイン自ら、彼の講演があんまり解き易くはないだらう、といふたことがありました。英國の一新聞記者は、この會堂に集まつた五千人のうちで、そのうちには無論多くの専門家がゐたのですが、アインシタインのこの講演をほんとうに理解のできたものは一人もなかつたらうといひました。それでゐて、この席上で述べたホルデーンの言葉に、何人も聽從するの喜びをもつたのでした。ホルデーンは、アインシタインを批評して、「單純な、謙抑な、そして非常に偉大な人、過去五百年間における最大の思想家の一人」であり、「二十世紀のニユウトンで、コペルニクスや、ガリレオよりも、そしてニユウトン自身すらよりも、思想上により偉大な革命をなしとげた」人だといつたのです。

こういふわけで、私はアインシタインの理論を充分に理解しないでアインシタインに會つたのです。學問上の興味から彼に會つたのではなくて、單なる事務的の用向きから會つたのです。また彼と相會ふこと三度に及んでゐながら、相對性原理の内容については、殆んど一言も話してはゐません。また私は、私に充分の用意なくして、言葉を換へていへば、彼を充分に理解し、稱讃することができ、若しくは批評することができるのでなくては、彼との會見において、私には學問上の話をもちかけるの興味が起りえないのです。

私がアインシタインに初めて會つたのは去年の九月二十六日のことでした。この日、大使館の佐久間君が、特に私のために

アインシタイン夫妻を伯林の一料理店に招いてくれたのです。フランツオアジツシエ・シトラツセの一角、フリードリツヒ街との交叉點に近いところの、もう大部時勢後れのしてゐるレストウランであつた。私と佐久間君とは、豫定の時間よりも數分早く設けの席について、いろ／＼と雜談を交してゐるうちに、間もなくアインシタイン夫妻が室に入つてきました。室といつても借りきりの室ではなくて、二、三十人の人たちでもう一杯になつてゐた室の一隅に、私たち四人に與へられた一つの卓子があつたに過ぎないのです。私はこの時初めてアインシタイン夫妻を見たのです。早くから寫眞は見てゐたので人込みの中でも、無論直ぐと彼等夫妻を見分けることができました。彼は獨逸人としては餘程身の丈けの高い方でもあり、肉も豐かで、衆人の中にあつて、體格のうへでも異彩を放つてゐます。たゞこういふ人にありがちな、少しばかり猫脊をしてゐるのです。アインシタインに會つた人の凡ての印象が一致するように、彼の風貌はどうしても一見したところでは科學者とは見えないのです。數學が科學の基礎であると考へてゐる彼、數學によつて宇宙を觀測する彼、そうした人に想像されがちな、冷やかな性格をこの人の風貌のうちに見ることはとてもできないのです。私は彼のことを思ふと直ぐにウエルス、カアペンタア、そしてロマン・ロオランのことを思ひ出されないではゐられないほどに、風貌のどこともなしに、柔らか味と、暖か味と、そして夢幻的な様子とに滿ちてゐるのです。私たちはそれぞれ卓子につきました。私とアインシタインとは並んで座しました。彼の相對性理論のほんとうの價値を味ふことのできない私、從つて彼の學問上におけるほんとうの地位を批判することのできない私にも「二十世紀のニウトン」と肩を並べて座つてゐるといふことを考へると、あまり悪るい氣味はしなかつたのです。「二十世紀のニユウトン」が私の右側に腰掛けて、私と同じ皿からのものを食べながら、お互に何ごとかを話してゐるのだと思ふと、多少むず痒いやうな氣持ちもしないことはなかつたのです。しかし「二十世紀のニユウトン」を目のあたりに見る、彼はどうしても「二十世紀のニユウトン」とは思へないのです。彼の目は星のようなやさしさをたゝえてゐるのです。彼の唇は溢れるやうな喜びを滿たしてゐるのです。彼の無造作にちゞらしてゐる髮は、どう見ても生れながらの藝術家としか見えないのです。卓子に着いたアインシタインは、相對性理論の彼ではなく、バツハ、モツアルト、シユウマンを彈くヴアイオリン演奏家としての彼であつたのです。佐久間君は獨逸語の名手でもあり、趣味も豐かであるので、アインシタインと面白く話してゆきます、

私は半ば傍聽生の感があつたのです。今は、私たちの間に、どんな話が交換されたのさへも、私には殆んど記憶がありません。また記憶してゐなければならないほどの重要な話もなかつたのです。話は主としては日本の風俗、習慣、文學などのことであつたように思はれます。彼には、東洋の一切のことが、非常な興味であつたのです。話のたび／＼に、彼はほんとうに驚いたような様子で、コロサアルー、コロサアルー、といふ感嘆詞を使ふのでした。私たちにとつては何んでもないことが、彼にとつては不可思議であるのです。私たちにとつてはどちらでもいゝようなことが、彼にとつては大變なことであるのです。五歳の時に父から羅針盤を見せられた時に「非常な驚き」を感じた彼は、四十餘歳になつてからも、一寸した日常の話にも「非常な驚き」を感じつゝある、五歳のアインシタインそのまゝであるのです。その驚きから彼の相對性理論が生れたのだと、彼の傳記家は書かなくては止まないのでしよう。

この席上で、私は、彼が倫敦にゐた時のことを思ひ出して、ホルデーンの「相對性の支配」のことを話したことがあつたように記憶する。私には、アインシタインの理論が、レンハルト教授なぞのいふように「證明」に不充分であるのかどうか、ある一部の人々の非難するように、「あまりに」に哲學的であるのかどうか、私には少しも分らない。しかし「あまりに」に哲學的であることが何故に非難の理由となることのできるかは一層に分らない。で私はホルデーンの哲學上の考と一致することはできないが、しかしホルデーンの試み、形而上學からアインシタイン說を說明したことには可成りの興味を感じてゐたのです。私のこの考をアインシタインに話して見たのです。ところがホルデーの客として、彼から「二十世紀のニユウトン」と讃美をあびせられたアインシタインは、ホルデーンその人とは全く違つた考をもつてゐたのです。彼は、自分の理論は、形而上學的のものではないのだと、一言のもとにいつてのけたのです。私は彼とモスコウスキイとの對話を思ひ出さないではゐられなかつたのです。モスコウスキイは旣にアインシタインについてこのことを書いてゐます。それによるとアインシタインは形而上學によつて、最後の問題が解決されるものであるとは考へてゐないのです。丁度彼の師エアンスト・マツハが、「認識と誤謬」といふ哲學上の大著述をなしてゐるにもかゝわらず、彼自らは哲學者でないといつてゐたと同じように、アインシタインもまた彼自身の立場を次のようにいふてゐるのです――gar kein Philosoph, sondern nur Naturforcher――全く哲學ではなくて、たゞ自然研究者である、と。またいふ私は微塵も哲學者

ではなく、またそうならうとも思はない、私は哲學では「素人獵師」であるに過ぎないのであると。

私はこの話につゞいてホワイトヘッドの名をも擧げたように記憶します。彼が倫敦にゐた時に彼とホワイトヘッド教授との間に相對性理論について大激論があつたからです。彼はホワイトヘッドの名を聽いて微笑を浮べながら、たゞうなづいてゐるのでした。

二時間ばかりの後に、アインシタイン夫妻は卓子を立たうとしました。夫人は馳走の禮を述べました。そしてこうした馳走彼女の言葉で云ふと、こうしたおいしい料理は、戰爭が始まつてから最初に食べることができたといつて、心からの感謝を述べました。そして戰時及び戰後における獨逸の大學教授の生活難が如何に痛ましいものであるかを話しました。私と佐久間君とは、アインシタイン夫妻の歸つた後で、この夜の愉快な印象を語り合ひながらレストランを出て、暫らく夜の伯林を散歩してから分れました。私は一頭馬車に乘つて、甘い回憶に醉ゐながら、チーアガルテンの暗い道を、美しい夢として過ぎました。アインシタインは私と別れる時に、私の用向きのことについては明日手紙で返事をするからと約束して歸りました。翌日の晩に私の下宿に、アインシタインからの手紙が着きました。その手紙は、一切が私の希望通りであつたのです。そして最後にの次ような一句を書き加へてありました。——Unser gestriges Zusammensein war für mich ein schönes und unvergessliches Erlebnis..........A. Einstein.

× × × × × ×

私はアインシタインに會ふ前にモスコスキイの對話錄を讀んでゐました。その最後の一章「彼自身」のうちから、人としてのアインシタインの面影を、少しばかりこゝに挾まして頂きます。アインシタインの人物について書く人は、みなこのモスコウスキイを引用してゐるやうです。だから私のこゝに書こうとする部分も、その人たち——石原純、寺田寅彦、桑木彧雄等の諸君——の書いてゐるものと重複する點もあらうと思ひますが、こゝに私の印象記の不完全を補ふためには、矢張りモスコウスキイの助けを借りた方が便利だと思ひます。そしてこの書物はありふれた印象記ではなくて正確さが、アインシタイン自身によつて認められてゐます。アインシタイン夫人は、ある日私に、モスコウスキイを讀んだかと問ひました、私は部分的には見てゐると答へました。すると夫人は、あの書物は大變よく書いてゐるからといつて、私の前でその內容を保證してくれました。

アインシタインは一八七九年三月獨逸の小都市ウルムに生れ

ました。彼の父は猶太人であつたのです。そのために、小學時代から、彼は猶太人としての悲しみを味はされたのです。小供の時分には特に勝れた頭腦として認められたのではなく、寧ろ普通の頭、普通の成績で、記憶なぞは寧ろ不惱かの方であつたに過ぎないのです。それに口をきくことが下手で、遲くて、少けなくて、兩親は密にこの子供が一人前の人になるかを疑つた位ひであるのです。特に内氣の性質で友達も少けなく、非社交的にできあがてゐたのです。小供等は彼れ、アルバアトを「ビイダアマイアア」と綽名したほどに愚直な少年であつたのですチュウリツヒで專門學校に入るようになつてからさへ、彼の將來の望は學校の教師になることであつたので見ても、彼の人となりが分るように思ひます。彼は世の偉人とか英雄とかいふ人々によくあるやうに、少年時代から野心家ではなかつたのですしかし彼の少年時代から一貫して彼の人格のうちに見られる一つの特色があるように思ひます。美と眞理とに對する情熱がこれであるのです。

彼は小供の時から「ビイダアマイアア」といはれてゐたが、またそれだけに、眞理に對しては病的の愛着を感じてゐたといふことです。この傾向は彼をして數學に對する興味を起させた數學問題では、可成早くから才能を發揮してゐました、ピタゴラスの定理について、彼が長い間欲望してゐた解決ができた時にこの眞理を熱愛する少年は眞理愛に對する一層の情熱を高めたことは勿論でありましよう。十五の時には既に微分を解し、優に大學生の實力があるとされるに至つたのです。

彼はチュウリツヒで數學を學んだのです。數學と彼の理論とは勿論切り離して考へることはできないのです。數學の卓越性は彼の常に認めてゐるところであるのです。彼が數學を好んだのは彼が眞理への最高の道の一つが數學にあることを認めてゐるがためであるのです。科學の目的は彼に從へば眞理の探求のほかの何ものでもないのです。この眞理こそ彼、相對性理論の著者としてのアインシタインにとつては、「絶對それ自體」であるといふのです。そして目的は遠く、容易に眞理に到達ができないにしても、そこに「方向」(リヒトング)を見ることができるといふのです。

しかしアインシタインは、數學が、眞理への唯一つの道であるといふのはないのです。カントが、自然科學は、數學をそのうちに含むでゐる分量だけ眞理を含むでゐるといつてゐる言葉は、たゞ論理的知識を感情的知識源泉から引離した時にだけ當て箝めることが出來るのです。言葉を換へていふと、彼は、有機的生物學的科學は、純粹數學的思索のほかに立つべきものであるといふのです。「自然の書物」はガリレイにとつては三角形と、四邊形と、圓と、球とで書かれてゐるが、彼にとつては、この

原則は、一般的に當て箝めていふことはできないのです。彼は直觀の力を認めてゐるのです。純粹數學のほかに直觀的方法の價値を認めてゐるのです。彼曰く、若し「自然の書物」がガリレイのいふとほりだとしたら、この自然の書物は、ゲエテには讀むことのできない書物であるべきです。何故ならゲエテの精神は全く非數學的で、若しくは反數學的であるからである。それにもかゝわらず、ゲエテは彼の偉大なる直觀によつて自然と直接交感し、そしてその結果は如何なる科學的研究者も及ぶところでないからであると。

彼は、科學の凡ての大功業は、直觀から出發してゐるといひます。即ち公理から出發してゐるといふのです。公理とは、論理的方法の産物ではなくて、直觀の所産であるからだといふのです、彼はまた數學の天才の多くが優れた創造力の持主であることも指摘してゐるのです。

「私個人としては、偉大な藝術的製作において、最高の享樂を感んずるのです。」

アインシタインはこういつたことがあります。そしてこの藝術的製作からうける喜びは、他の如何なるものからよりも深き精神的幸福を感んずるといつてゐるのです。彼は文學を愛します。シエークスピイアを讀み、ゲエテを讀み、ホオマア、ストリンドベルク、ドストエフスキイを愛讀します。就中彼はドストエフスキイに最高の喜びを思ふてゐるのです。「ドストエフスキイは私に如何なる科學者よりも、ガウスよりもより多くのものを與へました。」彼はこういつてゐるのです。世界の科學的知識の最高所に置かれてゐる彼の口から、こうした言葉の吐き出されてゐるのを、單なる個人的感想だとして葬り去ることがどうしてできましよう。

アインシタインは早くから音樂に趣味をもつてゐました。ヂヤン・クリストフのように、子供の時に獨り自作の歌を歌つて樂しんでゐたといふことです。彼は、科學者として名をなさかつたにしても、音樂家として名をなすことができたらうといはれてゐます。

彼のヴアイオリンは優に演奏會の壇上に立つに値ひするといはれてゐます。彼は、特にバツハや、モツアルトなぞの古典的なものを喜ぶといふことです。そして交響樂の作者としてのベエトベンや、またはワグナアなぞは、彼にはあまり訴へるところがなく、ショオパン・シュウマンのようなにぎやかなものも彼の好むものではないといふことです。九つか十歳になつても倘ほ恥しがりであつた彼は、今も倘ほにぎやかしいものよりは落ちついた、内面的な、古典的なものを喜んでゐるのです。

彼は繪畫にはあまり興味をもたないが、彫刻にも趣味をもち特に建築は、彼にとつては崇高なものであるといひます。そは彼にとつては、ゲエテの所謂「氷結した音樂」(ゲフローレネ・ムヂィク)であるといふのです。就中ゴシックの建築は、彼にとつては、凍結したバッハの音樂だといふのです。

　しかも彼にとつては、文學よりも、音樂よりも、建築よりも若しくは科學の研究よりも、より多く愛すべきものがあります。小供愛がこれであるのです。如何なる時においてよりも、小供の相手である時が、彼の一番に樂しい瞬間だといはれてゐます。

× × × × × ×

　アインシタインからの手紙を受取つてから二、三日たつて、私はまた彼に會つて話したい用向きがあつたので電話をかけました、彼がその頃よく遊びに行つてゐたセントラル・ホテルのG君の室からであつたように記憶します。私はたゞアインシタインの都合を聽きたかつたので、話は取次ぎの人でも無論よかつたのです。しかし私が取次の女に種の用向きを話すと、私の言葉の不完全のためであつたせいか、アインシタイン自身が直ぐと電話口へ出てきました。私は多少面喰つた形であつたが、それでも手紙の禮を述べて、そして至急訪問したいからと頼みました。では明日午前十一時に來てくれといふことでした。彼の言葉は、例のように、落ちついた、ゆかしみのあるものであつた。

　私は翌日十一時少し前にチイア・ガルテン驛前から自働車に乘つてシャーロッテンベルヒの、彼の住所の方へと向ひました番地の家に着いて見ると、アインシタイン教授はもう二年も前にシエーネベルクの方へ引越したと告げられました。私の手帳に書いてあつたアドレスが大部古るいものであつたのです。それでも私はこのアドレスを、私が伯林へ着いた晩に、ホテルの電話帳から書きとつて置いたものでした。電話帳の古かつたことには私は氣がつかなかつたのです。そのホテルといふのは、ポツダマア・プラッツに立つてゐるヒュルステンホーフのことであつた。私は伯林に着いた晩に、このホテルの三階の、プラッツに面して角の室から、こゝに雜沓する人や、車や、馬やの群を眺めてゐた時の氣持ちを今に忘れることができないでゐます。そしてまたこの一角こそ、カアル・リイブクネヒトが屢々伯林の勞働者の革命運動を指揮しながら、大道演説をやつたところ、特に彼がまだ世界戰爭の眞盛りのある年のメーデーに、こゝで勇敢に非戰論を唱へたために捕へられて獄中に送られたことなぞの、感激的な事實を心に藏いてゐたので、私にはポツダマア・プラッツの初印象は永く忘れることのできないものであるのです。

自働車がシエーネベルヒのアインシタイン邸へ着いた時は、時間はもう三十分も豫定より過ぎてゐました。それでも是非に會いたいと思つたので彼の家に入つて行きました。この邊一帶はクルヒユルステンダムあたりのように金持ちの住むところではないが、一面に淸洒で、靜かで、學者や俸給生活者やその他のプテイ・ブルヂョアの住むでゐる地帶であつたように思ひます。この日は幾らか小雨が降つてゐました。雨に濡れた煉瓦造りの建築が大地にしつかりと根を据えてゐました。私がエレベイタアに乘らうとすると一人の若い婦人がやつぱりそれに入つてきました。この婦人は五階のところでエレベイタアを降りました。そしてプロフエサア・アインシタインも矢張五階だといつて私をそのプロフエツサア・アインシタインのドアの前まで連れて行つてくれました。彼女は特に「プロフエツサア」といひました。プロフエツサア・アインシタイン夫妻は五階に住むで、彼の家族の人たち、何々アインシタインが四階に住むでゐたからです。名刺を出すと、取次ぎの女が直ぐと入つてから二つの目の左側の室に私を案內しました。この室がアインシタイン教授の書齋になつてゐました。アインシタインは藏書家ではないと聞いてゐましたが、この書齋に入つて見ると、これは世界的の大科學者の書齋かと思はれるほどに貧弱なものでした。私たちのような貧書生のもつてゐるよりも、四分の一か三分の一位ひの書物しかなかつたのです。それでも書齋の一角には、彼の相對性理論についての樣々の著書が並んでゐました。また一方にはマツハ、プランク、ポアンカレ、ミンコウスキイなぞの諸著書が並んでゐるのでした。

彼の机は裝飾用かと思はれるほどに光澤のある、奇麗なものでした。机のうへには、大きな望遠鏡が一つ、それから彼の愛孃の寫眞が一枚飾つてありました。アインシタインは間もなく入つてきました。私は用向だけは簡單にすませました。しかし私の訪問した時間が豫定より遲かつたので直ぐと第二の約束の人が見えました。で私は次の日を期して再訪問することを約束しました。彼は、次の日の三時に、私を茶に招いてくれたのです。この日はアインシタイン夫人は輕い病氣のために閉ぢこもつてゐるとのことでした。私が訪問時間の後れた理由を話すとアインシタインはわざ〳〵大きな電話帳をかゝへてきて、彼の住所の變つたことがもう新らしい電話帳に出てゐることまでも「證明」してゐました。

次の日は間違なく三時に訪問しました。彼の書齋で彼と私と話してゐる間に、アルバアト！アルバアト！と呼びながら夫人

が入つてきました。茶の用意ができたことを知らせにきたのでした。夫人といふのは、第二回目の夫人なのです。アルバアトアインシタインは早く一九〇三年、つまり二十五の時にスラヴの一婦人と結婚しました。しかし二、三年でこの婦人と別れ、そして彼の從妹に當るルイゼ・アインシインと再婚したのですそれが今のアインシタイン夫人であるのです。矢張り猶太人であるのです。アインシタインその人には、私にはどうしても猶太人らしい面影を見ることができないのですが、夫人の印象は多少趣きの異つたものであるやうに思ひます。

私たちはルイゼ・アインシタインに導かれて次の室に入つてゆきました。この室は疊數にして十四疊か十六疊位ひの大きさであつたかに思はれます。光線もよくとれてゐるし、モエーベルも立派でした。一方にクラビイエルが置いてあり、一方の机のうへには、支那、印度、日本あたりからの輸入品らしい樣々の小さい陶器類が數十となく並んでゐました。みな小供の玩具のやうなものでした。壁には東洋趣向の繪がかけてあり、また幾つかの彫刻も飾つてありました。私とアインシタイン夫妻との三人は、室の中ほどにある一つの卓子を圍みました。茶器や菓子器もまた東洋趣味のものでした。カウツキイの家根裏生活の素朴なのに比べるとこの家は遙かに廣くもあり立派でもあることを私は思はないではゐられなかつたのです。しかしそれは贅澤だとの感んじを與へたのではなくて、寧ろ彼の趣味の豐かなことを語つてゐるやうにも思はれました。

アインシタインは小供のやうな無邪氣さをもつてゐました。小供をほんとうに愛しえられる人は彼自身が小供心でなければならないやうに、アインシタインは全く純眞な小供心でゐるやうに思はれるのです。彼の態度は非常にゆつたりとしてゐます。しかし彼の目は始終夢みてゐるやうに、幻想そのものであるのです。口元も小供のやうに愛くるしいところがあつて、その聲さへも九つか十の小供の聲だと思はれるほどであるのです。

東洋人はみな小さい。人が小さいから家も小さいだらう。どんなに小さいか？どんなに小さい家だらう！

彼はこういつて私に尋ねるのです。自問自答もするのです。東洋の家が如何に小さいものであるかといふことを想像して、そこに彼自身の美しい東洋の空想を畫きながら、何んともいはれない喜びを感んじてゐるのです。たゞ家だけではない。東洋人の一切の生活が、彼にとつては美であるのです　機械文明を謳美することを背んじないこの大學者は東洋人の生活を原始的なものだと考へて、そこにこのろへもない人間生活の美を想ふて

ゐるのです。私はかうした東洋讃美者に會ふたびに、この美の東洋生活が、機械文明のために傷ましくも破壞されつゝあることを告げなければならないのを、常に非常に心に苦しく思ふのです。アインシタインは容易に彼の畫いてゐる東洋の美の空想を破壞することを肯んじないのです。人間が小さいから家が小さい。でなければならない。彼は東洋人の生活をこの論理から離して考へることを欲しないのです。彼は東洋の人ばかりでなく、その自然の美を想望してゐます。山、川、土、草、木、動物、それ等のものが如何に西洋のそれと異色のあるものであるかは、彼の想像のうちに常に往來してゐるのです。眞理の追求者である彼はまたこのうへもなく美の追求者であるのです。

彼はこの頃伊太利への講演に招かれてゐました。彼が少年時代にその父母とともに伊太利に住むでゐたことがあります、ミランの風光、崇嚴なアルペンの姿態は、この少年音樂家の心にどれだけ深く印象したことでしよう。しかし彼は伊太利よりも、端西よりも、日本の山川風景に憧憬してゐます。私はもう可成廣く旅行した。アメリカは私にはもうとても堪へられない。私の行きたいと思ふのは東洋だけである。東洋！印度！支那！日本！彼方への旅行がどんなにか美しい旅行であらう！印度洋の熱度、私には健康の自信が充分にある。日本へ行くならアメリカからではなくて、いくら遠くても、いくら暑くても、私は印度洋から行きたい。小さい人、小さい家、見たことのない植物と果物！彼の目はかうした想像に滿たされてゐたのです。

彼は東洋の音樂や文學のことなどにも深い好奇心をもつてゐた。私の知識と言葉との不充分は彼の想像に滿足を與へることはできなかつたのです、しかし琴、三味線などの名前をもち出すと、コト！サミセン！なぞと繰返しながら、糸が何本あるかと、若しくは私にはとても分らない音樂上の細かいことなぞを尋ねるので、音樂の知識もなく、またその貧しい知識だけでも充分には表現することのできない貧しい言葉であるので、私は全く弱つてしまいました。

アインシタインは政治上にも深い興味をもつてゐました。モスコウスキイの記るしてゐるところによると、彼は機械文明の呪咀者の一人である。「石炭は萬物の尺度である」といつたフリイドリツヒ・チイメンスの言葉は彼にとつては決して眞理では

ない。生産物が増加しても、貨物の生産費が安くなつても、それが直に人間の幸福だとは、彼の信ずることのできないところであるのです 彼はもつと内部的な生活を見てゐます 内部的生活に喜びを思ふてゐます。石炭の百萬噸よりもバッハが、モツアルトが、若しくはドストエフスキイが、若くは天眞爛熳な小供等とともにあることが、彼にとつては遙かに大きな喜びであるのです。國家も、彼にとつては自己目的ではなくただ手段である。「汝の義務を果たせ、凡ての人に援けを與へよ、凡ての物質的壓迫を除けよ」アインシタインはこういつてゐるのです。だから、「私を社會主義者だといひたいならいつてもいい。」こういふこともいつてゐるそうであるのです。

彼が純粋の人道的なデモクラートであることは少しも疑のないことのように思はれます。nicht mitzuhassen, mitzulieben bin ich da——私は憎むためにではない、愛するためにこゝにあるのです——ソホクレスのアンゴメの心は、またアインシタインの心だといふのです。

私たちの卓子でも、話が獨逸の政治問題、特に大學における教授や學生の態度などに移つて行きました。私に獨逸の大學が非常に反動的であること、大學が思想的に反對運動の原泉であるといふ私の感想を話しました。アインシタインは直ちに私の意見に賛成しました。そして社會主義者は獨逸の今日の大學ではその地位を維持することが困難だとまでいひました。エルゼ夫人は、この點で彼女の良夫と意見を異にしてゐました。そして社會主義者の大學教授が幾人かあるとまでいひました。彼と彼女との間に議論が始まりました。彼も彼女もともに自説をとつて動かなかつたのです。

獨逸の大學に社會主義者のゐることは勿論何人も否まないのでしょう。現に幾人かの名前は擧げることができるからです。クノウが伯林大學に居り、ヴヰルヴラントがハイデルベルヒに居るといふことだけでも、この事實に否むことはできないのです。しかしそれ等はほんの例外でもあり、特にヴヰルブラントなぞは、彼が革命の狂熱時代に、自ら社會主義と名乘り出たばかりでなく、ライン地方を親しく實見して、その邊一帶の鑛山勞働者を風靡したスパルタクス運動に非常な同情をもつて、彼の社會主義者としての門出の書物、「デア・ゾチアリズムス」の一章を革命的記述で飾つてゐるにかゝわらず、近頃の版では、この部分を彼の書物から全部除きとつてゐるほどに 獨逸に

おける革命的狂熱のさるとともに、彼自身の態度をも變へてゐるのです。今日では、獨逸の諸大學はこの國の反社會主義及び反猶太人運動の思想的根源をなしてゐるのです。アインシタイン自身も、この反猶太人運動のために伯林大學を追はれてゐるのです。ハイデルベルヒ大學のレンハルト教授の反相對性理論が獨逸人の間に相當にもて囃されるのもその學問上の力ではなくて、反猶太人運動からきてゐるのだといはれてゐます。

アインシタインは心からの平和主義者です。昨年伯林で「非戰(ニイ・ヴイ)運動(ダアクリイヒ)」のための大示威運動のあつた時に、アインシタインは旅行先からわざわざ祝電を送り、それがルストガルテンで朗讀されたこともありました。戰爭中にも、彼はロマン・ロオラン、バアトランド・ラツセルなぞとともに戰爭反對の國際的宣言に署名しました。今年ラアテナウが殺された時に、アインシタインもまた反動派の狙つてゐる人物の一人であることが分つたといはれてゐますが、こうして彼が反動家から狙はれるのも、彼が猶太人であり、平和論者であり、世界主義者であり、デモクラートであるがためであるにほかならないと思ひます。彼が近頃ノイエ・ルンドシヨウのラアテナウ記念號のために、この暗殺された彼の新しき友ラアテナウについて書いてゐる一文は、猶太人としての彼の心持を、如實に語つてゐるように思はれます。

私たちは二時間ばかり話しつゞけました。それが終つてから私はエルゼ夫人とまた事務上の話を交はしてこゝを辭しました。アインシタインはその間他の訪問者と話してゐました。私が歸らうとすると、夫人はアルバアト！アルバアト！と再び呼びました　アインシタインは何時もの悠揚な態度で私たちの室に入つてきました。夫人は、彼女の良夫がアメリカで撮影したといふ一枚の大型の寫眞をとり出して私にくれました。彼女の良夫は、それに「記念のために、一九二一年九月二日アルバアト・アインシタイン」と書き入れました。彼の家を出た時は、もう夕暮れ近くでありました。私はグリユウネワルトを通つてクルヒユルステンダムの方へと歸つてゆきました。

（一九二二、九、二二）



世界經濟の恢復と日本支那米國の使命

（其二 完結）

福田徳三

私は現下の歐洲の經濟難を主として戰爭による物質的破壞に基因すと爲す說を斥けて、其主要の原因は第一次的に戰時より始めて戰後に涉る心理的方面にありと主張した。其心理的方面は更らに之を二つに分けて見ることを要する。即ち第一は、民族と民族、國と國、人と人との間に俄かに昂まつた憎惡、嫉妬、侮辱、輕蔑等の念是れであつて、私は又此念を斯くまで增長させた主たる責任を、虛僞濫發の所謂『プロパガンダ』に歸せねばならぬと信ずるものである。然るに心理的方面の第二は、右とは聊か趣を異にし、必ずしも其全部が人爲的原因に胚胎するものでなく一部は無論人爲的であ

るが他の一部（恐らく其れはより大なる部分）は、人爲を超越する時運、契機の力に基因するものである。私は之を『コンヂアンクチューア』と名けた。經濟生活に現はれる群衆心理は、決して常に同一水準、同一張力を持するものでなく、却つて常に盛衰し、消長し、隆替しつゝあつて、其狀恰かも潮の干滿に於けるが如くである。此事は近來米國の學者ミッチエル氏が特に綿密に研究して、幾種の著書に於て公けにして居る處である。吾所謂恐慌の研究に指を染めた學者は、多かれ少かれ此點に意を注いで居たのである。其中でも傑出したのは、マルクス批評に立脚したトウガン・バラノフスキー氏の英國恐慌史研究是れである。其他にはジエヴオンスや、ジュグラー等の研究がある私も去明治二十九年『恐慌及不景氣』なる論文に於て此研究を少し試みたことがある。此の消長の變遷は必ずしも物的に異動が起ることを要せない、物的には殆んど此れと目指す可き變化が起らないのに、唯だ人心の張弛、緊緩の作用によつて、經濟生活の活動が或は大いに活潑となり、或は著しく萎微沈衰する。此作用は人爲の工夫を以て之を若干左右し得ることは勿論であるが、然し其の工夫は屢々錯誤に陷り却て豫期とは反對の結果を生ずることあり、若くは、其作用が意想外に大である爲めに、却つて害毒を醸すこと往々にして存するのである。然しイクラ人爲の工夫を旋らしても猶ほ如何ともする能はさる不可抗的の要素も多大に含まれて居る。今日は實に一面に於て、此の不可抗的の自然作用によつて、人心の沈滯を來したるのであるが、更らに、他方に於て、此の沈滯を累加せしむ可き事情が多々存する。其事情中最大なるものは、上段に指摘した民族間、個人間に於ける懷疑、憎惡の念の昂進是れである。此の昂進より起つた物質界の行詰は更らに此の萎微狀態を深みへ深みへと導きつゝあるのである。世界の經濟恢復其事を期するには、先づ此等の可抗的、可避的沈滯要素の除去から着手せねばならぬのである。其れには先づ以て人爲的に人心を萎微せしむる各般の事情狀態を一日も早く撤去せねばならぬ。然るに今『消費の節約』などゝ呼號することは、其の撤去ドコロか、却つて人心

の沈滯、頽廢を更らに增進する所以である。元より冗費の節約の必要なることは言ふ迄もない、乍去冗費の節約は決して消費の節約と同一事ではない、否全く別の事である。眞に冗費を節約せん爲めには、却つて消費の增進を必要とする場合が多々ある。勞働能率の增進は消費の增進なくしては望み得られないのである。殊に現在日本に於て消費の節約を呼號する人々の中には次の樣な驚く可き謬想から出立して居る人々もあるのである。曰く『日本の物價が下落す可くして未だ著しく下落せざるは、主として下層社會の購買力が未だ旺盛なるが爲めである。上流中流社會は、經濟界の實況に省みて著しく節約、緊縮しつゝあるにも拘らず、下層社會は勞賃の騰貴により著しく其購買力を增進せられた儘にある。彼等が購買力に富み、而して他面に之を制す可き貯蓄心極めて乏しき故に、彼等は遠慮なく生活用品は勿論、娛樂用品に對しても依然大なる需要を持つて居る。社會の大多數者たる下層社會の需要が大なれば需要供給の理法により、一般物價の下落し得ざるは、當然の事理である。故に眞に物價引下げを實現せんとならば、此の下層社會の大なる需要を制限することを急要とする。故に我々は彼等下層社會に消費節約の宣傳を有力に行はねばならぬ、是れ物價引下げに取りて、最緊要事の一に屬する』と。私は之れを評して云はんと欲する、凡そはき違ひ論中此論のように桁外れのものも亦た稀れであると。下層社會が購買力に富み、其需要が大なることは、國民經濟の狀態として、此以上なく結構なる健全なる狀態と云はねばならぬ。若し物價の高いことの原因が右の一事のみに限るならば、物價の高いと云ふことは却つて歡迎す可き事ではないか。一體物價引下げと云ふことは、何の爲めに、而して又た誰れの爲めに要求せられるのか。云ふ迄もなく、其れは國民生活の安定の爲めに、而して主として物價高きが爲めに、其生活の安定の脅さる可き下層社會の爲めに要求せらるゝのである。然るに今日物價の高い事の原因が、下層社會が購買力に富めることに存するならば、我々は、物價引下げの爲めに焦慮する必要は決して有して居らぬのである。何となれば、下層社會生活の安定が脅か

されて居るのでないならば、其所しを取除く努力は全然無用の事に屬するではないか。思ふに、右論を唱へる人々は口には國民生活の安定を云々するけれども、眞實は其の爲めに、今の消費節約の宣傳を必要とする次第でなく、實は、勞賃の騰貴從て生産費の嵩む爲め、思ふ存分に金儲けが出來ないで苦んで居る世の企業家、資本主の利益を圖るが爲めに、彼等に取つての生産費節減を期せんが爲めに、生産費中大なる部分を占める勞働者賃銀の引下げを可能ならしむる可き準備として、勞働階級をして其消費(不合理的のもの斗りでなく、合理的なもの、人間としての存在に緊要なものまでも)を節約せしめんとて乏しい財政の中から何十萬圓かの宣傳費を横取りしても差支なしとして、役所の仕事を捨置いて、節約宣傳の大道講釋に浮身をやつしつゝあるのではあるまいか。左様とでも解釋するに非れば、イクラ閑な役人共だつて、消費節約の宣傳などと云ふ時代錯誤も甚しい愚擧を人心沈滯の今日に於て試むる所以は到底諒解し得られないのである。

假りに右の推察か全然當を得ないとしても、所謂消費の節約と云ふことは、自ら期せずしても結局資本主義曲庇の作用を有することは、論者は毫も想到せざる所たるに相違ない。私は嘗て『資本増殖の理法と資本主義の崩壞』と云ふ一文を『改造』に寄せて、マルクス等が生産は必竟消費の爲めであるから、今日の樣に消費と全然無關係に單に資本増殖本位で生産し、生産したものを消費し盡くす見込を持たざる資本主義は、此の生産と消費との不調和を段々甚しくし終に行詰りに陷つて、其れ自ら必然的に崩壞するものであると唱ふることの誤謬たる所以を指摘した。之れに對して河上肇博士は、其マルキシストたる立場から有力にマルクス論を、擁護せられて、私の説を斥けられた。此事は孰れ河上博士の議論全部を拜聽した上で、私として出來るだけ、十分に御答しようと思つて居るが、今假りに河上博士に從つてマルクス等の立場を取るも、將た亦た其反對に私の立場を取るも其の何れからも、消費節約の宣傳は必竟資本家曲庇の作用を有するに外ならないことを立證し得るのである。何となれば河上博士及マルクスも、トウガン・バラノフスキー及私共

も、均しく現在の資本主義經濟組織に於ては、生産と消費とが一致して居らぬ狀態にあることを認めるものである。此點は兩者全く見る處を一にして居るのであつて、實際の經濟生活を冷靜に考察する以上、此點は如何しても之を否認するわけには參らぬのである。而して又た此生産消費不調和の資本主義經濟の現狀は、如何なる點から見ても決して希はしいものでない、萬全のものでないことを認むるに於ても、兩者は一致して居るのである。ソコデ、次の結論を生ずる。既に現在の儘でさへも、生産と消費とが一致して居らず、常に生産のみ増進して、消費は之れに追及し能はざることが、現社會の一大病弊であるのに、更らに此以上、消費を節減すれば、兩者の不一致、不調和は益々甚しく、其懸隔は愈々大となる外はない。即ち其れは、現社會の病弊を救治せざるのみか、却て彌々益々之を助長せしむる外はない。而して其れは、資本主、企業家に取つて目前の利益たるは言ふ迄もないと同時に、勞働階級、無産階級の全體に取つては、目前にも永久的にも、甚だ迷惑千萬な事たるは疑を容れない。されば今の消費節約と云ふことは、日本當面の問題として、口に國民生活の安定を唱ふるも實は生産主宰者としての資本家の利益を圖るに過ぎざるものたるは勿論、現資本社會の全體から見ても、資本主、企業家を曲庇して勞働者、プロレタリアを不當に抑へ付ける結果を齎らすものである。彼等は實に其生活を安定す可しと唱ふる國民大多數の生活其ものを脅かさんとするもの、其基礎を破壞せんとするもので、此點から寧ろ一の危險なる宣傳を爲しつゝあるものなりと推論せざるを得ないのである。但し此點は恐らく、彼等が夢想だもせざる事であらう。其れは一に彼等の愚昧無知の致す所である。大戰爭中に行はれた英佛米其他の所謂『プロパガンダ』は虚言の連續的濫發の謂であつた、之れに對して日本に於て現に行はるゝ『プロパガンダ』とは多くは愚劣思想の連續的濫發の謂であると云ふも必しも誣言として一概に斥けることは出來まいかと思ふのである。兎に角現下最大の通患たる世界經濟の恢復を期するに方つて最も障碍となるもの〻一は、此の如き謬想によつて經濟心理

の運行を倒逆せんとする試みであると云はねばならぬのである。

併し乍ら、我々は唯右樣の謬想を斥ける丈けを以つて滿足するわけには行かない、右の樣な謬想が今時を得顏に流行する其深い根抵に溯つて考へて見なければならない。抑も右の樣な謬想が輙く世人の贊同を得る所以は、資本主擁護、企業家曲庇の心理が甚だ普及して居るが爲めと見るより外はない。是れ實に世界經濟恢復の企を今日の樣に行詰りの狀に陷らしめた事と原因を共通に有するものである。今日の行詰りは、各國共に金融市場本位の資本主擁護、企業家曲庇の根强い要求が齎らしたものである。殊に對外的資本主義、又の名資本的侵略主義、經濟的帝國主義、國際資本主義の要求が過當に尊重せられて居て、其れが、對獨、對露の諸問題の解決を沮み、他方には、各國の幣制整理、聯合國相互間外債の整理、又た不換紙幣整理の業を著しく妨害しつゝあるのである。今日はまだ資本主義脫却を夢みる可き時代ではない。對內的には、現に勞農露國の例の示す如く、猶暫らく寧ろ資本主義の福音によつて救はれねばならぬ時代である。日本も亦た然り、況んや支那、朝鮮をや。支那、朝鮮が現況より救ひ出される道は、對內的により多く資本主義化すること、殊に資本主義の弊害を先進國の例に鑑みて成る可く始めより杜絕し、其良き方面には、飽迄驀進し行くことが、殊に支那に取つては、緊要なことである。然り對內的には其外に道はない。乍去、對內的に資本主義化すると同時に英佛獨其他の先進國の樣に、對外的に而も侵略的に資本主義化して、自ら資本的泥棒國の仲間となることは、全くこれを斷念して掛からなければならぬ。其れと同時に、歐米諸國――日本も其內に算へねばなるまい、少くとも當分の間は――の資本的侵略主義のために、其對內的資本主義化による秩序的向上發展を破却せらるゝ危險の甚だ大なるものあることを、明確に認識して、それに向つて、十分に準備してかゝらねばならぬのである。

今對獨、對露の問題が行惱みとなつて居り、露國の經濟的閉鎖、承認、救濟の業が遲々として進まず、獨逸の賠償金

問題が未だに未解決の内にあつて、馬克の相場は急激の勢を以て下落しつゝある最大原因は、英、佛、米が其の對外的資本主義資本的侵略主義を一擲し能はざるのみならず、或は彌々其の深みに突進しつゝあるが爲めと云はねばならぬ。而して又た他方に於て、所謂近東問題の紛糾も詮じ詰れば、英佛兩國を始め歐洲各國が、資本的侵略主義をあらゆる機會に於て實現せんとするより起るので、其主義の榮ゆる限り、到底近東問題の最終解決は得て期すべからざるのである。更らに又た東洋の天地に於ては、印度は言ふにも及ばず、支那の問題の愈々益々迷宮に入りつゝあり、終には、支那の國際的共同管理又は少くとも財政管理、鐵道管理を斷行す可しなどとの驚く可き暴論の生じ來るのも、各國が――日本も無論其中にあり――支那を以て資本的侵略主義の對象とし、犠牲としてのみ考察して居ることに胚胎して居る。然れば獨、露、支を始め世界の弱き國、疲れたる國、劣れる國に取つて其存在を脅す大敵は、此の資本的侵略主義であると云はねばならぬ。之に比すれば所謂赤化の宣傳とか過激主義の侵入とかは、殆んど數ふるにも足らざる事柄である。私は此の共同の敵あることを自覺するの曉、支那が英米より愈々遠り、獨露に接近せんとする傾向を生ずるに至る可きを、今より逆睹し得可しと確信するものである。他の點に於て如何に異る所ありとも、其存在其ものを脅す敵が共通のものである以上、其脅かさるゝ諸國が自然的に互に相索引せんとするに至るは、理の當然である。而して此種の聯結が、世界の平和的協調に及ぼすことの甚大なるは、管々しく之を論ずるに及ばざることである。世界經濟恢復の業が一日も緩することを許さない所以は、此點に思慮を旋すものに取つて、極めて顯著なりと云ふ可きである。

此くの如き聯結が出來るとしても、其は其國々々に取つて、單に防衛的、消極的の効用を有するに過ぎない、其國民の生活を向上せしめ、其厚生的努力を增進せしむ可き作用は、差し當り此れよりしては望むことは出來ない。否獨露は勿論支那と雖も、此くの如き狀態に陥らざらんことを勉めねばならず、又少くとも現に獨や露は之を勉めつゝあるので

ある。彼等は如何にしてか、資本的侵略主義の感染の爲めに、否その壓迫の爲めに、自國の秩序的發展が妨害せらるゝことを無きを得せしめんかと焦慮しつゝあるのである。獨り支那丈けは――私は敢て支那の有識人士に聲高く此一事を警告したいと思ふのである　――まだ十分に此の危險の迫りつゝあるを知らず、唯無暗に如何にして外國から金を借り出し得んかの一事に苦慮しつゝある、私は支那の諸君に警告する、諸君は、今實に斷崖の前に立つて居るものである。諸君は借金は、金で返さない場合は、必ず他の何物かを以て、而も甚だ割が惡く、返さねばならぬことを知らねばならぬ。請ふ私に一の諧謔を許せ。If you don't pay back with sovereigns, you shall have in the end to pay, with sovereignties（諸君はソヴエレン（現金）で返さなければ、ソヴエレーンチー（主權）で償却せねばならなくなる）外國借款の成効は、諸君に取つては目前大なる利益であらう、然し其れは將來――而も近き將來――に於て、諸君の祖國、其の主權に對して大なる危險を包藏して居るものなることを諸君は知らないのである、諸君は實に氣の毒なものである、諸君が日貨排斥などと騷いで居らるゝ間に、英、佛、米、白などの資本的侵略主義は、借款の美名の下に諸國の國を、其の根柢を根コソギにせんとしつゝあるのである、諸君何ぞ早く醒めざる。日貨排斥は祖國を守る所以だと信ずる諸君、何ぞ英米佛の此の大泥棒を看過しつゝあるや私は實に諸君の愚を悲まざるを得ざるものである。――十月十二日發大阪毎日新聞上海特電に次の如くある『最近支那に於いて裁兵運動、民權運動、女權運動等各種の團體運動が南北を通じ到る所に行はれて居るが共中國際資本主義打破の運動は新たに起つた運動として極めて注目す可きものである、過般福田德三博士が北京大學で國際資本主義排斥の講演を爲すや支那學生は深く其説に共鳴し博士は大持てゝあつた上海亦其の影響を受けた爲めか此の種の思想起り十月十日雙十節の際にも宣傳ビラを配布したものあり運動は漸く具體化せんとする傾向がある。彼等の提唱する國際資本主義打破とは、新借款團反對、露獨支經濟同盟、勞農露國承認を主張し、財政管理、

國際管理等の諸說を徹底的に打破せんとするものである』と。若し此報が眞なるなれば、私は私の以上の意味の講演が意外に善く、而して速かに諒解せられたこと、私の支那各地に於ける微弱なる言說が望外の報ひを與へられたことを、心より感謝せねばならぬものである。

私は支那の新人中の或人々例へば李大釗、胡適等の諸君が基督教排斥、否一切の宗教排斥運動を始めたと云ふことを聞いて、少からざる興味を有して居たものである。北京に於て、私は此等諸君から運動の眞意を承り、それに對して卑見を求められたとき、私は粗次の如く陳述した。私は一切の宗教を排斥すると云ふことは、自分としては到底贊同することは出來ない。自力宗か他力宗か其れは人の好む所又は其能性の如何によつて異るであらうが、私の信ずる所では、人として生くる限り我々は必ず何等かの信仰を現に有するものであり、又た有せざる可からざるものである。恐らく基督教を極端に罵倒するバートランド・ラッセル氏と雖も其心中には何等かの形に於ける宗教を有するものではないかと思ふ。私は佛教の信仰、基教の信仰を以て現存の宗教中の最高な形と思ふが、然し私自ら其何れにも固着するものではない。唯私がより多く佛教の信仰に傾く所以のものは、其れが著しく非侵略的――ラッセル氏の言を藉れば、less Reignant―であり、基教の信仰、就中新教の活動的信仰少くとも其具體的の表現は、極めて侵略的であるが故に、私は前者を愛し、後者に對して反感を持たざるを得ないからである。新教の活動は確かに一のアグレションであつて、其傳道は、今日の言葉で云へば、宣傳的――悪い意味に於ての――である。理が非でも、異邦人を折伏して、自己の信仰に歸依せしめねば已まぬと云ふのは、一種のミリタリズムである。故マックス・ウエーバー教授はソムバートが猶太教を以て資本主義の精神的の母となしたに反對して、基督新教就中淸教（クエーカリズム）が、資本主義の精神の有力なる助産者であつた所以を、豐富周到なる研究の結果立證した。此れは主として其の善き方面である、淸教の精神は資本主義

精神に、確かに其光明的方面を貢獻したのである。乍併、其以後基督新教と資本主義とは、切つても切り得ぬ深い因緣を持續して今日に到り、獨り善き方面のみでなく、其の惡い方面迄も相伴ふようになつた。元來基督教共ものとしては、決して資本主義的なるものではない、否、初代の基督教會こそ最も覺醒したる又た或意味に於ては、最も徹底したる共産主義の實行者であつたことは、隱れもない事實である。『富める者の神の國に入るは駱駝が針の穴を通るよりも猶難い哉』と嗟歎した基督は決して資本主義者ではなかつた。乍併、同時に基督は、旅立ちに際して其僕に或は銀一千、或は銀二千、銀三千を授けて、歸つて來たとき銀一千を空しく地中に埋沒して置いた僕を責め、銀二千の外に更らに銀二千を儲け出した僕を善且つ忠なる僕ぞと賞めた主人を以て神の國の意義に合へるものとしたのである。基督は、眞の厚生は餘剩價値の增進によつてのみ得らる可きことを確かに敎へたのである。（十年前の拙文『餘剩價値の宗教』を參考せられたい。）是れが基督教の本體である。然るに今日の基督教は之を惡い方面に著しく延長して、善惡共に資本主義の從僕となり了つた姿を呈して居る。私は諸君が今基督教を排斥すると云ふは、資本主義殊に對外的資本侵略主義の伴侶たり忠僕たる基督教を排斥するものと解釋するのである。資本主義との腐れ緣を打切り、淨化せられ、其本體に立還つた基督教は必ずしも諸君排斥の對象たるものとは理解しないのである。例へば排外主義、排歐米主義と云ふものに於けるが如く、一切の外來文明、一切の歐米文明を排斥すると云ふことは無謀極ることであるが、それは外來の侵略、歐米の侵略的文明の排斥の意に外ならざるが如くであると。胡適氏、言に應じて曰く、其は我々に取りて全く新しい見解である、併し我々は意識せずして、實は其意味に於て宗教排斥を主張して居たものであると。若し胡適氏の言が、支那新人諸君全體の意向を言表はすものとするならば、私は支那に於ける現在の排宗教運動なるものは、確かに覺醒の一聲であると思ひ、深き同情を表するに躊躇せざるものである。私は此意味に於て、支那に於ける所謂『思想革命』なるもの

が、獨り支那自らの覺醒たるに止まらず、其は軈て日本の眞の覺醒となり、米國の覺醒となり、更らに進んで歐羅巴の覺醒となる日の來らんことを深く期待して已まないものである。（『日本及日本人』七月號清水牧師の『支那の思想革命と文學革命』は、此點に關して、甚だ有益な論文である、參考せられたい。）

論じて玆に到つて、私は、世界經濟恢復に於ける、日本、支那、米國の使命に就て私の信ずる所を述ぶべき順序となつた。世界經濟恢復は、先以つて心的方面に存する、歐洲の人心は今荒みに荒み切つて居る（支那の問題の如きはそれに比すれば遙かに小なる惡である）彼等自ら此の深みから脫出する力を有して居らぬ、救濟の力は、歐洲以外から與へられなければならぬ、歐洲に此力を與へ得る第一の有力者は云ふ迄もなく米國である、米國に次いでは日本である。日本は米國に比すれば、其力は遙かに微弱なものであつて、而も日本自ら今物價騰貴による國民生活難を變へつゝある、故に日本をして、微力を世界經濟恢復の大事業に傾倒するを得せしめん爲めには、其生活難を緩和す可き有力の後援者を要する、私は其後援の任を支那に囑望するものである。支那が今日本の生活難緩和の爲めに力を盡くすことは、決して單に日本のみを助くる所以ではない、實に世界を助くる所以である。但し其然り得る爲めには、日本は支那の援助を自己の利害の爲めに求めるのでなく、先づ自ら進んで世界經濟恢復の大業に出來るだけ盡力すると云ふ大方針を確立した上でなければならぬ。青島還附の代償などと云ふ考は一擲せねばならぬ。

心的の救濟は必ず物質的援助によつて伴はれなければならぬ。殊に今歐洲諸國は、其物質的窮乏の甚しきが爲めに、唯さへ荒んだ人心が彌々險惡に傾きつゝある。我々は外より物質的救濟を與へることにより、又其れと同時に心的救濟の業を始むるによつて、歐洲の行詰りを救はなければならぬのである。

物質的救助を要する最も大なるは東歐諸國である、勞農露國である、績て墺國と獨逸である。此等諸國を物質的に救ふには、決して單なる慈善に依賴してはならぬ、勞農露國救濟の爲めに寄附金を募ると云ふことは、實に結構なことで

ある。然し其れが結構であると云ふは、主として精神的方面に就てゞある、荒んだ露國の民心に一條の望を與へると云ふ作用だけであつて、マテリアリーに此等寄附金が有効なりとは云へぬ、何千圓か何萬圓かの寄附金を送つたとて、露西亞幾億の人間の窮乏に對しては其れは大海の一粟に過ぎない。故に私は言つた、此の寄附金は恰かも神樣や佛樣に御賽錢を上げるやうなものである。上げられる神樣や佛樣に取つては御賽錢は何んでもない、少しも有り難いことはない。其有難味は、御賽錢を上げる信心家の上にある、彼等は御賽錢を上げるによつて兎に角若干の安心を得られるのである、勞農露國への寄附金は貰ふ露國よりも、遣る國民にとつてせめてもの罪滅しの一端として結構な事なのであると。兎に角慈善的、人道的寄附によつて、露國其他を救ひ得可しとするは、飛んでもない考違ひである。彼等を救ふには秩序的、連續的な大規模の救濟法によるのでなければならない。今日の經濟組織に於て最も秩序的、連續的な大規模の救濟法は通商貿易の恢復を措いて外にない。彼等に其乏しきを訴へつゝある生活必需の物質、製造工業の原料、農作の種子を連續的に秩序的に供給する道は、ノーマルな通商貿易あるのみである。即ち一日も早く勞農露國、獨逸、墺國、東歐諸國と常態的な通商貿易を起すことが、歐洲經濟恢復、其の救濟に取つて、焦眉の急務であるのである。其れと同時に、歐洲諸國自らが今苦しみつゝある經濟難の主要なるものゝ除去に力を藉さねばならぬ。其は外でもない、第一、對獨賠償金の思切つた輕減、第二對露 對獨墺、對東歐諸國への投資の開始、第三各國對外債務の整理、第四各國幣制就中不換紙幣の整理、此の四事である。

對獨償金を思切つて輕減するにあらざれば、獨逸の恢復は望まれない、獨逸恢復せずしては、歐洲貿易の恢復は期し得られない。此の二事は、切り離し得ざる有機的相互關係を有して居るのである、勞農露國及東歐諸國との通商振興には、是非獨逸が恢復せられることを要する。獨逸は西歐諸國と東歐諸國との經濟的緩衝帶たり、又た其の媒介者たる地

位にあつて、これは如何にしても無視することを得ないのである。獨逸を救ふことは、獨り獨逸のみを救ふことではなく歐洲殊に東歐諸國を間接に救ふ所以である。ソコデ私は、對獨償金輕減の問題が先第一に解決せられねばならぬと久しい以前から主張して居るのであるが、然し歐洲諸國殊に英佛が此問題に就ては、其利害關係を著しく異にして居る今日、彼等だけの評定では此問題は何時迄たつても到底解決の望はないものと思ふ。玆に私は米、日、支の盡くす可き使命の存するを認めるのである。第一の發言資格者は無論米國であるけれども、米國はまだ逡巡して居る。故に私は日本が支那と提携して、最も徹底的に對獨償金輕減の議を世界に向つて提唱す可き使命ありと信ずるのである。然し其提唱は單なる言葉の提唱では無効である、實質が之れに伴はねばならぬ、ソコデ、私は日本は向後獨逸より受く可き償金の分け前一切を拋棄す可しと主張するのである。日本は殆んど賠償に與る資格はないが、其外の國とても亦然り、佛蘭西と白耳義とを除いては、私は一切の國々が、其權利を拋棄せんことを切望する。而して私は日本先づ自ら例を作るによつて、此等諸國の拋棄の議に刺戟を與へんことを主張するものである。

併しながら對獨償金の輕減を實現するには、少くとも佛國の對外債務の處置を解決せねばならぬ。佛國が獨逸より莫大な償金を取らんとするのは、他にも種々理由はあるが、其根的且つ當面の條件としては、然するにあらざれば、自國の財政を支持し能はざるからであつて、此點は我々は深く同情せねばならぬのである。然るに若し佛國の對外債務問題にして何とか解決の道を見出し得るならば、佛國の財政難は可なり著しく緩和せられるであらう、然らば獨逸に對して今の如き無法な要求を固持する必要は減ずることであらうと信ずる。佛國は戰前に於ては對外債權四百億法を有し債務は一文もなかつたが、昨年に於ては對外債權百四十億法に減じ其反對に對外債務三百二十七億二千三百萬法となつた。即ち債權高は二百六十億減つたのだから合計五百八十七億法强の負目を背負つてゐるわけである。而して佛國對外債務の

問題は又た延いて聯合諸國對外相互債務の問題の考究を必要とする。ケーンズ氏は、戰爭による聯合諸國對外債權債務全部帳消し論を唱へて居ることは、今や、世界須知の事實である。氏は其額を示す爲めに左の一表を其の『平和の經濟的結果』。第二五四頁に掲げて居る。（猶同氏の纂マンチェスター・ガーヂアン・コムマーシアル特別號『歐洲に於ける改造』既刊一至五號殊に第二號『改造の原則』參考を乞ふ

（單位磅）

債務國	債權國 米國	債權國 英國	債權國 佛國	各國債務合計
英國	八四二・〇〇〇・〇〇〇			八四二・〇〇〇・〇〇〇
佛國	五五〇・〇〇〇・〇〇〇	五〇八・〇〇〇・〇〇〇		一・〇五八・〇〇〇・〇〇〇
伊國	三二五・〇〇〇・〇〇〇	四六七・〇〇〇・〇〇〇	三五・〇〇〇・〇〇〇	八二七・〇〇〇・〇〇〇
露國	三八・〇〇〇・〇〇〇	五六八・〇〇〇・〇〇〇	一六〇・〇〇〇・〇〇〇	七六六・〇〇〇・〇〇〇
白耳義	八〇・〇〇〇・〇〇〇	九八・〇〇〇・〇〇〇	九〇・〇〇〇・〇〇〇	二六八・〇〇〇・〇〇〇
セルビヤ及ユーゴー・スラヴヰア	二〇・〇〇〇・〇〇〇	二〇・〇〇〇・〇〇〇	二〇・〇〇〇・〇〇〇	六〇・〇〇〇・〇〇〇
其他聯合國	三五・〇〇〇・〇〇〇	七九・〇〇〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇・〇〇〇	一六四・〇〇〇・〇〇〇
各國債權合計	一・九〇〇・〇〇〇・〇〇〇	一・七四〇・〇〇〇・〇〇〇	三五五・〇〇〇・〇〇〇	三・九九五・〇〇〇・〇〇〇

ケーンズ氏は、右の債權、債務を一切帳消にせよと主張するのである。即ち佛國は三億五千五百萬磅の債權を失ふ他方に於て十億五千八百萬磅の債務を免れるのであるから、差引七億三百萬磅の得をするわけである。伊、露、白、セルビア、ユーゴー・スラヴヰア等は債務斗りであるから、右帳消しによつて何れも利する斗りである。これに反し、英國の債務は、米國から借りた八億四千二百萬磅がある斗りで、債權は十七億四千萬磅あるから約九億磅斗り損し、米國は

債務は少しもなく、債權斗り十九億磅の全部を損するわけである。ケーンズ氏が右の計算をして以後更らに米國の貸付額は殖へ、又た利子も加はるから右の債權額は著しく增して居るので、ツヒ最近アンダーソン教授の公表した所によると、總額約百七十億弗即約三十五億磅に達すと云ふことである。アンダーソン氏は其中百十億弗即約二十二億磅を帳消にするが至當であると主張して居る。英國の債權高も昨年三月末に於ては十八億八十萬磅に增加して居る。其後の利子を計上すれば、右金額は更らに增して居るわけで、兎に角莫大な數字である。然し此莫大な債權債務を莫大なりと驚歎して居るのみでは、何時迄經つても解決は付かぬ、私は前に債權なるものは物質と異つて、踏倒し得ると云ふ特徴を有するものなりと斷言した。私は此の道理を今活かさしめねばならぬと主張するものである。我々は右の考に基いて此の莫大な數字を何とか取扱はなければならぬのである。先づ莫大な歐米の數字に比して我日本の對外債權の狀態は如何と云ふに本年一月發行の井上日銀總裁の『戰時及戰後に於ける我國の對外金融』と云ふ極めて有益な冊子に次の如く言つてある『戰爭の始まつた時と大正九年とを簡單に比較して見ると、大正三年には日本の外國に對する借金の高が十九億圓であつた、それが三億圓返されて十六億圓に減りました。對外債權は僅か四億六千萬圓ほかなかつたものが、二十二億圓といふ高に殖えて居ります。結局戰爭前からの日本の働き料が幾らあつたかと言ひますと、正貨で十八億圓、外國に貸して居る金が十八億圓（二十三億から四億を引く）、此二口を加へますと三十六億圓になりますが、其外に戰爭中に外國に對する借金を返した高三億圓を加へますと結局三十九億圓と云ふ數字が、開戰後大正九年迄の約六箇年に稼ぎ得た高となります。即ち日本は、對外的に三十九億圓の力を增した譯であります』（五一・五二頁）

又右書附表第六號によると日本で發行した外國公債の未償還額三億七千萬圓及英貨三百萬圓、計約四億圓計りある勘定で、其等は何れも大正五年十二月以後發行にかゝるものであるから、無論戰爭の爲めに借り入れた金である。其內譯

は英國が三百萬磅、佛國が一億三千三百萬圓、露國が二億四千萬圓を、日本から公債として借りて居るのである。これは公債丈けの額で其他の借金は全く此外である。ソコデケーンズ氏の主張を容れるとすれば、日本は少くとも右の約四億圓（其後此額に增減があつたなら其額）を、世界の經濟恢復の爲めに投げ出す可きである。米國の百億弗に比べれば其の五十分の一で殆んど言ふに足りないが、然し井上總裁の計算による日本の對外的富の增加三十九億圓であるから約其の一割に當るのである。但し此割合で行くと、米國が十億弗を帳消するのは、甚だ多過ぎるので、假りに米國の對外債權二百億弗（債務の二十億弗を差引いた殘額）だとすれば、其一割は二十億弗で、其れだけ帳消して貰ふことになるが、其れでは、歐洲の救濟には不十分である。ダカラ、日本が米國同樣の貢献をしようとなれば、三十六億圓から十六億圓を引いた二十億圓の半分十億圓を投げ出してかゝらねばならぬわけとなるが、其れは、米國と違つて日本に取つてはとても堪へ得られないことであるから、先づ四五億圓の投出しで勘辨して貰ふ外はない。詳しい數字は、愈々の時になつて算出を要する。）私は日本が先づ此の大決心をして、而して後米國に說いて、其の決心を促がして、玆に新なる意味で、國際經濟會議をワシントンなり東京なり北京なり何處かで開いて、聯合國の對外債務の處理問題を根本的に解決す可きことを力說せんとするものである。此事が成就すれば、同時に又た引續いて歐洲諸國の幣制整理の問題に進み得るのであつて、然らざる限り幣制問題は如何ともする能はず、又一般の財政難も如何ともする能はざるものと思ふのである。而して右の投げ出し額はケーンズ氏は單に棒引にせよと主張するのであるが、私は寧ろヴアンダーリップ氏が近頃其の Wh t next in Europe に於て主張して居る樣に、權利丈けは矢張保留して置いて、聯合國の力に應じて何分かづゝ償還して貰ふことゝし（但し利子は全然拋棄して）其額を以て國際經濟基金なるものを作つて、歐洲諸國就中、東歐諸國、露國、獨墺國の救濟に充つること、恰かも團匪事件の賠償金を米國から支那の爲めに使用し支那青年を米國へ留

學せしむる費用（一人一ヶ年十八米弗を給して米國大學に入學せしむるもの年々數十人、外に北京郊外に淸華學校と稱する世界第一とも稱す可き設備（其敷地面積約五十萬坪、東京帝大の約五倍）の完備した豫備學校の經營に充て丶居る）に充てて居る如く爲すが最上法と信ずるものである。救濟と言つても金品を給與するような姑息な事ではいけない、通商貿易の復興と幣制の整理との基金とす可しと思ふ。私は近頃我邦で盛んに主張せらる丶金輸出解禁は、此問題の解決と共に行ふ可く、其以前には行ふ可からずと主張するものである。我邦の保有する金の一部は、私は之れを歐洲諸國の幣制整理の用に充つ可く貢献す可きもので。唯無意味に輸入商の利益の爲めに放散せしむ可きものではないと確信する。前々月號『改造』所載『何を緊縮する』參考を乞ふ。）

斯くの如く、世界經濟の行詰りは、歐洲以外の國にして其力あるもの、先づ救濟の任に當らねばならぬ。溺れつゝある者同志は他を救ふことは出來ない、水の外にあるものが其手を藉してやるのでなければならない。歐洲を救ふものは、第一に米國でなければならぬ　然るに米國は右の借金帳消論の必ず起る可きを豫想し出來る丈け之れを回避せんとして、何れの國際經濟會議にも參加せぬ、乍去　米國の參加せざる國際會議は勞働會議でも經濟會議でも凡て無効無用である。就中今當面の歐洲救濟の爲めの國際會議に於て然りである。ソコデ、米國をして避けんと欲して到底避くるを得ないこの大なる使命を盡さしむ可く努力することが、日本及支那の使命であると信ずるのである。即ち日本は支那と協議の上、支那は日本の物價騰貴難を救ふ爲めに　出來る丈けの便宜を圖つて食料品其他の日本への輸出を助けて（其れが可能なることは　私が此度の支那旅行に於て親ら十分に認め得た所で　此一事を知らんとしたことは、實に私の支那旅行の最大目的であつたのである。其事は何れ折を得て論じやう）日本をして後顧の患なからしめ、其分外とも云ふ可き大任に當ることを得せしめることを約し、日本と支那と共同に米國に提議し、日本は其對外債權中少くとも、聯合國政府公債貸付け

高は帳消として進呈するから、米國も亦同樣の決心をせよと勸告し——其勸告は餘程力强いものでなければならぬ、米國がそれに應ぜなければ、彼は世界の公敵なりとしてこれを言葉の上は勿論、實行上に於ても攻撃する丈けの強い覺悟を以てせねばならぬ。私は其の爲めには、日米衝突も亦不可辭（其他の事では斷じて不可なり）と爲るものである——其上にて國際經濟會議を開催して、問題の解決を期す可しと主張するものである。即ち日本先づ其使命に目さめて、米國の覺醒を促す可しとするものである。而して日本が斯く思切つた提言を爲すには、眞に其の崇高なる使命に目さめた上でなすのでなければならぬ。それによつて日本の利權を增進しようとか、何等かの特殊利益を獲得しようとかの野心を包藏してかゝつては駄目である。同時に日本は、明治維新後僅かに歐米諸國の眞似をして覺へ込んだ泥棒主義、資本的侵略主義、經濟的帝國主義を國是として全然打捨てかゝらねばならぬ。善事を爲さんとするには、自ら先づ善人とならねばならぬ、念佛を唱ふるには、鬼の念佛であつてはならぬ。支那をして此の使命に參加せしめ、眞正の意味にての同種同文の親善を實現せんには、日本は一日も早く今支那を脅しつゝある世界的資本侵略の仲間から自ら先づ奇麗サツパリと脱退せねばならぬ。然らざる限り支那をして其の使命を覺らしめることは到底不可能である。反對に日本にして眞に名實相合ふ非侵略國たること德川氏三百年間に於けるが如くなれば、日支親善などゝ叫號せずとも、支那は必ず日本を助く可き義務に目さむるに相違ない、日本と支那と唇齒輔車の關係を有するものなることを悟るに相違ないと私は信ずるものである。而して其れが獨り東亞の平和を齎らすのみでなく、世界の救濟、世界經濟の恢復を促進するに與つて至大の貢献を爲す可きは私の確く信じて疑はさる所である。

（終）

正誤。　前號四頁第五行『一部は戰時五ケ年に亘る歐州各國民の生産したもの』の下へ『並に歐洲以外よりの輸入品』を追加す。

フェルヂナンド・ラッサルの國家社會主義

高橋誠一郎

一

第十九世紀は凡ゆる種類の國家に對する侮蔑を以て始つた。此の世紀の前半に於ては「國家社會主義」なるものは存することがない。ルイ・ブランやプルードンが或る程度まで國家に依賴したことは事實である。而も前者は半ば組合社會主義者であり、後者は彼は一流の無政府主義者であつた。プールドンに從へば、凡ゆる統治の目的は强者の壓迫に對する弱者の保護者に存する。然しながら、這般の目的は彼れの謂ゆる公平なる交換が可能と爲つた瞬間から、自由の契約に依つて十分に之を確保することが出來る。其處には最早抑壓せられたる者は存することがない。爭鬪の原因は除かれて、一切の者は平等に惠まれる。一度び資本と勞働とが同一化せられたならば、社會は自から存立す可く、而して統治に對する何等の必要も存せざるに至るであらう。「宛も教職政治が原始的社會に適合するが如く、**民主政**は成熟せる社會に適合する。人間社會は漸次ヒエラルシーからアナルシーに進化する。」彼れは又た、國家に訴へんとするの狂愚は佛國民心の天刑病であるとすら極言してゐる。第十九世紀の後半は失はれたる國家と教會との權威が一部の人々によつて復活せしめられた時である。爰に國家社會主義と基督教社會主義とが誕れ出でた。

謂ゆる國家社會主義は現在の國家に依つて根本的社會改革の計畫を遂行せんことを主張するものである。從つて之れを奉ずる者は概して國民主義者であつて、一方に組合社會主義者に對立すると共に、他方にはマルクス等の國際社會主義に對するものである。新たなる社會學説の基礎の上に國家社會主義の學説を建設せんとするの努力はカール・ロードベルトスの力によつて既に幾分の成功を贏ち得たのであるが、而も這般の新觀念に活動力を注入するの任務は主としてフェルヂナンド・ラッサルに委ねられた。獨逸社會民主黨の建設者中に在つて最も著顯な

る地位を占むる彼れラッサルの主なる事業は固とより煽動家及び傳道者としてのそれであつた。然しながら、私は茲に彼れの思想的活動の跡を觀たいと思ふ。彼れの經濟理論は大體に於てルイ・ブラン、ロードベルトス及びマルクスのそれであつて、極めて創意に乏しいものである。然しながら「是れ等のものは彼れの心意を通じて、初めて通貨として流通す可き刻印捺刻せられたのである。」

二

一千八百四十八年を以て革命の狂風は復たも襲來した。而して巴里より押寄する混亂の怒濤は獨逸の岸に到達する久しい以前に於て既に其の力を弱めたとは云ひながら、其の影響は尙ほ此の國に於ても極めて大なるものがあつた。同年十二月五日ブランデンブルクに於ける國民議會（national-Versammlung）の解散及び之れと日を同じうせる欽定憲法の發布は全國に亘つて痛酷なる失望と激烈なる反抗とを生ぜしめた。相結んで租稅の支拂を抗拒し、斯くて「暴に酬ゆるに暴を以てせん」とするの運動が一般に起つた、而して這般の運動は特に民主的意見に贊すること多きライン諸州に於て特に花々しかつた。當時僅かに二十三歲の靑年であつたラッサルは既に民主黨中に於ける最も有力にして有爲なる領袖の一人であつた。彼れは啻だに納稅の抗拒のみならず、更らに進んで一揆を計畫し、デュッセルドルフの市民を說いて武裝的抵抗を行はしめんとした。而も普國政府は迅速なる干涉を行ひ、同市に戒嚴令を敷き、ラッサルを捕へて獄に投じた。彼れは一千八百四十九年、叛逆罪に問はれ陪審官によつて無罪を宣告らせれたのであるが、軈がて警官の公務執行の抗拒煽動の罪を以て懲戒裁判所に告訴せられ、六ケ月の禁錮を宣言せられた。

ラッサルが前回の裁判に於て行つた辯論は陪審官に對して自己の無罪を訴ふる辯疏たるよりも寧ろ獨逸帝國に對する宣言であつたと稱せられてゐる。Meine Assisenrede, gehalten vor den Geschwornen zu Dusseldorf am 3. Mai 1849, gegen die Anklage: die Bürger zur Bewaffnung geg'n die Königliche Gewalt aufgerezut zu haben と題して同じき年を以て出版せられたるものが即ち是れである。彼れは此の辯論中に於て、彼れが其の最も深き確信に基いて純然たる革命的見地に立脚し、社會民主的共和政體の本乎たる信者なることを聲明してゐる。Ich aber, meine Herren, werde Ihnen stets mit Freuden bekennen, dass ich meiner inneren Ueberzeugung nach auf durchaus revolutionärem Standpunkt stehe, da-

es ich meiner inneren Ueberzeugung nach ein entschiedener Anhänger der sozial-demokratischen Republik zu sein die Ehre habe.—Ferdinand Lassalle's gesammelte Reden und Schriften, verlag von Wolff und Höhne. II Band, S. 505.」）彼れは凡ゆる市民が已むを得ずんば國家に對して×××××を行ふの權利及び義務あることを主張してゐる。國王は市民法を足下に蹂躙し、其の財産を沒收し、其の男子を虐殺し、其の女子を汚辱するを得るか、——足下等は彼れの暴力に對して自己を擁護するの權利を有することゝなく、彼れは國憲を破壞し、專制的國家を復活することを得るか。誰れか克く此の問題に對して肯定を以て答ふが如き甚しき時代遲れの不都合を敢てす可き。若し檢事が平然として之れを肯定し、市民が王權に對抗して武裝的防衞を行ふことを是認せらる可き場合を想像し得ずと稱し、而して大狀師が這般の思想は其の告訴の根據たるのであると稱するとしたらば、彼れ等は普魯西が三月以前に於けるに等しき專制的國家なりと稱するものなるが故に、彼れ等の立つ可き場所は當さに（被告席を指差して）此處である。彼れは議會の取れる受働的反抗の政策に對して侮蔑を浴びせてゐる。「受働的反抗は其れ自體に於て矛盾である」「受働的反抗は柄なく、刄なきリヒテンベルグの小刀の如く、又た沽すことなくして洗はざるを得ざる毛皮の如きものである。受働的反抗は外部的反抗なき單なる内部的意志に過ぎざるものである。國王は國民の自由を沒收し　而して國民議會は國民保護の爲めに惡意を宣明した！」（ibid., S. 538.）。國王が正當に議會を解散した場合には　之れに對する反抗は不法であり、有罪である、彼れが不當に之れを行つた場合には、人民の自由を擁護するが爲めに身命を賭せる能働的の反抗が存しなければならぬ。

彼れの知己アレクサンダア・フォン・フンボルトは彼れの爲めに國王に懇請せんことを欲したが、ラッサルは固より之れに耳を借さなかつた。彼れは舞踏會に赴くが如き輕快なる氣分を以て獄舍に下つた。而して其の姉妹が彼れの赦免を請願せることを聞いた時、直ちに國王に書を致してそは全然彼れの意志に非ざることを公言した。

三

次いでラッサルの公にせるものは彼れの政治哲學の基調を成せるヘーゲル哲學を反映しつゝある Die Philosophie Herakleitos des Dunklen von Ephesos: Nach einer neuen Sammlu-nr Bruchstüche und der Zeugnisse der alten dergestellt, 1858. である。此の書は一千八百四十六年末に略々完成せられ

たのであるが、ハウツフェルド夫人事件の終る後に及んで全力を擧げて其の補正に從ひ、一千八百五十七年八月に序文を草し翌年初め之れを兩卷の大冊に收めて出版したのである。ラッサルは言ふ、ヘラクリトスの倫理體系は其れ自體徳性の永遠にして根本的なる概念たる單一の觀念中に包有せられる、「通有性に降れ」と云ふもの即ち是れである。而して彼れは此の古希臘哲學者の思想がヘーゲルの政治哲學と一致する所以を立證する。「ヘーゲルの哲學に在つては諸法は均しく普遍的存在を有しつゝある意志の實現として看做される(這般の定義は臣民の形式的意志若しくは其の數に對しては全然何等の關係をも有せざるものではあるが)。之れと等しく、ヘラクリトスの通有性は經驗的全體から遠く掛け離れてゐる」と。(De Philosophie Herakleitos, I. Ss. 36, 92, 113; II. 276 431, 439.)

ラッサルは少年の昔より國家の觀念を徳性、正義及び理性の實現と看做して居つた。彼れは國家の運命を以て啻だに保護的の力たるに過ぎざるものと觀ずして、又た正義と文化とに對する積極的刺戟たるに在るものと信じた。而して永劫流轉の教理を設き、「在」と否定して「化」のみを承認せるエッフソスの哲學者は人間の制度は終結を有することなきものであつて、現代に傳來せる凡ゆる經濟的信條の價値と眞實とは絶對的に非ずして相對的なりと見做すの意見を以て其の社會的教旨の神髓とするラッサルに取つて多大なる興味あるものであつた。(尙ほ此の書に就きては Georg Brandes, Ferdinand Lassalle, 1911, pp. 32-41. 參照)。

四

彼れは其の翌一千八百五十九年を以て、社會問題に對する彼れの時代の態度が漸次順理的に傾きつゝあるを微示する「農民一揆」の史劇 Franz von Sickingen: Eine historische Tragödie. 並びに自由と民主政治とは伊太利亞に於けると等しく、獨逸に於ても亦た、統一によつて先立たれなければならぬものであり、獨逸に對して統一を與へ得る唯一の勢力は、恰も伊太利亞に對するピエモンテの如く普魯西亞であることを高調せる小冊子 De italienische Krieg von 1859 und die Aufgabe Preussens. を出版し、更らに之れに次いで憲法及び社會哲學に關する幾多の述作が現れた。"Fichte's politisches Vermächtniss und die neuese Gegenwart. Ein Brief von F. Lassalle," 1860. "Die Philosophie Fichtes und die Bedeutung der deutschen Volksgeistes," 1862. "Gotthold Ephraim Lessing vom kultur historischen Standpunkt," 1862. "Ueber Verfa

sungswesen" 1862. などの外に „Das System der erworbenen Rechte; Eine Versöhnung des positiven Rechts und der Rechtsphilosophie," 1851—1880 並びに "Herr Julian Schmidt der Literarhistoriker, mit Scholien-Setzern herausgegeben" 1862.を出してゐる。彼れの System der erworbenen Rechte. には既に其の社會主義的意見の萌芽が包含せられてゐる。(此の書に關しては Brandes, op. cit. pp. 57—84 參照)。

普國に於ける憲法爭議の最中に公にせられた Ueber Verfassungswesen. は自由黨の立憲主義を排斥するが爲に物せられたものである。紙上の憲法は何等重要なる意義を有するものでない、それは單に宣言的であつて、創造的でない。眞に重要なるものは現實に存在する力の分配である。國王及び軍隊は力である、朝廷及び貴族は力である、庶民は力である。社會は現實に存在する是れ等諸實力の相對的强度によつて支配せられるものであつて、單に之れを記錄せるに過ぎざる紙上の憲法に依るものではない。權利は啻だに實力の宣言として見做される。「憲法問題は本來權利問題に非ずして、實力問題である　一國の眞實の憲法は單に一國に存する眞個現實の權力關係に於てのみ存する、斯くて成文憲法は單に彼れ等が社會に事實存在する權力關係の精密なる表明たる際に於てのみ價値と持續とを有するものである」(Verfassungsfragen sind ursprünglich nicht Rechtsfragen, sondern Machtfragen: die wirkliche Verfassung eines Landes existirt nur in den reallen thatsächlichen Machtverhältnissen. die in einem Lande bestehen; geschriebene Verfassungen sind nur dann von Werth und Dauer, wenn sie der genaue Ausdruck der wirklichen in der Gesellschaft bestehenden Machtverhältnisse sind.—Lassalle's Reden op. cit. I. S. 84.)。

而して彼れは一千八百六十二年の Arbeiterprogramm. Ueber den Besonderen Zusammenhang der gegenwärtigen Geschichtsperiode mit der Idee des Arbeiterstandes. に於て更らに明確に自己の政見を表明し、更らに深く經濟問題の奥底に突入したのである。

五

ラッサル此の「勞働者綱領」に於て述べて云ふ。近世史には相次げる進化の三階段が存する。第一の時代は一千七百八十九年以前に於ける封建時代であつて、一切の公權力は地主階級に歸せしめられ、之れによつて行使せられ、又た其の利益の爲めに使用せられた。斯くて又た土地所有權を有せざる階級は無力

隷屬の狀態に在つた。宗教改革の時代より、之れに次げる二世紀を通じて革命は徐々に行はれた。而して其の極まる所は一千七百八十九年の大革命であつた。第二の時代は一千七百八十九年から一千八百四十八年に至るブールジュワの時代であつて、動產は不動產に對して平等なる權利と承認とを受くるに至つたが、而も政權は猶ほ財產資格に基礎を置くものであつて立法はブールジュワジーの利益に依つて支配せられた。貴族が土地の所有權を以て支配したるに對し、ブールジュワジーは資本の所有權を以て支配した。第三は、一千八百四十八年以後に於ける勞働階級の時代であつて、初めて勞働に其の權利を賦與し、而して勞働階級の想念と仰望と利害とによつて支配せらる可きものである。彼れ等の時節は既に到來した、ブージュワの時代は猶ほ荏苒として法制上に存續してはゐるが、事實に於て既に過去のものである。斯くの如きは實に社會變化の常態であつて、封建時代も事實大革命以前に於て終末を告げたのである。大革命前に於て主として產業の發達、資本の蓄積及び動產の增大に由つて、貴族及び僧侶の地位は既に事實に於て（法律上に於ては然らざるも）著しく變化して居つた革命は先づ社會の中心に發生するものであつて、單に動亂によつて調印せられ、批准せらるゝに過ぎない。人は決して革命を創造することは出來ない常に彼れは既に社會の實際的關係と爲つた革命に外部的なる法律上の承認と確實なる實行を與へ得るに過ぎない。(Lassalle's Redon, I. S. 242.)。

革命を創造せんとするは毫も歴史的法則を顧みることなき未熟なる人々の愚擧である。而して同一の理由に據つて、既に社會の內部に成立せる革命に反抗せんとするも亦た未熟であり幼稚である。若し革命が事實に於て存するならば、結局其の法制上に於ける存在を阻止することは可能でない。這般の變革を成就せんことを欲求する者を革命的なりとして攻擊することも亦た無効である。彼れ等は既に社會の胎內に宿りつゝある「將來」の生誕を助力する產婆に過ぎざるものである。而してラッサルは今日勞働階級が要求しつゝあるものは此の產婆の役目であると信じた。ブルージュワジーは封建階級の特權を覆すと殆んど同時に自ら特權階級と爲つたのである。早く既に一千七百九十一年九月三日に於て能働的の市民（citogen activ）と受働的の市民（cityen passiv）との區劃が設けられたのである。前者は直接稅を支拂ひ、是れに由つて又た選擧權を有するものであつて、後者は直接稅を支拂ふことなく、又た選擧權を有せるものである。(ibid., S. 248.)。

斯くの如き區別の結果は勞働階級の全部に對して參政權を担

否定するに在つた。ルイ・ヒリップとギゾーの下に在つては、「法律上の國民」(das pays légal, das gesetzliche Land, nämlich das "gesetzlich in Betracht kommenge Land") は僅かに二十萬人から成立する。即ち二十萬人を越へざる「市民的財産」(der bürgerliche Besitz) の所有者、即ち資本所有者が三千萬の住民を支配したのである。(ibid., S. 294.)。ブールジュワジーが獲得せんことを謀つた特權は單に政權のみに限られてはゐなかつた。恰も貴族階級が其の特權的地位によつて課税を免れ、之れを第三階級の肩上に課せると等しく、第三階級は間接税の制度によつて亦た「財政上の免除」を得て、納税の義務を自己の肩上より勞働階級のそれに移した。一千八百五十五年の統計に據れば、普國歳入の六分の五は間接税から生じてゐる。而して間接税は常に過重に勞働階級の嚢中から徵收せらる」ものである(ibid., Ss. 252―253.)。

六

一千八百四十八年二月二十四日を以て史上に於ける新時代の曙光が差し初めた。恰も第一革命が第一及び第二階級の特權に對する第三階級の叛起であつたが如く、一千八百四十八年の革命は第三階級のそれに對する第四階級の叛起である。Wenn die Revolution von 1789 die Revolution des Tiers état, des dritten Standes war, so ist es diesmal der vierte Stand. (ibid., S. 256.) 勞働階級は決して事實上一個の階級ではなかつた。第四階級は啻だに自己が特權階級に非ざる點に於てのみならず、又た能く特權階級たり得ざる點に於て封建的勢力と相違し、亦たブールジュワジーと相違する。それは過去に於けるブールジュワジーの如く特權的、排他階級に墮落することを能はざるものである。蓋しそは事實上人民の大多數より成るが故に、其の階級的利益と共同の幸福とは同一なるか、若しくは少くとも調和的なるものである「汝等の事件は實に全人類の事件である、汝等の自由は人類者の其の自由であり、汝等の支配は總べての支配である」(ibid., S. 255)。「汝等は總べて汝等の眞の個人的利益を形成する所のものが歴史の脈搏と共に、倫理的發達の嚮導系理と共に(mit dem zuckenden Pulsschlag der Geschichte, mit dem treibenden Leitensprinzip der sittlichen Entwickelung) 鼓動する幸福なる地位に在る。」(ibid., S. 261.)。

勞働階級の思想は現代の世界に於ける社會の支配原理たり、又たは、たる可き運命を有するものである。此の優越は倫理上及び政治上に重要なる意義を有す可きものである。倫理的には

單に勞働階級は何等排他的特權の維持す可きものを有せざる理由に居つて、上層階級に比して利己的ならざるものである。斯くて多幸なる勞働階級倫理觀念の支配下に在つては毫も排他的利益若しくは特權なく、從つて又た我慾少なかる可きである。アダムは耕し、エヴアは紡ぎ、而して意識的若しくは無意識的に各個は更らに多く全體の爲めに働き、全體は更らに多く各個の爲めに働くに至る。政治的にも亦た這般の變革は有利である勞働階級は全然ブールジュワジーと別個の國家觀を有する。爰にラッサルは個人主義的哲學並びに「マンチエスター學派」が抽象的經濟學上に打ち建てた「自由放任」の政治學說を攻擊し彼れ等の夜警的國家觀(Nachtwächteridee)に對して、國家を以て各個人が其の力の合計を百倍に增加する一個の倫理的全體に統一せるものなりと做す有機說を主張する。(Der Staat st die Einheit der Individuen ineinen sittlichen Ganzen, eine Einheti, welche die Krafre aller Einzelnen, welch ein dieser Vereinigung eingeschlossen sind, millionenfach vermehrt, die Kräfte, welche ihnen alren als Einzelnen zu Gebote stehen wurden, millionen fach vervielfaltigt.—ibid. S. 263.)。

即ち第三階級は國家に對して個人的自由及び財產の保護以外に何等の請求を有せない。國家は單に各が盜[illegible]、盜[illegible]ない。盜賊なくんば其の任務を無用と爲る。國家が各個人として其の隣人の同一樣の權利と一致する範圍内に於て其の活動力を無障に行使するの保證を與へたる際には、其の總べての義務は悉く盡きる。而も這般の第三階級的國家學說は自己の見地よりするも尙ほ其の目的を遂行することが出來ない、そは自由の平等を確保することなくして、單に自由に對する權利の平等を確保するに過ぎない。萬人が事實に於て平等であるとしたならば、そは克く其の目的に適合するものであるかも知れない。而も事實に於て萬人は平等に非ざるが故に、そは單に弱者をして强者の支配に委ぬるの結果を來すに過ぎない。然るに之れに反して勞働階級は、自由に對する權利の平等を保護するを以て倫理的共同團體たる國家の十分なる目的であると觀ずるものではない。そは更らに利益の共同一致、結合的及び相互的の發達(die Solidarität der Interessen, die Gemeinsamkeit und die Gegenseitigkeit in der Entwickelung.)によつて補足せらる可きものである。(ibid, S. 262.)。歷史は自然との鬪爭、窮迫、無知、貧困、無力、斯くて又た凡ゆる種類の隷屬に對する鬪爭であつた。是れ等の無力に對する不斷の征服こそ實に歷史の表明せる自由の發達である。(ibid, S. 263.)。

這般の鬪爭に在つては吾人は各自單獨に行動するによつて勝利を得ることを得ない。斯くの如き自由の發達、自由に對する人類の發達を遂行するのが國家の職能である。國家の目的は啻だに自由を擁護するに止らずして、之れを發達せしむるに存する。國家の目的は其の人民が自己の個人的努力のみによつて到達すること不可能なる可き目的、生存の階段、知識、勢力及び自由の總量を取得し維持し得るの地位に之れを置くに存する。斯くて又た國家の目的は人間の本質を積極的發達と前進的展開とに誘ふこと、換言すれば、人間の天分(即ち人類に適せる文化)を眞實の存在に形成するに存する。それは自由に對する人類の教養及び發達である。(ibid., Ss. 263 264)

國家は既述せるが如き歷史を構成する大事業に於て、其の巨大なる能力に比例せる積極的役割を演じ、窮迫、無知、貧困及び凡ゆる種類の拘束に對する人間の前進的征服を助成しなければならぬ。是れこそ即ち國家の目的であり、神髓であり、倫理的本性である。國家は決して國家たることを失はずして全然之れを廢棄することを得ない。實に國家は常に事物の力其の者に驅られて、屢々其の意識的同意なくして、又た時には其の指揮者の反對にも拘らず、幾分其の遂行を餘儀なくせられて來た。一言にして云へば、各人を助けて其の完全なる發達を遂げしめなければならぬ。是れが一千八百四十八年の至誠高貴なる觀念であつた。それは新たなる時代、勞働の時代の思想である。

ラッサルは「勞働者綱領」を公にしたると同じき一千八百六十二年を以て前記諸篇の外 "Was nun? Zweiter Vortrag über Verfassungswesen." "Die Wissenschaft und die Arbeiter." 並びに Der Lassalle'sche Kriminal-Prozess. Das Urteil erster Instanz mit kritischen Randnoten zum Zweck der Appellationsrechtfertigung. を出版してゐる。

七

ラッサルは翌一千八百六十三年二月十一日ライプチッヒ中央勞働委員會の需めに應じて、同年三月一日附を以て其の有名なる Offenes Antwortschreiben an das Zentral-Komite zur Berufung eines Allgemeinen Deutschen Arbeiter-Kongresses zu Leipzig. を公にした。彼れは此の「公開答狀」中に於て彼れの謂ゆる「勞銀の鐵則」を詳細に論じてゐる。彼れは此の硬直冷刻なる經濟的法則によつて、需要供給の支配する現在の狀態の下に在つては、勞働の平均賃銀は常に一國民の生活の標準に從つて勞働者の生命を維持し、其の家族を永續せしむるに必要なる純然たる生活費以上に多く出づることなきを主張する。

Das eherne ökonomische Gesetz, welches unter den heutigen Verhältnissen, unter der Herrschaft von Angebot und Nachfrage nach Arbeit, den Arbeitslohn bestimmt, ist dieses: dass der durchschnittliche Arbeitslohn immer auf den notwendigen Lebens-unterhalt reduzirt bleibt, derin einem Volke gewohnheitsmässig zur Existenz und zur Fortpflanzung erforderlich ist.—Lassallis Reden op, cit. I. Ss. 36–37. 斯くて彼れは勞働者が全然文明の進歩に伴ふ勞働の生産力增進の恩澤に浴することを能はざるを推論する。「自助」(Selbsthülfe) の說法は强固なる資本の力に對して無効であり、單に勞働者流の手段と企業家流の心意とを有する勞働者の忌はしき戯謔を描くに過ぎないものである。彼等の地位を改善せんとしたならば、彼れ等は企業家を廢止して彼れ等自ら企業家と爲らなければならぬ。

ラッサルは問ふ、「國家とは何?」彼れは之れに答へて勞働者を指差す。「[redacted]が國家である。汝等は人口の九割六分である、總べての政權は當さに汝等のものであり、汝等により、又た汝等の爲めに存す可きものである。而して汝等の幸福と改善とは須らく國家の目的たる可きものである。汝等の幸福は一階級の利害に非ずして、國民的利害なるが故に、當さに然る可きものである」「勞働者の民主的組合、而も國家の保護獎勵に依つて可能なる勞働者の民主的組合——是れこそ實に勞働者階級をして荒野を出でしむる唯1の道である。(Die frei individuelle Assoziation der Arbeiter, aber die freie individuelle Atsoziation, ermöglicht durch die stützende und förde nde Hand des Staates—das ist der einzige Weg aus der Wüste der dem Arbeitestande gebene ist.) 然しながら如何にして國家を動して能く這般の關與を行はしむることを得るか?「それ唯の普通直接選擧に依つてのみ可能である」(ibid, S. 55.)

ラッサルは尙ほ此の外に同じき年を以て幾多の著書を出してゐる。Di indireckte Steuer und die Lage der arbeitenden Klassen." "Macht und Recht. Offeness Sendschreiben." "Zur Arbeiterfrage." "Arbeiter-Lesebuch." "Die Feste, die Presse und der Frankfurter Abgeordnentag. Drei Symptome des öffentlichen Geistes." "An die Arbeiter Berlins." (14 Oktober 1863). Eine Ansprache im namen der Arbeiter des Allgemeinen Deutschen Arbeitervereins." "Rede Lessalles zu Frankfurt a. m. am. 17 u. 19. V. 1863 nach dem stenogr. Bericht, An die Arbeiter Berlins."

八

ラッサルは又た一千八百六十四年に這入つてから、"Herr Bastiat-Schnlze von Delitzsch der ökomoische Julian oder: Rapital und Arbeit." "Nach Cemstenogr. Beicht" „Arbeitervereins und das Versprechen des Konigs von Preussen." "Der Hochverraths-Prozess." 等を草してゐる。實に一千八百六十二年三月から一千八百六十四年六月に至る短日月の間に彼れは二十篇を下らざる述作を行つたのである。固より其の中に在つて、其の長さから云つて、又た其の內容から觀て著書と稱し得るものは僅かに三四篇のみではあるが。

ラッセルは其の Bastiat-Schulze に於て、彼れの敵手ヘルマン・シュルツェ・デーリッチが樂天的自由主義の佛國經濟學者フデリック・バスチアより貸用せる原理を攻擊し、其の共同組合組の織を以て全然不滿足なる勞働問題の解決法なりとして排斥し、同時に自己の意見を解明し、其の實際的提案を擁護してゐる。此の書に於ても亦た、彼れの見地は歷史に哲學基礎を有するものである。

勞働者は太初よりして犧牲であつた。文明の始初から基督教時代に至るまで奴隷制度が普く行はれた。而して勞働者と其の生產せる一切のものとは其の主人の財產であつた。次いで基督教の時代が現れた、然しながら勞働者の解放は遲々たるものであつた。古代の奴隷制度に代つて封建時代の臣隸制度が來た。勞働者は猶ほ部分的に自己の所有者たるを得たのみであつて、特殊勤務の最も多樣なる連續の一、若しくば其の以上によつて法律特定の領主に束縛せられて居つた。即ち猶ほ勞働者は多少の程度に於て其の使用者の財產であつた。ギルドは都市に於ける隸民の廢止に次いで現れた。而して同一なる獨立の原則が持續した。最後に佛國革命の霹靂と紫電の眞唯中に自由競爭が宣言せられ又た勞働は法律上自由なることを言明せられた。最早人に對し、若しくば人の使用に對して所有權は存することがない。今や何人と雖も、全體としても、部分としても、相續せられ、若しくば賣却せらるゝことを得ない。彼れは彼れ自身のものであり、彼れの勞働力は彼れ自身のものである、然しながら自由は猶ほ單に部分的である、蓋し勞働は未だ今日に至るも經濟的に解放せらるゝことなきが故である。洵に勞働階級は今や有力なる第四階級を形成する、然しながら其の所有する力は未だ潜在的である。勞働者は猶ほ彼れ自身若しくば彼れの勞働を完全に領有することが遠く隔つてゐる。此の世紀間に於ける資本の勞働との取引を仔細に語るものよりも大なる詐欺の物語るを說く

ことは出來ぬ。此の世紀内に於ける歐洲產業の全史は「放漫なる投機」(ausschweifenden Spekulationen)「實相に對する盲目」(Unkenntniss der Thatsachen) から生じた奔逸なる信用の熱病的發作及び是れに起因せる放肆なる過剩生產と是れより生じたる恐慌、遙かに生產費以上なる商品價格の下落、勞働の停止と一定期間に亘れる同盟罷業の頻發の走馬燈に過ぎざるものである」(Lassalle's Reden, op. cit. S. 255.)。

「勞働者の脊中は即ち企業家や投機者が賭博と化した現代生產の勝負を行ふ無我の青テーブル (der selbstlose grüne Tisch) である。彼の徒が「玉轉し」の當りを占めて彼れ等に投げられた金の堆積を收集し、亦た彼れ等が仕損つた場合に之れを打つて、直ちに機運を挽回せんことを期して自ら慰むる青テーブルは勞働者の脊中である。賃銀の下落、辛じて行ひ得たる貯金の消費、純然たる失業從つて又た生存資料の喪失によつて這個傭主及び投機者の賭博に於て免るゝこと能はざる失敗を支拂ふものは勞働者である、而も彼れは彼の徒の誤想及び誤算を誘起せるものに非ず。彼れは其の貪欲の責を負ふものに非ず、而してまた彼れは其の幸運の結果に參加するものでもない。」(ibid., Ss. 255－256)。

勞働者は加工を行ふ可き原料、及び勞働の用具なくして勞作し得ざるものである。而して是れ等のものに對して近代の勞働者は從來未だ曾つて見ざる程度に於て其の私有者に依賴してゐる。從つて彼れは其の勞働の全價値を拋棄し、其の代償として最少限の生活費を得るに甘んじなければならぬ。社會主義者が財產を以て盜賊なりと主張するは此の意味に於てゞある――主觀的に所有者が盜賊であると云ふのではなく、客觀的に急迫せる自由競爭の制度の下に在つては彼れ等は勞働者に對して其の勞働の眞價よりも遙かに低き勞銀を提供しなければならず、又た勞働者は之れを受理せざるを得ざることを意味するのである。凡ゆる物の價値は、經濟學者自身の說明に依れば、其の產に投入せられたる勞働の高に對する別名に過ぎざるものであるが故に、勞働は總べての富の源泉 (die Quelle und der Faktor aller Werthe) である。而して勞働はチエール及びバスチアの如き近代に於ける社會主義反對の論者が個人所有權を是認し得可しと思惟する唯一の基礎である。而も現存の財富分配方法に依れば、個人所有權は斯くの如き之れを是認し得可き唯一の基礎の上に立つものではない。而して社會主義者の企圖は現在に於て之れを攪亂しつゝある一定の無意識なる諸力の影響から分配の制度を解除し、初めて其の自然にして正當なる基礎、即ち勞働に私有權を呼び戻すに存する。

斯くの如きは惟り現產業制度の根本的改造と勞働階級に對する報酬決定の新方法とに依つてのみ遂行することが出來る。蓋し現在の制度には深甚なる矛盾が存する。そは生產に於て空前に共同主義的であり、分配に於て未曾有に個人主義的なることである。然らば既に業務に於て協同參加あると等しく、收益に於も眞の協同參加がある可き筈である。資本は勞働の主人たる地位より降つて、其の從僕と爲らなければならぬ。利潤は消滅す可きものである。產業は所有的原理に代つて相互的原理に從つて指導せらるゝ所が大と爲らなければならぬ。生產の要具は私人の手から取除かれて、集合的財產若しくは更らに進んでは國民的財產とすら變らなければならぬ。一千七百八十九年以前の舊時代に在つては產業社會は自由なき共同一致の原則によつて支配せられた。八十九年以後の時代に於ては前者にすら劣れる共同一致なき自由によつて支配せられた。新時代の原則は自由なる共同一致でなければならぬ。

九

ラッサルは現在の制度を以て凡ゆる人をして彼れ自身の所業に對して責任を負はしむるが正に唯一の健全なる制度なりと做すシュルツェ・デーリッチの抗論を排斥する。現在の制度は凡ゆる人をして自己の所業に非ざるものに對して責任を負はしむるものである。前代未曾有なる近代的產業の相互的聯絡は之を導いて好結果を得せしむるが爲めに知悉しなければならぬ條件は無限に增加し、合理的打算は殆んど不可能となり、又は何等の効績なくして富裕となり、又何等の過失なくして貧困と爲るに至つた。近代の產業經濟に於ける一切のものは社會的關係により、有利若しくは不利なる地位及び機會によりて支配せられる彼れ曰く「斯くの如く社會的關係の羈絆、斯くの如き凡ゆる現存の不可知なる事情を相互に結合する鏈鎖を稱して我が商業界に於ては氣運（Konjunktur）と稱する」と。(ibid., S. 252.)其處には個人的努力に優越し社會的支配を必要ならしむる氣運の廣大なる界域が存在する。

資本は歷史的の範疇であつて論理的のそれではない。資本家は近世の產物である。資本は節約の結果に非ずして、機會の結果である。轉變、恐慌、戰亂等も亦た社會的起源を有するものであつて、大部分個人的行爲の範圍外に在るものである。此に

於て乎、古典派經濟學者の如く、個人的發動及び自利的觀念に依頼するは愚であると觀ぜられる。富の分配は現在と雖も、社會的手段に由つて行はれてゐる。現在に於ける財產の配置は洵に無政府的にして不公正なる自然的社會主義である。彼れは單に整然たる合理的社會主義を以て之に代へんとする。而して社會主義的經濟學は市民階級的經濟學の最後にして、又最も代表的なる表現たるリカードオに對する戰鬪に外ならざるものである。而してそは這般の戰鬪に際してリカードオ其の人の武器を以てリカードオ自身の根據に立つて戰ふものである。殊に社會主義的經濟學が利用することの多かつたものはリカードオの勞働價値說並びに自然的若しくは必要勞銀の法則であつた。

十

ラッサルは一千八百六十三年にカール・ロードベルタスと文通を開始し、其の協力を得んことを欲したのであるが、彼れ等兩者の究竟の目的が似通つて居るにも拘らず、終に彼れはロードベルタスをして、國家信用を以てする生產組合の效果を確信せしめ、社會主義者が經濟的黨派たると等しく政治的黨派たる可きことを承認せしむることが出來なかつた。(Briefe von F Las-salle an Karl Rodbertus-Jagetzow mit einer Einleitung von A. Wagner, 1878.參照)。而して又たラッサルの主義は永く獨逸の社會民主黨を支配して行くことが出來なかつた。國際主義的なるカール・マルクスの主張は軈て國民主義的なるラッサルのそれに取つて代つた。マインツの僧正ウイルヘルム・エマヌエル・フライヘル・フオン・ケッテラーは奔放熾烈なるラッサルの傳道に心醉し、彼れが自ら社會問題に關與するは正に其の基督教徒として、又た僧正としての義務であることを確信した。彼れは全然現代の產業組織に對するラッサルの破壞的批評を承認したのみならず、其の社會改造の計畫に於ても亦た屢々其の所說に贊同し、生產組合の制度を採用するを以て勞働階級を扶翼す可き最良の方策と觀た。然しながらラッサルは這般の生產組合の組織が國家より受くる一億萬ターレルの補助金に依賴すべきを意圖せるに反し、ケッテラーは飽くまでも、之れを基督教的慈善心の成果に期待し、信教の任意的寄附行爲に依つて其の所要の金額を募集し得可きを信じた。

後年の獨逸保守黨內に於ける國家社會主義的意見の發達に對して最大なる原動力を與へたものはラッサルに非ずしてロードベルタスであつた。其の最有力なる代表者アドルフ・ハインリッヒ・ゴットチルフ・バグナー教授に對して初めてダマスカスの光を射て、其の眼から經濟的個人主義の鱗片を引き剝いだものはロードベルタスであつた。獨逸舊教社會主義はクリストッフ・ムフアング以後に及んで教會よりも寧ろ國家に對して要求する所が多くなつた。然しながら知覺せらるゝ現實の實在を以て理想とする社會民主々義は全然基督教と相關せざるものであつた一切の形態に於ける基督教は過去と現在の世界に屬するものであつて、普遍的解放を齎す可き將來の世界に屬せざるものと認められた。獨逸に於ける國家社會主義は同國に於ける福音的基督教社會主義と密接なる關係を持續して居つた。ドクトル・アドルフ・シュテッケル等が其の機關紙 Staats-Sozialists. に於て「社會問題は存在する。而もそは惟り國民的存在の宗教的及び倫理的要素と聯合せる強大なる君主國によつて解決せらる」と叫んだ時、社會民主黨は毒惡なる態度を以て之れに反抗し、男女の集會を開いて無神論を讃美し、烈しく聖職と宗教とを攻擊した。而して又た新マルクス派のサンヂカリストが攻擊の焦點は主として國家社會主義であつた。彼等の眼には干涉主義は勞働階級を腐敗せしむるものとして映ずる。國家社會主義と基督教社會主義とは終に本然の社會主義と融合することが出來なかつた。

（附記）私は唯だ第十九世紀後半に於ける經濟思想史の一部として此の小篇を草した。ジョン・レー氏其の他の先學に依賴する所が頗る多い。倘ほ詳細にラッサルと獨逸勞働運動とを知らんとせらるゝ諸君に對しては小泉信三君の「社會問題研究」を推擧するに躊躇しない。

十字街上の組合運動

統一派C・G・Tの第一大會

山川均

一

歐洲戰爭の勃發までは、サンチカリズムの發祥地たるフランスの勞働組合運動は、各國の勞働組合運動のうちに一種獨特の地位を占め、國際無産階級運動の間に光を放つてゐた。サンチカリズムの信奉者は、サンチカリズムの組合運動を以つて、勞働階級の唯一にして眞實な革命的運動と形態であると信じてゐた。然るに歐洲戰爭が初まつて、各國の勞働運動が資本的帝國主義の大旋風に捲きこまれるとサンチカリズムの上に立つフランスの勞働組合も、必ずしもサンチカリストの主張したやうに特別の性質を帶びた組合運動ではなくて、レギエンによつて率ゐられた獨逸の組合運動、ゴムパアスによつて指導せられた米國の組合運動、アプレトンとトーマスによつて代表せられた英國の組合運動と、共通の性質と共通の弱點とを持つた同一運動の一部分に過ぎぬことが明かになつた、ブルジョアジーの思想の影響から眞に獨立してゐなかつた點に於ては、サンチカリズムの組合運動は、保守的な英國の組合運動と選ぶところはないインテリゲンチャと中産階級的社會主義の指導者の大部分がブルジョアジーを助けて戰爭を遂行したやうに、フランスの勞働組合運動の大部分も、同じくブルジョアの利害に最も忠實な戰爭の遂行者となつた。

然しながら此間に、各國の勞働組合運動の少數者の間には、革命的の精神が復活した。いづれの國の勞働組合運動にも無産階級の政治的運動にも、眞に革命的な少數派が現はれた。そして漸次に勢力を增して來た。そこで戰爭が終つて見ると、各國の勞働組合運動も社會黨の運動と同じく、改良派と革命派との二つの陣營に分裂して居つた。此點に於ても、サンチカリズムの組合運動は、其他の如何なる組合運動との間にも、少しも異るところがない。否なフランスの組合運動の場合には、此の傾向

は特に著しいものがあつた。そして其の結果として、サンヂカリズムの象徴と見做されてゐた勞働總同盟(C・G・T・)は、明白に二つに分裂し、今日では、フランスには、二つのC・G・T・が對立してゐるのである。

サンヂカリズムは一つの學說でもなく、また一つの教義でもないサンヂカリズムには定まつた教義はない、サンヂカリズムの意義は×××のものにあると云ふことは、サンヂカリズムを信奉する學者が、特に力を入れて主張したところであつた。然るに實際に於ては社會民主主義と同じように、サンヂカリズムも亦た一つの硬化し固定した教義となつてゐた。そしてサンヂカリストに取つては、革命的の『行動』よりも革命的のサンヂカリズムの方が、一層貴重なものとなつてゐた。戰後に於ける資本主義の新しい形勢は、新らしい×××の行動を要求する。行動か教義か！　C・G・T・が明白に二つに分裂したにも拘らず、フランスの組合運動が尙ほ依然として安定を得ず、依然として明白有力な行動に進むことの出來ないのは、行動と教義との兩つのもの丶間に迷ふてゐるサンヂカリズムの懊惱を表はしたものに外ならぬ。

二

C・G・T・の内部に革命的の少數派が起つたこと、この少數派が漸次に勢力を得て、昨年七月のリール大會では、僅かの少數を以て破れたが十二月巴里に開かれた左翼大會では、少數派は事實上C・G・T・の多數派となつて居ることが明かになつたこと、之に對して從來の多數派たる幹部派では、左翼組合の除名を以つて應戰し、C・G・T・分裂の危機が迫つてゐることは、そしてフランスに於ける斯ようなサンヂカリズムの大動搖が、何事を意味してゐるかは、本誌の四月號にその大體を紹介した通りであるが、C・G・T・の分裂を防止しようとする左翼の最後の努力による提案が、二月十四日の總同盟全國委員會で否決になつたので、C・G・T・は名實共に二つに分裂し、左翼は舊C・G・T・に對立して統一勞働總同盟(C・G・T・U)を組織すること丶なつた。

しかし統一C・G・T・U・は、尙ほその組織を完成してゐた譯ではなく、最近に至るまでは、暫定の假規約によつて管理されて居り、本年六月に開かれる大會によつて、初めて正式の組織を見る筈になつてゐた。

統一C・G・T・U・の第一回の正式大會は、六月二十六日から七月一日に至る六日間、サン・エチエンヌで開かれた。大會には全國の七十一組合、四十四聯合會、三十五萬の組合員を代表する三百三十三名の代議員が送られた。

第一日の議長に選ばれたロアル組合同盟ルロデュロンは開會の演説のうちに　特に力を入れて、『吾々は諸君に信頼する、諸派心が勝利を得るならば、吾々の運動は力を弱められる、議題は熱心に討論されなければならぬ、が然し衝突してはならぬ。サンヂカリズムは最早や成人になつた、サンヂカリズムは一層強くなつて此の大會から出て來なければならぬ』と云ひ、『大會の結果はどうならうとも、多數派は少數派を排斥してはならぬ、多數派も少數派も、C・G・T・の旗印の下に相助けて、無產階級×××進しなければならぬ』と警告し、大會は直ちに、『昨年十二月の左翼大會の決議に從ひ』各種の意見に對しては、充分に表明の機會を與へ　少數派の權利を尊重すると同時に、多數決には必ず服從すると云ふ決議をし、更に五十組合からの動議により、『リール大會の事故に鑑み、且つ分裂派(舊C・G・T・)の態度に鑑み』、大會の討議中は一切一個人的の攻擊を禁じ、之を犯したもの　又は腕力に訴へたものは退席させるといふ決議をした一事によつても、大會前からこの空氣が、如何に緊張してゐたかゞ伺はれる。否な統一勞働總同盟は、第一回の大會に於て、早くも分裂を免れぬといふ觀察をしてゐた人すらもあつた。

大會の重要問題は、國內及び國際組合運動の一般方針を定めることゝ新たに正式の規約を定めることである。大會は先づ運動方針を討議し　次に規約の討議に入ることゝなつた。それで大會の中心問題は、勢ひ運動方針の問題で、あつて大會の大部分に勢ひその討議に費やされたのである。

國內及び國際の運動方針に就ては、大會には二つの決議案が出た。先づモンムソーは、勞働左翼の中堅となつてゐるセイヌ縣組合同盟執行委員を通過した決議案を朗讀し、之に對してベスナールは反對決議案を提出した。そして大會は六日のうちの五日間を、この二つの決議案を中心とする熱烈な討議に費やした。

三

從來C・G・T・の左翼を結束してゐたものは、戰爭と共に階級の協調と改良主義に墮落したサンヂカリズムの運動と、再び革命的の精神に引き戻そうとすることであつた。しかしながら資本主義最近の發達狀態を目標に置いた時、如何なる行動を取ることが眞に×××の運動であるかといふ、具體的の問題に當面した時には、統一勞働總同盟の內部は必ずしも意見の統一のないことが明かになつた。斯ような具體的の問題に對する反對意見の間の鬪爭左翼少數派の成長に伴つて成長して居つたが、昨年十二月の左翼大會によつて、C・G・T・U・が事實上に成立してからは、勢ひ反對意見の間にも著るしくなつて來た。唯だ彼

等は組合運動に對する根本思想を異にして居るにも拘らず、組合運動を勞働階級の者の全階級の運動としようとする、一致と團結の精神に於ては、悉く一致して居つた。そして此の精神こそ、C・G・T・の結束を固くしてゐたものである。

そこで愈々G・T・Uに組織と原則とを與へようとする第一回の大會が開かれると勢ひ異つた意見が相對立つた。サン・エチエンヌの大會には、少くとも四つの傾向が明に代表せられて居る。

第一には、一九〇六年のアミアン決議を組合運動の金條玉科として、文字通りに遵奉しようとする正統派のサンヂカリストがある。尤も但C・G・T・に留まつて居るジュオー一派のサンヂカリストも、事實上は改良主義と階級協調主義に墮落はして居るが、理論に於ては、彼等は依然としてアミアン決議を固執し自ら革命的サンヂカリストを以て任じて居る。そこで正統派サンヂカリズムといふ一點に就ては、但C・G・T・U・の人々と中の正統派との間には、何等の相異はないと云へない。

第二には、正統派のサンヂカリストと提携し、乃至は其の背後に隱れてゐる無政府主義者がある。C・G・T・U・內の正統派サンヂカリストと無政府主義の一團とは、絶對無條件に×××否認する立場からロシア革命を非難し、無產階級獨裁に反對する點に於ても、組合の萬能を主張して、其他の無產階級の革命的政黨との協力に反對する點に於ても、但C・G・T・の正統派サンヂカリストと異るところはあるまい。こゝに面白いことは、但C・G・T・の人には、實際に於ては階級協調主義に墮落してゐるにも拘らず、理論に於てだけは少くとも共產黨との協力に反對する爲めの理論に於てだけは、絶對無條件の國家否認論者である。それと同時に、無政府主義者は、組合運動そのものに革命的勢力として大くの價値を認めぬにも拘らず、C・G・T・U・の內部にあつてだけは——少くともC・G・T・U・が國內的にはフランス共產黨と協力し、國際的には赤色組合インタナシナルロに加盟することを沮止する爲には——正統派サンヂカリスト共に、組合萬能主義を主張して居ることである。

第三には、同じくアミアン決議を以て組合運動の原則とは認めるが、アミアン決議の文字に固執しないで其の精神に備へようとする人々である。アミアン大會の加議を必要とした一九〇六年と、歐洲大戰とロシア革命とを經た一九二二年との間には十數年の時間と經驗とが橫はつて居る。彼等は一面にはアミアン決議に對する強い、執着を殘してゐる點では、革命的行動よりもサンヂカリズムの教條を愛しようとする。此點に於ては、彼等も亦た正統的である。けれどもそれと同時に、彼等は一九〇六、一二二年との間に於ける、資本主義の發達狀態と形勢との變

化を無視することが出來ぬ。此點に於ては、彼等は死したる教験よりも、革命の行動を重んじようとする。彼等がアシアン決議の文字に復へれと云はないで、其の精神に復へれと云ふのは之が爲である。此立場は、やがて國内的にも國際的にも、彼等の執らうとする實際運動の方針に具體化されて居る。卽ち彼等は一方には、組合運動の自治をを主張するが、必ずしも組合の萬能を主張せぬ。そして他方には、組合運動の獨立を要求はするが組合運動の自治と獨立との保障を得るといふ條件の下に、國内的には生産階級の革命的政黨(卽ちフランス共産黨)、國際的には赤色組合インタナショナルに加盟しようとする。

第四には、組合内の共産黨員の一國がある。彼等は國内的にも、國際的にも組合運動と無産階級の革命的政黨との間に、有力にして一致の行動を取ることの出來を有機的關係の必要を力說し、赤色組合インタナショナルへの節時が盟を主張する。

四

斯ようにサン・エチエンヌ大會の中心問題は 理論上の方面では、一九〇六年のアミアン決議であつて、實際上の方面では、赤色インタナショナルが盟の問題である。そして大會の討論や從來の行き掛りから見ると、この理論の上の爭ひの爲に、當然に實際上の爭ひが起つたのか、この實際問題の爭ひが、アミアン決議に理論上の根據を求めるに至らしめたものかは、遽かに斷言することは出來ぬ。

正統派の主張は、ベスナールの決議案に最もよく現はれて居る。決議案には、大凡そ次の如き主張が含まれて居る。

(一)『×××經濟×××でなければならぬ。經濟的なら××××、無産階級××××ない。』

(二)サンヂカリズムは現在に於ける、×××××××××である。

(三)××××ヂカリズム以外の全ての×××××××であり表白であるが、其の結果として社會的×××

(四『サンヂカリズムは ××のみ實現することが出來る。そして『サンヂカリズムは□□□、□□□、之が××××認める』。

(五)『サンヂカリズムは×××××のうちに生存し發達しなければならぬ。卽ち主なる×××××たる性質に適合した、完

全た自治を享有しなければならぬ』。故に『C・G・T・U・は他の團體と提携し又は他の團體に従屬せしめるが如き一切の思想を排斥する』。『國際的にも國内的にも、サンヂカリズムの完全なる自治と獨立とを認めぬインタナシナル』には、斷じて加盟することは出來ぬ』。

ペスナールの決議案には、大凡それほどの主張が含まれて居るが、要するに此の決議案が言はんとする最後の一語は、赤色インタナシナルに加盟することは、第三インタナショナルとの間に有機的の關係を結ぶものである、そして他の團體その間に有機的の關係を結ぶことは、組合運動の自治と獨立とを毀づけるものである、故にC・G・T・U・は、赤色組合インタナシナルに加盟す可らずといふことである。

けれども正統派と無政府主義者の一團その主張は、單に赤色組合インタナシナルの加盟反對に止らないで、更に一歩を進めて×××××指導の下に、新たに×××××義的サンヂカリズムのインタナシナルを創立することである。サンエチエンス大會に先だつ二週間前に、伯林に開かれた國際サンヂカリス會議は、即ち此の計劃の現はれたものである。C・G・T・U・の假執行委員會は殆んど全部、正統派サンヂカリストが掌中に握つてゐたので、C・G・T・U・からも伯林會議に代表者を送つた。之は日頃から個々の組合の自主權を極度に强調し、苟も中央集權的のことには絶對に反對して自由聯合主義を主張してる正統派と無政府主義派の行動としては、如何にも奇妙な行動であるが果して大會では一大問題となつた、殊に正式の大會だ二週間後に開かれる時、僅に十五名の假執行委員の專擅的行動により大會を出し拔いてC・G・T・U・の運動方針を拘束しようとしたのであるから、幹部派の陰謀と認められたのは無理からぬことであつた。然るにサン・エチエンヌの大會は、全く之と反對の決議を通過したので、幹部派の計畫は。根底から覆へされた譯である

斯ような事實を綜合して見ると、眞に問題の中心となつてゐるものは、アミアン決議の精神ではなくて、赤色インタナシナルに加盟問題であることが分る。正統派のサンヂカリストと無政府主義者が赤色組合インタナシナルとの加盟に反對する表面の理由は、赤色組合インタナシナルに加盟することは、同時に無產階級の革命的政黨共產黨の國際同盟たる第三インタナシナルとの間に、有機的の關係を結ぶことを意味してゐる、そして此の有機的の關係は、組合インタナシナルをして第三インタナシナルに從屬せしめるものだと云ふ點にある。赤色組合インタナシナルの規約第十條によると、赤色組合インタナシナルと第三インタナシナルとは、双方の執行委員會に、各々三名の代表

者を交換すのことになつて居る。そして正統派サンヂカリストと無政府主義者の反對する有機的關係とは、この代表者の交換を指したものである。

第三インタナシナルとの有機的の協力に反對する理由となつて居るものは、組合運動の絶對の自主自由である。そして組合運動の絶對の自主自由といふ主張の根據としては、勢ひ組合の萬能を主張することゝする。即ちベスナールの決議案にある如く、社會を變革する力としても、また變革後に於ける『生産と公共生活と社會生活との指揮と管理』との機關としても、組合は完全にして萬能なものであつて、其他の何等の勢力――無産階級の革命的黨派――その間にも協力を必要とせぬといふ、前提が必要になつて來る。

五

此點は正統派のサンヂカリストと無政府主義の代議員とによつて、繰返し繰返し大會で主張せられて居る。二日目の討議でドルトは『××××××××××、サンヂカリズムのみが行はねばならぬ、サンヂカリズムは如何なる黨派にも優つて居る、國内的には、サンヂカリズムは充分成熟して居いて、何人の協力をも必要とせぬ、唯だ□□□□と□□□あれば足れりである』と云ひ、同じくヴベーは『サンヂカリズムは×××××之を認めぬものはサンヂカリズムに裏切る者である』と極言し『革命の原因は全べて經濟的である、サンヂカリズムは一切の者を吸收することが出來る、現にC・G・T・Uは三十六萬人の組合員を有するが、フランス共産黨は僅かに六萬の黨員を有するに過ぎず、且つ其内の五萬人は組合員であると云つて居る』

之に對してモンムソーを初めとする幹部反對派（準共産黨サンヂカリズム）も　××無産階級の革命的黨派との協力は、決して組合運動の從屬を意味するものではないと云ふ。然しながらこの爭點は、少くとも今日までに事實と經驗との範圍内では決定的に判定を下されて居るのである。正統派サンヂカリストが組合の萬能を主張するものは、組合を以つて最も完全な、生産勞働者の階級的組織であると云ふ前提に基づいて居る。即ち組合の萬能と云ふ思想は、組合が其のうちに生産勞働者全體――生産勞働者を一つの階級として――包容し組織し得

ることを前提とするものである。ヴベーが『サンヂカリズムは××の者を吸收する』と云つたのは、斯ような組合の理想を語つたもので、舊C・G・T・の規約第一條が『一切勞働者を結束することを目的として揭げた精神もまた同一である。然しながら此のサンヂカリズムを生み出したフランスに於ける現實の組合は、サンヂカリズムの理想の組合を去ることは頗る遠いと云はなければならぬ。ヴベーはフランス共產黨の六萬を嗤つて、C・G・T・U・の三十六萬を誇りとして居るが、フランスの全勞働者を包容するサンヂカリズムの理論と理想の組合から見れば、要するに百步を以つて五十步を嗤ふものに過ぎぬ。況んや組合が××××社會に於ける『生產と公共生活と社會生活とを××××××』機關となり組織となる爲めには、一切の筋肉勞働者の外にも、一切の專門技術者の外にも、苟も社會生活に必要な一切の勤勞者を包容しなければならぬ。然も新社會に於ては、全ての人は――子供や病人を除いては――悉く社會生活に必要な勤勞者となる可きものであるから、××生產者の組織たる組合が、斯ような社會的の職分を擔當することは、正統派のサンヂカリストと共に、恐らく全ての組合運動者の目標とする所である。××。サンヂカリズムの理論に忠實な諸君へは、敵に對して求めない自主と獨立とを、たゞ味方の陣營の間にのみほしいまゝにしようとする。之が正統派のサンヂカリストが、好んで其の形容詞とする『×××』たる所以であらうか。如何なる場所にも自主と獨立とのあり得ぬ現在の社會のうちに、唯だ無產階級運動の間にのみ――卽ち味方同志の間にだけ、絕對の自主の獨立とを求めることは、資本主義の組合の一隅に、理想

の新しい村を建設しようとすること、同じほど現實を離れたことではあるまいか、そして敵に對しては、絕對の自主と獨立のないことを忍び得る人が、この絕對の自主と獨立とを獲得しようとする無産階級の國際的運動の內部にだけは、卽ち味方に對してだけは、其の一致を犧牲としてまでも、絕對の自主と獨立とを强要しなければならぬのは、どうした事だらう。C・G・T・U・の內部に於ける正統派サンヂカリストの態度は舊C・G・T・の正統派サンヂカリストの諸君と同じほど『分裂主義』であるといふ批評を免れぬ。

六

正統派サンヂカリストと無政府主義者とは、組合萬能主義の結論として、革命後の過渡期に於ける『無産階級の獨裁』を否認する。之に對して非幹部派のオリヴイエーは、『諸君の欲すると欲せざるとに拘らず○○の翌日には、敵に×××××を與へる爲に、集中的の權力を作らねばならぬ』、『吾々も諸君と同じく自治を欲するものである。然しながら全ての人々が、悉くは意見を同じくせぬかも知れぬ。斯ような場合に、吾々は單に中立の立場に止どまつて、唯だ事變をその成行きに任せておく譯にはゆかぬ』と云ひ、ラルテイーグは『モンムソーの決議案は革命中のことであり、ベスナールの決議案は、革命後のことである。今日は革命前の時代である。サンヂカリズムは□□に反對する、けれどもコムミユニストがやるにせよ、サンヂカリストがやるにせよ、乃至はアナキストがやるにせよ、何も□□□第一の行動は、××××××××××××ることである。或人は大衆の敎育を主張する。けれども□□□が避け得られると信ずるなら、××××××云つてはならぬ。そして宜しく一般投票（レフエレンダム）××××××行ふ可きである』と主張し、セマールも亦た『諸君は自由共產主義を欲する。吾々も同じである。けれども吾々は之に先つて、××××××××××××××××××××××。諸□□を是認して獨裁を認容せぬ。然らば諸君は如何にして□□□□□るのであるか。若し諸君が、諸君の自由聯合主義が、資本主義が殖民地に於て組織する同粹團以上に恐る可き反革命軍を打破るに足ることを吾々に證明して與れた時、吾々は喜んで×××××の主張を放棄しようと思ふ』と主張した。

第四日の討議では、モンムソーは最後の大演說のうちに、『集中が支配階級に取つて有利なら、何故に勞働階級に取つて惡るからうかといふ、無政府主義的サンヂカリストが守本尊とするベルウチエーの言葉を引いてベスナールに突撃し『アナキストであると、コムミユニストであると、個人主義であると聯合主義

であるとを問はず、諸君は×××××、諸君の選擇した公式通りに進行するものと思ふのであらうか。×××獨斷的に指定した目的を實現するものではない。×××××に取つて爲し得るところのものを實現する。そして吾々は之を、全てのもの丶×××置かねばならぬ』ことを力說した。正統派サンヂカリストの組合萬能主義に對する批評は、ボヴールの次の如き言葉に盡きて居る――『革命を永久の未來におくならば、サンヂカリズムは萬能である。けれども假りに今ま×××の形勢が迫つたとすれば、サンヂカリズム以外にある中產階級と農民とを考慮に入れなければならぬ』。

資本主義の下に於て、勞働組合が全ての人々を包容するに至×××、××××××××、××、×××××××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××、×××××××××××。×××××××××××××、××××××××××××××××、××××××××××××××××××。

七

運動方針の決議と共に問題となつたのは、規約の第一條であつた。幹部派の草案は、C・G・T・U・の目的を規定して、『物質上精神上の利益を擁護する爲に、特に經濟上の領域に全ての被傭者を團結組織し、階級鬪爭によつて勞働者の解放を追求することである。之は現在の×××××××××××××××××せられるものである。そしてC・G・T・U・は、此の變革は×××××、××××××、□□の消滅によつてのみ成就せられることを新に明言する』と云つて居る。

『□□の消滅』といふ最後の一句は、現在の國家を否認する爲よりも、寧ろ過渡期に於ける無產階級國家を否認する目的で、『特に明言せられたものであることは云ふまでもない。そこで此の規約が大會を通過することになれば、C・G・T・U・は最早や『全ての被傭者を特に經濟上の領域に團結組織する勞働組合ではなくて、無政府主義の政治的意見を以つて集まる一個の政黨とするのである。正統派サンヂカリストと無政府主義的サンヂカリストの金條玉科とするアミアン決議は一體どこへ行つたらう』。『××××××××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××××××』サンヂカリズムの傳統的精神は、正統派のサンヂカリストによつて、遺憾なく救濟せられた譯である。

これは明かに非幹部派——即ち共產主義的サンヂカリストと共產黨員——とに對する陷穽であつて、この規約の目的、正統的のサンヂカリズムを擁護することでなくて、赤色組合加盟を妨げるにあることは少しの疑ひもない。して見れば正統派のサンヂカリストと無政府主義との强調する組合運動の『絕對の自主』と獨立とは、要するに共產黨の名によつて成し遂げられたロシア革命を背景とする第三インタナショナルと赤色組合インタナシナルとは協力しないで、勞働組合運動を、無政府主義の政治運動に從屬せしめようとすることに外ならぬ。『サンヂカリストは一切である』と主張したヴペーは、『今日はゲード派が組合運動を支配しようとした時代に近いと云つて、暗に第三インタナシナルが組合運動の指導權を乘取らうとしてゐるかの如き暗示を與へ、之によつてフランスの組合運動と色組合インタナシナルとを離間しようとした。C・G・T・Uを以て、一切の□□を否認し、之によつて間接に無產階級國家と無產階級獨裁との否認を政綱とする一個の無政府主義の政黨に變へようとする大膽な試みに對して、フランスの組合運動は確かに警戒の必要がある。

共產黨が組合內の黨員を結束して、一小中心を作らせる謂ゆる『ニュリリアス』の政策に對して、正統派サンヂカリストと無政府主義者とは、之れ團體を作るものである、組合運動の一致を破るものである、組合運動を共產黨の目的に利用しようとするものである、共產黨の組合乘取り策であるとして猛烈にとを攻擊した。けれども組合運動の內部に自己の信ずる思想と意見宣傳することは、何人も××××××なければならぬ、モンムソーの指摘したように、組合內にニュリリアスを作ることは、一九二一年十一月の無政府主義者の大會によつて公然主張された所であつて、何人と雖も、無政府主義者や共產主義者が組合內に其の思想を有力にしようと××××××ことは出來ぬ。それのみではない、無政府主義者こそ共產主義者に先つて組合は×××××××あつて、無政府主義は其の××××でなければならぬと主張して居るのである』。

八

正統派のサンヂカリストの主張するような意味で、組合が萬能となる爲には、社會生活に必要な全ての勤勞者少くとも直接生產に必要な專門技術者は悉く組合に包容しなければならぬ、この中產階級智識分子の包容と正統派サンヂカリストの主張する筋肉勞働者主義とは如何にして調和されるのか。彼等は此の問題に對しても、大會に於ては充分の答辯を與へて居らぬ。ベスナールの決議案にすれば、□□は、有ゆる形を取つて進行する

□□□勢力の綜合である。然らばこの諸勢力のことが一勢力である組合運動は、何故に其他の諸勢力と、有機的に結合してはならぬか。オクヴイエーの指摘したように、□□に取つて最も必要なことは、是等の□□□××××することでなければなぬと。然るにペスナールと幹部派とは、曾て此の問題に答へない。セマールの「諸君は全世界を組合主義化しようとする。けれどもパルトは吾々に。如何にして農民と組合主義化し得るかを語り得るべきであらうか。農民が□□を支持するか、又は中立を守るように、彼等を組織し得るものは無產階級黨である」といふ批評に對しても、パルトは何等の答へも與へて居らぬ。

組合は社會×××の後に於ても、直ちに萬能の組織でないように、社會×××の組織としても、果して萬能と云はれるであらうか。共産主義的サンヂカリストは、組合を以つて、□□□□□に取つての最も主要な組織と見做すにも拘らず、必ずしも萬能であるとは主張せぬ。有力なサンヂカリスト、ピエルモナツトがマクスイース・トマンに答へた次の言葉は、此の問題に多くの暗示を與へるものである――『何處かの非常な高度に發達した工業國ならば、黨の助けを借りないで□□□□□□□が出來ると思ふ。然し一九一七年のフランスには、×××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××××××××××××××。×××××××××××××××××××××××××××××××××××××。然しこの二つの事實は、互ひに孤立して居つた。そして双方の間には、何等の激勵し合ふこともなく、互ひに消息を知ることもなく、通信聯絡の道もなかつた。若し××××××さへあつたなら、缺けてゐた一つの事が補はれて居つたらう。

九

組合運動は自主的でなければならぬか。然り、組合運動は組合運動の行動の領域では固より自主的ではなければならぬ。組合は×××あらうか。然り組合の成し遂げ得る、そして成し遂げねばならぬ職分の範圍に於ては、固より×××ある。然しながら組合運動の自主と獨立とは、無產階級運動の一致と協力を不可能とする自主と獨立であつてはならぬ。ボヴイールの言葉の如く、『若し各中心がフランス的の見解を取り、フランスを一切のものゝ上位におくならば、インタナシナルの建設は不可能である。』獨り赤色組合インタナシナルばかりでなく、如何なる種類のインタナシナルでも、組合の自主と獨立といふ獨斷的の主張によつて決裂せしめることが出來るに相違ない。若し無產階級の協同戰線をサボタージユしようとする人々の要求する

やうな、組合運動の『絶對』の自主と獨立とは、××××インタナシナルによつて完うし得られぬばかりでなく、第三第四の組合インタナシナルを創立したところで、彼等の『絶對』の自主と獨立の要求は遂に滿されぬに相違ない。少くとも全世界に組合の數のあるだけ同數のインタナシナルが必要である。

組合の萬能も亦た同じことである。組合以外の勢力の一切の協力をも必要とせぬ程度に『萬能』的に組合は、資本主義の社會にあつては、唯だ不可能である。若し組合の無限の發達によつて、組合が萬能的の組織になつた時、資本主義の社會は初めて×××××××××××ふ意味に解したなら、正統派の革命的サンヂカリズムとは、畢竟、改良の累積によつて資本主義から社會主義に推移するといふ、改良主義に外ならぬ。吾々はペスナールの『革命』社會主義とジュオーの『革命的』社會主義との間に、少しの相違をも認めることは出來ぬ。此種の『×××』サンヂカリズムは、態々フランスに行くまでもなく、勞資協調會あたりでも轉ろげてゐる。

若し勞働組合に對てし、××××の以前にも以後にも、組合外の如何なる無產階級的勢力との協力をも必要ともせず、また組合以外の如何なる無產階級的機關と組織との協力をも必要とせぬほどに、完全にして萬能な組織たることを求めるなら勞働組合は是の方面でも、質の方面でも、×××××××××××××××××××出來ぬ。サンヂカリズムは勞働階級に共通な經濟上の利害を以つて、結束の唯一の基礎とする。そしてそはやがてサンヂカリズムが、全勞働階級的の組織を以て任じてゐる理由である。ところが實際に於ては、全くの被傭者の結束を目的としたC・G・T・は、『全くの被傭者』どころか、C・G・T・U・三十六萬の無產階級をすらも包容することが出來ないでC・G・T・の分裂と對立を見たではないか。

この一事は、勞働組合が如何に無產階級×××××との協力を拒み、如何に自主と獨立との主張を忠實に守り、如何に政治上の中立を固執して見ても、必ずしも全勞働階級を包容し得ぬことを證明したものである。否な大衆の階級的自覺が一樣でなく、そして資本主義の發達狀態が最早やブルジアの政治も無產階級の政治との間に、中立の立場を守ることを許さぬ形勢になつて來れば、却つて政治上の中立と革命的黨派との協力を拒だといふ主張が、組合の分裂の原因となるのである。

そこで勞働組合は、××××見を離れて、單に階級的利害によつて結束する、全勞働階級の包容的の組織であるといふことも要するに程度の問題である。何故ならば階級的の利害は、必ず××××××となつて現はれるからである。

けれども若し組合が純粹に、××××××以つて結束するならば、それは最早や組合ではなくて、×××××××××となる。そこで組合が生產者の階級的組織たる實質と職分とを失はぬ爲には、——即ち量の方面に於ける包容的の物質を失はぬ爲には——勢ひ質の方面、政治上の意見の一致とその水準の高さとを犧牲としなければならぬ。言葉を換へて云へば、組合が無產階級の政黨にならぬ爲には、勢ひ質の方面——從つて無產階級の革命的組織としての『萬能』を犧牲としなければならぬ　組合が若し此の方面に於て『萬能』でないとするならば、之を××××××××××××××××。

十

大會は五日間の討議の末、國內及び國語の運動方針を決定した。國內の運動方針に就てはモンムソー案は七七九票を得、ベスナール案三百九一票、ベスナール案に對するケヌレイの修正案七票、棄權一二票であつた。國際の運動方針に就ても、モンムソー案は七四一票、ベスナール案四〇六票、棄權四二票で、之も共產黨及び準共產黨サンヂカリストの主張が絕對多數を以つて通過した。

六日目には規約の討議に移り、採決の結果は幹部案(舊規約)三三六票、棄權五五票に對し、共產黨及び準共產黨サンヂカリストの草案は七四八票を以て通過した。そしてモンムソー、マリーギロー(婦人)カザルス、リセツタの五名が新幹部となつた。婦人がC・G・T・の幹部となつたのは、今度が初めてゞある。

四日目(六月二十九日)の會議は議長ドユプユイ、副議長チラール及びルウランの下に開かれ、俳優組合のカルパチアーについで、ヴイデイユ、ブウドウー等の演說が終ると、赤色組合インタナシナルの幹事長ロゾウスキーが突如として演壇に現はれたロシヤ×××××××につゞいた、『インタナシナル』の合唱が初まつたそれが濟むと無政府主義者の一團は、之に對抗して『レヴリオユッション』、を合唱して。ロゾウスキーは二時間に亘る大演說をして、凛然として姿を隱くした。大會の會場サン・エチユンヌの組合同盟の入口には、數名の刑事が逮捕の用意をして目を光らせてゐたが、ロゾウスキーの姿は遂に見へなかつた。

小作問題と小作法

――農村法律問題の三――

末弘嚴太郎

第一　小作權の確立

三

小作權を確立するの必要上第二に注目すべき點は小作權の交換財としての價値を法律上確認することである。

現行法上――永小作權以外の普通の――小作權は地主小作人間の對人的契約を其礎とした一種の債權に外ならぬ。元來債權は債權者の利益の爲めに債務者を拘束して一定の行爲を爲さしめる對人的の强制關係たるとを以て其の本體とする。所が其の强制關係の實現に依つて利益を取得すべき債權者も見込みは――其見込みが確實であればある程――客觀的の交換價値を有するに至り、從つて取引の目的物となる。即ち債權本來の目的は債權者債務者相互間の内部的强制關係たるの點に存するのであるが、對外的には又其强制關係が本になつて或る程度の交換價値を有するに至る。而して其の交換價値は當該債權の取立が容易且確實なりや否やに應じて色々違ふのであつて、例へば額面の同じ債權でも債務者が百萬長者であるのと赤貧者であるのとでは自ら其の價値に多大の差等を生じ、又訴訟に依つて取立てるとしても比較的容易且迅速に之を爲し得るや否やに依つて債權の實質的交換價値に自ら差異を生ずるのである。所で元來は内部的拘束關係に過ぎない、從つて其點にのみ着眼して規定すれば足りた所の債權關係が、商工業の進歩に伴ふ信用制度の發達と債權取立に關する法律制度訴訟手續の完備とに伴つて、漸次交換財としての價値を增大するに至り、從つて裁判上其他法律に於ても之を認めて保護せねばならぬことになるのである。

吾々はローマに於ける債權法發達史の中に此點に關する極めて有益な材料を發見する。即ち初めは内部的對人的な、從つて本來の債權者債務者其人と引き離し得ないものとして考へられ

規定されて居た所の債權關係が、商業の發達と共に漸次普遍的の交換價値を取引するに至り、從つて裁判上法律上其點を保護することが一般の要求となつたのである。けれども元來對人的內部關係にのみ着眼して債權を取扱つて居たローマ法にとつては、法律上かゝる交換價値に保護を與へて債權の移轉性を認めることは極めて困難であつた爲め、學者と裁判所とは――其慣用手段として其他一般の場合と同じやうに――正面から法律の改正を企てる前に先づ、法律を潜つて事實上改正したと同じ結果を得やうと努力し時と共に順次に取立委任(mandatum agere)其他色々の方法を發明應用した。而して之が今日では最早一般に何等の不思議もなしに是認されて居る債權讓渡法理の濫觴であつて、吾々は之に依つて債權の交換財としての價値が法律上正式に確認されるまでには可成りの苦心と努力とが必要であつたことを察知する事が出來るのである。尙其後中世伊太利の諸市の商業的隆盛が其所に自ら一般の債權以上に移轉性の豐かなる手形及び其裏書の制度を生み出し、更に又近世に於ける商工業の異常な發展に伴つて一層流通性の豐富な有價證券制度が發達したことを考へると、債權の交換財としての價値が信用制度の發達と共に漸次に增大し、法律も亦從つて之を確認すべく餘儀なくされるものであることを知ることが出來る。

四

借地借家其他賃貸借の關係に於ける賃借人の權利も亦賃貸人に對する關係に於ては一種の債權である。所が此等の債權殊に土地の賃借權には一方に於て普通一般の金錢債權以上特に交換財としての價値を確認してやらねばならぬ事情があり、而かも他方に於ては又其讓渡性を認むるもの妨げとなるべき特別の事情も存在するが故に、借地權借家權等に對して法律上其の交換財としての價値を確認し與ふるが爲めには――普通の金錢債權に對する場合とは違つて更に――此等の互に矛盾したこの事情を調和すべき特別の考慮を必要とするのである。

先づ第一に吾々は借地權借家權等の交換財としての價値は――普通の金錢債權のそれにも增して――特に之を保護するの必要ある所以を考へねばならぬ。謂ふまでもなく、借地權の目的物たる土地の數量には限りがある。從つて世の中に借地の要求が增加すればする程之に比例して、既存の借地權を讓受けむとする者の數が增加し、其の結果借地權の交換財としての値打は當然に增大する。此の故に、都會に於ける商業地住宅地の借地權は、現に法律上何等特別の保護なきに拘らず、事實上「借地權」乃至「權利」ある名義の下に極めて高價に賣買されて居り、同じ理由に依つて、數量に限りある電話加入權が數千圓の

代價を以て取引され――申込めば何時でも直に電話を引いてくれる歐米諸國には電話加入權の賣買など云ふことはない――、又都會の借家權が「雜作」なる名義の下に可成り高價に賣買されるのである。而して此種の事實は獨り右のみに限らず、例へば縁日商人其他夜店の路面使用權、人力車駐車場に車を停めて置く車停仲間の「權利」、官公署出入商人の「權利」等が賣買せられ、更に甚しきに至ると馬丁仲間の慣習に於て彼等の「主人」が立派に賣買の目的物になつて居る。此等はいづれも數量の制限から生れた一種の「權利」であつて、現行法上特別の保護なきに拘らず、事實上或は人々の好意に依り、或は腕力其他事實上社會的制裁力に依つて支持せられつゝ、慣習上立派に取引の目的物となつて居る。

農地の借地權即ち小作權も亦同じ理由に因つて慣行上取引の目的物となつて居る。所謂小作株乃至作株の賣買が即ち是れであつて、大正八年農務局調査「小作慣行ニ關スル資料」四九頁に「一般小作地ニ於テハ比較的利益多キ土地又ハ小作地ノ少キ地方等ニ限リ行ハルルガ如シ」とある記事は正に右の事實を語るものであり、又大正四年帝國農會「本邦永小作慣行」一二八頁以下にも永小作權にあらずして而かも之と同樣賣買の目的となつて居る小作權の事例が記載されて居る。而して――農業そのものが企業として引き合はないから新に農地や小作株を買ふものは段々なくなる傾向があると云ふことは先づ別として――新に資本を投じて荒無地を開墾したり農地の所有權を買ひ入れても到底利廻りの關係上引き合はない爲めに、農業者殊に資本の少い小農業者は所有權に比すれば比較的安價な小作株を買ひ入れて農作をしやうと考へる結果、小作株を買はむとする要求は農地の所有權を買はむとする要求に比較すれば寧ろ漸次に增大するの傾向あるものと見ることが出來る。殊に今後小作權が法律上漸次に强固のものとなり其存續期間も亦延長することゝなれば小作權の賣買は一層盛になるものと考へねばならない。

而して前揭の「小作慣行ニ關スル資料」五〇頁に依ると、小作株の賣買價格は其地方に於ける小作地の多寡、當該小作地の良否、小作料の廉否等に依つて色々違つて居るが、例へば福岡に於ては「耕地少ク小作地ヲ得難き地方ニテハ段二圓乃至五圓ニテ賣買セラ」れ、兵庫に於ては「小作ノ利益多キ田ニ於テハ五圓乃至十圓位ニテ賣買セラル、コトアリ」と云ふのは極めて安價なものゝ例であり、之に反し秋田縣「北秋田郡阿仁地方ニ於テハ小作權賣買ヲ「ウハ米」ト稱シ反五十圓位ニテ行ハルル例アリ」とか、香川に於ては「小作株ノ賣買ハ之ヲ小作株ノ場代ト稱シ段十五圓以上五十圓位迄アリ」とか云つて居るのは其

最も高價な事例である。

五

かくの如く小作權が賣買の目的となると云ふ事例は現在既に諸地方に行はれて居り、今後土地の賣買乃至開墾に比較すれば其事例寧ろ增加すべき傾向があるのであつて、小作權の交換財としての價値を破壞するの必要あること今や極めて明瞭なのである。

所が現在の法律に依ると、小作權を賣買讓渡するに付き大に之が妨げとなるべき特別の規定がある。民法第六百十二條の「賃借人ハ賃貸人ノ承諾アルニ非ザレバ其權利ヲ讓渡シ又ハ賃借物ヲ轉貸スルコトヲ得ズ、賃借人ガ前項ノ規定ニ反シ第三者ヲシテ賃借物ノ使用又ハ收益ヲ爲サシメタルトキハ賃貸人ハ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得」と云ふ規定が即ちそれである。先に說明した永小作權は其「設定行爲ヲ以テ之ヲ禁ジタルトキ」を除く外特に地主の承諾を得ずとも隨意に之を「他人に讓渡」することが出來る（民法第二百七十二條參照）。之に反し普通の小作權は地主の承諾がなければ讓渡し得ないことになつて居るのである。夫れは果して何故であらうか？

民法の起草者である梅博士は之を說明して「物ノ使用收益ヲ爲スニハ自ラ巧拙アリ又注意ニ精粗ノ別アルヲ以テ甲ヲシテ使用收益ヲ爲サシムル爲メ物ヲ賃貸シタル場合ニ於テ其權利ヲ乙ニ讓與シ又ハ乙ヲシテ其物ノ使用收益ヲ爲サシムルハ我邦ノ慣習ニ於テ當事者ノ意思ニ反スルコト多シト認メタルナリ。殊ニ田畑ニ至リテハ往々收獲ノ一部ヲ以テ借賃ニ供スルガ故ニ小作人ノ勉不勉才不才ニ因リテ收獲ノ額ヲ同ジウセザルガ故ニ此場合ニ於テハ外國ニテモ讓渡又ハ轉貸ヲ許サヾル例多シ」と謂つて居る。若しも賃借人の利益のみに着目して考へるならば理屈は正に其通りである。同じく家を貸すにしても子供の多い人に貸すのと子供のない奇麗好きな老人に貸すのとでは大に譯が違ふ。貸本を貸すにしても借手が注意深い信用のある人であるかどうかは貸主にとつて重要な事柄である。同時に農地を小作に出すにしても小作人が農作に熱心且巧妙であるかどうか等の事情は地主にとつて重要の利害關係ある大切な事柄である。借賃の額の如き借主の如何に依つて必ずしも常に同樣に定められるものではない。此故に地主は自己の承諾なしに小作人が勝手に交代することを好まないのは極めて自然である。是れ民法第六百十二條の規定の制定された所以であり、實際の慣習に於ても小作權の賣買は地主の許可を得て爲さるゝを通例とする所以である。

所で此の規定は平素平穩の際には事實上大して障害を惹き起

さない。何故なれば、地主も先づ大して差支のない限りは承諾を與へるのが普通であり、小作人の側でも亦特別の迷惑を地主に與へるやうなことはしないから。從つて小作人の有する小作株は或は地主の明示的承諾を得或は殆ど唯形式的に承諾を得、時には又承諾を得、時には又承諾を豫見しつゝ特に之を受ける手續を執らずに、相當の代價を以て賣買される。それは恰も東京市の市街地住宅地の借地權が地主の明示又は默示の承諾に依つて賣買せられつゝあると同じやうに。

けれども一度地主と小作人との間に感情の疎隔を生じ又は地主が特に悪意を抱くに至れば、小作人は其多年苦心經營し來りたる小作地乃至は他から相當の代價を以て買入れた小作株と雖も之を他人に讓渡して換價することが出來ないことになる。かくして換價の能否は全く地主の隨意に任かされて居るやうな結果に陷るのである。それは地主の利便のみを眼中に置いて考へれば當然のことかも知れないけれども、社會一般の經濟事情が自然に生み出し從つて一般には事實上承認されて居る所の小作權の交換財としての價値が地主の任意に依つて根本的に否認せられ得るやうな法制が眞に果して公正のものと謂ひ得るであらうか？　私は大にそれを疑ふのである。

成程小作人の何人なるかは地主にとつて重要の利害關係ある事柄に違ひない。併しながら其重要さは決して通常の住宅賃貸借の場合に於けるが如く大なる者ではない。賃貸人が賃借人の何人なるかに付いて感ずる利害關係の程度は賃貸借の目的物如何と密接の關係ある事柄であつて、農地の賃借人が何人なるかに付いて地主の感ずる利害關係の如きは－特に之を小作人が小作株を賣買し得るや否やに付いて感ずる利害關係と比較して見ると――これ程多く考へる必要のない事柄のやうに思はれる。無論若しも小作株を買受けやうとする者が事實上極めて無能怠惰の者であつて充分の耕作を爲し得ざる者なると明なる場合其他立派に相當の理由があるならば、特に其場合に限り例外として小作株讓渡を禁じ得る權利を地主に與へさへすればいゝ。又新に小作株を讓受けた者が特に農地を荒すやうな所業をしたとか其他元氣の小作契約條件を履行しないならば、地主は之を理由として契約を解除しさへすればいゝのである。何も現行法の如く小作權の讓渡はすべて必ず地主の承諾を得ねばならぬやうにして置く必要は少しもないのである。現に永小作權は原則として――無論設定行爲を以て反對の定めを爲し得るやうにはなつて居る。而してそれは不都合の規定だとは思ふけれども――任意に之を讓渡し得る（民法第二百七十二條）。成程それは物權である。けれども物權なるが故に讓渡しが出來、債權なるが故

に出來ないと云ふ絶對的の理由は少しもない。債權と雖も原則としてすべて之を讓渡し得ると云ふのが現行民法の主義である。賃借權に付いて特に其の任意讓渡が制限されて居る理由は上述の如く賃貸人は賃借人の何人なるかに付いて比較的重大な利害關係を持つて居るからである。決して債權なるが故ではない。永小作權は直接小作地を目的とした、所有權とは獨立した別個の物權であるとしても、地主に向つて小作料を拂ひ其他條件を充さねばならない點に於て普通の小作人と何等擇ぶべきものがあるのではない。それならば現在永小作權に付いて認められて居る任意讓渡の權能は普通の小作權についても亦之を認むるに付いて何等の妨げがないやうに思はれる。

此の故に私は昨秋小作制度調査員委會幹事私案として新聞紙に掲げられた小作法案第七條が「小作人は—普通の債權の場合と同樣、民法第四六七條參照）――豫メ地主ニ通知ヲ爲シタル後小作權ヲ讓渡スルコトヲ得るものとし、且つ「小作權ノ讓渡ヲ禁止又ハ制限スル契約ハ之ヲ無效トス但ス地主ハ正當ノ事由アル場合ニ限リ其ノ讓受人ヲ制限スルコトヲ得」と定めて居るのを以て極めて正當な規定だと評したいのである。

而して今後小作權が法律上漸次に強固のものとなり、其の存續期間も亦自ら延長するに至れば、小作權の讓渡賣買も亦自ら頻繁に加はるに至るべく、旁々此の種の規定は今後の小作法中に缺くべからざるものであると私は確信するのである。

六

以上小作權の讓渡について述べた所の議論は直に之を小作地の轉貸即ち又小作に當てはめることは出來ない、從來學者は通常小作權の讓渡と又小作とを同樣に考へて取扱つて居た。現に民法第六百十二條の規定の如きも明かに其考に從つて作られたものである。成程法律が小作權の讓渡を原則として禁ずる考ならば、其の考を同じく又小作に及ぼしても差支へない。けれども今後新に小作權の讓渡は原則として之を許すべしと云ふ主義をとることゝなつた場合に、直に同じ考を又小作にも及ぼして自由に之を許すべしと云ふ議論をすることは出來ない。何故なれば又小作にはそれに特有の弊害があるからである。

上述の小作權讓渡にあつては小作權は全然從來の小作人の手を離れて新小作人の手に移る。之に反し又小作にあつては小作人は依然として其の賃借人たる地位を保持しつゝ自己の權利の範圍内に於て更に又小作を許すのである。從つて爾後彼は中間小作人として地主と又小作人との間に立ちつゝ之に依つて容易に不勞取得を收めることが出來る譯合である。而して中間小作人が現下の小作問題を誘起するに付き可成りに重大なる原因を爲して居ることを考へると、今後小作權の讓渡は之を許すことゝなつても、又小作だけは矢張り何等か止むことを得ざる特別の事由ある場合の外之を禁止して然るべきである。此意味に於て上記の小作法案第八條が「小作人ハ其ノ小作地ヲ轉貸スルコトヲ得ズ、但シ兵役疾病其の他止ムコトヲ得ザル事由ニ因リ其ノ小作ヲ自ラ爲スコト困難ナルトキニ限リ小作人ハ其の小作地ヲ其の事由の繼續スル間他人ニ轉貸スルコトヲ得」と定めて居るのは要領を得た規定であると私は考へる。(此項未完)

勞働運動の理想主義的現實主義

大杉榮

一

前號で僕は『組合帝國主義』と題して、全國勞働組合聯合創立大會決裂の次第を、ごく單純なしかしごく重要な一事實の上から觀察してみた。それは、要するに、友愛會及び其の後援者たるボルシエヰキの一種の帝國主義が災ひした、と云ふ事だつた。

實際僕は今でもまだ、さう信じてゐる。そして勞働運動界の事情に通じない、若しくは何等かの必要からそれに目を塞いでゐる或は塞がされてゐる、新聞記者共や或る勞働運動者の强調したやうな、友愛會側と非友愛會との『合同か聯合か』と云ふ理論上の差異に於いては、大して重きを置いてゐなかつた。兩方とも、可なり强くはあるが、しかしごくぼんやりした氣分で、それを論じてゐる位のもので、理論としてはまだまるでなつてゐないと思つた。で、それに對しては、別に何んの批評も加へずに、たゞ兩方の議論の主なところと思はれる部分を並べて見ただけで、其の討論の將來の發展に『非常な興味』を持つと言明して置いたに過ぎなかつた。

しかし僕は又、まだはつきりした理論にならない氣分にも『非常な興味』を持たない、謂はゆる理論屋ではない。其の氣分が理論を生むのだ。理論で負けても、まだ氣分が許さない、と云ふのが普通なのだ。理屈はどうでも、それぢや腹の虫が承知しねえ、と云ふのがそれだ。理論はいつでも作りかへられる。しかし氣分はさう容易に作りかへられるものでない。此の點では理論よりも寧ろ氣分の方が大事だ。そして此の氣分に就いては十分な解剖をして見る必要がある。僕の先きの『組合帝國主義』は此の解剖に多少役立つつもりのものだつた。

そして僕は、此の氣分の衝突が果してどんな理論となつて發展するかに就いて、世間の深い注意を呼び起したかつたのだ。

マルクスの流行からクロポトキンの流行にまで進んで、そして將來の社會組織に就いての何等明確な概念をも抱く事が出來

ずに、直ちに行き詰つて宗教や哲學に逃避して了つた謂はゆる思想界に。マルクスの何んとかゞから云ふ意味だとかいやあゝ云ふ意味だとか。又ボルシエヰズムがマルクシズムに合つてゐるとかゐないとか云ふ、論理の遊戯に耽つてゐる謂はゆる學者共に。眞劍は××××もうこゝまで進んでゐるんだぞ、と云ふ事を見せつけてやりたかつたのだ。そして社會改造の本尊であり先驅である××××あとに皆んなついて來いと叫んでやりたかつたのだ。

勞働運動は單なる勞働條件改善の運動ではない。又單なる資本主義××××××運動でもない。××××××××××××××××××××××。アルフワからオメガまでのものだ。そして其の間に、自然の勢ひとして發生の順序はあるが、されぱと云つて先づ改善を、次ぎに破壞を、そして最後に建設を、と云ふやうな明白な進行の順序がある譯ではない。改善と共××××××××××××に進まして行く事が出來るのだ。それが、僕の思ふところでは、一番正しい方法なのだ。そして僕はそれを勞働運動の理想主義的改善主義と云ひたいのだ。

全國勞働組合聯合の問題につれて、或る一部の勞働者らか自由聯合論が發表された時、僕はそれが實際問題として唯×××の方法だと信ずると共に、×××××とを同時にやらうと云ふ新しい一方法が始めて日本の全勞働運動界に提出された事を喜んだ。自由聯合論者が、各組合の自主自治を重んじて、中央集權的合同論者に反對して『我々は我々の理想×××××××吾々自身の中に造つて行く事が何よりも必要だ』と叫んだのは其の理想主義的現實主義の立派な現はれではあるまいか。そして僕は、此の一部の勞働者の提出した理想主義的現實主義が、と云ふよりも寧ろ嚴密には其の氣分が、他の勞働者の間に、又他の勞働者の間に、どんな風に取扱はれるだらうかを深い興味で見てゐた。が、僕は其の結果を見て驚いた。勞働者の間にかうした新しい氣分に對しては最も親切であるべき筈の謂はゆる指導者共は、頭からそれを無視して、そしてたゞ中傷と曲解と嘲笑と罵倒とを浴せかけた。

二

××××、×××××、『××××××』×××)××××××××××××××。××××××××××××××。××××××××××××××××××××××××××。

が、そんなことはまあ、どうでもいゝ。それよりももつといや

なのは、あの堺の態度だ。あれや一體何んだ。堺だつて、あの場合、勞働者の眞剣な協同の協議に就いて、何等かの觀察があり意見があつたに違ひない。しかも彼れは決して全然の傍觀者ではないのだ。それを彼れは、一言もそれに觸れずに、全くそつぽを向いて他を云つてゐる。ふざけ散らしてゐる。何んにも云へないのか。それとも老いて益々盛んな其のづるさからか。

そして堺は、別に其の一味の『勞働新聞』創刊號に、無署名で、『總聯合の行惱み』と云ふ一論文を書いてゐるのだ。それは、例のすこぶる公平ぶつて、兩派の主張や事情の差引で終始してゐるのであるが、其の謂はゆる公平の皮の中に甚だしい中傷を潜ましたものだ。其の一例を擧げれば、彼れは『その時（大會の代議員等が組合員の傍聽席を代議員席のそばに置くか或は二階に置くかの協議中）代議員でも組合員でもない連中が、議席にはいりこんで頑張つてゐるのが目についた』と云つてゐる。これは、堺のみならず、友愛會側の勞働者等も新聞記者共も、こぞつて大會傍聽の無政府主義者等を中傷した問題だ。が、其の連中が謂はゆる議席の中にゐたのは、まだ大會の開會される前なのだ。どこが議席とも傍聽席ともきまつてゐない前なのだ。其の間たゞ友人同志が寄り集まつて馬鹿話しをしてゐたゞけの事だ。それを『議席にはいりこんで頑張つてゐた』とは何んだ。それなら、彼れ自身及び彼れの仲間のボルシエヰキの連中が同じやうに『議席にいりこんで頑張つてゐた』事はどうして書かないのだ。

無政府主義者とはたゞ無暗に秩序を亂す攪亂者だと云ふ、政府者の宣傳を助けようと云ふのか。それとも、もう×××××にでもなつたやうな氣がして、すつかり×××の心理になり切つて了つたのか。

次ぎには山川だ。山川は感心に狸はきめなかつた。しかし彼れは純理論の形で自由聯合論の曲解を恣にした親玉だ。

山川は云ふ。『組合運動の内部には全く異なつた二つの根本思潮が流れてゐたのである。即ち其の一つは現在の組合の間に極めて緩やかな聯絡の機關を形造らうとする謂はゆる自由聯合論であつて、今一つは現在の組合を整理して産業的に合同し更に此の産業的の組合を全國的に合同して一個の全産業的組合たらしめようとする……合同主義である。』

此の『現在の組合を』云々のところに先づ曲解がある。自由聯合論者は『現在の組合』に飽くまでも執着するものではない。彼等とてもやはり『現在の組合を整理して産業的に』聯合しようとしてゐる。そして其の聯合は決して『極めて緩やかな

聯絡の機關』ではなく、却つて各組合の間を極めて密接な關係にした行動の一單位たらん事を欲してゐる。

自由聯合論者は云ふ。『今、方々に分れてゐる職業的又は産業的の勞働組合が、勞働者の實際の必要から聯合するならば、先づ同じ地方で同じ産業に從事してゐるものから始めるが自然で、又それが一番強い聯合體の單位になる。其の地方的の同一産業の組合聯合が幾つも集まつて地方的の大聯合となる。一方には同一産業組合が更に全國的に聯合する。それらの總てが集まつて始めて全國的總聯合と云ふものになる。そして共通の問題は進んで一致協力して解決に努め、單獨の問題は自身で解決する覺悟と力とを持つ組合の自由聯合こそ眞に、吾々の望むところのものだ』

即ち、自由聯合と云ふのは、組合單獨の問題は自ら自由に解決しつゝ、各組合共通の問題は協同して解決しようと云ふのだ。そして其の協同の目的を果すために、組合間の密接な關係を結ばうと云ふのだ。

然るに山川は更に曲解して、自由聯合論者は『現在の小組合を以て一個の人格と見、二の人格たる各組合の絶對の自由と自治とを以て、組合運動の至上の原則であり根本の精神であるとする。』『現在が問題である時、現在の小（若しくは大）組合が一個の人格である事は勿論の事だ。が、繰返して云ふが、自由聯合論者は決して其の謂はゆる『現在の小組合』に飽くまでも執着するものでない。又此の各人格の絶對の自由や自治を主張しもしなければ、それを組合運動の至上の原則であり根本の精神であると主張しない。絶對ではない、相對だ。至上の一原則だ。根本の一精神だ。嘗つては無政府主義の有力な一理論家として僕等の尊敬した山川が、そんな無政府主義のほんの初歩の事の分つてゐない筈はない。曲解だ。惡意の曲解だ。

山川の純理論は、かうして自由聯合論者の思ひもしない又云ひもしない事にまで、勝手に曲解と推論とを進めて行く。

『組合運動は其他の如何なる運動又は如何なる勢力にも隷屬してはならぬ。組合運動を支配するものは組合運動自身でなければならぬ。』と云ふ意味に解したなら、組合運動の自主獨立と云ふ事は、恐らくは總ての組合運動の間に異論のない所である。』日本の自由聯合論者は、まだはつきりした理論的には、そこまで進んでゐない。それは、實際上、まだ組合運動を隷屬させ支配する程の他の勢力がないからだ。そして山川自身が此の意味での組合運動の自主獨立をいくら批難攻撃しても―山川は『此の恐らくは總ての組合運動の間に異論のない所』の自主獨立論に反對

してゐるのだ—殆んど其の反響のないのは其のためだ。しかし、日本の自由聯合論者には、此の意味での自主獨立の氣概と氣分とは十分に持つてゐる。然らば、なぜ山川はそれを全然無視して、『けれども現在の個々の組合地方的にも産業的にも極めて不完全な組織である現在の個々の組合が、組合運動全體に對して絶對に自主と獨立とを保たなければならぬと云ふ事になれば、之は全く別問題である』なぞと極めて怜悧な山川一人のほかには誰れも思ひ浮べない、飛んでもない事を云ふのか。

そんないゝ頭だから、従つて又、自由聯合は『組合運動全體が一つの單位として行動する事を絶對に不可能にする』とか、『組合運動は個々の組合が益々その意志に従つて行動する分散的の運動に過ぎない』とか、一人ぎめしたり『個々の組合が獨立の人格であるとしたならば、一産業の勞働者を結束した産業的の合同組合（聯合組合でもいゝ）は何故にそれ以上に獨立の性質を有する人格であつてはならぬのか』とか、『更に全勞働階級を結束する全産業の全國的合同組合（聯合組合でもいゝ）は何故にそれ以上に獨立の性質を有する人格であつてはならぬのか』とか云ふやうな妙な疑問が出て來るのだ。

三

そして山川は、これでは、其の是認した事を一瞬の間に否定して、『けれども何づれの場合にしても、組合は人格であると云ふのは比喩的の言葉であつて、精密に云へば人格を有するものは唯だ個人である。人格を強調する人は先づ個人の人格を強調すべきである。そして個人の絶對（又出て來た）の獨立と自由とを主張する所に、どうして組合運動の餘地があり得ようか。自由聯合か集中的合同かといふ問題は、押し詰めて見れば、畢竟個人主義と團體主義との爭ひに外ならぬ』とまで飛んで行つた。

これが山川の一番云ひたかつたかつた事なのだ。其の得意滿面の文章なのだ。が、お氣の毒な事には、其の矢は自由聯合論の的から遥か遠くにそれて、そして集中的合同とか云ふ中央集權論の的の端つこに當つてゐる。

幾度でも繰返して云ふが、自由聯合は決して個人の絶對的獨立や自由を主張するものではない。たゞ相對的にだ。そして各組合の相對的獨立と自由とを強張すると共に、又組合内の各個人のそれをも強張する。個人本位的團體主義なのだ。個人と團體とが果してどこまで調和する事が出來るかは、恐らくは永遠に未解決の問題だらう。が、其の個人本位のもとにどこまでも團體生活を進めて行かうと云ふのだ。團體を否定する個人主義ではない。

然らば、集中的合同とか云ふ團體主義とはどんなものか。先づ其の集中とはどんな意味か。僕はそれを山川に聞かう。

山川に據れば、集中とは『一般組合員の×××意志と×とを最も正確に最も敏速に反映する』事だ。即ち組合の各個人の人格を強調させて、それを或る一點に正確に且つ敏速に合致若しくは綜合させる事だ。それならば自由聯合論者の個人本位團體主義と少しも變りはない。

然らば、なぜ山川は、それを白と黑とのやうに違はせたいのか。それは、山川の集中の定義が、昔しとつた無政府主義のもれとか何んとかと云ふものからの借物で、看板に僞りあるからである。其の僞りを最小限に見れば、『最も正確に』の一句が拔ける事だ。正確だらうが不正確だらうが、そんな事はどうでもいゝ。とにかく『最も敏速に』やらうと云ふのだ、それが山川のお手本のロシアのボルシエヰキのお得意のやり方だ。更に其の僞りをもつと大きく見れば、『一般組合員の戰鬪の意志と力と』は實は『共産黨員の戰鬪の意志と力と』なのだ。これも山川のお手本のロシアのボルシエヰキのお得意のやり方だ。そして更に其の僞りをもう一つ大きく見れば、此の『共産黨員の』は實は『共産黨主領の』なのだ。これも又、くどいやうではあるが、山川のお手本のロシアのボルシエヰキのお得意のやり方だ。

そこで、集中の意味は、或る問題に力を集中するのではなく、或る人若しくは或る人々の手に集中する事になる。一般組合員の意志なぞはどうでもいゝ。たゞそれを支配し指揮命令する權力を握つて、一般組合員の戰鬪力を掌中に置きさへすればいゝ。

其の看板が即ち集中的それが『最も敏速に』なのだ。合同とか云ふ團體主義なのだ。

そして此の『一般組合員の戰鬪の意志と力と』と云ふ看板に大僞りがあるところから、從つて又、『若し中央集權と云ふ言葉を少數の組合役員や指導者の官僚主義と云ふ意味に解するなら、斯ような官僚主義と集中的の合同組織とは決して必然的に相伴ふて居るものではない』と云ふ苦しい辯解をするために、アメリカのA、B、Cは聯合であるが其中に極端な官僚主義が行はれてゐるとか、I、M、Wは中央集權の一大組合主義であるが官僚主義ではないとか、フランスのC、G、Tがどうとか、『自由聯合主義者の理想的の組織たる』イギリスの勞働組合大會がどうとかと云ふ、何の役にも立たない物知りぶりまでもしなければならないのだ。

其の官僚主義の謂はゆる聯合に、果して各組合の意志と力と

が、又各組合員の意志と力とが、即ち其の人格が、どれだけ強調されてゐるか。それが問題の神髓なのだ。自由聯合論者の肢の虫の座つてゐるところなのだ。

そして、又『無政府主義的サンヂカリストとして有名なエミール、プウゼー』が『G、G、T、は三段に集中せられた組織であると云つて誇つて居る』なぞど多分皮肉か何にかのつもりで云つてゐるのだらうが、其の集中即ち『コンセントレーションは中央集權と譯されてゐる文字である』とのわざ／＼の註に至つては、其のうろたへた加減の方がよつぽど山川自身にとつての皮肉だ。中央集權とはセントラリゼエションの譯字である位の事は、まさか知らんのでもあるまいに。

四

これを要するに、誤まつてごく善意に解釋したところで、集中的合同論の日本一手取次販賣山川の非自由聯合論は、自由聯合論を主張する勞働者の氣分を全く見る事の出來なかつた盲滅法論だ。そして、まだ碌に出來てゐない自由聯合の理論を、理論屋の天才的の惡い手癖で勝手にでつちあげて、それを勝手に推論して曲藝をして見せた手品師論だ。が、此の盲滅法の手品師は、見事に其のたねを發かれて、高座の上から叩き落されて了つた。こんどは目をあけてもう一度出直して來い。

非友愛會側の諸勞働組合が大會決裂の直ぐあとで、其の『全國の勞働者諸君に告ぐ』の中に云つたやうに、『眞の勞働者が、他人の束縛を欲しない氣持を、心のドン底に持つてゐる以上、如何なる勞働運動も、此の氣持を土臺にしなければならない。』『勞働者が常に感ずるやうに、職長、組長、或はそれ以上の×××監視されるところの束縛をのがれて、如何なるところに於ても眞の人間として行動したいといふ欲求を土臺に、我々の運動を進めて行きたいのだ。』これが新しい勞働者の持つ氣分の根本なのだ。

そして此の氣分の上から、彼等は個人の人格を強調し、組合の人格を強調して、其の綜合によつて其の力の强大を得ようとしてゐるのだ。合同論の或る勞働者等が誤解するやうには、自然に其の綜合を待つのではない。組織によつて、聯合の組織によつて、それを促成させようとしてゐるのだ。

かくして、各個人の中に、各組合の中に、其の根本的の氣分に基く×××××××××××××××××××はうとしてゐるのだ。合同論の或る勞働者等が誤解するやうには、力の分散ではない。一個人一組合の力を強大にしつゝ、其の×××××××××××行かうとしてゐるのだ。飽くまでも彼等自信の現實の上に立つて行かうとするのだ。

合同論の或る勞働者等が誤解するやうには、抽象論でも架空論でも夢幻論でも純理論の空漠な思想中毒でもない現論としてはまだ殆んど成長してゐない。しかし現實の强い氣分の上に腹の虫の上に、しつかりと突つ立つて行かうとしてゐるのだ。其の腹の虫を、どこまでも具體的に、邪魔物を打ち毀しつゝ自らを成長させて行かうとするのだ。

どんな方法でも構はずに先づ敵を打ち倒して、それから始めて、自分自身の世界を打ち建てようとする、氣がきいて間の拔けた仕業をしようとするのではない。合同論の或る勞働者等が眩惑されてゐるロシア革命は、彼等に其の愚を十分に敎へた。

彼等には今、理想主義的現實主義の哲學が生れ出ようとしてゐるのだ。ロシアの二の舞、即ち革命を起したあとで直ぐ又其の革命をやり直さなければならないやうな轍をふむまいとしてゐるのだ。ボルシエヰキの甘い口に乘るまいとしてゐるのだ。

新刊批評

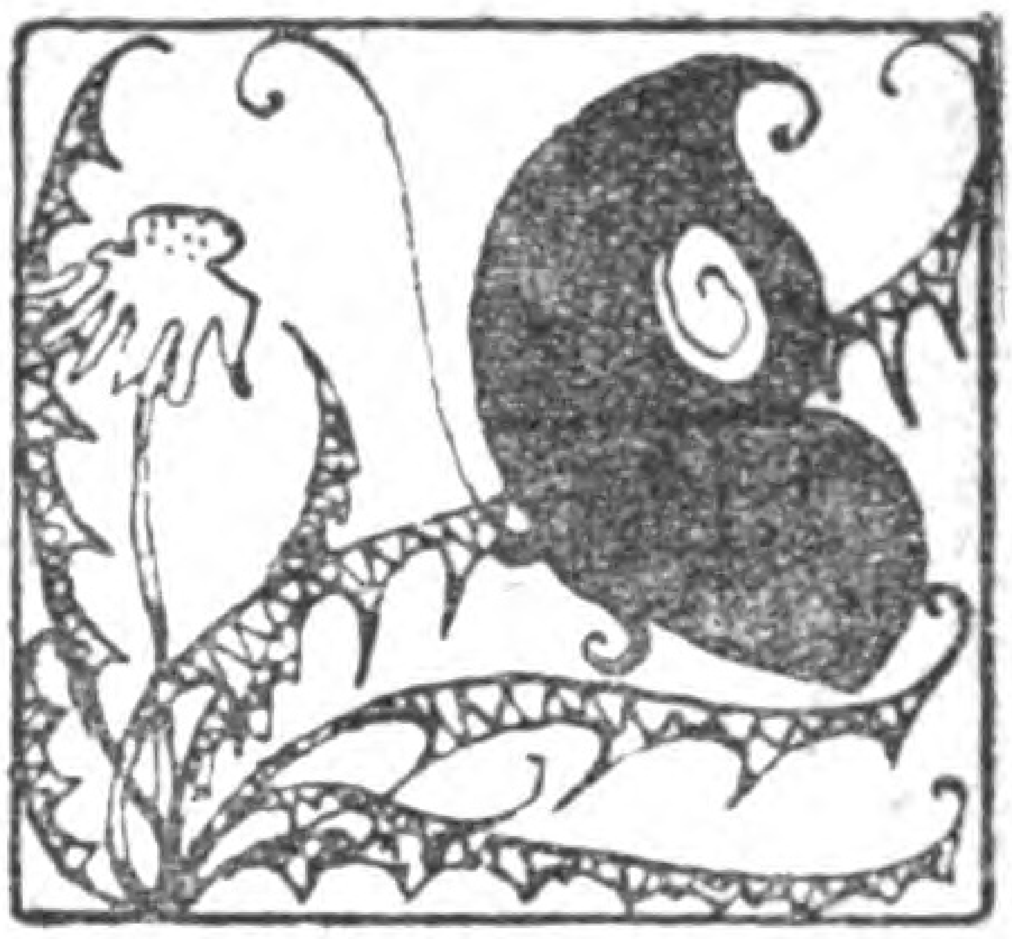
■暗夜行路（志賀直哉氏著）大正の藝術壇に光るものは本著だ、精進のあと、鏤刻苦心のあと、さすがに名人の匂ひが高い（貳圓五十錢新潮社）

■戀愛の合戰（宇野浩二氏著）氏一流のおもしろき著（價貳圓五十錢新潮社）

■靉日（石原純著）科學者としての石原氏が冷厳苛もせないにかかはらずこの歌集靉日を讀むものは氏の溫藉玉の如き風格に接するであろう、アララギの歌人としてよりも我々は本書を通して石原氏の人となりを知ることが出來てゆかしい（價貳圓八十錢アルス社發行）

■神戸勞働爭議實見記（岡成志著）代表的ストライキと稱せられた神戸勞働爭議を目睹したまゝかざりなく、記されたー（一圓三十錢警醒社

■農民組合運動史（内山俊雄譯）アーネスト・セレイの原著を譯したもの、農村問題の喧しい折り、好箇の參考書（價一圓九十錢警醒社）



サド風とマゾホ風

安田徳太郎

一 征服と殘虐

戀愛には破壞の本能が秘められてゐる。たとへ幸福の絶頂に登りつめてみても、なほ淋しい物足りなさが感ぜらる。戀人と思ひきりかたく思ひきり長く一つになることが出來ないからだ。この無限の慾望とこの飽くなき所有を妥協さすために人は「殘虐」といふものを作りてくる。戀に魂を奪れた男達は炎々たる情火の中にわが戀人を粉粹してあの完全に一つになりたいといふ夢を果すのだ。

ビクトオル・セルブリエ

人の心ほど不思議なものはない。あれ程可愛がつた女を自分の手で無殘にも殺して自首して出る男の心はあさましいといふよりも、ちと解しにくい謎の様なものといへる。可愛さあまつてといふもの丶、あまつた可愛さを明日にとしまつておかずに殺してしまふとは可笑しい心理だ。精神病學にAlgolagnie(アルゴラグニイ)といふ言葉がある。希臘語のαλγος「苦痛」とλαγνεια「快感」の二つの字から出來てゐて、肉體上または精神上の苦痛の中に一つの快感を求める事を意味してゐる。一八八六年に墺太利維納の有名な精神病學者クラフト・エービング氏がこのアルゴラグニイを二つにわけて能動的即ち他人に苦痛を與へる方を佛蘭西の小說家マルキ・ド・サドの名前をとつて「サド風」と名づけ受動的即ち他人から苦痛を受ける方を墺太利の小說家ザツヘル・マゾホの名前をとつて「マゾホ風」と名づけた。

人類生活を觀察すると大體男性が能動的であり、女性が受動的となつてゐる。「服從とはこの地上の女達の義務であり、堅き忍耐は女達に惠まれた運命である。」と獨逸の一詩人が歌つたやうに、男がどこまでも征服慾、所有慾を恣にするに反し、女

はどこまでも服従と忍耐に甘んじてゐたのであつた。人類の結婚の歴史を見ると、その大古には掠奪結婚といふのがあつて筋骨たくましい男が森中や叢に身を忍ばせて、向ふからやつてくる美しい娘に突然襲ひかゝつたり、正々堂々と娘の家に踏込んで娘を引攫つて來たりした。だからその當時は色白の役者の様な男や、臆病な遠慮深い男はいつも、色黑の髮蓬々の荒男におさへられて、村内きつての小町娘は一番あらくれの男らしい男の所有となつてゐた。原始時代の男女關係がすでに征服と殘虐によつて色どられてゐた證據だ。こういふ掠奪結婚が現今でもその遺風をとゞめてゐて、いろ〳〵奇妙な結婚式の象徴が殘つてゐたり、新婚旅行といつて結婚早々に女をかつぱらつて旅行に出たりする。また新婚の夜は征服と殘虐そのものだといはれてゐる。何もしらない娘は男を人殺しと間違へて五階の窓から飛びおりたり、卒倒したり、氣絶したり、翌朝親もとにかけつけて結婚などは眞平だと泣いたりする。だから日本で此頃さわがれてゐる精神分析のフロイド教授が有名な「ヒステリイの研究」といふ本の第二一六頁に下のやうに書いてゐる。『結婚は新らしい性的打撲（sexuale Tranma）だ。新婚の夜が病氣の誘因となることがよくあるのは、新枕が悲しいことに愛情濃かな誘惑を意味せずに強姦を意味するからだ。……婦人の重症の神經病がその源を新枕に發してゐるといつても敢て過言であるまい。』フロイドの說は反對されたり贊成されたりしたが、要するに××（Defloration）といふことが殘虐な色彩をもつてゐる故、男子があまり我儘に振舞はないやうにといふ老婆心と解しておいてもよい。野蠻人の間には年頃に達した娘達に舞踏によつて象徴的に色々注意を示して、こういふ男の暴行に膽を潰さない準備をしてやるそうで、それの興味ある實例が人類學雜誌などに報ぜられてゐる。

ところが社會が複雜となり文化が向上するにつれて「筋肉の力」が影をひそめ、配偶者撰擇にあたつて種々の奸策や巧妙な誘惑阿諛を弄するやうになつて來た。表面は美しく婉曲に見えてゐるが、その中心には昔ながらの暴力と殘虐が勢をたくましくしてゐるのは注意すべきだ。佛蘭西のロオラン博士が「口說の心理」を研究するために、ヘクトオル　フランスの「青き國の戀」ルモンニエの「男性」ゾラの「芽月（ゼルミナール）」モオパッサンの「一生（ユヌ・ヴヰイ）」等において男がどういふ手段で口說を果すかを引用してゐる。

さらに人類の愛の生活に殘虐と血が漂つてゐる例として、印度の『愛經』の第五章に（usanacci dya）といふのがある　フランス譯の『愛經』にはこの字を a morsure 齒傷と譯してゐるが、愛の生活においては上脣、口腔、目以外の場所は嚙んで

も差支へないと書いてあり、そしてその歯痕によつて「愛經」獨特に、隠れたる嚙傷、腫れたる嚙傷、點、點の列、珊瑚、寶石、寶石の首飾、切れた雲、猪の嚙傷と九つに種類わけをしてゐる。

愛の生活といふのを離れて我々の棲んでゐる周圍を見廻して見ると、隨所隨時にこのサド風が見られるのだ。わたしは京都の町人だから京都の例をひくが、今から五六年前は京極でよく古兵が新兵を窘めてゐるのに會つた。新兵がつひ雜沓におされて向ふからくる古兵に敬禮するのを忘れやうものなら、彼等は羊の様におとなしい新兵をとりまいて罵倒を浴びせかける、人が黑山のやうに集れば一そう威丈だかになつて蹴る撲るの狼籍に及ぶ。その時の彼等の顔にはサド風特有の快感が漂つてゐるのを認める。サド風は學校の教師に多いと西洋でもいつてゐるが、わざと六ケ敷しい試驗問題を出して生徒をまごつかしたり試驗場でそりかへつて、日頃成績の悪い、教師に楯突く悪太郎のまはりを濶歩して、凄い會心の笑を浮べたりするサド風の教師がある。

田舎の停車場へ行けば誰れでもサド風が觀察できる。時間が迫つてゐるのに仲々切符を賣つてくれないで、乗客がさわ〳〵したり、心配そうにしたり、切符賣場にならびかけるのをむしろ面白そうに眺めてゐる。そして近くに汽車の轟々となる音が聞え出すと切符賣場の窓をひらくのだ。高利貸が自分に手を合せて猶豫を哀願する男を尻目にかけて「なりませぬ」と大聲疾呼する心理、親子もろともに涙を流して、そこのところはどうぞ寛大にして下さい、この子の一生にもかゝります故と願げる親に、充分退校の價があるとがんばる中學校長。

サド風は醫者に多い。特に外科醫はみなサド風と稱してもよい。患者が痛いと泣いた時、メスで切れば痛いのはあたりまへだと冷然と言つた大學教授があつた。フランスの學者が外科のサド風（le sadisme chirurgical）と一章を設けてそれにこういふ例をあげてゐる。『ある晩のことパリのさるサロンで人々が集つまつて、美學の話に花を咲してゐた。甲は藝術の美を讃へ、乙は自然の莊嚴を賞した。突然そこに居合せてゐたある有名な外科醫が「だが併し諸君、女の腹を鋏（パンス）で切り開く事だ。これ以上にこの世の中に美しいものはない。」と叫んだ。……

……こういふ教授を手本に手術の名をかりて女の腹を切開し血のしたゝるのをうち眺めて、最高の美と最高の快感に恍惚とする無數の外科醫がパリに住んでゐるのを悲しく思ふ。』と。

血の色、赤色、紅が我々人類の進化に重大な意義をもつてゐた

のは仲々興味あることで、檻に入れられてゐる獅子が滴下する血を見て熱國の森林に獲物を漁つた日を思ひ出して突然狂ひ出すやうに、昔のその昔の野蠻時代を思ひ出すのが、「赤色の生物學」「赤色の心理學」には未だ研究の餘地がある。兎に角赤色は昂奮色ととなへられてゐる位、赤色に昂奮しない男は木佛金佛石佛と歌はれたり、千里を走る急行列車も赤い旗にははたと止ると歌はれる位、赤色の人間の腦髓に及ぼす力は偉大だ。同じく赤色と殘虐は切つても切れぬ關係がある。戰爭は赤色と殘虐の結晶だ。火事の紅蓮の焰を愉快そうに眺める火事場の野次の心地は赤色と殘虐と快感の因果關係を語つてゐる。赤化といへばそれだけで凄惨な昂奮を與へる　さらに赤色と性的生活も緣が深い。唇の赤さを一そうひきたゝすために女達は紅をつけるではないか、奴隷時代の女達が男の心をひきつけるため、いかに赤色を自分の顏面、服裝調度に配合すべきかに心を碎いたかはロオマ、ルイ三世　徳川時代の風俗史が證してゐる。ロオマ市を火の海と化してその恐ろしい火と修羅の巷を眼下に見おろしてハアプを彈じたネロ皇帝、焙烙の刑にサド風の快感を貪つた、△△△は人口に膾炙された事實であるが闘牛を喜ぶ西班牙人と並んで、立廻りで血を流さしたり、切腹で血を布に滲ましたりする芝居に有頂天になる日本人もこれ等の例にもれない。

二　復讐、愛と憎しみ

腹だゝしさ、突然の憎らしさ、生きてゐることの不快さ――あゝそれから――傷つけられた自負心――悲しみがわたしの胸にこみあがつてくる。女もやつぱり苦しみ悶えてゐると思ふのはせめて心やりだ。吸り泣きながら許しを請ふた女の手紙を今でもこゝに持つてゐる、なん時でも讀みかへすことが出來るのだ。……あの最後の別れぎはに丸いあどけない顏に驚きの眼をみはつて、わたしの前に立つてゐた、あの顏もさだめし窶れて蒼ざめてゐるだらう。……女が去らうとした時に――もう最後だと別離を惜しんだ時にわたしはあれにわざと握手を許してやらなかつたのだ。

アルツウル、シュニッツレル「花」

復讐といふ事は公然敵討の出來ない御代になつてから、口說と同樣に非常に複雜になつてきた。人間には先天的に復讐精神がある事は、三才ぐらゐの子供が柱で頭をぶつと誰も教へないのに自分で柱をぶちかへして復讐してゐるのを見てもわかる。子供が石に躓いて轉んだ時、母親が「可哀相に、石にてんをしておいて上げませうね」といつて石をぶつと、子供は機嫌を直して泣きやむ。徳川時代なら親の敵を見付けるため、江戸表から長崎の果までさまよひ歩いて、敵が見當つて遺恨重る怨を晴した時は、昔紅顏の美少年もあさましや、頭におく霜のいやが

上に白きを見て「敵討の悲哀」を感ずるであらうが、現代の復讐は世智辛き世に相應してもつと世智辛くなり、一思に殺さない代りに、執念深い殘虐性を含んでゐる。恥をかゝしたり、侮辱を與へたり、刀や腕力を用ゐない代りに、言葉や眼が刀や腕力以上の辛辣さで人の肺腑を抉る。子供が大人に叱られた時、子供は突然、性に關した色々の言葉を吐き出して大人をまごつかして見事に復讐する。また人類はどういふ譯か輕蔑侮辱呪咀をあらはすのに性的事物とか排泄物とかを借用してくる。「糞くらへ」とか「屁とも思はん」とか尻をまくるとか、小便をひつかけるとか、痰をかけるとかする。また田舍の電柱などに「何某バカ」と書いてその上に生殖器の樂書をしてあるが、これなどは代表的な復讐の方法だ。同じ例で復讐とは關係しないが、老年にはひらうとする四、五十才の男がわざと娘達の前で性的事物を露骨に言つて、娘達のはづかしがつたり赧むのを眺めて心ひそかに快感を味ふ人がある。女學校の塀にわざ〳〵樂書する男も同じ手合といへる。

失戀の結果女人のすべてを呪つたり、前途を瞩望されて光榮のあまり無縹緻でも有難いと貰つた妻に幻滅を感じ、美しい女さへ見れば嫉妬と復讐の念やみ難き人々はこゝに一轉してサド風となる。こういふ人々は女に復讐をするためにのみ女を征服しやうとする。女を征服し女が慄いた瞬間に彼等はその女をすてゝ第二の女を物色する。こういふ男達をドンキホオテ型、カサノワ型とも世之助風ともいへる。マルキ・ド・サドは明らかにこの中へ入れることが出來る。

戀を弄ぶ男達が女を泣したり厭味をならべたり、じらしたりする中に快感を求めるが、またその中には、實に嫉妬、愛、憎しみがいり亂れてゐるのだ。「サロメ」を讀んだ人々に憎しみが見事なる經過をとほつて愛に變つて行き、ついにヨカナンの血潮したゝる首をさし上げて、その唇に接吻するクライマックスに到達するのを見るであらう。「おゝ戀よ、おまへは氣儘なあらけない鳥だね」と歌つた奔放な女をたゞ一刺につきさして、「ああ、わしはあいつを殺した。わしのこがれぬいたカルメンを」と絶叫するドン・ホーゼ。「近代戀愛の生理」の中で有名なボオル・ブウルゼがその主人公クロオド・ラルセに言はしてゐる「まあなんて今晩は愉快な事だ。わしは今朝コレット・リゴオを殺してしまつたのだ。今晩からは天國へのぼつたやうにやすらかに寢つかれるだらう。もう誰もあの娘の身體を自由にできまいし、あの唇に口づけする事もできまいし、どの若者もあの娘に心をときめかす事も出來ないんだ。飯をくひに行く倶樂部で仲間の一人が「君、コレット・リゴオといふ娘を知つてゐるね　可哀相

に昨日サン・ペテルスブウルで突然殺されたんだ。」とわしに話しかけてくれるなら、悦しさで心が一杯になる。いやそんな話だけでは物足りない。娘がどれ程苦悶したかを知らしてやりたい。娘を愛してゐたんだが、……わしがあれを憎みかけた時、一思ひに殺してしまはうと思つたことを。」

愛と憎しみ、阿諛と反抗、希望と絶望それがひいて殘虐を誘ひサド風に變つて行く經路を述べたが、それではサド風の代表人物たるマルキ ド・サドはどんな性格の人であつたかを述べたい。

三　マルキ・ド・サドとその生涯

マルキ・ド・サドの生涯は日本ではあまり知られてゐないが、西洋でもあまり一般には知られてゐなかつた。文學者として彼を批評する人はあつても、性心理の興味ある人物として彼を解剖しはじめたのはつひ近代の事だ。また戰爭後サドの研究が仲仲盛んになつて來たのは面白い事である。佛蘭西側からはマルシア博士が「マルキ・ド・サドとサド風」といふのを發表し、法醫學者のカラツサアニユ博士が「法醫學より見たるサド風」を發表して以來サドの研究がまとまりかけ、ついで有名な獨逸のブロツホ博士がオイゲン・デユーレンの匿名で「マルキ・ド・サドとその時代」を出し、オイレンブルグ博士が「サド風とマゾホ風」を出しサド研究はこゝに一段落をつげたのである。

一七四〇年六月二日マルキ・ド・サドは母の里なるコンデ家で生れた。父はフランソア・ヨセフといふ外交官 母はコンデ家の娘のマリー・エレオノホル 皆プロワンスの貴族であつた。四才にプロワンスの美しい祖母の家に行き、しばらくして叔父の家に移つてそこで教育を受け、一七五〇年十才の時パリのルイ・ル・グラン學校に入學した。サドは美しい青年であつた事は、ウザンヌが「やわらかい蒼白の顔、黑みがちな大きい目の敬虔な青年」と評し、ある獨逸の研究家は「この若い青年は類ひなき美貌の持主であつた。未だほんの子供時代にも、通りすぎ行く貴婦人達がサドの美しさに見とれて立ちどまつたといはれてゐるその魅惑の美しさに加へて起居振舞と容姿に優美が溢れてゐて聲だけ聞いても、女達は、早くもその捕虜になつてしまつた。父はいつもサドに立派な流行の晴着をきせて一しよに外出した。ロコヽ式の服裝がこの青年をどれほど華やかにしたかは大抵想像がつく。」と述べてゐる。パリの學校では「この青年は少年時代から本の蟲であつた。快樂主義を土台として哲學大系を建てるんだと力んでゐた。學業も優れてゐたが、文學を愛好して音樂舞踏拳闘にもひけをとらなかつた。よくルウブルやヴェルサイ

ユの畫師で名畫に見とれる姿が見出された。」と述べてゐる。

大學卒業後シュボオ・レジエの聯隊にはひり龍騎兵の中隊長となつて獨逸との七年戰爭にも出征した。一七六三年（？）に結婚した。この結婚がサド風のはじまりといひ、また七年戰爭中に早くも現はれてゐたともいふが、兎に角殘忍そのものゝ戰爭生活がサドの精神生活に與へた印象はけだし大きなものであつたのは否定できまい。クウル・デ・ゼード學校の學長にモントルイユといふ人があつて、その人がサドの父と眤懇の間柄で、そのモントルイユに二十才と十三才の二人の娘がゐた。性質や容貌から見ると、姉は黑い髮の毛、黑眼のブルネット型、威厳ある顏、敬虔深き女であつたが、妹の方は靑眼のブロンド型早熟で利口でやさしく美しく情熱の娘であつた。二人の親の間でその姉の方をサドにめあはせることに内約してあつた。はじめてサドがモントルイユ邸を訪問した時生憎姉が病氣でふせてゐたので妹のみが彼をもてなした妹は音樂愛好家であつて、その美しい肉聲とハアプで若いサドの心は千々に亂れて妹に深い愛を懷くやうになつた。二度目に訪問した時姉も出て來たがサドには姉がどうも氣に入らないので是非妹の方をと申込んだ。モントルイユは斷然拒絶したのでサドは絶望の思ひで旅に出た。サドは娘の母にそうと賴んでみると姉だつたら喜んであげやうといふ冷かな辭であつた。妹もサドの愛に酬ゐるために兩親に哀願したがきゝ入れられなかつた。そこでサドは不承知ながらきらいな姉と結婚した。娘の母はサドの性質をみぬいて妹を修道院におくりこんでしまつた。ロオラン博士はこうかいてゐる「この時からマルキ・ド・サドにサド風の要求が頭を擡げて來た彼は女を憎んだ、彼が自分の愛した女のためにかくも苦しまなくてはならないために、そして女が永久に自分を離れたゝめに丁度復讐の心から女を憎んだのだ。」この外に時代の空氣も關係してゐて、ヂユーレンが「マルキ・ド・サドとその時代」に詳しく論じてゐる。こゝではゴンクウルの「十八世紀の婦人」の言葉を引いておかう「當時の人々は女の心を苦しめる事を悦んだ。女の心を苦しめるにとゞまらず、その肉體をさへ拷問したのだ、何故に人々は無殘にも女の涙を求むべき代りにその血を求めたか？……」

一七六八年四月二日にサドはケーラア事件ではじめて世をさわがした「サドといふ男が三十才前後の身なり卑しからざる女に會つた。女はサドに布施を哀願したので、サドは親切らしく困窮から救つてやる故パリ近郊の自分の家プッチ・メーゾン」に來いといつた。女は翌日約束を守つてやつて來ると、サドは家の中をのこりくまなく案内してつひに屋根うらの一室に押込

めて女を裸體にした。女は驚きに震へつゝサドの足もとに跪き自分は正しい女なのだからどうか勘辨してくれと哀願したが、サドはピストルでおどしつけ兩手を縛つて打擲した。血が段々女を染めてくる時バルサムを取出して傷口へ塗つてそのまゝそこに縛つて寢かしておいた。サドは翌日再び現れて傷口をあらためて膏藥の利いたかどうかを檢し、メスをとつて女の全身を切りまくつた。そして再びバルサムをぬつて去つた。女は紐を嚙みきつて窓から街路に飛びおりて虎口を逃れた。警官は直ちにサドを逮捕した。」サドは六週間投獄され女は百ルイの賠償金をとつた。

一七七二年七月二十五日サドはマルセイユに姿をあらはして一大舞踊會を催したともいひ、廓に行つたともいふ兎に角女達を集めてカンタルデンを入れたチョコレートを澤山食したところカンタルデンは催春藥であるため、一場はたちまち修羅の巷の躁宴（オルヂ）と化した。一人の遊女は窓から飛んで卒死し、二人の娘は中毒して死んだ。このどさくさまぎれに妻の妹をそゝのかしてイタリアに逃亡し、そこで二人で靜かな眞面目な生活を營んでゐたが數月ならずして妹は二十一を最後として急死した。

その後まもなくプロワンス滯在後逮捕されて巴里に護送されヴンセヌ監獄に投ぜられ、ついでバスチイユそれからシャララントンに移され一七九〇年三月特赦によつて出獄した。實に三十七才から五十才までの壯年時代を冷い監獄に送つたのだが、妻はサドに對して忠實で貞淑で書物や筆紙を差入れて慰め勵したが、サドはいつも妻を罵倒した。「貴方はわたしより世の中をお存じですから、あなたの御命令にさへ背かねばよいと思つてゐます。どうぞ一番やさしいお友達と思つて下さいね　といふ愛情深き妻の手紙の返事に「おまへはよくも厚かましく嘘が吐けるね。」と書いてゐた。サドが最初にものした小說「ユステヰヌとユリエット」（JUstine et JUliette）はこの姉妹をモデルとしたもので、姉のユリエットは「おきやんで浮氣で意地惡で放縱で美人、」妹のユステヰヌは「おぼこく趣味があり、やさしく、陰欝で物思ひに耽る女」と形容し。ユリエットを罪惡の女としユステヰヌを貞淑の女としてゐる。サドは監房の孤獨のうちに飽くなき迄に情慾と殘忍の世界を心に描き自分がかつて體驗した事件に色彩を施して、有名なサド風の小說を書き始めたといはれてゐる。そしてつひに一八一四年十二月二日七十八才で老衰のため安らかに往生した。

「ユステヰヌとユリエット」の外に「化粧部屋の哲學」（La Philosophie dans le Boudoir）「戀の犯罪一名情熱の狂ひ」（Les Crimes de L amoUr oU Le Delire des Passions）「ゾロエと二人の從者」（Zoloe et ses deux acolythes）、草稿のまゝ殘つた「ソドームの百二十日一名放蕩學校」（Les 120 JoUrnees de Sodome oU d'Ecole du Libertinage）、詳しく小說の

内容を述べるのは必要ない事だが、サドの小說が性犯罪と病的性欲の一切を網羅した、恐ろしき罪惡の百科辭典といつてしまへば充分であらう。わしの振舞が情慾の對照にうまく應ずるかどうかは知りたくない。劇しい昂奮でわしの全神經がぴり〳〵わなゝくのを望むのだ。情慾よりもさらに強くわしを動かすのは殘虐といふものだ。人に殘虐を與へる時わしの神經はなににも譬へられぬほど凄まじく振動する。」とサド自身が述べてゐる「戀は快感の棘であり、肉慾は快感の薔薇である……わが愛する女よりも、むしろわが憎む女の腕に大きな快感が求められる。」「他人の意志によつて此悲しき宇宙に生れでた不幸な人々よ。おん身は官能と空想の世界を究める事により、また一切を情慾に捧げる事により、人生の荊棘の上に見事なる薔薇を咲かす事が出來る」

チューレンが結論としてサドの精神狀態を鑑定してゐる。(1)プロヷンスの産であり南國の多情な血を受けてゐること。(2)遺傳についてはあまり重要なものはないが、叔父が文筆に親しむと同時に放蕩に一生を費したことは注目すべきだ。(3)少年時代には別に誘因らしきものはない。(4)十七才即ち思春期のはじめに戰爭に行き、家庭と離れて六年間戰陣で暮したこと、特にフランスの軍人の道德頽廢があづかつて力がある。(5)結婚の不幸はあまり大きな原因と思れない。(6)二つのサド事件でサドは殺人の目的でなかつたこと。(7)長い間監獄にゐたため、肉體的にも精神的にも非常に障碍を受けたこと。(8)小說はむしろ時代と環境の影響を受けてゐること。………こういふ事實よりマルキ・ド・サドは精神病者でないが、遺傳的の神經病があるらしく不健全なる環境に育ち、早熟的に放蕩をおぼえ、病的性慾に興味をもち、長い監獄生活により天稟が痛められ、ある程度精神薄弱になつてゐたと述べてゐる。

四　服從と快感

ところがサド風と全然反對に位してゐるマゾホ風とはどんなものであるか？　異性の意志に絶對無條件に服從する考への中に快感を求め、さらに異性に征服され侮辱され酷使されることを切望する、この願望はいつも性的に色づけられてゐる。マゾホ風の人々はこういふ場面を好んで頭の中に描いてゐる。こういふやうに自己否定の感情、わがあこがれる女に肉體的にも征服されるのを喜ぶのは男としては當然常態とはいへまい。併し文化が進み、奴隷に甘じてゐた女人達が自覺しだして解放とか參政權とかを叫びかけて以來、女の威力に征服される男達が一そう多きを加へたのは爭はれない事實となつた。

アナトール・フランスが「青髯(バルブ・ブリュ)七人の妻」といふ面白い物語で、鬼をもひしぐ魁偉な「青髯」が女に嫌はれて、妻が長つゞきせぬのに氣をやんで、子供のやうに弱くなり、お追從やお上手で女の御機嫌をとり、それでも嫌はれて七人の女に逃げられる有樣を書いてゐるが、戀をする時は男の心は弱くなるものらしい。しかし定めし「青髯」は七人の女に愛相をつかされる中に甘い快感をありつたけ味つたと同樣、日本でも女に棄てられる中にこの上ない快感を味ふ男達も澤山あつて、「別れたる妻に送る」とか、「妻とわたし」といふやうな小說でこういふ消息を物語つてゐて、同傾向の男達がこの種の小說を耽讀して作者と同じ甘い快感に耽つてゐるのを見受ける。こういふ男達をひつくるめてマゾホ風と名づけると、センチメンタルな文學青年は大抵この中にはいつてしまふ。西洋特に獨逸方面は女性崇拜の盛んなところで、「ヴエルテル」のゲーテや、「トリスタンとイソルデ」のワグナアのやうな「久遠の女性」至上主義の代表者を出したり、十二、三世紀には有名なミンネ・ゼンゲルといふ女性讚美の宮廷詩人を輩出してゐる。かゝる詩人達は「若しこの世に女がなかつたら世界はどうなるだらう」と歌つた位、女のためなら生命をも惜しくないといふマゾホ風の人々であつた。また「騎士物語」を讀むと弱きを助け强きを挫く騎士(ナイト)達が貴婦人の一つの會釋、一つの接吻を無上の光榮と心得て、この光榮を子孫代々に語り傳へたといふ。だからその當時の子供等は、「わしのチヤンは何々女王に接吻して貰つたのだ。どうだ、おまへとこのチヤンは腰拔だな」と自慢したそうだが、現代の日本でも騎士にも劣らぬマゾホ風の男もあり、世界的の聲樂家三浦環女史とかいふ人にたつた一つ接吻をして貰つたのを光榮の至としてこれを吹聽し廣告にまで使ふ蓄音機のレコオド屋さんもある。舞台に立つ女優に敬意を表して立派な贈物をする人々、「君の姿を仰ぎみて、君の御聲を聞く時は」と少女歌劇の女王にピアノを贈つた大阪のボンチ、閨秀作家とか閨秀畫家、女流音樂家をとりまき女主人公の一顰一笑に神經をなやます若き男の群は大抵マゾホ風の人と見て差支へない。ルツソオの「懺悔錄」にはいたるところにこのマゾホ風が見られ、特にランベルシエ夫人に對する「横柄な女主人の足もとにひれふし、どんな命令にも服從し、叱責されて心から容赦を哀願する事はわたしにとつてこの上もなき心地よいものであつた」といふ追憶は我々に立派な材料を提供してくれてゐる。征服されるためには相手の異性の挑撥が必要となつてくる。ルツソオは奉公先きのおかみをその快感の對照としてゐるが、ある人では貴婦人、教育ある女、ある人では女優、藝者といろ／＼嗜好の相違がある。さらに與

味ある事實は若き人々がよく母ほどの年上の女の支配に服して、その女の戀の相手になつてゐる事だ、少年から青年にはひりかける頃のエロテツクな夢の中の女は大部分年上の女のイメイジであるのは心理學上面白いことであり、初戀が「ボオルとヴエルヂニイ」の様に美しく夢幻的に運ばれずに、十中の八九まで年上の女に對する思慕の情ではじまつて、苦しい足掻と失戀で終つてゐる。何にでも屁理屈をつけなければ承知の出來ぬフロイド派の人々は、かういふ若い青年が年上の女を慕ふ動機として、「子供の一番初めの戀の對照は母親であつて、母親は父親の所有だから、子供は無意識に父親に嫉妬を懐き、母親の愛情を自分で獨占しやうとする。これが子供の精神生活に深い根をおろし、その結果大人になつても同じ衝動が浮び上つてくるのだ。」と説明してゐる。この説によると年上の女を慕ふのは、昔失つた戀人即ち母親の面影を求め母親らしい受身の愛情を探すのに基づくといへる。シユニツツレルの小説にはよくかういふ年上の女への愛が出て來る、例へば有名な「賢者の妻」の主人公の若い青年の、自分の世話になつてゐたギムナヂウムの教授の妻フリデリケに對する愛、「あの人はわゐたしには蒼白い顔の、やさしい女におもはれた、いつも白い着物をつけて庭園に出て、丁度母親のやうにわたしの頬を撫せてくれた。……ところがあの人は突然わたしに接吻した、最初はあの人がしたのでないと思つたが、唇をわたしから離さうとしたとき、この接吻に何の意味があるかを悟つた。」といふ一節は大いにフロイド説を裏書するものらしいが、わたしは何とも斷定できぬが、兎に角異性によつて征服され支配される中に快感を求め、一歩進むと侮辱、酷使までと發展してくれば明らかに病的の色彩を帶びてくる。だからマゾホ風の男は女性に對しては、子供であり、生徒であり、從僕であり、奴隷であり、つひには動物となつて、その女性の命令どほりになり、すゝんで肉體の折檻さへ受けるのだ。

犬になるマゾホ風の例がジヤン・リシユパンの「ラ・グルユー」といふ小説にのつてゐる。

「あたしの側にいらつしやい。隨分寒いこと。」

男は目を瞑つてひと震ひした。女は男の手をとつて ぎゆつと引寄せた途端、男はどつと女の足もとに倒れた。

男は女のものだ、女の自由になる おとなしい奴隷になつた、女の犬になつた。

「あなたあたしの犬になりたい？」と女はいふ。

「へい。」

「でも本當の犬よ。吠えなけやけや駄目だわ。」

「仰せの通りに。」

女は水中へ棒片をなげた、男はたちまち水中に飛び込んでワンワンワンと吠えた。

マゾホ風の男はまたその戀人に好んで手紙を捧げたがり、その内容はマゾホ風特有の空想を肆にしたもので、獨逸學者はこれを「奴隷の手紙」(Sklavenbriefe)と名づけてゐる。この「奴隷の手紙」を一つ獨逸本からひらつて譯して見やう。

わが親愛なる傲慢なる奥さま
殘忍なる御主人さまへ、

お手紙を差上げます。いくらでも御用事をお言附け下さいませ。そしていくらでもきびしくお使ひになることをお願ひ申し上げます。あなたの御命令に遵ひまして、寛大な奥さまの御感情を、どれ程傷つたかど思ふと悲しくなります。どうぞそのうめ合せといたしまして、わたしに一番殘酷な折檻を課して下さい。どんなに折檻されましても、わたしは有難いのでございます。あなたが鞭でうつて下さる瞬間は、わたしの生涯にとりまして、一番幸福なものとなりませう。萬一その折檻がお氣に付さないなら、なほ幾度も幾度もおせめになつて御機嫌をお直しになることをおたのみいたします。

あなたの忠實な召使であり奴隷である
エリザベス拜

男が女に捧げる艷書はサド風の色彩の勝つたものと、マゾホ風色彩の勝つたものゝ二つに分類できやう。悲慘なるエリザベスの手紙は實に遺憾なきまでにマゾホ風の本領を發揮してゐる。彼がこの手紙を認めつゝいかに甘き快感を味つたか、その折檻の場面(シイン)を頭の中に浮べて、いかに昂奮したか。本當の折檻よりも折檻を空想するだけで充分であるので、こういふ人々を「架空的マゾホ風」と命名しておいてもよい。男女のとりかはす艷書の中に遊戯的にサド風やマゾホ風が活躍して涙を流したとか血を流しとか仰山らしく描寫されてゐるが、この時もやつぱり「架空的サド風」や「架空的マゾホ風」が多いらしい。

五　「甘き泪」

自分のうけた色々の苦痛をふりかへつて見、頭の中に芝居を作つて自分の苦しむ場面を描い一見、心ひそかに泪を流そうとも、この泪を「悲歎の泪」ときめるより、「甘き泪」ときめる場合が多い。女に自分の身上話をあはれつぽく縷々と說く男ほど危險な奴はない。そういふ男はマゾホ風の假面をかぶつたサド風の男か、でなければ純粹のマゾホ風の男である。彼等は失戀のいきさつとか、子供時代の苦勞とか、繼母に虐待されたことゝかを、美しい言葉と悲しい表情によつて潤色し誇張して叙し行く中に自ら陶然として甘き泪の快感に耽けるのである。同情をひいて

ほしい心理、哀れんでほしい心理はマゾホ風に屬してゐる。日本に流行する告白小說も多分この例にはひるらしい。ありし日の思ひ出を分析し解剖してそれをうまく小說に仕組み上げ幾分の艶と涙を入れその上へエロチックの香氣を漂すていの小說家はマゾホ風の代表者だ。

涙ほど美しく純潔であるものはないと信じてゐる人はお目出度い人だ。女の涙には虛僞や脚色が多い。女の涙ほど美しいものはないといふのと同樣女の涙ほど虛なものはないともいへる。お芝居氣たつぷりに自分の都合のよい時にいつでも涙を流すやうに練習する男や女が澤山あり、葬式の場送別の場、同情の場感激敗北の場、無念の場で即席に涙をはら〳〵灑げる人があり、そういふ人は社會から情に脆い人とか、愛情の深い人とか、同情のある人とか特殊の尊敬を受けてゐる。泣男を葬式に一時間いくらで雇つてくる支那人もあるから、こういふ人々の涙を眞純な動機から出た涙らしい涙だと決めるよりも、不純な形式的な虛僞な涙だとやつつける場合が多い。涙の心理や生理が複雜であるとともに、涙の分類もいたつてやゝこしい。近松門左衞門は紙治が無念さに齒をくひしばりつゝ流す涙を「エヽ口惜い無念な。熱い涙血の涙、ねばい涙を打越へ熱鐵の涙が溢るゝ」と形容してゐる。「悲しい涙は目より出、無念涙は耳から成共出るならば、云はずと心も見ゆべきに、同じ目よりこぼるゝ涙の色の變らねば、心の見へぬは尤々」だから悲しみに流す涙にも「甘き涙」や「マゾホ風の涙」がある事を敎へておかう。

六　懺悔奉仕の心理

「宗教は肉慾だ、肉慾は宗教だ」といふシュレーゲルの言葉、「肉慾と宗教と殘忍が人類に共通の離れ難い聯想をよびおこすのは驚くべき事だ」といふノヷアリスの言葉を引用しない迄も宗教がエロテックの何物かで世の多くの人々を今でもひきつけてゐるのは周知の事實だ。マゾホ風の人々は宗教生活にはひるを常とする。神の意志に身を捧げ、神の愛に奉仕し、禁慾生活によつてわが身を鞭撻し、懺悔、自責、はては自分の身に傷つけ、殉教のため潔く生命をさへたつのだ。こういふ人々は自分の人格を極度まで卑下さしてその中にマゾホ風の快感を味つてゐる。プロツホ博士はうまく言つてゐる。「こういふマゾホ風の人々は最も卑しい業務、普通ならば嘔吐を催す程の屈服にも喜んで奉仕して、その中に快感を貪つてゐる、これを Koprolagnie（コプロラグニイ）または Urolagnie（ウロラグニイ）と名づける」と、Kopro（コプロ）といふのは希臘語の κοπρος「糞」といふ意味であり、Uro（ウロ）は ουρον「尿」といふ意味であつて、大便でも小便でも恭しく舐めたりにほひ

をかいでその中に快感を求める、舐めないまでも大小便にも等しく穢はしい汚い事に喜んで身を任すといふことである。コプラグニイやウロラグニイの例として遠い西洋のものより近い京都にある話をしやう。京都に一燈園といふ宗教團體があつて、それのモツトオは懺悔奉仕の生涯をおくるといふ事であるが、遺憾なくこのマゾホ風のコプロラグニイの本領を發揮してゐるのは實に愉快きはまる事である。この團體の人々の稱して一番尊い仕事は便所掃除である、この人々が一隊をなして敬虔らしく京の町を歩くのは壯觀であるが、その容姿、態度、仕事ぶり一つとしてマゾホ風の代表ならざるはない。彼等はどういふ譯か辻便所とか公衆便所の掃除は絕對にしないが、町中の家の便所なら喜んで掃除する。特にそういふ一派の歡迎するのは木屋町邊の便所掃除といへば、そこに性的に色どられたコプラグニイの特色があらはれてゐる。さる人は一燈園の信者であるが、自分の家の便所掃除は決してしない。奥さんにうちの便所でも掃除あそばせといはれても手出しをしないが、木屋町邊の便所掃除なら喜んで行くといふ、またそういふ人々は卑しい仕事に身を任して孜々として働いてゐるのを女性から見てもらつて同情や敬虔の涙を濺いで貰ふのが、一番快感をおぼえるそうだ。

西洋では「基督の花嫁」といふのがあつて女達が懺悔奉仕の生活中に基督に跪坐し基督と一體にならうとする。そして空想は空想を强め、極度の身心鞭撻が病的にまで亢進して精神錯亂をきたし、妄想（ハルシネーシヨン）がおこつてくる。この妄想の中に基督と一體になつたと信じて劇しい快感を經驗するのだ。ゲントのエリサベツトといふ女はこういふ妄想の中に神と結婚したと信じ、お丶愛よ、無限の愛よ、創造主よ、わたしと一しよに愛よ愛よと叫んで下さい」と泣き叫んだといひ、獨逸の聖テレヂアといふ女はこういふ狀態をもつとうまく描寫してゐる。「……殉教こそ無上の苦痛と無上の恍惚の華なり、神は天使を妾の心の目に示し給へり、天使はいとも小さく美しくおはしませしが妾その燃ゆるが如きみ顏に淨火と愛のしるしなる精靈の一つを見まいらせたり。この天使黃金もてつくりし鎗もち給ふ、その穗先眞紅にやけ爛れたり、あゝたちまちその穗先を妾の胸につきさし給ひ臟腑にまでとゞくと思はれたり、やがて天使鎗ぬき給ひし時わが全身はおそろしき痛みにうちふるひ、み神の愛のやさしさにやきつくさるゝとおぼえたり。……』この一文の中に巧みなる象徵によつて宗教と肉慾が渾然と融合してゐるのを認めることが出來る。

宗教全盛の現代に靑年達の渇望する宗教サド風の男達が走らうとする宗教はコプロラグニイかウロラグニイの調子のするも

の、さもなくばエロテックの聲の高いものだ。ある青年は叫んでゐる。「宗教だけではあまりに淋しい。一寸エロチックを入れて下さい。」と。だからこの青年は「出家とその弟子」の愛讀者であり崇拜者である。

七　ザツヘル・マゾホとその生涯

しからばマゾホ風で不朽になつたザツヘル、マゾホとはいかなる人であるか?獨逸のシユリヒテグロオルといふ人が「ザツヘル・マゾホ風といふ本で詳しく書いてゐる。本名はレオポルト・フオン・ザツヘル・マゾホといつて一八三六年一月二十七日にガリチアのレツベルヒ市で呱々の聲をあげた。父はフランツ・フオン・マゾホといふ大學教授で、その先祖は西班牙產のドン・マチアス・ザツヘルといふ人であつた。マゾホは生れつき虛弱で蒲柳の質でルテーネ生れのハンシヤといふ乳母に育てあげられた。乳母はマゾホにルテーネ地方の奇怪な傳說を色々話した。だからザツヘルは肉體とともに精神もこの乳母に負つてゐるといはれてゐる。

十才の時の話としてつたへられてゐるところによると、マゾホの父方の親類にクセノピア子爵夫人といふ美人であるが多情な女があつた。ザツヘルは子供ながらこの女を尊敬し、特にその美しさと女の身にまとつてゐる毛皮が大變氣に入つた。彼はこの女の御氣に入るやうにつとめた。用事をおほせつかつたり御化粧の手傳をしたりした。ある日のこと貂の毛のスリツパを女の足に穿かすために足下に跪いてその足に接吻した時、女は微笑を浮べてマゾホを蹴とばしたその時彼はたまらぬ程の心地よさを經驗した。マゾホ風の素質はすでにこの時に萠ざしてゐるといへる。丁度同じ頃ルテーネの人々がポオロランド人に對して暴動を起し血腥い殘忍にみちた光景が子供にある大きな印象を與へた。十二才にプラアグに移りそこではじめて獨逸語を學び、十七才に父に伴はれてグラズの美しいシユタエルマルクの市に移つて大學にはひり十九才で法學士になり二十才で獨逸史の私講師(プリヴアトドチエント)になつた。「すらりとしたやさしい青年、子供のやうな顏つき」と彼に學んだ人が後年言つてゐる。順調に進んだ彼は「カルル五世施政時のゲントの一揆」「ホンガリアの衰亡と墺國のマリア女王」の立派な論文を完成した。さういふ論文の中にもマリア女王の膝下に大の男がいかに意氣地なく征服されるかを叙することを忘れなかつた。シユリヒテグロオルは彼について形容してゐる。「燈火が蛾をひきつけるやうに女性を惑しひきつける男達もある。丁度これとあべこべに女性が蠟燭となつて男性が蛾となつて羽をやきつくす場合もある。ザツヘル

マゾホはこの蛾のやうな人であつた。

こういふマゾホ風の權威たる彼の戀愛がどれほどマゾホ一流の特色を燦然と發揮したか、彼の對照たる女がいつも貴婦人であつたのは面白いことだ。最初に羽をやきつくされた女はアンナ・フオン・コツトヴツツ夫人といふ醫者の妻で、「娼婦型の女ひと肌ぬぐといふ氣前もなく、浮氣でそのくせセンチメンタルなはにかみや」夫との結婚生活が不幸なため、若いマゾホをひきつけて慰物としやうとした、マゾホは遺憾なく完全にその虜となり、いろの〳〵いきさつ後女は夫と離婚し公然とマゾホと同棲するやうになつた。女はむら氣でふしだらで常識はづれでザツヘルにあがめて貰はねばぷんとするといふ、丁度彼の理想にかなつた女であつたこの女との共同生活中にはじめて世を驚がしたマゾホ風の小說「カインの遺言」の第一卷の「毛皮をまとへるヴヰナス」(一八七〇年)つゞいて「別れたる妻、一名理想論者の情熱物語」(一八七〇年)を出版した。彼の女から離れやう〳〵ともがいた、もがけばもがく程彼は女にひきつられるやうになつて來た。こういふ戀愛生活を續けてゐる間にもボグダノオフ公爵夫人の贔負を受けて、夫人の召使または秘書役の名義でフロオレンスへ一しよに旅行して、マゾホ風の屈辱を甘受したり、フアンニイ・ピストル男爵夫人と「ワンダとセベリンの位置」として有名になつた――女が毛皮の上衣を着てソツフアに坐り嚴格な態度でサドを見下してゐる一方、サドは物悲しくその足下にひれふしてゐる――寫眞をとつたり・ライチエンシユタイン男爵夫人と關係を結んだが、女が毛皮の上衣と鞭をもつ理想の女型でなかつたので別れたりして、飽くなき迄に彼のマゾホ風を追求してゐた。

次に現れたのはワンダア・フオン・チユジユで有名になつたオーラア・リユメリンといふ不縹緻無愛相で一點男をひきつける魅力のない二十六才の女で、マゾホが貴婦人と毛皮の上衣と鞭の愛好者と知つても戯談半分に彼を誘惑しはじめた。最初貴婦人に化けてマゾホを訪問し、次に將校夫人に扮して見事自分の足に接吻さして種々の折檻さへ承諾さした。その頃マゾホは前の醫者の妻とも別れてグラズの閨秀作家フラウエンフエルト孃と婚約中であつたのが、このリユメリン夫人に有頂天になり、孃との婚約を破談して子供まであるこの女と一しよになつた。結婚後すぐマゾホはその妻に鞭でぶつことを哀願したのに妻は肯んじなかつた、彼は妻が自分の理想の女型でなく前のは戯談半分の惡戯であたのを知り失望落膽し、妻の方も夫のあまりに氣味わるき病癖の所持者を發見し、二人の生活は非常に不幸と悲慘を加へて來た。そういふ悲慘の間にも肥滿で人目をひいてゐたさる猶太女を崇拜したりした。妻は夫にとう〳〵愛相をつかして逃げたので、彼はフルダ・マイマタアといふ女と友情を結んだ。女はしかつめらしい色氣のないやうな、その故あだつぽい老孃でマゾホを母親のやうに可愛がつた。マゾホはその女とつひに正式に結婚してリンドハイムといふ寒村に居をトした。附近の風景特に荒廢した塔が騎士の往來した陰鬱な中世時代を

思ひおこしてマゾホのすべての理想にかなつた。六十才一八九六年三月九日靜かにこゝで死んだ。

ザツヘル・マゾホは數々の小説を殘した。「カインの遺言」(Vermächtnis kains)の一卷としての「毛皮をまとへるヴヰナス」(Venusim pelg Die)、「別れたる妻、一名理想論者の情熱物語」(Deschedtene Frau,passionsgeschichte eines Idealisten)遺稿として殘つた「殘忍なる女」(Grausame Frauen)等がその主なるものである。

墺利太の閨秀作家某が、 ザツヘル・マゾホについて次のやうに書いてゐる。

「わたしは未だほんの小娘の頃あの「カインの遺言」で非常に感動されて、ザツヘル、マゾホ先生に手紙を認めまして、兎に角無名の素人ではあるが創作上助言を惠んでほしいとお願ひいたしました。先生はわたしに大そう懇切にお返事くださいまして二人の間の手紙のやりとりが一年近く續きました。手紙で想像しました先生は非常に親切らしい氣持のよさそうな夫としては忠實な父としては慈愛にみちたお方であつたやうでございます。併しわたしは女に鞭でぶたれるのがこの上ない幸福と思ふと手紙の中で公言してありました。一年後先生は維納へおいでになつたついでにわたしをおたづね下さいました。もう秋だつたので毛皮の上衣をきずにおもてなしをしたのを先生は非常に不服にお感じになつて毛皮の上衣をつけて鞭でぶつてくれとわたしにお頼みになりました。わたしは冗談半分にあなたは本當に骨に染みこむ位の痛さが御注文ですか、と尋ねましたらそうだといふお返事でありました。……わたしはこの最初の會面會で非常に不可思議な印象をうけましたが、この一方面の奇癖をとりのけてしまふと、先生は面白い淡白な同情心に富んだ人であり、自分のお子供衆に對しても溺れる程の濃やかな愛をお示しになつていらしやいました。」

こういふ材料からマゾホが非常に可愛い同情心に富んだ男であつたことがわかるが彼の病的の奇癖はどこから來たか。オイレンブルグ博士によると。一般にスラブ民族は戀愛といふものは一つの闘爭で、兩性のうちのどちらかが征服されなければならぬ、この闘爭では女性が常に强者であり勝利者であり女性は天稟が裕かで意志の力が强いと信じきつてゐる。マゾホは明らかにこういふ環境に育てられたのだ。こういふ地盤に加へて、マゾホは天性抵抗力が鈍く、意志薄弱の人間だつたので、創作の上でも處世の上でもそれが非常な影響を及ぼしたのだ。

マゾホを詩聖ゲーテに比較しやうとするある獨逸の學者にたいしてオイレンブルグ博士は猛烈に反對してゐる。ゲーテは何をやらしても立派に仕遂げる天才的の詩人の上に處世方面から見ても模範的であり。自己完成といふ點からは實に我々の師表と讃へることが出來る。ところがわが哀れなザツヘル・マゾホ先生はどうかといふに、あのファストの有名な箴言「„Die Poesie zu Kommandieren 詩を統御す)から見ても、さらに私的生涯を脅そうとする力をぐつとくひとめる事が出來なかつた點から見ても、誠に詩聖ゲーテと比肩さすのはもつたいないと、結論を下してゐる。

フアスシスチー

—近狀、本體、並にその將來—

新居格

はしがき

伊國の目下はフアンスチー大得意の時代である。僕は本稿に於いて、その近狀と、その本體とを概說し、その將來に就いて若干の考察を加へてみたいと思ふ、たゞ本文に入るに先だち、この問題と關連して一言敢て前書きして置きたいことがある。極く簡單な事であるに過ぎない。近頃我國の新聞紙でフアスチーのことを伊國國粹黨と書いてある事である。云ふまでもなくフアスチーは國粹的傾向を持つてゐる、それ故に國粹黨と云つても、ボリシエビキ（多數派）を過激派と譯するほど不自然ではないと思ふ。しかし過激派の文字が相當多くの誤つた想像を人々に描かせたと同しやうにフアシスチーを國粹黨と名づけることによつて多少とも餘計な概念と影響とを生むかも知れないと思へるからである。

同し國粹の名で呼ばれてもフアスシスチーは日本の國粹會なぞとはその構成分子なりその狀態なりが全然違つて居る。例へばフアスシスチーの首領ムソリニーは元を質せば極端な社會主義者であつた。また同黨には外くのサンデカリストも居る。それだけでも違つて居る。フアスシスチーを伊國國粹黨と云へば簡單明瞭でハツキリするやうではあるが僕はそうした言ひ表はし方をすることに仍つて幾分でも不正確な概念と想像とを伴生すること欲しない。であるからフアスシスチーは、矢張り、その名で呼ぶ方がいゝと思ふ。

それからもう一つは、國家主義者の無反省な速斷に就いてゞあるが、一例を擧げてみると最近土耳古のケマール・パシャ大にその國のために氣勢を昂げ、ムソリニー伊國で頻りに振ふのを目して直ちに世界思潮に轉期が來たのではないかと誤信し勝ちな點である。虐げられて來た無産階級がその本然の生存權と人間的見地から解放を求めるのは必然の合理であつて斷じて一

時の氣紛れや、流行でないやうに國際的に、多年の間、虐げられて來た土耳古が國際的無産階級の立地から民族としての生存權をケマールに仍つて要望したものと云へるのである。それが近代思想に即した解釋であらう。所が國家主義者はさうした局面から物を見ずして土耳古の問題を國際運動の側から計り考える。フアスシスチーに就いても同樣であらう。

而して合理と正義の近代思想を曲解して惡傾向として國家主義國粋主張の上からやつけるのがいゝと考へるその意味に於いて土伊兩國の近況は彼等を喜ばすに足り、且つ元氣付ける。特にフアスシスチーを伊國國粋黨と轉譯するやうな場合、特にさうかも知れない。

であるから、僕はその譯語を使用しないで、たゞフアスシスチーとして紹介する方がいゝと思ふ。

一、伊國政局の推移とフアスシスチー

去年の夏（八月三日）フアスシスチーと社會黨及び勞働總聯合の代表者が羅馬に集合して平和的協定をしたことがあつた。しかし、その商議の効力を持たうとは信ぜられなかつた。果せるかな、その後の事實はこれを裏付けるに十分であつた。これまで闘つて來た黨派は相變らず戰つた。少くとも、反目的對峙は續けられた。而してフアスシスチーにたいして一番多く衝突したのは共産主義者の一派である。政府も三月にはフアスシスチー系の壯士約一千名を捕縛し共産主義者もそれに應じて投獄した位である。兎に角フアスシスチーは社會黨特に共産黨とは敵對地位に立つてゐることを何よりも先づ記敍せねばならない。

而して本年二月二十六日に成立したフアクタ内閣から着筆することにしよう。

この第一次フアクタ内閣はかなり短命（百五十日足らず）で倒壞した。フアクタ内閣は右黨の諸團體（自由黨保守黨ナショナリスト及びフアスシスチー）を排斥した、民主黨と加特力黨との聯立内閣であつた。それは加特力黨の志向であつた所から同黨は社會黨の援助を求めた。その點で、フアスシスチーは共産黨、社會黨を惡むと共に加特力黨にも好感を持つことが出來なかつた。

五月下旬、羅馬に於いて共産黨員とフアスシスチーとの間に市街戰があつた。總同盟罷業も「勞働總聯合」によつて宣言され——（それは勞働者がその宣言に應じなかつたので失敗した）それと同時に各地にも多少の同盟罷業が行はれたが、それに對抗してフアスシスチーは社會黨の諸新聞を襲擊しやうとした。しかしそれは僅か警察官の巧妙なる干渉で沮止されたやうに記臆する。所が七月になつてフアスシスチーは加特力黨とクレモナ市で衝突した。共産社會黨は直接には政府の不取締を攻擊し

間接に、ファスシスチーにたいする反情を明示したためにファスシスチーはそれに應戰する氣勢を緊張させた。第一次ファクタ內閣瓦解の原因はそのためであると云はれて居る。かくしてファクタ內閣は百三對二百八十八の不信任投票となつて七月十九日に倒壞したのであるがファスシスチーの首領ムソリニーはファクタ內閣の辭職に際し、下院に於いて斷乎として言明する所があつた。

それには決意と恫喝の響が伴つてゐた。彼は云ふ、今後ファスシスチー黨の執るべき手段は二つ、合法的手段が、直接行動かである。後者に就くならば議場に代表者を送る必要はないのだ。しかし、常識ある人間として予は前者を選ぶ。けれども、時と場合によつては、何をするか分からない。それ故に、今後成立する內閣はその性質が何であれ我等に銃を向けて貰ふまい我輩の手には訓練ある兵力がある。從つて、壓迫があれば反抗はすると。

彼の如上の聲明は反對側から非難を浴びせかけられた。「政治的、道德的觀念の顚倒である」とか「誇大妄想である」とか云ふ言葉が反對者の批評であつた。

然るに七月下旬ファスシスチーは又もや社會黨と衝突をしたのであつた。

七月十九日辭職したファクタ內閣は直ちに後繼者がない所から八月一日ファクタは閣員五名を新にして內閣を再組織したのである。

七月末に發生したファスシスチー對、社會黨の衝突にたいして、右の二黨はそれ〴〵の立場から、政府の取締が不徹底を攻擊したが、ファクタは却つてその責任は兩黨にあつても政治にはない。政府は特に誰彼の區別はつけない。たゞ法律の勵行と秩序維持とを努めればいゝ。と二黨からの攻擊を切り返した。そのためにムソリニーは挑戰的聲明を再びすべく餘儀なくされた。「わがファスシスチーは爾今、政府の援助をお斷りするまた議會が社會主義に贊成するならば吾々は叛徒となる積りだ」

然かるに、程なくチエーリン、ゼノア・ボロニアの各地に於いて戰鬪が勃發し、反ファスシスチーの總同盟罷業も續出したのでファスシスチーは政府當局の秩序維持に反對し、黑ジャツの黨員はコンミユニストの俱樂部 職業紹介所等を破壞し、各市の社會黨市吏員、市會議員等を全部辭職させ、ゼノア、ミランの市廳を一時占領し、アバンチー社を再び燒いたのもその月の出來事であつた。其時、勞働團體であつて社會主義聯合會を脫してファスシスチーに加盟したものも少なくなかつたとさへ報道

された。

かくてフアスシスチーは益々その勢力を得、十月上旬には政府の對壊態度の柔弱をもどかしがつてトレンチノ及びボーゼンを占領しトレンチノの總督クレダロの辭職を强制した。二十五日にフアスシスチーはナポリに大會を開き、フアクタ内閣に向つて内閣割込みか議會を解散して總選擧を行ふかを政府に要求したが、その内閣割込が重要なる五箇の椅子であり、それを容れないならば戰鬪開始の全國的動員令を宣言し何時でも羅馬への進軍を用意し、氣鋭の黨員は各地各市の包圍占領をし初めたので政府はそれに對抗して全國的戒嚴令を出すことを決意したが皇帝がそれに署名を拒んだのでフアクタ内閣遂に崩壞した。

かようにして伊國の政變は行はれた。そうしてフアスシスチーの首領が政權を握つたのである。

以上は本年に於けるフアスシスチーの行動特に政局を中心としてフアスシスチー黨が政權把握に至るまでの大體の記叙したものである。

二、事件と考察

前叙の事實を通じて考察を加へるとき著しく氣付く事はフアスシスチーが政治に着目したことである。フアスシスチーは・併合地を民族化する、云はゞイタリ・アイルレデンチズムを心に持つてゐた。無論對獨戰爭を起端として發生したもので從つて帝國主義的膨張と對外的愛國的情熱とが最も强かつたのである。所が大戰後殊に一昨年九月の工場占領事件以來革命防止のために共産黨及び社會黨を正面の對敵として戰ふに至つたのである。大戰中と雖フアスシスチー團が戰爭讃禮の立場から非戰的主張の社會主義を嫌疾したのは云ふまでもないことだが戰後は對外の敵を失つてから對外の抗敵—社會黨、共産黨—にたいして全力を擧げた。その手段はムソリニなぞが以前社會黨員並にサンデカリストであつたことから習得した戰術と、軍隊から得來つた訓練とを結合したものであると云へる。それによつて社會黨を壓下したのである。本年に入つてのフアスシスチーの新しい着目は政治であつた事であると思ふ。

次ぎに注目すべき事はフアスシスチーと勞働との關係である。フアスシスチーと勞働團體との關係はフアスシスチー團がヒウーメを占領せんとした時から既に初まつてゐる。例へばギウリエッチーによつて統率されてゐた海員組合がフアスシスチーを支持してゐた。一昨年九月の工場占領に際して社會黨が弱氣であつたために勞働者の革命的の意氣沮喪を與へられ却つてフアスシスチーに傾いたのも事實であらう。カアレトン・ビールスの説明によれば本年の八月の幾日間かに行はれた總同盟罷業

の失敗は内部の仲間の間の不一致もあつたが、勞働者の態度の一變と新に組織された全國的ファスシスチー勞働組織の驚くべき勢力に基因すると云つて居るのである。この事は後述するがとにかく最近のファスシスチーに就いて政局的着目と共に留意すべき他のものではあるまいか。

三、ファスシスチーの實相

ファスシスチーの首領ベニト・ムソリニーは元は極端な社會主義者であつたが、對獨戰爭開始の前後から急轉して辛辣極まる社會主義の憎惡者とたつた所を見ても彼が如何に熱情家であるかが分かると思ふ。本年三十八の壯齢で六尺豐かな巨軀の所有者である。ファスシスチーには舊出征軍人や國家主義的の狂熱な青年が多いがそれら計りでなく、隨分いろ〱の種類のものを含んでゐる。例へば、エンリコ・コルラヂニーや、ピエロ・マリシテに依つて代表されてる國家主義者があつたり、アルセステ・デ・アムブリス、リアンドロー・アルピアニー、及びセザーレ・ロツシイ等に依つて率いられるサンデカリストの一派もある。

彼等は何事にでも協調が出來るものではない。むしろそれ〱に特異の傾向を示してゐるのである。たゞ、直接行動と云ふ共通の戰略的傳統に於いて一致しうるだけである。特に、サンデカリストの方では個人主義的乃至無政府主義的教説に浸透したものまた、伊太利社會主義者の領袖に滿足しない勞働者に訴へるにはファスシスチーによつて開展された勞働綱領によるより外はないと思つたからである。かくてファスシスチーは勞働的傾向の一面をも持つて來た。しかし、ファスシスチーの形相はまだ〱多樣多種であるやうだ。これを細説するならば、トリエストに於いてはイルレデンチストである。ヴエニスに於いてはファスシスチーは國家主義者であり保守派である。ブグリアでは評判の悪るい政治團體と聯合してゐるのでマヂエリスモと云ふ嘲罵的名稱をさへ與へられ、ボレシニヤロメリアでは赤化無産階級と正面に反對するので純粹ブルジョアであると思はれてゐる。又パルマでは共産主義者として告發されて居り、アドリアチツク地方では土地分配を綱領とする農民一揆になつて居る。

ファスシスチーがビールス氏の指摘したやうに右の如き諸形相を包括するものならばファスシスチーの本體は極めて雜然漠然たるものと思はねばならぬ。特に、農業勞働者はファスシスチーに加盟し本年一月ボロゴナに於ける全國ファスシスチー大會に於いて全國サンデカリズム聯合(La Confederazione Nazionale delle Corporajioni Sindicali)をさへ組織した位である。その傾向は農業勞働者に止まらず、工場勞働者にも及んだと云

ふ。誇張かどうかは知らぬがフアスシスチー所屬勞働者は七十萬と稱してゐる。

かくて多くの「勞働協會」（Camere del Lavoro）は國民的サンデカリズム團の手に移つて行つた。フアスシスチー聯盟の書記ロツニーの報道する所によればノヴイ・リグレでは赤色組合（Sindacali rossi）の三千人は何れもフアスシスチーの地方團體に結合したと云ひ、社會主義者自身もクレモナでは農業勞働者の九割はフアスシスチーに屬したのを承認してゐる。

一年前にサンデカリストの一領袖であつたウンベルト・パセラは遂にフアスシスト黨となつたが、彼は農業勞働者と云はず、工場勞働者にしろ、海員にしろ、その數の半ばフアスシスチー黨であると計算してゐる。僕は以上の計數はフアスシスチー黨員又は同黨に改宗したものの言葉だから悉く信ずる事は無論出來ないと思ふけれども、何れにせよ、勞働者の一部にはフアスシスチーに所屬するものが相當多數に出來た事を否定は出來ないと思はれる。

此等の事實を綜合するとフアスシスチーは必ずしも舊出征軍人、國家主義的青年等に限られてゐない事は明かである。たとひ、フアスシスチーの事の起りが國家主義的强調から歩みを取り出したにしろ從つて社會主義、共産主義を仇敵の如く憎惡したのであるにしろその後、該運動の結果は慥かに廣ろい方面に波及し遂に勞働者を相當多數に包攝するに至つたのであらう。勞働者特にサンデカリスチツクな情熱的勞働者の一部がフアスシスチーに至つたのは前述したように工場占領時代に於ける共產黨特に社會黨の弱氣にたいする反動ではなからうか。その意味に於いてもフアスシスチーが反動的運動であると云へる。しかし單に國粹黨の名に於いて概念する事は狹き過ぎはしないであらうか。

それを繰言するなら、フアスシスチーは社會主義にたいする國家主義者の國粹的反動と、而して意味は多少違ふが矢張り、社會主義特に社會黨の因循にたいする一部勞働者の彈劾的反動との結合と思へないであらうか。

又政治的に見れば諸政黨徒に分立してそれを巧みに操縱する妥協的政治狀態にたいする、保守的ながら一本氣の非妥協的反動とも思へるのである。

しかしながらそれは實に伊國全土を荒れ廻はる一揆の如くにも見える。慥かにその點もある。又社會主義者の見る如き白色恐怖であり、資本主義者に雇はれた同盟罷業破りの觀もある。又立憲諸政黨の考えるやうな法的手續を破壞し、憲法的保障を蹂躙する所も大にある。要するに反動的暴力主義の團體である

事は事實だ。たゞこれをアメリカのクー・クラックス・クランに比すればそれが隱晦なる秘密行動をするに反してこれは公然的である。細かい且つあまり必要でない事だが、ユニホームはクー・クラックス・クランの白衣にたゞしてこれは黑シャツである。

四、ファスシスチーの將來

今ファスシスチーは政權を掌握してゐる。而して近かく議會を解散しやうとしてゐる。ファスシスチーを代表して議會に席を有するもの僅か十數名に過ぎず、國民主義者と合計しても三十五名乃至四十五名と云はれてゐる。かくの如き少數を以つてして內閣を組織した事は立憲的政黨員の云つた如く違憲の事であり代議政體の危機であらう。しかし大命降下した今日それをとやかく云ふ必要はない。ファスシスチーは元々非法の存在であるのだから。實際問題は來るべき總選擧に於いて多數の代表者をかちえるかどうかの一事である。次ぎに彼等が社會黨に代つて多數を得たとした所でどうなるであらう。

更に多數を得てその反動的果斷政策をつゞけて行つた場合、伊太利はどうなる。

ファスシスチーの成効は狂暴にして烈々たる熱情の勝利であつたその熱情は果して何時までつゞくであらうか、僕の見る所では必竟一時の變態的反動である以上決して永續すべきでないと思ふ。

次いで財政々策に就いてであるがラッセグナ、イタリアナ紙が曾つてその社說「孤立の伊太利のなかで、現在のところ、伊太利の計畫に投資する危險に就いて歐諸國の意見特に瑞西の財政家が伊太利を呼ぶに最も危險な國と云つたのを引用して論じたが若しそう云つたやうで伊太利の財政狀態があるならばムソリニーの諸經費削減の方針はまさに適切と云へるかも知れない。しかし、それだけの事を以つて反動內閣が長く伊太利を支配しえやうとは思へない、殊に、外交問題では實に多くのあぶなけを持つてゐる。

ヒウメ問題が先づそれであらう。ダヌンチオとヒューメ、ダヌンチオとムソリニー初めファスシスチー諸領袖との相關關係を考へるならば誰がヒューメの獲得計畫が再び企てられないと云へやう。墺國に對してはどうだ。現に十月上旬にファスシスチー黨は政府の對墺政策が寛大過ぎると云つてトレンチノやボーゼンを占領したではないか。加之、トレンチノ總督クレダロダ獨逸種のチロール人を保護してゐると云ふだけの理由で總督の辭職を强要した位だからそのファスシスチー內閣であつて帝國主義的野望が頭を擡げることが全然ないと云へるだらうか。こ

の反動内閣が兎かく續き相にもない點はそこにある。

然らばフアスシスチーと伊國勞働の將來はどうであらう、前述したやうにサンデカリストや、農業勞働者の或る人數がフアスシスチーの勞働組織に加盟した所でそれで何時までもそうでありえるだらうか。

ボログナに於けるミセル・ビアンチーの提出しかも贊成の多かつたフアスシスチーの新勞働組織の決議案を見るがいゝ。（一、）勞働は祖國に忠實であるべきこと（二、）勞働はすべての革命的、インタアナショナルな加盟から引離すべきこと（三、）勞働は革命よりも組織と教育によつてその目的を達成することをうべし（其他數項省略　まづ、ざつとこんなものである。これが果してサンデカリストが本當にスピリットあるサンデカリストであるならば甘諾しうる條項だらうか。フアスシスチーの暴力主義とサンデカリズムの暴力説とは形式は同じ暴力であつても思想が違ふ。分かれる日がやがて來るであらう。一般の勞働者だつて同じことと必ず再び蹶起する日が來る。況んや、解黨した最も勇敢なる共産主義者は何を考へるか看物である。

今の所、フアスシスチーは人旺んにして天に勝つてるとでも云ふのであらう。天さえ定まれば問題はないのである。詰り、フアスシスチーはその間の勢力であるに過ぎないのである。

五、フアスシスチーと未來主義

餘論になるが僕はマリネッチーの未來主義とフアスシスチーの行動を比照してみる興味を持つてゐる。マリネッチの宣言に戰爭、軍國主義、愛國主義、無政府主義の破壞行動、殺戮の美はしい思想を讃美せんと云つた一條がある。又イタリアに於いてこそ筋斗的の放火的な暴力の宣言書を投げることを書いてある。

しかし、僕等は近代意識に即しない一切の暴力を輕蔑する。フアスシスチーもその意味で遂に吾人の輕蔑は免がれないものである事を附言して筆を擱くであらう（完）

レーニン會見記

モスクワより　吉田一

レーニン！といふ文字を書いて玄關の鴨居に貼つて置け、泥棒除けの御符になる。いや決して唯の冗談ではない、嘘だと思ふなら試しにやつてみろ、きつと巡査が張り番をして呉れるから。

實に、今の世界に於て、レーニンほど深く恐れられ、そして、レーニンほど深く愛せられてゐる人間はあるまい。といつて彼は、膂力衆に優れ、一掴みに人間の首を引つこぬくといふやうな鬼の生れ代りでもない。といつて又、世界一の人道主義者でもない。眞紅に染つた地球の一角からヌツと首を突き出して世界を睥睨してゐるやうに見るのは、それは資本主義者の恐怖の幻想である。彼を愛するロシアの勞働者にとつては、彼は愛の使徒ポーロの生れ代りでも何んでもない、五尺四寸餘のあまり見榮えのしないスタイルを持つた唯の人間である。レーニンは實は唯の人間である。彼の頭から後光が射さない證據には、彼は無神論者。彼が奇蹟を操る手品師でない證據には、彼は生粹の唯物史觀の信奉者。ロシアの民衆は、後光を拜したり、手品に隨喜したりして彼を愛するのではない。ロシアの民衆は、自分の信頼すべき同志として、且つ自分と等しいなみの人間として、タブリツシ（同志）レーニンを愛するのである。

俺は、日本に居たときは××××を以て任じてゐた。そして今もそれには少しも變りがない。が、日本に居て眺めたレーニンと、革命ロシアで實地に會つたレーニンとを、同じ×××××の眼に映つたものでありながら甚だ多くの違ひを存してゐる。俺が日本に在つて眺めたレーニンは、恐らく或る種の人達に共通するレーニン觀であつたらうと思ふ。それによれば彼は、革命の實行者でありながら理想の阻止者であつた。革命は援くべし、レーニンは逐ふべし、革命の事業と、レーニンの行動とは之れを一つに考へてはならぬといふのであつた。單的に言へば彼は、革命の一つの反動分子であつた。從つて彼は、ロ

シアの民衆を支配する者であつて、ロシアの民衆を代表するものではあり得なかつた。すべてそれ等の考へは、今俺の頭の中から綺麗に拭ひ去られてゐる。さうなつたに就いては、ボルセヴイキの理論に對する一アナキストの態度の變化が根本を成してゐるのは言ふまでもない。一言にして言へば、××××××の唯一つの常道をロシア×××上に承諾するのである。

ロシアの民衆はレーニンを愛する。レーニンを愛すると同時に×××指導者等を愛する。民衆がその革命の指導を愛する尺度は、そのまゝ彼等が××を愛する尺度である。レーニンのみに就いて言へば、ロシアにとつて彼は××の最も有要な頭腦であり、最も英邁な意志である。その頭腦とその意志は、燃ゆるが如き××の熱情の固まりである以外の何ものでもない。そして、レーニンのその人格といふ上だけに限つても、何人もこれ以上の革命の熱情を見ることは出來ないであらう。彼の人格はそのまゝ革命の事業である。その人格、その事業は、極めて非支配的な立場に在つて、革命に進行を與へる爲めに全力を傾注するほかに餘念がない。革命を支持する者は勞働者を措いて他にないが、それに最も正しい先見と方法とを與へる者も必要である。ロシアの民衆は、それを偶レーニンに見出してゐる。たとへば新經濟政策の問題にしても、事實を見た者にとつてはそれが如何に避くべからざる必要によつて生れたかゞ判る。新經濟政策が餓死か?! ロシア一億五千萬の人間は理想を抱へてブランドのやうに死んでゆくわけにはゆかない。レーニンにブランドの氣魄はあるとしても、一億五千萬の民衆を見殺しにする勇氣はなかつたに違ひない。永遠の理想を抱いて資本主義のもとに死んでゆくことが本意でない限りは、××××××如何に困難なものであるかを思はなければならぬ。ロシア革命の現實を見、そしてレーニンその人に面接した者は、たとへ彼のアナキストならざるを憾むことは出來ても、×××××に彼を再び咒咀することは出來ない。蓋し、如何なる理想も、××××××××つの常道の彼方にのみ望むことが出來るのである。レーニンがボルセヴイキに止まるならば、アナキストはその先へ進むことに努めよう。しかし、民衆とパンとの關係が絶對である程度に於て、ロシア革命とレーニンとを二分することは出來ない。それは又、ロシアの民衆と革命の事業とを切離すことが出來ないのと同様である。

彼は經濟學の大家、俺は鍛冶職工、そしてその間には才能や天分の大きな懸隔があるかも知れないが、相撲を取つたら此方の方が強いかも知れぬ。このレーニン會見記は、唯の人間レーニンを唯の人間俺が眺めたといふ以外何んの變哲もないのである

××××を告げて二日目、ホテル・リウクスの一室で、會合責め、議論責めの身體の疲れを一寸の間休ませてゐると、片山の室から電話が掛つて、徳田と一緒にすぐ來てくれといふ。革命ロシアのタアリツン共は、永年の秘密運動から來てゐるのか、何んなことでもその當事者以外には話さない。その習慣が俺達をも捉へて、何事も行つてみなければ用向きを知ることが出來ない。そこで徳田球一はと索したが何處にも見當らないので、一人だけで片山の室へ出掛けて行つた。

ノツクすると『カム・イン』と型の如く答へる。ドアを開けて、ある厚縁のセルロイド眼鏡を見るまでがすべて型の如くだ。大きなテーブルの上に、娘のヤス子さんのダンス姿と日本服を着た姿の二葉の寫眞を飾つて、それを眺めて暮らしてゐる老片山の氣持ちが、ノツクするから眼鏡を認めるまでの型の如く短い過程に、俺の心をチラと掠める。殆んど全生涯を悪戰苦鬪に疲らした彼は、今にロシア民衆から多大の尊敬と親とを以て迎へられてゐるが、しかし、之れを以て彼を得意の絶頂に立つ人のやうに考へるのは至當でない。ホテル・リウクスの一室に、アメリカから連れて來たユダヤ人の婦人共産黨員の書記――（この婦人は日本に歸つてゐる某共産主義者の未來を誓つた情人である。彼女はその戀人に憧れて見るも傷ましいほどに胸を燃やしてゐる）――を助手にして、頻りに原稿を書いたりタイプライターを打つたりしてゐる彼は、それに疲れるとメキシコの潜伏地以來女房のやうに連れ添つて來た大トランクから最愛の蓄音器を取り出して、一人で耳を傾けるのだ。何處までも敗けぎらひの頑固さを、コチンと角張らせた身體つきにまで見せて、セルロイド眼鏡の底からギラギラと眼を光らせてゐるが、蓄音器に耳を傾けてそれに淡い慰安を見出してゐる彼を見ると言ひ樣のない淋しい面ざしが感じられる。思はず片山のことに暇どつて、ドアを開ける間が長くなつたが、兎もあれ、ニツコリともしない彼の顔が、俺の顔を、待つてた、といふやうに迎へてゐた。そこには、もう一つの顔――田口運藏の顔もツクネンと此方を向いてゐた。

俺が椅子を引寄せて座らうとする間もなく、片山と田口が立上つて、片山が俺にベラベラと英語で話しかけた。『カム・イン』さへ覺え立てのホヤホヤである俺に、英語で話しかけることは猫に說法ほどの御無態である。俺がポカンとして、それから笑ひ出したら、片山も始めて相恰を崩して笑ひ出して、それから日本語に言ひ直した。アメリカに十八年も居て、誰れにでも英語で喋りかけてゐた癖を、彼は時々俺達の前で發揮する。所

で、彼の言ふのは、これからサハロフの室に一緒に行けといふことなのだ。俺は、何んの爲めに行くのだといふことを訊ねない。恐らく彼にも未だ判つてゐなかつたのかも知れない。

サハロフ——彼はモスクワ政府の極東部の中心人物で、俺達の接待委員長といつた格である——から、レーニンに面會に行かうと言はれたときは、少々間誤付いた。レーニン！レーニン！といふ調子に胸が波を打つ。何の糞！レーニンが何うしたんだ！と力み返してみたが、どういふものかレーニンといふ名前は俺を威壓する。此の同じ室には、俺達に前後して、レーニンとの面會に先方から指定された×××の連中がやつて來た。『この人數以外の者には絶對に知らさないこと』といふ約束で、そこからコツソリとホテルを出た。同勢は、ロシヤ側、シマスキー（極東共和國人民委員長）、サハロフ、ジノヴイエフ、グリゴリ（此の男は上海へ出張してゐた時分日本の或る人物と數日間に渉つて議論を戰はしたことがある）、チエレン（サハロフの秘書）、以上五名、×××、片山、田口、俺、（徳田は不在で參加不能）、以上三名、朝鮮、支那、蒙古の代表者中から二名宛、及び以上三國青年共産黨の代表者二名宛、ジャパ一名、朝鮮、蒙古兩國の婦人代表者二名宛、支那同一名、それに各國毎にセクリタリが一名宛附き添つて、合計二十六名である。それが廿人乘位の大型自動車に苦も無く載せられて、クレムリンへ向つたのだ。自動車の上で、俺は頻りと考へた。——はて、レーニンの親爺に何を言つてやらうかな——と。

クレムリンの城門前で自動車から下ろされる。同勢が、番兵の前へ整列させられて、それをジノヴイエフとシマスキーが番兵に代つてパスの檢閲をやる。さうしてジノヴイフが番兵から、よろしい、といふ許しを得て、また自動車に乘込んで城門を潜つたのである。それは、そのときに限つた經驗ではないが、ジノヴイエフほど知られてゐる人間で、而も宮殿内に住んでゐて毎日出入りしてゐる者には、番兵ももう少し寛大な處置をとつたらどういふものかと思はれる。が、そこが面白い。一人の赤衛兵の前に、ジノヴイエフの權威などゝいふものは個人的にも社會的にも特に顧みられはしないのである。宮殿まで廿丁ほどの間、ダラダラとした坂である。はじめてのクレムリン見物のときには、その坂の踏み固められて灰色になつた雪の上を、イルクツクで貰つた防寒用の毛皮の長靴で、三人、五人と腕を組み合せながら歩行したのだ。其處はウツカリ一人で歩くと、無様にデングリカヘシを喰ふのだ。それで腕を組み合せて身體を支へつこをしながら進んだものだ。しかし、自動車はその上を瞬く間に走つて行く。

道の途中に、歩哨小屋とも見える小さな建物がある。その戸外に劍付鐵砲の二人の兵士が立つてゐて、再びパスを檢閲する。それが濟んで通過させるとき、一人の方が呼笛を鳴らす。通過を許したぞ！といふ意味を、次ぎの臨視所まで傳達するのだ。宮殿に着く。ジノヴイエフの先導で、入口でパスを見せて階段を上つてゆくと、勞働者の共同生活をしてゐる幾多の室がある。此處は、極貧の勞働者が收容された所で、今は、極めて衞生的な、規律立つた生活を營み、それぞれの職業に從つて工場や仕事場に通つてゐる。その數五千餘人。その他此處には政府の吏員や、赤衞兵が住んでゐて、一個の自治的な都市を構成してゐるそれらがすべて共産的な食事をするので、食堂の數ばかりでも非常に多い。其處を通り切つて階段を上る。その上りきつた所に、婦人の共産黨員（といふことを後で聞いた）が、二人立つてゐて、パスを改める。最後の三階の階段を上りきつた所にも、同じやうにパスを改める婦人が立つてゐる。或る室の前までゆくと、劍付鐵砲の兵士と婦人が三人立つてゐた。その室のドアを開けて中にはいる。ガランドウの室で、又も婦人が立つてゐる。またそれを通り拔けて次ぎの室にはいる。矢張り同じやうな室だ。さういふ風にして三つの室を通り拔けた。何んの爲めに斯う幾つもの室を通らせられるのか一向に判らないが、狐につまゝれたといふのが一寸こんな感じだらうと思ふ。お蔭でレーニンの室の位置などは少しも概念は殘らない。或ひはそれが目的であつたのか。俺はあとでその理由を訊ねてみたいと思つたが、馬鹿らしくなつてやめた。兎もあれ、婦人共産黨員其他が斯うまでもレーニンの室を嚴重に衞つてゐるのを見ると、常に危險が迫らうとしてゐて、寸時も油斷が許されないものであるらしい。またそれは、彼の精神が如何に深く愛せられ、彼の生命が如何に厚く尊重されてゐるのかの適證でもあらう。俺達はさうして、第四番の室に導かれた。婦人が七八人に男が三人居た。そこでチエレンが、俺達に向つて、外套を脱いでくれと言つた。言ふまゝに外套を脱ぐと、寒さがシンミリ肌に透る。スチームは通つてゐるのだらうが寒い室である。ジノヴイエフとサハロフが、俺達を殘して出て行つて、暫くしてまた現はれると同時に、來いと手招ぎした。この手招ぎが又註釋を要する。ヤポン式に五本の指を擴げて、掌を下に向けながら、おいで、おいで、をするのでない。ロシアの手招ぎは、拳の食指だけを伸して、それを上向きに立てゝ、内側を自分の眼の方へ引くやうにして振るのである。俺達は、ソロソロとその室を出た。そこは狹い廊下で、それを左へ七八間歩いた。ジノヴイエフがそこの室の前に立ちどまつてドアに手をかけた。

レーニンの室だ！さう俺は直覺した。ジノヴイエフを先導に同勢はゾロゾロとその室にはいり込んだ。俺の身體がドアを抜けて、室の正面と直覺に向ひ合つたとき、俺の視線は一個の人の姿を捉へた。レーニンだ！寫眞で見てゐる顏の印象を、眼のあたりの人物の顏とを引き比べて、何處かでさう叫んでゐた。

しかし、寫眞の顏とは何處かに共通點があるといふだけで、肉眼に映つたレーニンは、全く新しい印象を俺達に投げてゐる。俺はその刹那に、何かゝらスーツと解放されたやうな氣がした。唯、これだけの顏を見るために、何んといふ無駄な想像をして來たことだらう。そしてその想像の中に威壓を感じてゐたといふことの何んと馬鹿らしいことだつたらう。俺はさう思つたのだ。其處には、柳原でなら廿圓足らずで買へるだらうと思へる着古しの紺の詰衿服を着た、一見、練馬村あたりから大根を擔いで賣りに來さうな、二足三文の値打ちも無い田吾作親爺が居るのである。その詰衿の上に、天邊はテカテカに禿げて、鉢巻きの下から毛が見えてゐるやうに、まはりにだけ薄赤い毛をチヨロチヨロと生やしてゐる頭が、無雜作にのつかつてゐるのである。現實は、俺達の求めて來た相手を、斯うして眼前數尺の間に無雜作に曝してしまつたのである。

レーニンは、大きな頑丈さうなテーブルを二脚並べたのゝ右手の方に、硝子窓を背にして腰をかけてゐた。彼の背後に見えてゐる椅子の凭木を見ても、それは椅子のうちの最も普通な粗末なものに違ひなかつた。テーブルの上は綺麗に片付いてゐて、片隅に書籍が卅冊位重ねて積んであり、原稿紙とペンが手近に置かれてあつた。そのそばに、高さ八寸位の小さな銅像——一方にカナシキがあつて、左手に工具の先端を掴つてゐる勞働者がハンマーを振りあげて今しそのカナシキの上に振り下らさうとしてゐる姿の銅像が据えてあつた。それは、ポスターなどで至る所に見受ける構圖のもので、即ち、ロシアの社會が建設中であるといふ意味を寓してゐるのである。

『タアリツシ・レーニン』ジノヴイエフがさう言つて紹介の勞をとつた。俺達はレーニンを半圓形に圍んでゴチヤゴチヤに居流れた。『タアリツシ・×××・×××』セクリタリがこの中での各國別の代表者をレーニンに紹介した。椅子が足らなかつたので、腰掛けた者と立つたまゝの者とが出來た。その間、彼の顏はニヤニヤと笑ひづめであつた。廣い額とはあまりに不調和な、今にも眠つてしまひさうに細い眼が、笑ふときはその眼尻さへも下げて、またその眼尻にクシヤクシヤなシワさへも寄せて、高砂のお爺さんが悦に入つたやうな顏をする。そのニヤニヤをやめたときには、芝居に出てくるお染久松の久作爺さんの

やうな愚直さが現はれる。
『タアリツシ』彼は眼を一層細くして、前かゞみに頭を首にくつつけながら、さういつて口を切つた。
『今日、諸君とお目にかゝるといふことは實にうれしい。私も××××に出席したいと思つて居たし、且つ出席する筈でもあつたのですが、合憎病氣に罹つて居て、それが出來なかつたのを殘念に思ふ。しかし、たとへ病床に臥して居つても、私の心は大會に出席してゐたのと同樣であつたことを知つて頂きたい。今日は病氣の工合も大分よいので、斯うして起き出した次第であります』

言ひ終つて彼は、眠つたやうにウツトリと眼を閉ぢながら、優しいシワを深々と湛えた。それは嬉しくつて仕樣がないといふ表情である。彼の言葉のアクセントは非常に自然で、柔かな感じを持つてゐるが、その一面には腹から出る聲のやうな底力が籠つてゐる。そして、その聲を聞いてゐると、このお爺さん（事實はさうさうお爺さんと呼べるべき年齡でもない）矢つ張りタヾモノでないといふことが少しづゝわかつてくる。愚直、善良といふ假りそめの形容が段々適はしからぬものになつてきて、そうした表情の底に奧深く隱されてゐるレーニンその人の實體が鋒を現はすのだ。彼の笑ひ方は、飽迄も無邪氣らしく、好々爺とか、お人よしとかいふ印象のほか何物もない。寧ろ、滑稽に近い感じさへも持たせられる。が、レーニンに自分の表情なんかには一向無關心に、眞卒な響きを持つた、敢て辭令を巧むでもないその言葉を力強く語り出すのだ。一寸の間、レーニンの印象が二重の錯覺を起す。それからでなければ、ほんとうのレーニンの輪廓を捕捉することは出來ない。

レーニンの挨拶が濟むと、ジノウイエフが先立ちで、シマスキーやサハロフや其他の連中が椅子をブラ下げてやつて來た。それで一たん席を直すことになつて、今度は各國別に陣を取つた。レーニンを三方から挾んで、向つて右手、レーニンに接近して蒙古、支那、それから左手が××、ジャバ、兩方から居流れて來た人々の間――中央レーニンの正面が××、その一ケ國毎にセクリタリが控え、ジノヴイエフ其他が間に割り込んで、椅子を据える。向つてレーニンの右隣りに少し離れて、蒙古のヤポン・ダンザンが居並ぶ。長袍を腰まで垂らして、舟のやうな格恰の蒙古靴を履いた姿は一座中の奇觀である。それとは正反對、レーニンの左隣りに、×××梁運洪の洋服姿が控えてゐる。

さて、その室の中の樣子はといふと、廿疊も敷けるかと思はれる位な大きさ、板の間のまゝで、特に裝飾といふほどのもの

は何もない。唯、四個の本箱と、三つの額と、一枚の敷皮があるだけだ。

本箱は、幅五尺、高さ六尺が二個並んでゐて、その上に極く小さいのが一つ宛載せられ、いづれもギツシリと本が詰つてゐた。その背皮の金文字ばかりが、此の單純な室の空氣に床しい光彩を與へてゐる。が、素より横文字だから何の本やら判らない。唯、その澤山の本の中に、チラと俺達の眼を射るものがある。上に重ねた本箱の一隅に、日本文字の本の表題が光つてゐるのだ。大杉榮著『正義を求める心』と同じく『革命家の思ひ』とだ。それに隣つて、高畠素之譯『資本論』の一卷と二卷、山川均譯『マルクス經濟學』、都合五冊がズラりと並んでゐる。これには、「改造」其他日本の雜誌類も一重ね積まれてある。しかしそれは、ロシアではじめて經驗したことではない。最初はジナヴイエフの室で、二度目にはスタクンの室で、驚異に近い感じでそれを見た。レーニンの室では、實にその三度目である。

三つの額といふのは、レーニンの座席から正面に當る、入口のドアのある側の壁に架つてゐて、左がコルクス、右がエンゲルス、中央が一勞働者――ロシア革命運動に仆れた勞働者としてこの代表的人物――の寫眞である。灰色の雪空が投げてゐる鬱陶しい明りが、窓硝子を透してその寫眞の眼を光らしてゐる。ロシアの至る所で、革命社會を見据えてゐる眼だ。

最後の敷皮といふのは、レーニンの足の下に、疊一枚位の大きさに擴がつて、その生々とした眼と勇猛な齒を具へた頭を、テーブルの下から俺達の上へ向けて今にも飛びかゝらんず有様を示してゐるのである。レーニンの身體を氣遣つた同志の連中が、辭退する彼を奬めて無理に敷かせたといふ敷皮である。いづれはクレムリンの中で××が用ひてゐたものであらう。

室そのものは、ツアール時代の宮殿内の出來事を裁判する所だつたさうで、俺達の居る室はその昔一種の法廷であつたのだ。レーニンは二つの室を持つてゐる。そのもう一つの方は、この室に續いて、ドア一つで通じるやうになつてゐる。其處はレーニンの寢所とされてゐるが、昔は、裁判の役人が居た室だといふことだ。

室の印象は始終を綜合したものだから、話は從つて前後してゐる。それで、順序から言へば、その間に俺達はレーニンと相對して、いろいろな問答を續けてゐたのだ。そこで話は、座席の整理をやつたらすぐあとの所へ戻る。

俺達がすつかりその席に落着くと、レーニンが手近の同志を顧みて何か訊ねてゐるやうだつたが、輕く背いたかと思ふと、

その相變らずの笑顏を蒙古側の方に向けて、ヒョイと立ち上つて、椅子から二三歩身體を進めた。その間の彼の動作は非常に敏捷で、多少誇張を交へた形容をすれば、ピョンと小鳥が跳ねた、とでも言ふやうな格好である。いつたい何をするのかと思つてゐると、いきなり、ダンザンの椅子の前──ダンザンはレーニンと丁字形の對角を成す位置に、即ちレーニンの側面を向いて椅子を据えてゐた──に片膝をついて腰を落し、左の手をダンザンの膝の上にかけて、下から上へ、ダンザンの顏を覗き込んだ。蒙古流に恭然として落着き拂つてゐる大男のダンザンも、これには面喰つたものらしい。多少モジモジするやうな氣配を見せて、大男が肩をすぼめて恐縮がつた。滿座の者が一寸奇異の感に打たれた。少しく首をかしげて、上向きにダンザンを覗き込んだまゝ、露語で何か話しかけた。『モンゴール』といふ言葉だけしか判らなかつたが、多分『蒙古の樣子は近頃どうですか』とでも訊ねたらしい。二人の會話を、外蒙古の一代表者が通譯した。外蒙古の人は、ロシヤと近接してゐてロシア人とも多く結婚が行はれるからロシヤ語が達者なのださうだ。終りに蒙古側一同に對つてレーニンが話したことの意味は、セクリタリが英語に通譯し、それを片山が俺達に通譯してくれた。簡單に略されてしまつたが、『蒙古は支那の資本主義から離れて、獨立したといつても、まだ油斷は出來ない。支那は之れを略取しようと今や盛んに機會をねらつてゐるのだから、前途に對する諸君の任務も甚だ重い』といふ意味だつた。

それが濟むと、レーニンは立上つて、支那の代表者の前に歩み寄つた。そこでも同じやうな格好をして、相手を恐縮させる。レーニンは英語で、それをセクリタリの通譯で、短い問答があつた。支那の代表者云ふ『支那の革命は孫逸仙と提携することがよいと思ふが、それに就いてどういふ手段をとつたらよいか。』レーニン答へて云ふ『運動に關する詳細な正確な報告があればお答へも出來るが、自分はそれに接してゐないから判らないといふより仕方がない』

レーニンは立つて、くるりと向きをかへた。そして、自分の椅子の前を通り越して、×××梁滙洪の前へ膝を突いて、その手を相手に凭せかけながら口を切つた。思ふに、さうすることが身體を支へる上に樂なのであらう。そこで『……………………………………………………………………。』梁も達者な英語でそれに答へてゐたが、俺には唯、片山からその問題の主題だけしかきくことが出來なかつた。レーニンはまた立つて、自分の椅子にかへつて來た。さうして俺達とテーブルを隔てゝ向きあつた。

目が依然として細い。今度は自分の膝に手をあてゝ、身體を前の方へこゞめて、その細い眼で俺の顔を覗き込んだ。俺にはそのとき、何を言つてやらうか、といふことが充分用意されてゐた。それは、このロシア革命の最大人物から、俺の是非聞き訊さなければならないことばかりであつた。そして俺は、この芋掘り爺さんの瓢輕な顔の奥から、今の世界に恐らくは最も嚴肅な言葉の洩らされるのを期待した 俺は未だ曾て この相手に對してぐらひ、革命そのものゝ頭腦と、革命そのものゝ意味とを、一個の存在として確認したことはなかつた。それは直感である。直感はすべてゞある。それは部分的な理論や認識の綜合ではない。それは比較的な信用ではない。そこには部分的な修正は許されない。すべてか零かである。若し俺の直感に過誤があれば、これは零である。レーニンは、絶對を以て認めるか、絶對を以て排するが、それよりほかに彼と相對する道を無からしめる。彼の革命に對する態度が、その豫見に對する絶對の自信に出發して、唯、イエスとノウとで行動を決した遺口は、彼と相對する者をして同じ態度を取らしめるやうにするのである。彼は、『革命』といふ與へられた物理の題問を、頭腦といふ冷靜な機械にかけて、分數、演繹、歸納といふやうな方法を加へる。即ち、彼は唯社會進化の豫見の上にのみ立つ。そて、その態度を是とするか非とするか、彼に相對する道はそれより他にない。俺は、愛すべき好々爺の一人間性を、俺の視野から放り出した。俺の當面したのは、唯、××××××××××××××××××。

『×××××××どんな狀態ですか』

レーニンはさう言つた。片山の口を經て俺に通じたのは言ふまでもない。

『×××××未だ初期です。決して外國人が見て ゐるやうな、大げさな、又は深刻なものではありません。日本の智識階級の社會運動者は、唯上つ調子なだけでほんとうの熱がなく、功名心に驅られて社會的に華々しさを見せてゐるだけなのが非常に多いやうです。しかし、××』

俺は さう答へた。片山がそれを通ずる。『いや、ロシアにも大體さういふ傾向があつたのです。中產階級の中からだつていゝものもあるが 大部分はアテにならぬものです。兎に角も、將來の××××××ものだから、××××××に運動がはいつて行つて、××××××運動として、起つて來ることは望ましいことです。恐らくそれでなければ完全ではありません。

大きに資本家の狀態は如何ですか』

レーニンはさう言つた。彼の質問の又應答もすべて單純である。その頭腦の持主が、その單純に滿足して話を進めるさまは、鐵槌をもつて大地を打つやうな力强さを感じさせる。『さうです。××××××××に來てゐます。彼等は今社會政策がその××××××××法だといふことにも氣がついてゐます。しかし××××××××りわけ個人的に腐敗し易いから、資本主義が機械的に爛熟するといふ傾向が比較的に小いと思はれます』

さう答へた俺は、極めて無遠慮に、質問者の側に立場を換へて言つた。

『××××をお話するよりも、私は、ロシアのことに就いていろいろ伺ひたいものだと熱心に思ひつめて來たのです。』

『どういふことですか』といふ顏つきで、レーニンは一寸身體を突き出した。俺は言つた。

『一の宛お尋ねしますロシアでは革命に際して何が一番邪魔になりましたか』

レーニン言ふ。

『官僚的なもの丶一切です。中でもとり××××××××つた。彼等は自分の權威の幻滅に反抗して、事毎に妨害を續けた。それで×××××××××××××番多かつたといふ結果を見せてゐます。』

俺が問ふ。

『それでは何に一番困りましたか』

レーニン言ふ。

『生活必需品の缺乏には隨分困つた。しかし何よりも一番困つたのは××××度です。彼等は當時、革命に殆んど理解を持たなかつた。それが革命を支持する上にどれだけ困難を加へたか知れない。それに理解を與へるといふ仕事に骨を折ることが、革命の進行上の最難關であつたといふことが出來ます』

俺また問ふ。

『××××××××××××態度を、そのときの立場はどんなものでしたか』、

レーニン言ふ。

『××××××××××のは、大體に於てその時その時の風向きに從ふもので、大して問題とするに當るまいと思ふ。ロシアに於ては、反動分子となつたものも部分的にはあるが、それは寧ろブルジョアの連中で、一般的には、毒にも藥にもならない日和見主義者が多かつたのです』

俺は更らに、質問のプログラムを進めた。

『冒險はどうでしたか』

レーニン言ふ。

『………』

俺はプログラムの最後の章を持出した

『ロシアでは、何故新經政策をやらなければならなかつたのですが』

レーニン言ふ。

『これは非常に詳密な經濟的な説明を試みる必要があるが、簡單に言へば斯うである。戰爭の疲弊と天災的饑饉の爲めに、ロシアは未曾有の物資缺乏を來した　その狀態の中に、舊時代の精神から脫却しきれない農民は貨幣との交換でなければ穀物を出さない。即ち貨幣との交換をする以外の生活樣式を未だ理解することが出來ないのである。そこで問題は饑饉か新經濟政策かの二途を選ぶより仕方がなかつた。一言にして言へば、革命を進行せさる上の、不可避の必要に依つたものであります』

俺の質問はそれで終つた。レーニンは靜かに居ずまひを直した。彼の著しい癖は、その特定の相手に對つて熱意を凝集するやうな態度をとることである。で、身體をその相手の方へにじり寄せるやうにして、不斷の笑顏を差し向ける。そして、此方の質問の要旨を的確に受取つて直ちに卒直明快な答辯をする。樂天家らしいムダ口の一つも言ひさうでありながら、實に必要的語句のほかは決してその口から洩れることがない。

レーニンが、病中十二時間も働いて、同志から白パンを奬められても喜ばないといふ話に、俺は妙な臆測を加へてゐた。それは一種の宣傳だらう。人心收攬といふ必要の爲めの僞善的な言ひ觸らしだらう、俺はさう思つてゐたのだ。レーニンとの會見の最後に考へたことは、それが悉く、俺の極く卑劣な邪推だつたといふことである。レーニンには、こんな茶氣はミジンもない。いや彼を前に置いて、そんなことを考へてみる餘地すらもないのだ。インフアトチル・チスオーダー！俺はレーニンがアナキストに與へたといふその言葉を味つた。實際俺にだ、そんな邪推を加へるだけの稚氣があつのた。けれども、レーニンこの人は、革命といふものゝ頭腦と、革命といふものゝ意志との假りの化身である。そしてそれ以外の何ものでもない。

友と別る

小牧近江

僕は若いスヰスに憧れてゐた。

「おお、健かなるスヰスの青年たち！」と、そういつたロマン・ロオランの短い言葉が、僕の胸を躍らすに充分であつた。

正義と自由を求むる人たちにとつて、祖國はあまりに狭少なものであつた。或る者は國外に追立てられた。また國外にあつた者は、そこからもう一歩も拔け出ることを許されない境遇に置かれた。祖國は、國境といふもので、人間の意志を支配しやうとした。まつたく、祖國の氣が狂つてゐた。

ヨーロツパが血に醉つた者たち、凶暴なる愛國主義者どもに暗殺されやうとした時、兄弟たちの殺戮の前に眼をそむけることの出來なかつた良心ある人々は、中立國スヰスに巣くつた。スヰスは新らしいヨーロツパの搖籃にならうとした。そしてそこから新らしい文明が誕生するのではなからうかと思はせた。爭ひの禍中と絶望の中に、生きることを求むる人々の燃え切つた眼は、亡命國スヰスの上に注がれた。そうして、この期待の土地に惠まれたスヰスの新らしいジエネラションは、胸と腕にひきしまつてくる血の波動を感じたのであつた。

「おお、健かなるスヰスの青年たち！」と、そういつた、ロマン・ロオランの短い言葉が、僕らの胸を躍らすには充分であつた。

スヰスの空は澄み渡つてゐた。

僕はながい間、若いスヰスに憧れてゐた。

僕はながい間、スヰスの空を欲してゐたけれども、貧乏と時間と入國の手續とが、その望みを容易に果させなかつた。

一九一九年の秋に入つた。

僕はなが年の放浪生活を捨てて日本に歸ることになつた。自分でそうしやうときめたのであつた。僕は最後の希望として、

歸途、若いスヰスをたづねて見たかつた。僕はきつとスヰスの同志をたづねて見やうと決心した。その頃、全ヨーロッパの空は、ただならぬ雲にとざされかかつてゐた。それは、ボリセヰズムといふ未だ人間界の經驗したことのない密雲の襲來であつて、それが、武力の力でやつと平和といふものを見た心もとない人心に、更らに地上の不安を與へたのであつた。革命の機運は、いたるところの國に於て最高の時代にあつたのだ。そして全世界のプロレタリアの熱し切つた血は、今にも地上に迸らうとして見えた。世界のプロレタリアはその全體を通じて、攻勢的狀態に置かれてあつたやうに見うけられたのであつた。

プロレタリアの烽火はいづこから擧げられるだらうか。眞の意味でロシアの道を歩む者は、ドイツであらうか、イタリアであらうか、それともフランスであらうか。しかし、心ある人々の期待はそのいづれの國でもなかつた。それが全ヨーロッパの導火線となるべき地位にあつたスヰスに注がれたのである。八月廿一日の三角運動の失敗を見せつけられたヨーロッパのプロレレタリアは、イギリスにもフランスにも、またイタリアにも信頼をつなぐことが出來なくなつてゐた。そして、プロレタリアの熱した眼はチユーリツヒの騷動を起したスヰス。またオルテンの騷ぎの發源地であるスヰスにむけられてゐたであつた。パリのうわさは十一月七日を以て行はるべきスヰスの革命機運を傳へた。そして多くの黄色新聞は連日このことをむりげな記事の報道で紙面を賑はしてゐた。

光榮あるロシア革命第二週年紀念日が切迫して來る。僕はスヰス入國の最後の苦心を凝らした。そして、とうとうある手段で成功した。僕は今でもその人に向つて感謝してゐる。

その日は雨だつた。雨はパリの別れを一層哀しくした。わけて十一月の都の雨は人の心を暗くした。夕方、僕は同志Sに別れを告げた。これが久しい別れになるのだ。Sは四つ角の小さいカフエの二階に身をひそめてゐたが、十六日の選擧に社會黨の勝利だと言つてゐた。

一九一九年の十一月二日は雨だつた。いよいよパリと別れねばならない僕の胸は裂けそうだ。これまで親しみを重ね、常に心配をかけた見送りの先輩や友人の顔を、今となつてしつかり見る勇氣すら僕にはなかつた。むかし、日本へ旅立つ人たちを見送る時、取のこされた淋しさを一度となく味はつたことのある自分は、初めて見送られる身になつて見て、それ以上淋しさを味はうのだつた。さらばパリー、あらゆる意味でわが青年期を育ててくれたパリ、さらば！

夜行車は地の奈落に飛び込むやうに、おそろしい勢で走る。

ディジョンが過ぎた。車室を暗くして見たけれど、僕は容易に寢就かれなかつた。パリのことが想出されてならなかつた。

翌朝、雨あがりの模樣だつた。汽車は山をうねつてゐる。その山と、その山に點々と見えてゐる家の恰好が、スヰスに近づいてゐることを思はせた。

國境の警備が嚴重だつた。ベルガルドの驛におろされた旅客は綿密な檢査を受けた。ポケットの中までさぐられた。旅客のひとりひとりは銀貨をもつてはゐないかと問はれた。その頃、銀相場が暴騰してゐたので、國境の役人たちはそれにも嚴重な眼を見張つてゐた。役人たちは危險人物の闖入よりも、その方に氣をとられてゐたらしかつた。手カバン一つしか持ち合はせなかつた僕は、その意味の危險人物でなかつたらしく、密輸入者に注がれるやうな眼でにらまれなかつた。汽車は再たび發した。そして、僕らは難なく望みの地、ジュネエヴに着くことが出來た。

それは、日本の秋を思はせる樣な晴々した朝だつた。僕をのせて馬車は寒さに乾き切つた、そして塵一つない大道をとつとつと蹄の音を高くさせながら、目的の家にむかつてかけ出した僕は時折うしろを振り返つて見た。

——シャルル君はゐますか。

ふしぎな異國人に問はれた、年の頃四十を越したばかりの婦人は、意外さうに戸口に立つて、僕を見まもつた。

——今朝から出て居ますが、晩には歸つて來ます。

僕はかの女に一通の手紙を差出した。僕には、かの女はシャルル君の母親らしく思はれてならなかつた。僕は食堂兼客室といつた風な部屋に案内された。サラマンドルはゆるやかに燃えてゐた。臺所の方からじやがいものフライかなんかの香がして來る。見ず知らずの國、一箇の小ブルジョアらしい家庭の內部。異國人、それから空腹とがつぎつぎと僕の頭へはいつて來る。

シャルル・Rは赤つぽい顏と、金髮の持主だつた。彼は默つて紹介狀を讀んだ。そしてほとんど何にもいはないで、僕の手を強く握つた。彼の眼は澄み切つて、藍色をしてゐた。僕は彼の顏をしつかり見て、手を強く握りかへした。彼は僕より二つ三つ年下の青年に見えた。

ふたりの間には、初めつから窮屈な氣持は少しもなかつた。が、しかし、僕たちはお互にどう口を切つていゝかわからなかつた。ただ彼のにこやかな眼が人なつかしさうに僕を見て居るやうだつた。

——君はおつかれでせう。さあ、おかけなさい。

さういはれて、僕ははじめて多少の疲勞に氣付いた。僕は彼の部屋にあつた、デイヴアンに腰を下した。彼は臺所の方へ行つた。そして間もなく、戸をあけてくれた婦人をつれて來たそれは僕の想像通りだつた、彼の母親だつたのである。僕は彼の母親に紹介された。シャルルの母はもう前から知つてる者に對

するやうな態度で手を差しのべた。そして、

——子供たち、さあ御飯ですよ。

と、多少當惑した自分を食堂に導いた。

小さいテーブルをかこんだわれわれは、もう親しい間がらのやうだつた。僕は幾度もすゝめられた、赤酒を遠慮なくうけた。シヤルルの母は僕の紹介者ピエールの近狀をしきりに聞いた。シヤルルは、また、ピエールの近頃の思想にと、その方面の話をうながすのであつた。ピエールの母はその年の二月、長子ジアンを失つた。病身のジアンは戰爭の呪とボリセヰズムの統御の歡喜のうちに熱狂して死んだ。ジアンは猛烈なボリセヰキの讃美者であつたのに、ピエールはだんだんアナーキズムの方へ進まうとするやうに見うけられた。こゝにもコミユニズムとアナーキスムとの問題が起きて居た。そしてシヤルルにとつて彼の親友父がだんだんそつちにかけはなれて行くやうな傾向が心配でならなかつたもののやうに見えた。また、シヤルルの母はこの社會から心よく思はれない思想を持つた二人の子らの母親の身の上が心配でならないやうに見うけられた。フランスでもスヰスでもこの戰爭のおかげでやさしい親思ひの子たちが、かうした怖ろしい思想を持つことに心を悩ます親は少くはない。これがどこの國でも、ブルジョアの家庭の内部に起る悲みである。しかし、このブルジョア家庭の母親たちのほんとうの心は子供たちの考へに決して惡いとは思つて居ないのだ。心から子たちの味方である。子たちの進む道は正當であると思つて居るだから、社會に對する遠慮と子たちの眞理に對する愛が、ブルジョアでなければ味はへぬ悲しい矛盾になり重つて、忘れやうとしても忘るゝことの出來ない、永久の嘆息になるのだ。

この小さいテーブルをかこんだ、ヨーロツパの親子とアジアの一人の子とが、ロマン・ロオランのうけた、あらゆる悩みのうちの悩みを思ひやつた。ロオランはその秋、彼の最も愛するもの、母を失つたのだが、つながれの身の彼は母の死にあふことが許されてゐなかつた。ロオランの母は、これまで幾度となくスヰスを訪れては、彼女の子と會ふことが出來たけれど、そしてそれを無上の樂みとはしてゐたけれど、思想を持つロオランには愛するものの死に目にさへ會ふことが許されてゐなかつたのだ。それは、丁度、ドイツから追はれたジアンクリストフが、最愛の母の死をパリできいてどうにもならなかつたやうに、ロオランはジアンクリストフとあまりに運命を共にしてゐた。世の中の母たちはヨーロツパでもまた、日本でも、かうまでにされても最愛の子たちの敵であらうか味方であらうか。僕は知りたい。この時、シヤルルの母は思ひ出したやうに、

——でも、お前さんたちの革命は、來るものでせうか。いつそれが來ませうか。

シヤルルはパンをかぢりながらその言葉をきいて、默つて笑つた。

僕の新しい友は、午後僕とつれだつて逗留の宿屋をさがしてくれた。その宿屋は赤十字本部のある廣場のすぐ近くのホテルで、その下はかなり大きなカフエであつた。ホテルの裏口から階段を通じてカフエに下りられる便宜なホテルであつた。僕はそのホテルのごく小さい部屋を借りた。窓からは廣場と公園の入口と、三方の道が遠くまで見極められた、そこを歩いて居る人、遠くからこつちへ向つて來る人の誰であるかすらも手に取るやうに見ることが出來た。二人は都合のいゝ部屋だ、といつて喜んだ。それから僕はヂユネエヴの官憲の下に出頭した。そこはヂユネエヴに滯在する一切の人々の動靜と旅行劵についての綿密な取調べをなすことが目的の役所だつた。シヤルルとは四時頃公園の中にある、僕らが通りながら眼ぼしをつけた樫の木の下で、會ふことになつてゐた。スキス官憲の取調べは嚴重の上に嚴重であつた。殆んど訊問といつてもいゝ位だつた。僕は、狼の前の小山羊のやうなものであつた。僕はよろこんでその小山羊になつた。ひとりの取調べは何人もの手の上にうつつたイタリア、フランス、スペイン、といつたあらゆる人種のあらゆる言葉が狹い廊下や部屋の中でいひかはされてゐた。それが丁度、動物園の檻の中にわめきさわぐ騷々しさであつた。何故何の爲に、といふ問がつぎつぎに僕を襲つた。僕は極めて簡單にいひのけた。一人の役人がわざとらしく馴れなれしく、「日本の愛國青年の爲に、」といつて無雜作に旅劵に査證してくれた。日本の愛國青年！　日本にはそんなのが多すぎるんですよ、スキスの愛國主義のお役人さん！　ふと、戸口でふり返つて見た時、僕はその狼の眼が僕の背後にぎろつと光つて居るのを認めた。僕はほつとしなかつた。

シヤルルは時間通りに樫の木の下に待つてゐてくれた。

――どうした？

――畜生！

ふたりは公園をぬけてリユ・デユ・マルシエの方へ足をむけた。そこはジユネエヴでもにぎやかな街で、僕の一つの目的としてゐる二三の本屋もその附近にあつた。街角でふたりはばつたり一人の變な通行人と出あつた。その男は日本でもよくあるやうな小さな手帳の持主だつた。僕は、一寸道をそらした。そして心の中で、ああ、これがほんとうの洋犬なのだと思つた。あとでシヤルルがいつた。

――豫定通りだ。もう手はまはつてゐる。君の住所をしきりに聞いてゐた。

僕は役所で、すべての問に對して小山羊のやうにやさしかつたが、宿屋だけは不定だといつた。それだけは、いはれない。

こゝでふたりは離ればなれに別れて、自由行動をとらねばならなかつた。僕は當然の結果を覺悟して街をぐるぐるまはつて宿に歸つた。

その夜ふたりはフランス・スヰス切つての左傾新聞ラフウイユ社をたずねた。そこで主筆のジアン・デプリとあつた隣の部屋では六人の夜勤がうす暗い明りの下でペンを動かしてゐた。みんなと話したこの新聞社は主筆とも十二名の編輯者で朝夕二度の新聞を出して居るのだ。みんな主義者だ。たつた十二人の頭と手で一つの主義の新聞が完全に動かせるものであることの事實が僕の頭にしつかり刻みこまれた。

ふたりは今レマン湖の棧橋を歩いてゐる。夕方から泣きさうに見えた空が細い雨になつて、それが二つの胸に靜かに注ぎかけてゐる。もう僕らのうしろには誰も來るものはあるまい。夜はかなり深くならうとしてゐる。

——あれがジアン・ジアク・ルソーの島だよ。

といふ友の言葉は僕の心には、うといものであつた。僕はいろいろの事を考へてゐる。まだ今までそんなにも思つたことのない日本といふことが、はじめて考へられて來た。僕は今、かうしてひとりのスヰスの同志とあるいてゐるのだが、自分の生れた日本に、たつた一人でもいい、友が求められるだらうか。

おそらく、僕の無言を破らうとした友も心の底で同じやうに何ごとか考へてゐたのだらう。われわれの胸の中に今、一つのことを二つの心で考へてゐるのではあるまいか。友の顏を見るには夜あまりに暗かつた。雨がわれわれのからだと、音もない靜かな水面にあたつて、かすかな音を立てゝゐる。ひゞくものはふたりの足音だけである。棧橋の下に宿つてゐるのは水鳥だらう。われわれの足音に怖れるやうに、またそれに合はせるやうに、ことことと眠りからさまされた、小さい驚きの音を立てゝゐる、青い瓦斯燈の光りの下まで來ると、友はまた口を切つた。

——君、あすこを見たまへ。あの影のやうな遥い湖畔は精神と肉體の疲れにうたれたロマン・ロオランが身を橫たへてゐたところだ。

僕はこの時初めて、ある眠りからさめたやうに、快よく友の指さすかなたをながめた。雨空の光りはぼんやり遠くの眠つてゐるすがたをぼかしてゐた。

默思からさめた僕らの心は今はあまりに躁へてゐた。ふたりはあかりに向つて急いだ。友は一枚のはがきを途中で買ひ求めた。それからふたりはもつとあかるい、しかし人のあまりゐさうにもないカフエを求めてあるいた。

一枚のはがきがバヴアリヤの一同志に向つて飛んでゆく。バ

イエルンの革命の勇者Bは今、反動政府の鐵窓につながれてゐる。一つの短かいたよりが豫期してないだらうところのバヴアリヤの兄弟のもとに送られてゆくのだ。そして、その紙片はスヰスの青年と日本の青年とによつて署名されてゐるのである。その晩、僕はかつてない廣々とした氣もちで眠りについた。

翌日の集會はホテルのカフエにきまつた。こゝで顔ぶれの大抵がそろつた頃、みんなは裏口の階段を添ふて僕の部屋にはいつた。その多くは僕の長い間會ひたかつた青年だつた。彼らは四年以來の熱し切つた新しいジユネランネン、ロオランの「おお、すこやかなるスヰスの青年たち」だつた。僕はいかに彼らと共にみんなの希望について協議することの幸福を感じたことであつたらう。彼らによれば、もうすべての方法は絶望である國境は昨夜から、不可侵の狀態といはれてゐる。そして、日は切迫する。そこで、僕はその晩急にジユネエヴの地を去ることに決した。

L君はテアトル・ド・ラコメディの俳優であつたが、彼はこの會合にひどく興奮してゐたもののやうであつた。

——おい、L。今夜君の總見といふところだつたが、今夜Kが立つときまると名殘りをしい氣もするね。

僕がいつた。

——君らはほんとうの芝居をするさ。僕はそれを遠くで拜見しやう。

誰かゞインタナシヨナルを歌はうとした。

——しゆつ、馬鹿！

と、もう一人がそれを制した。

それから、みんなはどやどやカフエに下りた。そして、カフエを注文するものはカフエ、また、今日はいゝやといつてビール黨にビールを注文した。不思議な人の顔を出したときは、あとのお祭りだつた。

ひとりの友が見送つてくれる。寒さはにはかに增してきた。夜だつた。僕らは外套の襟をたてた。そしてうす暗い構内に足を進めた。僕らにはあまりに語り合ふことが多かつた。そして語りつくすべくあまりに路は短かゝつた。われわれはお互に先のことどもを約束しあつた。それで終りだつたらうかまだまだほんとうにいはせるならば、今になつてふたりは別れるのがつらかつたのだ。もし、これが愛人同志であつたなら、そのことをうちあけたであらう。それは自分たちが思つてゐた以上に深いものだつた。ふたりの男同志、ふたりの國のちがつた青年がいさとなると心のそこを——それにあまりに女女しいと虚勢を

はつたのかも知れない――うちあけるに苦しんだ。そのことが、はつきりふたりの心にうつつてゐるだけ、それだけ、あるはにかみが心のほんとうの發露を抑壓したのだつた。ふたりは旅券檢査所の前までいろいろなことを胸にうかべながらしかも、表面ではありふれたことを語りつづけて、とうとうそこへ來てしまつた。粗末な、しかし新しい建物の檢査所には、もう數人の旅びとが列をつくつてゐた。ひとりの憲兵が、この不可思議なふたりづれの青年、僕たちを特ににらむやうであつた。その時、僕は自分の意志にそむくことを充分に知りながら、しかも無雑作らしく、

――もう歸つてくれたまへ。お母さんによろしく。それからみんなにも。

と、云ひ切つたが、それはほんとうに自分の心がさういつたのではなかつたことを充分に知りぬいてゐた。友は答へるともなしに、

――うう、もう少し。

と、かすかに口ごもつてゐたが、それでゐて、ふたりは顏をみあはせなかつた。手も充分には堅く握られてはゐなかつた。僕はいそいで調べをうけに行つた。僕は何となしにまだ彼はあすこにゐるものだと思つた。きつとゐることだらうと思つて安心した弱い時に人間は弱いことをいふまいとする。しかし、いかにそれを心の奥で强く望んでゐることだらう。嚴しい取調べをうけた時に、それらのことで胸一ぱいな僕は、ほとんど無感覺であつた。その時思にあまつて、ほとんど無言であつた。おそらくその時僕の顏は眞青だつたらう。取調は不審と思はれるほど難なくすんだ。あの時のあまりに無言な態度が偶然あゝいふ結果を生んだのかも知れない。旅行券の査證を得た僕は、何ものに支配されるともなく、足をひとりでにもう一ぺん彼のゐてくれるであらう入口に進ませた。そして彼は當然そこへ僕が立ちかへるべきもののやうに、まちわびてゐたのだつた。

ふたりは、なんにもいはずにただ接吻した。この時木柵がふたりのあひだに置かれてあつたのだ。言葉? 僕は今それを思ひだすことが出來ない! 僕らは愛せるのだ。…… 僕は機械的に歩を列車の方にむけたのだつた。自分の姿が彼の眼から消えやうとした時だつたらう、突然うしろからはりさけるやうな聲で、自分を呼びとめるものがあつた。それは最後にわが耳にひゞいたわが友シャル・Rのさけびであつた。主義の友、同胞以上の友、兄弟以上の友、ヨーロッパを越えての友、アジアを越えての友、僕はどうしてあの永久の聲をわすれる事が出來やうか。

汽車は動く、リヨンには同志が待つてくれるだらう。ふとマルセイユの船がぼんやり僕の眼にうかぶ。その船が未知の同志の國、日本に自分を運ぶのだ。(一九二一・一〇・四)

今年も暮れる

生方敏郎

もう十二月も近づいたか？

私の庭の向ふの山の木は紅葉初め、はぜは分けても美しく人目を牽く。百舌は毎日午の前後その林の枝へ來て鳴く。四目垣にからませた朝顔は萎んで白粉の花だけが尚ほ咲き殘つてゐる。

天氣でもよければ、まだ小春日和で郊外散歩に出かけ度いと思ふが、新年號の原稿など依頼されると、もう暮も迫つた感じがひし〳〵と胸を打つ。

幸ひに無事に、併し乍ら忌々しいほど平凡に、又今年も過ぎた。

細川頼之は人生五十愧ㇾ無ㇾ功と云つた。だが、私は人生四十罪無きを忌々しく思ふ。私も或は五十に成つたら功無きを悔ひる心が起るかも知れぬが、まだそんな氣は無い。何一つ佳い物は書けないでも、まだ此先きいくらでも佳い物を書く時期は有ると思ふから、平氣だ。しかし、長くも無い一生を餘りに罪無く、換言すれば餘り面白い事もしないで過ごすのは殘念な氣がする。

一月

この一月は駿豆の旅で過ごした。子供の病氣保養の爲めと、煩さい家庭から遁れる爲めと、この二つの目的から旅に出た。沼津で越年して二日に伊豆の湯ケ嶋へ行つた。その湯ケ嶋ではいろんな人達と逢つた。霜溶け道の端で頻りに前の石垣やら丘やらを赤く塗つて寫生してゐる青年があつた「牧野式の繪を描く男だ」と思ひつゝ其人をよくも見ずに通り過ごして、後からそれは本物の牧野君と知れて大笑ひだつた。谷紀三郎さんだの吉岡將軍だの皆で落合つたので、夜は歡留多會をしてふかしたり、昼は勢兒ケ瀧といふ數丁先の温泉へ皆で揃つて行つたりし

た。裏道は霜溶けで散歩も出來ないが、天城街道は平坦で良い道で、散歩によかつた。

牧野君とは別れたが、婦人の友達も出來たりして、六日には賑々しく三保の松原へ行つて見た。汽車の中も倦きなかつた。由比あたりの濱邊には櫻海老が赤く美しく到るところに乾してあつた。富士川の浦に注ぐ邊も絶景だと思つた。富士も諸方から眺めて見たが、江尻から三保へ渡る間の汽船の上から見たのが、最も美しい、と思つた。船が陸から離れるに從ひ、富士がだん／＼高く成り波に浮ぶ。初冬の事とて峯は白く裾は青く、得も言はれぬ神々しさだつた。

三保の景色は旅客の目を樂しませるが、三保の土は青い色をしてゐて、農作物はいくらも獲れない。正月だといふに菊えんどうの花盛りだつた。

土地はたゞ見るだけの物ではない。百姓を富まさない土地に住む百姓は、氣の毒なものだ。絶景も朝夕見馴れては面白いことも無く、清水の乏しく地の瘠せてるのを嘆つのみであらう。

三保の宿屋は汚なかつたが、吉岡君の得意とする早慶試合の昔話には皆醉された。夕暮と朝と松原をサク／＼歩いた時は、誰も皆壯快さうに見えた。併し、私は一日も浮き立つやうな氣持はしたことがない。

龍華寺はいゝ位置に在る。樗牛の墓に詣でた。あすこから見た富士も良かつた。あの寺には蘇鐵だのたまの樹だの美しい植物が多い。この邊で子供が買つてた天狗蜜柑は見た眼は立派だが喰べてはまづかつた。

久能山は石段を登る勞苦に報ひるほどのものはないが、一度は登つてみてもいゝところだ。石の段々を二千三百までは數へた。神主は色が黑くて百姓が内職にやつてゐる樣だと皆が笑つた。

久能山の下から靜岡までの間の馬車は、小さくて新らしくて天井に豆電氣がついてゐて、滑稽で可愛らしかつた。吉岡は浮かれて同乘の婦人と共にさすらひの歌など唄ひ出した。

靜岡から興津まで來て、興津の水口島に一泊した。庭に梅が白く咲いてゐた。

東京へ歸らうとする皆と別れて私だけ子供の爲めに再び湯ケ島へ歸つた。湯ケ島の湯が格別効くといふのではないが、東京よりは暖く、天城と麓の景が私の氣に入つたからだ。

それから度々雪が降つた。降つて積つても直き消えた。湯でいろんな人々を迎へ又送つた。いろんな人々と懇意に成つた。鐵道省の官吏で朝山といふ恐ろしい勉强家と知つた。全然遊ぶつもりで來たのだが、二人で勉强の競爭をしたりした。

雪の一尺も降つた日に東京から三人連れの遊獵家が來た。村の人を道案内に頼んで山へ出かけたが、日暮れに一羽の獲物も無くして歸つて來た。翌日又出かけて又獲物が無かつたので、案内人を罵つてゐた。一人は茅に滑り谷へ落ちて少し怪我をしてゐた。遊獵家達は四日もゐて成績が悪かつたので、多少自暴氣味で夜は女中達を追ひ廻しキャツキャツ言はせてゐた。鳥を捕るよりあの方が上手だ、と宿の人は笑つてゐた。

雪の日に猫子峠を越さうとして、人が死んだ。と村の人が湯の中で私に話した。その翌晩三人連の青年が來て泊つたが、彼等はその雪に凍えて死んだ畫家の友人で、屍體を引取りに來たものらしかつた。その人達とも湯槽で一緒に成り、彼等の湯の中で放歌したり談笑したり蜜柑を食つたりするので、私は氣味悪く思ひ上らうとしてゐると、彼等は蜜柑を私の子供に呉れたので、少し打ちとけて談した。彼等も猫子で死んだ畫家も皆社會主義者といふ事が、後で知れた。さういへば如何にもさうらしい色合があの三人にあつた。

時々多勢の客が午の前後に來て、盛んにはしやいで私達の勉強の邪魔をしたが、併し、一食しただけで間も無く何處かへ引き上げた。それは吉奈又は長岡、修善寺邊から一寸遊びに來る客だつた。それに依り吉奈は近いことを知つたが、こゝから吉奈へ廻つて法科大學生鈴木君から吉奈は燒後の様なところ故お止しなさい、とハガキを呉れたので中止して、湯ケ島に足を止め一月もゐるやうに成つた。

七十ばかりに成る電報配達のお爺さんとも矢張湯の中で知つて、この不思議な一生の話をも聞いた。

消防の出初式も見た。消防の成績がよいので、この上狩野村で縣廳から金バレンを貰つた祝ひの式が、まだ雪溶けの學校の庭に催された。金バレンとは金の纏ひのことだ。村の誰も彼も見に行つた。縣廳からは警察部長も來て見えた。分列式の様なものがあつた。淋しい谷間にある製板工場へも見に行つた。田の中のお寺のお縁日の夜詣りに行き、女をからかう若衆の無邪氣なたはむれを見たりして、飴を買つて歸つて來た。

髪床とも懇意に成つた。道普請する土工とも話した。だが、特にこの地方の變つた風俗と思はれたのは、琴や胡弓や三味線を彈きつゝ唄をうたふ男ばかり五人連の萬歳だ。いろ〳〵淫らな面白い唄をうたつては、若い娘達の顔を赤くほてらせた。

二十日過ぎには、旅費をつかひ過ぎたかといふ懸念が起つたので原稿を書き初めた。その爲め夜も子供を遠ざけたから、子供は保養だか何だか譯の分らぬ旅であつたらう。

二月一日から修善寺へ行き新井といふに一泊したが居心地が

悪く思はれたから翌朝歸京した。修善寺はこの頃梅が咲いてゐた。修善寺へは恰度二十一年ほど前に修學旅行で行つたことがあるが、その頃から見ると餘程變つた 人家が殖えて河原が汚く成つた。

二、月

私が歸京する匆々、細君が病みついた。折悪しく女中も無いのに寐られては子供が慘めだと思つたから、激勵してみたが綿の樣に力なく成つてゐて迚も起てない。人に頼まれ名古屋の方へ講演に行く筈に成つてゐたが、それをも斷つた。ひどく苦しむからとて、お隣のお母さんが産婆を呼んで來てくれた。産婆さんは「何うも子癇らしい、明朝まで生きてゐるか何うか分らない。專門醫に見せてください」といふ。細君はお産に付いて常に我儘で、否我儘といはんより極度に神經質で臆病なのだ。平生は直き「しんでしまう」とか「死んだ方がいゝ」とか絶望的の言葉を放つが、胎兒の位置が少し怪しくでも成ると、それこそ今にも難産で死ぬ樣に騷ぎ出す。彼女はこの年老いた田舍出の産婆を信ぜず、それでは安心出來ず、以前の産婆を呼び度いのだが、それは私が反對なのだ。いよ〱産氣づいた時、夜でもあると呼びに行くのが大變だから、成る可く近所の産婆で間に合はせると、私は云ふのだ。産は病氣ではなく自然なのだから、普通の産婆で澤山だ、といふのだ。けれども極度に神經質に成つてゐるから、近所の老いた田舍出の産婆が體に觸ると、直ぐ痛いとか眩暈がするとか云ひ出すのだ。私にはそれは狂言の樣に思はれてならないのだが、田舍出の産婆は眞面目に氣を揉み「明日まで助かり相もない」といふ。いくら婆さんでも、其道に懸けては素人よりは悉しい筈、してみると捨てても置けぬからとて知合の專門の大家に電話を懸けたが、生憎病氣してゐるので來られぬ。その代り明日自分の右の腕とも頼む人を紹介するとの答えだ。

その晩 電話を懸けての歸りに、細君が死んだらば、といふ事を不圖考へた。家を出る時はひどく苦しんでゐるのを見て可哀相に成つたのだが、今彼女が死ぬかな、と假定してその先生を考へてみると、世間で愛妻を失つた悲嘆に暮れてる人々と自分は何だか少し違ふやうな氣がした。子供は可哀相だ。とても取り返しは付かない。母親のかけ換は有りつこはない。併し自分は何うだ。將來、子供の爲めに一生獨身で送るとしても、いろんな名目の下に却つて自由に異性に接觸し、それこそ異性を享樂することが出來やう。と思ふと、之まで束縛されてゐた縄目がとれて、勝手に其處らちうに散らかつてる花を思ふ存分

むしり捉らうといふ閃が虫の走るやうに胸をぐつ〳〵した。だが、地位を代 て考へたら、若し經濟上の苦しみさへ無かつたら、細君だつて同じ悦びを感じるだらう。無論一方に連合ひの死を悲み、永い間の好い方面ばかりの追憶にひたり乍ら、そして勿論亡き良人を理想化し美化して追慕し乍らも、尚ほ一方に解放の悦びを感じるに違ひない。

「さう思ふと、一緒にゐるのもつく〴〵バカらしい。夫婦なんて、詰らんものだね」

と同じ位の年輩の友人に語ると、彼は

「さうだ。これは四十に成らないぢや分らない味だな。我々位の年頃に成ると、みんなこんな考へを持つてゐる。結婚したこともない人々が胸に描いてゐるところとは、千里の隔りだ。こんな事を若えもんに話したら、本當にびつくらすらあ」

と云つた。それから、徒然草の話なども出た。若い時分、徒然草を讀んでみて、「何だつてこんな詰らない新聞の雜報みたいな事をもさ〳〵書き止めたのだらう」と疑はれた文章が、「成程こゝに味を認めて書き止めたのだな」といふ坪が解つて來た。兼好法師の年齢に近く成つて來て、やうやく徒然草が少し分つて來た。などゝ歩き乍ら語つて、闇の中で分かれた。

然るに翌朝に成ると、細君は死ぬどころか、だん〳〵元氣が、出て來た。專門醫が來て診ていふには、まだ少しも婦人科の領分に入つてゐないと。そこで內科の醫師に診せると、腎臟炎だといふ事だつた。

病人は看護婦が來て世話をするからいゝが、困つたのは子供の世話だ。併し、それも看護婦が深切者で二人前も三人前も働いて子供の世話までしてくれた。

さうまでさせて、飯炊きから子供等の汚れ物の洗濯までも、看護婦一人にさせては餘りに氣の毒だから、ぜひ下女を至急に雇ひたいと思つたが仲々見當らない。私は桂庵といふものへ初めて行つてみた。桂庵には女中は一人もなかつた。直ぐ見付かるだらうか？ と訊くと、迚も急なことには當はないが、出たら直ぐお世話しますと云つて此地この町處を帳面へ付けた。

こんな事で桂庵といふものは商賣に成るだらうか？ と私は考へた。女中を一人世話して手數料は二圓か三圓に過ぎない。別に心付けを貰へるとしても知れたものだ。一日に一人の女中を世話するとして一人から五圓得られるとしても、たか〳〵百五十圓に過ぎない。しかるに店の樣子を見たところでは一日一人はおろか十日に一人の世話も覺束ない。そんな事で何うして暖簾が張つて行かれやう。必ず何か——妾の世話をするとか酌婦の口入をするとか、他にボロイ儲けを得る道が無ければ、到底

桂庵を營業として今日を過ごして行かれるわけがない。打ち見たところでは、恁んな狹い店へロクな女が出入することは有るまいと思はれるが、田舍の女なんて寄る邊が他に無いし、東京者でも世間を知らないものだし、又兩親が世間知らずだと折角美しい娘を持ち乍ら纔かな金で詰らぬ奴に自由にされる。それが恁ういふ桂庵の食ひ物に成るんだ。私は店に立つてこんな事を空想すると、もうそこへ美しい小女が、世間に何も知らぬ娘が途方に暮れてショボリ立つてゐるやうで、惜しくてならなかつた。

桂庵にはとても見込みはなかつたが、或人が急場の間に合はせに派出婦といふものの有ることを敎へてくれた。だが、派出婦會といふものは文明的の假面を着た桂庵に過ぎなかつた。最初來たのは十七八の小女で性質は大人しく言葉使ひなども丁寧だつたが、丸きり役には立たなかつた。子供達の守さへも勤まらなかつた。それで給料は一日七十錢の、別に手數料を要した。之では間に合はないので更にもう一人大人をよこせと言つてやると、肥つた靑ぶくれの大女が正午少し過ぎてから來て飯を食べたきり夕方まで喋つてばかりゐて餘り働かない。主婦は病床に在ること故、自然看護婦から物を命ぜられることに成るので、一つ頼まれても佛頂面をし、夕刻は歸會するといふから一日分の給料一圓二十錢と他に電車代等渡したが、勤務表には來た時間を正確に午後〇時三十分としてやつたので、之を朝八時から來たことに書き直してくれと云つたが「まあそれで宜からう」と言つたら、歸る前に他の少女にも明朝暇を取れと敎唆して去つた。次には仲々よく働く女と中位の女とが來た。給料は高くもそれは働いたからいゝ。恁ういふ風で、眞面目に働く女は四人に一人位であつた。それでも女は少なく會は女を利用して營業してゐるのだから、女に對して何等の權威も無い。それ故需要者の意を滿たすやうにはならないのだ。給料は高くしてもいゝから、もつと訓練して役に立つやうにし、深切第一をモツトーとしてやつたならば、今の時代に適したものと成るだらうに、惜しいものだと思つた。

細君の病氣も急に死に相もないので、看護婦に委せて置いて二月八日には友人と各々子供を連れて横須賀の軍艦見に行つたその夜は江の島に泊る豫定で午後に東京驛を立ち、藤澤の遊行寺に詣で小栗判官の墓も見た。其墓守の老爺の顔は面白い。江の島は岩本樓に泊り、翌朝何とかいふ日蓮宗の立派な寺を見てから鎌倉へ廻つた。鎌倉も長谷あたりはポカ〳〵と逆上るほど暖かだつた。横須賀には丁度陸奥が入つてゐたのを幸ひ、友人のブラザアで司令部にゐる少佐が案内してくれた。海軍縮少問題

は横須賀を脅かしてゐた。私は横須賀へ來たのは之が初めての經驗だ。いくら行つても〳〵街で、斷岩絶壁が何處にもある。切通しが諸所にある。一寸變つた町だ。合ふ人は皆海軍々人だ。

陸奥の甲板に在つた巨砲は子供達を驚かした。水兵が甲板を水で洗つてゐた。

日は忘れたが、山縣公の國葬の行列が私の家の近所を通過した。國葬といつても豫想したほどにはなく淋しかつた。それが却つて山縣公らしい氣がした。

國から出て來たその息子の一人の家にお客をしてゐた伯父の伉儷が、その孫娘と玄孫娘とを連れて遊びに來たので、私は護國寺の大隈侯と山縣公の墓地を案内した。双方とも澤山參詣人があつたが、別けても大隈侯の墓地の前は賑つてゐた。山縣公の方では茶など接待してゐた。その後も、博覽會見物に來る親族を度々こゝへ案内させられた。

三　月

博覽會が始まるので前景氣を見に行つたりした位で、開館されると何度も行つたが、別に面白くもなかつた。國から親族の者が次ぎ〳〵に來るのを案内したのだ。親族の者達と川崎の大師へも行つた。大師へは二十三年ぶりで今度で二度目だ。いつ行つても面白くない土地だ。鶴見の總持寺を見た。佳いところだが、まだ生新らしくて寺の氣分がしない。何う考へても寺は京都の名物だ。泉岳寺も二十年ぶりで見た。若し田舍からの客が無ければ、私達は東京の名所を知らずにしまうだらう。

私の家の庭から渠川一條へだてて立つ陸軍省御用地の山には、處々に大木もあり、その間はこと〳〵く深い籔なのだ。毎日雉が鳴いてゐる。夜も鳴く。地震の前には屹度鳴く。小禽も多く來て鳴く。

こゝが枯野でゐる間――冬からこの月の末頃まで、毎日午頃兵器廠の職工が五六人枯茅の中に姿を現はし、口笛を吹いたり鴨綠江節を唄つたりした。川を隔てた私の家の背の一丁程先きの並びに廣い空地が有る。そこは藥工場の庭だ。そこへ女工連が十四五人乃至二十人位、矢張午頃に出て來て遊ぶ。午休みの時間と見える。その中に山の上に枯草の中から兵器廠の男工が何か冷かし文句を言ふ。女工が負けて居ず言ひ反す。男工はだん〳〵思ひ切つて猥褻な言葉を叫ぶ。女工も平氣で言ひ反す。凡そ二十分も叫び合ひ罵り合つてから双方とも引き上げる。彼等はその發する淫猥な言葉に依り、或る一種の滿足を感ずるものと見え、天氣さへよければ毎日その時間に必ずやる。

私は平日は面白いことにして二階で聞いてゐるが、日曜日だけは子供が學校を休み家にゐるので、子供が聞きはすまいかと思ふと、非常に厭な氣がして堪えられぬ。少さい子供は聞いても分らぬから構はないが、學校へ行く奴には分るから困る。一層兵器廠へその事を言つてやつて止めて貰はうかとも思ふが、彼等が一日中の最大快樂を奪ふに忍びずして捨てゝ置いた。

ずつと後になつて、この話を田山花袋さんに話すと、「それを書いたら面白いぢやないか」と、餘りに興味を持たれた樣だつた。自分に子の無い時分、平氣で樂しんでゐられた事が、子が生れ子の爲めを思ふと心配の種に成る。因はれ人に成るのだ。

この山に櫻も二三本あつて、咲いた。妙な見馴れない花が多く咲いた。

花が散り、草が繁つて人の姿を沒するやうに成つてから、職工は姿を見せなく成つた。

四月

花は見たくもないけれど、京都の新綠が見たいと思つたが、仕事が多くて出損なつてしまつた。十日會が近衞氏の家で開かれるので鎌倉へ行つた。やうやくダンスが流行り出した頃なので、海濱ホテルの廣間で西洋人や日本人や幾組もお出て踊つた。鎌倉の海の風はまだ寒かつた。

不愉快な日が續いた。

五月

子供が又生れた。又男の子だ。ワイフはとう〲神經を病んで近所の産婆を忌避し遠くから前のお産婆さんを呼んだ。運よく晝間で夏の初めと來てゐるから、萬事好都合だつた。散歩して歸つてみたら生れてゐた。難産でも何でもない、前々の時よりも産婦は元氣がよかつた。

近所の人が女中を世話してくれた。又産婆が看護婦をよこした。大人しくて落着いた良い看護婦でワイフの樣な我儘者には過ぎる。勿體ないと思つたが、性の惡いのと取り換へるにも及ばない。と思つてそのまゝにした。看護婦を歸した後で又派出婦を雇ひ入れた。今度は前のに懲りたから、別の會から入れた。之は氣が利いてゐてよく働いたが、女中たちに派出婦と成れば高給が得られる。と宣傳するには困つた。その結果、一人は私の家を出て派出婦に成つてしまつた。だから、派出婦といふのは獨身者が妾代用にするには便宜だが、使用人として家庭へ入れるのは、今の分では考へものだ。當局者の嚴重な監督と營業者の道德心に訴へて、根本的に改善するか撲滅させるかせ

ねばならぬ。國元から別に一人の女中をよこしてくれたので漸く助かつたが、實にこんな女中難に會つたことがない。

月の半から國民新聞の夕刊に一月ほどの豫定で、小説の續き物を書いた。「妻の留守」と題するもので、私が小説を新聞に連載した最初のものである。

春からこの頃まで毎日雜司ヶ谷の墓地へ散歩した。泡鳴君の墓、乙字君の墓、島村先生の墓、夏目漱石氏の墓の前をよく通る。皆生前に知つてる人々なので、その昔を懷しむ。その俤を胸に描けば生きてる人も別に變りはない。

或日友人と一緒にこゝを散歩してゐた時、偶然濱田玄達之墓と記した大きな墓の前へ出た。友人は

「をや、これは濱田榮子の親父の墓だ。親父はずゐぶん可愛がつて育てたものだらうが、あんな虫が付いちやお終ひだ。だから女の子はいくら可愛がつて育てても、詰らねえよ。野郎が出來たら父も母も何でもないものに成つちまうんだから」

と嘆息した。二人は互に娘を持つてるのだ。まだ小さい子供だけれど。

そこを抜けたところに大きな苗の問屋があるのを見出したから、朝顔やら鳳仙花やら桔梗やら百合やらその他いろ〳〵の苗を求めた。コスモスの苗を一つかみ内儀さんが負けてくれた。

苗屋がバスケツトのやうな物を持つて、苗を買ひ出しに來てゐた。幾人も來てゐる。

この頃から、日中は暑くて散歩出來なく成り、朝か夕かに散歩した。

季候の代り目の故か、この頃知人の家に多く不幸があつた。竹貫佳水君が死んだ。今年の夏、上州出身の操觚者の會の三山會の連中で伊香保へ遊んだ。あの頃は彼も仲々元氣だつた。又昨冬私の著書「三都見物」の會を友人達が雜司ヶ谷の開泉閣でしてくれた。その晩の彼も意氣壯んだつた。それが春からの胃癌で斃れたのだ。加藤朝鳥君の奧さんの訃報に接する同日に、立花秀二君の死を報じて來た。立花君は早大の文科生で創作家として非凡な天禀を持つてゐたが、永く病んで夭折した。私も此時ばかりは悲しかつた。それと前後して亡き從姉妹の長女の死を告げて來た。

女子聖學院をこの春卒業して、劇しい競爭試驗を經て漸く女子英學塾へ入學し纔か二日通學しただけで、突然喀血して斃れた。その哀しい葬式は田端の聖學院に擧行された。同級生や寄宿生や先生達の弔詞も交も語られた。女だけに女らしく泣き乍ら喋つた。銀鈴のやうに淸らかに、細い聲で弔辭を朗讀した少

女も半分は泣いてゐるのでハッキリ聞こえないが、女に別れるその悲しい心持はよく分つた。友に別れる悲みに疑りは無いが若い時分、友達と別れるくらゐ悲しく堪えがたいことが又と有らうか？

弔詞の間も讃美歌を唄ふ間にも牧師さんのお話の間も、會場のそこここにシク〳〵と泣く聲が洩れた。

皆泣いた。泣かせられた。私は今日、女の僞り無き涙を――少くとも我儘からでない涙を見た。

こんな葬式を一度でもしてもらへるものなら死んでも仕合せだと思つた位だ。

六　月

滿一年と三ケ月も連續して家内の空氣を險惡にし、夫をも妻をも自暴自棄にし、長男を神經病に陷らせ、人々にも時々飛ばつ散をかけて迷惑させたワイフの强度のヒステリーが、産後から不思議にケロリと癒えた。當時なほ我儘の痕を留めてゐたがその程度の我儘は現代の女としては十人並のところであつた。そして月を經るに從ひ益々從順に溫良に成る傾向を持つて來た。分娩と女の心理との關係は、是う迄顯著なものかと驚かれる。

この月の十日に田山花袋、前田晁、岡村千秋、川俣馨一の諸氏と共に、上州伊香保溫泉へ行き一泊した。熊谷のステーションで、暴風雨の兆あり、と記した赤い掲示板を見て笑つたのに、澁川から雨に成り濡れて伊香保の宿に着いたが、それから風雨次第に募り、遂に暴風雨と成つて、私達が投宿した千明の二階を搖かした。桐生から出稼ぎに來てゐるといふ藝者を二人呼んで、遲くまで飲み且つ談じた。

翌朝は昨夜の空をしら〳〵しく忘れた樣な好天氣で、山々がよく見えた。山に近い空は緑に上の空は碧に澄み渡つて朗かだつた。北の上越境の白根にはまだ白く雪が殘つてゐた。赤城山も美しい。

大阪每月に續き物の原稿を書くといふ田山老人だけ宿に留めて、私達は山へ登つた。山の上は西風が强く寒かつた。天神峠を越え榛名神社を見てから久しぶりで宿まで行つてみた。榛名神社は雨乞の時の神樣で、私の子供の時分、遠く私の地方の百姓に迄も信仰されてゐた。南は秩父あたりからさへも百姓が雨乞に來る。だが神主が丸で宿引よろしくの聲で神樂や何かをすすめてゐるのは憐れだつた。

歸りは俄に雨が降り相な雲が現はれたので、急いで山を下つた。山では郭公が淋しく二タ聲づゝ鳴くのが聞こえた。

留守に前橋の上州新報記者茂木君が、前橋で我々の歡迎會をするからとて宿まで態々迎へに來たとやらで、一風呂浴びると早速伊香保を發たせられた。

その晩は、前橋で有志の人々に依り大變手厚いもてなしを受け、腹一ぱい御馳走に成り前橋へ一泊した。翌日は田山氏指導の下に館林に行き大に遊んだ。

七　月

いつの間にやら内閣が變つてゐた。軍備縮少と經費節減とが流行言葉に成つた。儉約デーといふのが宣傳された。官吏の暑中休暇廢止が世間の問題と成つた。

物價が下向きになり、諸方の大商店で廉賣が行はれた。併しマアケツトへ行かうとすれば、此方の財布も空だつた。何時の間に凭う不印に成つたものやら、と氣が付いた時には早や世間の不景氣の波を浴びてゐたのだ。本の印税など春から一文も入らない。不景氣々々々々と云ふが、まだ金の有る人間が多いと見えて、今年になつて流行るものはヴイクトロウラの蓄音器と素人寫眞の流行、ダンスの流行と、景氣のいゝ事ばかりだ。此次に何が流行つて來るだらう。

森鷗外さんが死んだ。明治文壇の巨星だつた。水沫集の出た時の景氣は何うだつたらう。天下渇仰の的となつたのだ。

大正元年頃、新聞社の用事で私は度々氏を陸軍省醫務局に訪ねた。氏は醫務局長だつたから。

氏はその時、いつも香の良い兩切の舶來煙草をすゝめた。いつも何か實の有る話を一つ二つしてくれた。

チタ政府と日本政府と通商條約を結ぶといふ話が新聞へ出はじめた。チタの背後には赤色ロシヤが付いてゐて、双方の代表者が東京へ來たいと云つてゐるとの事だつた。この條約を締結して通商の道を開くことは、お互ひにいゝ事と思はれた。又先方の代表者が日本へ來てくれて大臣と會見すれば、話を早くまとめる上に於いて、こんなに好都合な話はないのだ。日本政府は二つ返事で彼等を東京へ歡迎するだらうと思つたのに、何故かそれを拒絕した。丁度腰越まで來た義經が鎌倉へ入るのを頼朝が斷つた樣にだ。何うも最初から凭ういふ事では、この協商も巧く行くか何うか疑問だと私は危ぶんでゐたら、不幸にして果して破れてしまつた。新聞には「何、談は破れても構はない向ふこそ損をするんだ。向ふは飢饉で困つてゐるんだ。だが此方は損はない」と云つた調子を見せてゐるが、それは負け惜しみだ。最初から破れていゝ談なら、日本は何で代表者を長春くんだりまでわざ〳〵送るものか？　先方だつて、日本でお厭なら

アメリカでも誰でも入つしやい、といふ態度だ。相互の損だ。

では何故、この談は破れたか？　この談判の暗礁は何かといへば、それは尼港問題だ。尼港問題に就き政府には責任があるのを、その責任を或は不可抗力とし或は流賊パルチザンとした。そして當時人民の敵愾心を煽いで胡麻化して置いたのだ。新聞や雜誌の中には、その胡麻化し宣傳であることを知つてゐる人々もあり知らぬ人々もあつた。併し、復讐物語や鬼ヶ島征伐（桃太郎）の傳說やで稚い時から妙にひねくれた思想を養はれて來た日本人は、元來愛國心とは排外思想攘夷論と異名同一事と考へてゐるのだから、尼港問題も之を軍閥政府の責任としてしまうよりも、北狄赤色ロシヤの暴行として敵愾心に抑へた方が、世間に受けがいゝ。出版物も之を營業としてやつてゐる以上、世間受けのいゝ方の說を賣り出すのは當り前だ。期せずして天下の新聞雜誌際物書籍は皆この尼港問題の書をソヴイエツト政府に嫁してしまつた。不知不識の間に日本軍閥のプロパガンダをやつてしまつた。そこで今度の通商條約だ。即ちこのプロパガンダが二年の後に大暗礁に成つてしまつた。政府はこゝで何うしてもこの尼港問題の片を付けなくてはならぬ。尼港問題に觸れないで條約を結ぶとしたら、必ず人民が默つてはゐまい。又々昔のポーツマウス條約の致す樣な燒打事件か、或はそれ以上の騷動が全國に流行らないとも限らぬ。だから政府は自分の置いた穽に自分が落ちてしまつたので、今度は何うでも尼港の片を付けなくてはならぬ。

ところがチタ政府もソヴイエツトも、そんな事は少しも御存知ないから、少しもお察しがない。「貴政府は貴國々民を瞞着して置いた手前、尼港問題の片から付けねばなりますまい。成程之は御道理。」とは言つて吳れない。そこで、この通商協約は破裂した。

玆に一つ滑稽な役者がある。それは反政府黨の態度だ　彼等は尼港事件の當時、荐りにその責任は政府に在りとして之を政爭の具に使用したものだ。然るに今度の條約の場合に成ると、一般人民の意向——それは政府のプロパガンダに引つ懸つて盲目にされてる一般人民の心持を憚り、衆愚に雷同して、盛んにソヴイエツトの代表等の頑冥を鳴らしたものだ。反政府黨の意久地の無さ加減は玆に到つて憐む可きものだ。

外務省の連中は常に世界を硏究してゐるのだから、この位見易い道理の分らない筈がない。よく分つてゐる。併し自繩自縛で動きがとれぬ。みすく＼折角の協商を水泡に歸して、魚を奪ひ返された盜人猫のやうに、口なめずりをしてキヨトンとしてゐるのだ。

二十四日は大掃除だ。内にゐても餘り役には立たぬと思つたから、邪魔にならぬ樣にと、紙を持ち親戚へ原稿を書きに行く。

この頃より蟬時雨盛ん也。私の田舍にてかなかなといふ蜩も二十四五日頃から鳴き始めた。

或天氣の好い日に、宮さまの葬式の列が音羽の街を過ぎて、護國寺の隣りの豐島ケ岡へと行つた。

朝から、金モールに飾られた禮服を着た武官や文官が、或は自動車で或は馬車で或は俥で引つ切り無しに通つた。中には徒步で蕭然として徐かに行く日に燒けて顏色の黑い身裝の立派な將校もあつた。走り使のやうな小者が俥に乘つて得意らしく往復した。

人々は道の兩側に堵を築いて立つてゐた。時が近づくと、人がだん／＼殖えた。警官汗を拭き／＼それを整理してゐた。

或天氣の佳い日に、宮さまの葬式の列が音羽の街を通つて、護國寺の方へ行つた。遙か九丁目の方からラッパの聲が聞こえた。銃をかついだ兵卒、劍を拔き馬に乘つた將校、砲車を引いた兵、悲しく轢む靈柩、遺族の人々を乘せた自動車、身分ある人達の乘物、禮裝せる文武官、外國使臣、後から又軍隊の列、それが九丁目から一丁目迄つゞいた。

去年の秋、こゝへ越して來てから、思ひも寄らぬ立派な葬式の列を觀ることが度々に成つた。

八月

暑い。今年の暑さは格別だつた。誰も彼も山へ行き又海へ行く。私も仕事に限りをつけて出懸け樣としてゐると、病氣に成つてしまつた。最初の十日程は頭が痛く、頭痛がなほると、今度は食慾が衰へ、次に腹痛と成つた。一月の間、たゞ悶々として、無爲に暮した。床に寢て臥し乍らいろ／＼の本を讀んだ。寢てゝ讀むには輕い本がよかつた。內容も輕く目方も輕い和綴の本がよかつた。十八史略をお隣りから借りて來て讀んだ。支那の英雄豪傑を友とし彼等の痛快な言葉を聞くのは仲々面白い。楚の項羽など尤も面白い男だ

支那歷史にも倦きて、手當り任せに日本の古典と云はず外國の小說戲曲と云はず、朝から晩まで讀みつゞけに讀んだ。餘り暑い爲めか來客も無い。臥てゐて只管讀書した。さうする中に今度は眼を惡くしてしまつた。少し讀むと霞むのだ。そこで、もういよ／＼無爲にして化するの他はなくなつたと觀念して、臥てゐた。之が一番樂でいゝ。

世の中に寢るほど樂は無かりけり

浮世のバカは起きて働け

楠山君の母堂が亡くなられ、この月の初めにその葬式が上野の護國寺にあつた。彼は京都から遺骨を捧じて出て來た。私は學生時代に此母堂のお世話に成つたことが少くないので、病を押して、暑い日だつたが出席した。式場では、十五年二十年も前の、今では全く忘れた樣な昔の知人に幾人か逢つた。古い時分のことをいろ〳〵想ひ出した。

式後、同級の友人と二人だけ上野の山の懸茶屋で涼しい風にあたり乍ら、語つた。

今年は知人が多く死ぬ年だ。

月の半頃、私の住む音羽町にお祭があつた。去年氏子中から金を集めて神輿を初め祭一式の道具を二萬圓かけて作つた。かけ値無しの二萬圓だ相だ。

初めて出來た神輿をかつぎ廻すのだから、町内の若い衆の意氣込といつたら大したものだ。何處の家でも揃ひの浴衣をこしらへたり御馳走をしたりして、お祭り氣分に成つたらしい。そんな時、日曜も祝日もお祭りも常に平日と變りの無い私の家庭などは、淋しいものだ。

でも、おみこしが來ると云ふので、子供に大通りまで引つ張り出された。

おみこしは此處彼處の大商店の前で長く揉まれた。いろ〳〵の接待があつた。その梨などを頬張り乍ら、五ツ紋の揃ひのかたびらに究屈相にセルの袴をはいた町内の有志が先に立ち、その後から太鼓やら榊やら旒やら猿田彥やらが續いた。馬に乘つた神主さんは皆が餘りのろ〳〵してゐるので先へ行つてしまつたのを知らないで「神主は何處だ〳〵」と探してゐるのも可笑しかつた。恐ろしい鼻高天狗の赤い面を被つた背の高い猿田彥の命が、持つてゐる鉾の身を挫いたとて。白丁を被た太鼓叩きの男から叱られてゐるのも可笑しかつた。

夜は一丁目にも三丁目にも九丁目にも、手踊りやらバカ踊りやら噺やら飾り物やら色々の催しがあつた。

稅務署から意外な所得金額決定書が舞ひ込んで來て、文壇の人々の膽玉を挫ひだ。三宅雪嶺翁七萬五千圓賀川豐彥君十二萬圓等の噂が、方々で茶飲み話にされた。

私は自分でも幾らと書いていゝやら分らないが、去年よりは百圓多くして千六百圓と申告して置いたところ、更に又申告の催促が來たので同じ樣に返事した。すると決定書を送られたから見ると、それは二千五百圓にされてゐた。稅務署では、何といふところからさういふ金額を考へ出したものだか私には合點が行かない。私はその金額の多い少いよりも、私の申告を全く

無視して一定の相談も無しに高飛車に決められたのが不愉快でならない。去年の決定書の千五百圓といふのは私が書き出したのではなく、役所から決定した來た額だ。私はそれを標準として百圓増して申告したのだ。然るに、税務署が之を全然無視して二千五百圓としたのは、如何なる理由に據るか？　私はたゞその理由を知り度いと思ひ、雨の降る日、病をこらへてわざ〳〵役所を訪ね、署長さんに面會を求めたが、そして署長さんは會つて下さる樣子だつたが、下役の腰辨さんが横合から出て來て遮り、その名も名宣らず役目も言はず、いきなり私に食つて懸り怒鳴り立てるので、私は羞かしくも有り喧嘩しても勝てさうもなかつたから、すご〳〵歸宅した。でも怪我もせずにすんだのは不幸中の幸だつた。決定書を見て毎日談判に押しかける人が多いので、役人も氣が立つてゐたか？　又は人民の中にもずゐぶんズウ〳〵しい奴が有つて、脱税をするから、それで政策上あゝいふ喧嘩好きの暴漢を養成して置くのかとも思ふが、さういふ政策は果して有効か何うか疑はれる。矢張、役所は深切第一の標語で行つた方が結局、安全第一ではなからうか？　深切にして呉れれば、人は自づと服從する。

九月

コレラが流行りだした。春からダンスや素人寫眞や景氣のいゝ物ばかり流行ると思つてゐたら、思ひがけ無くコレラが始つた。最初福岡にコレラが有ると聞いた時は對岸の火災の樣に思はれた。まだ〳〵こゝ迄來るには間が有らう。その中には冬に成り撲滅する。と氣にも止めなかつた。それが、銚子に初まり忽ち東京へ押して來た。朝刊にも夕刊にも新聞はコレラの記事ばかりなので、飯前に新聞を讀むと食事も進まぬが、氣に懸るからつひ讀む。魚屋の前を通ると、平素なる華客が日に押しに押し並ぶ夕刻でも、コレラ以來、人つ子一人立つてはゐない。梅干を食べたり鑵詰を買つて來てたべたりした。外出して喉が乾いても湯さへ浮つかり飲めぬ。でもまだ下町だけの事だらうと高をくくつてゐると小石川にも初つた。學生が三越ですしを食べてコレラに成つた。水道端に出た。大學の先生だとかいふ。それどころか町内の五丁目のパン屋からも患者を出した。パンも浮つかり食べられぬ。そこのパン屋は細君の内職で主人は新聞記者だといふ。職業柄何だかお隣に初つた樣な氣がする。パン屋の隣の蕎麥屋からは、その二日前の晩にそばを取つて食べたのだ。何吞、々々。そこで、いよ〳〵懇意な醫師に來て頂いて家内こと〳〵く豫防注射をした。少しいゝと思つて原稿を書きはじめたのに、注射で又ぞろ熱を出し肩が痛んで書け

ず、その月依頼されて原稿は中止した。編輯人諸君に違約の罪を謝するの他はない。

先の差配さんが止して、新に人が代つた故か、何か他の理由か、兎に角、家の手入れが初つた。大工や植木屋が毎日來て、破れたところを修繕してくれたので、大變いゝ氣持に成つた。こんなことはこの五六年このかた無いことだ。借家人は大正六年の春以來、いぢめられ續けて來たのだ。

夏の初めに苗を買つて來て植えた庭の秋草が、漸く花を見せてくれる迄に成つた。これは長男の丹誠だ。だが折角蕾を持つと三男が行つて百合とコスモスを皆根こぎにし、桔梗と鳳仙花との花をむしり取つてしまつた。たゞ垣根の朝顔だけは生ひ茂つて毎朝無數の花を着けた。

川向ふの山に春先き咲いた得體の知れなかつた花は、實を結んで見ると胡桃だつた。青葉の中に青い實が鈴生りに生つて來た。いまに熟したら何とかして取らうと思つたが、川向ふなので直ぐにも取れなかつた。すると、或日の午後、私が書見してゐる時、高いところでガヤ／＼いふから、見ると、惡少年と不良青年が樹に登つて實を捥いでゐた。奥の方には栗も澤山有つた。それも皆取られた。

ケマル・パシヤがスミルナを攻略し白色人に一泡吹かせた。何の新聞でも丁度南阿戰爭の時にブウア軍に同情した樣に　壯んにケマルを讃め契つてゐる。

惡くて九月も暮れたが、コレラは尚ほ益々猖獗を極めた。

十月

樋口一葉女史の碑が、廣瀬氏その他大藤村の人々に依つて、女史の發祥の地たる山梨縣大藤村に建てられた。その碑除幕式に參列せよとの事故、馬場孤蝶戸川秋骨氏等の尻馬に乘つて參列かた／＼甲州見物をして來た。野には葡萄が熟してゐた。甲府のステーションでは、警官が出張して防疫の爲めに降りた客を取り調べてゐた。私達、東京からの切符を持つた者は、そのテント張りの中へ連れて行かれてしらべられた。

英國の内閣も交迭した。

イタリーにも政變が起つた。

世は何となく新らしく成りつゝ有る心地がする。

夏の初めから校正してゐた新著「虐げられた笑」が漸く出來上つて市場へ出たのは、今年になつて一番嬉しいことだ。

十月三日頃の寒い雨で蝉の鳴くのはやんだ。まだかなかなとこほろぎは鳴いてゐる。

自叙傳（六）

大杉榮

一

父の家は尾上町の直ぐ近所の西ヶ輪と云ふ町の、練兵場の入口の家に引越してゐた。もと谷岡と云ふ少佐が住んでゐて、僕は其の息子と中學校で同級だつたので、前からよく知つてゐる家だつた。谷岡は幼年學校や士官學校の試驗にいつも失敗してとう／＼軍人になりそこねて、後慶應にはいつて、今はどこかの新聞の經濟記者になつてゐると聞いた。そして其の家の裏には、先年社會主義思想を抱いてゐると云ふので退職された、松下芳男中尉が住んでゐた。勿論まだ當時はほんの子供で僕の弟の友達だつた。

玄關にはいると、僕は知つてゐる人達や知らない人達の多勢が皆な泣きながら、あつちへ行つたりこつちへ行つたりしてうろうろしてゐるのを見た。僕は母はもう死んだのだと思つた。しかもまだ今死んだばかりのところだと思つた。そして其のうろうろしてゐる人達の一人をつかまへて、『お母さんはどこにゐます』と聞いた。が、其の女の人はちよつと大きく目を見はつて見て、何んにも答へないで、わあと聲を出して泣いて、逃げるやうにして行つて了つた。僕は又もう一人の女の人をつかまへた。が、やはり又、前と同じ目に遭つた。

仕方がないので、どこか奥の方の室だらうと思ひながら、先づ先きの人達の逃げこんだ玄關の直ぐ次ぎの室にはいつた。其の室と其の奥の座敷との間の襖は取りはづされて、其の二つの室一ぱいに多勢の人達が座つてゐた。僕がはいつて行くと、皆んなは泣きはらした目をやはり先きの人達と同じやうに大きく見はつて僕の顔を見つめてゐたが、僕が又『お母さんはどこにゐます』と聞くと、其の中の女の人達は又わあと聲をあげて泣きだした。そして誰れ一人僕の問ひに答へてくれる人はなかつた。僕は變な氣持になりながら、仕方なしに、又襖をあけて玄關の奥の一室にはいつた。そこは母の居室になつてゐたものと

見えて、箪笥だの鏡臺だのがならんでゐるだけで、誰れもゐなかつた。僕はそこに突つたつたまゝ、一體どうした事なんだらうと思ひながら、ぼんやりしてゐた。

　そこへ、それが誰れだつたかはもう忘れて了つたが、とにかく母と親しくしてゐたそして僕も好きだつた或る軍人の細君がはいつて來た。

『あなたはまあどうしたんです、お先きにゐらつしたんですか。』

　彼女もやはり目を泣きはらしながら、しかししつかりとした口調で叱るやうに云つた。僕は其の『お先きに』と云ふ言葉が何んの事だか分らなかつた。しかし、とにかく、

『いや。僕は今東京から來たんです。』

　とだけ答へた。

『それぢやあなたは新潟へはゐらつしやらなかつたんですか。』

『え、行きません。母は新潟にゐるんですか。』

『あゝ、それぢやあなたは何んにも知らないんですね。まあ……
……』

　と云ひながら彼女はほろ／＼と涙を流した。

『母はもう死んだんですか。』

『えゝ、きのふ新潟病院でお亡くなりになりました。そして、けふ、もう直ぐ皆なさんでこちらへお歸りの筈です。』

　僕はさう聞くと、成程うちのものは誰れもゐないなと氣がついた。そして同時に又、始めて自分で電報と云ふものを受取つた僕が、其の差出人のところはちつとも見ずにたゞ中の『母危篤直ぐ歸れ』と云ふのだけを見て、驚いて向ひの大久保から旅費をかりて上野の停車場へ馳けつけた事を思ひついた。

『お着きです。』

　と云ふ聲がして、皆んなが玄關へ出て行くのが聞えた。

『さあ、お着きださうです。』

　彼女はぼんやりと考へてゐる僕を促すやうに云つて、玄關へ出て行つた。僕も其のあとに隨いて行つた。

　棺の前後に父や弟妹等や其他四五人の人達が隨いて、今車から降りたばかりのところだつた。

　あとで聞くと、さつき僕が車から降りた時にも、やはり『お着き』だと思つて多勢出て來たのだが、僕がたつた一人でしかもうろ／＼しながら『お母さんはどこにゐます』なぞと聞くもんだから、これやきつと氣でも變になつたんぢやあるまいかと、皆んながさう思つたんださうだ。

　母は卵巣膿腫、即ち俗に云ふ脹満で死んだのだ。

　其の少し前に、九人目の子供を流産してからだを惡くしたの

で、暫くどこかの温泉へ行つてゐたのだが、歸つて直ぐ手術をすると云つて新潟へ出かけたのださうだ。しかも『なあに、二週間もすれば、ぴん〳〵したからだになつて歸つて來ますよ』と云つて、大元氣で出かけたのださうだ。

『そんな風でしたし、それにお母さまは榮は今試驗前で勉强で忙しいんだから心配さしちやいけないと仰つて、どうしてもあなたのところへお知らせするお許しが出なかつたんですよ。』

母の死骸が着いた晩、三の町のお婦と云つて、昔し僕の家が新發田へ行つた其日から母の髪結ひさんとして出はいりして、そして其後髪結ひをよしてからもずつと母の一番親しいお相手として出はいりしてゐた女が、お通夜をしながら僕に話しだした。僕が去年の夏、此の自叙傳を書く準備に二十年目で歸つと新發田へ行つた時にも、僕が最初に訪ねたのはもういゝ婆さんになつてゐた此のお婦だつた。

『すると、三四日もしないうちに、危篤と云ふ電報なんでせう。で、私、お子さん方を皆さんお連れ申して參つたんですけれど、それやもう大變なお苦しみでしてね。注射でやつと幾時間幾時間と命をお止め申してゐたんです。時々、榮はまだかまだかと仰りましてね、そしてあの氣丈な方がもう苦しくて堪らないから早く死なしてくれ死なしてくれと仰るんです。それでも、私がもう直ぐお兄さまがゐらつしやいますからと云ふと、うんうんとお頷き遊ばして默つてお了ひなさるんですもの。それや、一どんなにかあなたをお待ち遊ばしたんですか。幾度も早く死なして死なしてと仰るんですけれど、其のたびに私があなたの事を申しあげると、頷いては默つてお了ひなさるんですもの。』

お婦は一晩ぢう、殆んど此の話しばかり繰返して云つて聞かしては、自分も泣き又僕をも泣かした。

『それに、お母さまは、お婦丈夫になつて直ぐ歸つて來るからねと大きな聲で仰つてお出かけなすつたんだけれど、實はご自分でも覺悟をしてゐらつしたんですよ、私、お子さん方をお連れして行く時に、お召物を出しに簞笥をあけて見ますと、お母さまのお召物に何んだか妙な札がついてゐるんです。よく見ますと、それが皆んな春とか菊とか松枝とかとお孃さん方のお名前が書いてあるんでせう。私、腹が立ちましてね、何にもそんな覺悟までして、わざ〳〵新潟くんだりへ手術なぞしにゐらつしやらなくてもよささうなものだと思ひましてね。私、其の事はお母さまに隨分お怨みを申上げましたわ。』

お婦は又こんな話しもした。そして、母の死は實は醫者の過失なので、手術後腹が痛み出して又切開して見たら中から糸が出て來て、大變な腹を持つてゐたなぞとも話した。これは、そ

こに立ち會つた人達が皆んな非常に憤慨して話して、病院へ何んとか掛合はなければならんなぞと云つてゐたが、父は悲痛な顔をしながら『いや、濟んだ事はもう仕方がない』と一人あきらめてゐた。

　そんなお通夜が二晩か三晩續いて、大阪にゐたお祖母さん（母の母）と僕の直ぐ妹の春とが到着すると直ぐ、葬式が出た。

　ちやうど新發田の町の殆んど端から端までの一番賑やかな大通りを通つて、僕が位牌を持たせられて、寶光寺と云ふ舊藩主の菩提寺まで練つて行つた。新發田にもう十幾年もゐて、それに母はそとへ出ると新發田言葉で大きな聲で會ふ人毎に挨拶して歩くと云ふ程だつたので、見送りの人も隨分多かつた。そして殆んど通りの町ぢうの人がそとへ出て見送つてくれた。

『あんなご立派なお葬式はまだ見た事がありません。』

　と云つて、三の町のお嬶なぞは今でもまだ、其の人並すぐれた小さなからだを搖すりながら、おかめのやうな顏を皺くちやにして自慢にしてゐる。

　葬式が濟んでから、母の棺を六人ばかりの人足にかつがして僕と弟の伸とが引つついて、五十公野山と云ふ僕等がよく遊びに行つた小さな山の奥の方へ火葬に行つた。人足共は其の場所まで行くと、先づ藁を敷いて、其の上へあたりの松の枝を折つて來ては積み重ねて、そして其の上へ棺を乘せて又松の枝を積み重ねた。そして自分等はそれから二三間離れたところに蓆を敷いて、車座になつて、持つて來た大きな德利だの重箱だのを幾つか並べたてた。かうして朝まで飲みあかしながら、死骸のすつかり骨になつて了ふまで待つんだと云ふ。

　僕は其の人足共の云ふまゝに、一束の藁に火をつけて、其の火を棺の一番下に敷いてある藁の層に移した。藁は直ぐに燃えあがつた。其の火は更に、其の上の松の枝や葉に燃え移つた。そして僕は其の炎々として燃えあがる焔の中に、ふだんのやうにやはり肉づきのいゝ、たゞ夏のさ中に幾日も其儘置いたせいかもう大ぶ紫色がかりながらも、眠つたやうにして棺の中に横はつてゐる母の顏を見た。僕は其の棺箱が燒けて、母の顏か手か足かゞ現はれて出たら、堪らないと思つた。それでも僕はぢつとして其の焔を見つめてゐた。

　人足共の一人は急いで僕等兄弟をわきへ連れて行つて、直ぐ歸るようにと勸めた。もう日も大ぶ暮れてゐたのだ。そして僕は其の場所へ行つたら直ぐ歸るようにと豫め云いつけられて來たのだ。僕らは其の人足に送られて山の麓まで出て、そこから車に乘つて歸つた。

二

　母の死骸がうちへ着いた時に、僕は其の棺のそばに、禮ちやんが立つてゐるのを見た。禮ちやんも二三日前から新潟の母のところへ行つてゐたのだ。たしか其の晩だつたと思ふが、夜遅くなつてから、お通夜をすると云ふのを無理やりに皆んなに歸れ歸れと勸められてうちへ歸つた。そして、高級副官の父のもとにやはり旅團副官をしてゐた何んとか云ふ中尉の細君が、これはまだ若いそして聯隊ぢうで一番綺麗な細君で、僕は前から隨分親しくしてゐたのだつたが、そつと僕の肩を突つついて、しかし高い聲で、僕に禮ちやんを送つて行くようにと勸めた。ほかの人達も、それと一緒になつて、同じやうに僕に勸めた。僕は急に胸をどき／＼させながら、ちよつとためらつた。禮ちやんはもぢ／＼しながら、にこ／＼して、僕が座を立つのを待つてゐるやうだつた。綺麗な細君もやはりにこ／＼して、僕の顔を見てゐるやうだつた。僕は此の二人の若い細君の微笑みに妙に心をそゝられた。

　僕は直ぐ提灯を持つて、禮ちやんと一緒にうちを出た。そとは眞暗だつた。禮ちやんと僕とは殆んどからだを接せんばかりに引つついて行つた。二人がこんなにして歩くのはこれが始めてだつたのだ。僕はもう母が死んだ事も何にもかも忘れて了つた。そして提灯のぼんやりした明りを二人の眞ん中の前にまし出して、益々引つついて歩いて行つた。二人は何にか聲高に話しながら笑ひ興じてゐたやうだつた。

『あら、齋藤さんぢやありませんか。』

　二人は向ふから軍服を着て勢よく歩いて來る男にぶつかりさうになつて、禮ちやんは其の男の顔を見あげながら叫ぶやうにして云つた。それは禮ちやんのうちと同僚の齋藤中尉だつたのだ。此の中尉は、僕がまだ幼年學校にはいる前、彼れがまだ見習士官だつた頃から、僕もよく知つてゐた。が、中尉の方ではちよつと僕等が分らないらしかつた。

『君は何んだ。』

　中尉は禮ちやんの方へ食つてかゝるやうに怒鳴つた。

『いや、僕ですよ。』

　僕は禮ちやんをかばふやうにして一足前へ出て云つた。中尉はぢつと僕の顔を見つめてゐたが、

『やあ、君でしたか。これはどうも失禮。僕は又………いや、これからお宅へ行くところなんです。どうも失禮。』

と、多少言葉は和らげながらも、まだぷりぷりしたやうな様子で行つて了つた。

『まあ、ほんとにいやな齋藤さん。お酒の臭ひなぞぷん／＼さ

して。』

禮ちやんはもう大ぶ行つて了つた後ろをふり返りながら呟いた。

『でもきつと、僕らがあんまりふざけて來たもんだから、此の邊の何にかと間違へたのかも知れないね。』

僕は少々氣がさして云つた。僕等が歩いてゐる西ケ輪の通りと云ふのは、其の裏のお小人町と一緒に、主として軍人をお得意とする魔窟だつたのだ。

『さうね。けれど、それぢやあんまり失禮だわ。』

禮ちやんはまだ多少憤慨しながらも、しかし自分を省みない譯には行かなかつた。

二人は暫く默つて、しかし相變らず殆んど接觸せんばかりに引つゝいて歩いて行つた。

『ねえ、榮さん、私お嫁に行つて隨分つらいのよ。』

禮ちやんはしんみりした調子で口を切つた。

『どうして?』

『おしうとさんがそれやひどいよ。お母さん方はまださうでもないんですが、お父さんがそれや難しい方でね。本當に箸のあげ下ろしにもお小言なんだけれど、そんな事はまだ何んでもないわ。私がちよつとうちを留守にすると、其の間に私のお針箱から何にやかまで引掻き廻はして何にか探すんですもの。私もうそれが何によりもつらいわ。』

『へえ、そんな事をするんかね。』

僕は驚いて彼女の顔を見た。彼女は默つてうつむいてゐた。が、僕にはそれ以上何んと云つて話していゝのか分らなかつた。僕も仕方なしに默つて了つた。

道は川のそばだのあまり家のこんでゐないところだので隨分寂しかつた。それでも二人は又暫く默つて、引つゝき合つて歩いて行つた。

禮ちやんは又口を切つて、東京での僕の學校の樣子を聞いた。僕は去年の暮れに、此の禮ちやんのためにだけでも偉い人間になつて見せると私かに決心した事を思ひ出した。が、そんな事を話さうとも思はず、又よし思つたとしても話しする事は出來ずに、たゞ禮ちやんの聞くまゝに受け答へしてゐた。そしてとうとう禮ちやんのうちの直ぐ近くまで行つた。

僕はもう歸ると云ひだした。禮ちやんはぜひちよつと寄つて行けと引きとめた。

『僕はいやだ。さつきの齋藤さんのやうに、又隅田さんに變に思はれるかも知れないからね。

僕はそんな事を云ふつもりでもなく、ふいと戯談のやうに云

つて了つた。

『あら、いやな榮さん。それぢやいゝわ。』

禮ちやんは手をあげて打つまねをしながら、ちよつと僕をにらんだかと思ふと、其儘ばた／＼と駈けだしてうちへはいつて了つた。

僕はぼんやりしたやうになつてうちへ歸つた。

翌日、禮ちやんは又うちへ來た。そして其後も、毎日、日に一度はきつとやつて來た。

母の死骸がうちにあつた間は、二人とも顏を見合はしても先夜の事などはまるで忘れたやうにしてゐたが。そして又實際いろんなほかの人達と一緒に母の死に就いての歎きに胸を一ぱいにしてゐたが。葬式が濟んだ翌日からは、二人とも顏さへ合せれば、もう母の死の事などは忘れたやうになつて、そしてまだほんの子供のやうな氣になつて、先夜二人で門を出た時と同じやうに一緒に笑ひ興じたり騷いだりばかりしてゐた。

例の綺麗な細君も殆んど毎日のやうに見舞ひに來た。そして二人のそんな風なのをそばで默つてにこにこしながら眺めてゐて、時々、本當にお二人は仲善さゝうね、なぞとからかつてゐた。

お祖母さんは苦々しさうにして、いつも顏をしかめてゐた。

此の綺麗な細君は、其後日露戰爭の留守中に何にか不都合な事があつたとかで離緣になつたと云ふやうに聞いたが、そしてそれから間もなく一度銀座でたしかに其の人らしい顏をちよつと見たのだが、どこにどうしてゐる事か。

しかし、學校の入學試驗を直ぐ目の前に控へてゐた僕は、いつまでもさうしてゐる事が出來なかつた。母の葬式が濟んでから一週間目位で、僕は又上京した。そして又、母の事も禮ちやんの事も綺麗な細君の事も何にもかも忘れたやうになつて、勉強しだした。

三

十月の始めになつて、僕は東京中學校（今はもうないやうだ）と順天中學校との五年の試驗を受けた。

今はどうか知らないが、其頃の東京の私立のへぼ中學校では殆んど毎學年毎學期に各級の入學試驗をやつた。そして其の毎學期の始めに二三度生徒募集をして、其のたびに試驗を受けさしては受驗料を儲けるを例としてゐた。東京中學校のも順天中學校のも其の最後の第三回目の生徒募集の時だつた。

僕は其のどつちかにどうしてもはいらなければならないと思

つた。が、其の試驗は二つとも殆んど同時に行はれるのだつた僕はもう自分の學力には自信があつた。しかし、萬一の時にはと思つて、少し早くから始まる東京中學校のは自分で受けて、順天中學校のは換玉を使ふ事にきめた。それには、ちようどい い、下宿の息子の友人で僕もそれを通じて知つてゐた早稲田中學卒業の何んとか云ふ男があつた。

ところが、僕自身で受けた東京中學校の方は、僕の大嫌ひな用器畫が三題ともちつとも分らないで、其日でもう落第となつた。換玉の方はうまく行つて、了ひまで通過して行つて、及第となつた。そして僕は其のお蔭で順天中學校の五年級にはいつた。

しかし僕は、かうして話しを年代通りに進めて行く前に、さつきの禮ちやんの事が少し氣にかゝるので、と云ふのは、あんな甘いしかも實も何んにもない初戀の話の續きを今後まだあちこちに挾んで行くのは少し氣が引けるので。少々年代を飛ばして、今こゝで、話しついでに其後のいきさつをも一と思ひに皆んな話して了はうと思ふのだ。そしてこんどは、禮ちやんの夫の隅田が死んだ時の二人の關係の場面になるのだから、前の話のいゝ對照になると思ふ。で、猶更それを先づ書きたいのだ。

禮ちやんとは其後三度會ふ機會を持つた。最初の一度は、殆んど一度とも云へない位なので。其後四年ばかりして、僕が外國語學校を出て社會主義運動に全く身を投じようとした頃の事だつた。堺君や田川大吉郎君や故山路愛山君などが一緒になつて、即ち當時の社會主義者や國家社會主義者などが一緒になつて、電車の値上反對運動をやつた。そして日比谷で市民大會と云ふのを開いて、そこで集まつた群集の力で電車會社や市會なぞへ押しかけた。其の前日だ。僕は堺君の家からあしたの市民大會のビラを抱えて、麹町三丁目あたりからそれを撒き歩きはじめた。其時僕はふと禮ちんらしい姿を道の向ふ側に認めた。たゞそれだけの事なのだ。

が、あとで聞くと、それは本當に禮ちやんだつたので、僕が其の市民大會の直ぐあとで兇徒聚集と云ふ恐ろしい罪名で未決監に入れられた時に、禮ちやんが僕の留守宅に見舞ひに來てくれたさうだ。其頃僕は僕よりも二十歳ばかり上の或る女と一緒に下六番町に住んでゐたのだ。

其の次ぎの二度目は、それから又二三年してからの事と思ふが、彼女と其の夫とを東京衛戍病院に訪ねた。どうして彼女等がそこにゐる事を知つたのか、又隅田がどんな病氣でそこにゐたのかも忘れて了つたが、僕が其の病室にはいるといきなり

禮ちやんはそとへ飛び出して行つて暫く姿を見せなかつた。そして隅田はマッサアジをやらしてゐた。

『はあ、奴、知らないお客だと思つて逃げ出したんだ。』

隅田は笑ひながらさう云つて、其のマッサアジ師に彼女を呼びにやつた。

彼女は『まあ』と云つて、びつくりしたやうな顔をしてはいつて來た。

其時隅田は、前に東京へ出て英語を勉强したいために憲兵になつて、憲兵何んとか云ふ學校にはいつてゐたが、其後どこかへ轉任して、今病氣で東京に歸つてゐるんだと云ふやうな話しをしてゐた。そして僕が社會主義者になつてもう二三度入獄してゐる事に就いても、困つたものだがしかし君の性格上仕方があるまいと云ふやうな事を云つて、禮ちやんはそれに『えゝ、あんまり出來すぎるからだわ』と辯解して附け加へてゐた。

が、其時には僕は三十分ばかりで歸つて、其後又彼女夫婦がどうなつたかは暫くちつとも知らなかつた。

すると、それから又四五年して、僕が例の神近や伊藤との複雜な戀愛關係にはいり始めた頃の事。最後の三度目に、又突然と禮ちやんが現はれて來た。

或日僕は、僕がフランス語の講習會をやつてゐた牛込の藝術俱樂部へ行つた。そして僕が借りてゐた一室のドアを開けると、そこの長椅子に禮ちやんが一人しよんぼりと腰をかけてゐるので、實にびつくりした。

『隅田は大變肺を惡くしましてね、熊本の憲兵隊長をしてゐたのをよして、今はこちらに來てゐるんです。そして寢たつきりでゐるんですが、あなたが前に肺が大變惡かつたのに今はお丈夫だと云ふ事を聞きましてね、ぜひあなたにお會ひして、あなたの肺のお話しを聞きたいつて云ふんですの。お醫者もいろんな事を云つてちつとも分りませんし、隅田ももう長い間の病氣ですつかり弱りこんでゐるんです。』

禮ちやんが、いろ〳〵と詳しく話してゐるうちに、もうフランス語の時間が來て、生徒も二三人やつて來た。

『え、それぢや明日お宅へ參ります。』

と云つて、僕は禮ちやんを入口まで送り出した。

翌日行つて見ると、隅田の病氣は話しで聞いたよりもよほど惡いやうに見えた。今まで僕が見た、肺で死んだ幾人かの人の、もう末期に幾ばくもない時のやうな、いろんな徴候を持つてゐた。僕はこれやもう一月とは持つまいと思つた。それでも、僕が惡るかつた時の容體やそれに對する手當などをいろ〳〵と聞

かれるので、僕も詳しくいろんな話しをして、何に大丈夫ですよなぞと慰めた。が、話してゐるうちにだん／＼咳がひどくなるので、僕はあんまり長く話してゐてはいけまいと思つて、皆んなが切りにとめるのも聞かずに、禮ちやんにだけざつと僕の思つた通りの事を話して、いゝ加減に切りあげて歸つた。

其後も折々見舞はうとは思つたのだが、僕は伊藤の行つてゐる九十九里の御宿へ行つたり來たりしてゐて、其のひまがちつともなかつた。そして、さうかうしてゐるうちに、禮ちやんから隅田死亡と云ふ知らせを受けとつた。

早速行つて見ると、隅田の死骸のそばでは、多勢の男女が集まつて、大きな珠數のやうな綱のやうなものを皆んなでぐるぐる廻はしては、ナムアミダ！ナムアミダ！と夢中になつて怒鳴つてゐた。下のほかの室にも僕の知らない多勢の人がゐた。禮ちやんは直ぐ僕を二階へあん内して行つた。

僕は今でもまださうだが、死んだ人の家へ行つてどうお悔みを云つていゝか知らなかつた。で、默つてたゞお辭儀をした。

『やつぱりあなたの仰つた通りでしたわ。』

禮ちやんはすつかりやつれて泣顏をしながらも、それでもいつもの生々としたはつきりした聲で話しだした。

『私こんな事を云つちやいけないんでせうけれど、隅田のなくなる事はもうとうから覺悟してゐましたし、今ぢや隅田のなくなつた悲しみよりも私のこれからのからだの方がよつぽど心配なんですの。』

僕は來る早々意外な事を聞くものだと思つた。

『經濟上の心配ぢやないんです。それはどうとかしてやつて行けます。けれど、隅田がなくなつて方々から親戚のものが集まつて來てから、私今までまるでいぢめられ通しでゐるんです。そしてこれからも多分一生いぢめられ通しで行くんだと思ふんです。』

僕は益々以外な事を聞くものだと思つた。そしてやはり默つたまゝ聞いてゐた。

『隅田の國の方の人が來ると直ぐ、私をつかまへて、おやお前はまだ髮を切らずにゐるんかい、と云ふんでせう。私、今時まだそんな事を云ふ人があるのかと思つて、何んとも返事が出來なかつた位ですわ。するとこんどは、壁にかけてあるヴァイオリンを見つけて、あゝこれは何んとかさんに直ぐあげてお了ひ後家さんにはもう鳴物など一切要らないんだから、と云ふんですもの。私、髮なんか切る事は何んとも思ひませんわ。又、ヴアリオンなどもちつとも欲しかありませんわ。けども今そんなにして、皆んなの云ふやうに本當の尼さんのやうになつたとこ

ろで、それがいつまで辛棒出來るかと思ふと、自分でも恐ろしくなりますの。私今まで軍人の奧さんで、殊に日露戰爭の間に、旦那が戰死して直ぐ髮を切つた方を澤山知つてゐますわ。そしてそれが二三年か四五年かしてどうなつたかもよく知つてゐますわ。其儘立派な未亡人で通した方はまるでないんですもの。そして本當の尼さんのやうな生活にはいつた人ほど、それがひどいんですもの。』

僕はたゞの平凡な軍人の細君と思つてゐた彼女が、これほどはつきりと、謂はゆる未亡人生活を見透してゐるのに驚いた。

『それであなたはどうしても其の辛棒が出來ないと云ふんですか。』

僕は彼女がそれに就いてどこまで決心してゐるのかを問ひたゞさうと思つた。

『いゝえ、どこまでも辛棒して見るつもりです。今私は隅田の郷里に歸つて、世間との一切の交際を斷つて、たゞ一人の子供を育てあげる事と、隅田の位牌を守つて行く事との、本當の尼さんのやうな生活をするように、毎日皆んなから責められてゐます。しかしそれも辛棒して見るつもりです。どこまでそれで辛棒出來るか知りませんが、とにかく出來るだけどこまでゝも辛棒して行きます。』

『けれどもし其の辛棒が出來なくなる恐れがあるんでせう。其時にはどうするつもりなんです。』

『え、それが心配なんですの。恐ろしいんですの。けれど、やつぱり、どこまでゝも辛棒しますわ。』

『で、あなたの方のお父さんやお母さんはどう云つてゐるんです。』

『私には可哀相だ可哀相だと云つてゐますが、やはり一旦隅田家へやつた以上は、隅田家の云ふ通りにしなければならんと云つてゐます。』

『あなたがそうまで決心してゐるんなら、それでもいゝでせう。しかし、出來るだけやはり辛棒はしない方がいゝです。辛棒はしても、もうとても出來ないと思ふ以上の事は決して辛棒しちやいけません。それが墮落の一番惡い原因なんです。』

『でも、それでも辛棒しなきやならん時にはどうしませう。』

『いや、辛棒しなきやならん理屈はちつともないんです。そんな場合には、もう一切をなげうつて、飛び出すんです。直ぐ東京へ逃げてゐらつしやい。僕がゐる以上は、どんな事があつても、あなたを勝たして見せます。』

『えゝ、有りがたう御座います。私本當にあなたをたつた一人の兄さんと思つてゐますわ。けれど私、どうしても辛棒します。

どこまでゝも辛抱します。たゞね、本當に榮さん、私あなたをたつた一人の兄さんと思つてゐますから、どうぞそれだけ忘れないで下さいね。」

僕は彼女と殆んど手を握らんばかりにして、又近いうちに會ふ約束で分れた。

其の翌日、隅田の葬式があつたのだが、僕は着て行く着物も袴も何んにもなし、又借りるところもないので、わざと遠慮して、そこから餘り遠くない麻布の神近の家で一日遊んで暮らした。

それから幾日目だつたか、或日、禮ちやんが麹町の僕の下宿に訪ねて來た。

いよ／＼あすとかあさつてとか、隅田の郷里に歸るので、牛込の或る親戚へ用のあつたのを幸いに、内緒で立ち寄たつとの事だつた。話しはやはり、いつかの彼女の家での話しを、もう少し詳しくして繰返したに過ぎなかつた。が、さうして彼女と話しゝてゐる間に、僕は幾度彼女の手を握らうとする衝動に驅られたか知れなかつた。

しかし、彼女もいつまでさうしてゐられる譯でもなく、又僕もう藝術倶樂部へ行く時間が迫つてゐたので、下宿を出て、一緒に倶樂部の直ぐ近くまで行つた。そして無事に、お互にご機嫌よう」と云つて分れて了つた。

世界經濟難原因批判

世界の經濟は何故行詰つたか

山川均

一

『世界經濟難の原因』を批判せよといふことであるが、此の問題は本誌の九月號に、既に堀江博士によつて批判せられて居る博士によれば、歐羅巴の經濟が今日の如き行き詰りのどん底に陷入つたのは、『其最大の原因は戰爭當時軍事費の財源に充てる爲めに、國民の所得を吸用し、而して之を濫費した一方に、財源の一部分を公債の發行に仰ぎ、公債元利金の形に於て、戰後の今日に負擔を及ぼしつゝあるの一事に外ならない。』

ところが此の見解に對しては、同じく本誌の十一月號に於て福田博士は有力な抗議を提出せられて居る。博士は『斷乎として此見解を以て一の大なる誤謬なりと認め』、『此の誤謬を打破ることは、世界の經濟恢復の問題を考究する者が、先づ第一に爲さねばならぬことである』と云はれてゐる。

福田博士によれば、成るほど今度の世界戰爭は、之に參加した國の多い點からも、戰爭の續いた年月の長い點からも、慥かに大戰爭に相違ない けれども歷史を通觀したならば、大戰爭は必ずしも今度の戰爭のみではない。若し其の時代の程度と生產力の程度との比例を考へたなら、富を破壞した分量に於て、今度の戰爭は必ずしも最大の戰爭であるとは云はれない。そこで『何故にかくも這般の戰爭にのみ、永續的にして廣汎な經濟難が伴ふか』といふ福田博士の疑問には道理がある。そして堀江博士の見解は、此點に就て何等の暗示をも與へて居らぬ。

福田博士は、『世界戰爭の齎來した物質的破壞は、歐羅巴に於ける現時の節約と努力とを以てすれば、僅に數ケ年間に恢復

する事は容易である、假令ば、佛蘭西及び白耳義に於て戰爭の爲めに破壞された家屋數、或は又歐羅巴全體を通じて破壞された家屋數は、一ケ年或は二ケ年間に新たに建築せられる數以上には出て居ない、戰爭の爲めに破壞された鐵道の延長は、歐羅巴に於ける一ケ年間の新建設哩數に殆んど同じである』といふケーンズ氏の言葉を引用した、戰爭によつて破壞せられた物質上の損害は大きいには相違ないが、歐羅巴、否な全世界の人間が既に作り出し、又將來作り出さんとしつゝある物質上の富に比べたなら、決して大なりとは云はれぬことを說明し、『世間多數の論者』が、一方に於ては戰爭の爲に被つた損害を餘りに過大に見積り、他方に於ては、吾々人類が物質上の富を作り出す力を餘りに寡少に見積る』謬りを戒められて居る。

福田博士が、社會の生存する條件として、過去の勞働―富―に對して現在と將來の勞働力に重きをおかれたことは、慥かに卓見である。

二

堀江博士によると、世界の經濟難の『最大の原因』は、戰時に於ける富の破壞、其の結果として生じた戰後に於ける公債の負擔である。否なそれは『最大の原因』であるばかりでなく、堀江博士によれば、世界の經濟難の原因は、『此一事に外ならぬ』ものである。

然るに福田博士によれば、公債の如きは何でもない。それは少しも歐洲各國民の負擔を加重しつゝあるものではない』のである。戰爭の五ケ年間に濫費し破壞せられたものは――福田博士は主張する――其の時、其の場所に現存した食物を食し、武器を使用したもので、其は一部は戰前よりの持越品、一部は戰時五ケ年に亙る歐羅巴各國民の生産したものを以て、すつかり負擔濟となつて居る。決して今日まで繰延されて、歐洲各國民の負擔を加重しつゝあるものではない。負擔となつて繰延されたものは、唯債務あるのみである。今日償却されざるべからざるものは政府の債務に過ぎざるのである。』

然し其の『債務』こそ、現に各國民の負擔となつてゐないだらうか。若し『債務』が、果して各國民をそれほど苦しめて居るならば、『踏み倒す』までゞある。福田博士は斯う答へる。若し戰爭によつて生じた『債務』が、『人類全體に大害を持來す場合には』『借金踏倒しを斷乎として主張せねばならぬ。』そして博士は『今日の世界經濟の窮乏を救ふには、此の勇氣なければならぬ』と主張する

堀江博士が、『對米債務の棒引きと云ふが如き、行ふ可からざる事に執着するよりも』、與へるは取る爲なりと云ふ金言に

則つて、獨逸の經濟的復興を助け、露國の富源搾取でも考へた方がよからうと云ふ親切な忠告をせられてゐる時に、福田博士が『斷乎』たる決心を以て『借金踏倒し』を主張せられて居るのは如何にも興味ある對照である。

福田博士の所說の通り、五ケ年間の戰爭が如何に富の濫費と破壞をしたからとて、現に戰後の今日生產してゐる穀物を豫め濫費したり、明年作られる織物を、前以つて破壞して居る譯ではないから、戰時の債務さへ棒引きにされたなら歐羅巴の國民は、戰爭による富の破壞によつて、大した負擔を感ぜぬに相違ない。この點に於ても福田博士の說は慥かに卓見である。その福田博士の卓見は、既に五年以前に露西亞の共產黨の政治家によつて實行せられて居る。革命露西亞は、一億五千萬の露西亞の人民に有害であると認めたから、ツアーと其の官僚政治家が殘しておいた、一切の國債を踏倒したのである。現にレーニンは近頃の演說のうちに、吾々が四年前に明白に見たことを(債務の棒引)、歐羅巴の諸國は今頃は悟りかけて來たと笑つてゐる。

三

社會の生存を維持してゐるものは、過去の勞働(生產機關乃至は資本として蓄積せられた)よりも、寧ろ現在の勞働力であるといふ點に於て、戰爭が破壞した物質上の富は、戰時に存在した品物であるから、(債務さへ張消しになれば)必ずしも現在の苦痛でないといふ點に於て、福田博士の主張は慥かに卓見である。そこで『今日の如く行結りたる狀態を現出したる事の最大原因を戰爭に歸するは、非常に誤つた考へ方である』といふ博士の結論が生じて來る。

それなら此の『最大原因』は果して何であらうか。人間の精神が下劣だからである、福田博士は躊躇なく斯う答へられる。ヴエルサイユ條約は、『基督の所謂右の頰を打たれゝば更に左の頰を出すてふ無抵抗主義より出でたるものにもあらざれば、又汝の隣を愛せよと云ふ主義より出でたるものにもあらず惡魔の如き精神より出でたるもの。』である。そして『此の下劣なる精神の產物が、實に今日世界を行詰りの狀態に陷らしめる最大原因である。』從つて世界の經濟難は『我々の心の持樣一つで、除却しようと思へば除却し得るものである。』解決は容易である。爾曹悔改めよ! である。惡魔よ退ぞけ! である。それは―福田博士によれば、『マテリアルではない、スピリチユアルである』―。そこで福田博士の卓見には愈々羽根が生えて、天上の精神界に舞ひ揚がる。

堀江博士の『偏金融眼』――福田博士の命名による――が物

世界に於ける國債元利の計算表を睨め詰めて居る時に、福田博士の心眼はいと高き所に恭倹の榮光を眺めて居る。こゝにも面白い對照がある。

四

現在の生產技術と生產力とに信賴する點に於て、私はこゝに三度び繰返して、福田博士の卓見に讃辭を呈するのである。そして現在の生產技術と生產力とを以てしたならば（實際には、戰爭の濫費によつて、生產機關そのものに喰ひ込みが出來て居ることは暫く措き、）戰爭による富の破壞は僅に數年間に恢復することが出來ると云ふ點に於ても、私は福田博士とケーンズ氏との專門の知識を信用して、少しの疑ひをも挾まぬものである。

けれども私には疑問がある。戰後の世界は、何故にこの生產力を十二分に利用することが出來ぬであらうか。必ずしも、十二分とは云はぬ。此の折角の生產力を十分にも、八分目にも利用することを妨げて居るものは、果して何物であらうか。世界の經濟的復興とは、要するに生產を增加することに外ならぬ。生產の增加が世界の運命を決定する時に、歐羅巴も、否な全世界の一端から他の一端まで、勞働を欲しながら勞働の機會を與へられない抑止せられた生產力――失業者――の叫びが漲つて居るのは、抑々何事を語つてゐるだらう。これは戰後の世界――五ケ年間の戰爭から蹌めき出たこの資本主義の世界――には、最早や現在の生產力を充分に利用する能力の無いことを證據立てゝ居るものに外ならぬ。

福田博士によれば、この生產力の利用を妨げて居るものは、恐らくは「我々の心の持様」である。けれども交戰列國に於ける大多數の『我々』は、先づ大體に於て現在の如き「持様の心を持つて戰爭に入り、戰爭前のような『持様』の心を以て戰爭から出て來たのではあるまいか。博士によれば戰爭前までの各國人の國際心理は、大體に於て左迄で下劣險惡なものでなかつた」ようである。けれども此の下劣險惡ならざる「心の持様」で、何故あの國際的屠殺が着手せられたかは、解することが出來ぬ。之に反して、福田博士から『茶ラツポコ人間』『無責任極まる人』と叱られた程、それほど資本主義の世界の現實から離れた十四ケ條の綱領を提げて、『心持一つで』世界をデモクラシーの爲に見事安全にして見せようといふ、殊勝な「心の持様」をしてゐたウヰルソンの如き人が、遂に、何一つ實行せずして逃げ去つて仕舞『はざるを得なかつたのは一體どうした事だらう。

福田博士は、戰後の世界を經濟難から救ひ出す爲には、斷乎として借金踏倒しを主張せねばならぬと云はれて居る。此點に就ても、私は福田博士決斷に贊するものである。けれども其れ

と同時に、この博士の決斷の裏には、現在の世界の形勢が容易ならぬ、危機に瀕してゐることが意味されて居る。そして此の前代未聞の世界的危機を切拔ける唯一の方法、資本主義の世界を破産から救ひ出す唯一の道は、福田博士によれば唯だ『心の持様一つ』である。

五

世界を經濟的の破滅から救ふ爲には、斷乎として借金の踏倒しを主張せざるを得ぬことは、資本主義の經濟は、今や借金踏倒しを斷行しても救はなければならぬほど、破滅に瀕してゐることを意味して居る。そして借金の踏倒しとは、資本制度の基礎原則たる××××の否認に外ならぬ。そこで借金踏倒しを主張せられる數賞に値ひする博士の決意と勇斷は、資本主義を救ふ爲には、資本主義の根本原則そのものを否認することすらも、最早や躊躇して居られぬと云ふことを意味して居る。博士は現に、資本主義の世界を救はんと焦慮しながらも、尙ほ資本主義の據つて立つ根本原則たる、××××權に戀々としてゐる優柔不斷の徒を叱咤して、『財産本位の權利義務思想に囚はれた頭』と呼ばれて居るではないか。資本主義の經濟は、自分自身で、其の根本原則を否認しなければ救はれぬ羽目に陷入つた。資本主義の大伽藍は、自分自身で、其の土臺石を掘り出して賣らなかれば立ち行かなくなつた。資本主義の憐む可き老人は、自分自身で、兩脚を切らなければ、立つてゐられなくなつた！

福田博士が 債務は必ずしも恐れるに足らぬ、債務は必ずしも歐羅巴諸國民の負擔を加重するものではない、債務は必ずしも歐羅巴の經濟的復興を妨げるものではないと云はれたのは、說明するまでもなく、債務の帳消しを豫定せられたからである。そこで若し債務の帳消しが不可能だと假定したならば、問題は自づから別である。

現に今日の歐羅巴では、債務の國内及び國際の帳消しを豫定しないで――即ち私有財産主義の原則の上に――經濟的復興の努力をして居るものである。從つて五ケ年間の戰爭によつて濫費した前借は何とかして支拂はねばならぬ。何とかして支拂ふ以上は、何人かゞ負擔しなければならぬ。資本主義の世界は、之を勞働階級に負擔させやうとする。國内的の戰爭が各國を脅かしてゐるのは其爲めである。資本主義の列國は、之を他國に負擔させようとする第二の國際的の戰爭が世界を脅かしてゐるのは其爲めである勞働階級が之を負擔したならば、それだけ生産物に對する勞働階級の購買力は減少する。他國が之を負擔したならば、それだけ外國市場が狹まくなる。幾ら生産力は有り

餘つてゐても、引合はれば生產は行はれぬ。生產しても引合はぬから、現に折角の生產力が利用せられて居らぬのが實際の狀態である。現在の生產力を以てすれば、戰爭で破壞した富は數年間で恢復出來るといふのは眞理である。けれども其れは唯だ賣る爲めと利潤の爲めではなくて、使用の爲に生產の行はれる場合だけの眞理である。現在の財產關係が儼然として存する限生產力は唯だ引合ふ時にのみ生產に用ひられるものであつて、生產力の多いことは、必ずしも生產の多いことを意味しない。戰後の世界に於ける生產力を計算することは、決して資本主義の經濟的復興の日取の斷定とはならぬ。

それならば戰後の資本主義の世界に於いて、現に生產力の充分な利用を妨げて居るものは一體何だらう。福田博士は『心の持樣』であると答へられ、私は資本主義の財產關係そのものであり、資本主義の經濟組織そのものであると答へる。博士に取つては心靈界の問題であり、私の爲には經濟界の問題である。

『財產本位の權利義務思想に囚はれた』資本制度そのものゝ範圍內で考へれば、堀江博士の『金融一天張り論』必ずしも遽かに笑殺し去る譯にはゆかぬ。手や脚は生命の根幹ではなくて枝葉であるかも知らぬ。然し枝葉の器官に大きな混亂が起れば、有機體は其爲めに死亡する。財政上金融上の現象は、資本主義の根幹ではなくて枝葉の働きであり、枝葉の器官であるかも知らぬ。然し此の働きと器官との上に起つた大なる混亂は、資本主義そのものに致命的の影響を與へることを忘れてはならぬ。堀江博士が注視せられた歐羅巴の財政上金融上の形勢は、少くとも歐羅巴の資本主義の健康狀態を正確に示した正しい消息である。して見れば、堀江博士の『偏金融眼』も亦た一隻眼たることを失はぬ。『偏金融眼』の落度は、厚紙の表面を正しく見なかつた罪ではなくて、其の紙一重の向ふまでも見なかつたといふ、ほんの僅かばかりの落度に過ぎぬ。

世界の經濟界は何時恢復するか、如何にして恢復するか。此問題は、歐羅巴の資本主義はも一度復興するか、それとも愈々最後の段階に達して居るかといふ、根本問題と引離して答へることは出來ぬ。言葉を換へて云へば、『我々の心の持樣』よりも、寧ろ資本主義經濟組織の機械的作用に、より多く關係した問題である。

勿論、國際間の債務の問題をどうするか、獨逸と露西亞に對する政策をどうするかと云ふことによつて、道筋が違つて來るに相違ない。然しこの相異と雖も、限られた範圍の間に於ける相異である。歐羅巴の資本主義は復興の藻掻きのうちに、この儘に益々經過不良に陷入るのが其一つである。病勢一進一退して

尙ほ幾年かの間病床に壽命を保つのが其二である。第三には、歐羅巴の資本主義が或る程度の復興をして、或る期間の間、一時登り坂の光景を呈する場合を想像することも出來る。しかし此の登り坂の頂……決して高くない頂——の上には必ず第二の戰爭が待つてゐる。世界の經濟は何時恢復するかと云ふ問に對しては、生産力の利用と發展とを抑止してゐる××××××××××××××云ふ答ほどに確實な答はない、（十一月三日）

經濟難の因果關係

山口正太郎

現下世界諸國の經濟難の原因は這般の歐洲大戰爭の結果、物質の濫費甚しく、今日猶之れが回復容易ならず、軍費の償却のため各國とも其負擔に苦しみつゝあるに基くと云ふ殆んど通說と認むべき說、換言すれば現今の經濟難は這般の歐洲大戰爭に基くと云ふ說に對して一論者は戰爭と云ふ物質的原因に基くならば戰後四年を經過した今日、回復は容易に行はれなければならない、又戰爭は從來、人類の進化上屢ば行ひ來つたが其戰爭は其當時の社會の物質を破壞した程度に於て、這般の歐洲大戰爭が獨り、從來の戰爭を超えて大なる比例で破壞した譯ではないそれに現今の樣な世界的大經濟難を惹起したのは其原因戰爭以外になければならぬとして

一、國際間に於ける憎惡の念と猜疑心の瀰漫

二、國際間に於ける政治的信賴と政治的結合の破壞、覇權主義の横行、

三、經濟的周期に基く不景氣

が擧げられてゐる。私は此新しい見地を少しく吟味してみようと思ふ。今第三の原因は姑らく舍き、第一、第二の原因に就て考へてみると之等の原因が戰爭外の原因であるとは、どうして云ふとが出來るであらうか、成る程、今日の國際間の憎惡心、猜疑心の增長は時間的に見て一九一四年八月幾日かの戰爭の始まつた時にはなく、休戰が成立し各國の代表者がヴェルサイユ會議に集まつた瞬間から初まつたのであるにしても之等の國際間

の疑心暗鬼は戰爭と云ふ物質的原因を經過せなくては果して現今の如く强烈であり得ようか。思ふに現今の國際的精神の荒廢は這般の歐洲戰爭の結果である、泥棒主義の横行、同情、寛恕相愛の念の消失、之等の精神生活の廢頽は物質的なる戰爭に其原因を有する、決して戰爭以外に超越したものではない。論者は物質的なる戰爭と云ふ原因以外に、之と對立して精神的荒廢なる原因によつて現下の世界經濟難が起つたと云はれるが私は此兩原因は對立するものとは思はない、現下の精神的荒廢は歐洲戰爭の結果である、即ち經濟難にとつては第二次的の原因たるに過ぎない、論者は勿論、物質的破壞を齎した歐洲戰爭も經濟難の一原因であるとは認めてゐる、然しそれは原因の中の最少のもので大なる原因は上述の精神的荒廢であると云ふ、私は之と反對に精神的荒廢は最少の原因、否第二次的原因、間接的原因に過ぎない、物質的破壞と云ふ戰爭から派生したものに過ぎないと思ふ。

論者は精神的原因を以て戰爭後に發生したものとせらるゝが時間的に後に發生したからとて戰爭と無關係とは云はれない、否、時間的に後に起つたからは反對に戰爭の結果であるとの推論が生ずる惧があるから之を反駁するための反證を擧げる責任が論者にある。全く這般の大戰爭と離れ獨立して現今の國際的不安、精神的荒廢が發生したとは不幸にして私は解することが出來ない。

次に疑問の存するのは論者の議論の前提である、現下經濟難の原因が物質的戰爭以外にあると推定するのは歐洲戰爭も從來の戰爭と其規模から、比例すると別に大なる破壞を齎したのではないから戰爭だけだとすると從來人類進化の過程に無數に行はれた戰爭の後に發生する所謂經濟難と同一程度でなければならぬ、否、時には戰爭後何等經濟難と云ふ程のものが發生せないこともあつたから、今回の世界經濟難の意外に大であるのは戰爭以外の原因によるのであると云ふ。

論者の前提とも云ふべき此議論に疑問の浮ぶのは今回の歐洲大戰爭に果して其規模から比例して從來無數に行はれた戰爭の慘禍と割合に於て甲乙無き程のものであつたかどうかと云ふことである。論者は此前提たる議論を何人にも肯定さすためには從來の戰爭の慘禍と今回の大戰爭の慘禍とが比例上大した差のないことを統計的に、……精確な事は示されないにしろ、……相當事實を列擧して來なければ獨斷論だとの譏を免れ得ないであらう。

私は精確な統計を有つてゐるのではないから明確なことは云へないが這般の歐洲大戰爭の物質的慘禍は可成り大なるもので

あつたと思ふ、從來の戰爭と比べて比例的にも慘禍が大であつたとも考へられる、此假定が許されるとするならば今日の大經濟難は此物質的大慘禍に基くと云ふ議論は論理が不徹底であるとは云へない。要するに論者の議論を一貫するには論者は歐洲大戰爭の物質的損害が從來の戰爭と比例して決して大なるものではないことを充分に證明せなければならない。

論者の擧げられた世界經濟難の第三の原因、即ち經濟的周期に基くコンジアンクチューア（景氣）は成る程這般の戰爭と無關係、沒交渉の原因として擧げられ得る、歐洲大戰爭が起らなかつたとしても周期的に發生する景氣不景氣だけで今回の世界經濟難が發生したとも考へられる。然し歐洲大戰爭と離れて、之れだけで經濟難が發生したものとすると今度の經濟難も、今迄何回となく繰返された週期的な景氣、不景氣と同程度のものでなければならぬ。周期的景氣不景氣恐慌は經濟生活の世界化と共に時代を經る每に其範圍を擴大して、從來は世界の各部分每に發生したものが今日では世界各國同時に、或は波動の如く順次に起ることゝはなつたが、然し現下の經濟難が歐洲戰爭の有無に係らず、此周期的恐慌によつて促されたものとすれば其結果は論理上、恐らく之れ迄の恐慌と比例的に同じ程度のものでなければならぬ、現下の經濟難が世界各國を通じて今迄嘗つて：：經濟生活が周期的病氣に罹つたのは十九世紀末だから過昔は姑らく含き：：見なかつた程度のものであるならば、それは確かに周期的景氣不景氣以上の原因によらねばならぬ。周期的景氣、不景氣を以て今回の經濟難を說明せられんとするならば現下の經濟難は左迄從來のものと比較して程度の大なるものでないことを立證せられなければならぬ。

私は論者の新說に對して抱いてゐる二三の疑點を述べたが、要するに私は現下の世界經濟難の原因は這般の歐洲大戰爭と云ふ物質的破壞であつて、論者の見る如く之れが最少の原因であるとは思はない、否な、反對に論者の擧げられた精神的荒廢、國際的猜疑心、周期的景氣不景氣等は最少の原因である、等しく原因とは云ふものゝ、歐洲大戰爭と云ふ原因があつて初めて生じた第二次的原因、系列上、時間上、其後に來るべき原因、即ち派生的原因に過ぎないと思ふ。現今の國際的信頼心の衰微、泥棒主義の橫行、其他の精神的荒廢は這般の戰爭の齎す處であつて、物質的原因たる戰爭を無視しては到底說明し得るものではない。

學窓より見たる世界的不景氣

上田貞次郎

一

世界經濟の復興に就いてお尋ねを受けたのであるが、不幸にして私は此問題の實際を數字的に細く調査研究して居らないので、充分の答をすることが出來ないのは遺憾である。併しながら一方からいふと、此問題は實は左程難解な問題でなく、少くとも理論上に於いて問題の要點を捕へるだけの事は必ずしも多岐多端なる調査研究を爲さずとも出來ないことであるまいと思ふ。依つて此に少しく「學窓から」覗き得た觀察を述べて見るのである。

本誌前號に福田博士は堀江博士の說を引ひて今の日本の識者が歐洲經濟界窮乏の原因を取違へて居ることを指摘された。即ち堀江博士は窮乏の原因を戰爭に因る國民所得の濫費にありとするに反對して福田博士はそれよりも一層主要の原因として戰後の取極め方の惡かつたこと、特にヴェルサイユ條約の「下劣險惡」な精神に基いて居ることを舉げ、頗る辛辣にウイルソンロイドヂョーヂ、クレマンソー以下各國の政治家や學者の愚なることを攻擊して居る。併し餘りに議論が多岐に亘ると肝要な要點を捕へ損ふ恐がある。堀江、福田兩博士の意見の相異する所は福田博士のいはるゝ通り金融的の見方と、實物經濟的の見方との相異である。一方では四年半の大戰爭が各國民の所得を捲上げて軍事費に當てた尙其上に公債までも發行して其元利支拂の負擔を戰後の今日まで遺したといふ。之に對して他の一方では反駁する。戰爭當時に費消した所の物は金ではない、其金で買つた所の鉄砲彈藥船艦車輛の類である。此等の物は各國民が戰爭中大車輪に働いて造り出したのであつて、前に造り溜めて置いたのを使つたのではない、又一時天から借りて來て使ひ果した後に又造り出して返すことの出來るものでもない。即ち戰時の消費は戰時の生產を以つて埋合せたのであるから其實物上の損害が今日まで殘つて居る道理はない。強いていへば佛白等諸國の都市や、道路や、鑛山工場が破壞された其損害は今尙

遺つて居るけれども是は既に大半修理されてしまつたから、大した問題ではない。故に戰爭の浪費が後の國民を苦しめる筈がない。とかういふのである。

二

斯く對照させて見た時に何れの説を取るかといはるれば私は一應福田博士の説に理ありと思ふ。元來今の經濟組織に於いては所有權が確定されてあり、其所有權を移轉する爲めに貨幣を使ふから、租税とか公債とかいふものが出來るけれども、一國の財産を一つにして見れば借も貸もない。戰爭に使つた費用は其時限りのものである。戰後に公債の元利償還の目的を以つて納税者から取上げる所のものは決して天に向つて飛んでしまふのでなくして、總て公債所有者に分配されるのであるから、國民全體としては損にも得にもならぬ。貨幣の遣り取りは後に殘るが、實物の生産消費のバランスが後に殘るものではない。戰後の人が多く生産して而かも少い消費しか爲し得ないといふ理由はない。是だけは確かに其通りである。

併しながら國民を全體として見ないで戰時に公債を貸した人と戰後に租税を納める人とに區別して見たら何うなるか。戰爭は一大浪費であるとしたならば、其浪費は何人かゞ負擔しなければならぬ。若し戰爭費を戰時の租税のみにて支辨したものとすれば右の浪費は全國の家々に頭割にされたことになるので後に殘るものは何もない。資本家は工場の機械を増設する代りに銃砲を作つて棄てたと思へばよいし、勞働者は郵便局の貯金をする代りに彈藥を作つて飛ばしたと思へばよい。其上戰後にまで負擔はかゝらないのである。然るに戰爭の浪費の莫大なるが爲め一時に出させることは出來ないといふので公債を募つた。此公債は資産家だけが出した金である。故に若し此公債を踏倒してしまふとすれば銃砲彈藥の浪費を資産家のみに負擔せしめたことになる。又戰後に至つて公債元利支拂の爲めに新税を起し、若しくは戰時税を繼續するにしても、若し其税が財産に課するものばかりであれば問題は矢張り資産家だけで解決する。併し此租税が財産に課するものゝみでなくして勤勞所得に課する税及消費税に及ぶときは頭腦及筋肉勞働者も亦浪費の割前を戰後に至るまで取られることになる。甚だ卑近な例であるが、數人の連中が紅葉狩の歸途酒を飮んで大散財をしたが其時持合せの無かつたものは一時友人に立替て貰つて置いて後に至つて其割前を返すのと同じことである。而かも國家は強制團體だから或個人が酒飮みに行くことを好まなかつたとか、酒を飮まない甘黨であるとかいふことにはかまはないで、兎に角割前を出させるのである。故に納税者たる個人の立場からいへば戰爭の

費用は後の負擔となつて殘るといはねばならぬ。固より此負擔は公債所有者の側から見れば入金になるので、公債が內國債に限られて居る場合には一國內に落ちる金の總高に變化なきこと旣に述べた通りである。

三

然るに右は總て公債が內國債であつたものとして立論したのである。外國債が大部分を占めた場合は事情が大にちがふ。此場合には起債國に於ける戰後の租稅收入は其國の資產家に行かずして外國の資產家に行くから、一國內に得るものはなくして失ふものゝみである。一國全體としても自ら消費する以上の生產を爲して前の浪費を償はなければならぬ。卽ち無理にも商品の輸出超過を生ぜしめなければならぬ。從つて爲替相場も不利になる。國民は衣食を節しても外國へ貢物を爲す事を餘儀なくされるのである。

そこで歐洲諸國は如何なる狀態にあるかといへば大體此最後の場合に當つて居る。卽ち米國が、債權國で英佛伊等は債務國である。故に歐洲諸國は經濟上不振に陷るのは當然である。而して不思儀なことには此時米國も亦不振となる。何となれば米國は從來の如く其產物を歐洲へ賣ることが出來ないからだ。賣らんとしても買ふ力が先方にないからだ。固より此場合には爲替相場が米國から歐洲へ送金するのに都合好くなるから歐洲に信用さへあれば米國の資產家は貸金を取戾す代りに之を歐洲に於いて放資するであらう。さすれば歐洲では借金が借金の上に重なるにしても兎に角經濟界の不振を免れることが出來る。特に新しき借金は破壞に用ふるものでなくして生產事業に用ひらるゝものだから其增加は宅も患ふるに足らないのである。故に歐洲の金融家が米國に借金を爲さんとして奔走し、米國の資產家にもバンダーリップ氏の如く之を勸めるものゝあるのは當然である。米國人か安心して歐洲に放資する樣になれば今の經濟不振を回復するに大効があるだらう。唯事實に於いては是が思ふ樣に運はないから困るのである。

四

以上は戰時の金融が生み出した所の難問であるが、併し今の國際金融を混亂せしむる所の大原因は尙ほ此他にもある。それは獨逸の賠償問題である。福田博士の所謂戰後の事である。獨逸は米國から金を借りなかつたけれども、ヴエルサイユ條約の結果、聯合國へ金貨一千三百二十億マークといふ大金を支拂はなければならぬ。是は獨逸が自分の戰費として使ひ果したものを償ふ以上に他國の使つたものを償はしめられる高である。此金額の多寡に關しては政治家學者の間に意見の相異があるので

獨逸人は一様に此の如き巨額の支拂は事實不可能であるといひ佛國人は百中九十九人までそれの出來ぬ筈はないといふ。併し事實に於いて獨逸が命ぜられた通りに支拂を爲せば獨逸人が前陳の英佛人以上に生活程度を低下して輸出入の差額を稼ぎ出さなければならぬ。即ち精々生産を多くしつゝ消費を切りつめて外國へ貢物を捧げなければならぬ。けれども獨逸は軍國主義の成れの果てであるから是も致方ないといへるだらう。併し困つたことには各國が獨逸をいぢめて過勞せしむる結果は各國の產業夫自身を不振に陷らしむるのである。即ち各國が獨逸に償金の支拂を迫ること急なれば急なる程 爲替が獨逸に不利となり、獨逸の商品が安くなる。獨逸人は其爲めに過勞せねばならぬが併し其過勞の結果たる安物が輸入されゝば普通の生計維持を主張する所の勞働者は到底之と競爭することが出來ない。所謂ダンピングを受けたのと同じことになる抑々一個の經濟的交通區域内にありて、勞働が重く賃銀の安き勞働者があれば、他の一般の勞働者も亦之と競爭する爲めに生計維持を妨げらるゝのは當然である。それだから國內には工場法を一般に强制し、國際的にも所謂國際勞働條約を設けて一般的に勞働條件を引上げんとするのである。然るに今獨逸を世界のスウツトショツプにして置けば各國は決していゝ氣味だといつては居られないのであつて、依つて苦しむべきは自然の成行である。故に獨逸に苛酷な償金を課すれば課する程獨逸自身が苦しむと共に各國亦た苦しまねばならぬ。英國のケーンス氏等が賠償條約改正を主張するのは之が爲めである。

五

但し此改正論に對して反對論は勿論ある。例へばフランスのチード教授の如きは其一人である。曰く輸出入を自由にして置けば右の如き結果になつて戰勝國が共に苦しむのは明かであるが、併し其輸出入を政府の手で調節すれば左樣なことはなくなる例へば現今佛國政府から獨逸から償金の一部として石炭を送らしめて居る。之を直ちに佛國の石炭市場に賣出すならば佛國炭坑を苦しめることになるだらうが、實際には政府が炭坑のストツクを持つて居て稍高い價格で徐々に賣出すから、政府として大なる利潤を得ると共に民間から不當競爭の攻擊を受くることもない。又佛國政府が償金を直ちに取ることを止めて之を獨逸の事業に放資したならば是亦賠償を受けつゝ其弊害を受けずに濟むであらう。此等の支拂の方法を研究したならば假令一千三百億マークは取れぬとしたならば假令一千三百億マークは取れぬとしてもケーンス氏等の主張する程度(同氏は獨逸をして每年二十億マーク以上を拂はしむることは出來ぬといふ)に切下

げる必要はあるまい。是が佛國の學者の說である。

チード教授の說は結局借金を投資に振替へることになるだらう。それは英佛の金融家が米國からの借金を新しき投資に替へしめんとするのと同じ智慧である。唯之を申出す人が債務者であるのと債權者であるのとが著しき對照である。結局斷案は次の如くになる。即ち米國は歐洲に對して債權の要求を緩和せよ聯合國も獨逸に對して借金の要求を緩和せよ。是が復興策の鍵である、アダム・スミスが百五十年前にいつた通り「隣國の富は軍事上及政治上から見れば危險であるが、經濟上から見れば有利である。」「隣國を貧乏ならしめんとする所の政策が成效すれば商業は必ず衰へる。」即ち今の世界列國が經濟上の交通を爲しつゝ軍事上に對立して居ることが矛盾の本源である。

六

私の考へる所では世界經濟不振の原因はまだ此以外にもある。戰前歐洲の穀物供給者なりし露國は鎖されて居る　恐らく之を開いても急には前の繁昌を恢復せぬであらう。勞農政府の生產政策は評判の大なるに比して實績は極めて貧弱である。電化計劃の聲は高いが事實は何うであらうか。露國中央銀行の顧問キスチネフといふ人は「若し外國から借入金を爲し得るならば今後三年間に一千五百萬金ルーブルを投ずるであらう」と說明して居る。一千五百萬金ルーブルはざつと一千五百萬圓の小額である、兎も角露國が戰前の購買力を恢復するのは容易でない。而して墺匈國の後は四國に分割されて舊時の經濟的統一を失つた爲めに甚だしき混雜に陷り全く能率を失つて居る。由來墺匈國民經濟は曲りなりにも一個の頭腦、一個の心臟を有する體軀であつたが、之を民族自決の鐵則の下に分割してしまつたのだから繁昌を恢復するのは容易であるまい。そこへ獨逸があの通りときて居る。故に早く復興は前途遼遠なり、併し復興は必ず富國を經濟的に助くるに依つて爲さるゝであらう。一九二二年十一月四日。

世界經濟難の根本的救濟策

青木得三

金を貸すこと

世界經濟難の根本的救濟策は金を貸すことである。誰に金を貸すのであるか、それは獨逸、露西亞、墺太利等に金を貸すのである。誰が金を貸すのであるか、米國、日本、和蘭、西班牙等が貸すのである。

斯く云へば私のいふことが餘りに突飛である、奇矯であると人は考へるかもしれない。しかし私は巴里講和會議以來世界の經濟難を考察して此頃やつと斯ういふ結論に到達した。私も一度は獨逸賠償金の總額決定が世界經濟界を安定させるであらうと思つた。それは昨年の一月頃の事であつた。しかしそれは昨年五月に千三百二十億と定まつたけれども世界の經濟難は收らなかつた。次には獨逸賠償金の輕減が世界經濟界を安定させるであらう、對米債務の抹殺が世界の經濟難を救ふであらうとも考へた。しかし此頃になつて私は獨逸賠償金の輕減も對米債務の免除も眞正に世界の經濟難を救ふ力がない樣に思ふ。眞正の救濟策は金を貸すより外はない。私はその理由を述べて見やう。

金を貸す力

獨墺露に金を貸す力が他國にあるか、之は一の問題である、私は之をあると斷定する。その前に順序として獨墺露が金を借りることを欲するかといふに之はいふ迄もなく三國共に非常に希望して居る。獨逸賠償問題の眞正の解決は外債の成立に在る。否寧ろ今日となつては賠償問題の解決ではなく、獨逸自身の經濟界の復活は外國から金を借りるより外はないと思ふ。墺太利は今年八月倫敦首相會議に向つて救濟を求め、倫敦會議は一應之を拒絕したけれども、九月の國際聯盟總會には墺太利の總理大臣ザイペル氏自らジュネーブに表れて墺太利の窮狀を訴へ、英國代表ロード・バルフオアの盡力に依つて遂に六億五千

萬金貸クローネの外債を起すに就いて國際聯盟參加國が保證の地位に立つことになつて今は唯金を貸す人を求める丈となつて居る。

次に露西亞はどうであるか、ゼノア會議に於てチチエリンは舊露西亞帝國の戰前債務を勞農政府が承認する前提要件として、聯合國が勞農政府を正式に承認することと金を貸すこととの二條件を提出した。チチエリンは勞農政府の正式承認と金を貸すことを同じ様に重大なことと見て居るとも云へる。次いで開かれた海牙會議に於て勞農政府の代表リトブイノフは具體的に三十二億二千四百萬金貨留の金を貸して貰い度いと云つた。

獨墺露に金を借り度い希望が山々あることは以上の事實に依つて秋毫の疑をも容るゝ餘地はない、然らば他國に金を貸す力があるか。先づ第一に問題となるのは米國であるが、米國は今日金の輸出を解禁したけれども尚金の過剩に苦んで居る。聯邦準備銀行は本年八月九日に於て三十億の金を持て居るが聯邦準備紙幣發行高は二十一億に過ぎない。大正七年末には二十七億の發行高に對して二十一億の金があつた。大正八年末には三十二億の發行高に對して二十億の金があつた。大正九年末には三十五億の發行高に對して二十一億の金があつたに比べると非常な相違である。

本年六月末賠償委員會（ヴエルサイユ條約に依りて設立せられた國際委員會）は獨逸に金を貸す相談をする爲に特別な委員會を催した。その委員の中には英蘭銀行の總裁も和蘭銀行の總裁も居た。そして米國のピーアモント・モルガンが參加して居た。此の世に所謂銀行家會議は聯合國が獨逸賠償金を輕減しない限は獨逸に金を貸すことは出來ないといふ結論に達したけれど、其の會議の報告書を讀んで見ると世界は戰後未だ甞て今日の如く獨逸に金を貸すのに都合の良い時機に達したことはないと書いてある。私は此の意見は即モルガンの意見であつてモルガンの祖國亞米利加合衆國は充分獨逸に金を貸す力があるものと斷定する。十一月四日巴里發電報通信は米國大統領ハーディング氏が今回歸任した駐米佛國大使ジユスラン氏に對し聯合國の米國に對する債務取消問題がブラッセルの財政會議で討議されることがないならば、米國は賠償問題に關する右の會議に參加するであらうと言明したと傳へて居る。米國は之に參加して何とするであらう。恐らく賠償の輕減を條件として獨逸に金を貸さうと云ひ出すであらうと豫想せられる。何れにしても米國に金を貸す力のあることは疑を容れない。

和蘭も西班牙も日本も共に戰爭に依つて大に金の増加した國である。和蘭は昨年八月獨逸が賠償委員會に十億金貨馬克の

金を拂ふ爲に苦心したときに獨逸に金を貸した。之は金を貸す力のある生きた證據である。西班牙はロイドジョウジの計劃した所謂國際經濟復興會社に參加することを逸早く決定して、既に議會に法案を提出して其の協贊を得た、之に依つても西班牙に金を貸す力のあることは明瞭である。

然らばわが日本は如何。日本の所謂正貨は戰前の三億五千萬から二十一億に增加し又十八億に減じた。減じたりと雖尚十八億である。しかし日本の金融業者は何人も日本が外國に金を貸す力ありとは云はないであらう。十八億の内政府所有のものは一般會計所屬の分は勿論預金部所屬の分をと外國に貸すことは出來ない、日本銀行所有の分は最近全部發行準備となつて了つた。聯邦準備銀行のやうに發行高以上の金は持たない。言ひ換へれば日本銀行の所有する正貨は全部兌換券の形で流通して居るのである。それでどうしても外國に金を貸すことが出來やう。之が日本朝野の一致した意見であらう。しかし私は尚兌換券に收縮の餘地あり、外國に金を貸す力ありと信ずるものである。日本の各階級に行き亘つた兌換券を金融業者の手に回收して其の準備金を外國に貸す餘地ありと信ずる。唯障碍は日本人に金を貸す意思なきのみである。

金を貸すと同一の效果

獨逸賠償金の輕減と對米債務の抹殺は一寸考へると獨墺等に金を貸すと同一の效果があるやうに見える。しかしよく考へると必しもさうではない。先づ獨逸賠償金の輕減は獨逸が今日經驗しつゝある財政上の負擔を輕減し、從てライヒスバンクに大藏省證券の割引を命ずる爲に馬克紙幣の增發を來すことをやめる效果があるであらう。しかし馬克紙幣の發行高は九月末に於て既に二千百三十億を越え、十一月一日の横濱正金銀行建相場は電信賣一馬克が我が三毛四糸となつた。かうなつては此上賠償を取ることは固より殘酷であるが、賠償を輕減しても中々獨逸の經濟は立直らないのである。前述した獨逸外債委員會(所謂銀行家會議)に於て獨逸委員ベルクマンは外債に依つて得たき金を全部賠償として拂つては獨逸の爲に何の役にも立たないから是非其の一部は獨逸國政府自身の目的の爲に使はして貰ひ度いと云つた。之に依つても獨逸賠償の輕減丈では獨逸は決して經濟難を脫しないことは明であると思ふ。

次に米國が其の對歐債權を抹殺したならばどうなるであらうか、英國は四十一億弗の債務を免れ、佛國は二十六億弗の債務を免れるであらう。しかし佛國以下の諸國は勿論英國と雖其の

今日の財政計劃殊に其の現在の豫算には對米債務の元金償還を計上して居らない、流石英國丈けは本年十月十五日に五千萬弗の利子を米國に拂つたけれども、其の他の諸國は利子の支拂さへも出來ない財政狀態である。故に今米國が債權を抹殺しても、歐洲諸國の財政の將來を一層困難ならしめることがないといふ丈けで、目下の經濟難を根本的に救濟する力はないと思ふ。

尙英佛兩國は若し米國が彼等に對する債權を抹殺するならば、獨逸賠償金を輕減しやうといふ意見を持て居るから、對歐債權の抹殺は獨逸賠償金の輕減を生み出す力がある、しかし獨逸賠償金の輕減自體が獨逸の現下の經濟難を救ふことが出來ないのであるから、對歐債權の抹殺も同一の結果に陷る。

之に反して若し米國が獨逸に金を貸すならば、獨逸は一部は以て自らの經濟難を救ひ、一部は以て佛國其他に賠償を現金で拂ふことが出來る。此の後者は米國が直接佛國其他に金を貸すのと同一の結果にある。從て佛國其他聯合國の經濟難を救ふことが出來る。故に私は益金を貸すのが根本的救濟策であると思ふ。

唯獨逸賠償金の輕減は米國が獨逸に金を貸す誘因となることは事實であるが、之は獨逸賠償金の輕減が根本的救濟となるのではなく金を貸すことが救濟となるのである。

墺露兩國に至つても同樣で墺太利は既に二十年間賠償を猶豫された、露西亞は未だ舊露西亞帝國の債務を承認しない。けれども兩國共に經濟上瀕死の境に居る、之を救ふには金を貸すより外はない。

金を貸すことの實行難

私は繰り返して金を貸すより外はないといふけれども、金を貸すことの實行難は充分に承知して居る。第一辨濟能力のない者に金を貸す人はない、獨墺露の將來に辨濟能力ありや否やは問題である。現在は勿論ない、將來は經濟力の回復をなし遂げれば辨濟能力は發生する、それには金を貸す外はない。今日金を貸さなければ未來永劫辨濟能力は發生しない。獨墺露は永遠に滅びるより外はない。

勞農露西亞に付ては將來辨濟能力を發生しても辨濟しないであらうと懸念する人もある。成程勞農政府は共產主義を世界に宣傳して、世界の一切の國家を共產主義となすことを當初の理想とした故に、それが爲には手段方法を選ばないのであるかもしれぬ。從てリトヴイノフが海牙會議に於て三十二億留の金を貸して貰ひ度いと言つた時に、それはこの金を借倒し一露西亞

モスコースキ原著

理學士 高橋誠譯

（最新刊）

アインスタイン

定價壹圓六拾錢

送料拾五錢

四六版

千古の天才—新宇宙の創見者—

彼アインスタインの神韻幽渺たる精神Xを解剖した思想評傳中の尤として賞讃を博しつゝある本書は、我が高橋理學士によりて飜譯された、怒濤の如き歡迎を受けつゝある我がアインスタインを知らんとするものは先づ本書を讀め、そして本書によりて彼の爲人と思想とを具さに知了して彼の心界深く燃ゆる思索の光明に接せ、

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

改造社出版目錄

◇島田清次郎著
小説 勝利を前にして

定價貳圓四拾錢　送料拾九錢　四六版上製

拾貳版

文壇の寵兒たる著者近來の大傑作である。長篇小説「絶對道」を收む、青春の燃き盡すがやうな情熱に加ふるにシンミリした人生味の滋い所が出て來た氏の一轉機を劃した力作、

◇山本有三著
山本有三戲曲集

定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六版上製

五版

天才戲曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシカト把握して離さないのは山本氏の戲曲である。本書に收められたる五篇「津村教授」「嬰兒殺し」「生命の冠」「女親」「坂崎出羽守」は東都の舞臺で幾萬の人を泣かした。

◇阿部次郎著
北郊雜記

定價壹圓九拾錢　送料拾五錢　菊半截版上製

十一版

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した評論と隨筆だ、氏が論壇に於て第一人者なるが如く其の文章のスッキリして滋味津々たることも斯界唯一の寶石だ。

◇文學博士鹿子木員信 ◇饒平名智太郎 共著
ガンヂと眞理の把持

定價貳圓參拾錢　送料拾九錢　四六版上製

九版

東洋が現代に有する最大の哲人として印度革命の大立物として共產露西亞のレーニンと並び稱せらるゝガンヂ氏の哲學の體系たる「眞理の把持」と最近印度に横流する理想主義的革命の本體を明にす著者は印度研究の權威たる鹿子木博士及饒平名氏である。

◇饒平名智太郎編
ガンヂ審判の日

定價壹圓五拾錢　送料拾五錢　四六版上製

六版

我がガンヂは三億印度民生のために囚はれ囹圄の人となつた、審判の日の彼は、さながら審判官を審くが如く法廷は森厳水を打てるが如き狀態であつた、本書は彼が今回印度官憲に審問されし以後の彼及び印度の行動を描ける我國民必讀の書。

女性改造十二月號の壯觀

アインスタイン氏を出迎て……稻垣守克
アインスタイン夫妻に會つた時の思出……室伏高信
叛逆を企む女囚……藤範晃誠
結婚の幻滅……北川千代
獨逸から日本まで……アインスタイン
勞農ロシアの詩壇……昇曙夢
小さな旅……有島生馬
日本音樂に對する感想……ゴドオウスキー
題未定（小説）……里見弴
ぼんぼん教授（小説）……藤森成吉
黑谷夜話（小説）……中里介山
炎の路（小説）……三上於菟吉

□十一月廿四日頃出來!!! 改造社

本全集は空前の好結果を收めて十月卅一日を以て締切りました。然るに、その後諸官廳及各學校より續々註文があつて當社も一方ならず困憊しました。それ

本全集に[illegible]での論文著書全部が收められてあります。

本書四卷あれば、難解、深遂なる相對

ン全集

性理論も自由に研究が出來また本書四巻によるの外、相對性理論の研究の道は全くありません。

（延期申込規定は内容見本にあり）

内容見本 申込次第（ハガキ） **進呈**

略規（全四巻、分拂＝毎月五圓（四回）一時拂＝十九圓、（各別に送料を要す）官廳、學校、圖書館等の會計規則によるものはその旨附記せば前金不要）

締切十一月卅日限り

刊行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 **改造社**

を繁榮ならしめ、聯合國の資本家から三十二億留の金を奪ふ計劃であつたと見るのも一の觀察である。しかしカンヌ會議が勞農政府に對しゼノア會議に來る招待狀を發した時に聯合國は、各國が他國内の經濟並に其の政治の根本原則に關し互に之を制肘する權利を主張することが出來ない、各國は自ら其の欲する制度を臨時採擇すべしといふことを、ゼノア會議參加の條件とした。故にゼノア會議に參加した勞農政府は形式上此の條件を容れたものと言はねばならぬ。たとひ實質上勞農政府が未だ世界を赤化する野心を捨てないとしても、私は聯合國の政府又は資本家から金を借り倒さうといふ考はないものと信ずる。それ程誠意のない勞農政府でもあるまい、或は共產主義の社會には誠意といふやうな觀念はないのであるかもしれないが、私は勞農政府が借りた金を返す意思ありと推定する。舊露西亞帝國政府の借りた金を返すのと自分の借りた金を返すのとの間には非常な性質の相違がある。唯懸念すべきは經濟能力である。それは露西亞ばかりではない、獨逸も墺太利も皆同じである。

次に金を貸すことの實行難は金のある國の資本家に金を貸す意思のないことである。米國の資本家は前述モルガンの意見にも見えるやうに最近金を貸す意思を生じた樣であるが、日本の資本家には毛頭ない、若しありとすればそれは支那に金を貸して利權を得やうとするのであらう。勞農露西亞に貳百萬人の餓死者を生じやうとも、獨逸墺太利の良家の子女が淫蕩な外國人に操を賣つて纔に父母の生活を支えやうとも、さやうな事實は決して日本の資本家の心を動かすことはない。彼等はいふであらう、露西亞や獨逸や墺太利に金を貸して日本の爲にどういふ利益がありますかと。之が支那であればまだ利廻が一割にもつくから日本で金を貸すよりも得である、しかし四分や五分で歐羅巴に金を貸しても何の利益にならうといふのが日本の資本家の考である。世界の經濟難は日本の不景氣の原因であるといふたならば多少は日本の資本家を動かす力があるかとも考へたが、それも覺束ないやうである。故に金を貸すことは誠に實行難である。

他に良法なし

然らば我等二十世紀の人類は世界の經濟難を袖手傍觀して獨墺露の經濟的に滅び行くのを冷かに見送るべきであらうか。金を貸すといふ、それは大層拜金宗に見えるかも知れぬ、しかし金を貸すといふのは物を貸すのである。金は交易の媒介物であつて終局の目的ではない。獨逸は賠償金を支拂ふ一九二二年には七億二千萬の現金と十四億五千萬の實物を支拂ふ。しかし

その現金といふのは黄金ではない、爲替手形である。爲替手形をどうして獨逸政府は手に入れるか、民間の輸出商から買上げる、民間の輸出商は貨物を外國に輸出して爲替手形を取得する而して其の貨物は獨逸國民の生産したものである　故に現金を拂ふといふことは國民經濟的に見れば貨物を與へるといふことである。米國は戰時中百億弗を歐羅巴諸國に貸したといふ。しかし其の金は殆皆米國市場に於て軍需品を買ふ爲に費された。故に米國が百億弗の金を貸したといふのは實は百億弗の價額の軍需品を貸したのである　我國は露西亞に對して約三億圓の債權を持て居る、それは我國の商人が露西亞政府に供給した軍需品の代金である。故に之も國民經濟的に見れば我國が露西亞に三億圓の軍需品を貸したのである。私が金を貸すといふのは結局物を貸すことに外ならぬ。

獨墺露は何が爲に苦しみつゝあるか、彼等は物資缺乏して紙幣のみ多く流通するが故に苦しむのである。其の物資缺乏を救ふ爲に外國より物資を輸入しやうとしても交易すべき物も金もない、ゼノア會議の劈頭に於てチチエリンは現今世界經濟界の復活を圖らうとすれば世界の金の分配をやりかへるより外はないといふた。世人は之を荒唐無稽の言とするかもしれないが、誠に至言である　唯其の分配をやりかへるのに私のいふ金を貸すといふ方法を取ればよいのである。

人類は一九一四年より一九一八年に至る五ケ年の間砲彈と硝藥と軍艦と飛行機と潜航艇と毒瓦斯を作る爲に羅紗と麵麭と砂糖と木棉と絹を作ることを怠つた。而かも作られた砲彈と硝藥と軍艦と飛行機と潜航艇と毒瓦斯とは多く皆空中に飛散し又は海底に沈んで今日其の影を止めない、加之五年の間人類は彼等の祖先の作つた工場と殿堂と家屋と菜園と農地とを破壞した。故に戰後世界の物資は缺乏せざるを得ないのである。

成程或る國では生産過剩で操業短縮なぞをやつて居る。しかしそれは戰爭で荒廢した國の購買力のない爲に品物がある國に停滯して居るに過ぎない。世界全體としては明に物資は缺乏して居る　而して其の缺乏して居る國は今や經濟的に亡びんとして居る。露西亞には既に二百萬人の餓死者を生じた、やがて墺太利も獨逸も其の運命を繰返すであらう。之を救ふ道は唯物資の比較的豐富なる國が其の一部を割いて缺乏せる國に與へる外はない。而して金は交易の媒介物である、金を貸すことは即余れる物資の一部を割いて缺乏せる國に與ふることである。

世界の經濟難を根本的に救濟し得るものは唯金を貸すより外はない。それは大規模なる義捐金である　而して將來の返還を豫期する所に普通の義捐金と異なる點があるのみである。今世界の比較的富める諸國の民衆に此の大規模なる義捐金を爲す意

思があるであらうか。日本と米國と西班牙と和蘭は獨逸と墺太利と露西亞の滅んで行くのを傍觀するであらうか。彼等を救ふの道は唯一よりない。

最後に附け加へていふ獨逸と墺太利と露西亞が亡びても日本と米國と西班牙と和蘭は亡びないであらう。それ故に日本は獨墺露の亡びるのを何とも思はないであらうか。二十世紀の日本人は左樣に血も涙もない民族となつたのであらうか。(完)

世界經濟現下の不振の原因

エス、ベルリナー

今日全世界に行きわたつて居る不振は、屢々人の云ふ如く、世界戰爭中に價値が破壞せられた結果ではない。戰爭中に破壞せられた價値ならば、凡そその恢復を必要とする限り、間もなくこれを恢復し得た筈である。

不振の原因は寧ろこれを世界經濟總體の組織の壞崩に求めなければならぬ。

然るにこの組織の壞崩は同じく戰爭の結果ではない。固より戰爭中には、交戰國にも中立國にも、一切の國々に著しき立てなほしが行はれた。が然しこの立てなほしは經濟的關係を中斷せしめる必要がなかつた。國家經濟並びに世界經濟の組織の壞崩は寧ろかの平和命令(ヴエルサイユ條約を云ふ、譯者)によつてはじめて惹き起されたのである。即ち直接にはこの命令そのものゝ規定によつて、また間接にはこの命令の精神――この精神は恰も傳染病の如く全世界に傳播して人類の政治的並びに經濟的關係を荼毒した――によつて。

近代經濟の本質をなすものは、何人ももはや己れ自ら用ゐるものを生産しないと云ふ事である。各人は他人の爲めに生産しこれによつて他人の生産品に對する要求權、即ち資本を獲得する。然るにこの要求權は他人の用ゐ得べき何物かを己れ自ら生産する限りに於てのみ成立する。かくて各人はその能力並びに嗜好に應じてその勞働力の最もよく利用し得べき所にこれを用ゐんと努め、またしかし同時に自己の同胞の需要に對して最大

の顧慮を拂はんと努める。最大の自由と、また同時に同胞に對する最大の顧慮とは實に近代經濟の基礎である。この基礎の上に經濟そのものは組織せられ、而して己れ自らの爲めに作らたこの組織に於て至高の完全なる域に達せんと努める。

各人は他人の爲めに生産するが、然し自分とその生産品を交易せんと欲して居る他人が同じく世界の何處かに於て生産して居る限りに於てのみ、生産をすることが出來るのである。甲の利益は乙の損失ではなくして、寧ろ乙の、若く、は多數の乙の利益と全然相等しいのである。また甲の損失は乙の、若しくは多數の乙の損失と全然相等しいのである。それ故に世界の何處かに於て、人間の或る團體の生産乃至は販賣が無理に妨げらるれば、世界の或る他の何處かに於ても丁度同一程度に、生産乃至は販賣の停滯を來さなければならぬ。

然るに右の如きは卽ち世界經濟の現今の狀態である。歐洲三億の民衆がその消費を從來消費したるものゝ三割に制限しなければならなくなつたと同時に、他方に於ては多數の民衆がその生産乃至はその勞働を利用する事が出來ないで居る。

經濟的平衡破壞の二三の種類を說明するには次の如き事例が役立つであらうと思ふ。

Aは從來生産品aを産出し、またBは生産品bを産出して居り、そして兩者は從來その生産品を互に交易すると同時にまた利得をも得て居た。卽ち第三者の生産品をも買ふ事が出來て居たと假定しよう。今AはBからその生産品を無理に沒收するとする。この時Bの損失は直ちにAの利益に等しくはなからうか。日はく否。何となればBはもはや交易すべき何物をも所有せざるが故に、Aは自今その生産品aの顧客を失つたからである。かくてAはもはやその生産品を産出せず、從つてこれによつてaだけの程度の損失をうけるであらう。にもかゝはらず、Aがなほ生産してその生産品を市場に持ち出すとすれば、物品aか若しくは或る他の物品を生産する何人か或る他の生産者はその生産を制限しなければならぬ。Bの消費の停止に應じて、何れかの處に生産の停止も生じて來なければならぬ。この停止による損失は少くとも、無理に沒收せられたる生産品の價値に、正規の通商によつて生ずる利益を加へたるものに等しい。然るに他の通商もまたかゝる措置によつて妨げられるが故に、實際上にはこの損失は一層大きいのである。

第二の例によつて保護稅賦課の事を明かにしたい。二つの國AとBとは從來その生産品aとbとを互に交易して來た。この兩國に於ては、輸入商人と輸出商人とは、この通商に依つて利益を得て來た。卽ちこの事はこの兩國が良好なる事情の下に生

產して居る事を示すものである。然るに今B國は、その工業を保護せんが爲めに、輸入を不可能ならしむる高い保護稅を課する。A國も之れに應じて生產品bに對して保護稅を課し、その輸入を不可能ならしめる。かくて今後この兩國とも各々自らの需要をば自ら滿たして行くでもあらう。併しその結果は如何なるべきか。先づ第一に、輸入商人及び輸出商人の利益は失はしてしまふ。且つまたこの兩國に於ては新工業は一層不利なる事情の下に働かなければならぬ。而してこの損失は再び他の場所に於て生產制限となつて影響しなければならぬ。

第三の例によつて國內に於ける經濟的平衡破壞の事を說明したい。或る一つの團體――こゝでは吾等は勞働者の事を言つて居るのである――が己れの同國人に對する過大の要求を貫徹せんが爲めに結束する時、その結果は果して如何なるべきか。もし賃銀の增加が他の收入の增加の範圍內に止まるならば、吾等はこれを正當と認めたい。併しその範圍を越ゆる時、その結果はその物品かもしくは他の物品かの生產制限を來さなければならぬ。而してこの生產制限は即ち國內總體にとつての損失を意味するのである。今こゝで勞働者の團體に就いて述べた事は、勿論また他の何れの工業家、農業家乃至は商人の團體についても當てはまる。生產者の一團が、生產制限により、若しくは他の手段によつて、その顧客に値段を强ひんが爲めに結束する時、國內總體の損害が生じて來なければならぬ。而してこの損害は結局はその元に歸つて來なければならぬ。

この見地に立つて現今の世界經濟の狀態を觀察する時、經濟の原理に矛盾し、またこれが爲めに世界經濟を破壞する三つの事實に逢着する。(一)賠償、(二)新しき保護稅による閉鎖及び(三)國內に於ける各種の團體の搾取政策即ち之れである。賠償による世界經濟の破壞に就いては既に幾多の專門家が注意を促した所であつて、從つて今更之れに立ち入るのも蛇足である。ロイド・ジョージ自ら言つた事がある、獨逸より受取る賠償金は英國の支拂ふ失業者救濟の半ばをも償ふに足らないと。

いま保護稅については、嘗つて歐州は、互に盛大に物品を交易して居た少數の大經濟國から成り立つて居たと云ふ事を注意しなければならぬ。然るに今日は、歐洲は無數の小國に分裂し而してこれ等の小國は何等獨立せる經濟生活を營む事が出來ず、而かも帝國主義的誇大狂に罹つて、その隣國に對し、その門戶を鎖さんと企てゝ居る。その結果、これ等の小國は何れも以前より遙かに不利なる生產條件の下に働かなければならない。從つてこれ等の小國が眩惑のあまり隣國に加へんとする損害は、逆に己れ自らの身の上に、またすべての他の國々の上に

振りかゝつて來る。新しき國々のこの關税による閉鎖に加ふるになほ舊き國々の關税による新たる閉鎖、輸入禁止、輸入特許並びに税關の猾策がある。

然るに各國の內部に於ては殆ど到る處に、或は政府を動かし或は他の權力を用ゐ、自己の同市民を犧牲にして自らを富まさんが爲めに結束する各種の團體がある。

經濟上の原理は權力とは一致しない。平和命令のよつて生れた根源をなす精神とは一致しない。經濟上の原理は自らの生産を要求し、勤勉を要求し、秩序に對し組織に對する愛を要求し、特に同胞に對する極度の顧慮を要求する。同胞の收入なくしては自己の收入もあり得ない。他人の富なくしては自己の富もあり得ない。

かゝる單純なる見識の認めらるゝ事のきはめて少ないのは何故であるか。不思議である。もし右の如き見識が廣く認められて居たならば、政治家達は、よつて以てその今日の如き政策を行ひ得る民衆を自己の背後に持たなかつたであらう。恐らくその認められないのは、多くの人々が、古代に始まつて、而かももはや今日の事情には適應せざる富の概念を、無意識的に今なほ懷いて居るからであらう。農耕時代には、多量に消費し得るものが卽ち富者であつた。その富は、華美なる衣服により、裝飾品により、また養ひおく所の多數の家僕によつて表示された。右の富者にとつてはその隣人の貧富の如きは何等問題にはならなかつた。その隣人からなほ多く貢賦を取る事が出來れば、なほ一層贅澤をする事が出來た。今日に於ては富と云ふ意味はこれと全く異がつて居る。今日富者のなし得る贅澤はその富に比べてきはめて僅少である。今日にあつてはその富の內容を成して居るものは生産機關である。然るにこの生産機關はたゞそれが生産する限りに於てのみ價値がある。而してこの生産機關は、他人が生産物を買ふに足るだけの富を有する場合にのみ生産する事が出來 のである。それ故に富は獨立のものではなくして、他人の收入に依屬する所のものである。

古代の農耕經濟に於てならばヴエルサイユのそれの如き平和命令が行はれたでもあらう。が併し組織の密なる今日の資本主義的經濟に於ては、かゝる平和命令はもはや、行はれ得ないものであり、またそれ故に經濟的關係を甚しく害しなければならぬ。

時評

ボナー・ローと英國の政局

室伏高信

ロイド、チョーヂガが近ごろグラスゴウでの演説のうちで今度の英國内閣、即ちボナー、ロー内閣は前内閣に比べると閣員の顏觸れにおいて遙に劣つてゐると公言したとある。或はさうなのかも知れなひ。同じ統一黨員にしても前内閣にあつたバルフオア、バーケンヘツド、ホーン、チエムバアレンなぞのやうな所謂一流どころは今度は入つてゐなひし、そして前内閣では伴食格であつたボルドウヰンあたりが大藏尙書の椅子についてゐるところから見ても、ロイド・ヂョーヂのこの批評は決して出鱈目だと云ふわけにはゆかない。先きの外務大臣であつたカーゾン卿は今度の内閣でも外務大臣ではあるが、前には英國の外交がカーゾンの考によつてなくて、却つてダウニング街第十番から指揮されたのに對し、今度のカーゾンは英國の外交をその方寸によつて決めることができようから、今度のカーゾンは前のカーゾンとは譯が違ふ。それだけに閣員全體の顏觸れが前内閣のそれよりも低くなつたと云ふことができるであらう。ロイド、ヂョーヂが馬鹿にしてゐるのも決して無理はなひのである。首相その人から云つても、ボナー・ローを先きのロイド・ヂョーヂに比べてどうであらう。そこに同樣なことが云へるかも知れない。

ボナーローは今年六十五であるからロイド・ヂョーヂよりは五つも年上であるが、議院生活に入つたのは一九〇〇年であつてロイド・ヂョーヂより十年も後である。それにロイドーヂョーヂは早くから大臣となり、世界の人氣男としてもて囃されてきたのに對し、ボナーローは一九〇二―五年に纔に商務院の政務次官になつただけで、官界の閲歷はそれから十年間もなかつたのであるから、ロイドヂョーヂの方が政治家としては先輩のやうにも見えてゐる。しかしまた一面政黨關係から見るとロイドヂョーヂがアスキスに叛旗を飜すまでは政黨首領となりえなかつたに對してボナーローは既に一九一一年十一月十三日に統一黨首領に擧げられてゐるから、この方から云ふとボナーローの方

が早く首相格の政治家に擧げられたわけである。ロイド・ヂョーヂがアスキスを追ふて首相となつた一九一六年の暮でさへボナーローが先きに英國皇帝から首相就任の相談をうけたのであるから、この點から云つても彼の方が首相格の政治家としては先輩であると云ふことができよう。特にロイドヂョーヂーが首相となつてからでも、彼の率ゐる代議士の數は百三、四十名であるに對し、ボナーローの率ゐる統一黨の代議士は三百五、六十名であり、上院においてはロイドヂョーヂの勢力は皆無であるに對し、そこは統一黨全盛の地盤であるから、政界における組織的勢力の所持者としてはボナーローとロイドヂョーヂとの地位は比較にならない。ロイド・ヂョーヂを日本の犬養毅に比べた人が日本にあつたと思ふが、若しそうだとするとボナーローは高橋是淸と云ふ所であらう。**人物に似通つたところはあるかないか別として、政治上の勢力としての**日本の彼等の地位は英國の彼等の地位である　ロイド・ヂョージは今日まで巧妙狡猾に政界の綱渡りをやつてきたのであるから、そして英國政界の最高責任者として、自身が最近にグラスゴウで述べたと云ふ言葉に從へば、「英國の船長」として立つてきたのであるから、彼の地位は頗る華やかであり、彼の一言一行は世界の表面に大きな力であつたのである。この點において彼の地位は日本の犬養さんとは大部違ふようであるが、しかし綱渡りの華やかに見えるのは綱を渡つてゐる時だけなのである。ボナーローは之れに比べると華やかさにおいて段落ちがする。一體がぢみの質である。加奈陀で生れた彼はグラスゴウのような工業地で鐵商をしておつた。彼は初めは實業家である。彼の半生は實業家である。四十三になつて初めて代議士となつた。代議士になつてからもサーホーンあたりのように、初めて代議士になつてから三年目に大藏尙書になると云ふような華やかな出世振りは彼にはない。しかし彼は實業家ではあつても實業家として末流であり財閥の直接なる後援によつて彼の地位を築くことができたのであつたのではない。彼の傳記家の記るすところによれば、**彼は議會における一回の演説で彼の政界における地位を築いたのである。**先づ日本の永井柳太郎君と云つたところがある。此點は處女演説で失敗したチャーチルなぞとは譯が違ふ。しかしそれにしてもこの英國の永井柳太郎が處女演説で彼の地位を築いたのは、彼の演説が光彩陸離たるもので、「天に輝く一つの星」がどうのこうのと云つたためではなくて、どこまでも素朴で質實で、スコツトランド人の風格に滿ちてゐたのが彼の處女演説であつた。彼にはとてもロイドヂョーヂほどの材幹はないらしい。轉々として巧みに綱渡りをして公衆の目を眩まして行くことにおいて、

演說會に集まつてくる人々の、所謂大向ふの喝采を博する點において、彼は到底ロイドヂョージの敵ではない。また日本の永井柳太郎君の敵でもない。それだけに彼は正直である。どうせ政治家は嘘を云ふには決まつてゐるにしても彼は先づ嘘の少くない方の政治家である。特に個人としての彼にはこの嘘が殆んど無いらしい。從つて派手ではないが、信賴ができる。この點で彼は自由黨のグレイに似たところがある。英國人が、彼等の紳士階級から信賴のできる政治家を求めたら先づグレイとボナーローとの二人の名が擧げられるであらう。どちらも藝當は上手の方ではない。グレイは原稿無しでは一つの演說もできないと云ふ人、またはできてもしないと云つた風の人であるが、ボナーローもこの側の政治家なのである。だから彼には大向ふの喝采は少けなくともほんとうな、心からの友人は多い。昨年彼が內閣の椅子からも、統一黨首領の地位からも退いた時に彼は英國の各方面から深く同情された。たゞに統一黨からばかりではなしに、自由黨からも、勞働黨からも、彼の引退は深い同情をもつて送られたのである。また英國の凡ての新聞紙が一致して彼の政界引退を惜しむだのである。こゝに彼の身上がある。

彼が一九一一年に統一黨の首領になつた時は、彼が議院生活に入つてから十年にしかならなかつた時で、彼のほかにはオーステンチエンバアレンや、ウオーター・ロングや、サ・カーソのような古武者がゐたのであるから、可成りに政界の消息通を驚かした。勿論日本なら、伊藤博文、桂太郎、加藤高明、高橋是淸と云つたように、政黨の首領になる資格は、官僚若しくは金持ち、若しくはその養子であることが決定的の條件であるから、議院生活の長短や、政治家としての經驗の多少なぞはどうでもいゝことではあるが、英國の慣例では議院政治家としての經驗と云ふことが首領となることの可成り重大な條件であるから、ボナーローが議院生活が十年、それも一回は落選したこともある身の上でバルフオアのような學問經驗名聲ともに優れた政治家の後を繼いだ時に、彼のこの地位についたことが一般に意外に思はれたのは當然である。で彼が首領に選ばれても、それは一時的か でなくてもほんの妥協的首領であるとされたのであるが、しかし彼の素朴的な人格はやがて統一黨內において何人も競爭のできない地位を築き上げてしまつたのである。しかも彼の素朴は單なる素材ではない。機會を見ることにおいて、彼には矢張りスコツトランド人の賢さがある。統一黨內の形勢が聯立內閣派にとつて非なるを見ると、彼は今日までの消退的生活と、沈黙とを破つて聯立派の脚下に巨彈を投じたのである。そして豫定通りに大英國の首相となつたのである。

二

今日の英國の政界の狀態からすればボナー・ローが首相となるのが當然である。ロイド・ヂョーヂが首相であつたのは戰爭の結果でもあり、且つ此戰時狀態を彼一流のデマゴギッシな方法によつて政界の上に半永久化させてきたためである。もつと詳しく云へば、ロイド・ヂョージが首相となつたのは戰爭中英國の二大政黨が從來の慣例を破つて、聯合內閣を組織してゐたためであつて彼の自力ではないから、ロイド・チョージとしてはどこまでもこの聯立內閣の形式を維持して行くことの必要があつたのである。そのために最初はボナー・ローを抱きこむだ。ボナー・ローは久しくライムハウスとカールトン俱樂部との繫ぎ役者だと云はれてゐた。その繫ぎ役が作年病氣保養の名のもとにロイド・チョージを敬遠してしまつたから、鈍重役者のオーステン・チエンバアレンが代つて繫ぎ役となつたのである。ところがオーステンは最早やボナー・ローだけの信用はないし、そのうへにロイド・チョージが如何に詭辯を振つて見ても、戰時狀態は何時までもヨオロッパにぶらついてはゐなかつた。日本でも、政治家が暫らくの間「時局重大」の名のもとに外交調査會委員になつたり、勳章をもらつたり、いろ／＼と儲けてきたのであつたがそれも、もう一、二年前の昔となつた。英國でも最早や單なる「時局重大」だけでは多年の慣例を破つて聯立內閣を維持しなければならない理由とはならなくなつてきた。それにロイド・ヂョージの場當り政策も、一度や二度は兎も角として日和見も六年も續かれては流石に氣永の英國人も堪らなくなつてくる。ロイド・ヂョージが眞面目な人の間に不人氣なことは夥しいものがあつた。勿論天才デマゴーグとしての彼のことであるから、失はれた人氣を一時的に回復することに拔目はない。大道演說家としての彼は始終喝采を博するだけの藝當はできるが、しかし英國の紳士階級の間でも、眞面目な人の間では、ロイド・ヂョウジの信用は一九一八年の總選擧を絕頂として爾來下り坂一方であつた。そしてその不人氣の最も根本的の理由は彼の個々の政策が一々當を得てゐないがためではなくて當を得てゐる場合であつても、ない場合であつても、彼の政策に根本原理がないと云ふのであつた。今度陸軍大臣になつたダービーは現內閣で最も有力な閣員の一人であるが、彼は作年ロイド・ヂョージを批評して、彼を統一黨への「新入會者（コユーシァカート）」だと云ふたことがあつた。彼が自由黨員でありながら、統一黨の政策を實行すると云ふの意味でこういつたのである。この意味から云つてロイド・チョージは旣に久しく統一黨——保守黨の「新入會者」であつた。一九〇九年から十一年へかける社會政策の

素晴らしい戰士としてのロイド・ジョージは影を沒して、保守主義の代辯者としての彼が久しく政界に活動してきた。彼は慥に自由主義を捨てたと云つて差支ないのである。ところがこの自由主義を全然捨てきらないところに、また從つて統一黨員になりきらないところに、彼の面目がある。一九一八年の總選擧で、彼は美事に、彼の多年據つてきた自由主義を地に叩きつけた。自由黨はこの選擧では二十八の代議士を出すことができたに過ぎなかつたのである。その御影で統一黨は三百六十何名と云ふ、殆んど未前の勝利を占めて政界の覇權を握つたのである。そこでロイド・ジョージは益々右へ右へと歩るくほかはなかつたのである。彼が政權を維持する方法は統一黨の後援を待つのほかはなかつたからである。しかも統一黨になりきらないところに彼の特種の地位と眞理狀態とが存在する。彼は統一黨色のついた中ぶらりんであつた。この中ぶらりんと政權とを結び付ける方法は聯立內閣であつた。この聯立內閣を半永久化する方法は一種の中央黨の組織である　彼が最近の演說のうちで彼の立場は船を中流に走らせることであると云ふた。左でもなく右に偏するでもなく、中央に船を走らせるにあると云ふた。英國と云ふ巨船を安全に航海させるにはこの中流主義のほかにないと云ふた。左翼も右翼もともに危險だと彼は云ふた。二、三年前に日本の福田博士は、政治的民主主義ともにデモスのクラシイではない。ともに部分的のクラシイである。眞正のデモクラシイはこの二つのシュウド・デモクラシイから押しつぶされつゝあると云ふ意味のことを大聲疾呼したことがあつた。福田博士が今日も尙ほ昔のまゝの意見であるかどうかは知らぬが、ロイド・ジョージの意見は少くともこうした一派の中流舟行主義である。自由黨員としての立場を失ひさりとて統一委員にもなりきらない彼は、こうした中流主義の「船長」で立つて行くのほかはなかつたのである。チャーチルは正に其の副船長格であつたのである。英國はこの名船長と名副船長との指揮のもとに過去六年間「中流」を走つてきた。

何處に吾々は行きつゝあるか？ ― whither are we going?

――昨年の夏の初め頃、ボナー・ローが政界を退いてから、モオニング・ポストにはこうした見出しのもとに、各方面の人々の意見――と云つても無論保守主義の人々の意見 ―を求めつゝあつたが一體吾々は何處へ行きつゝあるか？使徒ペテロが途々基督に向つて汝何處へ行くかと問ふてから、凡ての時代に人々は汝何處へ行くかと問ふてゐるであらうにしても、ロイド・ジョージのもとでは、特にこの感を深くしないではゐられない。吾等何處へ行きつゝあるか？汝何處へ行くか？人々はこう

やつて問はさるをえなかつた。過去六年間をこの名船長に引づられてきた英國民は、「中流」ばかりを走つてゐても、何處へ向つて走つてゐるのかを、自分で問ふて見なくてはゐられなかつた。船は無方向に走つてきた。ある時は右へ、ある時は左へ、名船長の操縱が上手であればあるほど、船客の不安は一ととほりのものではなかつた。こゝにロイド・ヂョージ非難の最も根本的なものがあつた。彼は日和見主義者だと云ふ非難が各方面から起つた。今度樞密院議長になつたソクスベリーは必ずしも統一黨の有力者と云ふわけでもないが、彼が昨年六月、日和見主義に反對して、統一黨の政府——彼の言葉で云ふと確乎とした政策をもつた、一定の原理をもつた立憲的政府——を要求した時には、彼の際は慥に統一黨の眞精神を代表してゐたものと見られた。少くとも。モオニング・ポストによつて代表される統一黨らしい統一黨の精神を最も雄辯に物語つてゐるのであつた。ソクスベリー、ノオサムバランド、これ等の人たちの一團をダイ・ハーヅと云つてゐるが、Die-Hardsこれ統一黨の眞精神の代表者だと云ふべきである。そのダイ・ハーヅの一派がだん〳〵と露骨に反對してきた。その數がだん〳〵に殖えてきた一九一〇年にロイド・ヂョージの急進主義に反對したダイ・ハーヅの名が一九二一年からはロイド・ヂョージの日和見主義に對する反對運動によつて復活されたのである。この非難は同時に、自由黨の側からもきた。グレイが政界に復活したと云はれた昨年の夏にも、同樣にロイド・ヂョージの日和見主義を力强く打つた。英國の政界はあまりに長く無主義に苦しむできた。あまりに長く變體政治に苦しむできた。そこでロイド・ヂョージ內閣に加へられてきた樣々の非難のうちで最も根本的なものはこの無主義、無原理、無方針、從つて日和見主義、出鱈目政治と云ふの點にあつた。

英國政界の各方面を通じて、原則の政治への復歸が求められてゐた。グレイが最近にボナー・ロー內閣の出現に際してこの間の心持ちを吐露してゐるように根本的に求められてゐるものは、政權の地位に立つものが統一黨であつても、自由黨であつても、要するにその根本において原則の政治に復歸すると云ふことであつた。ロイド・ヂョージ內閣からボナー・ロー內閣への變化は立憲主義のうへから云ふと變體政治から常則政治へ、無主義政治から原則の政治への復歸を意味してゐるのであるこの點においてボナー・ロー內閣は政府形態のうへからロイドヂョージ內閣に比べて一歩を進めてゐるのである。

三

そこで次に問題になつてゐることはボナー・ロー内閣が如何なる原理のうへに立ち、如何なる政策を提げて立つてゐるかと云ふの點である。それは一言にして云へば無論政治上の保守主義なのである。ボナー・ローがその内閣組織と同時に發表した政策のうちで社會改良主義を採らないと云つてゐるのはこの點の根本宣明である。この點は外交政策のうへにも當然現はれてゐるであらう。即ちタイムスやモオニング・ポストなぞが主張してきたとほり、若しくはダービーなぞが力說してきたように親佛政策に出るであらうと云ふことは疑の餘地がない。佛蘭西のポアンカレ一派の反動派と英國のカーゾン、ソリスベリイ・ダービーなぞは誠に好個の相組であつて、話の分りが早いに相違ないのである。世界の政界が革命期を前にして一切り反動期に入つたことは今日の最も著しい現象である。世界の各地を通じてブルジョア階級がその最後の戰ひの勇ましい戰士としてブルジョア階級の末路を彩る政治家に、伊太利にファシツチ一派があり、佛蘭西にポアンカレ、ミルランがあり、匈牙利にホルテイがあり、英國にソリスベリイ・ダービー、カーゾン・ボナーローがある。この意味で一九〇五年にバルフオア内閣が仆てから十七年振りで純粹の保守主義の内閣が英國に生れたことは非常に意味あることだと云はなければならない。この數年は世界を通じて反動家の當り年である。世界史の運動が小さく縮んで大きく伸びようとする時に、ボナー・ロー内閣はその小さい縮みの役割を引受けて立つたのである。

四

ボーナー・ロー内閣は無論短命であらう。近ごろの外電によると、内閣を引うけたボーナー・ローは英國の、政界の意外に錯綜したのに驚いたとあるが、如何にボナー・ローが好人物であつても、英國政界の錯綜してゐる位ひのことは初めから分つてゐたであらう。新聞の傳へるところによると、英國通だと云はれる加藤高明氏は、ボナー・ロー内閣の出現は英國の二大政黨對立政治の傳統の復活だと云ふたとある。あの人あたりの言ひそうなことである。ほんとうにそう考へてもゐようし、またそう云つた方が自分に都合がいゝとも考へてゐるのであらう。しかしそういふ時代は英國でも戰爭前のことである。この戰爭前の傳統が復活されようと云ふ兆候はどこにもない。反對の證據と傾向とばかりである。英國の政情は實に錯綜を極めてゐるアスキスは依然自由貿易主義を唱へてはゐる。ボナー・ローは相變らずに保守主義に立て籠つてはゐる。その英國政界の二大政黨主義の一つの邪魔者があつた愛蘭黨はその祖國へと退いた

しかしそれよりも大きな新勢力が現はれてきた。勞働黨がそれである。勞働黨の出現してから、つまり勞働黨が「自由黨の尾」でなくなつてこゝに一人前の政黨となつてから英國の政界は最早二大政黨對立の時代ではなくなつたのである。若し二大政黨がありますならば、ブルヂョア黨と勞働黨との對立である。そうした時代が出來ないとは限らぬ。しかし若しブルヂョア黨が一つにまとまるような時はブルヂョア黨が殆んど無力になつた時であり、そして勞働黨が獨裁的權力をもつた時であり、また從つて勞働黨が内部的に分裂する時であらう。遠い將來のことは兎も角、今日においては英國の政界は四つの勢力に分れてゐる。右から數へると、統一黨、ロイド・ヂョージ派自由黨、アスキス派自由黨、勞働黨の四つがそれである。この四つの勢力のうちの何れが主勢力となるか、またその四つのものの間に如何なる關係が成立するかと云ふことが問題である。この十一月十五日の總選擧の結果がこれを決定するのである。今度の總選擧は英國の歷史上にあつた凡ての總選擧のうちで最も興味もあり、最も重大でもある總選擧である。何故なら、それはたゞに一政黨の消長、若しくは一内閣の興廢を決するだけでなくして、數百年間英國の基礎であつた、商業主義に挑戰する一新政黨が大にその羽翼を伸ばすであらうと期待されてゐるからである。否それは英國だけの問題ではない。英國が世界の覇權者の一つである限り、そして英國の政治的及び經濟的文化が今日の世界を征服してきてゐる以上、英國における商業主義、資本主義の基礎を動搖させるごとき政黨の大勢力としての出現が期待されるとすればそは同時に世界の政治的及び經濟的文明の大構造に巨大な影響があるものと見なければならない。この點において英國の今度の總選擧は世界の興味の一つの最も大きな中心である。

五

今度の總選擧の結果がどうなるのかは無論正確には誰れにも分らぬ、或は大なる番狂はせが起つてこないとも限らない、しかしこの大番狂はせがない限り、大體の豫想はつくのである。またこの豫想が外れたにしても、その外れは一時的であつて、ほんとうの力の發現だとは見られないのである。そこで先づ現在の勢力を見る必要がある。現在の勢力は六百餘の代議士中統一黨が約三百六十名、ロイド・ヂョーヂ派が約百三十名、アスキス派自由黨が三十餘名勞働黨が七十餘名である。その現在數から云ふと統一黨は議員の過半數を制してゐる。最大政黨であり、そしてロイド・ヂョーヂ派が第二の大政黨である。アスキ

ス派や勞働黨は全く問題にならないのである。しかしこれは實は番狂はせの結果であつた。世界戰爭の惡戲からまた大々的の番狂はせの結果であつたことは今日では何人も認めてゐるところである。それは一九一八年の總選擧の結果であるが、この總選擧は世界戰爭が聯合國側の勝利にむいて終つた時に、つまり英國國民が戰勝熱に陶醉しきつてゐた時に、その戰勝の最高責任者としてのロイド・ヂョーヂで、英國の國民的英雄兒として、風雲に乘じて、しかも彼一派のデマゴキツシの怪腕を振つて選擧戰に臨んだ時であるから、彼の側に大勝のあるのは當然すぎる當然なのである、昨年レスタア・ギャラレイルマックス・ビャボンの諷刺畫が陳述された中に、一人の大道演說家が、群衆に向つて「戰爭に勝つたのは私である――カイゼルの首を締めるのは私である――獨逸から賠償金を取るのは私である」こういつて大聲疾呼してゐる一枚の畫があつた。此大道演說家こそ實にロイド・ヂョーヂであつた。このロイド・ヂョーヂの三大政策は戰爭熱に醉ふて批判力を失ひきつてゐた英國民を欺き去るには持つてこいの名政策であつた。それは慥に圖に當つた。反對側はアスキスの御大將も、ヘンダスン、マクドウナルド、スノウデン等勞働黨の首領連も枕を並べて落ちた。この選擧で統一黨は三百六十名　ロイド・ヂョーヂ派は百三十名の代議士を儲けたのである。だから一つの成金であつたのである。政治的の成金であつたのである。しかし英國民の頭が如何に鈍重であつても、同じ手に二度とは乘るまい。カイゼルの首のとれなかつたことは英國民も知らない筈はない。獨逸から取ると云ふ賠償金がどうなつてゐるか。ベルサイユ條約の結果が如何にヨオロッパを經濟的危機に導き、特に英國において勞働者の生活の危機を導いてゐるかは、今では一般に知れ渡つてきた。そしてロイド・ヂョーヂの人氣が縱令全く地に墜ちたものでないとしても、四年前に比べて遙に下つてゐることも明白である。彼と統一黨との聯立も破れた。彼でなければならない理由は少しもなくなつた。そうかと云つてボナー・ローの人氣が天下を風靡してゐるわけではない。凡ての政黨が比較的に公平に批評されべき時である、だから統一黨とロイド・ヂョーヂ派とがその勢力を減少するであらうと云ふことは一點の疑ひもない。問題になるのはこの二つの政黨が減るか減らないかではない。どれだけ減るかである。それと同時にアスキス派と勞働黨の増加することも一點の疑ひがない。問題はどれだけ增加するかである。特に勞働黨にとつては前回に比べて更に有利な一つの條件がある。それは前回の總選擧には凡ての選擧人が投票ができたのでなく、實際上戰爭狀態のために投票の出來なかつたものがある。

勞働黨の計算によると約二百四十萬枚の投票用紙は投票人の不在の場所に送られたのである。この不在者は戰爭のために海外にあつたものであり、そしてその大部分が勞働者であることも分つてゐる。それが今度の選擧になくなつたから、それも勞働黨にとつては前回よりも有利になつた條件の一つに數へなければなるまい。これを實際の結果から見ても一九一八年の總選擧以後に行はれた七十四回の補欠選擧のうちで、聯立派（統一黨及びロイド・ヂョーヂ派自由黨）は差引十八の議席を失つたのに對し、アスキス派は三つを、勞働黨は十二の議席を新らたに增加してゐるのである。そしてこれ等の補欠選擧で各政黨が獲得した投票總數は一層これ等諸政黨の勢力關係を明らかにしてゐる。一九一八年の總選擧から一九二一年六月までの結果は次の表のとほりである。

	統一黨	ヂョーヂ黨	アスキス派	勞働黨
一九一八年末から一九二〇年五月まで	一八三、二二三	一一〇、七〇八	一三〇、二六七	一三七、一一九
同 一九二一年六月まで	三一七、三三九	一八三、九八一	一八九、六三八	三九五、六六五

この數字によつて知られるとほり勞働黨は英國の最大政黨になつてゐるのである。アスキス黨よりも、ロイド・ヂョージ黨よりも、また統一黨よりも、勞働黨は最大の政黨となつてゐるのである。ブルヂョア階級の政治家が恐怖を抱き出したのは當然のことである。しかもこの數字は今日になつても變らない。即ち聯立派の統一黨とロイド・ヂョーヂ派の二つの投票獲得數を併せても、最近のニユウポオトの補欠選擧（最後の補欠選擧）までを通計して七十萬四千七百三十三票であるに對し、勞働黨は五十三萬八千五百六十七票をえてゐるから、一政黨としてはどこまでも勞働黨が最大政黨である。そして全體の割合から云ふと、統一黨が全勢力の略々三割一分、アスキス派とロイド・ヂョーヂ派が各々一割七分、勞働黨が三割五分に當ると云ふことになる。そこで若しこの割合で行くことになると英國の有權者總數二千二百三十萬ばかりであつて、そのうち約七割の實際投票があると見て總投票數一千五百四十萬票になるから、統一黨の獲得數が約四百七十萬余、アスキス派とロイド・ヂョーヂ派が各々二百五十萬、勞働黨が五百三十余萬票を獲得することができるものと見られる。そしてこれ等の獲得投票數から幾何の代議士がえられるかと云ふのに、前記の割合で行くと全體の代議士數六百〇二名のうちで統一黨が代議士百八十六名、アスキス派とロイド・ヂョーヂ派とが各々百〇二名、勞働黨が二百十名の代議士を出すことができるわけになるのである。ところで英國の選擧區は小選擧區であり、且つ比例代表の方法が行はれてゐないから、少數黨はその投票の獲得數の割合に比べて代

議士の當選率が非常に少くないのである。ロイド・ヂョーヂ黨にして若し統一黨と充分な選擧上の妥協ができてゐるとしたらこの不利益から幾分免れることはできるであらうが、それも部分的であらう。アスキス黨はそれを免れることが全くできない。從つてアスキス黨は實際には五、六十名の代議士しか出せないものと思ふの外ほかはない。そしてこのアスキス黨の損失が統一黨若しくは勞働黨の利益となることは明らかである。假りにアスキス黨のこの損失を四十名として、その半分〳〵を勞働、統一の二政黨で折半すると見れば勞働黨の代議士は二百三十名統一黨は二百名と云ふことになる。そしてロイド・ヂョーヂ黨の損失も統一黨若しくは勞働黨を利するに至るであらうと思はれる。そこで實際の當選率は先づ統一黨と勞働黨とがともに二百名以上、アスキス、ロイド・ヂョーヂの二派が各々五、六、七十名と云ふ所であらう。それが常態である。これより違つた結果が實際に現はれるなら番狂はせの部に屬するのである。

六

聯立內閣が破れて統一黨の單一內閣ができたこと、即ち英國の政治的傳統が回復されたことは一般に好感をもつて迎へられてゐるやうに見える。この點がボナー・ロー內閣の一つの强味である。この强味のために統一黨は意外の利益をうけるかも知れない。特に勞働黨の勢力が一般に認識されるとゝもに中產階級の恐怖が增大してきたこと、且つ勞働黨が發行部數二十萬內外のデーリー・ヘラルドの一機關をもつてゐるだけであるのに對し、資本家側が豐富なる機關新聞を利用して選擧に莅むでゐるために、且つ勞働黨が選擧資金に苦るしむでゐる時に、資本家側が何千萬圓と云ふ巨額の運動資金をもつて選擧界を腐敗させるであらうために、統一黨の當選者は意外に多數に上るかも知れない。しかしそれにしても統一黨が單獨で三百名以上を獲得することは考へられないのであるから、また三百名以上をえても內部が必ずしも統一してゐるものでないのが英國政黨の實狀であるから、統一黨は單獨では政權を維持することはできまい。そこでロイド・ヂョーヂ黨との妥協となるのであるが、ロイド・ヂョーヂ黨と統一黨以外に提携すべき何ものもないから恐らく再びこれと妥協を繰返すであらう。でなければ勞働黨の天下となるのほかはない。勞働黨が天下を取るであらうと云ふことも必ずしも空想ではない。勞働黨は現に五百萬近くの黨員をもつており、それが全部有權者であるから、この黨員全體が結束して立ちさへすれば、つまり宣傳と運動とが充分でありさへすれば、そして幹部の作戰が宜しきをえさへすれば、勞働黨

は僅に英國の最大政黨となりうるのである。それにしても無論單獨で政權を維持することはできまいからこゝにアスキス黨との妥協が問題となつてくるのである。シドニイ・ウエッブが今年のエヂンバラの勞働黨總會でテスティング・タイムは次の總選擧だと云ふたのはこの意味である。勿論勞働黨のこの總會ではたつた一票の反對をほかにして他は全部一致の贊成でウヰリアムスの決議案、即ち勞働黨はウヰー・フリー（アスキス派）とは妥協しないで全然獨立の政治的行動をとると云ふ決議案が可決されておることも事實であり、この席上では妥協組の首領と目されてゐるヘンダスンもこの決議案に贊成の演説をし、ウエッブもまた執行委員を代表して、執行委員の間に妥協を考へてゐるものは一人もないとさへ云つてゐるのである。しかしウエッブの言つてゐるとほり、次の總選擧がテスティング・タイムであるかも知れぬ。そしてまた勞働黨が主動力となつて天下をとるのだとすれば、縦令自由黨の一部をこれに加へるにしても、指導力が勞働黨にあるから勞働黨が嘗つて「自由黨の尾」であつた場合や、若しくは佛蘭西のミルランがワルデック・ルソウ内閣の尾となつた場合とはわけが違ふ。特に共産主義者流の無産者階級の獨裁政治の主張者でない限り、カウツキーがその最近の著述「無産者階級の革命と其綱領」のうちで、過去數年の經驗に徴し、純粹のブルヂョア政治と純粹のプロレタリヤ政治との間の時に政治的に、コワリチョオンの時代が存在すると云つてゐることは獨逸の經驗であるとゝもに英國の經驗でもありうるのである。アスキス派とエクレストン・スクエアの勞働黨本部との間には一脉の相通ずるものが惜にあるように思はれるのである。私が昨年勞働黨首領ヘンダスンに會つた時も、同氏はこの妥協の不可能でないことを論じてゐたことを私は記憶する。

七

今度の英國の總選擧を通じて最も重大なことは、この總選擧が最早やブルヂョア仲間の黨派爭ひでなくて、ブルヂョア對勞働者の爭鬪戰となつたと云ふことである。最早や英國の政界では單獨で政權をとりうるブルヂョア黨は殆んど無くなつたのである。余程の番狂はせでない限りそういふことは考へられないのである。ブルヂョア階級が政權を維持するためにブルヂョア階級の全體が一致して一政黨に結合するの方法があるだけである。この方法によるとすれば、ブルヂョア階級は尙ほ數年若しくは十數年の間政權を維持することができるかも知れないのである。そこでブルヂョア諸政黨の一致協力が叫ばれる。その協力は無論今日は不可能である。獨逸において、佛蘭西において

然るがごとく、英國においても不可能である。アスキス派は、少くともその感情においては勞働黨に最も近いのである。勞働黨を正面の敵とするものは統一黨とロイド・ヂョーヂ黨とである。彼の旗幟は鮮明である。その根本において勞働黨打破である。勞働黨の權力を抑壓しようとするのが彼等の根本の要求である。ロイド・ヂョーヂが昨年勞働黨の擡頭に驚愕して、これを一つのボギイ（惡魔）だと云ひ出してから、資本家階級の政治家が勞働黨に對する挑戰は頗る露骨となつてきた。チエムバアレンが聯立の必要を主張した根本の理由は聯立によらなくては勞働黨を壓迫することができないと云ふにあつた。ボナー・ローが聯立に反對した根本の理由も、聯立政府の力をもつてしては勞働黨に對抗することはできないと云ふにあつた。勞働黨を仆せ！　でなければ英國の世界的權力と繁榮とは終りを告げるであらう！　これがロイド・ヂョーヂの、そしてボナー・ローの選擧標語である。嘗つて一九一八年にカイゼルの首を縊ると稱して民衆を欺いたロイド・ヂョーヂは今度は勞働黨の首を縊ることを約束して英國の中等階級に訴へ、そして愚昧なる勞働者の一部をも欺かうとしてゐるのである。これに對して勞働黨は全國に約四百の候補者を立て、資本階級との組織的の戰鬪に入つた。その政黨はまだ甚だ日和見的な政黨ではあるが一年ごとに階級意識を强めてきたことは爭はれない。今年會長に選まれたのはシドニイ・ウエッブである。獨逸でこの秋に成立した大社會民主黨ファウ・エス・ペイ・デイがその綱領起草委員長カウツキイによつて理論的に最もよく代表されるであらうように、ウエッブはまた英國勞働黨の最もよき代辯者である。彼の立場は勞働黨の立場である。それは頗る保守的ではあるにしても、少くとも社會主義の立場ではある。今年のエジンバラの總會ではフランク・ホッヂスの發議に從つて選擧綱領を決した。それによると勞働黨は土地、鑛山、その他の重要公益を國有すること、そしてその管理を勞働者の手に移すことが、全會一致で決定し、そしてそれが選擧綱領をなすことになつてゐる。資本課稅とこの國有の主張とが勞働黨の選擧綱領の最も重要なものである。こゝに資本家階級恐怖の根本理由が存在するとゝもに、勞働黨の立場を鮮明にしてゐるのである。ボナー・ローの標榜するところは個人の企業の自由である。即ち資本主義である。勞働黨の標榜するところは重要生產手段の國有であり、從つて社會主義である。こゝに英國の政界は英國の歷史上に初めて資本家と勞働者、資本主義と社會主義との爭鬪の舞臺に入つたのである。こゝに今度の英國の政局の重要さが存在してゐるのである。そしてこの政戰はこの選擧においてたゞ序幕に入つたのではあるが、しかしそれは英國的に、一歩々々の堅實の動きからしてこの舞臺にまで達したのである。從つてそこには三歩前進二歩後退はあるにしても、五歩前進十歩後退はありえないのである。

（十月三十一日の朝）

アインスタイン氏
記念繪はがき

アインスタイン教授の來朝を記念する爲に記念繪はがきを發行いたしました、五枚一組みで貳拾錢です、御希望の方は賣切れぬ間に申込んで下さい、繪はがきの内容を簡單に左に説明申上げます。

1 相對原理を證明したる日蝕寫眞
(一)英國日蝕觀測隊の用ひたる望遠鏡
(二)日蝕時より太陽及星
2 相對原理の基けるマイケルソンの實驗裝置
3 最近のアインスタイン氏夫妻
4 最近のアインスタイン博士
5 アインスタイン氏の筆蹟

改造社

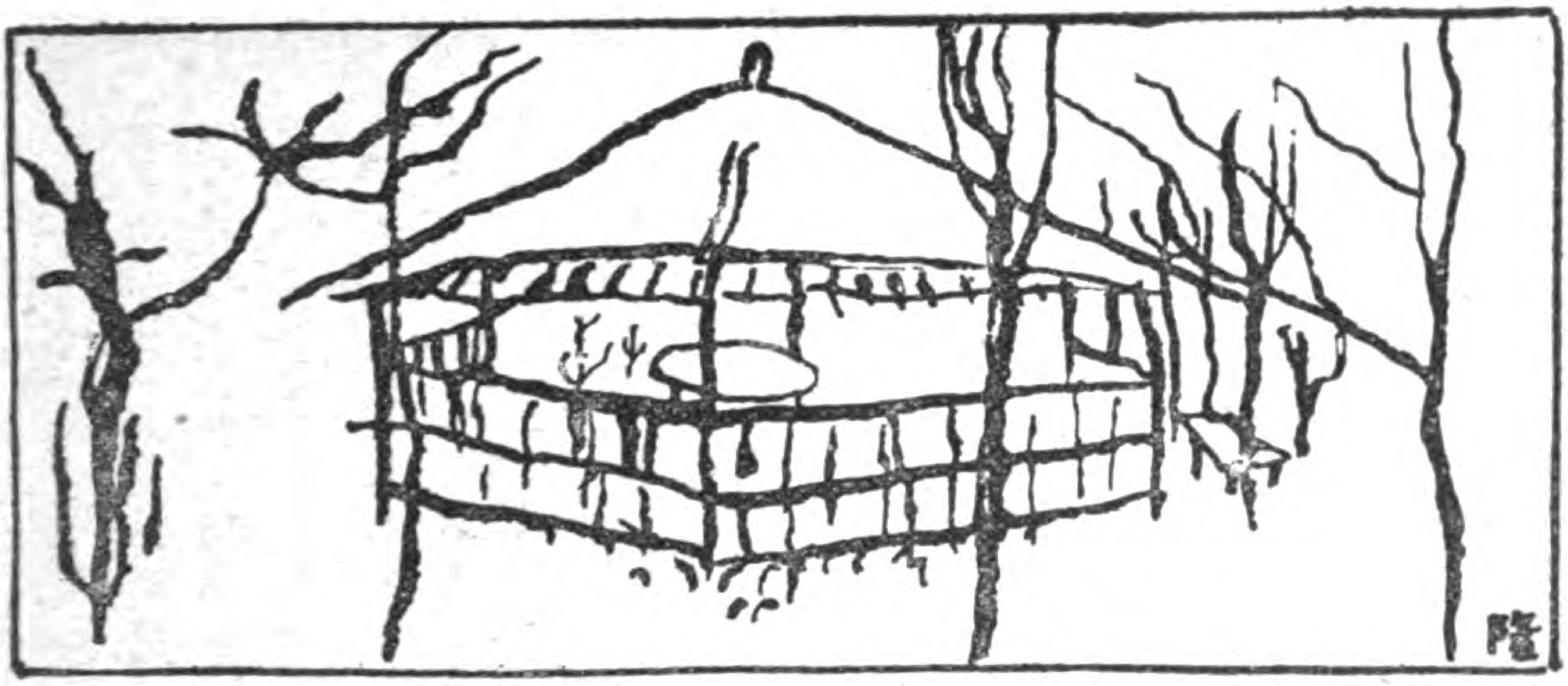
創作

芭蕉

吉田絃二郎

「彈力線」の尖端から

武林無想庵



芭蕉

吉田絃二郎

一月あまりの旅に芭蕉はすつかりやつれてゐた。かれの中高な品のいゝ、日に焦けた神經質らしい顔にはさらに心の深い苦しみと孤獨の影がいたましいほどに刻みつけられてゐた。けれども三十を越したばかりの壯年の男の面には冐しがたい悲痛な決心を積みたる覇氣とが濃い眉の間に動いてゐるのであつた。

たゞ一人で江戸を立つた芭蕉は、東海道を歩いてゐる間も、驛々の旅籠でも、故郷のことのみを胸に描いてゐた。出奔してから後の父の死、つゞいて母の病、母の死、誰れ彼れのことがそれからそれへと思ひ出さるゝのであつた。

尾張にはいつてから鈴鹿が見え、生吹が見えるやうになつた時、かれの胸は躍つた。

しかし桑名を出て、龜山の町を山の麓に見出すころになつて、かれの決心はくつがへされてしまつたのであつた。

かれは弱い自分の心を叱つた。

『父のない故郷、母のない故郷にわたしは何で歸るのだ。故郷を出て十年の間にわたしは何を仕遂げたか。わたしは何のために故郷を出たのか。わたしは故郷に歸つてはならぬ』

かれは暮れて行く鈴鹿山脈を秋の曠野に見ながら、そこに突つ立つてゐた。

夜更けて御殿から歸つて來るごとに、たゞ一人で起きてゐてかれのために雜炊だの葛湯だのを拵えて待つてゐた母の白いやさしい顏が、今にもなほあの山の向ふに自分を待つてゐるやうな氣がしてならなかつたのであつた。けれどもそこには越えてはならぬ高い扉が、山の上に立てられてゐるやうに思はれるのであつた。

かれはたうとう踵をかへして、故鄕には立ち寄らないで、桑名から木曾川に沿ふて舟で東海道に出て行つてしまつた。

『あらゆる執着に打ち克たなければならぬ。わたしは一生を盡して成し遂げなければならぬ大きな仕事を持つてゐる筈だ。わたしは自分の仕事を、自分の力を信じなければならぬ。』

木曾川の舟を捨てゝ、美濃と尾張の境を土堤に沿ふて歩きながらも、かれは無理にも自分の弱い心を引き立たせるために、このやうなことを思ひつゞけた。桑畑をへだてゝ鈴鹿と生吹が或る時は見え、或る時は雲にかくれてしまつた。

かれは早く故鄕の山からのがれたいと思つた。それでもかれは幾度か振りかへつて故鄕の山を見た。

山は蒼く暮れて行つた。靄につゝまれた曠野の下に幾つかの町や村が暮れて行つた。

芭蕉は今別れて來たばかりの老船頭と一緒に、今夜一夜だけ水の上に泊つてゐた方がよかつたとも思つた。薄暗い土堤の道を歩いてゐる間に、舟を捨てたことを後悔するやうな氣にもなつた。

『年中、何處に泊るといふ決つた場所もありません。お客さんを送つて、それからは氣に向いたまゝ、水に流さるゝまま、好きなところに舟をつないで眠ります。』

川の瀨の音を聽きながらかれは別れて來たばかりの老船頭の言葉を思ひ出した。その言葉が妙にかれの心を囚へてゐた。

かれは星明りに土堤の道をたどつてゐた。水の音も、土堤を埋めるやうな蟲の聲も、幾度か空をかすめて流れた星の光りも、ほとんどかれは意識しなかつた。

秋そのものゝ死靜が地をつゝみ、かれの心のすべてを支配してしまつたのであつた。

『わたしは何處に行けばいゝのだ！』かれは歩きながらも、かう思ふこともあつた。江戶に於けるかれはまだ渺たるほとんど無名の俳人に過ぎなかつた。かれはまだ俳友らしい俳友も持たなかつた。故郷を捨てゝ來たかれはほとんど行くべき場所を持たなかつた。かれにとつては、世界のどこもがあまりに賴りなかつた。世界のどこにもかれを待ち設けてゐる一人の人間をも見出すことの出來ない孤獨さを感じないではをれなかつた。

かれは不圖空を見た。星が今にも降つて來さうにかゞやいてゐた。一つ一つの星が遠い隔りを保つてまたいてゐた。かれは、かれ自身と星との間のあまりに遠いへだゝりを想像した。かれが『この刹那に、こゝで地に全身を投げ棄てゝ慟哭しようとも、死なうとも、星は永遠に一つのまたゝきをも變へないであらう、天と地と、悠久とすべてのものが、すべて冷たく、無關心である。しかも人間は生まれ、生き、苦しみ、死につく無關心の世界へと歩いて行く』このやうな考へがまつたくかれの心をつゝんでしまうのであつた。

人間がたゞ一人で、悠久と無關心の時空の間を、歩かなければならぬといふことは耐へ得られないことであつた。かれは自分自身の疲れた足音を聽きながら芒に掩はれた土堤を步いてゐた。孤獨と沈默はかれの魂を窒息させるやうに思はれた。かれは誰とでもいゝから語つて見たいと思つた。

かれは川の或る瀨に近づいた時、暗の中に聳えてゐる五六本の高い列樹の下に、木の下暗を舐めてゐる焚き火の影を見出した。かれは小急ぎに近づいて行つた。何の不安もなしに。そこに人間の影を見出すであらうといふ豫覺でかれの胸はいつぱいにかゞやいてゐた。

かれは焚き火の傍に、蓆の上に眠りこけてゐる若い一人の乞食を見た。少し離れて見ると、焚火を乳色でつゝんでしまつたほど霧は深かつたが、炎があかあかと燃え上るたんびに、靑年の顏がくつきりと暗のなかに浮き彫りのやうに描き出されるのであつた。

若者のこけた頰がひどく寂しい影を漂はしてゐた。

かれはしばらく躊躇してそこに立ち止まつた。

『風をひくといけない！』かれは若い乞食に近づいて行くそれがすべての理由であるかのやうに獨語ちながら、焚き火の傍へ近づいて行つた。故郷を出奔して太宰府あたりまでもさ迷ふて歩いた數年前のかれ自身の過去の生活が思ひ出さるゝのであつた。

かれは青年を揺り起した。かれは青年の理智的な、反抗的な冷たい眼が炎に動いてゐるのを見た。けれども芭蕉のやさしい心は、冷たい理智的な、反抗的な、そして卑しい苦笑さへも持つてゐる青年の眼について考へる餘裕を持たなかつた。かれは夜露に濡れてゐる青年を土の上に眠らせて置くに忍びなかつた。

芭蕉は若い乞食と二人で焚き火にあたりながら語つた。最初は若者は疑いと警戒の眼をもつて芭蕉を見つめてゐたが、しまひには自分でもぽつ〳〵語り出すやうになつた。しかしどつちかといへば、この若者は、無愛想であつた。傲慢と、不安と、放縦とが生んだ狡猾さや我執や、猜疑や、冷笑的態度がかれの言葉にもあらはれてゐた。その顔が整つてゐるだけに一層、かれの顔に閃光的にあらはれて來る醜い心の影がいたましかつた。そして時々、感情に動かされてはまるで獸的に狂ふやうな殘忍さの閃きすらもあらはした。

『腹ちがひの兄が一人ある……父も母もほとんど知らぬ……兄の手で育てられた。兄と兄嫁がたくらんでわたしに遺されてゐた田畑まで奪つてしまつた……わたしの母は後添ひであつたから兄とは仲が惡かつたさうだ。わたしが生まれて間もなく母はこゝの川で』と言つてかれは瀨の音を立てゝゐるあたりの暗を指さして見せた。身を投げて死んだ。それは父が死んで百日も經たないうちだつたさうだ。兄がわたしの母を殺したのだといふことを後で聞いた。兄はひどく母にあたつたのださうだ。去年であつた、わたしは兄と兄嫁を殺すつもりで家に火をつけやうとした。手や足が顫へてしくじつてしまつた。兄に見つけられて殺されようとした。家を追ひ出されたので土堤に來てこんなことをしてをるのだ。時々はやとはれて舟を曳いて川を上つたりすることもある。』若者はこのやうなことを語りながら、一抱への薪を運んで焚き火の中に投げた。

『こんなところに一人でゐて寂しいとは思はぬか。』

『寂しいと思や、寂しいが、いやな人間の顔なんか見てゐるよりましだ。』

『そんなに人間は嫌ひか。』芭蕉は何となしに若者に惹きつけられて行つた。いたいたしい若者の眼は殊にかれの心を強く囚へた。

『人間は嫌ひぢやないが、わたしの村の人間はみな惡い奴ばかりだつた。わたしが手習ひに行つた寺の和尚も、村の奴等もみんな兄に加勢をして、わたしを惡人にしてしもうた。』

『だから人間は嫌いか。』芭蕉は痩せこけた若者を見てゐる間に、どうしても若者を路傍の人として打ち棄てゝ置くことはできないやうに思ふのであつた。

『何だか知らぬが、わたしが今まで知つた人間よりか、犬だの、馬だの、星だの、川の流れだのいふものがわたしにはいゝやうな氣がする。町に出て働け、立派な人間になれなんてすゝめてくれる人もあるが、……また自分でも町に行つて見ようかなどゝ思ふこともないぢやないが、こゝに寢て、起きたい時に起き、食ひたい時に食つて、寢たい時に寢た方がいゝやうだ、毎日々々きまつた仕事をするのはとてもやりきれぬ。このごろは月がいゝが、あのお袋が身を投げたといふ淵の上のあの白い瀨なんか見ながら、草の上に寢てゐると、兄の家なんかにゐるよりずつとのんきだ。』

『しかし、だん〳〵年をとつて來るにいつまでもそんな眞似もできまい。』芭蕉はしみじみとした氣持ちで、若者の一生のことを考へないではをられなかつたのであつた。

『何うなるか明日のことはわからぬが、わしはやつぱりこゝで一生このやうなことをしてゐた方がいゝと思ふ。かうして草の上に寢て月など見てゐると天だつて地だつてまつたくわし一人のものゝやうな氣がするで……』

若者はだん〳〵快濶になつて來た。そして焚き火の中に絕えず薪を投げた。

月が出るので、川上の山脈が黝い大空に明暗の曲線を投げはじめた。

絹のやうな綵を描いた雲が動きはじめた。曠野の暗い大地をつゝんだ露が月の光りに照らされて來た。川の面に月の光りが流れはじめた。

若者の母が身を投げたといふ川の瀬が小高い山の裾に白く浮かんで來た。

×

天和元年の秋から冬に移らうとするころの或る日であつた。

深川六間堀の芭蕉庵には宵のうちから其角や才丸や杉風や嵐雪や、その他五六人の俳俗の客人たちが八疊の一間に膝と膝とを突き合はせるやうにして坐つてゐた。

八疊と次の間の境に一つの蠟燭が點されてゐた。八疊の間の爐の傍には薄暗い行燈が置かれてあつた。

次の間――それは台所と下男部屋とを兼ねたものであつたが――そこには十五になつたばかりの少年一笑と、路通が敷居の上に坐つてゐた。路通は興奮した顏をして時々、爐の傍に俯向いてゐる、芭蕉を見るのであつた。

今日の午過ぎからの運座で人々はすつかり疲れてゐた。

時雨だの、冬近しだのいふやうな言葉が人々の口から洩れて來ることもあつた。

人々はたいてい默りがちになつてゐた。部屋の空氣がばかに滅入つてゐた。大川の波が芭蕉庵の直ぐ下の蘆の岸を打つ音が、ひたひたと、うら寒い晩秋の夜を暗のうちに葬つて行くかのやうに沈んでゐるのが、人々の心を一層頼りなくせしめたのでもあらう。

けれども、一座の人たちの心が何となしに白け切つてしまつたのは、誰かゞ『乞食の簑を……』と附けようとした刹那からであつた。

床柱の前に坐つてゐた芭蕉はその刹那にさつと顏を曇らせた。しかし次の刹那にはかれはそれを聽かなかつたかのやうに笑ひに紛らせてしまつた。かれはなるたけ路通の方を見ないやうにつとめた。それでもかれは路通が神經質な眼を瞠つて、唇を噛んでゐるのを見た。何か不愉快なことの起つた場合唇を噛むのが、路通の癖であつた。路通の痩せた横顏や、こけた肩の影が横の壁にほの暗く動いてゐるのが、芭蕉にはいたいたしく想はれた。

芭蕉は路通が木曾川の土堤の上に寢てゐたことなどはつい誰にも語つたことはなかつた。

けれどもいつとなく路通の前身についていろ〳〵の噂をする者が出て來た。芭蕉は路通のために、芭蕉庵に集まつて來る弟子たちに對していつも辯護の位置に立たなければならなかつた。

路通は人一倍才走つてゐた。時としては嵐雪や其角をさへ凌ぐやうな才を見せることもあつた。

路通はよく點取りに夢中になつて夜を明かすことすらあつた。芭蕉は點取り式の俳諧をいつも戒めてゐたのであつたが、路通は師の眼を偸んでは點取りに熱中してゐた。そして勝つことにのみ走つた。それに、かれの境遇が生んだ猜疑、反抗、冷笑的な態度はほとんど今日までもかれの人格を作り上げてゐた。

このやうなかれの性格が一層弟子たちの間に、かれを憎むやうな氣分を喚び起させるのであつた。

芭蕉に對してだけは、かれはこの上もなく從順であつた。蔭日向なく立ち働いた。

芭蕉はかれの卑しい心をためるためにはよく叱つた。どのやうに叱られてもかれは芭蕉の前には俯向いて、涙さへ流すこともあつた。そしてどんな寒い雪の日でも、かれは暗いうちに起きて台所に働いてゐた。竈の前にしやがんで、かれが柴を折つてゐるかすかな音を聽きながら、寢床の中で芭蕉は昨夜路通を叱りつけたことを後悔することもあつた。

『あれは小鳥のやうに自由自在な自然を樂しむことのできる乞丐の生活が、人間の生活としては一番眞實なものであると言つた。あれはあの廣い自然の中で自由自在な生活を樂しんでゐたのであつた。そこには人が人の自由自在を束縛する何物もなかつた。そこでは人は生れながらの自由自在を持つてゐた。わたしはあれを救ふつもりで江戸につれて來た。あれはまたわたしに救はれたと思つてゐるようである。けれどもしあのまゝに、あの野の中に放つて置いたら、かれは人々に氣兼ねをすることも、不愉快な思ひをすることもなかつたであらうに。わたしは自分だけの考から、あの男の自由自在を奪はうとしてゐるのだ。都會の人たちにあの男を辱めさせるために連れて來たやうなものだ……』

芭蕉は竈の前にしやがんでゐる路通の低いしはぶきを寂しく聽くこともあつた。父もない、母もない、この世の中に誰一人味方を持たぬ路通のことを考へると、芭蕉は、路通が犯したどのやうな行爲でもゆるしてやらなければならぬと思ふのであつた。

誰かゞ『乞弓の鍵を……』と付けようとした刹那に、かれは不注意なその男を憎んだ。そして路通をたまらなく氣の毒に思つたのであつた。

×

一座が白けかへつてゐる時、こと〳〵と天井の上で鼠が物を引き摺り廻すやうな音を立てゝ騷いだ。

『今朝梅石のところに手紙をことづけて置いたが、梅石はまだ見えぬなあ。』芭蕉は心持ち蒼白い顏を次の間の路通の方へ向けた。痩せてはゐるが、そして温厚な人柄ではあるが芭蕉の面には一種の冒し難い强い意志の閃きが漂ふてゐた。

『まだ梅石さまはお見えになりません。風が少し出ましたやうですから、渡船がどうでございますか知ら……』次の間に坐つてゐた少年一笑は小窓を明けて戸外を見た。

うら枯れた芭蕉の葉が行燈の光りに映つて、かすかにそよいでゐた。眞つ暗であつた。

『雨でも降つて來さうな空でございます。』背伸びをするやうにして其角が小窓から暗の中を覗いて見た。

『波の音も高くなつて來たやうでございます。これからまた一としきり時雨のころになりませう。』年若な一人の武士はかう言つて芭蕉の横顏を覗き込むやうにした。

芭蕉は跫音に耳を傾けるやうにして、戸外の方を向いてゐたが、尙一度そこに神經質な眼をしてゐる路通を見た。

『梅石に何か急な御用でも？』嵐雪は天井の鼠の音のする方をちよつと仰ぎながら、芭蕉の方を向いて言つた。

『いや、何でもありませんが。』と芭蕉も天井を仰いで、子供のやうな微笑を洩らしながら『實は梅石の家の猫を借してくれるやうに賴んで置いたのですがハツハツハツ……』

『ハツハツハツ……猫でございますか。』

みんなが笑ひながら芭蕉の顏を見た。

『あまり鼠があばれて仕方がないものですから。』芭蕉は眼を細くして笑ひながら路通の方を向いた。『御苦勞だが、一つ梅石の家まで走つて行つてくれないか。』

芭蕉は自分で立つて行つて次の間の壁にかけてあつた提灯を取つてやつた。」

路通は庭に立つてゐた。芭蕉は自分で蠟燭を點してやつた。

『この暗いのに御苦勞ぢやが……渡しを氣をつけておいで。序に米を二升ばかりと、美濃紙を四五枚だけ貰つて來ておくれ……』

路通はうなだれがちに暗のなかに消えて行つた。

芭蕉は小窓からしばらく默りこんで路通の提灯を見つめてゐた。

路通がゐなくなつてから部屋の中は再び明るさを取りもどしたやうに見えた。

連句がすんだ後では人々はきまつて萬葉だの古今集だのゝ歌について語つた。芭蕉はそんな時は誰よりも緊張した顔をして人々の話に耳を傾けた。人々はまたその折々の世間の出來事についても語り合うこともあつた。そのやうな時は芭蕉はたいていは眼をつむつてゐた。しかしかれは心から眠つてゐたのではなかつた。或る時は人々の話を聽きながらそうつと溜息をすることもあつた。

今夜も俳形の一人の男が、老中堀田備中守が殿中で危く刺されやうとしたといふやうな噂を低い聲で語り出したのが緒になつた。

『備中守樣は春日局樣の御孫にあたられるし、現代樣の後見でいらつしやいますから、御威勢のいゝのも無理はございません。』

『高い聲では申されませんが殿中では備中守樣のことを副將軍などと蔭口を利いてゐる者もあるさうで……』

『しかし世間ではこのまゝではすみますまい。天草四郎だの、由井民部のやうな人間がまだ今の世に生きてゐないとも申されますまいもの……』

『さうですとも、これも噂だけかも知れませぬが二三日前近江からまいりました人の話では、美濃あたりでも一二三萬からの百姓衆が何とかいふ大名對手に一騒動持ち出さうとしてゐるといふことを聽きましたが……』

『いや、美濃ばかりではありますまい、江戸に近い秩父や、藤あたりでも郡代を殺すだの何だの言つて騷いでゐるといふことではございませんか。』
『下人民は何もかも取り立てられるばかりで、働いても働いても食へない時節になつて來たのですから…』
『それにしてもまだ江戸の人たちは仕合はせでございますよ。町人衆に至るまで、何とか彼とか言ひながらも、随分綺羅を飾つた生活をしてをりますので。大奥でもこのころでは將軍さまを始め殿中の方々が夜を日についで歌舞のお催などに浮身をやつしておいでになるさうでございますが、ちよつと町を歩いてごらうじ、若い男までが歌舞伎好みといふ態でございませう。侍までが左樣で、吾々田舍武士はとんとお恥かしいことでございます。』
『まつたくです。一方ではその日その日食ふ物にさへ困つてゐるかと思へば、一方ではやれ歌舞伎だの、何々踊だの、たゞもうわけもなしに浮かれ歩いてゐる人たちもございます。それに世の中が逆さになつたと申しませうか、人間よりは犬の方が……』
『しいつ。犬の話は……』と一人の商家の主人らしい男が手をあげて制するやうにした。
『でも、あなた、私は五六日前武藏野の秋を探ると申すやうな洒落心から荻窪あたりまでまいりましたが、噂にだけ聽いてをりました中野のお犬小舍を拜見しました。廣さが十六萬坪。何萬の犬でせう。犬に喰はせるかゝりだつて大したものですよ。稼いでも稼いでも人間は饑えやうといふ世の中に、あれだけの犬があなた……今に日本中は、犬と將軍樣のお目付だけになつてしまひませうよ。百姓町人といふやうなものは干乾になつてしまふのでございませうか……』これを商人らしい男が俳諧の話などはてんで忘れたやうに、顏を赤くして、興奮した聲で語つた。
『干乾しにならぬうちに百姓たちは一揆でも起さうといふのでございませう。お上で贅を盡しになつた揚句が御用貨多端と來る。錢のお吹き替と來る。きまつて錢の質といつたら年々惡い地錢とお吹き替えになるばかり。これぢや錢は安くなる一方でさあ。百姓町人こそいゝ面の皮でさあ。一生懸命働けば、惡い地錢の錢がいたゞける。おかげで物は高くなるし。何かと言へば牢舍だの、遠島だの……』と最初の商家の主人らしい男。むきになつたこの男の聲は顫へてゐた。

『いや、このまゝぢや濟みますまいよ。吃度また由井正雪見たいな男がやつて來るかも知れませんよ。』川舍から來たらしい武士。

『何んだか世の中が不安でならないやうに思ひますよ。』風雪が苦勞人らしい顏を蠟燭の方へ向けた。窓の下の芭蕉の葉がひとしきり風にそよいでゐる音がした。

人々は風の音に驚かされたかのやうにちよつと聽き耳を立てた。

路通が白い猫を懷に抱いて歸つて來たのであつた。かれは片方の手には米をつゝんだ風呂敷と、杉の板を一枚提げてゐた。台所口でばた／＼と肩から、袂をはたいた。懷から紙包みを取り出した。

『もう降り出しましたか』と其角がたづねた。

『えゝ、まだ降つてゐるといふほどでもありませんが……それに風が出ましたやうで……』

『いよ／＼野分のころになつたといふのでせうかハヽヽ……』杉風が笑ひながら障子を細目に明けて戸外を見た。

床の柱に凭れたまゝ眼をつむつてゐた芭蕉は、杉風の肩越しに暗い戸外を眺めた。

『御苦勞だつた。濡れたやうだなあ。寒むかつたらう』といたはるやうに路通を見て『あゝ可愛いゝ猫だ。梅石は？』

芭蕉は路通から猫を受けとつて、ちよつと猫の頭をなでながら自分の懷に入れた。

『今晩はぜひお伺ひする筈でございましたが、藤吉さんが根岸の里へ朝から出かけてゐつたまゝ日が暮れましても歸つて見えませんので、梅石さんが根岸まで探しにお出かけになつて、今お宅にお歸りになつたばかりのところでございました。』

『それでは藤吉は根岸にをつたのかい？』

『いゝえ、根岸の家を出たのはまだ晝にもならないうちだつたさうですが……』

『それで夜になつても歸らぬのか？』

『左様でございます！あのあたりは惡い狐が多いさうですからと云つて心配しておいでになりました。』

『狐にでも誑されたのかなあ……そんなこともあるまいがハッハッハッ……』

『わたくしたちも雨に降られませんうちに』

『狐に誑されませんうちにハッハッハッ……』

其角も嵐雪も侍も、若僧も庭に下りて行つた。芭蕉は行燈を提げて縁側に立つてみんなを見送つた。

『路通さん。壁が何うかしましたか。』杉風は勝手口を覗いた。そこには路通が今持つて來たばかりの板を叩きつけてゐるのであつた。『明日にでも大工を遣はしませう、宅の方から。』杉風はそこに立つてゐる芭蕉に丁寧に頭を下げて暗のなかに消えた。

×

『路通……御苦勞だつたなあ。釘付はまあそこ〱にして、こつちに來て茶でも飲んだがいゝ。一笑は眠つた方がいゝ眠むたいかいハッハッハッ……』

少年は壁にくつ付いて眠りかけてゐた。白い猫が背を丸くして少年の膝の上に眠つてゐた。

芭蕉は自分と路通のために茶をいれた。少年の上に薄い搔い卷を引つかけてやつた。猫は搔卷の中に深くもぐりこんでしまつた。

『この猫は鼠をとりさうにもない。この寒がりでは……』微笑んだ芭蕉の顔を見上げながら路通は少年の傍に坐つた。

小窓の下の芭蕉の葉が、風のたんびにばらばらと破けて行くやうな音を立てた。

路通は押しいたゞいて茶を飲んだ。

行燈の燭に照らされた路通の半面が恰度影繪のやうに壁に對して浮き出されてゐた。神經質な、輪廓の整つた路通の横顔には年齢に比べてはあまりにませた分別と同時に世間的に苦しみぬいた者の疲憊とが漂ふてゐた。

路通はしづかに茶碗を置いた。そして眞正面に芭蕉に視線を投げた。それはいつもの疑い深い、反抗的な眼ではなかつた。微笑と信頼とを含んだ素直な少年の眼であつた。

路通は芭蕉と二人ゐる時だけは、まるでいつもとはちがつたほどの素直な表情を取りもどしてゐた。芭蕉一人のために苦しむこと、働くことが路通の血管の中の血といふ血を明るくし、躍り立たせるかのやうに思はれた。

路通は乞食の殘りのにうめんを土鍋に入れてあたゝめた。

『先生がお好きですからハツハツハツ……』路通は葱を小刻みにしたのを、にうめんの上にかけて芭蕉の前に出した。

『わたしは子供のころからにうめんが好きであつたハツハツハツ……』芭蕉は眼尻に皺を寄せてよろこんだ。

ふうふうとにうめんを吹きながら箸を取つた芭蕉の心に、不圖故郷の事が思ひ出された。古い心の傷手にでも觸られたやうなやましさと同時に、かすかな追憶の寂しさが頭を擡げて來るのであつた。けれども、恰度その時、かれの回想的な心は路通の言葉によつて破られてしまつた。かれは自分を見ながら、心持ち興奮した顔をして坐つてゐる路通をそこに見出したのであつた。

『先生……』路通の聲はやゝ顫へてゐた。そこにはかれの素直な眼はなかつた。かれはまたいつもの疑ひ深い路通にかへつてゐた。

『……………』小窓の下の芭蕉の葉がさく〳〵と風に吹きつけられるたんびに戸を打つのであつた。二人の間にしばらく緊張した沈默がつゞいた。

『わたくしはもう直ぐに二十七になります。かうやつて先生に救はれまして、一人前の人間になることができましたのを考へますると、何と言つていゝか知れませんが……』路通は手の甲で涙を拭いた『先生の御厄介になりましてからもう七年になります。わたくしはほんとうに親といふもの〻愛も知らず、兄とはあんな風でございましたし、乞丐となつて野の眞ん中に捨てられてからは、誰れ一人心から賴る人間も持ちませんで、まつたく世の中に一人ぼつちでございました。人間の世界といふものはわたくしにはまるで空虚でございました。先生はわたくしにはじめて人間の世界に光りがあることを敎へてくださいました。わたくしはこの世界に生きて來た甲斐があると思ふことができるやうになりました。わたくしにとつては先生は、わたくしの生命でございます。先生がこの世界においでにならなかつたら、わたくし

の世界はほんとうに空虚でございましたらう。』路通は兩手で自分の兩膝を抱きすくめるやうな恰好をした。それはかれが興奮し切つた時によくする態度であつた。

『ハッハッハッ…わたしはそんな立派な人間ぢやないんだよハッハッハッ……』芭蕉は迷惑さうな顔をした。芭蕉は實際くすぐつたい感じをしたのであつた。

『いゝえ、先生はわたくしにとつては彌陀の再來で…』

『もう、そんなことは言つてくれるな、わたしは穴にでもはいりたいで…』芭蕉は、にうめんの碗を爐の傍に置いた。

『いゝえ、まつたくでございます。ですが實のところを申しますと』路通はちよつと口を噤んだが思ひ切つた語氣で

『わたくしはこのごろ先生に救はれましたかはりに、また今までに知らなかつた苦しみを知るやうになりました。』

『お前の心は察する。しかし人には何とでも言はしといた方が……』

『いゝえ、そんなことではございません。わたくしが乞丐であつたことなどを誰れが知つてゐようと、それは諦めております。わたくしは先生のすべてをわたくし一人のものにいたしたいのでございます。』路通の聲は顫へてゐた。

『…………』芭蕉はぢいつと路通の顔を見つめてゐた。

『わたくしはこんなことを考へる自分の心を、あさましいとは思つてをります。けれども自分で何うすることもできませぬ。先生のためになれば、わたくしは眞實わたくしの生命もさしあげます。そのかはりにはわたくしはいつでも先生を自分一人のものにして置きたいのでございます。』

『お前のその心持ちもわたしにわかる。お前の心持ちは江戸に來た當時からうす〳〵感じてはゐた。殊にわたしの江戸三百吟が世に出て、ともかくわたしが一人前の俳諧師として江戸にも、また諸國にも相當に名を賣るやうになつてからは、わたしをたづねて來る俳人たちも多いし、自然お前とわたしと落ちついて語つてゐるといふやうな機會も少くなつた…』

『わたくしは、はじめて先生と秋の夜、あの木曾川の土堤の上で語り明かしました折のことや、江戸にお歸りになつて

からもまだ先生の評判も世間に立ちませんし、いつも先生と二人でその日その日の食ひ物にさへ困りました頃のことが懐しうございます。』路通にぽとりと膝の上に涙を落した。

『ほんに、お前はよくわたしのやうなもの丶ために働いてくれた』芭蕉もしんみりした心持ちになつた。二人で一日何も食ふものもなくてぼんやり雨を眺めてゐた日のことや、路通が雨に濡れて少かの米を餘所から携へて來た夕方のことなどが思ひ出さる丶のであつた。

『でも、今になつてそのやうなことを申し上げるのがまちがつてゐることはわたしも知つてをります。先生は生まれながら、日本中の人の先生におなりなさる天分をお持ちになつておいでになるのでございます。』

『しかし、路通、わたしがお前を思つてゐることは、やはり昔と少しもちがはぬ筈だが。』

『それは、さうでございます。先生はいつもわたくしのやうな者をいたはつて下されます。しかし先生は同時に其角も嵐雪も、また尾張にをります杜國をも、誰れも彼れもわたくしと同じやうに……』

『お前はまるで女のやうなことを言ふぢやないかハツハツハツ…』

『さうかも知れません。しかしわたくしの打ち明けた心を申し上げますと、わたくしの心はわたくしの他には、誰にも先生のお心を向けさせたくないのでございます。』

『わたしは誰にも依怙贔負はせぬつもりぢや。お前の言ふのは無理ぢや。』芭蕉は強ひて自分の或る感情を抑へつけやうとつとめた。

『無理でございます。それは知つてをります。しかしわたくしと言ふ人間は、このやうに生まれついてをるのでございますから、致し方がございません。』路通の眼は赤く血走つてゐた。

『それはお前、尚少し修業をしなければならぬ。それは執着だ。自分で素直な自分の心を食つてをるのだよ。妄執といふやつだ。』

『妄執でございませう。しかしこの妄執が修業によつて斷たれるものでせうか』

『俳諧はすべての妄執を斷つことから生まれるのではないか』

『…………』路通は俯向いたまゝ考込んでゐた。

戸外の芭蕉の葉を打つ雨の音が聞えて來た。ひとしきり鼠が天井の上をあばれまはつた。

『富貴、名聞、一日も生きのびようと生命を貪る心……それからお前のそのやうな心もみな妄執だ。その妄執を斷たんでは誠の俳諧はできぬ。生まれる時一文の錢を携へて來たのでもない。一人の友といふものを作れて來たのでもない。一日の生命も持つて來たのでもない。そこを考へなければならぬ。一合の米に一日の生命を生きのび得たことすらありがたいことではないか。見知らぬ人同志が一夜語り明すといふ機緣さへ尊いことではないか。俳諧の心は虛にかへることだ無に入ることだ。子供の心にもどることだ。何も彼も捨てることだ。』芭蕉の蒼白い顏にかすかに血の色が射した。芭蕉は一句一句語氣に力を込めて言つた。

『しかし人間と生まれて來ましたからには人間並のことは致して見たうございます。あの木曾川の土堤にゐましたころは、さうでもありませんでしたが、江戸にまいりましてからは殊にさう思ひます』

『世間並のこと、人間並の妄執を斷つことのできぬ者にはやはり人間並の事しか出來ぬ。とても俳諧の心はわからぬ。人並以上の仕事をするためには、俳諧の心を知るためには、どうしても人間の妄執は斷たねばならぬ』芭蕉の聲は沈んでゐた。

富貴や、名聞や生命や、そのやうな妄執は捨てることができるかも知れません、わたしのやうな者にも……ですが先生をわたくし一人のものにしようとするやうな心、このやうな妄執はわたくしは何うしても斷つことはできませぬ。先生から離れてしまふなら、それはできるかも知れません。しかし先生と御一緒にをります間は、わたくしにはそれはできません』

『…………』

『わたくしは先生を自分一人のものにするか、それができなければ先生を捨てゝ行くか。それより他に道はないのでご

さいます。誰れにも彼れにもつゝまれておいでになる先生を、わたくしはその人たちと同じやうな眼で、見てゐることはできないのでございます。とても苦しくてたまらないのでございます。』

芭蕉は路通の顔を見た。芭蕉が無氣味に思つたほど路通の顔には黒い執拗な血の氣がさしてゐた。

『お前はなぜ萬人と共に樂しみ、萬人と共に歌ふことが出來ないのだ。』

『それはどうしてもわたくしにはできません。わたくしは萬人と共に樂しむよりは、たゞ一人と共に樂しみたいのですたゞ一人と共に樂しみたいのです。たゞ一人を自分一人のものとしたいのです。先生には、わたしのこの心はお分りにならないかも知れません。生まれてから一度もほんとうに人間の愛といふものを味ひましたことのないわたしは、たゞ一度でいゝから思ふ存分人間の愛といふものに浸されて見たいのです。』

『お前の行く道と、わたしの行く道は初めからちがつてゐたのだ。』

『では先生たとへば、一人の男が一人の女を自分一人のものとしようとする戀の心でも妄執だと仰つしやるのですか。』

路通はかるい羞恥を見せた。

『戀ツ？』芭蕉は顔を曇らせた『わたしはこのごろでは戀なんていふ言葉を聽くさへ不愉快になつた。』

『でも先生の句にも戀がありますし、いつかのお話では、五十六十になつて富貴を貪る人の心にくらぶればまだ戀の方が美しい……』

『それはわたしの句にもある。またそのやうなことを話したこともある。戀には美しさも、深さもある。けれどもわたしはこのごろの人たちのやうに、戀をしなければ人間ではないといふやうなことを平氣で言つたり、また自分等の戀を麗々しく語り觸らすやうな流行にはどうも感心しない。人間である以上は誰にも戀の心はある。親を思ふ心にも戀はある。しかし戀は語ると共に汚される。滅びる。古今集あたりを見ると何々法師などいはれる人たちまでが戀の歌をうたつてゐる。わたしはあんな歌を讀むと不愉快でならぬ。』

『では戀といふものはこんなに汚はしいものでせうか。』

『汚はしいものではない。藝ほど浄いもの、藝ほど深いもの、苦しいものがどこにあらう。だから汚してはならぬのだ。』
『では人間の手では結句藝を汚してはならぬ。手を觸れてはならぬと…』
『さうだ俳諧をやるほどの人間は藝も捨てなければならぬ。時としては骨肉の恩愛すら捨てなければならぬ。』芭蕉の聲は少し顫へてゐた。『何も彼も……自分の一生も捨てなければならぬ。』
『先生は』
『わしは捨てることができたつもりだ。わたしは死にかゝつてゐた故郷の父さへ振り捨てゝ旅に出た。母にさへとう〳〵逢はずしまひになつた。……』芭蕉は俯向いてしまつた。さすがにかれは故郷を出てしまつて母の死顔さへ見なかつたことを思ひ出しては、胸が裂かれるやうに疼くのであつた。
『しかし先生、そんなことはとても並の人間にはできないことです。』
『並の人間にできることをしたのではやはり並の人間だ。並の人間にできない苦しい決心をしないではほんとうの人間にはなれぬ。親も捨て、妻も子も捨てゝこそ佛者のさとりが得らるゝのではないか。』芭蕉の聲が神經質らしく顫へた
『でもそれはあまり苦しいことでございます。』
『あまりに苦しい！さうだ。わたしたちが行かなければならぬ道はいつも苦しいのだ。』
『それでは、この世界はまるで墓場のやうなところになります。』
『さうだ。この世界を墓場のやうに生きて行くところにわたしの道がある。』
『それではこの世界には、春といふものはなくなります！』
『さうだ、わたしの行く道には秋ばかりがある。』芭蕉は溜息をついた。けれどもかれの濃い眉の間には犯しがたい威嚴と堅い決心とが動いてゐた。
『しかし先生、わたくしには、わたくしの眼にはたしかに春が映つて來ます。先生は今も子供のやうになつて自然を見ろと仰つしやいました。わたくしはそのまゝの眼でそのまゝの心で自然を見ました。人間の世界を見ました。わたくし

の眼にも秋が映ります。けれども同時に春も映ります。春の方がずつと力強くわたくしをひきつけます。春があるといふことは事實でございます。こんなことを申し上げたらお叱りになるかも知れませんが、先生は春があるといふ事實を御自分の頭で無理に打し消さうとしておいでになるのです。先生こそ子供の眼で自然を御覽にならないのではありませんか。」路通は一語一語亢奮して來た。

『お前のいふことはわたしにもよくわかる。なるほどこの世界には春もある。秋もある。それは事實だ。わたしは西上人の――そのきさらぎのもちづきのころ――といふあの歌を讀むごとにさう思ふ。わたしにもあの心がないことはない花のもとにて春死なん――といふあの人の歌の心もよくわかる。だが、わたしにはあの歌の心はあまり强過ぎる。わたしは何う考へて見てもやはり秋に死にたい。今夜のやうな時雨の夜に死にたい。わたしは西上人の歩まれた道が一番正しい道だと思ふ。自分も眞似事だけかも知れぬが、あの道の跡をたどりたいとは思つてゐる。しかし春に死なうと願ふ心と、秋に死なうと願ふ心には、生まれながらの性のちがひがある。わたしとお前ともさうだ。性のちがひがある。或るところまでは同じやうに一つの道を歩いて來たと思つても、いつまでも一つの道を歩むことはできぬ。千人が千人みんな自分ひとりのちがつた道を歩かねばならぬ。わたしと李吟先生を見い。たれでも一度は別れなければならぬ。天の命だ…』芭蕉は俯向いてしばらく考へ込んでゐた。『結句人間は自分一人で自分の道を歩くより他に方法はない。』

『みんなが一人でございます』

『さうだ。』

『みんなが一人…』路通はぢいつと芭蕉の顏を見つめてゐた。溜息をついた。戸を打つ雨の音がしづかに響いて來るのであつた。『わたくしは今日まで先生とわたくしの…いや、先生とわたくしも別れなければならないのでございませう今夜のお話でわたくしも幾分このごろのわたくしの落ちつきのない心持ちの原因がわかつて來たやうでございます。わたくしは今日まで先生にたよりすぎてをりました…』

『さうだ。たよつてはならぬ。人をたよつてゐる間はほんとうな人間にはなれぬ。自分ひとりだといふこゝろを實際に

感ずるやうにならねばいけぬ。』

『わたくしは今まであまり弱うございました。あまりに頼りすぎてをりました。わたくしは今日から誰にも頼りますまい。強くなります。先生…しかしわたくしのやうな人間には一人で行くといふことは…』路通は膝の上に泪を落して、すゝり上げて泣いた。

長いこと二人の間に沈默がつゞいた。雨の音がだん〳〵はげしくなつて行つた。夜具の中から出て來てゐた白猫が、急に雨の音におびえたやうに鳴き出した。芭蕉と路通がかはるがはる抱いてやつたが、どうしても鳴きやまないで、しまひには逃げ口を探して、戸外に出ようとして部屋中をきちがひのやうになつて歩き廻るのであつた。その態がいかにもいぢらしかつたので、芭蕉は猫を押へては懷に入れて抱いたが、猫は一層鳴き立てるのであつた。

『先生、これでは駄目です。梅右さんの家まで連れもどして來ませう。』路通の眼は赤くなつてゐた。

『夜も更けたし、雨も降つて來たしするから…』芭蕉は或る寂しい豫覺を感じたので今夜はどうしても路通を一人で出してやりたくないと思つたのであつた。

『いゝえ渡しがなければ少し遠くても橋まで歩いて行きます』芭蕉が無理にも引き止めようとした時、路通は猫をしつかりと懷に抱いてすでに戸を明けて闇を踏いでゐた。芭蕉庵には一本の傘もなかつたので、路通は土間の壁にかけてあつた菅笠を冠つて出かけて行つた。芭蕉は追つめて行つて自分の合羽を路通に着せてやつた。

ほんとうにすまない。屹度直ぐ歸つて來るんだよ…』芭蕉は路通をいたはりながら、暗に消えて行く路通の姿を見送つてゐた。

五六間も歩いたかと思ふうちに路通の姿があまり急に、打ち消されたやうに見えなくなつたのが、芭蕉にはたまらなく寂しかつた。或る不安を抱きながら爐の傍に歩いて行つた。

×

芭蕉は爐の前につくねんと坐つたまゝ雨の音を聽いてゐた。

近頃になく興奮した調子で路通と語つた言葉が、ふたゝびかれの頭の中によみかへつて來るのであつた。

『すべての妄執を斷たなければ俳諧の心を知ることはできない！』かれは自分の言葉をくりかへして見た。かつてかれ自身が惱んだところのいろいろな妄執が、僅にまだかれの心の核から取り除かれないで、直ぐかれの心の周圍にこびりついてゐるのであつた。

二十年前のかれ自身をかれは暗のなかに見出したのであつた。かれは路通が今、かれに對して抱いてゐると同じやうな妄執を蟬吟公に對して持つてゐたことを考へないではをれなかつた。

かれは、蟬吟の遺骨を抱いて高野山の或る御堂の前にぬかづいてゐるかれ自身を見出した。かれは蟬吟公一人の爲めにすべてをさゝげてゐたかれ自身を見出した。蟬吟の死と共に世界のすべてが空虚になつたやうに思はれた當時の自分の心がそこに動いてゐた。高野山の黝い木立の間で聽いた閑古鳥の聲がよみかへつて來た。

かれの家の隣りの城孫太夫の邸には霜に打たれた赤い柿の實が枝もたはゝにみのつてゐた。年賀の廻禮にゆくたんびにかれは孫太夫の娘と顏を合せなければならなかつた。かれは年に一度孫太夫の邸にゆくのが何となしにうれしかつた。玄關に立つごとにわけもなく胸が躍つた。

しとやかな隣屋敷の娘の顏が泛かんで來るのであつた。

『雲とへだつ友かや雁のいきわかれ』かれは故鄕出奔の眞夜中に孫太夫の門に貼りつけて來た自分の句を思ひ出した。あまりに芝居じみた自分の行爲を恥づるやうな氣にもなつた。

蟬吟公の後室であつた若い××院のいたましいがかれの心に、その頃の誰れの姿よりもはつきりと映つて來るのであつた。同時に××院の姿は誰よりもおぼろげに映つて來るのであつた。

かれは行燈の火を掻き立てた。氣が滅入りさうでならなかつた。

『たまらなく寂しい。もしわたしの道が誤つてゐたとしたら！……いや、そんなことはない。わたしは……もつと强くならなければならぬ。……路通に語つたことは眞理だ……寂しくともわたしにとつてはそれが唯一の生きて行く道であつ

「た……」

風につれて雨がひどく戸を叩きはじめた。大川の浪の音が刻々に高まつて行つた。

少年は風の音を恐るゝやうに深く夜具を冠つてしまつた。

行燈の燭がいくたびか消えさうにまたゝいた。

雨洩りがぽた〳〵と疊を打つ音がした。

芭蕉は土間から盥を運んで來て、疊の上に盥を置いた。

半時經ち一時經つた。それでも路通は歸つて來なかつた。

かれは細目に雨戸を明けて見た。雨は横なぐりに打ちつけて來た。地の上にも水の上にも燈一つ見えなかつた。風は吼えながら暗の空を過ぎた。

芭蕉の胸には不安な影が動いて來た。かれは幾度か雨戸を明けた。或る時はかれは人の跫音を聽いたと思つた。かれは雨戸を明けては『路通ッ!』と呼んだ。

二時經つても路通は歸つて來なかつた。芭蕉は雨の中に飛び出した。幾度かつまづきながら全身びしよ濡れになつて梅石の家まで走つて行つた。

表の門を幾度か叩いた。風がひどいのでかれの聲はなか〳〵玄關までも通らなかつた。

猫は梅石の家に歸つてゐた

路通がいつになく沈んでゐたこと、そして芭蕉からの頼みだと言つて二分の錢と布子と傘を借りて行つたことを梅石は語つた。

芭蕉は梅石がとゞめるのも聽かないで路通が置いて行つた菅笠を冠つて逃げるやうにして雨の中に出た。

芭蕉は夢の中を歩くやうな心地がした。梅石が傘を持つて追つかけて來るのを知つた、芭蕉は、ほとんど本能的に梅石からのがれるやうに暗の中にかくれてしまつた。かれは今夜は路通以外の誰とも逢ひたくなかつた。たゞ路通のことだ

けを考へたかつた。かれを呼んでゐる梅石の聲が暗の中にしばらく聞えてゐたが、芭蕉は振りかへつて見ようともしなかつた。

かれは暗い川の縁を歩いてゐた。幾度か笠を川の中に吹きとばされやうとすることもあつた。かれは立ちとまつては暗をすかして人の影を見出さうとつとめた。路通がまだそこいらに考へこみながら歩いてゐるやうな氣がしてならなかつた。

この世界に生まれて來て、誰にも一度だつて心から可愛がられたこともない青年、たゞ一人の兄にすらすべての物を奪はれた青年、兄を殺さうとした青年、乞丐の群にはいつて行つた青年の一生がそれからそれへと芭蕉の頭に描かれて來るのであつた。

『あの男はわたし一人を頼つて來た。わたし一人に頼つて生きてゐたのであつた。わたしはあの男をどれほど受け容れることができたか。あの男はわたしの家に來てもなほ冷たい世間のみを持つてゐた。あの男はそれに耐へられなくなつたのだ。わたしがもしあの男を木曾川の土堤から連れ出すことがなかつたら、あの男にとつてはそれの方がどれほど幸福であつたか知れない。わたしはあの男に人に頼つてはならぬと言つた。しかしあの男は今まで果して誰に頼ることができたらう、一度だつて。なぜわたしは思ふ存分あの男に頼らせなかつたゞらう。わたしは自分ひとりの道をまつしぐらに歩むことのみを考へてゐた。わたしはもつと〳〵あの男のことを考へてやらなければならなかつた。』

風はだん〳〵強くなつて來た。時としては川の波の汐吹が、叩きつけるやうにかれの顔を打つこともあつた。

『もしかしたら、自殺でもしはしないだらうか？』芭蕉はつとめて不快な想像を打ち消さうとつとめた。

『何一度だけ歸つてくれ、わたしは心からお前を受け容れることができる筈だ！』かれはかうも考へた。

『人間は結句一人だ。』と言つたかれ自身の言葉の殘忍さを後悔することもあつた。

暗のぬかるみを叩きつけて行く野分の聲が、路通自身の悲しみの聲のやうにも想はれた。

或る小ひさな橋の上で、かれは暗をすかしてかすかに一人の若者の影を發見した。かれは疲勞を忘れて飛んで行つ

た。路通にちがひないと思つたからであつた。かれは神に感謝せずにはをれなかつた。かれの胸はよろこびに波打つた。しかしかれは橋に行きつかないうちに更に深い絶望を持たなければならなかつた。

かれが寒さに顫へながら芭蕉庵に歸つて行つたのは眞夜中過ぎであつた。かれは一枚の笠すら途中で失つて歸つて來た。

かれは嵐の聲も知らずにいぎたなく眠つてゐる少年を見た。いつもに路通が一笑と同じ夜具にくるまつてゐるのであつたが。今夜は路通が寢てゐないのが寂しかつた。芭蕉はいつも路通の頭が見えるあたりの腰紙の下を見た。そこには薄暗い沈んだ空氣が漂ふてゐた。

ぽと〱と間遠うに規則正しい間隔を置いて闇の中に雨洩りが落ちて來るのであつた。

かれはぢつと耳をすまして闇の中に落ちる雨の音を聽いた。

その雨の音が、暗い野分の中を歩いてゐるであらう、路通の疲れ切つた跫音のやうにも思はれるのであつた。

一つの雨音からさらに次ぎの雨音までの短い時の間にかれの想像力は無限の空間を横切つて走るのであつた。かれはたゞ一人で野をさ迷ふてゐる路通を想像した。

すべての人間が永遠に別れなければならぬ愛したる者も、憎みたる者も。

一つ一つの雨の音は虚無に還り行く一つ一つの生命の跫音のやうにも思はれるのであつた。

路通を思ひつゝあるかれ自身、かれを思ひつゝある路通自身、すべてが無である。かれ等二人が生存したこと、愛したること、憎みたることとすべてが。

風がひとしきりはげしく雨を叩きつけた。そのたびに戸外の芭蕉がいたましい葉摺れの音を立てるのであつた。

ばた〱と間遠うな沈み切つた物の音が風の間に聞えて來るのであつた。芭蕉は幾度か音のする方へ聽き耳を立てた。

「路通が歸つて來たのかも知れない。」かれはさう思つて、急いで戸の方へ手を伸ばさうとした。

物の音は家の外でなくて、直ぐ足もとの盥の中であつた。
かれは絶望的な蒼白い顔をして盥の水を見つめながらも、戸外の野分の聲の中に跫音を聽き出さうとする注意を忘らなかつた。

×

天和三年の春はまだ淺かつた。芭蕉は縁側につくねんと立つてゐた。
去年の暮の大火の痕が、まだこゝかしこの焦けたまゝの立樹にも、燃え落ちたまゝの橋の上にものこつてゐた。大川を挾んで凄慘な火事後の荒れ地が、赭く焦けた鐵砂の丘のやうな光景を呈してゐた
日が落ちかゝつてゐたので西の方の赤い雲の反射が廣い水の上に燃えてゐた。
今歸つて行つたばかりの素堂や嵐雪たちの舟であらう、一隻の小舟が水の上をしづかに遠ざかつて行つた。
芭蕉は今日も朝から三十人以上の來客に接したのであつた。大阪の宗因の死後、かれは名實共に日本の俳壇に於ける第一人者であつた。かれはほとんど國々の俳人たちの訪れをうけない日はなかつた。かれの舊主藤堂氏すら、かれの出奔を咎めないばかりか、自藩から芭蕉のやうな人物を出したことを誇りとするやうになつた。そして折々のたよりには藩主自らが一度故郷に歸ることをすゝめて來たりした。芭蕉は今の自分の成功を、自分自身でも可なりうれしく思はないわけにはゆかなかつた。
かれは今し方、歸つて行つた人たちが、今かれの蔭で、かれのことを噂してゐた言葉を思ひ出した。
『先生は誰に似ておいでになるだらう』と誰かが言つた。
『漢の高祖に張良が智を兼ておいでになると思ふ。高祖は張良を評して溫和閑麗にして容貌婦人の如しと言つてゐるが、その點に於いても先生は張良に似ておいでになる。謀を帷幕の中にめぐらし、勝を千里に決するのは張良であつたが、大風起つて白雲飛び天下靡然として蕉門の風に隨ふといふ今日の有樣を見れば先生は將に日本第一の………』素堂の聲であつた。

芭蕉はその時、ちよつと部屋に入ることをためらつた。かればさすがに羞恥を感じたのであつた。

夕霧の川の面を見ながら、ふたゝびかれは素堂の言葉を思ひ出したのであつた。かれの師北村季吟の名すら、今のかれの名の前には白日の前の燈であつた。かれよりは二十歳も若いまだほんの青年であつた上島鬼貫が關西の一角に立つて『俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるばかり一概にかたよるべき道にもあらず猶深き奥もやあらん』と叫び、『誠の外に俳諧なし』と喝破したのを聽いた時、芭蕉は久しい間かれが言ひあらはさうとして言ひあらはすことのできなかつたかれ自身の言葉を見出したのであつた。かれは喜んだ。同時にかれは恐れた。かれはかれよりもずつと若いこの天才鬼貫こそ、やがて日本の俳壇を風靡すべき一人者であると信ぜざるを得なかつたのであつた。しかし不運にして鬼貫の名は世間にあまり出なかつた。芭蕉は却つて鬼貫の言葉によつて、自分の行くべき道を暗示されたのであつた。鬼貫はかれにとつて一個の礎となつたのであつた。

二十年の放浪生活、孤獨、精進、克己……かれは歩いて來た過去の道――それはあまりに寂しい道であつた――を振りかへつて見た。同時に現在かれが立たせられてゐる最高の地位を。

人間の忍び能うかぎりの寂しさを忍んで來た自分、そして遂し能ふかぎりの地點に達し得た自分……をかへり見て芭蕉は涙ぐましい氣にもなり、同時にほゝ笑ましい心にもなるのであつた。

恰度その時であつた。かれは痛々しい呻き聲を聽いた。かれははつとして自分にかへつた。

緣側にいじり出てゐた一笑が、障子に背をもたせかけたまゝかれの後ろに坐つて、ぼんやり落日を見つめてゐるのであつた。少年はこの冬の江戸の大火に逃げおくれてほとんど半身を燒きたゞらせるやうな目に逢つたのであつた。少年はまだ顏と手足を白い布で卷いてゐた。

『早く寢ておいで。まだ熱があるんだから涼い風に吹かれてはいけない。』芭蕉は一笑を部屋の中に追ひやるやうにした

『あまり熱くつてとても寢てはをれませんのさ。』

『でも寢てゐなければ……』

『かうやつて冷たい風にあたつてゐるといふ氣持なんです。』

『からだに悪いから早く…』

『とても助からないと思ひます。どうせ死ぬんでしたら、冷たい風にでも何にでも思ふ存分吹かれて死にたいと思ひます。』

『そんなやけを言つてはいけない。』芭蕉はちよつといらいらした聲で、それでも微笑を洩らしながら言つた。

『はい……』少年は溜息をつきながら大儀さうに部屋の中にはいつて行つた。芭蕉は自分で少年の夜具を上からそうつとかけてやつた。そして額に手を當てゝ見た。全身が燃えるかと思はれるほどほてつてゐた。

少年は夜具を引つかむつてすゝり上げて泣いた。

『どうして泣くんだ。泣くんぢやない。』芭蕉は手を夜具の中に突つ込んで、少年の背をさすつてやつた。芭蕉も涙ぐんだ。

『どうしたといふの？』芭蕉はいたはるやうにたづねた。

『先生、わたくしはもう直き死ぬのかも知れません。』

『そんなことがあるものか…』

『いゝえ、屹度死にます。死ぬやうな氣がしてならないのです。』少年はふたゝびすゝり上げて泣いた。全身がひくひくと痙攣るやうに動くのであつた。そのたんびに少年は苦痛を訴へて呻いた。半ば意識を失つて、眼だけを大きく瞠いて、やがて物におびえたやうに『恐い、あんなに眞つ赤に、恐いッ』と叫びながら、兩手を突き出して虚空をつかまうとするのであつた。

『また起りましたな、いつもの病氣が。可哀さうに…』次郎兵衛は爐の前で火を焚いてゐたが、土間から飛び上つて來て、いた〱しさうに少年の顔を見つめた。

『まつたく可哀さうだ。』芭蕉はなほつゞけて少年の背をさすつてゐた。

『恐いんです。恐いッ！』少年は恐しさうに全身を顫はせた。

『あの大火の恐しさがまだこの子の頭から除かないのだよ。』芭蕉は溜息をついた。

『無理もございません。このやうに怪我をしたくらゐでございますから……』

『わたしでも、その折のことを考へるとぞつとする。わたしが眼をさました時は家の中にはもう煙がすつかりはいつてゐた。わたしは一笑を呼んで見たが、何の返事もなかつたので、戸外に出たのかと思つて飛び出してみたが、やつぱり姿は見えなかつた。まるで海嘯のやうな凄まじい音が空いちめんに響いてゐた。空いつぱいが赤く燃えて、どこにも星一つ見出すこともできなかつた。空一面火の粉の海であつた。わたしは三度四度五度と夢中になつて名を呼んでみた。わたしの聲は顫へてゐた。がう／＼と近所の家が燒け落ちる音のために、わたしの耳は聾になつてゐた。それでもわたしはしばらく經つてから煙の中で人の聲を聽いたのであつた。わたしは煙の中へ飛びこまうとした。はいつてはいけません。はいつては……といふ聲がするのだ。一笑の聲にちがひないのだ。わたしがそこにちよつと躊躇した時に、もうこの家の屋根が落ちてしまつたのであつた。わたしはそのはずみに一二間も外の方へ放り出されたやうに思つた。』芭蕉はその時のものすごい光景を描くかのやうにちよつと仰いで天井から長押のあたりを見まはした。少年が苦しげに二三度寢がへりを打つた。芭蕉と次郎兵衛とは左右から少年を擦つた。

『ほんとうに旦那さまもよくお助かりになりましたなあ。』

　わたしは尚一度煙の中へ入つて行かうかと思つたが、煙の中からこの一笑が聲をかけるのぢや。あぶない、早く先生はお逃げなさい、わたくしは大丈夫です。裏から逃げますといふのだ。わたしも心のこりでならなかつたが、屋根が落ちたはずみに吹き飛ばされるやうにして庭から外に出た。出たは出たがもうとても歩ける道はない。陸の上はどこもこゝも火ぢや。わたしは海の中に飛び込んだ。それでもまだ火の粉は一面に落ちて來る。仕方がないので、恰度そこに流れて來た莚を頭から冠つてゐた。まつたくあの時の恐しさと言つたらなかつた。江戸中が空も、陸も、水の上もみんな火につゝまれたのぢやからなあ。』芭蕉は少年の背をさすりながら眼をつむつた。

少年が苦痛を訴へて呻くたんびに、芭蕉は自分を責められるやうな氣がしてならなかつた。子を救ふために火中に身を投げた母親の話や、或ひは何の關係もない赤の他人が、人を救ふために煙の中に飛び込んで行つて一緒に黒焦げになつてしまつたといふやうな噂は、その頃あつちでもこつちでも聽かれた。芭蕉はそのたんびに自分の心をかへりみて寂しく思はないではをれないのであつた。『先生早く逃げてください』と少年が叫んだ時、どうしても少年を救はなければななぬといふ決心の、半面には本能的な自己の生存慾と共に、『自分には成さねばななぬ大きな仕事がある、自分はそのために生きなければならぬ。生きのびることが必要なのだ。自分が生きることは多くの人々のために必要なのだ。自分ひとりが救はれるためには、他の小ひさな一つの魂が或ひは犠牲にさゝげられるかも知れない。しかしそれは止むを得ないことである。自分は生きのびなければならぬ……』このやうな醜い、あさましい利己的な批判がほんの一刹那ではあつたがかれの胸に動いたことはなかつたか？かれは自分の心を非常に恥ぢた。自分の心の醜さをかへりみる苦痛に耐へなかつた。

『よいあんばいに眠つたやうでございます。』次郎兵衛はそうつと一笑の顔を覗き込んで見た。芭蕉は病人の顔を見つめながらなづいて見せた。芭蕉の額には言ひやうもない暗い影が動いてゐた。

芭蕉は障子を明けてふたゝび縁端に出た。日は落ちてしまつてゐた。夕燒の空が炎のやうに燃えてゐた。かれは刻々に褪せて行く雲の色をながめてゐた。

障子越しにかすかに病人の吐息が聞えて來た。少年の呻き聲はかれにいろいろのことを思はせた。かれは周圍に集まつて來た惟然や丈草や杜國のことや、かれからは去つてしまつた路通いことを考へた。惟然も、杜國もかれの風雅の門にはいつて遂に家を捨てゝしまつた。家産も捨てゝしまつた。惟然には親もあり、娘もあつたのであつたが、これすら捨てゝたゞ一つの頭陀袋と一枚の笠に身を托して、乞丐同然の生活に風雅を樂しんでゐるのであつた。丈草は大小を脱ぎ捨てゝ芭蕉の門に走つて來た。かれは若い妻さへ捨てゝしまつたのであつた。

かれは自分では、これより他に歩く道はない筈だと思つて歩いて來たのであつたが、この結果としてはいろいろな不

天地の間無一物にして、始めて天地萬有の懷に入ることが出來る。天地虛なるがゆえに我亦虛にして始めて天地の虛と一つになる。親も捨て、戀も捨て、世も捨て、生命(いのち)も捨てゝ、始めて、天地の寂寞そのものに浸さるゝ心境をかれは如實に感ずることが出來たのであつた。それはかれにとつても寂しいことでもあり、苦しいことでもあつた。しかしそれは何物にもかへがたい蠱惑的な魂の法悅をかれに與へたのであつた。

『しかし丈草や惟然にとつてもそれが正しい道であつたであらうか？』かれの心に不安の影がさして來るのであつた。かれ等は家庭的、人間的な幸福の中につゝまれてゐた。かれ等は世捨て人となるのに芭蕉ほどの悲しい動機を持つたのではなかつた。しかもかれ等はよろこんで芭蕉の道を歩いて來た。芭蕉は不運な惟然の家族たちや、丈草の若い妻のことを想像した。

俳諧の道はそれほどの不運を一家に生みつけてまでも隨はなければならぬほどの尊い道であらうか。

『わたしは何故自分ひとりで步かなかつたか。わたしは自然の寂寞を追ひもとめながら、しかも自然そのものゝ中にはいつてゐることは出來なかつた。わたしはひとりで步くには自然のあまりに寂し過ぎることを知つてゐた。わたしはいつも道伴れを連れて步いてゐた。しかしわたしは、わたしの道伴れであつた人々をいつの間にか不幸な世界に取り殘してしまつた。わたしは自分ひとりの志のために、わたしの同伴者たちをいつも不運の底に取り殘したまゝ步いてゐるのであつた。』

芭蕉は伸び上るやうにして川向うの暮れかゝつた町を見た。まだ新らしい板圍ひの家などが夕靄の底にほの見えてゐるものもあつた。燒け殘つた銀杏の木立の上を渡り鳥の群が飛んで行つた。

その見當には路通が苦しんでゐる××町の米倉の高い土壁があることをも、蕉芭は思ひ出した。

芭蕉の家を出てから後の路通についていろ／＼の噂がかれの耳に入れられた。芭蕉の僞筆を作つて賣つたといふこと僞筆の原因についてはいろ／＼の噂があつた。或る貧乏な俳友を助けるためであつたといふこと。旅廻りの女役者と戀

に落ちたといふこと。その女と一緒になるために僞筆を賣つて金を拵えたといふこと。

弟子たちの間では可なり以前から路通を破門することは問題になつてゐた。二度三度路通が書いた僞筆が芭蕉の前に持つて來られた時も、かれは路通の境遇を考へては、路通の破門をこらへてゐた。『わたしがそのために、何うなるといふのでもない。わたしの名が路通にとつてそれほど大事であるならば、わたしさへこらへればいゝのだから……』と考へては、僞筆の短册を見てもかれは不愉快な心を抑へてゐた。かれは幾度か路通を探し求めて、尚一度かれの家へ連れもどさうと考へた。かれはひそかに路通を追ふて歩いたこともあつたが、かれの努力は無駄であつた。

六度七度とかれは僞筆を見せられた。かれはなほ忍んでゐた。路通に反感を抱いてゐた弟子たちは、路通破門の材料とするために、骨を折つては僞筆をさがし集めて、かれの前に持つて來た。弟子たちの反感の原因は路通の人格に對する侮蔑よりは、むしろより多く路通がかつて、非人乞丐であつたといふ一事にあつた。乞丐であつたといふ事が殆んど奇蹟的に、深い根本的な侮蔑と排擠とを人々のこゝろに培つてゐたのであつた。

芭蕉にとつては苦しい試練であつた

かれの名によつて僞り作られた藝術が、後の時代に於いていかにかれの名を汚すものであるかといふことを考へるとかれは路通の行爲を憎まないではをれなかつた。殊に路通が旅廻りの女役者のための僞筆を賣るのだといふことを聞かされた時は、可なり久しい間保たれてゐたかれの寛容な心持ちはくつがへされてしまつた。

かれ自身の藝術的良心を全くするといふことは、いかなる道徳よりも尊いものであると芭蕉は考へずにはをれなくなつたのであつた。かれの畢生の仕事を傷けるものであると考へずにはをれなくなつた。かれはつひに路通を破門してしまつた。

しかし路通を破門して間もなくであつた、かれの心は再び疑惑につゝまれた。

無一文になつてゐた路通から女を引き離さうとした貪慾な老人――女の養父――を殺さうとしたといふ疑ひで、路通が×××町の牢舎に入れられたといふ事をかれは聞いたのであつた。

俳諧の名が汚されたとしても、わたしは路通をゆるすことが正しいことではなかつたゞらうか？　わたしはわたしから逃げて行つた路通を、何故自由に空の小鳥のやうに放つて置くことができなかつたか？』かれは破門せられた路通が一層自棄的になつたことに對しても、かれは責任を感じないではをれなかつた。

×

一笑の呻き聲がかれの後ろの障子の中から聞えて來た。が、直ぐに聲は絶えて、夕暮れの靜けさがとりもどされた。同時に障子を通して行燈の火がぽうつと力たげに燃えてゐた。障子を明けた次郎兵衞が芭蕉の後から同じやうに夕燒の空を見た。

芭蕉も次郎兵衞も、しばらく無言でゐた。

『故郷の山が今ごろは心細いやうにしづかに暮れて行つてをるでございませう。』

『…………』芭蕉は空を見つめたまゝで立つてゐた。

『日暮ころになると鈴鹿にはよく雲がかゝりましたが』次郎兵衞は輕い溜息をついた。

『…………』芭蕉はやつぱり沈默つてゐた。

『あなたさまは……』と指を折つて、『十七年も故郷にお歸りにならないのでございますもの』次郎兵衞は涙ぐんでゐた。

『十七年………』芭蕉は獨語ちた。そしてやつぱり空を見つめたまゝでゐた。

『左樣でございます。あれは二十四になりなさつた時でございましたから。』

『母上が亡くなられたのはわたしが家を出てから五年目であつたかなあ。』芭蕉は眼をしばたゝいてゐた。

『五年目の秋でございました。幾晩も寢みませんでしたが、よく雁が鳴いて行くのを聽きました。大奥さまは江戸にあなたさまがおいでになることも御存じはなく、たゞあなたさまにお逢ひしたい一方でございましたらうが、そのやうなこ

とは滅多に口にはお出しになりませんでした。たゞ一度、甚七郎は何處にをるのぢやらうか、この世に生きてゐるのなら一度逢ひたいと、わたくし一人の時、かう仰せられて御落涙なされました。』

次郎兵衛は芭蕉の顏を見上げた。

『お輿が出ました時はもう日がとつぷり暮れてをりましたが、野邊送りの道には白い野菊が暗のなかにも見えてをりました。わたくしは幾度かあなたさまがお輿のそばについてお歩きになつてゐるやうな氣がしてなりませんでございました。あなたさまだけがお一方おいでにならぬのだといふことを思ひ出しますと、お輿の中の大奥さまがさぞお寂しからうなどと考へるのでございました。』次郎兵衛はやけに手の甲で眼をこすつた。

芭蕉は唖默つたまゝ薄暗の中に突つ立つてゐた。

×

或る秋の日の午後であつた。

ひどく旅やつれした芭蕉は北日本海に沿ふて歩いてゐた。まだ五十には三四年の間があるのだつたが、芭蕉の頭は可なり白くなつて誰れが見ても、かれは實際の年よりは七八年は老けてゐた。かれの額には暗い憂鬱さが刻みつけられてゐた。

かれの直ぐ後ろからは曾良が疲れた足を引き摺つて歩いてゐた。曾良は二三日腸を惡くしてゐるのであつた。

二人ともたいていは默りがちで歩いてゐた。今朝夜が明けて間もなくであつた。霧につゝまれた村では鷄の朝鳴きが聞えてゐた。

かれ等は或る村の出はづれの畑の中に、黨を組んで代官を殺さうとした七人の男の首が梟されてゐるのを見たのであつた。首は露にぬれて鉛のやうな色をしてゐた。

不幸な遺族たちであらう、霧に濡れて土氣色した十二三人の男女がひそ／＼と首の下で語り合つてゐた。手拭で顏を掩ふてゐる女もあり、失神したやうに口を開けたまゝ、夜明けの空を見つめてゐる男もあつた。首の下には焚き火の煙

不思議と芭蕉の心を惹きつけた。その男の顔は他のどれよりも白かつた。また若かつた。そして左の眼が半ば白眼が瞼まで垂れてゐるのが、殊にいたいたしかつた。

芭蕉はその若者の首を思ひ出すたんびに、自分自身の心の底に或るもの〻厳かな響を聴くのであつた。渡り鳥のやうに旅から旅へとさ迷ひ歩いてゐる自分の生活と、鞭打たれつ〻なほ黙々として耕し、苦しみ、あえぎつ〻ある人たちの生活とを比べて考へないではをれなかつた。

石の端にあつた若者の眼が、ぢいつとかれの心を見つめてゐるのであつた。それはこの上もなく厳粛な人間生活の事實であつた。痛ましい現實であつた。

かれは人生を幻影であると思ふこともあつた。しかし今かれの眼の前に晒されてゐる七人の男の首！それをしもかれは幻影と断言することができるか。それはあまりに惨苦な残酷な人間生活の現實ではないか。かれはこのいたましい現實を見のがすことができるか、藝術といふ美しい名に隠れて。

『何うすればい〻のだ。』芭蕉はどうしてもその若い男の首や、その首がかれに語つてゐる言葉を忘る〻ことはできなかつた。

かれは或るもの〻厳かな叱責を感じながら、道を歩いてゐた。

かれが不圖氣付いた時は曾良が坂を上つて來るのであつた。芒が幾度か曾良の姿をすつかり隠してしまうこともあつた。ぬるでや柿の葉が赤く紅葉した秋の山を背にして、曾良は峡の道を上つて來るのであつた。

北日本の海がかれの眼の前に展げられてゐた。暗緑色の海の面をこめて、一つ一つの波頭が、實存そのもの〻悠久から悠久への悲しみを訴へるかのやうに暗い空に對していきり立つてはやがて滅えてゆくのであつた。名も知らぬ水鳥が浪の上を低くかすめては濁い雲の中に消えてゆくこともあつた。煙のやうな波の間に佐渡の島を見出した時、芭蕉はそれに突つ立つたま〻一時は身じろぎもしなかつた。

既うかれの頭の中では、畑の中に晒されてゐた七つの首も、半ば開かれてゐた若い男の眼もかすかにこなかつた。

かれの心は、今、現在に生きて佐渡を見つゝあるといふ意識に躍り上つた。

同時にかれの心は、やがてすべての現在が滅び行かなければならぬ悲しみにつゝまれてしまつた。

一つの波が白く立ち上つた。次の刹那に波は暗のなかに滅えて行つた。

『音もなくすべてのものは滅び行く。それでいゝのだ。滅びゆく靜かな姿！　厳かな尊い死の姿！　それを靜かな心で見つめてゐる。それが人生のすべてだ！』

かれは何處から來て、何處へ行くとも知れぬ渡り鳥の一生を、自分自身の運命になぞらへても見た。

風が靜かに芒の穂を撫でながら、海の面から山の面へと吹いて行つた。芒のそよぐ聲がかすかに夕空のなかに聞えて、滅えて行つた。そこにも永劫の現實の聲があり、永劫の死滅の聲があつた。

『先生、御覧なさい。』曾良は疲れた顔に幾分の微笑を含ませながら一段低い石の傍を指さした。

芭蕉は何氣なしに曾良が指さした方を見た。

一人の老乞丐が道傍の枯草の上に眠りこけてゐるのであつた。

かれはその刹那に二十幾年前の或る秋の夜、木曾川の土堤で、はじめて路通と知つた折のことを思ひ出したのであつた。

同じ秋の夕暮であつた。同じやうに霧がこめてゐた。老乞丐の枕もとには、木曾川の土堤で見たと同じやうに焚火した跡さへ殘つてゐた。

曾良は近寄つて老乞丐を起さうとした。芭蕉は微笑みながら曾良のすることを眺めてゐた。しかし曾良が老乞丐の前に立ち止まつた刹那であつた。芭蕉は二三歩乞丐の方へ近づきながら、曾良の手を止めさせた。

『起さない方がいゝ。』

『このまゝにしとくんですか。』

『…………』芭蕉はうなづいて見せた。

『でも夜露に打たれて風でもひいたらいけますまい。』

『それもさうだが。』芭蕉はぢいつと老乞丐の顏を眺めた。何といふ靜かな眠りであらう。何といふ自然な眠りであらう。何といふ平靜な呼吸であらう。秋そのものゝ寂寞と孤獨と沈靜とが老乞丐をつゝんでゐるのであつた。秋の海、秋の山、秋の空、すべての秋の悠久そのものゝなかに老乞丐は柔かにつゝまれ、抱撫せられてゐるのであつた。

『起してはいけない。』

『…………』曾良は躊躇した。芭蕉の顏を見つめてゐた。

芭蕉のやさしい眼が、いつまでもぢいつと老乞丐の靜かな寢顏を見つめてゐるのであつた。

『そうつと寢かして置いた方がいゝ。寢てゐる間だけが幸福だ!。』

芭蕉は足音を偸むやうにして峠を越えてしまつた。

乞丐の眠つてゐる姿が見えなくなつた時、そして乞丐が眼をさまさなかつたことをたしかめた時、かれは輕い安心を覺えた。秋の夕暮れを靜かに眠つてゐる老乞丐の幸福を祈りながらかれは峠を下つて行つた。

『もしあの時、路通を起しさへしなかつたら、路通は今日もなほあの老乞丐のやうに自然の懷につゝまれたまゝ秋の夜を靜かに眠つてゐるであらうに!』

芭蕉は×××町の本舍を出てから、その旅廻りの女役者と一緒に江戸を立つて旅に行つてしまつた路通のことを胸に描いたのであつた。

芭蕉は俯向きがちに山の背を歩いてゐた。

『先生ッ!　海の火が見えます!』曾良が後ろから高い聲で叫んだ。暗い山の根を洗ふて白い波がほの見えてゐた。漁火が散つてゐるのであつた。

『天の川です、あんなに……』

曾良は天を指さした。

一脈の銀河が佐渡の島にかけて瞬きはじめてゐるのであつた。かれは。曾良が後ろから歩いてゐることも忘れて、路通や一笑や老乞丐のことすらも忘れて、銀河の中にかれの魂を投げてゐた。

峠を下り切つたところから空が曇つて來た。山の裾の小ひさな村里の燈が見えるやうになつたころは時雨が草の上にかすかな音をさせて過ぎて行つた。

芭蕉も曾良も笠を前屈りにして雨を避けた。

『あの乞丐は何うしたどらう？　雨に濡れはしなかつたらうか？。』

村の入口であつた。

『この雨に濡れて眼をさましたでございませうよ。』

『濡れたどらうかなあ。』芭蕉は峠の上を振りかへつて見た。黒い雲が巨人のやうな暗い山を掩ふてゐた。芭蕉はしばらくそこに立ち止まつて暗い峠の方を眺めてゐた。

×

村はづれの古びた旅籠屋であつた。波の音が暗い木立を通してしつきりなしに嵐のやうに聞えて來た。芭蕉も曾良も難所の峠を越えたのですつかり疲れてゐた。二人は枕を並べて、波の音を聽きながら、明日の道のことなどを語り合つた。路通のことなども噂した。

『しかし、元々、路通はとても西行や能因の跡を歩くことのできる人ではないのだから……』こんなことを語り合つてゐる間に、二人は疲れのために快く眠ることができたのであつた。

月の影が煤けた障子から斜に部屋の中を射してゐた。折々時雨が板庇を打つては、浪の音のなかに消えて行つた。

行燈は消えてしまつたが蒼白い月の光りがあつたので、おぼろげではあつたが壁や煤けた障子がかすかに薄暗の中に

それと見分けられるのであつた。

芭蕉は不圖、時雨の音に眼をさました。かれはその時、同じ部屋の北側の壁に沿ふて二人の若い女と一人の年寄つた旅人が寢てゐたことを知つた。

女たちも同じ峠を越えて來たらしく、しきりと峠のことを語り合つてゐた。

『春までには越後に……………』

『またあのやうな山を毎日幾つも〱越えねばならぬかと思ふと心細うなる。』

『越後の雪が消えるころに……』

若い二人の女は急に聲を忍ぶやうにして泣いた。

芭蕉は夢うつゝの間に若い女たちの話聲を聽いた。越後から伊勢へ行く遊女たちであるといふことも、女たちの話から察することができた。

芭蕉は若い二人の女の話聲を聽きながら、ふたゝび眠りに落ちた。

×

或る曠野であつた。芭蕉はそれが何處であつたか何うしても思ひ出すことはできなかつた。枯れ野を掩ふて雨雲が低く垂れてゐた。かつて那須の黑羽といふ村をたづねて行つた折、野飼ひの馬を貸してもらつたことがあつた。その時馬の後ろから草の中を馬について走つて來たかさねといふ小娘がゐたが、その折の小娘が曠野にぽつねんとして立つてゐた。芭蕉は笑ひながら小娘の方へ近づいて行つた。しかしかれが近づいて行けば行くほど小娘はかれから遠ざかつて行つた。芭蕉は聲を出さうとしたが何うしても出すことはできなかつた。枯れ草の上には霧が下りてゐた。一面に白い花がこぼれてゐた。小娘はそこに立ち止まつた。芭蕉は近づいて行つた。それは小娘でなくて、赤ん坊を抱いた若い女であつた。女は泣いてゐた。芭蕉の胸は波打つた。かれが二十幾年來忘れるともなく忘れてゐた城孫太夫の娘であつた。

『あなたの子ですよ。』とその女が低い聲で言つた。

芭蕉は女の突然な言葉を聴いても何の不審も感じなかつた。かれは幾度も女が抱いてゐる赤ん坊の顔を覗いて見たがどうしても顔ははつきりとは映つて來なかつた。赤ん坊は眠つてゐるのか、いつも眼を閉ぢてゐた。かれは頬を指先でかろく突ついて見たが、化石のやうに冷たかつた。

『あたしはあなたと別れなければならぬ。この子をつれて旅に出たければなりませぬ』と女は言つた。そして泣いた。

芭蕉はわけもなしに悲しかつた。波の音がかすかに曠野の涯から聞えて來た。夜になつてゐた。時雨がしつきりなしに野を吹きつけては、かすかな雨の音を枯れ草の上にのこして行つた。月がわづかに雨の間からほの見えてゐたが、やがて炎をつゝんだやうな赭黒色の雲にとざされてしまつた。ともすれば自分自身の指すら見えないほど路も野も暗くなつてしまつた。暗を吹く嵐の聲がものすごいほどに吽つては、暗の中に駈けて行つた。

幾晝夜歩いたところで、幾百里さ迷ふたところで人の影一つ見出すことすらも不可能であるやうに想はれた。かれは不圖嵐の中に、鎚の音を聽いた。かれは幾分か自分の耳を疑つては嵐のなかに立ち止まつた。たしかにかれは鎚の音を聽いた。かれは同時に戸の隙間を洩れて來る燭の光りを見た。家の中からはたえず鎚の音が聞えてゐた。かれは戸の前に立つた。戸の隙間を通してかれは直ぐに家の中の樣子をうかゞうことが出來た。

路通が土間に腰を下してゐるのであつた。煤けた棚の上の蠟燭が路通の蒼白い顔を照らしてゐた。

髪はすつかり白くなつてゐた。見ちがへるほど面やつれしてゐた。かつて路通の顔に描かれてゐた殘忍さや、輕薄さや、狡猾さの俤はどこにも見出すことはできなかつた。落ちくぼんだ眼、こけた頰、倦怠さうな息づかひは、この十幾年の間にいかに悶え、苦しんだかといふことを語つてゐた。

獄衣のまゝであつた。かれはこつ／＼と白い箱を釘つけしてゐた。同じ恰好の白い箱が三つも四つもかれの後ろの壁に沿ふて並べられてあつた。それはみんな新らしく作られた柩であつた。

土間に鎚を握つて働いてゐる路通の直ぐ足もとには、一人の女と、一人の嬰兒とが眠つてゐた。芭蕉はたしかに二人は眠つてゐるのだと思つた。

もはらはないと言つた風で、柩を錨で切つてはシキリと釘を打ちつけてゐた。一つの柩が出來上る間、路通はまるで啞のやうに默つてゐた。

柩が出來上ると、路通は土間の上に寢てゐる若い女を抱えて柩の中に入れようとした。女のあらはた胸の筋肉や、乳色の白い柔かな手や、足が蠟燭の光りにまるで美しい寶石のやうに輝いてゐた。路通は手招ぎをして芭蕉に手助けを乞ふた。芭蕉は女の上半身をかゝえるやうにした。女の柔かな肉體の温か味が、芭蕉の手に快く感じられるのであつた。女は眼を開いた。芭蕉は黒い瞳と、長い睫とを見た。かれはかつてそのやうに近づいて女の肉體を見、女の呼吸を感じたことはなかつた。

女は羞恥みながら微笑んだ。それは二十幾年前に見た蟬吟の後室××院の崇高い白い美しい顏であつた。芭蕉は自分の胸の鼓動を聽くことができた。かれは自分の心臓が燃えるのではないかと思つた。

かれは女を抱えた手を、刹那に女から引き離さなければならぬと思つた。しかしかれの手は重い鎖で女の柔かな肉體に引きつけられてしまつた。かれは全身が痙攣的にわな／＼と顫へるのを感じた。その刹那に路通がかれの横顏を覗いたやうに思はれたので、かれは急いで女を柩の中に入れて、手を離した。名づけがたいうら寂しさがかれの心を支配した

『これは私と一生苦勞を共にしてくれた妻でございます。』路通の眼には涙が湛へられてゐた。

芭蕉は尙一度柩の中の女を見た。それは見知らぬ若い女であつた。芭蕉は女が急に別の女にかはつてゐることに對しても何の不自然さをも感じなかつた。

芭蕉は女の額に手を當てゝ見た。女は石のやうに冷たかつた。女の眼の縁が深い暗い隈を作つてゐた。頰がこけて額に二三本の深い皺が刻みつけられてゐるのが、いかにかの女が生活を苦しんだかといふことを想像せしめた。

『わたくしが先生に捨てられた時も、わたくしが世間中の人たちに侮辱せられた時も、わたくしが牢舍の中に苦しんでゐた時も、この女だけはわたくしを信じてくれました。この女も世間的にはいろ／＼な非難を持つてゐました。わたく

しと一緒になる前にも幾人かの男を持つてゐたんだなどゝいふ噂を聽きました。旅を歩いてゐた藝人でしたから……」路通は無雑作に涙を拭いて、女の額にかゝつてゐる髮の毛を搔きのけてやつた。「一緒になつてからもわたくしはそのやうな噂のために、隨分苦しい思ひをしました。女を殺してやらうと思つたこともありました。けれどもわたくしは一日でもこの女がゐないでは生きてをれないほどの寂しがりになりました。わたくしたちはよく口きたなく罵りました。わたくしは幾度この女を土間に叩きつけて、髮の毛を引き拵つたか知れません」路通は女の上に涙を落した。路通の聲は顫へてゐた。「摑つたり引き摺り倒したり、蹴つたりしても女はわたくしから逃げて行きませんでした。わたくしにしても、どんなに女をひどい目にあはせてゐても、女とわたくし自身を區別することはできませんでした。女の髮の毛を摑んで、女を土間の上に引き摺り廻しながらも、わたくしは女を可哀いさうだと思ひました。わたくしはどんなに憎み合つても、どんなに苦しんでも、一人でゐることよりは、女と二人でゐることがほんとうな生き方であると信ずることができました。わたくしたちは胸が裂けるほどの愛し方をするか、でなければ殺し合ふほどの憎み方をするか、いつも二つの心持ちの中に生きてゐました。わたくしたちには生きてゐるといふことは、わたくしがこの女にわたくしの生命を投げかけて行くことでした。女の生命をいつもわたくしが持つてゐるといふことでした。死ぬるか、生きるか。生かすか、殺すか。愛するか憎むか。いつもわたくしたちの心は燃えてゐました。身顫ひをしてゐました。ちよつとでも落ちついて、人間の世界から他の世界へ眼を移すといふやうな機會はありませんでした。わたくしたちは生きて行くといふことのためにばかり眼を向けなければなりませんでした。あなたはわたくしを心の卑しい人間だとさげすみなすつたでせう。わたくしは自分で自分の心のさもしいこと、卑しいことを先生以上によく知つてゐました。けれどわたくしはただ一人で世間に放り出されたのでした。自分といふものを世間に生かして行くためには、人を僞ることも、人を殺すことも、わたくしの境遇では止むを得なかつたのでした。わたくしはこの女を欲しいと思つたのでした。機會は失はれさうだつたのでした。わたくしはこの女の父親を殺してまでこの女を自分のものとしようとしたのでした。わたくしは自分が殺されることも知つてゐました。けれどもわたくしには善いことだの、正しいことだのと詮索をしてゐる暇はあり

ませんでした。わたくしは生命をかけてこの女を自分のものにしたのでした。女を自分のものにしてから、わたくしはな程苦しまなければなりませんでした。わたくしたちは四人の子を産みました。四人の子供はみんな生まれると一緒に石臼の下に敷いて殺しました。仕事一つすることのできぬわたくしたちには、自分等の心を鬼にするより他は方法がなかつたのでした。ひいひいと聲を絞つて息を引き取つて行つた子供の聲は、夜も晝もわたくしの心に今日まで刻みつけられてゐます。ごらんなさい、あすこに子供たちの柩があります。それからあの大きいのにはわたくしに殺された老人が眠つてをります。この女の父親です。」路通は暗い部屋の隅の方を指さして見せた。そこには一つの大きな柩と四つの小ひさな柩が土間の上に横たへられてあつた。柩の蓋ははづされてあつたので、どれもその中を覗くことができた。芭蕉は無氣味に感じながらも柩を覗いて見た。青い、冷たい、頬のこけた顔の人間が一つ一つの柩の中に眠つてゐた。

「これはみんなわたくしの手で殺された人間です。けれどもごらんなさい。子供たちはみんなおとなしい、美しい顔をしてゐるではありませんか。みんな痩せてるつて？　さうです。みんなわたくしのやうな乞丐の子に生まれたからですよ。これでもわたくしはあなたの俳笈を背いたり、時としては大屋の家の鷄を盗んだりして子供たちに食はせたのです。女の親爺の死骸ですか。そりやわたくしが殺したのですもの、何處に行かうつたつてわたくしが行くところについて來るんですよ。わたくしの一生は詐僞と、盗みと、狡猾と、殺人でした。でもわたくしは自分の生涯を不幸だけであつたとは信じません。わたくしは人間として苦しまなければならぬ經驗はみな苦しんで來たんですから。盗みをした心、人を僞つた心、人を殺した心、自分の子を殺さなければならなかつた悲しみ、一人の女をほんとうに自分ひとりのものとして持たうとする苦しみ、牢獄の惱み、人に捨てられ、さげすまるゝ苦しみ。わたくしは隨分苦しみました。けれどどうせ人間は死ぬんです、一度は。生きてゐる間に苦しむことのできるだけのことを苦しんだのをわたくしは今になつて不幸だとは思ひません。またわたくしは、この女のためには何も彼も捨てゝ牢舎にまではいるほど夢中になりましたので女といふものゝ辛いことも、可愛いゝことも、憎いこともすつかり知りました。わたくしは悪人の道を歩いて來たか

も知れませんが、ともかく自分の心を無理に矯めて、人間らしい人間の慾を殺してしまふやうな先生の道を歩かなかつたことをうれしいと思ひます。先生は女といふものは詩のやうなものだと思つておいでになるでせう、今でも。人生でも同じやうに……。わたくしも初めはさう思ひました。しかしそれでは人生も女もまだわかりませんよ。先生、あなたはお目出度い人なんですよ。うぬぼれておいでになる人ですよ。あなたのやうな境遇に生まれて、あなたのやうな智慧學問を持つた人にはあなたのやうな生涯を送りなさるのは何でもないことですよ。道樂ですよ。臆病なやり方ですよ。あなたは日本一の俳人におなりでした。立派な俳諧をお作りになりました。しかし、たゞそれだけです。あなたは心から生命を投げて女を戀ひなさらなかつたのです。あなたは寂しいでせう。あなたは死んだ後の名聲なんていふものを描いて、自分の寂しさをごまかしておいでになるんです。後の世の人たちはあなたの名を覺えてゐるでせう。しかし、それがあなたの生活に何のたしになります。現在のあなたの生活がそのことのためにちよつとでも輝かされることもないぢやありませんか。あなたは現在の慾を棄てゝ、未來の夢のやうな慾を貪らうとしておいでになるのです。あなたはただ御自分ひとりの寂しさからのがれるために、たゞ御自分ひとりのことをお考へになつてゐるのです。あなたは一生、人からめぐまれてばかりおいでになりました。あなたはこの上もない身勝手な方です。わたくしはあなたにさげすまれました。牢舍に打ち込まれました。けれどもわたくしは、ごらんなさい、生命をかけて女を自分のものにしました。生命をかけて女を愛しました。人を殺してまで女に自由を與へてやりました。』路通は鎚を土間に落した。そして棚の蠟燭を手に持つて柩の中を見た。人間の苦惱そのものを語るかのやうに暗い女の顔が、蠟燭の火のゆらめくごとに暗の中に顫へた。

『しかし、お前はそれだけで人生に生きて來た甲斐があると思ふのかい。人生について考へねばならぬことが、……悠久の問題について考へねばならぬことが……』芭蕉ははじめて口を切つた。

『先生それです。あなたとわたくしの道がちがつたのはそこです。あなたは人生について考へることが、そんなに偉いことだと思つておいでになるのです。考へておいでになるうちに、あなたは何一つ人間としての苦しみも、不安も、惱

みも經驗なさらないで、人間の一生をお過しになるのです。あなたはほんとうに幸福な一生をお過しになりました。あなたはわたくしのやうな境遇に置かれ、わたくしのやうな性格に生みつけられた人間が苦しまねばならぬ苦しみを一度も經驗なさらないで、一生風月を友としてお過しになるのです。あなたは仕合せな方です。しかしたいていの人間はあなたのやうな幸福な平和な生活を送ることは出來ません。ごらんなさい、こゝにはこんなにたくさんな人たちが死んでをります。』路通は暗い壁の方を指して見せた。今まで、そこは何もないたゞの荒壁であつたが、路通が指した刹那に、そこは廣い、奥行の深い古い巨刹の廻廊になつてゐた。かつて奈良で見た或る寺のやうだと芭蕉は思つた。暗かつたので最初何がそこにあるのか見分けることが出來なかつた。廻廊の遠い奥の方に一人の女が燭を立てゝ行つた。そのかすかな光りは廊下の上にうづくまつてゐるすべての人々の形を見せてくれた。痩せ衰へた老人や子供や、疲れ切つた若者たちが捨てられた藁か枯草のやうになつて眠つてゐた。

病みほうけた女や老人たちは板の上に骨だらけの軀を横へたきりで、身動きすることすらできないやうであつた。三人の子供たちは一本の玉蜀黍を奪ひ合つてゐた。歯をむき出して、爪を立てゝゐる子供の眼は猿を聯想させた。三人の子供の横には三人の子供の母親らしい一人の女が眠つてゐた。女の足裏が白く陶器のやうに冷たい感じを與へた。女はすでに死んでゐたのであつた。圓柱の傍には、錦襴の柱懸を引き裂いて腰に卷いた夫婦者が一つの古びためんつうの中に手を突つ込んで飯を貪り食つてゐた。女がめんつうの中に兩手を突つ込んだ刹那に、男はいやといふほど女の横顔をどやしつけた。それでも女はめんつうの中に突つ込んだ兩手を離さなかつた。女の頸が枯れ木のやうに痩せて、咽喉佛だけが柿の實のやうにぴよこんと飛び出してゐるのが、芭蕉にも可笑しく思はれた。芭蕉はその男の顔をじつと見てゐた。男は芭蕉に見られたのを恥かしいとでも思つたのか、わざとらしく笑つて見せた。かれの手と髭だらけの頬に飯粒がくつついてゐるのが、その男の顔を道化て見せた。芭蕉はその男がうつむいたはづみに不圖村はずれで見た梟首の一つを思ひ出した。芭蕉はたしかに、あの首を晒されてゐた男にちがひないと思つた。めんつうの飯を貪り終ると男は圓柱にもたれたまゝ兩脚を投げ出して眠つてしまつた。血の氣のない顔は死そのものであつた。女は脊を丸く海老のやう

に曲げて男の投げ出した膝の上に仰向に凭りかゝつて眠つた。男は女の肩の上に両腕を伸ばして女を抱きいたはるやうな恰好をして眠つてゐた。

嵐の音につれて若い男女のたのしげな笑ひ聲が聞えて來た。中庭を一つへだてた書院のやうな大廣間ではきらびやかに着飾つた若い武士や美しい女たちが、大廣間中に明るく照らされた百目蠟燭の下で、輪を作つては踊り狂ふてゐるのであつた。

何々守の奥方とでも言はれさうな若い女たちが、中には四十五十を越した未亡人らしい御殿内の女たちが、見苦しいほどに白く塗りたてゝ百目蠟燭の下に若いすらりとした美しい侍の手を握つてゐたりした。そのやうな女たちはたいていは自分の體を持てあますほど肥つてゐた。その眼は淫蕩そのものをあらはしてゐた。若侍たちはいかにも都會人らしい優美、聰明さをその鮮かな顔に現はしてゐた。みんなが申し合せたやうに細身の大小を帯してゐた。かれ等の手は女のそれのやうに白く、華奢であつた。かれ等は髪の毛一筋みださないほどの身だしなみを持つてゐた。

みんなが踊り狂ふてゐる最中に、あわたゞしく一人の若侍が廊下を走つて人々の間に行つた。同時に人々は水を打つたやうに静かになつた。次の刹那には人々は蠟石のやうに白い顔をして立ちすくんだ。廊下から五六人の若侍たちがぐつたり手と足を投げてゐる一人の男を抱えて、大廣間を通りぬけて、再び暗い廊下に消えてしまつた。

『堀田備中守が刺されたんだ』と暗い廊下の石の上の或る男が、皮肉たつぷりな調子で言つた。そこいらにゐた五六人の男がちよつと顔を上げて、その男の話を聴いたが俺たちは眠つてさいればいゝんだといつた態で再び石の上に横になつてしまつた。

『堀田備中ばかりぢやない。今に見ろ。』その男は暗の中でたゞ一人無氣味な笑ひ方をして大廣間の方を見つめてゐたが、周圍の人たちは戸外の嵐の音におびえるやうに、石の床に噛みつくやうな恰好をして寢てゐた。

芭蕉が自分自身に歸つた時は、かれは元の同じ薄暗い土間に路通と向かい合つて立つてゐるのであつた。無氣味な笑ひ方をしてゐた男は路通であつた。路通は釘を持つては女を入れた甕を叩きつけてゐるのであつた。

入れた 二人の[illegible]

『先生、ごらんなさい。こんなに美しい顔をしてゐるぢやございませんか。』路通はかう言つて棺の中を指さして見せた。『わたくしはこれからこの柩をみん舟で運んで美濃の方へ持つて行かなければなりませぬ。あすこにはこの女とわたくしの間に出來た最初の子が、一人で地の下に眠つてをります。わたくしたちはあすこに行つて一緒に墓の下に眠るつもりです。』路通は綿の帽子を女の頭に冠せた。女の眼と綺麗に整つた鼻筋と、品の良い口とが、綿の帽子を冠せられたことによつて、一層引き立てられて見えた。

『ごらんなさい。この女はあんなに落ちついた、いかにも安心したらしい顔をして眠つてゐます。わたくしのやうな人間でも、頼りとして一生苦しんで靜かに死んでくれたのかと思ふと、わたくしはありがたいやうな勿體ないやうな氣がします。わたくしは五度でも十度でも牢舍に打ち込まれても後悔はしませぬ。わたくしは何一つ仕出かすことはできませんでした。けれどこの世界でたつた一人の女でも心から頼り合ふことができたと思ふとうれしくてなりません。生きてゐた甲斐があつたと思ひます。この女だけが世界中でたつた一人わたくしを頼つてくれたのでした。』路通は錠を握つたまゝ女の胸にすがりついて泣いた。芭蕉も泣いた。

芭蕉は自分の聲に驚いて眼さめた。

月の影が障子越しに部屋の中を照らしてゐた。曾良は鼾をかいて眠つてゐた。二人の遊女も一人の老人も壁に沿ふて眠つてゐた。

×

『二十八年の間、わたくしは殆んど旅から旅を歩いた。家に對する妄執、人に對する妄執、世に對する妄執から脱れるために。無そのものを覓め得るために！ そして何をわたくしは覓め得たか！』

渡り鳥のやうな旅から旅へのかれの生涯をかへり見て、かれはいつも同じやうな絶望を感じないではゐられなかつた。

死を待つてゐるやうな衰へたかれの姿と、かれが描いてゐた一生の仕事の犧牲となつた人々のいたましい殘骸のみが取り遺されてゐるのであつた。

かれは旅の心を捨てゝ幻住庵の中に引きこもつてしまつた。木曾の檜笠と越の菅簑だけが、いつも幻住庵の柱に懸けられてあつた。

『人來れば無用の辯あり、出ては他の家業をさまたぐ』かれはまつたく自分一人の世界にはいつてしまつた。かれはいつも一本の椎の木の下に立つて死の來ることを待つてゐた。刻々に迫つて來る時代の恐ろしい變化、社會の出來事、社會の不安、恐怖、そのやうな事は、かれにとつては幻住庵の一本の椎の木よりも交渉の薄いものであつた。

しかし幻住庵のこの獨居的生活も、かれが求めてゐる世界を見せてはくれなかつた。

かれは無名庵に走り、さらに江戸の舊芭蕉庵に歸つて來た。こゝでもかれは門を閉ぢて獨居の中に、かれが求めなければならぬ世界を探し出さうとした。

かれは荒寥たる冬の野をあさる渡り鳥であつた。かれは野から野とかけまはり、あさりまはつた。宿つては飛び、飛んでは宿りながら。伊賀に入り、奈良に入り、大阪に入つた。

かれはつひに何ものをも見出し得ない冬の渡り鳥であつた。

冬の日は暮れて來た。冬の渡り鳥は何ものかを得ないで死の塒に還つて行かなければならなかつた。すべての冬の渡り鳥がさうであるやうに。

X

午後の日さしがしづかに花屋の裏座敷の障子に映つてゐた。

手傳ひに來てゐた之道の妻お梅が縁側に出てしきりに針を運んでゐる姿が少し明けかけたまゝになつてゐた障子の間から見[illegible]

[illegible]

羽音を立てながら飛んで行つたりした。

自分の老母を捨てゝ十幾年の間ひたすら芭蕉のために盡してくれた次郎兵衛の心や、またかつて何のゆかりもなかつた見ず知らずの旅人のために、貧乏の庭に喘ぎながらも、一枚の胴衣を縫つてくれてゐる之道の妻のことを考へて見た。

悩み、呪ひ、陰險、傲岸、利己…人生にはあまり多くのあさましい影がある。けれども同じその影の下に、かれのために胴衣を縫ひつゝある貧しい女があり、かれのために一生薪水の勞を取つた男がある。『わたしのやうな人間のために…』かれは斧の音を聽きながら、女のやつれた横顏を覗きながら、かう思はないではゐられなかつた。それはあまりに尊いことであり、あまりに有り難いことであつた。

人のために斧を揮つてゐる男、人のために針を運んでゐる女、その人々の上にも時は過ぎて行く。人々は死に近づいて行く。しかもその男、その女たちはたゞ人のために己をさゝげることに時のすべてを投げ出してゐる。

こゝの家にも。有りがたい一二人の人間の心が動いてゐる。恐らく隣りの家にも、そしてさらにその隣りの家にも…地の上を誰から誰まで家から家と、いやしくも人間が住んでゐるところには、人のために針を運ぶ女があり、人のために默々として斧を揮ふ男があるであらう。

隣りから隣りへとかれは人間の心の一つ一つに飛び込んで行つて、人間でなければ持つことのできないありがたい心尊い心に浸されて見たいと思つた。

『秋深き隣は何をする人ぞ』

かれは無性に人間が戀ひしかつた。誰れにも彼れにも逢ひたいと思つた。

それはかれにとつて幻住庵の生活以來今までにない心の經驗であつた。『死が近づくからかも知れない。』芭蕉は自分で制することのできないこの心を、かうも解釋して見た。けれどもかれの心の底では『お前は無理にも自分の心を殺し

てゐたのだ。たゞ一つのかたくなゝ我執のため自分の心を僞つてゐたのだ。お前は始めてほんとうな赤ん坊になることができたのだ。」と叫ぶものもあつた。夢に見た路通のことがはつきりとかれの心に浮かんで來ることもあつた。「どのやうに立派な夢だけは描いてゐたとしても、人間の一生をあやまらせたわたしの生涯は失敗であつた。どのやうな惡い人間であつても、一人の人間のためにすべてをさゝぐることのできた路通はわたしより尊い、意味のある人生を送ることができたのであつた。かれはかうも考へた。耐らなく寂しい考へ方ではあつたが。

京都から去來が夜半過ぎて花屋をたづねて來た時、かれはうと／＼と眠つてゐた。しかし去來の聲が聽えた時かれはほとんど自分を忘れて起きた。かれも去來もしばらくは言葉を出すこともできなかつた。かれは人目もなく去來の肩に手をかけた。手がわな／＼と顫へるのであつた。

「誰も彼もわたしを親のやうに思つてくれるのに、わたしのかたくなゝ心から人を子のやうに思ふこともしなかつた。わたしはわたしの心に殼を着せてゐた。殊更お前は骨肉を分けたやうに思はれるので、千日の思ひで待つてゐた。とても今度は再會の機會もあるまいと思つてた」と芭蕉は自分でも、可なり誇張的な言葉をつかつてゐることに氣付いてゐた。しかしこの場合どのやうな誇張した言葉をつかつても、かれが去來を思ふ心の切なさを充分言ひあらはすことはできないことを信じてゐた。

去來が來、木節が來、乙州が來、誰れ彼れと集まつて來るごとに芭蕉はたゞうれしさの涙がこみ上げて來るのを知つた。とても逢ふことは夢にも不可能だと思つてゐた其角までが、かれの死の前日駈けつけて來た時は、かれは言葉さへ出ないほど衰へてゐたが、ほろ／＼と枕の上に涙を落してよろこんだ。そして、みんなに逢つて死ぬことができるのがあまりうれしいからと言つて、木節が止めるのを強ひて梨の實を一つ支考にむいてもらつて喰べた。喰べるより早く吐いたが、それでもかれは衰へ切つてゐた顏の上に言ひやうのないうれしさを湛へてゐた。

九日の夜であつた。弟子たちが取りまきながら一番片から、夜明までその[illegible]

『何處の旅の涯か、草の上に、地を枕として死ぬべきはずであつたのを、こんなに美しい夜具の上に…』もうこれ以上のことを言ふことはできなかつた。かれは子供たちが新らしい玩具でも得た時のやうな鮮かな顔をして着替えたばかりの下着の袖口を掻き合せたり珍しさうに着物の柄を見たりした。そして涙にうるんだ眼をしばたゝいた。

次郎兵衛が眞つ先きに涙を落した。丈草も支考も惟然も乎や、袖で顔を掩ふた。

部屋の中も浄め、衣も夜具も浄め、逢いたい人にも逢い今ではただ靜かに死を待つばかりの心になることができた。一日に五十度、六十度と厠に立たなければならぬことは、彼にとつては死以上に苦しかつた。

新しい衣に着替えた日の眞夜中であつた。芭蕉は夢うつゝの中に雨の音を聽いた。

『時雨のようぢやなあ…』

板庇を打つ雨の音がこの世のものと思はれぬほど靜かに、間遠に聞えた。

『ああ雨のようでございます』と乙州が言つて、細目に戸を一枚明けた。

『雲がちぎれてゐますので、月の光がかすかに見えますが、雨でございます』

芭蕉はぢいつと雨の音を聽いてゐたが、彼の心には久しい過去の事などが再び思ひ出さるゝのであつた。

『初時雨ぢやなあ……わたしは時雨を聽きながら死ぬのかなあ……』芭蕉はひとりごとのように言つて、なほもぢいつと雨の音に耳をかたむけてゐた。木の葉を打つ雨の音は殊に靜かであつた。時雨の音を聽きながら死んで行くといふことを芭蕉はありがたいとも思つた。

板庇を打つ時雨の音を聽いてゐる間に芭蕉は旅に病んで死につゝあるのだといふ意識を一層強く感ずるのであつた。ばた〳〵と庇を打つ雨の音は、不思議とかれの衰へかかつてゐた記憶をはつきりと喚びさまして來るのであつた。

木曾川の土堤で始めて路通と一夜を明かしたこと、大井川のほとりで捨て子を見たこと、北の旅行であつた佛五左衛門のこと、馬を追ふて來た小娘のこと、曾良のこと、杜國のこと、少年一笑のこと、……何もかも、現在の出來事のやうにかれの頭に刻みつけられてゐるのであつた。殊にかれは路通とだけはなほ一度逢ひたいと思つた。しかし一度破門

をした、そして誰にも破廉恥漢のやうに爪彈きされてゐる路通のことを、人々の前にかれこれ言ふことを遠慮しないわけにもゆかなかつたので、かれは路通のことは口に出さなかつた。他の門弟たちと路通の仲に立つて路通のために力をつくしてくれた去來だけには話したいと思つたが、それすらかれは憚つてゐた。

伊賀からのたよりもかれには待たれた。

城孫太夫の娘の顏がはつきりと浮んで來るのであつた。赤く熟した柿の下にその娘が立つてゐた。かれは寺院の樓の上に手をついてゐた。櫻が雪のように白く咲いてゐた。美しい後宮××院の御顏がはつきりと夕暗のなかに映つてゐた××院はちらとかれをお覗きになつた。黑い美しい××院の瞳をかれはたまらなく寂しいと思つた。かれは美しい錦繪でも見るような氣で××院の美しいお顏を描いて見た。もうそこには何の胸のときめきもなかつた。すべてあるものは美しく、懷かしく、寂かつた。かぎりなく淚ぐましかつた。

忽然として一笠一杖のかれ自身の姿があらはれた。道は限りない枯れ野の中を一直線に走つてゐた。

かれがうとうとと眠つたと思つて、眼をさました時は、去來と惟然がかれの枕邊に坐つてゐた。夜明方のかすかな光が寒さうに障子に動いてゐた。

『旅に病みて夢は…………』

かれは去來と惟然を見ながら寂しい微笑を浮べた。

惟然は筆を取つて急いで芭蕉の言葉を書き記さうとした。芭蕉は再び昏睡してしまつた。

×

時雨の後の朝はいつになく青い空を軒端に見せてゐた。明るい日影を受けた障子には蠅がたかつてゐた。正秀が黐を買つて來て黐をさしはじめた。惟然も、吞舟も、之道も子供のやうになつて黐をさしたが誰もうまくなかつた。芭蕉は弟子たちの騷ぎを見てゐると近ごろになく愉快でならなかつた。今日ばかりはいよいよ病も怠つたかと思はれるほど快かつた。かれは今日こそ路通のことを弟子たちにも話さうと考へた。しかしかれは昨日と同じやうに路通のことを語り

出すことを憚かつた。かれは路通の話しを聽くだけでも、不快を覺える弟子たちのすくなくないことをあまりによく知つてゐたからであつた。

夜半ごろからかれはまた苦しんだ。かれは弟子たちに抱かれながら、苦しみ通しに苦しんだ。

夜が明けるにつれて、苦痛は薄らいで行つた。しかしかれは旣に死のいよいよ近づいたことを知つた。乙州、正秀、支考、惟然、其角、去來、丈草とかれは一人一人はつきり弟子たちの顏を意識しながら、遺言のことを語ることが出きた。

午後の日ざしがかれの白い顏を照してゐた。かれはちよつとためらつてゐた。咽喉に喉がつまつて何うしても言葉を出すことができなかつた。かれは眼をつぶつて、何にかつぶやいた。次郞兵衞は急いで白湯を持つて來て芭蕉の口をうるほしてやつた。そして後から芭蕉を抱いた。

いよいよ人々は臨終だと思つた。丈草も去來も其角も口を抑へて泣いた。

芭蕉は尙一度眼を開いた。かれは去來をさしまねくような手つきをしたが、手が上らなかつた。ただぴくぴくと右の手がひきつるように動いた。しかしかれの聲はまだはつきり人の耳に聞えた。

苦しさうに聲はかすれてゐた。

『……寶永阿闍梨からも路通について話もあつた。お前から丈草、乙州への手紙のことをも聽いてはゐた。心にもかけてゐたが……長いことわたしも考へてゐないではなかつた………何うして路通のことを忘れやう。わたしのために長い年月苦しんでくれたものを。みんなにもわたしから願ふ……わたしの死後、あの男を見捨てないで……これだけをお賴みしますぞ……』

これがかれの最後の言葉であつた。

それと同時に今まで多少、興奮してゐたやうに見えたかれの顏に、急に重荷を卸してしまつたやうな氣易さが浮かんで來た。

しかしその氣易さも長くはつゞかなかつた。

「…………」かれは何か口のなかで獨語ちた。

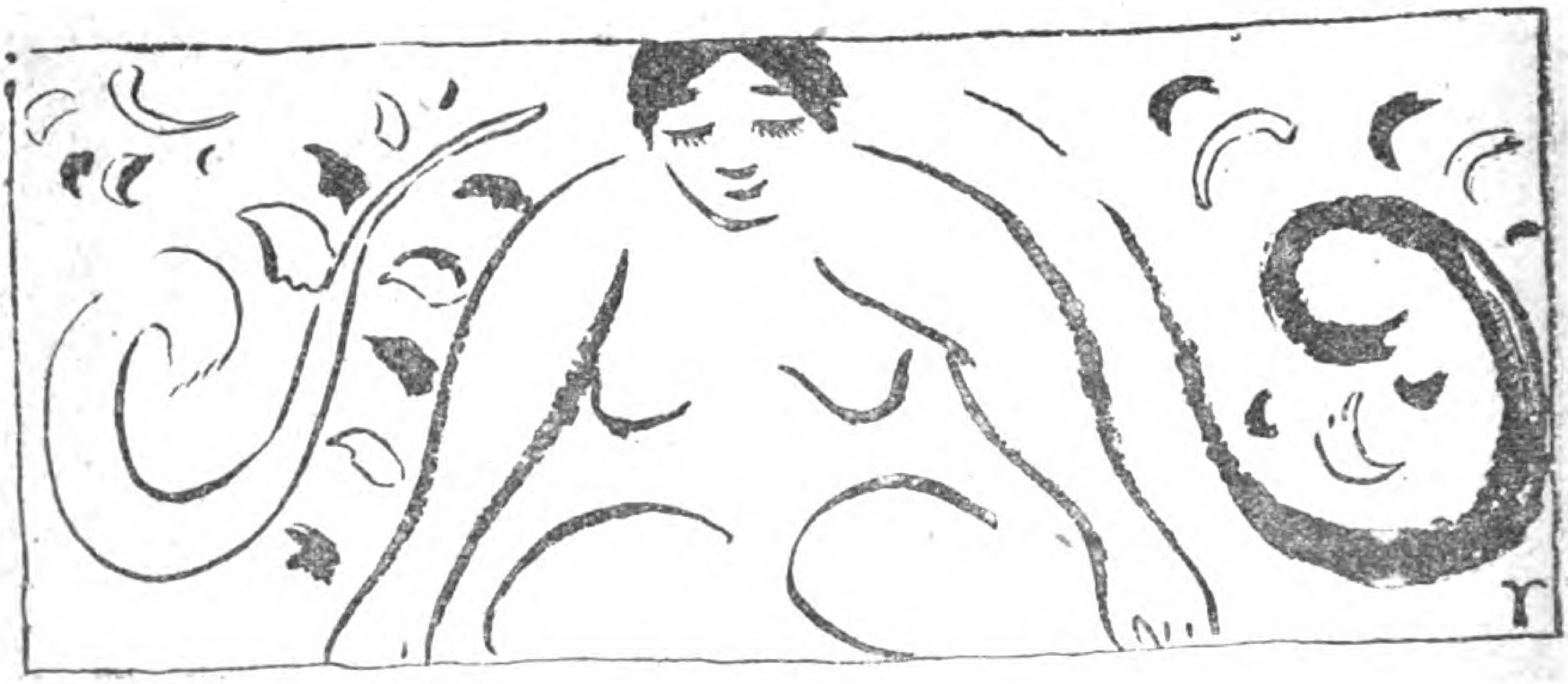
が、誰れもその言葉を聽き分けることはできなかつた。

口を締り氣なく大きく開いたまゝ、兩腕をだらりと下げてしまつてゐるかれの表情には、人生に於ける一番大事な物を取り落してしまつたことに氣づいた刹那の絶望が浮んでゐるかのやうに思はれた。それは白痴を連想させる表情であつた。しかしこの刹那の醜い表情は誰れも氣付かなかつた。

次郎兵衛がだらりと下つた芭蕉の腕を抱き上げやうとしたのと同時に、芭蕉は口を閉ぢた。そしてほとんど自分一人の力で胸の上で合掌した。

觀音經を誦んでゐるらしいかすかな聲がかれの口の奥から洩れた時は、かれの顏は聖徒とでも言はれさうな尊さと寂しさとをもつてゐた。

—一九二二、一一—



「彈力線」の尖端から

武林無想庵

――どうですか？　もう、そろ〳〵、日本の事はいゝ加減にして、今度は洋行中の生活に移つてくれませんか？……

歸朝以來、それだけで、たゞそれだけに縋つてのみ、日々の糧を得べく余儀なくされてゐるところの、原稿料といふものを稼ぐために、それこそ千鈞のやうに重たいペン軸を拿りあげて　リラクタントリイに握りしめて、牛のやうに……さう、まだ、やツと、例の十牛の第一圖時代に於けるそれのやうに、道草を、どう辛抱しても、つひ食はずにはゐられなくなる、道草ばかり食ひながら、止む事を得ず、斯くのろ〳〵と書きはじめた私の文章は、心配したとほり、豫想どほり、頗る世間の受けが惡かつた。

薄ツペラだといふのが定評だ。衆口一致の鎗衾（ヤリブスマ）だ。俗氣と衒氣とデタラメの自己強辯とで固まつた、フヤけた、手前勝手な、横着な、少しも人生に對する嚴粛な省察のない、負惜しみのつよい、不正直な、不徹底な、甚だもつて男らしくない、さ

うして卑劣きはまつた作者だといふ事に、私自身の人格まで、立派に正札がついて了つた。ギヤフンだ。

——試驗官はお客樣で、お客樣が試驗官でいらツしやいます。と、柳屋小さんはたびたび高座でさう云つてゐた。小さんは自己の藝術と群集心理とを、なが〳〵しい六十年の體驗で、十二分に嚙みわけて、嚙みしめて、滯りなく方寸に藏めた男だ。さうして首尾よく成功して、金までスツカリ溜めた男だ。

つまり、小さんの說に從へば、私の書いたものは落第だといふ事にきまる。文壇の落第生は、いふまでもなく、社會の落伍者だ。社會!……勿論、無政府主義の社會でもなければ、共產主義の社會でもない、ヤツぱり、花々しい、堂々たる、かの帝國主義的資本主義で構成されつゝあるところの、即ち一にも二にもブルジョア共の鼻息ばかり伺つてはセツパ詰つた金切り聲をふり絞りながら、ヒステリカリイに、『藝術!藝術!』と絕叫しつゝあるところの、そのうちの一部なる、所謂文壇といふ寄生團體を包容し尊重しつゝあるところの、大日本帝國の、辱けなくも三千年の文化的傳統ある、在來のまゝのこの社會……要するに、その社會の落伍者なのだ。ギヤフンだ。

が、いかにギヤフンでも落伍者でも、食はずには生きられない。卑劣でも橫着でも、書かずには食はれない。不正直でも薄ツペラでも、これより外には書く筆はない。そこでます〳〵止む事を得ず、いよいよますます書かさるを得ない破目に陷る、讀者こそいゝ面の皮だ……但し、讀者よりはもう少し慾の深い出版業者が、讀者に對して、これではあんまり申譯がないからと云つて、一人殘らず、かうした私の文章をば、斷然ボイコットして了つた曉には、その時こそは、惱まされた讀者もやう〳〵助かつて、纔にホツト息がつける時だ。同時に、私の餓死する時だ。危ツかしい命だ。安ツぽい命だ。

ところで[illegible]どうです?[illegible]だ。さうした[illegible]の[illegible]どうです[illegible]だ。

ろの、私にとつては唯一の出版業者なる、K社のS君が、そろ／＼もう、何となくシビレでもきらしはじめたやうに、――日本はいゝ加減にして……今度は是非洋行中の事を……と、さう私に勸告したものだ。S君は、歸朝以來ベラペラと書き出した、かうした私の文章をば、どこへ見込みをつけたものか、とにかく全部、それは快く買入れてくれた人だ。從つて論理の勢ひとして、これから先の文章をも、なほ進んで、序でながら氣前よく背負ひ込んで貰はうと、例の横着な私から、僅かに柳の下にされてもゐる人だ。さういふ人の勸告だ。ノツピキならぬ勸告だ。だから、いやだとは云はれない。

よろしい！　書かう。洋行でも何でも書かう。原稿料にさへなる事なら、どんなものでも書きませう。喜んで書きませう。どうせデタラメだ。デタラメより外には、どうせ何一つ書けツこのない私だ。豫定だとか計畫だとか、そんな氣のきいた代物は、最初ツから持合はしてゐさうな筈もない私だ。トリストラム・シヤンデイの作者ではないが、かうやつてペン軸を握つたが最後、忽ち眼がくらみ、忽ち盲滅法となり、行きあたりバツタリとなり、書きつゝある私自身にすら、果して何をどう書いてゐるものやら、正直のところ、皆目わからなくなつて了ふのだ。心細い話だが、讀者には氣の毒だが、それより外には、全くどうにもならぬのだから、沒法子だ。ニチエヴオだ。

だから、下らないと思ふ人は、まづ、絶對に讀まない方が安全第一だ。のみならず、その上、こんな下らぬ文章を書肆に出版させたくないと思ふ人は、私にも書かせたくないと思ふ人は、さういふ親切な人は、さうサ、一萬圓でもいゝから、年々私に支給してくれて、私をして雲の如く波の如く、世界中を漂浪させて置いた方が、なほ一層安全第一だ。

『著者の爲には、買はずとも讀め。書肆の爲には讀まずとも買へ。』と、例の正直正太夫は云つてゐるが、私は決してそんな野暮は云はない。試に訂正すると、アベコベになる。即ち、『著者の爲には、讀まずとも買へ。書肆の爲には、買はずとも讀め。』となる。何となればだ。著者は勞働者だから、書肆は資本家だから、さうして書肆は著者よりは遥かに廣告文が巧いからだ。

さて、洋行だ。御注文の洋行だ。さうしてたゞ〳〵それだけの爲に、一切萬事を放擲して、孃が押懸女房に來たと稱する、その洋行だ。その洋行のお話だ。

孃！……無論、そりやア、孃になンぞする氣は、はじめから私には爪の垢ほどもなかつたものだ。神明町二十四番地の、ラビリントの中の、その所謂キリギリスの宿にドツカとお神輿を据ゑたまんま、いかにも色男然と收まりかへつて、おほよそ物の三四晝夜、菊正とウヰスキイと、それから飽く事を知らぬ抱擁とで、ヘト〳〵にトグロを捲きくたびれた揚句、愕然として我に還ると、かの五ケ月越しの交渉中にある國の實父に委托した土地賣却の件を思ひ出して、そいつを口實に、卑怯にも匆々鵠沼へ逃げ歸らうとしたが、女は中々放さなかつた。

――なアに、解決がつきさへしたら……さう、どうせあすこは引上げるつもりでゐるんだから……さうすりや、きツと爰へ來る。きツとだ。

――どうだか……まア、十中八九は、アテになりやしない……一歩こゝを踏出したら最後、私の事なンぞ、ケロケロと忘れて[illegible]にきまり[illegible]る……

[illegible]

――お互ひに厭になつたら遠慮なくサッサと別れようツて約束だつたけれど、私はさう急には厭になりさうもない事よ。よくて？

――いゝところぢやアない……正直に白状すると、少しも豫期しなかつた、かういふ徹底的な幸福をだね、しかも君のやうな別嬪さんから、まるで天からでも降つたやうに、かう十二分に與へられた事は、さすがの我輩も全く生まれてはじめてだ。だから……

――うまく云つてるよ。にくらしい……鎌倉さんでなくて、お生憎さま！

――いや、あれはもうロザリンさ。かういふジユリエツトを見ない前の女サ。あんな女は駄目サ。あんな勇氣のない女は駄目サ。叡山はさて置いて、つひ目と鼻の鵠沼へすら、思ひきつて飛出して來られないやうな女は駄目サ……君が若し何の女だつたら……

――そりや、かうなりや、どこへだつて追蒐けて行くわよ。叡山だらうが、アルプスだらうが、ナイヤガラの底だらうが……ホホホホホ！

――さア、その意氣で今晩は一つ解放して貰はう……どうせ、もう、致命的の銛を一本、見事に打込まれて了つたんだから、いくらジタバタ泳ぎまはつて見たところで、鯨は結局君の手元までたぐりよせられるにきまつてゐるサ………だから、安心して放ツとくサ……なアに、かうなりや、あとはたゞ金だけの問題だ。一日も早く親爺から金を受取つて一日も早く二人で世界中を放浪する準備に取懸るんだね……厭かれ？……厭でなけりや……だから……

――私のやうなものでも、ほんとに外國へ連れてつてくれるつもり？

――ついて來るほどのものなら、誰だつて連れてゆく……但し、金の切れ目が縁の切れ目だ。いよいよ一文無しに

なつたところで、サワラ沙漠の中だらうが、セルバス森林の奥だらうが、そこで潔く別れるサ。高がタツタ三萬圓だ。さう長くは續きツこはありやしない。ハ、ハ、ハ、。

――いゝわよ。連れてつてくれさへしたら、跡はどうにでもなるわよ。あなた一人ぐらゐいくらでも養つてあげるわよ。

――そんなら何の事だ……さうサ、巴里か紐育で、一番、ロートシルドとかロツクフエラアとかいふ奴を生擒るかさうして一千萬圓ほど手切れ金をとつてやるか。ウン、それがいゝ。ぢやア、さう決めよう。さういふ事にして置いて今晩は一トまづ鵠沼まで引取らして戴かう……いゝだらう?

――なぜさう逃げたがるのよ。口先でばかり巧い事を云つて……駄目々々、今夜はまだ還されない……

――困るなア、どうも……ぢやア、かうしようぢやないか?解決のつくまで、ズツと鵠沼へ來てゐるサ。これからすぐ一緒に出掛けて行つてだ……どうだね?

――そりやア、行つてもいゝけれど……さうねえ……でも、女中達にキマリが惡るいもの……

――キマリがわるいといふ柄かい?海千山千のくせに……

――だつて、もう海千でも山千でもなくなツちやツたわ。あなたとかうして二三日暮らしてゐるうちに……いつの間にか……

――ハ、ハ、ハ、。そいつア弱つたね……が、勇氣を振つて押懸けるサ。堂々と乘込むサ。夫婦氣取りで、大澄ましに澄ましてかへつて、アツと開いた口を塞がらせないでやるサ……なアに　いくら蔭口を叩かうとまゝだ。表向きは立派なお客樣だ。要するにお客樣同志の問題だ。先だつてはお互ひにまだ赤の他人だつたから、別々に泊つてゐたもの

サ。然し、今晩からはもう既に他人ではなくなつてゐるんだから、公然と同室同衾するだけの話サ。そんな事は宿屋の知つたこツちやない。宿屋はたゞ宿屋らしく、素直に宿錢とお茶代とを頂戴してゐりやア、つまり、それでいゝわけだ。さうだらう？

――それにしたつて……あんまり出しぬけだから……

――事實が出しぬけなんだから仕方がない。人間は事實にのみ即すべしサ。下らぬ見榮や外聞や、コンヴエンショナルな習慣なンざ、ケチリンも眼中に置く必要はない…さア、出掛けよう、汽車のなくならないうちに…さア…

――そんなに歸りたいのなら、歸してあげるわよ…その代り、御用がすんだら、すぐ來なくちや厭よ。

――なアんだ、一緒に來ないのかい？…やつぱり意久地アないね…ぢやア、止むを得ない。思ひきつて、一人で歸るとしよう…生木を裂かれるやうな思ひだが…ハハハハハ。

――憎らしい口だよ、本當に……

――ぢや、左樣なら。

――アレ、まア、お待ちなさいよ…そこまで一緒に送つて行つてあげるから。

――まア、いゝよ。

――よかないことよ…薄情だよ、ほんとに、この人は。

かう云つた調子で、二人は手をつなぎ合ひながら、キリギリスの宿を出た。雨氣を帶びた密雲の低迷せるラビリントを出た。」

濱松町では、横濱まで、横濱では藤澤まで、いざ別れるとなると、女はとかく思ひきりが悪く、その先、その先と、どうしても送ると云つてきかなかつた。私は女のなすまゝに委せた。

が、藤澤の停車場を出ると、私は少々面倒くさくなつたので、

――この次の上りで歸つたらどうだい？……今晩あたりは、何だぜ、お芋の煮えたのも御存じのない新橋君が、例の謹嚴な、ひどく『エヴンジエリン』がつた顔をして、ノコノコやつて來てるかも知れないぜ。とからかひ面に呟くと、女は、はや、向きになつて、

――そんな嫌がらせを云ふから、なほ歸れやしない……と、口先を尖らしながら、先へ立つてスタ〳〵歩き出した。

――ハ、ハ、ハ。慍つたのかい。ぢやアその勢ひで宿屋まで來て了ふサ。

――慍りやしないけれど……

――御褒美に自動車でも奢るかね。電車はまだあるけれど……

――さぞビツクリするでせうね！

――したつて構ふもんか。双方の命に別條があるわけぢやない……

自動車の用意がとゝのふ間、とは云へ、女はまだとつおいつ、どうやら決しかねてゐる樣子でもあつた。

汽車と電車と、兩方の停車場からその建物の入口から、窓々から、斷續した電柱から、空の、松林の、岡の畠の、眞暗な天地へ向けて恰も巨大なる夜光蟲の集團のやうに、しきりに放射しつゝあつたところの、燦爛たる燈光の中を滑りぬけて、やがて自動車が動き出すと踏切を横ぎると水溜りを撥ねとばして、くら闇の中へ突進すると、その時まで無言で堅く握りしめてゐた手首をば、どうしたのか、女はヒヨイと振りはなした。さうしてショッファへ聲をかけた。

「自動車屋さん、これから鵠沼まで行つて、今度の上りへ間に合ふやうに歸れて？

――お歸りになるんですか…さア、すぐお引返しになれば、充分間に合ひます。」

――さう？ぢや、さうしようかしら？

――ハ、ハ、ハ、。どうせうか、かう、ショウガ酒か…や、アナクロニズムの嫌ひがあるね…尤も、人間の心ツて奴は凡そいかなる瞬間でも、常にあらゆる方向へ轉換して、馬車馬の如く驅け出し得る可能性を持つてゐるものだから、あながち元祿時代に限られた特色でもないか…但し實際に戯曲とはまるで異ふから、その瞬間々々のミリウとの關係上…

――いゝわよ。そんなネゴトを並べ立てゝ人を冷評しなくつたつて…

――いや冷評なんかしてやしない。大いに同情してゐるわけだ。

――にくらしい！

馴れきつてゐるだらうが、かうしたお客を乘せたショッフアこそ災難だ。×××××、×××、×××、×××、×××、×××、××××××××××××××××。さうして、それにも拘らず、さういふ涎のバケモノに對しても、職業の性質上、同樣に他人の生命を委托されてゐる義務と責任とを感せぬわけには、どうしてもゆかぬからだ。

郵便局の前まで來ると、私はハタ〳〵と硝子戸を叩いて、自動車を止めた。

――然らば爰でお別れだ…

――あしたの晩は、きつと來て下さるのよ。よくて？

――いゝとも。

――きツとよ？

――大丈夫。

――ぢや、さよなら

――新橋さんへよろしく。

――知らない！

自動車は引き返した。

歩き出すと、ポツ／＼雨が降つてゐた。

翌日も、その翌日も、引續いてジメ／＼と降り暮した。

屆いてゐた實父からの手紙によれば、來月の上旬には、いよ／＼一萬圓だけは手附金として、間違ひなく受取れる事になつたと云ふ。あともう一週間ばかりだが、併し一萬圓ぢやア仕樣がない……なぜかといふと、それは、その一萬圓は、二年越し私自身の名義の下に、その大部分をば、實父とそれからアメリカの妹とが使ふ爲に、勸業銀行から借り入れたところの、その負債消却の方へ、全部廻して了はなければならぬからだ。さうしてそれから後でないと、正式に土地賣買の手續が踏めないからだ。從つて、跡金の受取れるのは、私自身の使へる金の這入るのは、それが果していつの事になるのやら、ハツキリとはまだ分らぬからだ。

「フン、馬鹿にしてゐる……が、まア、いゝや。どうにでもなりたいやうになつて行け。」と、苦笑しながら、私は思つた。

何事にかぎらず、凡そ人生における一切事に對しては、悉くも、便宜的にその場の間に合せではある筈ないのだが、さうした

殊勝な覺悟のすぐ下から、甚だ笑止千萬にも、やッぱり、これが、その適用すべき土地の事が、どう振りのけて見てもいかになぐり捨てる氣になつても、何としても、この際、ダニの如くにヒツタリと食ひついて、致命的に私の心から離れようとはしないのだ。

『が、あの地面は一體誰のものなのだ？』と、私はふと考へて見る。

『無論、俺のものだ。法律上、俺自身の名義になつてゐるのだから、たしかに俺のものには相違ないのだ。明白に俺のものだ。法律上……さう、法律上だ。私有財産といふものならば、自明の眞理として、永遠不朽の眞理として、嚴然、背定した法律上だ。その法律上俺のものなのだ。云ひ換へれば、つまり法律のものなのだ。從つて、法律を離れたら、あの地面は俺のものだか何だか分らなくなる。

『ところで、法律はすべて人の造つたものだ。それを造つた人々だけの都合がいゝやうに、さうしてその立法に與らぬ人々には、反對に都合がわるいやうに、××××××、×××××××××、×××××××××××××××××、×××××××××××、×××××××××、××××××××××××××、××××××××××。××、いかなる時代の法律にかぎらずだ。さうした法律の均霑に浴し得られる狀態にゐるといふ事だけの爲に、たゞそれだけの爲に、つまり、あの地面が俺自身の名義になつてゐるわけだ。恰も天下晴れたやうな顏して、俺自身の私有財産と定められてゐるわけだ。

『さうサ。法律はすべて人の造つたものだ。凡そ人間の造つたもので、いつか一度は、晩かれ早かれ、影も形も、微塵も殘らず、必ず破壞されて了はないものは、たゞの一つだつて、この世の中には存在し得る筈はない。××××××××××××××××××。×××××××××××××、××

××××××××××××××××。従つてあの地面が俺のものだといふ法律上の根據など、全く危なッかしいものになる。

『一體、あの地面は、どういふわけで、現在俺の名義になつてゐるのか知らん？ それは考へて見るまでもない。十五年前、俺の養父が死んだ時、法律の規定に從つて、その養嗣子たる俺が、極めて當然に相續しただけの話だ。然らば、その俺によつて相續された、死んだ養父は、どうしてあの地面を自分自身のものにしたのか？ それも改めて考へて見る必要はない。その時の政府から、百圓か二百圓の端た金で、公然讓り渡して貰つたものだ。政府……この世の中には政府といふものがある。政府！ 政府とは一體何物だ？

『勝てば官軍、負ければ賊か……内亂を起して、その内亂に勝つた團體が、いつでもその時代の政府といふものを拵へる。さうして法律を發布する。さうしてその法律に從はぬ人間を牢に入れる。或は殺して了ふ。同じ人間をだ。四海同胞だと稱してゐる、その同じ人間をだ……×××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××、俺の養父は、あの地面をやす〱と讓り受けたものだ。

『養父からの報告によると、それが今日となつて見ると。何十年か前までは、殆んど夕ゞに等しかつたその地面が、所謂世の中の需要供給の關係上、それが七萬圓とか六萬圓とかに賣れるのださうだ。考へると、不思議でたまらぬやうな氣がする。が、とにかく、勝てば官軍の、その内亂に勝つた團體と俺自身との關係は、さういふ結果となつて偶然俺の目の前へ現れて來たわけだ。

××××××××××××××××××××、××××××××××××、××××××。××、××××××××。

××××××××××××××××××××、××××××、××××××、×××××××、××××、×××、×××。

××××××××××××××××××××××、×××××××、×××××××××××××、×××××××××。

『プルードンに云はせたら、勿論、フテンフテしい泥棒同志の取引だ。もと〳〵贓品であるところの地面の賣買だからだ。それは必ず「物の一體、取引とか賣買とか稱する、所謂商行爲として法律上認定されてゐる、人間同志の相互動作は、それは必ず「物の私有」といふ事を肯定した上で、はじめて成立し得るものだ。從つて、×××××××××。×××××××××、××××××××。

『さうだ。俺は泥棒だつたのだ……あの地面の取引がすんで、その取引から生じた金をば、一文も殘らず消費して了ふまでは、俺は依然として泥棒なのだ……泥棒だ。泥棒だ。俺に泥棒だ……この俺の心の底から、絶對に「私有」といふ觀念がなくならぬかぎり、いつまで經つたつて、俺は泥棒の境涯から脫却が出來ないのだ……

『En regime capitaliste, tout devient une march in dise か……資本主義の統治の下では、一切が商品となる、だ。×××××××××、×××××××××、××××××××××××、××××××××××××××××、×××××××××、×××××××××××××××。全くない……

『が、俺は今決して手を束ねて餓死など待つてはゐない。たゞ〳〵首を長くして、一日も早くあの地面の賣れるのを待つてゐるのだ。一日も早く賣れた金を手に入れたくてウヅウヅしてゐるのだ……共産主義の實現はさて置いて、最も下劣な資本主義の謳歌者なる、相場師とか博奕打とか、さう云つた連中と全く同樣な心理狀態で、しきりに成金行爲の夢ばかり見てゐるのだ……

『共産主義は贊成だ。併し、金は自分だけで好き勝手に使ひたい……そんな馬鹿げたコンミユニストがあつてたまる

ものか………コンミュニストどころか、それこそ詐僞師だ。ペテン師だ。大泥棒だ。さうして俺は正しくそれなのだ。

『考へると、結局、わけが分らなくなる………いや、分らなくなるんぢやない。分りすぎて了ふのだ。俺自身のペテン師で、詐僞師で、大泥棒だといふ事が、考へれば考へるほど、ます／＼明瞭になつて來るのだ………わけが分らぬなどゝ思ふのは、それこそ立派な自己欺瞞だ………

『どだい、この俺自身といふ、このモアといふ、ダス・イヒといふ、コギトオといふ、スムといふ、こいつめが、元來曲者なのだ。それ自身生まれながらの大ウソツキだつたのだ。自己!………それは自己欺瞞といふ意味だ。そこで、去利則天か………則天が即ちその自己欺瞞ぢやないか? 八萬四千の自己欺瞞中の、その最も病膏肓に入つた、その最も救ふべからざる、神變不思議の自己欺瞞ではないか?………

『と、さう、俺は考へる。それゆゑに俺が存在してるのぢやない。それゆゑに俺が俺自身を欺いてゐるだけの話だ。欺かざる自己?………そんな自己はない。この世にはない。絶對ない。「非有、非無、非亦有亦無、非々有非無」か……それこそ正しく黒暗窖の鬼窟裏だ………

　實父からの手紙には、地面に關するビズネスの外に、洋行をするならば、その前に是非妻を娶つて、世間普通の眞人間となり、悪逆無道の今日までの生活を脱却し、改めて懺悔と社會奉仕との新生涯に復活する誠實を示してからにしてほしいといふ、希望やら、勸告やら、批難攻撃やらが、こま／＼と附加へられてあつた。で、その中の一節には、

『………小生知人亘理氏の姪なる人、兩三年前夫を失はれて、この頃は横濱なる祖母の手許にて、貞淑に家事を助けつつ、徐ろに再緣の機會を待たるゝ由きゝ及び候が、小生も一兩度面會したる事もあり、教育と云ひ、身分と云ひ、人格

と云ひ、年齢と云ひ、そこ許などには勿體なき位の婦人に候。外ならぬ小生よりの懇願に及べば、必ず否とは申されまじく候。さりながら、退いて、つら〳〵そこ許十數年來の亂行非行に思ひ至れば、たとへ小生その許の實父なりとは申せ、そこ許將來の行狀については、正直のところ、先方へ對して全責任は持ち難く、從つて、この際、小生の口よりしては、その事をば先方へ持ち出す勇氣無之候。幸ひ、鎌倉なる脇田氏夫人は、そこ許妹の親友といひ、且つ先方とも敎命の關係上互ひに知り合ひの仲なる由に候へば、この人を頼みて、この縁談の仲介者となつて頂いては、如何のものに候ふや。切にお勸め申上候……」などゝある。

鎌倉なる脇田氏夫人とは、云ふまでもなく、材木座の奥さんの事だ。皮肉もかうなると、ほとんど天衣無縫に近くなる。私は苦笑を通り越して、私自身の心的生活に關しては、全く何等の理解もない、また全く何等の交渉もない、迂闊極まる實父の親切が、恨めしくもなり、寧ろ悲しくもなつた。

結婚か………親父のいふのは、Mariage の事だ。Mariage enregistré の事だ………

"Nul avantage sur l'union libre n'est conféré au mariage enregistré; il est facil de le conclure, non moins de le dissoudre; femme et homme y sont égaux son but n'est plus la procréation; on n'est pas obligé de suivre son conjoint; la loi prévoit avec un sourire qu'une épouse ait des enfants sans le concours de son mari; l'enfant adultérin, légitime, naturel, etc., perdent leur valeur. Pénétré de cet ésprit libéral, l'institution, mariage porte en elle le germe de sa ruine." ――「登錄結婚は自由結合の上に何等の利權をも附與しない。締結も解除も同樣に容易だ。その點に關しては女男同等だ。結婚の目的はもはや生殖でない。人にはその配偶を繼續する義務

はない。法は微笑をもつて、一人の女性配偶者が、その夫の協力なしに、子供等を有し得る事を豫見してゐる。姦生、嫡生、私生などゝいふ語は、これ等の價値を失ふ。かゝる自由精神に透徹すれば、結婚制度は、その制度のうちに、その制度崩壞の胚子を有してゐる。』

結婚といふものに對して、平氣でかうした解釋を試みてゐる人間達の或集團が、現在この世の中の一隅に、立派に存在し得る時代まで漕ぎつけて來てゐるのだ。これだけの事を頭に浮べたばかりでも、親父のいふやうな結婚が、どうして私に考へ得られやう？　況んやその媒介をあの奥さんに賴んでまで……

「ばか〳〵しいにも程がある。」「そ、私は思つた。」「いくら肉血をわけた親と子の間でも、かうまで考が食ひちがつて了つてゐちやア、悲劇を通り越して喜劇になる。喜劇を通り越して茶番になる。茶番にもならぬ。たゞお互ひに沒交渉が殘るだけだ。たゞ金錢の授受といふ沒交渉だ。インテレツセといふインテレツセロスか……尤も親父に云はせたら、それはそつちだけの事だといふだらう。だから情ないといふだらう。だから眞人間に還つてくれといふだらう……

「フン、眞人間か……性に率ふ、之を道といふ、だ。かうした俺自身のテムペラメントをどうしようといふのだ？　それが眞人間でないといふのか？　親父と同じレヴエルに立つた、所謂社會道德の常識に從はぬから、事々にその常識を無視した行動ばかりするから、それだから俺は眞人間でないといふのか？……それなら、俺は到底眞人間にはなれつこはない。いや、寧ろ、俺はその眞人間の敵だらう……

「眞人間の敵か……「He most monstre だ」畸形見た、鬼ツ子だ。フン、惜まれツこ世にはゞかる、か……世にはゞかつて、社會的制裁を受けて、自然淘汰されて、さうして自滅するまでの命だ。……しかし、ダーヰンに從へば、さうした畸形は、大抵の場合、新しい「種」の先驅者になるものださうな。して見ると、俺は或は、强かち若い「種」に屬した

單なるデカダンではなくて、却つて未來の、これから後に來るべき、新しい「種」の出現を豫想させるところの、所謂 un rejeton であるのかも知れぬ……ハハハ。まづ、さう己惚れて置けば間違ひなしか……さうサ、己惚れを離れては、己惚れの外には、俺自身に考へられ得る、俺自身の姿といふものは、全くありさうな筈はないからナ……』

Le fil étant que ……さう、恰も小止みのない連日の微雨のやうな、例のかうしたとりとめのない斷想をば、連絡なしに、秩序なしに、あとから〳〵、右から左から、底から頭から、内から外から、十方から、偕々と、ネチ〳〵とだその所謂、フアラデイの「彈力線」のやうな、ジグザグ思ひ廻らしながら、私は唖然として……いや、唖然はウソだが、少くとも土木にはまだしきれない形骸だけを抛り出して、ボンヤリ机の前に座つてゐた。云はゞ、a la Nan-hua-chên ching に、ほとんど、その個を亡なつてゐた。

降りつゞけた三日目の午後、とう〳〵とあまりの所在なさに、搔卷など頭からスポリと引かぶつて、床の上へ海老のやうにきどころ臥をしてゐると、

——お手紙でムいます。と、どうした風の吹きまはしか、珍しくお松さんが、別嬪のお松さんが、淑やかに襖をあけて手にした小形の西洋封筒をば、おそる〳〵枕元まで持つて來た。

私は雛の子のやうな首を出して、お松さんの健康さうな手から、嬉しくそれを受取つたが、何となく見覺えのある手蹟に似てもゐたし、それに裏返して見ても、差出人の名前がなかつたりしたので、ハット心を蟲かしながら、倉卒にも『奥さん？』と、よく〳〵封を切つて見ると、なアんだ、それはやツぱり奥さんからでも何でもない手紙だつた。さうして、ハット心を蟲かしたゞけそれだけその反動で一層ガッカリした。ばかりか、それが全く思ひもよらぬ、全く

待してゐなかつた。どうでもいゝ道子女史からのそれだつたので、私は暇アな心持までした。

――お迎への車が待つてをりますが……と、お松さんは物やさしい聲でおづ／＼と云つた。

――はゝアお使ひかい？　なるほどね……

――はい。

――さうさなア……と、讀み下すと、私は不承々々起返つたが、何だか、ひどく一向に氣が進まなかつた。

手紙には、この車に乘つて、お嫌やでもあらうが、いろ／＼お話したい事があるから、せめて電車の停留場までゞもいゝから、曲げて來て下さるやうにと、斯う一寸認めてあつたわけだ。

「これが奥さんだつたらなア……」と、未練と愚痴とで一杯になつた、雨天つゞきで溶ろけかゝつた、まるで飴細工の瓜稲玉のやうな恥かしい顔をむづかしげに脹らしながら、私はそれでも立ち上つて、ぐず／＼帶など締めなほしはじめた。

――ともかく、まア、出掛けよう。

――お夕食はいかゞ致しませう？

――なにすぐ歸つて來る。

――左樣でムいますか……

お鹿さんかお冬さんだつたら、何とか又ふざけた會話の連發するところだが、お松さんではこれだけで精一杯だ。

その生まじめなお松さんに、例によつて丁重に、式臺の上に手をつかへられながら、私は持前の高慢殿様然として、いゝ氣になつて、そり返つて、悠揚として迎への俥へ乘つたものだ。

凡てがいや／＼だ。

が、梶棒がさがつたので、ガサ／＼と外から桐油がはづれたので、詮方なしに車から出る。

濛々とした微雨にぼかされた、森々と押寄せる四周の松の密林から、ほの／″＼と濾過されつゝ滲じみ出てゐるところの綠がゝつた幽暗な微光に包まれながら、赤毛布を敷いた茶屋の床几の上へ、頼りなげなる道子女史がションボリと腰かけてゐた。念入りに化粧して、結ひたての丸髷をつや／＼させて、ミユゲエの薫りを穩なしやかに發散させて、さうして出來るだけ愼ましやかに……

で、私を見ると、一寸目禮して、淋しげにニツコリした。が、私はその微笑には冷酷に取合はず、何しに來たと云はんばかり、氣むづかしい苦虫を潰したまゝ、物をも言はず、ムツとその側へ腰を卸した。

松の間から、一臺電車が現はれると、乘る人も降りる人もなかつたので、停る間もなく、また反對の松林の蔭へ消へて了つた。

再び周圍が靜寂に歸した時、やう／＼の思ひで、女史はかすかに唇を動かした。

――御用はもうお濟みになつて？

――用？　用なんかあるものか？

飽くまで下手から出た女史の調子に比べると、私の答はきゝ苦しいほど無愛想を極めたものであつた。女史は二の句がつげなかつた。そこでまた無言が續く。

もう一臺電車が走る。で、そいつを見送ると、今度は私の方から切出した。

――こんなところで、かうしてたつて始まらないが……どつかへ行つて見ようか？

――えゝ。

四六時中、たゞく末梢神經にのみ支配されつゞけてゐる私の顏色が、ふとした拍子で、どうやらやゝ氣まぐれに緩和されたものと見えて、女史はやツと安心したものゝやうに嬉しげにニツコリと頷いた。

――江の島へでも行つて見るか……

――えゝ、行つてもいゝわ。だけど……

私は一人も客のゐさうもない、雨の江の島の、××××××××、×××××××××××××××××××××××、××××××××××、あんまり進まぬ女史の返事をきくと、すぐまた厭アな心持に豹變して、浮はついたそんな幻影は、跡方もなく消滅した。

――話たア、一體、何の話だい？　と、私は再び苦虫を潰して訊いた。

――いろく\お話したい事があるの……と、女史はハラハラしながら、出來るだけしほらしい聲で答へた。

――だから、何の話だときいてるのサ。

――でも、變ぢやア、なんぼなんでも……一寸……

――だから江の島へでも鎌倉へでも行かうツて云つてるんぢやないか？

――そりや、行つてもいゝけれど……どうせ宿屋か料理屋でせう？

――まあ、さうサ。

――無理だわ、そんなことは……

——併し、家のない我輩にやア、さしあたり、それより外には行くところなんぞありやアしない。

——家へいらしつて下さらない？

——東京へかい？

——えゝ。

——さうさなあア……

厭だと云へば卑怯になる。「自分よりは弱い者に對して卑怯な振舞はしたくない。」といふ淺海なミエに、まんまと首尾よく引懸つて、その實弱さうに見えて、甚だ强い女の髮の毛に引きづられて、私はたわいもなくその次の電車へ乘せられて了つた。

藤澤へ……東京へ……さうして人間の生活へ……

かぶさつてゐた (ark'aj'ig'is) 老いた車前草の繁つた叢をわけてさし込まうとつとめました。

Jen venis el la densejo hinda knabino, malpeza kiel gazelo, bela kiel Eva; estis io tiel aera kaj tiel riĉa vivopleneco en tiu ĉi filino de Hindujo! Mi povis vidi la pensoju tra la delikata haŭto!

〔單語〕 Jen それ茲に（と人の注意を惹く副詞的助辭）。peza 重き。gazelo 羚羊。Eva 聖書にある最初に創られた女の名。io 何かしら或物（英語の something）。tiel 其様に。riĉa 富んだ。vivi 生活す，vivo 生命、生涯。plena 滿ちたる。tiu その，tiu ĉi 此の。filo 子息。povi 出來る、能ふ。pensi 考へる。delikata 優しい、微妙な、きやしやな。haŭto 皮膚。

〔譯〕 すると茲に茂み (dens'ejo) から出て來たのは印度の乙女，羚羊の様に身輕で、エヴア の様に美しい；此の印度の娘には何かしら空氣のような（輕い）しかし乍らそんなに活氣に (viv'o'plen'eco) 富んだ所がありました。私はそのきやしやな肌をすかしてその思ひを見透すことが出來たのです。

La dornaj liauoj disŝiris ŝi jn sandalojn, kaj tamen ŝi rapide paŝis antaŭen; la ravovesto, kiu venis de la rivero, kie gi estis estinginta sian sojforn, pretersaltis timeme,

Leciono VII BILDOLIBRO SEN BILDOJ

「繪のない畫帖」

丁抹の Andersen の有名なお伽噺。都に出て屋根裏に住んでゐる貧しい畫家の窓に毎夜古郷と變らぬお月樣が顏を出して前夜見て來た下界のことを一つ宛物語る。下のはその第一夜の物語。

En la hieraŭa nokto mi glitis tra la klara aero de Hindujo. Mi speguligis min en Ganges miaj radioj klopodis penetri tra la deusa plektaĵo de maljunaj plantagoj, kiuj arkaĵigis, kiel ŝelo de testudo.

〔單語〕 hieraŭ 昨日〔副詞的助辭〕。nokto 夜 gliti 滑る。klara 明瞭な、清く澄んだ。aero 空氣 hindo 印度人。spegulo 鏡。radio 光線、輻。klopodi 努力す。penetri 貫入する、刺通す。densa 濃き、繁つた。plekti 編み合はす。plekt'aĵo 編んだ物、からみ合つた物、組。plantago 車前草。arko 弧形、ark'aĵo 弧形の物、アーチ。kiel 如何に〔副詞的助辭〕,……の如く〔關係代副詞、卽所謂接續詞〕。ŝelo（龜などの）甲、（樹などの）外皮。testudo 龜。

〔譯〕 昨夜のことでした私は印度（Hind'ujo）の澄み渡つた空中を（空を通つて）滑つて居りました。私はガンヂス河に姿を（私を）うつし、（spegul'is）私の光は龜の甲の樣に被ひ

c. Mi volas esti dirinta la veron. 私は眞實なことを云つたので〔その時云つた、過去〕あることを〔esti 不定法〕欲してゐる。

〔注意〕(1) これも前後の關係や文の構造で單獨な直接法で云ふこともも出來る。例

a.=Tralegu la paperojn, antaŭ ol li venos al mi. 彼が私の處へ來るよりも前に(來らぬ内に)書類を讀みなさい。

c.=Mi volas, ke mi diris la veron. 私は私が眞實を云つたのであることを欲してゐる。

〔註〕tra...... ......を(ずつと)通して〔前置詞、英語の through〕, legi 讀む、tralegi (ずつと)讀み通す、目を通す。voli 欲す、し度い。ke...... ......と云ふことを。diri 云ふ。vera 眞實の、ほんとの。

〔注意〕(2) 日本語では『受身』を『發動』の如くに云ふ習慣あり。依て譯す時に注意せねばならぬ。例へば『彼は私の愛する者である』を譯して Li estas mia amanto としてはならぬ。amanto は發動、即ち(その人が他の人を)『愛してゐる者』の意である。邦語の『吾が愛する者』とは『私によつて愛さるる者(受身)』の意である。依て是は amato を用ひ

Li estas mia amato.

とせねばならぬ。

f'. Kiam mi venos morgaŭ, la knabo estos kapt*int*a birdon. 私が明日來る頃には少年は鳥を捕へてしまつて〔過去〕居るでせう〔未來〕

g'. Kiam mi venos morgaŭ. la birdo estos kapt*ot*a. 明日私が來る頃に鳥は捕へられようとしてゐるでせう

h'. Kiam mi venos morgaŭ, la birdo estos kapt*at*a. 明日私が來る頃は鳥は捕へられつゝある所でせう

i'. Kiam mi venos morgaŭ, la birdo estos kapit*it*a. 明日私が來る頃には鳥は捕へられて了つてゐるでせう

(IV) 分詞を用ひて命令法、假定法、不定法をも作り得る。

例.

a. Estu traleg*int*a la paperojn, kiam li venos al mi. 彼が私の處へ來る時分には此な書類に目を通して置いて〔讀み通して了つて、過去〕居れ〔命令〕

註: legi 讀む。

b. Se vi estus leg*int*a la leteron, vi ne erarus. 若し君は手紙を讀んで居つた〔過去〕のであつたら〔實はそうでない、假定法〕君は間違ひをしなかつたのだのに〔實は間違をして居る〕

e. Kiam mi venis hieraŭ, la knabo estis kapt*ant*a birdon.

昨日私が來た時には少年は鳥を捕へてゐる所で〔現行〕ありました〔過去〕

f. Kiam mi venis hieraŭ, la knabo estis kapt*int*a birdon.

昨日私が來た時には少年は鳥を捕へて了つて〔過去〕居りました〔過去〕

d'. Kiam mi venis hieraŭ, la birdo estis kapt*ot*a. 昨日私が來た時には鳥は捕へられようとしてゐた。

e'. Kiam mi venis hieraŭ, la birdo estis kapt*at*a. 昨日私が來た時には鳥は捕へられてゐる最中でした

f'. Kiam mi venis hieraŭ, la birdo estis kapt*it*a. 昨日私が來た時には鳥は捕へられて了つてゐました

(III) 未來時 estos…… ……でせう

g. Kiam mi venos morgaŭ, la knabo estos kapt*ont*a birdon. 私が明日來る頃は少年は鳥を捕へようとして〔未來〕ゐませう〔未來〕

h. Kiam mi venos morgaŭ, la knabo estos kapt*ant*a birdon. 私が明日來る頃には少年は鳥を捕へてゐる最中〔現行〕でせう〔未來〕

ある。相對照して研究しなさい。

〔注意〕(2) 英語で云へば *a.* is about (又は going) to catch; *b.* is catching, *c.* has caught. 所謂 compound tenses である。英語のそれの不規律なのに非して、エスペラント混成時の如何に整然として對照的なるかを見よ。

〔注意〕(3) 英語では Compound tense なるものは必要でも、前後の關係で不必要な場合でも、常に必ず強制的に用ひさせられる。エスペラントでは混成時は特に時の關係を細密に表示する必要のある場合に用ひられるので、前後の關係などで必要のない場合には獨乙語やロシヤ語の如く混成時でなく普通の直接法を用ひてよい。

a. La knabo kapt*os* birdon. 少年は鳥を捕へるでせう

b. La knabo kapt*as* birdon. 少年は鳥を捕へてゐる

c. La knabo kapt*is* birdon. 少年は鳥を捕へました

(II) 過去時 estis...... ......て居た、あつた

前項の狀態が過去の時、例へば『昨日私が來た(過去)時に......』Kiam mi ven*is* hieraŭ,...... など云ふ過去の事實と伴つて起つたものとすれば、既に est*as* とは云へぬから est*is* を用ひて

d. Kiam mi ven**is** hieraŭ, la knabo est**is** kapt*ont*a birdon.

昨日私が來た時には少年は鳥を捕へようとして〔未來〕いました〔過去〕

關係を細密に表示するに役立つことゝなる。例.

(I) 現在時 estas…… ……で居る、ある

a. La knabo estas kapt*onta* birdon. 少年は鳥を（これから將に）捕へんとして〔kapti なる動作は未だ行はれず、即ち未來〕（今現に）居る〔現在〕

b. La knabo estas kapt*anta* birdon. 少年は鳥を（現に）捕へつゝ〔現行〕（今）ある〔現在〕

c, La knabo estas kapt*inta* birdon. 少年は鳥を（既に）捕へてしまつて〔過去〕（今は）居るのだ〔現在〕

受身の場合には

a′. La birdo estas kapt*ota* de la knabo. 鳥は少年に（これから將に）捕へられんとして〔未だ kapti されたのには非ず、即ち未來〕（今）居る〔現在〕

b′. La birdo estas kapt*ata* de la knabo. 鳥は少年に（今現に）捕へられつゝ〔現行受身〕あります〔現在〕

c′. La birdo estas kapt*ita* de la knabo. 鳥は少年に依て（既に）捕へられて〔了つて、即ち過去〕（今は）居る〔現在〕

〔注意〕(1) 受身の *a′*, *b′*, *c′* は夫々發動の *a*, *b*, *c* なる場合の逆で

vojaĝ*into* (既に) 旅行した者、歸客

juĝ*oto* (これから) 裁判せられんとしてゐる者、被告

juĝ*ato* (今) 裁判されつゝある者、被告

juĝ*ito* (既に) 被判された者、既決囚

(c) 語尾 -e をつけ、副詞となつた例：

Tion dir*onte*, li svingis la brakon. (將に) その事を言はんとして、彼は腕を打振つた。

註： tio その事、diri 言ふ、svingi 振る、brako 腕。

Tion dir*ante*, li svingis la brakon. その事を云ひながら、彼は腕を打振つた

Tion dir*inte*, li svingis la brakon. (既に) 其事を言ひ了つて、彼は腕を打振つた

§ 2. **混成時** 分詞接尾字を以て作つた形容詞は普通の形容詞と同じく動詞 esti の補語として用ひられる。そして分詞形容詞は現在、過去、未來の時間の觀念を含んでゐる。例へば flui 流れる；flu*a* akvo 流水 (時間の觀念なく單に流の水)；flu*anta* akvo 今現に流れつゝある水 (現在 flui なる動作をしつゝあるを示す形容詞)。依て此等三つの時間を示す分詞形容詞が esti の現在、過去、未來等の諸變化と結合して、動作の時間的

エスペラント講座

小坂狷二述

エスペラントに就き質疑される方は、東京市小石川新小川町三ノ一四、日本エスペラント學會小坂狷二氏に御照會下さい。詳細御回答する筈であります。

讀者の爲に

○アインスタイン號編輯には未だ曾つて見ざる苦心を重ねた、何にしろ、本社員が科學に對する知識が薄弱のため、これだけの雜誌が生誕するまでには外間の豫測すべからざる難關が幾つもあつた。しかし長岡、石原　博士が周到、懇篤なる指導の下に出來上つたものであれば、執筆者も皆それ〲の權威ある人のみを選んだ。

○從つて本號には不朽の價値があるのみならず、普通の單行本に見られぬ長所がある、これだけの權威ぐを一堂に併せしめることは今後も困難のことである。殊にアインスタイン氏の原　を卷頭に見るが如きは全く我誌の誇耀であるばかりでなく、實にそれは我國學界の價値を磐石の如く重かしむるものである。

○先づ我理學界の長老たる長岡博士が、かかる特殊の研究を本誌によりて發表して下さつたことを幾重にも感謝する次第だ。

○それから我が物理學界の偉才として前途に多大の囑望を負ひつつある岡正造博士が、新らしき蘊蓄を傾けて、數學者の立場から相對性原理を論じて下さつたことも本誌の光榮であらねばならぬ。

○石原博士と相對性原理との關係は讀者の方でよくお承知のことと思ゐます。博士が論文以外、歡迎の　詩まで寄せて下さつたことをア氏も非常によろこぶことでせう。

○吉村冬彦氏、桑木博士、小倉博士、玉城博士、愛知博士等が、それ〲一粒　りの理學者であることも私たちより、却つて讀者の方々がお存じのことと思ゐます。

○室伏高信君は、ア氏招聘のため態々獨逸に渡つた關係上、氏との會見記をかいて貰ひました、この原稿も可なり重大な意義を含むものです。

○今後の「相對原理」の發展は必ず本誌の議論が基礎とならねばなりません、本　題に對し旗幟を鮮明せられたる諸大家の聲明は今後幾十年も、幾百年も學界重要の文獻と爲りませう、アインスタイン號の永久的價値はそこにあります。

○それから、アインスタイン氏の來朝が、いかに朝野の夢を破つたか、攝政宮が　岡博士を招いてその講義をきかれ、再び晩餐に招かれてその質疑を　されたるは云ふに及はず、各宮殿下が「改造」「アインスタイン全集」を御　讀の如きその一例である、また政友會でも高橋總裁、床次君以下の幹部六十名が長岡氏を政友會本部に招いて講演を開いた如き、徳川公以下の貴族院の人々も華族會館で相對原理の聽講をしたのもその例だ。

○各學校、各官廳と云はず、何處でも「相對原理」の講演のない所はない、活動も、　演も「相對原理」の聲のみである。

○科學思想の普及は我等の主張する「改造」の第一歩である、從來の科學は學校と特殊研究所の城塞のみに立て籠つてゐた　われ等はそれを民衆の手に移した、漸々として振はなかつた科學思想をして今ではすべての思想を征服するまでに盛ならしめた、かくして日本の科學界を全世界に紹　させる命をつくつた、かくの如き大影響は我等も豫期せなかつたことで衷心から愉快を感じてゐる。

Vom allgemeinen theoretischen Standpunkte aus ist Folgendes besonders wunderbar. Einerseits scheint—wie schon bemerkt—die Mechanik nicht allgemein zu gelten, da die auf sie gegründete statistische Mechanik zu Ergebnissen führt, die mit der Erfahrung im Widerspruch sind (z. B. spezifische Wärme fester Körper). Andererseits bewähren sich die mechanischen Gesetze innerhalb des Gültigkeitsbereiches der obigen Regel in bewundernswerter Weise. Sollte es in der Natur nur quasiperiodische Elementarvorgänge geben oder allgemeiner nur solche mechanische Systeme, welche soviele Integrale in geschlossener Form besitzen als Freiheitsgrade? Ein solcher Gedanke erscheint im Hinblick auf die kinetische Gastheorie absurd. Die Frage, inwiefern die Gültigkeit der klassischen Mechanik (und Elektrodynamik) durch die Quantenforderung begrenzt wird, ist heute in ebenso tiefes Dunkel gehüllt wie vor 15 Jahren.

Es ist vielfach bemerkt worden, dass bei dem heutigen Zustande unserer Kenntnis die Darstellbarkeit der Naturgesetze durch Differenzialgleichungen zweifelhaft erscheint. In der That müssen wir nach der soeben angegebenen Quantenregel einen ganzen Bewegungszyklus des Systems ins Auge fassen, um beurteilen zu können, ob ein bestimmter Zustand des Systems quantentheoretisch erlaubt ist oder nicht. Um den Quanten-Relationen wirklich gerecht zu werden, scheint eine neue mathematische Sprache nötig zu sein; jedenfalls erscheint es sinnwidrig die Gesetze durch eine Kombination von Differentialgesetzen und Integralbedingungen auszudrücken, wie wir es heute thun. Abermals sind die Grundlagen der theoretischen Physik erschüttert, und es ruft die Erfahrung nach dem Ausdruck einer höheren Stufe von Gesetzlichkeit. Wann wird uns der erlösende Gedanke beschert werden? Glücklich diejenigen, welche es erleben und schauen dürfen.

(August 1922.)

in höherem Masse falsch ist als die Theorie der elastischen Wellen in festen Körpern, welche deren thermischen Inhalt konstituieren; denn beide Theorien kollidieren in gleichem Maasse mit der Quantenrelation und müssen in gleicher Weise mit letzterer kombiniert werden, um zu einer zutreffenden Deutung der Erfahrungsresultate zu gelangen.

Die grossartige Entwicklung unserer Kenntnis von der Zusammensetzung der Atome, welche wir den grossen Meistern Rutherford und Bohr im Wesentlichen verdanken, hat zu einer höchst bedeutsamen Verallgemeinerung der Quantenregel geführt, welcher wir jetzt gedenken wollen. Bereits vor der Rutherford-Bohr'schen Theorie war die Annahme geboten, dass die Absorption bezw. Emission einer Spektrallinie einem Übergange eines Atoms bezw. Moleküls von einem ausgezeichneten Zustande in einen andern entsprechen müsse. Der die Zustände der Elementargebilde gewiss nicht als sinusartige Oszillationen zu deuten waren, so entstand das Problem, die Quantentheorie auf mechanische Systeme allgemeinen Charakters auszudehnen, was den Forschungen Bohr's, Sommerfeld's, Epstein's und Schwarzschild's stufenweise gelungen ist. Die von diesen Forschern erlangten Resultate werden durch ihre exakte Bestätigung auf dem Gebiete der Spektroskopie zu gesicherten Ergebnissen erhoben.

Lässt sich ein mechanisches System durch Koordinaten q_ν beschreiben, welche zyklische Veränderungen im Laufe der Zeit erfahren, und ist für jeden Freiheitsgrad ν das zu dem q_ν gehörige Moment p_ν $\left(= \frac{\partial L(q.p)}{\partial q_\nu}\right)$ als Funktion von ausschliesslich der einen Koordinate q_ν darstellbar, so ist für jedes ν das über einen Zyklus erstreckte Integral $\int p_\nu \, dq_\nu$ ein ganz-zahliges Vielfache der Planck'schen Konstante h. Dadurch sind die nach der Quantentheorie "erlaubten" Zustände definiert für sogenannte "quasiperiodische" mechanische Systeme. Die allgemeine Regel hat sich in derart subtilen und formenreichen Spezialfällen (z. B. Epstein's Theorie des Stark-Effektes) bewährt, dass ihre allgemeine Richtigkeit recht wahrscheinlich geworden ist.

Die Energiedichte der von einer Strahlungsquelle emittierten Strahlung nimmt nach der Maxwell'schen Theorie wie das reziproke Abstandsquadrat ab. Die an einem Orte für Absorptionsvorgänge pro Zeiteinheit disponible Energie müsste also mit der Entfernung unbegrenzt abnehmen. Da nun z. B. die chemische Zersetzung eines Moleküls oder die Loslösung eines Elektrons aus einem Atom eine bestimmte Energie erfordert, so sollte die Strahlung, welche durch hinreichende Ausbreitung von der Lichtquelle genügend geschwächt ist, einen solchen chemischen Prozess nicht mehr erzeugen können. Im Gegensatz zeigt aber die Erfahrung, dass die chemische und lichtelektrische Wirksamkeit der Strahlung von deren Dichte gänzlich unabhängig ist; die chemische Gesamtwirkung einer Strahlung, die Materie durchsetzt, ist nur von der Gesamtenergie derselben, aber gar nicht von ihrer räumlichen Energiedichte abhängig. Es hat sich ferner aus Versuchen von E. Warburg ergeben, dass die pro chemischem Elementarprozess absorbierte Energie stets gleich $h\nu$ ist, unabhängig von der räumlichen Energie der Strahlung. Dies Resultat folgt auch aus den Experimenten über den lichtelektrischen Effekt und über die Erzeugung von Kathodenstrahlen durch Röntgenstrahlen.

Wir wissen heute, dass diese Energie wirklich aus der Strahlung stammt und dass sie nicht etwa allmählich angesammelt wird. Die Lichtabsorption besteht in unteilbaren Elementarprozessen, bei deren jedem die Energie $h\nu$ vollständig umgesetzt wird. Über die Einzelheiten eines solchen Elementarprozesses wissen wir nichts. Wären von der Strahlung nur ihre energetischen Eigenschaften bekannt, so würden wir uns genötigt sehen, eine Art molekularer Theorie der Strahlung aufzustellen nach Art der Newton'schen Emissionstheorie des Lichtes. Aber die Erklärung der Beugungs- und Interferenz-Vorgänge auf solcher Basis stösst auf unüberwindliche Schwierigkeiten. Es ist ferner wahrscheinlich daran festzuhalten, dass die Feldtheorie der Strahlung nicht

der Hohlraumstrahlung $\int_{\nu=0}^{\nu=\infty}\rho d\nu$ einen unendlich grossen Wert ergibt. Planck fand als bisher mit allen Erfahrungen befriedigend übereinstimmenden Ausdruck der Erfahrung:

$$\rho=\frac{8\pi h\nu^3}{c^3}\cdot\frac{1}{e^{\frac{h\nu}{kT}}-1}\ldots\ldots\ldots\ldots\ldots\ldots(2)$$

wobei k eine mit der absoluten Grösse der Atome zusammenhängende Konstante, h eine vorher in der Physik unbekannte Naturkonstante bedeutet, die man wohl als die Fundamentalkonstante der Quantentheorie bezeichnen kann. Planck gab im Jahr 1900 eine Theorie dieser Formel, welche implizite eine mit der bisherigen Physik unvereinbare Hypothese enthält, der wir nachträglich gestützt auf die experimentelle und theoretische Forschung der beiden letzten Jahrzehnte die Fassung geben können. Wo auch immer sinusartig pendelnder Vorgang von der Frequenz ν in der Natur vorhanden ist, beträgt seine Energie immer ein ganzzahliges Vielfaches von $h\nu$; Zwischenwerte der Energie eines sinusartig pendelnden Vorganges kommen in der Natur nicht vor.

Auf Grund dieser Hypothese gelang es, nicht nur die Planck'sche Formel (2) der Wärmestrahlung, sondern auch das Gesetz der spezifischen Wärme krystallinischer fester Körper richtig abzuleiten. Aber diese Ableitungen sind alle in sich widerspruchsvoll, weil sie sich neben jener neuen Hypothese stets der mit ihr nicht vereinbaren Grundlage der klassischen Physik bedienen.

Bei den grossen Erfolgen, welche die Maxwell'sche Elektrodynamik und Newton'sche Mechanik in der Physik gehabt haben und bei ihrer gegenwärtigen Unentbehrlichkeit ist es Pflicht, die Grundhypothese der Quantentheorie soviel als möglich zu bezweifeln. Aber es gibt Erscheinungen, die einerseits die Quantentheorie direkt bestätigen, deren Unvereinbarkeit mit dem Fundament der klassischen Physik unmittelbar klar ist.

der Physik der Erfahrung gegenüber nicht stand hält, so wenig wie die von ihr begründete Mechanik. Es ist vielmehr zu erwarten, dass der Fortschritt der Wissenschaft eine Änderung ihres Fundamentes verlangt, welche nicht minder tiefgreifend ist als diejenige, welche wir unter dem Namen "Feldtheorie" zusammengefasst haben. Da wir aber noch weit von einem logisch klaren Fundament entfernt sind, müssen wir uns hier damit begnügen zu zeigen, inwiefern die bisherige Grundlage sich als unzureichend erweist, und wie man durch erfolgreiche, aber doch nur tastende Versuche, die durch den Namen "Quantentheorie" zusammengefasst sind, wichtigen Gruppen physikalischer Erscheinungen gerecht geworden ist.

Die Quantentheorie nahm ihren Ursprung bei der Theorie der thermischen Strahlung, für welche die Vereinigung von Mechanik und elektromagnetischer Feldtheorie ein mit der Erfahrung unvereinbares und sogar an sich unvernünftiges Gesetz liefert. Das Grundproblem der Wärmestrahlung lässt sich wie folgt formulieren. Die Thermodynamik lehrt, dass im Innern eines von undurchsichtigen Körpern von der Temperatur T umgebenen Hohlraumes eine Strahlung vorhanden ist, deren Zusammensetzung völlig unabhängig ist von der Natur der die Wandung des Hohlraumes bildenden Körper. Ist ρ die monochromatische Strahlungsdichte, d. h. $\rho d\nu$ die Strahlungsenergie im Hohlraum pro Volumeinheit, deren Frequenz zwischen ν und $\nu+d\nu$ liegt, so ist ρ eine ganz bestimmte Funktion von ν und T. Diese ist durch rein thermodynamische Betrachtungen nicht bestimmbar; ihre Ableitung setzt vielmehr einen Einblick in die Natur des Prozesses der Erzeugung und Absorption der Strahlung voraus:

Die klassische Mechanik in Verbindung mit der Maxwell'schen Elektrodynamik liefert für ρ einen Ausdruck von der Form:

$$\rho=\alpha\nu^2 T, \quad \ldots\ldots\ldots (1)$$

welcher schon darum nicht zutreffen kann, weil er für die Gesamtdichte

der Trägheit auf elektromagnetische Vorgänge war eine vollständige Umwälzung der Grundlagen der Physik vollzogen, wenigstens grundsätzlich. An die Stelle der Massenpunkte als letztes Reales trat das elektromagnetische Feld als fundamentales Konstruktionselement der theoretischen Physik. Es ist allgemein bekannt, dass eine theoretische Konstruktion der Materie auf rein elektromagnetischer Grundlage bis zu einem gewissen Grade gelungen ist. Insbesondere wissen wir heute, dass die Kohäsionskräfte rein elektromagnetischer Natur sind.

Damit sind die Früchte der Faraday-Maxwell'schen Feldtheorie noch nicht erschöpft. Die Erkenntnis von der Kovarianz der Maxwell-schen elektromagnetischen Gleichungen gegenüber den Lorentz-Transformationen führte zur speziellen Relativitätstheorie und damit zu der Erkenntnis der Äquivalenz von Trägheit und Energie, die Ausdehnung der Feldtheorie auf die Gravitation mit Rücksicht auf die Identität der trägen und schweren Masse zur allgemeinen Relativitätstheorie. Mit der allgemeinen Relativitätstheorie sank eine Stütze der Newton'schen Theorie dahin, von der man ehedem geglaubt hatte, dass sie zum Fundament jeglicher Naturwissenschaft mit Notwendigkeit gehöre, nämlich die Euklidische Geometrie. Diese war in früher Vorzeit entstanden aus primitiven Experimenten an festen Körpern und war von den Physikern stillschweigend als exakt zutreffendes Gesetz für die Lagerung gleichmässig temperierter, äusseren Wirkungen nicht unterliegender fester Körper vorausgesetzt worden, musste aber nun auf Grund schwerwiegender, indirekt auf dem Experiment fussender Erwägungen durch eine allgemeinere, bereits von Gauss und Riemann aufgestellte Doktrin ersetzt werden. Mit der allgemeinen Relativitätstheorie scheint die durch Faraday und Maxwell begründete Entwicklungsphase der theoretischen Physik abgeschlossen zu sein.

In den letzten zwei Jahrzehnten ist erkannt worden, dass auch das durch die Faraday-Maxwell'sche Feldtheorie charakterisierte Fundament

brecher, dass die elektromagnetischen Vorgänge nicht mit der Theorie der unvermittelten Fernwirkungskräfte darstellbar seien.

Nach Newton waren alle Kräfte, welche Beschleunigungen materieller Punkte erzeugen können, auf Momentanwirkungen der übrigen materiellen Punkte zurückzuführen, welche der einzelne der letzteren auf den betrachteten materiellen Punkt ausübt. Maxwell und Faraday setzten dieser Theorie der unvermittelten Fernwirkung die Theorie des elektromagnetischen Feldes gegenüber. Nach dieser Theorie beruht alle Ausbreitung der elektrischen Kraft nicht auf instantaner Fernwirkung, sondern auf einem ausbreitungsfähigen Zustande des Raumes, bezw. des Aethers, dem elektromagnetischen Felde. Das durch kontinuierliche Raumfunktionen darstellbare, mit Energie begabte Feld trat als physikalische Realität neben die nach Newton's Theorie als alleinige Energieträger figurierenden beweglichen Massenpunkte. Es ist bekannt, dass Hertz durch seine Experimente über die Ausbreitung der elektrischen Kraft dieser Auffassung zur allgemeinen Anerkennung verhalf.

Anfangs wurde der umwälzende Charakter der Feldtheorie noch nicht in seiner ganzen Härte erkannt. Maxwell selbst war noch davon überzeugt, dass die elektrodynamischen Prozesse als Bewegungsvorgänge des Aethers aufzufassen seien, ja er benutzte sogar die Mechanik, um zu den Feldgleichungen vorzudringen. Aber in der Zwischenzeit stellte es sich immer deutlicher heraus, dass eine Zurückführung der elektromagnetischen Gleichungen auf mechanische unmöglich sei. Das Streben nach einer einheitlichen Basis der Physik zwang unter diesen Umständen dazu, den Versuch zu machen, die mechanischen Gleichungen umgekehrt auf die elektromagnetischen zurückzuführen. Dies Streben lag umso näher, nachdem J. J. Thomson erkannt hatte, dass es eine elektromagnetische Trägheit elektrisch geladener Körper gibt, und nachdem M. Abraham gezeigt hatte, dass sich die Trägheit der Elektronen rein elektromagnetisch auffassen liess. Mit der Zurückführung

Über die gegenwärtige Krise der theoretischen Physik.

von Albert Einstein.

Es ist Ziel der theoretischen Physik, ein auf möglichst wenigen von einander unabhängigen Hypothesen ruhendes logisches Gedankensystem zu schaffen, das den ganzen Komplex der physikalischen Prozesse kausal zu erfassen gestattet. Auf die Frage nach der Art der Entstehung und des Wachstums dieses wissenschaftlichen Systems hätte man in der Zeit vor Maxwell etwa folgende Antwort geben können.

Auf unbezweifelbare Tatsachen der menschlichen Anschauung bezw. des menschlichen Denkens gründet man zuerst die unverrückbare Basis aller exakten Wissenschaft, nämlich die Geometrie und die Analysis. Dies thaten bereits die Griechen, sodass den Späteren ausser dem Entwickeln der Infinitesimalrechnung nichts prinzipiell Neues zu thun übrig blieb. Dann kam die Aufstellung der eigentlich physikalischen Grundgesetz, d. h. der Grundgesetze der Mechanik, durch Galilei, Newton und deren Zeitgenossen. Bis gegen das Ende des 19. Jahrhunderts waren die Physiker davon überzeugt, dass jene Grundgesetze der Mechanik die Basis aller theoretischer Physik überhaupt sein müsse, d. h. dass jede physikalische Theorie im letzten Grunde auf Mechanik zu gründen sei.

Es schien also die Basis der Physik endgültig aufgestellt zu sein und die Arbeit der theoretischen Physiker darin zu bestehen, durch Spezialisierung und Differenzierung der Theorie diese der stets wachsenden Fülle der erforschten Erscheinungen anzupassen. An die Möglichkeit, das Fundament der Physik ändern zu müssen, dachte man nicht. Da wurde es infolge der Forschungen Faraday's und Maxwell's allmählich offenbar, dass die Grundlage der Mechanik den elektromagnetischen Erscheinungen gegenüber versage. Diese Wandlung vollzog sich in mehreren Etappen. Zunächst erkannten die beiden genannten Bahn-

編輯だより

◇待ちわびたアインスタイン教授は不日神戸に到着さるる筈だ、我が社はこの偉大なる教授を迎ふるために、いかに熱誠であるか、貧しいながらも、赤心のすべてを披瀝して歡迎する。

◇松原代理大使が在獨大使館に官氏を招待してア氏の送別會を開いて下さつたことも感謝する、ア氏はその厚意を喜び謝しつゝ伯林を出發したそうだ。

◇科學者としてのア氏は極めて謙讓で、そして大袈裟が嫌ひで、物慾の少いことも有名だ、來朝さるゝ夫人とともに音樂には殊更に興味を有し、ヴアイオリンにかけては共に玄人の域を脱しておる。

◇學術講演は東京帝大で、通俗講演は慶應と神田青年會館で開く、聽講者は滿員にならぬうちに申込んで下さい、大阪は中ノ島公會堂で、京都も公會堂で講演されます。

◇アトー一月で新春だ、新しく武装されたる新年號がいかに巨大の光りを放つか、それには全く雜誌界破天荒の盛觀を見せて讀者にお目にかかりませう。

◇小說界の巨人ウエルズ氏寄稿「神の如き人々、酒の如き空氣」なる小說は新年號に陸離たる一大光彩を放つことでせう、第一回に發表するもののみで三百二十枚もあります、これは氏がアインスタイン氏の相對原理にヒントを得て執筆した堂々數千枚の長篇で、米國と獨國と同時に發表するものです、此一篇のみを以てしてもいかに新年號が權威ある大雜誌であるかが想像つきませう。

◇それにアインスタイン氏も寄稿されます。また、クローデル大使は久かたぶりに「佛國と我國との傳統の比較」てふ面白い寄稿があり、リツケルト氏亦た長大篇をよせました。フッサール教授、クローチェ氏亦寄稿する旨の通信に接した。

◇我が「改造」の兄妹誌「女性改造」も一號は一號と内容が充實してまゐります、十二月號にはアインスタイン氏の「船中記」及び竹內教授のおもしろい企てになる「翰入相對原理解釋」それから我が音樂界を震撼したるゴドオウスキー氏の「日本音樂をきいて」の有益な記事も登載される筈です。

◇それからアインスタイン全集は殆んど豫想外の成績で十月卅一日締切りましたが、其後各學校、官衙、會社等から續々申込者があります、此等のお方の便宜のために十一月卅日まで豫約募集の申込を受けることとなつたそうです。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	[illegible]六[illegible]錢	増大號共郵稅不要
壹ケ年	[illegible]	増大號共郵稅不要

本號特價壹圓參拾錢

注文の[illegible]

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘報會 日本電報通信社

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

[illegible]凡て前金とす[illegible]れの際は發送を停止す

[illegible]の注文は壹冊郵稅貳拾四錢(但し支那を除く)

[illegible]發送せず

[illegible]手代用は壹割增のこと

[illegible]は振替によるるが於も便

[illegible]一月廿日印刷納本
[illegible]二月一日發行

編輯兼發行者 東京市芝區[illegible]町四十番地 平田貫一郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 秀英舍

東京芝區愛宕下町一ノ一
發行所 改造社
電話 芝(長)一六三八 芝二八五四 芝四三〇三
振替 東京八四〇二三

武林無想庵作

長編小說 結婚禮讚

定價貳圓卅錢
送料十七錢
四六版上製

滿都の士女よ！讀め！

本書を手にして卷を掩ふことが出來るか

最新刊

出版當日怒濤のやうに註文が殺到した「無想庵無語」は其筋より風俗壞亂の故を以つて發賣禁止を命ぜられた本書は實に「無想庵無語」の改訂版です、奔放無蓋天下を自在に濶歩すること武林氏の如きは古今其の例なし、全く獨自の境地を天地に求め神佛を自れの膝下に蹂躙する無敵、虚無の姿は天下一大偉觀だ。本書は人間本能の色慾を赤裸に告白した一人間の記錄であり、人妻への大膽なる愛窮を赤裸に告白した深刻無比の戀の記錄であり戀の爲には天地の何物をも犧牲に供した虚無主義の地上への犧へである。本書の誕生は巨獅一咆哮の慨を示す、戀愛を取扱ふ萬卷の書悉く本書の前に慴伏して顏色なし。

東京芝區
愛宕下町
改造社
振替東京
八四〇二〇

MONATA REVUO DE
POLITIKO, LITERATURO, SOCIAJ AFEROJ, KTP.
PREZO: UNU EKZ. OKDEK SENOJ, JARE DEKDU JENOJ.
OFICEJO: KAIZOŜA, 1 ATAGOŜITAMAĈI, ŜIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可